大正三年一月廿四日印刷
大正三年一月廿七日發行

有朋堂文庫
先哲、畸人、琦行　（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

いて、「偖はありがた與一兵衛どのに候ふか。然樣とはしらずして、大いに無禮をまうしたり。萬望おん免しあれよ」とて、却て向の人より、只管にわび言し、忽ちに事濟み、たがひに別れんとしたる時、「ハッアありがたい」と云ひて去過ぎける。衆人大いに笑ひけり。這の老人文化年中七十餘歲にて、猶壯健なりしと、近松何がしものがたりき」彼のありがたしの吉兵衛とよく相似たる老人にぞ有りける。

百家琦行傳　終

り破り、血の流るゝを看て、「ハッァ有がたい」といふ。下僕是を助けおこし、「斯のやうに疵を蒙り給ひ、何ぞあり難き事のあらん」と細語ければ、「われ轉けて蹇となりたればとて、我が麁忽せん方なきを、斯いさゝかの疵にて事濟みし、ハッァ有がたき事ならずや」といふ。亦一時近邊の馬一疋、ものに狂ひて走り來る。與一兵衛是をしらず、行當りて踏倒され、這々おき上りて、「ハッァ有難い」といふ。「何がありがたきぞ」と問へば、「馬に踏殺されても詮方なし。かやうに恙なきは、ハッァ有難き事なり」といふ。何によらず「ハッァありがたい」と云ふ事、口癖にて止む時なし。爰をもつて、世人綽號して、有難與一兵衛と、近國近鄕隱れなく、太甚名高きものとなれり。一時、近村の產神祭祀にまうでたるが、奈何しけん、不計往來の人に行當り、頭うち合せける。與一兵衛何も云はず、「ハッァ有がたい」と云ひて去過んとす。向の人大いに怒り、「人に行當りて、詫言もせず、有難いと云ひて嘲弄にする。儞は且那里の者なるぞ。其の儘にすて置きがたし」と敦圉あらく云ひたれば、與一兵衛大いにおどろき、こし打ちかゞめ、「賤老うまれつきにて、有難いと申す事常に云ひいで侍ふ。唯今の無禮は、いくへにも御免し給るべし。小老は這の隣村にて、與一兵衛とまうす者にて侍ふ」と云ひければ、向の人是を聞

におよぶ。這の與一兵衛にひとつの癖あり。常に「ハッアありがたい」と云ふ事、日に幾百度とかぞふ。朝とく起きいで、母の顔を看て、「ハッア有がたい」といひ、亦妻の顔を看て「ハッア有難い」と云ひ、また兄弟の顔を見て「ハッア有がたい」といふ。「何ゆゑ然樣にありがたいと云るゝや」と問へば、「當日も且、母兄弟妻ともに恙なき顔を見る。ハッア有難い事ではないか」と答ふ。門口に人來りて、案内をこふ。與一兵衛聞つけ、「ハッア有難い」と云ひて立ち出でける。「人の案内したるは、善き事にて來りしや、また凶き事にや、いまだ其の幹事わかたざるに、何故有がたいと云はるゝぞ」と問へば、「來し人の、幹の善惡はしらずといへども、我いちはやく聞つけて答ふるほどに、耳も敏く、躬も達者なれば、ハッア有難い事にはあらずや」といふ。斯て來りし人、さまざまの物語して在りける間も、をり〳〵「ハッア有難い」といふ事數をしらず。其の人別れて皈るときも、簷端までおくり出でて「ハッア有難い」といふ。亦途中にて、人に遭しときも、「ハッアありがたい」と云ひて腰をかゞむる。「何故に、ありがたきぞ」と問へば、「儞も我も恙なくて、這の樣に對面いたすこと、寔にありがたき事ならずや」といふ。一日外より皈り來るとき、急雨にあひて、跑り我が家の前にて轉まろび、膝をす

介子推—文公が諸國を流浪せし時に隨從せし忠臣

心學—道話、神儒佛を調和し下層社會に知足安分を説く一派の教、開祖石田梅巖

ても叶はぬ物なれども、其の中水を以て五行の長とするなり。木火土金の類は、三日五日なしとても、命は繼るゝ物なり。晉の文公過ちて介子推を燒殺せしとき、火は賢人を失ふものなりとて、恨みて國中に火を斷つ事一百五日と云り。水を一日停止せられなば、天下の人民悉く死におよぶべし。然れば、水ほど尊きものはなしとは、理なる事なり。

有難與一兵衞

天明寛政のころ、備前の國邑久郡富岡村に、油屋與一兵衞といふ者ありけり。氏は小山、名は壽信、農家にして大いに富めり。岡山の士松島省内といへる人の弟子になりて、心學を專ら尊み、月毎五六度づつ席を設けて、松島大人を請待し、近村の人々を勸めて道話を聞しめ、善道に導く事おこたらず。遇不行跡の人を看る時は、自親其の家に行きてまねき來り、くさ〴〵と教諭し、善心にふくさしむる。一年中國中を跑りありき、人をして心學をすゝめ、其の躬は若干の物を費し、會席を構へおきて、專ら善道にひき入るゝ事をのみ樂となしけるにぞ、終には國廳に達し、國の守より、褒賞を給はりし事三度

五行」支那の理學にていふ五元素木火土金水

じ蘇枋冷して染めては幾たび塗りても色つかず。熱く湧して染むる時は、角の如き堅き物すら、よく染めつくなり。爰をもて、熱食の毒、腹中に染みつくを悟るべし。然ば、薬も熱くして、腹せば能きく道理なり。熱食すれば、歯の赤くなるをもて、身中骨など色著く事知るべし。寒中熱き物を食すれば、當時は凌ぐやうなれども、少時すれば、忽ち寒さをおほふ。寒しとて巨燵に入れば、出でて後さぶさ初めに勝るなり。寒中外面を跑りありく活業の人は、自ら無病なり。亦好んで熱酒を吞む人あり。鼻の先、頰げた赤くなりて、看苦き物なり。また柘榴鼻といふ物になるも、熱酒のわざなり。たとひ夫らの事なくとも、腹中に病を生ずる事疑ひなし。鳥獸のたぐひは、常に冷食すれば病なし。熱食さすれば、是等も病おこるを看るべし。鳥獸歯をみがきし事なけれども、冷食すれば歯の色白し。湯も常に熱きを浴みれば、血氣めぐりあしくなるといへるも理なり。常に熱き湯を好む人、多く中風の病を生ず。別て東都は熱き浴室を好んで入る故に、東都には中風病の人多し。政右衛門が如く、水の浴室には入りがたかるべし。奈何にも溫き湯に入るこそよけれ。政ゑもん常に云し事あり、「凡世界に水ほど尊き物はなし」と、實に其の如し。五行は一ッ虧け

五臓―心、肝、腎、肺、脾
六腑―胃、膽、膀胱、大腸、小腸、三焦

答へてて云ふやう「都て人壽百歳とて、百までは生きらるゝ物なるを、世間の人、みな色食の二ツより、命を縮めて、はやく死ぬるなり。今の世のごとく、熱食のみする時は、忽ち氣の上る病おこりて、頭上熱く下冷えわたりて、死骸にひとし。是則ち、下より死支度する初めなりとは知らずして、愈色食の二ツに心をとられ、終には、はやく冥府におもむく。いと歎しき事ならずや。我が如く冷物のみ食する時は、下熱かに上冷えて壽永し。亦熱き湯に入りて沐浴するときは、總身血のめぐりあしくなるなり。我壯年より冷物のみ飡し、水にて沐浴するをもて、百餘年の今日まで、病といふ事を知らず。願くは、世人我が如くして、長壽を保ち給へかし。然れども、おのれが如く、眞の冷物は、迚も飡しがたかるべし。唯熱食をやめて、溫きものを食すべし。湯もぬるきを浴み給へ」と敎へけるとなり。這の政ゑもん、夫より後も、猶無病にて、久く存命せりとぞ聞きし。

輯者曰く、此の政右衞門がいひし詞、大いに依どころあり。都て、人、熱食する時は、食物の毒五臟六腑に染みつく故に、自から病腹中に生ずるなり。冷食する時は、毒あるものも五臟に染みつかず。角象牙のたぐひを、赤く染んとする時、煎

行水政右衛門

寶暦明和のころ、武藏の國豐島郡代々木村といへる處に、行水政右衛門といふ者ありけり。農家にして、身上大いに富めり。這の政ゑもん、壯年より、暑寒とも冷水にて行水することをこのむ。夏の夕、湯を以て身をあらひ、汗を流し去る事、世間みな同じ亊なり。ひとり這の政ゑもんは、水をもつて身を洗ふ事をす。夏にかぎらず、冬極寒の時といへども、盤に汲ませ行水しける。亦食事も、熱きものを喰はず、皆悉く冷物を食す。飯、汁、野菜のたぐひも、一端は焚せて、しばらく寒しおき、冷たる時にいたりて飡しける。其の外、何にまれ熱きものを喰たる事なし。寒中風雪などの日、他へ行きて皈れば、忽ち井の水を汲せて、背より五六度あみ、夫より躬をぬぐひて家に入りて坐し、少時ありて、「ヤレ〳〵大いに溫まりし」と云ひけるとなり。予が父這の事を聞き、わざ〳〵尋ねいたり、政ゑもんに出會して、談話せしに、當の時齡百六歲なれども、齒一枚もぬけず、髮も白髮わづかにまじり、いたりて色白く、元來躬達者にて、當日庭上に薪を破りて居たりしとなり。「奈何なれば然やうに冷物のみ好み給ふぞ」と問ふに、政ゑもん

又兵衛をかしけれども笑ひを忍び、懐裡より鄕の銀札の一封を把りいだし、峻山のまへに置きければ、峻山これを封のまゝ彼の男に投げ與へ、亦渡紙をしたゝめ居たり。墨屋の男その包を受けとり、外面の方へ出去りしが、やがて亦皈り來り、「墨の價は六もん目にて侍ふ。是は十もんめあり、餘分にさふらへば、御返しまうし度く侍ふ」といふ。峻山聞て、「さても千般の事をいふうるさき男かな。何事も節季の事にして吳よ」とて、看向もやらず、書き居たり。墨屋の男わらひながら、銀札四枚ぬき出し、案の上に置きて去きけり。跡にて、又兵衛机上に銀札ありて看苦ければ、紙に包みて、大いなる筆筒の中へさし入れおき、少時ありて、又兵衛は皈りけり。然して、五十日餘り過て、又兵衛ふたゝび扇面に書を顧はんとて、峻山の庵を訪ひたるに、當日峻山案上にもたれ、詩を賦りて居たりたる。又兵衛案の上を見るに、鄕の頃筆筒の中へさし入れおきたる銀札の紙包、その儘埃まぶれになりて有りけるにぞ、峻山のものにかゝづらはぬ氣性を、ひたすら感じ、尊みけり。這の一條則ち高尾又兵衛予に語れり。今猶同國南方中殿藥王寺松林中に、峻山の墓あり。天如道人大和倘墓と記し、碑文は撫養の祥藥子是を作る。名文のよしなれども、小姓いまだ是を看ず。

ものしーふるまひ

とも押して御持あるべし」と云ひて、おしいだし置きて構はず。別にもとめて斯するにあらず。たゞ貴賤の差別なく、誰にても皆同じやうに、心隈なくものしかたらふにぞ有りける。亦一日、同國三好郡中西村高尾又兵衛といふ人、峻山の菴に來り、渡紙二三枚書いてもらひ、やがて懷裡より紙につゝみたる物をいだし、「是は、いさゝか酬謝にて侍ふ」といひて出しける。（此紙につゝみし物は此國の銀札なりすべて此國金銀をつゝむ事はまれなり大かた銀札にておくる事つねなり）峻山手にもとらず「斯樣なるうるさき物は、止めにして下され」と云ひて、筆の軸にてはね返し、亦外に一人の客あり、其の人の渡紙をかき居たり。又兵衛、再般さし出しければ、「偖もうるさき男なり。然ほど謝がしたくば、泉水の水を換へて下され」といふ。又兵衛詮方なく、泉水をくみ換へて居たりける。然るに亦一人の男來り、峻山のまへに手をつき、「過日さし上げおきたる墨の價、いたゞきに參り侍ふ」といふ。峻山聞きて、「けふは價もち合さず、后の日來れ。本寺より取りよせ置くべし」といひけるを、彼のをとこ「小僕は遠方なれば、願くは唯今いたゞきて皈りたく侍ふ」といふ。峻山聞きて、「偖もうるさき男かな。今日一錢もなし、再の日來れといふなり。乍然それほどに云はば遣すべし」と、身邊看まはせども何もなし。頓て彼の又兵衛をよびて、「足下謝のものを下され」と云はれけり。

峻山は、阿州三好郡、農夫、來代禎左衞門といへる者の子なり。幼稚ときより出家して、河内の國、高枝高貴寺の慈雲比丘の弟子になりて、學文す。後また、高野山新別處圓通寺密門子に律をうけ、阿州にかへりて、徳島勢見に住す。寺號今忘たり后隱居して、同國南方日和佐藥王寺に閑居す、博識にして詩をよくし、最能筆なり。別號閑々子、また換水和尙とも云へり。常に、手水鉢泉水などの水を換ふることを好み、遊人來る毎に、手つだはせて、水をかふる事なり。今換へし水を、外人來れば、亦換へさする、敢て、潔癖といふにはあらず。唯汲みおきの水をきらふと見えたり。されば、一紙書を需むる者は、一瓶の水を汲むべしと書いて、門にはり置きけり。這の和尙さらに諂ふ事をしらず。はじめ、勢見に閑居のとき、いと止事なき君、峻山が菴を訪ひ給ひ、一紙書を乞ひ給ひければ、峻山領承て、やがて硯をいだし、「萬望墨をすりて給るべし」と云ひて、指出しける。君詮方なくて、硯ひきよせ、墨すり給ひける。隨後の士衆おどろきすゝみ出でて、是を摺りけり。峻山渡帋をひらき、筆をとりて書かんとするとき、窗より風の吹き入れければ、「何とぞ、そちらを押へて給れ」といふ。君また止む事を得ず、紙の端をおさへて居給ひしとぞ。斯て自作の詩一首したゝめ終り、「そこらに印匣あるべし、何なり

命終―死
宿業のつみ―前世になしたる悪事の報
追福―追善、死者の年回などの供養
伶人―樂師

命終をのみ念じ奉る老が身に、すてはゞかりて、七十餘六のよはひつもれる、つたなき宿業のつみ、あさからぬ娑婆の因緣にやと、かぎりなくかなしがる。

うしや世にまたながらへて何かせんおのが身ながら我ぞはづかし

子正月　行年七十六　三好氏老婆正慶愼白

浪花楊棗蘆主人の藏書より寫す。都て、奴の小萬男ぎらひといふ說は、戲場にてつくり設けし事なり。雪は、夫に見えし事兩三度あるなり。唯心ざまの雄々しきと、詩歌管絃の道にまで、丈たるをもて、異なりとす。實母楠公正成の後胤なりとて、雪も常に菊水の紋を著けたる衣服を用ひけり。天王寺にて、楠公の年回法要をつとめ、或は、難波の瑞龍寺にて、關白秀次公の二百回の追福をいとなみなどしけり。都て、往古の人の追福をいとなむ事など、好しとしけるとぞ。其の事毎に、若干黃白をなげ打ち、許多の僧を供養し、伶人を迎へ樂を奏しなどしけるにぞ、竟には家產大いに衰へたりしとぞ、人の云ける。

峻山和尙

―新年を迎ふに方角を忌み前夜他家に宿すること

寅ひとつふたつばかり―夜明四時半か五時頃

ふりさけ見る―振仰ぎて遠望する

て暮はてて、その夜も寅ひとつふたつばかりにや、雑煮などものせよと、さまざまいはひすゝめられけれど、ものも喰ひがたく、いとなやましうて、頓て身まかりもやすらん、あるじのおもふよしも、びんなくやさしけれど、せんかたなくて觀念するうち、鐘の音、とりの聲など聞えて、はやあらたまのとし立ちかへりぬるさまなれど、かゝる身なれば、

　とり鐘のこゑもをしまぬ年の丈

曉の寒けさも、よひのなやみにいと身にしむ、苦しさをたへしのびつゝ、ぬるとはなしに、かぎりなき廣野にいでて、はる〲と見わたせば、今まで惱みたるこゝろぐるしさも打ち忘れければ、さてはうれしくも死にけるにや、かくては、いづち往くべきと、おもひまどふうち、わらはべどもの、ものいひさわぐこゑ、をかしく聞えければ、いかなるにかとふりさけ見るに、東の窻より、きら〱と朝日のさし入りけるを見て、はじめて夢のさめたる事を覺えて、死にはてぬ身の本意なさいはんかたなし。

　未來かとおもふやなにはのはつ日かげ

盂蘭盆—七月十五日
手向け—獻げ

極月—十二月、歳果つ月の義といふ
かたたがへ

扉ありて、參詣の人おびたゞし。夕暮におよびて、急に大雨ふりいでて、許多の人、大いに難儀し、かしこの簷端こゝの樹陰にたゝずみて、晴間を待つといへども、雨さらに止まず。正慶急におほくの人を雇ひて、長町にはしらせ、傘數百本買ひきたらせ、衆人にこれを與へて皈せけり。盂蘭盆のころには、千種の花、竹筒をおほく買ひもとめ、龜、嵓と倶に是をたづさへ、諸處の墓處をたづね、跡とふ人なき塚毎に、人しらず花を手向けてありきけり。其の後また月江寺をひきとり、難波村に閑居す。やうやくにして、年老いぬ。一箇の棺を造りて、居室のかたはらに正しおき、日毎客を會して、酒を喫ましむ。文化元甲子年七十六歳にて終りぬ。菩提寺木津村幽泉寺に、雪龜嵓と三字をゑりたる碑ありしを、奈何かしけん、今はなし。這の事實東都瀧澤氏の話と、浪花江戸堀木屋何がしの藏書を校正して、爰にしるす。正慶苅屋何がしが家にありしときの文章あり。

ことし、亥の極月は、おもふよしありて、難波の苅屋何がしの許にかたたがへして、新年を迎へんとてまかりたりけるに、二十七八日より病にふし、二十九日は大いに惱みければ、繁子かいはう何くれとおろそかならねど、苦しさ堪へがたし。やが

女伴―女づれ

をのべて、女尺八出入の湊といへる狂言をとり組み、道頓堀市川座の芝居にて興行す。當年寛延元戊辰の八月なり。雪が事を小萬と名を負せしは、雪が實母を萬といひけり、其の子なれば、小萬としたる成るべし。また源平布引の瀧に、小萬といふ力強き女あり。是等にならひて、小萬と名づけたりと覺ゆ。さて彼の戯場の招牌、小萬がすがた奴髷にゆひ、腰に尺八をさしたる繪の上に、雪が自賛を乞ひけり。雪もをかしとは思ひけれども、止む事を得ず、詩一首自筆にしたゝめけり。

眼前不レ受二綺羅紅一。何願二後身住二上空一。
憂憤由來除二國賊一。千生萬古護二皇宮一。

是は、戯場の趣向によりての作と見えたり。當年雪二十歳の時なり。次の年より、雪皇都にのぼり、緣をもとめて、禁内にみやづかへす。詩歌管絃にたくみなるをもて、女伴に妬まる。五年を經て、仕を辭して、また浪花にかへり、竟に薙髪して、正慶尼と稱す。義父仁ゑもん、氏を三好とよび、長慶の後孫なるが故に、三好正慶尼と號して、四天王寺のかたはら、月江寺に住する事多年なり。正慶は一向門徒なれども、禪法をこのみて、這の寺に居れり。本寺より、憤りとゞめ來りけれども、敢て從はず。一年月江寺本尊開

四天王寺―大阪、天台宗

めるにまかせ、萬般の藝を學ばしむれば、管絃の道もつとも暗からず。幼きとき母に別れ、十五歳のとき父死去す。親族つどひて、家督の事あらそひあり。雪は是をうるさく思ひ、家をつぐ事を斷り、龜、岩といへる、二人の婢女をともなひ、或ときは實家に遊び、或ときは養家に住居す。雪性質力強く、二人の婢女また勇氣あり。月にうかれ、花にあそぶのときも、管ず這の二女を倡へり。一年四天王寺彼岸會に詣でけるに、蛇坂といへる處にて、兇兒二三人來り、雪が釵簪を偸らんとす。雪この兇兒們をとらへて、右左へ投退けたり。再般起き來るを、また把つて投著けけり。龜、岩の二女、ともに助けて働きけるにぞ、兇兒們大いに怕れ、はふ〲逃げて去方をしらず。是を看る往來の人々おどろき感じ、「そも〲何人の娘兒なりや」と問ふ中に、よく知りたる人ありて、「木津屋がむすめ雪といへるものなり」と、傳へけるにぞ、是より雪が勇猛なる事を、專ら世にしられけり。當時道頓堀の歌妓に、尺八をよく籟きける女あり。（今名を忘たり）年は三十に近かりしかど、太若やかに裝ひ、髪は奴髷といへるものに結ひなし、腰にかの尺八笛を挾してありきけるを、衆人興ある事に云ひもてはやしけり。（近來難波新地より出し楠といへる藝子と混ずべからずかれはまた別ものなり）時節、戲場作者、この妓兒とかの雪を、二人を一人として、奴の小萬といふ力強き女の事

柳淇園—柳澤淇園

るに、大いに味よろしく、江戸も又、他國にまさりて蕎麥を好むところなれば、這の桔梗屋の園が事を聞きつたへ、故意たづねて、這の家にとまり、蕎麥を制せて、夕餉の代となし、園が給事にて、投げこまるゝを面白がりて、おの〳〵競ひて、桔梗屋へやどりけるにぞ、太甚はんじやうして、外々の歌家一人も容なきときも、這の桔梗屋は五十人六十人も止宿客ありしとぞ。邸家のあるじも、這の園を家の福鼠と稱して、よろづ心を用ひて使ひけり。斯の如く繁昌する事八九年、いつしか這の家の妻妬忌する事おこりて、園にいとまをつかはしけり。是より後旅人の宿止も些くなりて、不繁昌となりけるにぞ、再般在鄉をさがして、蕎麥を上巧に制し、上手になげ入れて給事する女を抱へけれども、一向嚮のごとくは流行ざりし。

烈婦阿雪　奴の小萬

阿雪は、大阪長堀平野屋何がしが娘にして、幼年より、茂左衛門町木津屋仁右衛門養女となる。幼稚より、書畫を好むによりて、柳淇園を師として學しむ。雪元來怜利にして、一を聞いて萬をさとるの才あり。十二三にて、書畫および詩歌をよくす。父家富

丹波の栗くひ―徒然草には「因幡國に何の入道とかやいふ者の娘」とあり

然草に見えたる、丹波の栗くひ娘の如くなり。米の飯、麥飯などは嫌ひて喰はず。唯蕎麥をもつて常の食とす。且蕎麥切を制する事上手にして、奇妙なり。かゝる異物なれば、緣うすくて、夫なし。十八歳の春より、風と此の桔梗屋へ給事に來りけるが、爰に相撲の國大山の石尊とて、大己貴の命を祭りたる山あり。六月の始より七月の末までは、參詣の人おびたゞしく、殊に江戸人おほく登山しけるにぞ、道中の邸家も大いに繁昌して、賑はしかりける。いつしか、這の園が蕎麥を上手に制する事名高くなりて、江戸人おほく這の家にやどり、園に蕎麥を制へさせて喰ひける事流行けり。園又蕎麥をしひすゝむる事上手にて、客人一椀くひ終るとき、園はるか這方より、また一椀の蕎麥を投げこみける。其の蕎麥切、あやまたず旅人のまへなる椀の中へ落入ること、奇妙なり。十人二十人の客にても、蕎麥を強侑むるもの、園たゞ一人にて、四方八方の客人のひかへたる椀の中へ投いるゝに、一つとして把外し、ほかに落つる事なく、悉く椀の中に入りて、いさゝかも疊の上などへ溢るゝ事なし。よく鍛練したる者なり。たゞし園にかぎらず、相撲の國は、殊に蕎麥を好む風俗にて、いづれの郷里の女にても、よく蕎麥きりを客の椀中へなげいるゝ事を上手にす。別て這の園は殊に上手にて、然も蕎麥を制す

北斗云々—北斗七星、その次の字缺く

寛政のころ、備前の國の人のよしにて、俗稱彌平といふ者、諸國をありき、煙草のけぶりにて、千般の姿繪をふきいだして、人に看せける者ありけり。其のころ、齢は五十ばかりと覺えたりし。大いなる火皿の煙管に、煙草おほくつぎこみ、烟おほく吸ひこみて、口より萬般のかたちを吹きいだす。予當時は眼病にて、さらに物を看ることあたはず。然れども、奇しき物なりとて、衆人の云ふに任せて、我家にもよびて、是を吹かせて、疼き眼をこらへおしひらき強て是を看たり。其のふきたる圖、數おほくて、件一にしるしがたし。或は雲龍、柳にけまり、長さ二間の鎖をふき、二ツ輪ちがひ、三輪違ひ、梅鉢北斗□くり、猴傾城、こむ僧、ふじの山、いろはにほへとの文字など、百般吹きわけし、其の中に、雲のかけはしといひて、小き輪にて、そり橋を吹きいだして、一個の仙人、その橋をわたりて、空中へのぼり行くなど、おもしろかりし。

桔梗屋お園

安永の頃東海道藤澤宿に、桔梗屋といへる邸家あり、爰に園といへる婢女ありけり。同國一の宮といへる處の農夫の子也。生質蕎麥切をこのみて、食する事おびたゞし。徒

ば、瓶はくだけて散亂す。斯て此のわれたる片々を拾ひ集めて、持るゝほどづつ荷ひ、我家にはこびけるが、五六度にしてみな運びをはり、然してまた錢八銅もらひ來り、かの陶器家にあたへて、「今一箇買ひとるべし」といふ。陶器屋大いにおどろき、「儞破ずしてはこばゞ、八錢づつに賣るべし」といふ。猪之が曰く、「儞大人に似合はず比興の事をいふ者かな。買ひとる上は我がものなり。破らうが、わるまいが、儞が預る事にあらず。一人して這の家より外の家へとり除けさへすればよろし。幾箇にても、八錢づつに買ひとるなり」といひて、店頭に居りて搖ず。這のとき、家の前面人おほく立ち集り、いづれも猪之が方を贔屓になりて、主人が言語の過失をわらふ。主人ほとく〵困じはて、千般といひこしらへ、種々の菓子などあたへて、漸々ことわり飯しけり。抑這の猪之奈何なる者の子なるや知らず。瓶をわりて人を救ひし、司馬溫公が智仁ほどには有らずといへども、然れども、これ淸潔こゝろもちの童なり。其の後またいかゞ成りけんしらず。

比興―卑怯

司馬溫公―名は光、宋代、仁宗神宗に仕へて遂に宰相となる。資治通鑑等の著あり

烟曲彌平

いなる水瓶、いくつもふせ置きたる間に、かくれあそびして居たるを、陶器家のあるじ是を看て、大いに叱り、「活業のさまたげなり。外へ去て遊ぶべし」と云ければ、這の猪之はなはだ口怜利、「われ爰にあそぶにあらず、我が爺さま、水瓶を買ひて來よと云はれしゆゑ、買ひに來たれり。この水瓶あたひいくらするぞ」と云ひける。主人曰く、「這の小童くちがしこき奴かな。儞が親なんぞ童に水瓶を買ひて來よと云ふべきや。這の水瓶、大人すら一人にては持ちかるぬ物なるに、怎生儞にかひて來よといふべき、謂なし」といへば、猪のが曰く、「いなく〳〵我いかなる重きものにても、能く擡ありくなり」といふ。主人聞きて、「儞もし這の水瓶を、一人して家にもて行くならば、價は一箇八錢づつに負けてやるべし」といふ。猪之是を聞きて、「我一人にてもて行くべし。かならず八錢に賣るにちがひなきや」陶器家が曰く、「いくつにても賣るべし。但し、大勢にて運びでは、さやうには成らぬなり」猪之が曰く、「何ぞ人をたのまんや、我まづ錢をもて來るべし」と、家に跑かへり、母親に錢八錢もらひ、再般せとものやの店へ來り、「さらば價八錢わたすべし」といひて、主人に與へ、「是より彼の水瓶は我物なり。我一人にて運び行くなり」と云ひつゝ、路上より手頃の大石をひろひ來り、彼の水瓶に打ちつけけれ

寂光淨土―極樂淨土

をなし、竟に三年の法事まで、仔細につとめけり。或時祿助、あひ長屋うちの人々に語りて曰く、「それがし、當二十八日には死去いたすべく侍ふ。跡の處よろしく央みまゐらすなり。葬式など、雜費の料は所持いたしたれば、探りいだして御つかひ給るべし」と央みありきけるを、相連家の人々、「また獃子が何事をかいふならん」と、只管わらひて止みにけり。斯て祿助すこしく病つき、其のいひし日に死にけり。衆人大いにおどろき、「這のもの、此の世こそかく淺ましき暮しはしたれ、來世は寂光淨土に生ずるなるべし」と、個々會ひて、家の裡を探し見れば、一箇の筺の中に金三兩あり。外に錢も些しはありけるにぞ、是にて萬般の費用をとりまかなひ、佛事それ〴〵にいとなみ、北阿呂地專念寺といへる寺に葬りけり。

猪之助

安永の頃、江戸尾張町邊にて、裏屋住するいやしき者の子にて、猪のといへるもの在りけり。極めて猪之助と呼びしなるべし。這の猪之年いまだ十歳にたらざる頃、ちかきあたりの、陶器物賣る家のありし、其の納屋のかたはらに、外の童們と倶に遊び居けり。大

鍛冶といへる謂いまだしらず、極めて譯ある事なるべし。

孝子祿助

南紀和歌山南阿呂地柳町といへる處に、祿助といふ者ありけり。商客の子にして、父にはやく別れ、老母一人を養へり。性質魯鈍にして、活業の道をしらず。詮方なくて、人家の軒に立ちて、米錢をこひ得て、其の母をやしなふ。孝心太甚厚し。常に、古麻上下の、うへした小紋ちがひたるを著し、竹にてつくり、墨にて塗りたる、鞘木にて作れる、鍔のをかしき兩刀を横たへ、破れたる扇をもち、何とも譯らぬうたを唄ひ、人家の簷端にたちて物を乞ふ。然ども、餘の乞兒などとかはり、何時までも門に佇立む事なく、一ころ唄ひては、忽ち亦外の家にゆく。御城下の町家にても、渠が親に孝心なるにめでて、祿助が來たるを侍ちて、物をとらする事なり。朝にははやく起きて、飯を炊きて母にあたへ、其の躬も飡し、然して、市町をもらひあるき、夕には、早く皈りて、夕餉を制し、老母ひとりを養ひけり。其の後母やまひにかゝり、竟に空しく成りければ、祿助ひたすら歎きかなしみ、葬送など、叮嚀にとりいとなみ、累七の法要も、僧を請じて供養

累七の法要―七日目毎に營む佛事

三更、四更
一三更は凡夜十二時より二時迄四更は二時より四時迄

女夫鍛冶

泉州岸和田五軒家町といへる處に、浦田治右衛門といふ、鍛冶職人ありけり。至て叮嚀なる癖あり。這の者兩親と離れて住みけり。毎宵夜業をしまひてより、親の家にゆきて、門うちたゝき、「小僮たゞ今よなべを倣果さふらふ。御きげんよくおん安歇あるべし。我們も是より臥し侍ふ」と云ひてかへり、然して夫婦とも臥房にいりぬ。朝また疾おきいでて、親の許にゆき「唯今おき侍ふ。御きげんよく侍や」と云ひて皈り、夫より朝飯を吃し、家業をつとむ。奈何なる風雨たりとも、毎夜毎朝かく事なし。時にふれては、夜業三更四更におよぶ事もあり。然ども、猶行きて、門うちたゝき、例のごとく云ひて皈る親もまた是を聞かざる間は寐ねず。家より家まで、往來わづか二町許にして、いと近くはあれど、數十年が間、一日も廢せし事なく、兩親死後やうやく止む。文化六年九月二十九日、治右衛門八十二歳にて死去す。同處、寺町圓教寺といへる法華寺に葬す。女夫

百家琦行傳五之卷　目録

敷島の道―和歌の道

螢さへ雪さへ云々―車胤、孫康が螢雪の故事

たへて、「彼の老商人は、窻のむら竹と號す、異物にて侍ふ」と云ひて、去り往きけり。「偖は、聞およびし村竹にて有りけるよ」と、這の人大いに嘆息しけり。當日夕ぐれにいたり、主人村竹が家に尋ねゆき、晝のほど無禮なりし事を、只管にわび言しけり。斯て這の人も亦、歌など詠みはじめ、友四五人かたらひて、一册の歌まきを制へ、鮮けき魚一尾をそへて、村竹が方へ添削をこひ越しけり。村竹件〻に朱書など加へて、奥に「やつがれ老いて、敷島の道にうとし。萬望は這の後おん歌の撰などは赦し給るべし」と寫著めて、

螢さへ雪さへいまだあつめねば我からくらき窻のむら竹

と詠みそへて返しけり。這の老人實に一畸人にて、千般のをかしき物語あれども、略しぬ。文化のはじめ、八十二歳にて死去す。同處智學院といへる禪寺に葬る。

かた衣—武家の禮服、社祢の上ばかりをいふ

門をいづる。むら竹狼狽走らんとする時、かの小濱何がしにはたと往合ひ、かほ看合せける。小濱氏、丹後ひらの袴に、黒紹のかた衣著られ、急に殿中の笠をぬがれ、村竹にむかひ、腰うちかゞめ、「先生這のほどは、たえて御無音にすぎ侍ひき。今日、おん活業もはや御返りに侍ふや。小姓も、歸路にはかならず御菴中へおん訪問まうす心得にて侍ふ」といふ。村竹大地に兩手をつき、言語へりくだりて、何くれと御答へまうしけり。此のとき、村竹を追蒐いでたる這の家のあるじ、六尺棒はふり揚げたれども、今止事なき體の人、叮嚀に接禮せらるゝを看て、流石に手をも下し得ず、ふりあげし棒のてまへ面目なげに看えにけり。途中といひ、大暑なれば、小濱氏も言みじかに接禮をはり、別辭をつげて、東の方へ去られけり。村竹また彼の主人の前に兩手をつき、くれ〴〵と無禮なりし事を詑言す。主人もいま去りし人の、先生と云し詞耳に殘り、是よりは强て怒らず、「這の後よく心得よ」と云ひて、門内へしりぞきたり。村竹衣服の砂うちはらひ、朸擔けてかへらんと做しけるとき、亦一人の男愛宕詣と見えて來かゝり、「先生はやく御しまひなされしよ」と言ひかけて過ぎゆくを、這の家のあるじ、門内より跑いで、彼の男をよびとゞめ、「今其の方のもの云ひたる商人は、何者なるぞ」と問ひければ、男こ

四萬六千日—當日參詣するものは四萬六千日參詣したる程の功德ありといふ日

敦圉き—息差荒くし

二十四日芝愛宕山四萬六千日とかいへる日にて、參詣人おびたゞし。然ばこの足輕町も、つねよりは往來茂し。殊に大暑にて、いとゞ熱氣人をむす。村竹菅の小笠をかぶり、朸かたげて皈りける。向のかたより、小濱何がしどのと申すやん事なき御方、供奉士十餘人引きつれ、例の通り鎗をふせて來られける。村竹遙にこれを看著け、この小濱氏は、をりをりわが家にも來り給ふ御方なるに、今かく朸かたげ、草鞋はきたる儘にて遇はん事見ぐるし、と思ければ、不計かたはらなる御藩中の門內へにげいり、梅の樹しげりたる間に隱れ、かゞまり居たり。然るに、這の家のあるじ是を看つけ、大いに怒り、忽ち六尺棒をひき提げとんで出で、「儞何奴なれば、呼內もせず裡にいりて、かく樹の下に屈りをるぞ。察するところ、盜人なるべし。打ち殺さん」と敦圉きつゝ、彼の六尺棒にてうたんとす。村竹おどろき、飛びすさり、「小老は、日每這のほとりを過り、商ひいたす者にて侍ふ。當今御門前にて知己にあひ、餘り看苦き體にてさふらへば、計らず御門裡へかけ入り隱れさふらひき。萬望は罪をおんゆるし有るべし」と、只管にわび言しけれども、主人一向に聽いれず、猶とび蒐つて打たんとす。村竹今はたまりかねて、朸と籠とを扯挐ながら、門外へかけ出でたり。主人は猶も是をうたんと、追かけて

枌―天秤棒

旗下―徳川幕府の家臣、知行萬石以下御目見得以上の者

るまどのむら竹といへる古歌にもよれり。貧學の事なれば、十分にはあらずと雖も、いかにも奇しき行狀の老人なれば、ひと〴〵只管賞讃す。朝より草鞋はき、竹籠の裡に、大根かぶら、牛房にんじん、その外種々野菜のたぐひを入れて、枌もて是をになひ、麻布龍土町、六本木へんまで商にゆく。諸人その行を稱するをもて、何にまれ、這の老人が來るを待ちて、おの〳〵野菜のたぐひを求むるゆゑに、午時をも過さず賣りはてて、家に皈る。かへればまた案上に向ひ、書をよむの外、他事なし。後には、門人なども多くいできて、庵中にとひ來るもの、若干なり。麻布六本木に、何がし侯の御隱居、御別邸におはしけるが、村竹が異なる行を聞きこまれ、をり〳〵宣して、おん談話の友とせられけり。是よりいよ〳〵名高くなりぬ。社中の人々、村竹が野菜を擔ひうりありく事を恥ぢて、「是を廢め給へ」と止むれども聽かず。爰に青山より麻布へかよふ處に、足輕町といへるところあり。這は、何がし侯の御官第舍裡なれども、麻布への間道なれば、もろ人助の爲にとて、晝のみ這を通さるゝ事なり。されば、列侯旗本たりとも、這の處を通るゝときは、鎗をふせて通る事なり。一時村竹例のとほり野菜をになひて、麻布邊へ商に行き、午時ごろ賣りはてて、かへりに這の足輕町をとほりけるが、當日六月

りきしが、或商人の從僕になりて、やう〳〵に成長、つひには俚しき野菜商人とはなりにけり。幼年より、書を見る事を好むのあまり、一日商ひし、いさゝかの利德をうるときは、且當日の米を買ひ、殘れる錢は、私に貯蓄おき、書を求めて是をよむ。竟に、一日淸かなる衣服著し事なく、家は破れかたぶきたれども厭はず。三十の頃より、妻をもむかへ、子も生下たりけれども、皆汚れやぶれたる衣服著下おきて、僅に寒をしのぐのみ。旦夕の食事も、米の飯を食するまでにて、美味野菜魚肉のたぐひを飡する事なく、ただ是飢をしのぐのみ。辛じて、求むる書も、數年つもれば員まさり、つひに多くの書をよみて、五十路をこえてより、這の千次郎が學才ある事をしり、忽ち名高きものとなれり。常に雜俳を好みて、是の撰みし敷島の道にくはし。一日堪忍といへる一題にて、旦より夕にいたるまで、六時の間に百首の歌を詠み、堪忍百首といへる書を編す。その後邊に、また別に一首の道歌をかけり。

堪忍をして其の跡のはちまきのぬけがらを見よ人の世の中

家はいと〳〵貧しくくらし、住む地方は僻地なり。小き窻のもとに、女竹のしげりたるを眼的として、來人とひ來るゆゑに、戯名、窻のむら竹の翁とよべり。但し、鶯きゐ

浪人―仕官せず流浪する侍

へ聞えしものか。遠き國の嬰兒まで、團十郎ごとせよといへば、手を擧げて口をひらく事をなす。栢筵技藝のいとまには、俳諧狂歌の類をもてあそび、月の夕、花の朝、風雅をのぶる事いと多し。

錦著てたゞみの上の乞食かな

といふ句を作りしも、這の栢筵なり。今の歌舞伎役者のごとく、其の躬いやしきをも顧みず、十分高慢、世の人を直下に看なすなどは、見るだに意憎く思るゝなり、栢筵は其の身をへりくだりて、諸位の客人を尊敬し、いさゝかも醜觸たるふるまひなく、穩和にして風流おほく、實に當下の一時人にてありしとぞ。栢筵が事は戲場の書にくはしければ爰に略す。

窻村竹

東武青山熊野横町に、窻の村竹といへる老人在りけり。氏を多田といひ、名を敏包、俗稱千次郎、別號を青義堂と呼びけり。其の父は、止事なき御許につかへし者なりしが、不幸にして浪人し、兩親ともに早く死し、千次郎孤獨の躬となり、這かしこさまよひあ

侠客—をとこだて
三舛の鍔—三箇の升を重ねたる紋をゑりたる鍔
晉子其角—蕉門十哲の一人
表徳—別號

市川栢筵

下總の國、幡谷村といへる處の農家、堀越十藏といひし者、耕奴の業を嫌ひ、侠客にして力つよく、我が家は弟にゆづりて、萬治三年の春、江戸に出て、和泉町に住す。一子を生下けて、海老藏と呼ぶ。這の子、伎藝にさとく、俳優を好むによりて、伎家に入れて、市川團十郎となづく。父の勇氣をうけて、荒事といふ事の道をひらき、紅粉をもつて遍身をいろどり、三舛の鍔の大太刀はき、小き日の丸の扇をもてり。當時までは狂言一幕づつのものなりしを、時代の續き狂言にくみ立てしは、這の者よりぞ始りける。戯場藝中の大祖と稱すべし。浪華椎本才麿が弟子になりて、俳名才牛といへり。栢筵は其の子なり。幼名を九藏とよび、藝は勿論親におとらず。幼年より俳諧をこのみ、晉子其角が膝にのぼりて、三舛と號り、元祿十年十歳にて初舞臺をつとめ、十七歳の秋二代市川團十郎となり、表徳を栢筵と號しけり。伎藝にて人を悦ばしむる事、計るにいとまあらず。東武にてもてはやす、五月の錺り太刀、三舛の鍔を用ひ、或は團十郎齒みがき、亦は團十郎艾、唐錦の花に三舛をおり入れたるを思へば、其の名、異國の機婦にさ

て曰く、「我今日男子が祝にて產神へ詣でさせんと思ひしに、計ずも、今朝この子外面にいでて、袈裟と法衣と數珠をひろひ來れり。我はなはだ心持よからず。萬望祝てめでたき狂歌一首よみて贈よ」と云ひければ、狂歌坊主その辭ともろともに、

けさひろふころも霜月十五日この子のとしも數珠のかずほど

と詠みければ、家主大いに懽び、錢おほくとらせて皈しけり。都て皆斯のごとく、なにによらず題を聞くときは、其の聲にしたがひて詠みいづる。もつとも達吟なり。一首一錢に換れば、錢八百文もらふときは、狂歌八百首を詠むなり。夕暮家に皈れば、もらひし錢にてくさ〲の食物を買ひて、その住むほとりの老人、または幼稚ものなどに分ちあたへて喰はしむ。いさゝかも吝惜の心なし。今日貰し錢、翌まで貯蓄おく事なし。次の日は、亦とく起きいで、狂歌よみてもらひありく。「實家へかへりて、元の賈人になれよ」とて諫勸むる人もありしかど、「算盤をもち、商ひものに懸直をいひて人を哄く、罪人の所爲はいやなり。三十一字を一錢にうりて、世をわたるこそ樂しけれ」とて、生涯これにて終りけり。世人けさひろふの歌を、蜀山の歌とするは悞なり。

蜀山―蜀山人

ろ、目黒日紋谷といへる處の一寺の仁王、殊のほか流行して、これに立願するものは、効驗いちじるしとす。夥しく參詣群集し、夜はこもりとて、通夜する者いと多かり。或人狂歌坊主に、「この日紋谷の仁王を題して詠むべし」と云ひければ、取りあへず、

日もんやの仁王さんでもしやつたかぢゃやおばゞがこもりにぞ行く

當下堀の內むら妙法寺の祖師堂、これまた大いに繁昌にて、日每參詣たゆる間なし。或人「是を題して詠むべし」と云ひければ、取敢ず、

堀の內日蓮大ぼさつま芋まるるひと山さんもんのうち

亦或人五歲になる男子の祝せんとて、衣服等美々しく逢はせ、准備こと〴〵く整ひ、「翌は霜月十五日なり、產神へ參詣いたさすべし」と樂みて寐ねたりしが、次の朝、かの男子とく起きて、外面にいでけるが、忽ちひとつの包袱を拾ひ來れり。父その包袱をとりて披き見れば、裡に袈裟と法衣と數珠とあり。父大いに氣色を損じ、「今日祝して神社へまうでんとするに、斯るいま〳〵しき物を拾ひ來りし事、はなはだ快からず」とて、當日の參詣は止にして、酒うち喫みて臥居たり。時節門口へ、「おなじみの狂歌坊主にて侍ふ」といひ來りける。主人此の聲を聞くとひとしく走り出で、狂歌坊主をよび

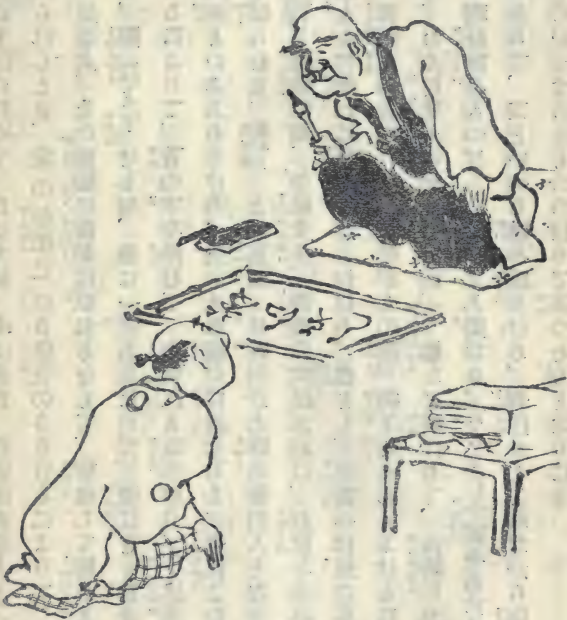
菅江の丸の字を平たう書くの癖あり。これを菅江のの字といふ。當下、此のの字を看版に書きて、菅江鮓、くわん江煎餅など號て賣りしとなり。六十一歳のとき、薙髪せんとて、産神市谷八幡宮へおんいとま乞に詣でて、

と詠みて奉上ければ、卿ことの外御感心ましく、くさぐ御褒賞ありしとぞ。菅江の狂歌は、風調みやびにして、世上のいやしき狂歌とは代れり。菅江つねに、

まさかきのはたちあまりの男山かみさへすつる身とはなりにき

寛政の末、七十歳ばかりにて終る。青山繁國山青源寺と云る禪寺に葬る。碑の文字菅江自筆なり。書もつとも麗し。

狂歌坊主

安永天明のころ、江戸四谷天龍寺門前に、狂歌坊主といふもの有りけり。原は豪家の子なりけれども、利欲にふける事をきらひ、家を棄てて、竟にかゝる躬となり、這ところに小さき小家を借りて住し、日毎人家の簷にたちて、一錢をこひありく。其の一錢をもらふ時は、狂歌一首をよむ。世人これを狂歌坊主といふ。詠歌もつともをかし。其のこ

芬陀利華—梵音プンダリーカ白蓮華

加低—正しくは賀邸とかく、内山涼時

すめるものは云々—本邦天地開闢の說によりていふ

萱江は武家なり。東武牛込に住して、氏は山崎、名は景貫、別號淮南堂とよび、後に、下谷池の端に隱居せられしとき、家の前面に白き蓮花のさきけるによりて、芬陀利華庵とも呼びしなり。這の人、その面蜀の關羽に似たるをもて、綽號して關公と云ひけるを、其のまゝ用ひて、關江と字せしを、後に一字あらためて、漢江とも書きし。常に龜戸天滿宮を信仰せるによりて、萱の字を用ひて、亦萱江と改めけり。牛込加賀屋鋪といへる處に、加低先生といふ人ありけり。這の人和漢の博識なりし。萱江この加低翁の門人となりて、詩を賦られし。漢江詩集あり また皇都、日野何がし卿の御門人となりて、和歌をよく詠みけり。景貫歌集あり 漢學の師、加低先生、酒後のたはぶれに、狂歌をよみて樂まれけるによりて、萱江もまた戲れに狂詠をせられけり。然ども、京都へは這の事ふかくかくして居たりける。天明末のとし、大納言何がしの卿、御下向まし〳〵けるに、御門人なれば、山崎景貫も、おん目見え命せつけられ、玉觴など賜はりて、後卿のおほせありけるは、「景貫はこの程狂詠をもつぱらいたすよし聞けり。當こゝに一題をあたふべし。一首詠むべし」と命せありて、天といへる題を賜りける。萱江かしこみながら取敢へず、

心にはすめぬものからすめるもののぼりて天つそらとなりにき

とよび、平賀源内の門人にして、學才もつとも高く、能く蘭學に通じ、著すところの書數十部あり。所謂萬國新話、紅毛雜話、地球全圖、その外くさ〴〵の書あり。何れも皆海内要用の物なり。常に人に諂はず、高慢ず、人に會ふときは、唯戲言をもて事とす。狂歌師眞顏が家に來りし時、眞顏が曰く、「這のほどは、久しく見え侍はず。奈何せさせ給ひしぞ」と云ひければ、中良曰く、「這のごろは、南國品川宿の事なりの遊女にかゝりて、彼方にのみ通ひ續け、それ故ひさしく訪ひまゐらせざりしなり。僅兩月ばかりに、二箱ほど費し侍ふ」といひける。眞顏大いにおどろき、「夫は殊に大金を費し給ひし。然ながら、最無禮なるまうしやうなれども、さほど迄に高金をおん持ちあらんとは、今まで存知さふらはず。兩箱とは、餘りに噓言らしく覺え侍ふ」と云ひければ、中良答へて、「實に二箱あけたるに違ひなし。但し、二箱とは書篋の事にて侍ふ」と云ひければ、主人をはじめ、居合せし衆人大いに笑ひけり。いつも斯の如く、常の談話滑稽のみおほく、然して胸中數萬卷の書を祕めおき、世界を我が家のうちの如く看なしたりしとぞ。

朱樂菅江

止事なき―貴き

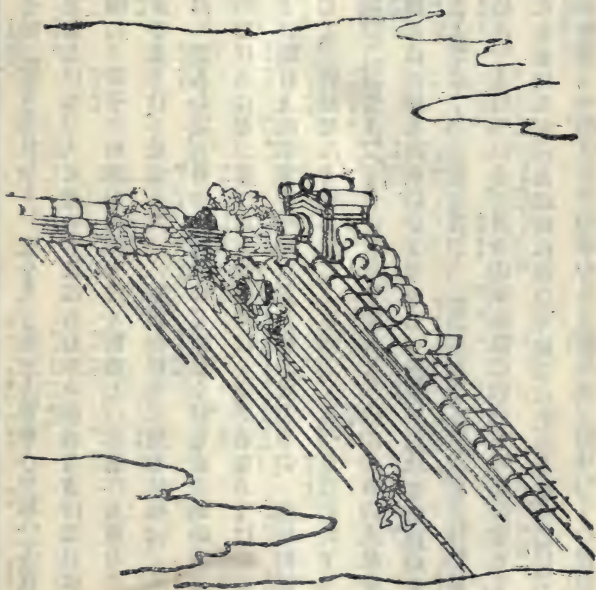
りはづし、然して門前の米店へ悉く人を跑て、「昨日の米不要になりたれば、殘らず御返しなり。たゞし、一割づつ謝錢を賜はるなり。とく〳〵受けとりに來るべし」と云ひつかはしければ、米買のともがら、個々來りて、印に合し、我が米を扯とり、車につみ謝錢を貰ひて皈りけり。斯てより後は、いよ〳〵瑞軒名高くなり、諸家方の普請、十に八九は大かた瑞軒に命じられしとなり。後に、瑞軒いと〳〵止事なき御方の、おん前に出でしとき、「小僕斯までに人に知らるゝやうには成り侍へども、萬望は官名を號たきものにて侍ふ」と言上ければ、上笑はせ給ひ、「夫は安き事なり。以來兵部卿となるべし。但し決して文字にて書く事協はず、假名にて書き用ふべし」と命ありけるとぞ。瑞軒しばらく考へて大いに笑ひ、「是はかたじけなき仕合にさふらふ」と御請をまうして、退きけり。假名にてひようぶきやうとは「ひようぶぎやう（日雇奉行）」と云ふ事なるべし。瑞軒が物語なほ多けれどもこゝに略す。

森島中良

中良は東武築地に住し、名醫桂川何がしの弟なり。俗稱森島萬藏、字を中良、別號森羅亭

朝まだき―朝早く

軒即日二三人の人をやとひ、増上寺門前の市街をはせあるかせ、有るとある米店に入りて、悉く云はせけるは、「増上寺にて、急に要用の事ありて、米數萬俵買ひとり給ふ。白米玄米の差別なく、幾俵にても持合せしだい、明午時までに山内へはこび來るべし」と云ひふらしける。門前の米賈ども、よき商ひとおもひければ、次の朝まだきより、玄米白米車につみて、山内へ曳入れ來る事おびたゞし。瑞軒指揮して、俵毎にしるしをつけ、這の米を殘らず鐘樓の廻りに置せ、「價は明夕受けとりに來れよ」と云て皈しけり。亦次の日、瑞軒かの米を俵のまゝ鐘樓の四方へつみ重ね、鐘の龍頭に丸木をさし入れ、這の丸木より八方へ蜻蛉に木をわたし、彼の米俵を足代として、二十餘個の人夫一齊に肩をいれて舁揚ける。鐘些しあがりたる時、下へ丸木をさし入れ置き、四方亦米一俵づつ高さをまし、二十餘人また一齊に肩を入れて舁揚る。すこし揚れば、亦丸木を下にさし入れ井桁になし、亦四方米一俵づつまして足代を高うし、舁揚ぐる事はじめの如し。いく度か斯の如くし、追々錘を高うし、鐘樓四方の横木より上にいたりては、鐘の下へ蜻蛉木を架し、俵を減じてかき揚る。少し揚れば、又米一俵づつまして足代をよき程にす。斯の如くして、二十餘度かきあげ、竟に龍頭を、架鐵のくわんに扯かけけり。是より蜻蛉の丸木など把

云ひて皈りけり。次の日瑞軒紙七八枚つぎの凧をこしらへ持ち來り、本坊の前にて、空たかく昇せ、本坊の家根を越えゆきけるとき、糸を多くくりいだしければ、凧はおのづから下りける。其の尾繩をとりて、本坊の後邊へ扯きおろし、凧を切りとり、糸のさきへ太き大綱を結びつけ、本坊の前にてひき手繰せければ、かの大綱、本坊の大家頭の上を越えて前にいたる時、堂の前にも後にも、大地に大いなる杭を打ちこみ、這の大綱前後とも杭にしかと結びとめ、本坊の簷までは梯木にてのぼり、それより上はかの大綱にすがりて、棟瓦は菰つゝみにして屋頭まで扯きあげ、原の處に正し居ゑ、泥工素土をもて、是を補ひ終り、夕暮にいたりて大綱をとき扯きとり、杭をぬきて元の如くなし、役人に別辭をつげて皈りけり。人夫は泥工瑞軒ともに五人なり。皆人其の即妙の才を感じけり。次の年また增上寺の鐘樓の架鐵きれて、鐘地におちたり。鍛冶に命じて架鐵はとのひたれども、鐘を此の架鐵にひき蒐んこと太甚手おもく、是亦四方に足代をかまへ、許多の人夫を費し、數日をかさねざれば、扯揚げかぬるよし、棟梁まうす。「斯ては、若干の費用かゝるべし。然ばまた瑞軒に央むべし」とて、頓て這の事を云ひおくりければ、瑞軒聞て、「領承りさふらふ。明後日扯きあげ侍はん」と答へして皈しけり。斯て、瑞

急に下僕兩人を抱へて待受けたり。我家は燒けて灰塵となりしといへども、戸に皈り、

程なく木曾の材木筏にて著しける。大火後いづこにも材木一根もなき時なれば、殊の外價もよく、僅兩三日の間に若干の材木をのこりなく賣盡し、木曾へも價をのこらず遞與、その躬も夥しく黃金をまうけ、是より大いに家富みけり。然して後は、家居も美々しく造り立て、諸家がたへ立入して、奥向の普請など請負しけるが、他の人よりは價かろく、美麗に造立とゝのひけるにぞ、都て諸家の造營は、這の者ならでは協ぬやうに云ひなしけり。天和の頃より瑞軒と改名す。一時、芝三緣山增上寺の、本坊の棟瓦ひとつ落ちたり。家頭匠に命じて、修補せんとせし處に、家頭工、まづ足代のかゝりより、人夫數十人日數いく日と、殊の外高金につもり書して出しけり。役がかりの人是を聞て、「わづか瓦一片おちしを修補んに、餘り高料のかゝりなり」と咎ければ、家頭匠の云ふやう、「棟瓦一片おちても、十片落ちても、同じ事にて、斯山の如き高家根なれば、足代くみ揚るに、太甚日數かゝり侍ふ」と答へける。外々の家根匠に問ひても斯のごとく答ふるにぞ、詮方なく是に極めんとしけるが、「且瑞軒に問ひて見るべし」と、頓て川村をよびて這の事を語りければ、瑞軒聞て、「然ばかりの事心易き幹なり。明日つくろひ侍はん」と、

べからずと、立地ひとつ思案をめぐらし、有合せたる僅の金を懐中にし、我家は棄てきて、夜を日に繼ぎて、木曾山へはしりいたり、材木おほく積みたる樵頭領が家に入りて、「是は江戸の材木屋なり、木口買入に來り侍ふ」と云ひければ、主人悦びて、奥に請じ、山茶など煎てもてなしけり。這の家の庭に、六七歳ばかりの幼童あそび居たり。十右衛門懐中より圓金一枚とり出し、火箸にて孔をあけ、紙撚を通し、輪にむすび、彼の幼童にあたへければ、懽びこれをもて遊びゐたり。這の家の妻これを看著けおどろき、「是いづこより拾ひ來りしぞ」と問ふ。子供ら答へて、「江戸の御客にもらひし」といふ。妻聞きて、夫に告ぐる。主人聞て大いに驚き、「奈何江戸人なればとて、斯る貨を童の翫具にやらるゝとは、寔に大器の大檀那なり」と。夫よりいよ〳〵奔走して、ひたすらに接待けり。十ゑもん是より、這につみ置きたる材木のこりなく買ひとるべき誓住をなし、材木に逐一鐵印をうち、「早速におくり給るべし。銀子は著の日引きかへにわたすべし。些なれども、當座の約住なり」とて、圓金五兩を與へ、竟にわかれて歸りけり。五六日を經て、江戸大火のよしにて、おひ〳〵材木の注文いひ來りけれども、殘らず十ゑもん方へ賣り極りたれば、いかにとも詮方なく、皆十ゑもん方へ積下しける。十ゑもんは江

轉回しけるに、懷裡に一もんの路費もなく、路上、人の喰ひさして捨てたる西瓜の皮などをひろひて飡し、あるは畑のほとりに切捨てたる、瓜、茄子をひろひて喰ひ、辛じて命をつなぎ、江戸に歸り、品川宿に、知己の家のまへ過りかぬる仔細あり、裏町をよぎりて、塵芥場の中にて、人の捨てたる古き雪踏の、かたしづつの腐れたる如きものを、二三足看著けいだし、此の皮をとりて、川の中にて能く洗ひ、路傍の垣下のうちより、細き竹を四五ほん拔きとり、かの皮を三角に切て結びつけ、蠅拂子といへる物をこしらへ、然して路上「かはの蠅はたき、皮の蠅はたき」と呼びて、賣りあるきけるに、江戸もさすがに繁華の地にて、忽ち是を買ふもの有りて、當日夕暮には、殘らず賣りきり、やう〳〵百餘孔の錢を得て、あやしく命をつなぎけり。次の日よりは、往來の人のはき捨てたる草鞋、あるは馬の鞋など多く拾ひあつめ、川の中へ浸しおき、土をよく洗ひおとし、泥土のつかふ寸莎といへる物に刻み、泥匠の家にもて行きて賣りけるに、元來やはらかにて、苧寸莎にも猶勝りけるにぞ、這の職の人々、慍んで是をもとむ。是より十ゑもんが寸莎とて、諸方より求め來り、大いに流行りけるにぞ、やう〳〵事かゝぬ身と成りにけり。明曆三年、火災おこる。十右衛門是を看て、這の火なか〳〵急には鎭る

て、其の不慮に此の麏を得たる事をおもひ、其の換物に、一尾の鮑魚をその處へおきて去りけり。少時ありて、嚮に麏をおきたる者來りて見るに、麏は有ずして、反て一尾の鮑魚あり。澤の中は、人の道路にあらず。麏鮑魚を變じたる事を怪み、大いに神なりと思へり。轉相告げて人に語る。此の鮑魚に病をいのり、福を禱るに、多く効驗あり。此の事世に語りつたへて、人皆奇特の思をなす。是によりて、祠をたて、衆位の巫祝數十人幕をはり、鐘皷をならし歌舞す。四方百里より皆來りて、禱り祝に。協はずといふ㕝なし。鮑君神と號く。其の后數年ありて、鮑魚の主來りて、這の事を聞いて、是我が魚なり、何ぞ神ならんやと、竟に祠に入りて鮑魚をとりて皈れり。是より後此事止みぬ。風俗通取意也 是よく相似たる物語なり。

川村瑞軒

瑞軒、はじめは十右衞門と呼び、後に瑞軒と改む。原は車力にて、東武の產、神田、淺草、芝などに住みて、はじめは住所定らざりし。若き頃は、家まづしく、一時、京攝にゆきて活業を做すべしと旅立せしに、路費乏くて行くことあたはず。大井川の邊より、

風俗通―後漢王劭撰
麏―鹿に似て角なき小獸

ほく死すべしと、託宣なり」と云ひけるにぞ、村裡の愚民大いにおどろき、再殺おほくの錢を集め、「巫祝等をたのみて、神鎮の神事を執行ふべし」と、聞きあひける。丘隅ゐもん是を聞て、暗にをかしく、一日彼の村にいたり、「おのれは川崎宿の、田中丘隅ゐもんといふ者なり。鱚大明神の祟それがし鎮めまゐらすべし。假令いかなる事を做すとも、かならず驚き給ふべからず」と云ひおきて、頓て彼の祠を打ちやぶり、鱚を瓶の中より扯きいだし、燈明の火を以て、ほこら華表を薪とし、かの鱚を炙物としのこりなく滄ひ盡し、神酒に備へし酒うちのみ、其の儘我が家へかへりけり。是を看る村民ども、大いに駭き、「山神の祟、こののち大いに來るべし」とて、只管譟ぎあへりけるが、其の后何のたよりもなし。後に丘隅ゐもん御とり立に成りしとき、御役にて這の處へ來り、這の事くはしく說語られしとなり。

輯者曰く此の物語、或戲作者別人の事として、作りもの語書にかきのせたり。看る人是をしも虛說ならんかと疑ふべきか。然れども、中華の書にも同說あり。風俗通に曰く、「汝南の銅陽といふ處の田の中にて、麏を拾ひ得たる者あり。其の麏を澤の中へおきて、外へ行きけり。其の跡にて、魚商人這の麏を見て喜び持ち去んとし

をなしけるに、鱌といへる魚一尾とり得たり。さらば是を人事にすべしと、頓て携へて、丈母のもとへ急ぎけるが、只有る山裡にて、狩人の網をはり置きし其の中に、雉子一羽かゝりて、ばた〳〵と羽たゝきして在りけり。時節獵師もあたりに見えず。丘隅ゐもん是を看著、しうとめへの人事にせんには、這の鳥こそ好かりけれとて、忽ち彼の雉子を奪ひとり、持來し鱌を網の裡へうちこみおき、這の處をはせ去りけり。其の迹へ、かの網をかけおきたる獵師きたり、件の鱌を看て、大いにおどろき、「是はいかに、水中に住むべき魚の、山中の網にかゝりしは、心得がたし」と、頓て同輩のものを呼び來りて看せければ、いづれも驚き、「是凡事にあるべからず」とて、頓て陰陽師に卜はしめけるに、「是ひとへに山神の崇なり。快くこの魚を神に祭るべし」と示しける程に、無智の愚民共これに從ひ、俄に村中錢を集めて、たちまち一箇の祠をたて、華表瑞籬まで造立ひ、かの鱌を大明神と勸請しけり。其の后、一日大いに風雨ありて、乾坤震動したりける。村民これを神變とこゝろ得、次の日、鱌大明神へ湯花をさゝげ、神樂を奏しける。巫祝賣主らこれに窺覦み、何がな不思議をあらはして金まうけせんと思ひ、「山神の崇いまだ鎭らず、猶も不日に山くづれ、海あふれて、這のほとり、一圓の泥海となり、鄕人お

巫祝—神官
賣主—賣僧の誤、金儲けを事とする悪僧

幇間—男藝者

人們に與へける。非人們悳び、急に川の中に飛びいりて沐浴し、膏藥をはがし、足の布など脱すてたれば、手足に疵なく、顔に腫物なく、いづれも一個の好男子、やがて躬をぬぐひ、衣服を著かへたれば、五人とも對の衣裝なり。這の中一人、髮よく結ふものありて、個々髭をそり、髮ゆひ正し、ふたゝび酒のみ唄うたひ、三絃ひきて噪ぎけり。聲妓輩も、今はこらへかね、頓て船に入り來りて、諸倶にうたひ噪ぎけり。是は河太郎豫て京より幇間を呼びよせおき、何呉としめし合せ、聲妓どもを哄き、斯る戯れを做つるにぞ有りける。是よりみな〳〵打列て、にぎはしく參詣したりけり。都て河太郎が物がたり、くさ〴〵ありて、能く人の知るところなれば略す。

田中丘隅右衛門

丘隅ゑもんは、原東海道川崎宿の問屋場の人足なりしが、其の器量衆に秀でたるをもて、はじめ問屋役人となりしが、竟に止事なき御方の御とり立にあひて、大祿の武官となれり。はじめ川崎宿にありし頃、近鄉に妻の母のありけるが、丘隅ゑもん、一時この丈母のかたへ時候の見まひに行かんと思ひ、何がな土產にもて行くべしとて、近隣にて網を借りて、川獵

ん」と、五人とも船に入りける。いづれも髮は亂れ、髭おひたち、太甚しく破れたる襤服をまとひ、繩をもて帶となし、或は顏に腫物できて膏藥をはり、亦は足に大疵ありて、血塗れなるを、古布もて八重十文字にひき蒐み、片足ひきながら來るもあり。其の汚き事いふばかりなし。聲妓ども穢がりて、ひたすら是を止むれども、河太郎一向に聞いれず。頓て鍾子をあげて、一鍾をのみ、這の非人們にさしければ、非人們はおしいたゞきて、是を喫す。河太郎また酒菜を挾みて與へければ、非人等懽びて是をくらふ。聲妓どもは大いに怕れ、殘らず陸へにげ登りて、一個も船にあらず。河太郎は非人を相手に、只管さかづきを廻らしけるが、追々に醉ひまはりて、頓て非人們三絃とりて彈きはじめけるが、野伏とおもひの外、その音色淸らかに、妙手なる事いふべからず。亦外の非人ら、おの〳〵唄を謳ひける。其のこゑ最も麗しく譬るに物なし。一個河太郞が持ちし扇をかりて、舞をなすあり。其の舞の手また奇妙なり。五人とも千般の藝を盡しけるにぞ、陸へ逃げたる聲妓をはじめ、外々の船よりも、渠們が藝のおもしろきを、讃めざる人こそなかりけれ。河太郎大いに憘び、「偖も儞らよく勤めたり。さらば褒美をとらすべし」とて、樓の上よりひとつの包袱を把りおろし、這の裡より衣服五かさね探りいでて、非

放生會—この日の八幡宮の神事、捕へ置ける鳥魚の類を放つ

をめぐらし、五六寸まはりの小き笊を多く求め、裡に雀を一羽づつ入れて、上を白紙にてはりつめ、蓋とし、夫に「彼岸の志河太郎」と書き著けてくばりけり。貰ひたる家には不審におもひ、彼の笊東國にてざると云なりの中にて、何かばた／＼と音のする故に、紙を扯はなし看れば、忽ち裡より雀一羽とび出でて、客次中をとび廻り、竟には外面へ舞いでて、那里ともなく去り行きける。是彼岸八月十五日に中りたれば、放生會の意なり。然して、跡に笊ひとつ残り、永く俺漚に調寶して、をり／＼河太郎が事を云ひいでけり。或時、河太郎さる方の參會の席にて、島の内の聲妓ども四五人、河太郎をとりまき、「何とぞ住吉へ倡引給へ」と迫めける。河太郎點頭、「さらば何の日、倡引ゆくべし」と約束して別れけり。斯て當日になりければ、河太郎一艘の樓船に、酒さかなおほく入れさせ、彼の聲妓ども四五人のこらず呼びて乘せ、船中うたひ囃嗬きて、こぎ出しけるが、頓て住の江の岸に著きける。崖の上に、野伏の非人ども、四五人菰をかぶりて臥居たり。河太郎いたく酒に醉ひたれば、這の非人どもを呼びかけ、「儞輩爰に來りて、我が酒の相をせよ」と云ひければ、非人ども、初めのほどは辭退し居たりけるが、河太郎只管よびけるにぞ、竟には非人ども怕々這ひ來りて船にのり、「しからば怕ながら御酒頂戴つかまつら

百家琦行傳 四之卷

河内屋太郎兵衞

大坂備後町堺筋に、河内屋太郎兵衞といふ者ありけり。世人略して河太郎と呼びぬ。商家にして、家もつとも富めり。安永より寛政の頃まで、浪華に名高き滑稽家なり。常に人と談話するに、其のおもしろき事譬ふべからず。浪華の風俗にて、彼岸の茶の子といふ物を、家毎にくばる事あり。是は、彼岸會のこゝろざしなれば、みな齋物を專として、蘿蔔四五根、豆腐一ぢやう、或は、胡蘿蔔、牛房のたぐひ、其の外何にまれ、價十四五錢ぐらゐより二十四五錢が程のものをくばる事、家毎大やう相同じ。河太郎思ふやう、彼岸の茶の子、何れも同じ物をやつたり貰うたり、不益の事なり。何ぞ跡にのこりて、要にたつものを配らんと思ひ、或彼岸に、竹を多く買入れおき、物干竿を一本づつ配りけり。衆人をかしき茶の子なりとて笑ひしが、後々永く要に立ちて、何日までも河太郎が名をいひ續けしとぞ。亦ある秋の彼岸、八月十五日中日に當りけるとき、河太郎また工風

彼岸會―春分秋分の前後通して七日間修する佛事

百家琦行傳四之卷　目錄

三五寸程づつに斬り、醬油をつけて、殘らず喰ひ、二箇の頭と皮と骨とは火にてよく燒き、炭のごとくにして、殘りなく喰ひ盡し、塵ばかりの物も殘る處なし。莊官大いによろこび、頓て二十金を把りいだして、八兵衞に與へけれども、「小僕死ざる間は、要用にあらず」とて、是を受けず。走て山田屋へ歸りけり。是を看聞く衆人、大いにおどろき、「八兵衞蛇の毒にあたり、遠からず死べし」とて、日每とりぐ\噂しけるが、八兵衞何の仔細もなく、其の後、また二十餘年が間、一日の病もなく、天明八申年八十餘歲にて死す。兩家より美々しく葬送を執行けり。竟に蛇のたゝりなし。

ほどの毒蛇にさふらへば、食ひなば、極て死侍はん。小僕元來妻なし子なし、死したればとて歎くものなし。齢は當六十ちかし、命もまたをしからず。命に任せ、その蛇を啗さふらはん。然し我もし蛇を嚙ひても、猶生きてあらば、酬謝にはおよばず。若し死にさふらはゞ、四五金の謝物を賜るべし」といふ。莊宮聞いて、「夫は僻言ちがひには有ずや。倘死なば酬謝におよばず、生きたらば欲しといふにはあらずや」八兵衞頭を打ちふりて、「否々然あらず。小僕生きてあらん程は、當の主家にて、生涯やしなひ給はる故に、一錢の要用もなし。死にさふらはゞ、葬禮する程の物を賜はるべし」といふ。莊官聞いて、「實理なり。奈何とも做すべし。萬望は、彼の蛇くひて呉よ」と央みける。八兵衞點頭き、「いつにてもあれ、其の蛇いで侍らはゞ、疾知せ給はるべし。小僕參りて、啗さふらはん」と云ひて、當日は家に皈りけり。四五日を經て、莊官よりむかへの人來りけるにぞ、八兵衞急ぎ莊官の許に往きて看るに、彼兩頭の蛇、前栽の松樹の下に團蟠て居たりける。八兵衞は手に鍬を持ちて、忍足にすゝみより、彼の蛇をしたゝかに打ちければ、蛇は大いに怒り、鎌頭をもたげて、八兵衞が方へ走り來たる。八兵衞再般鍬をあげて、連打にうち居ければ、些しく痿々となる處を扯とらへて、皮をはぎ菜刀にて

叔敖—孫叔敖は楚の人、見たりし時兩頭蛇を見、後人の見むことを恐れ殺して埋む、陰德は陽報あつて、後令尹となる

ろづの業をなしける。田家の下僕なれば、藁芝などおほく把りあつかふ故、もし火の過失もあらんかと、主人はなはだ放心して、八兵衛に「業を勤むる間は烟草をのむべからず」と禁めけり。八兵衛好む處のたばこを止められ、大いに困じ、「火さへ用ひずば、宜しかるべし」と云ひて、烟艸をその儘飡しけるとぞ。其の外醬油を一舛のみ、蕃椒を一斤くらひ、蟾蜍をまる燒にして飡ひなどしけるにぞ、衆人はなはだ驚きけり。一日同じ村の莊官より、山田屋へ使をつかはし、下僕八兵衛を些しの間借りうけ度きよしを、央み越しけり。奈何なる事ともわきまへねど、且八兵衛を呼びて、斯と知せ、莊官の家へつかはしけり。斯て、莊官八兵衛を呼びて語つて曰く、「近頃我家の前栽のうちへ、兩頭の蛇きたりて徘徊す。これを看る人は、遠からず死るといふ事、昔より云ひ傳へて、人の怕る事異朝の叔敖が古事にても知るべし。蛇は執心ふかき者ゆゑ、殺しても念を殘し、其の人に仇するといへり。況や兩頭の蛇においてをや。爰をもて、我思ふに、かの蛇くひてしまはゞ、形も殘らず、念をのこす處なかるべし。儞何とぞ彼の蛇をくひてくれよ。然らば其の酬謝に、二十金を儞に與ふべし」といひければ、八兵衛答へて、「命の如く、兩頭の蛇を看るものは、遠からず死すと聞き傳へさぶらふ。看てさへ死ぬ

御家流―伏見帝の皇子青蓮院尊圓法親王の流を傳へたる書風

隣のせんざいまで、虫一隻も生ぜず。「萬望は蚊と蚤をもとりて給らんや」など、戯れいふ人も有りけり。虫多き中にも、第一の好味として憘び飡するものは、蛇なり。皮をはぎ、骨を去り、二三寸程づつに斬りて、竹串にさし、炙物にして食す。予其のころ、此の老人に蛇のかばやきを貰ひて飡ひたり。はなはだ美味ものなりし。外人は、釣竿をかたげて、川狩にゆくなかに、這の老人のみは、野山を經めぐりて、蛇を數隻とり來り、是を按排して、酒のみて樂みける。這の人、俗やう御家流の美筆にて、壯き頃は、弟子そこばく有りしが、斯る奇癖ある人なれば、竟に弟子もみな來らず。「奈何なれば、然やうに虫を好み給ふぞ」と問ひければ、老人答へて、「世人獸の肉をさへ食する者あり。夫に合しては、虫は大いに上品の者なり」と云ひけり。寛政末のころ六十餘歳にて死去す。同所熊野横町高德寺に葬す。

蛇喰八兵衛

常陸の國龍が崎に、山田屋何がしの家の下僕、八兵衛といふ者ありけり。性惡食を事とす。常に煙草をすふ事大太異なり。朝より夜に寐ぬるまで、烟管を嚙へつゞけにて、よ

爰を以て世人狸の卜者と呼びなしけり。然ども易はよくも中らざりし。或る人の曰く、「先生狸を愛し給ふに合しては、易の方あたり些うして、評判なし。今すこし名人になり給へ」と云ひければ、卜者こたへて「我易考下手なるを以つて、幸ひに長久して、這の處に永くすめり。斯畜生を飼ひおきて、易にふしぎをあらはさば、忽ち公廳に宣れて、廢業なるべきを」と云ひけり。最理なり。

蛇隱居

天明寬政の頃、東武青山、或御組屋敷のほとりに、武家の隱居ありけり。氏を武谷、俗稱を又三郎と云ひけり。這の人、希有の癖あり、常に虫を飡する事を好み、朝夕前栽のうちを掃除し、蛄螂、芋むし、はさみ虫、蜘蛛、蝶、蜥蜴、ひきがへる、都て何によらず、虫とだに看るときは、忽ち捉つてこれを飡ふ。小き虫は、羽と足と髭をぬきて、その儘飡す。蜘なども其のごとし。蛄螂は毛を燒てくひ、蟾蜍は腹を割きてはらわたを棄て、皮をはぎて醬油をつけ、燒て飡す。さればにや、此の家には虫といふもの一向になく、客次にも蠅一隻とぶ事なし。皆這の老人がくひ盡しけるなり。我が家の前栽はさらなり、兩

となると記せり。按るに、都て世の中の怪談奇事は、狐狸猫の三物の所爲にして、其の他なし、東國には狐多く、四國西國には狸おほし。狸人を誑惑に、をり〳〵人命を害し、亦よく火を放つ。狐人を誑惑に、其の命を破らず、火を放たず。狸は術に鈍く、狐は術長たり。猫狸は憎むべし、狐は惡むべからず。佛說に、吒枳尼天の狐あり、鎭座本紀に三狐の神を祭る事あり。狐は尊むに足れりとす。猫の事は角力夫小野川が傳にしるす。

狸の卜者

是は、いと〳〵近き寛政の頃なり。江戸銀座二丁目西側に、狸の卜者といふもの在りけり。名は何とか云ひけん、今忘れたり。這の者いさゝかは學文もありて、會て語るときは、十分おもしろき處あり。最一琦人にて、旦暮の行狀も、人とは大いに異なる處あり。常に狸を好んで多く家に飼ひおき、朝暮これを愛する事、世の婦女子などが猫を愛るに異ならず。牀室には狸の軸をかけ、壁には狸の繪をこゝかしこにはり著け、夏の浴衣に、狸のもやうを染め、冬は狸の裘を躬にまとひ、簷端易の招牌にも、狸をゑがけり。

と、寫著たり。うなばかは、上總の國の地名にて、女化が原とかく。大いに因ある地名なり。這の白無垢、いま猶その家に傳へもてり、好事の人は、尋ね行きて看るべし。數代栗山覺ざゑもんと呼びて狐の血統なり。這の事、公廳にも達して、其の頃ことに評判なりしとぞ。享保十八年の春の事なり。次の年信田の森、葛の葉狐の淨瑠璃をつくりて、操り戲場大當りなりしとぞ。

輯者曰く、這の物がたり、予が兄雪菘又當に是を看來りし人の詞の儘に記す。但し、かかる事はいくらもある事と看えて、是に同き事を予まさに見たる事あり。緈ながければ記さず。往古も猶是に似たる事あり。「三十代欽明天皇のおん時、美濃の國の人、一婦を得て妻とし、子を生ず。其の家に犬あり、時々婦を看てほゆ。一日婦を嚇んとす。婦俄に化して、野干と成りて走り去りぬ。其の子、多力にして善はしる」と、水鏡にのせたり。亦神社考に、「天文年中攝州垂井氏、大藏谷にて一人の美女を得て妻とし、子を生ず。其の妻鏡にむかひて粧を繕ふ。子背より看て、おどろき呼で曰く、鏡の中に狐ありと。妻則ち出でて狐となり、鳴いて去る。この子長壯て、よく謠を諷へり。垂井源左衞門是なり」とぞ。抱朴子および玄中記等に、百歲の狐化して美女

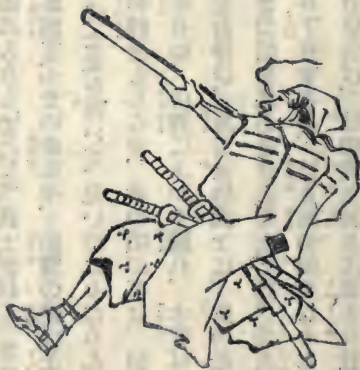
ざゑもん僕に分付け夕餉を按排して、女にすゝめ、近くよりて看るに、其の容貌うつくしく、萬般の談話するを聞くに、殊の外怜利なり。「下總の國の者なるが、幼き時父母にわかれ、親族もなきまゝに、這の國に伯母のあるをたづねて參りたれども、是もまた去方しれず。一向に便なき身にさふらふ」と、雨々と泣きけるにぞ、覺ざゑもん憐におもひ、「然る事ならば、且少時我が家に居て、縫針のわざなど勤め、悠々尋ねよ」と云ひければ、女憙び、次の日より這の家に居てつとめけるが、殊の外かしこく、何事もよく意著きて、働きけるにぞ、覺ざゑもん、天晴なる者におもひ、竟には閨の伽となしにけるが、頓て懐胎して、次の年一個の男子を産みたるにぞ、覺ざゑもん愈々愛みくらしける。這の子五歳になりけるとき、母親晝寐して在りけるを、這の子、「母さま尻尾が出ました」と搖起しければ、母親おどろき、立地一隻の白狐となりて己の室へはしり入り、竟に其の去方をしらず。覺ざゑもん、這の形勢を看ておどろき、家の裡のこる隈なく尋ねけれども知れず。先妻の白無垢を渠に與へおきけるが、其の白むくに、血をもて詩歌を書き著けおきたり。詩は今忘れたり、歌は、

みどり子が跡をたづねばうなばかが原になく〱ふすとこたへよ

澗中にわけ入りて、老人夫婦に面會しける。老人は、唯足利蜂起の始末など語るの外、別に談話なし。斯て、齎し來りし酒さかなを出して、老夫婦にも侑めければ、憘んで是を食す。是より後は、四方の人々云ひ傳へ、聞きつたへ、日毎這の處にいり來り、老夫婦にあひて談話し、くさぐ〵好味食事をあたへける。老夫婦、數百年木實ばかり食し居て、長壽なりしを、當時人間の美味をひたすら食しける程に、二十日許過ぎて、竟に死しけるとなり。

栗山覺左衞門

常陸の國、栗山といへる處に、栗山覺左ゑもんと云へる者あり。四代前の覺ざゑもん、萬般の藝にも拔けいでたる者なりしが、四十のとし、妻におくれ、隻身夫にてくらしけるに、次の年の春の頃、ある夕暮に一人の女來りて、「遠き國よりまゐりし者、親族の家を尋ねさふらへども知れず。天晩におよび難儀なり。萬望今宵ひと夜やどらせて給らんや」といふ。覺ざゑもん聞いて、「女一人といひ、天晩ては難儀なるべし。苦しからず、當宵は、我が家に泊られよ」と云ひければ、女は大いに憘びて、やがて一室へ通りける。覺

は何ものなれば、斯る幽栖の地に住居するや」と問ひければ、老人答へて、「おのれ們は亂たる世が憂さに、かゝる澗谷に隱れ栖むなり」といふ。武士が曰く、「今天下泰平にして、四民萬歳をうたふの時なるに、何をもつて亂れたりといふや。且いつの頃より這のところに住するぞ」と尋問れば、老人が曰く、「我も何時のころと云ふ事をしらず。唯兒島高德が熊山に楯こもりたる頃より、這の處に入りし」といふ。武士が曰く「夫は後醍醐帝、足利と合戰のときなり」といへば、老人點頭て、「その帝にや、伯耆の船の上へ遷幸ありし事などは、彷彿とおほえたり」といふ。武士是を聞いて、是いつはりならんと疑ひ、夫より千般の事を尋問に、近きころの事は何緈をもしらず、彼の頃の事は、何にまれ詳かに答ふるにぞ、漸々その僞言ならざるを悟りぬ。山裡にふかく隱れ、木實ばかりを食として在りける故に、仙術を得たるものとおほゆ。斯て彼の武士は、這の老人に倡引れて、奧ふかく分け入りつゝ、奇しく物凄き山間を見ありきしとぞ。此の老人巖頭をつたひ、蘿かづらにとり著きて、岩角をのほり下りする事、恰も猴の如くなりしと。抑這の處は、岡府の長臣、池田何がしの領地なりければ、彼の武士歸りて領主に此のよしを告したり。領主聞いて、はなはだ奇異の思をなし、次の日、彼の武士を路開として、這の

累々—積み重なれること

幽栖の—奥深き」

いたる。峨々たる高峰の挾間にして、其のほど一二三町、或は一町、亦は半町程のところもありて、廣狹さらに定らず。左右あるひは三十丈あまりの巖壁累々として屹立ち、まことに不雙の鐵石城なり。嶺上には、眞鍬、うき橋などいへる處あり。中にも天柱嶽といへるは、高き事三十五丈、嶺頭に、天柱の二字を彫り著けたり。岡山の書家竹本登々庵文化のはじめ國命によりこれを書す十七八丈も下より看に、文字あざやかに見えわたり、文字大いさ計りがたし。樹木森森うつ〳〵として、日光の影をうばふ。頗る幽栖の閑溪なり。をり〳〵山より水流れいでて、大いなる石を轉す。這のほとりの石、悉く詩歌を題したるは、四方の雅客のわざなるべし。這澗中ふかく入るときは、且空砲を二三挺打ちいれて、其の後進み入る事なり。然せざる時は、病を受くると云ひつたへたり。天明年中、這國の小官士一人、小獵にいでて、此の鄕谷の澗中にまよひ入り、只管奥深く行くところに、忽然として、白髮の老人夫婦にあへり。彼の武士おもへらく、是かならず猿の年經し、狒々といへるものなるべし。唯一討ちにと、鐵砲の筒先をさし向けけるとき、かの老夫婦兩手をあけて、「壯士よ、はやまり給ふな。我們は妖怪獸のたぐひには有ず」といふ。其の聲正しく人間にして、一向妖氣なし。かの武士是を聞きて大いに心を安んじ、近く進みより、「抑儞們

る。亦四郎疼堪へがたく、涙を流し、「おのれは剃り落して進らすることとこゝろえ、御誓住はいたし侍へども、斯様のなんぎに候はゞ御免し給はるべし。價金はのこらず返し進すべし」と云ひければ、彼のさぶらひ、大いに怒り、「剃りたる髭は死毛なり、誰か一圓金にも買ふものあらんや。武士に兩言なし、今になりて斷言を承引んや。儞と我とは奈何にもあれ、我主君へ辨解なし。今は儞何といふとも、節に是をぬきとるべし」と叱りけるにぞ、亦四郎怕れいり、「しからば詮方なし。左も右も做し給へ」とて居たりける。彼のひとつ〳〵再般鑷をとりあげ、亦四郎が面上にむかひ、髭一根をぬきとりては、彼の面上に植ゑ、また拔きてはうゑける事、上首の如し。亦四郎兩眼より泪を流し、堪へ居ける。當日一日には植ゑかねけるにぞ、次の日も亦來りて、斯のごとく做し、三日にして漸々に植ゑをはりけり。亦四郎是より後心ぬけして、獃子のごとくなり、欝々として暮しけるが、五六十日過ぎて、二三日病て死去す。寛政六寅年七十九歳なりし。

鄕谷老夫婦

備中の國加陽郡木谷村といへる處より、行く事わづか三四町にして、鄕谷といへる所に

冥加—神佛の加護

つくしき事をつたへ聞き、我君これを買ひもとめ度きよしを曰ふ。這の故に、わざ〳〵來りて、此の事を談ずるなり。倘苦しからずは、其の髭を賣りくれよ。價は望にまかすべし」といふ。亦四郎聞きて、「賤老數年、大事にかけて延し候ふ髭なれば、一向に賣る事を好まず。さりながら、止事なき御方の、御要に用ひ給はらん事、冥加の程もありがたくおぼえ候ふ。若這の髭をまゐらせなば、如何ばかりの酬謝をたまはらんや」と、問ひければ、彼のさぶらひ曰く、「三十金を贈るべし」といふ。亦四郎はつねに無欲の者なりしが、當下いかゞおもひけん、「彼の三十金にて髭を賣りさむらはん」と答へけるにぞ、侍は憘びて、「さらば四五日を經て髭請取に來るべし。且、證首に半金をわたすべし」とて、十五兩をおきてかへりけり。斯て四五日を過しける處に、かの侍また二三人を倡引來り、亦四郎に、曩の日の殘り十五金を與へければ、亦四郎よろこびで、是を請けをさめ、然ば髭をさし上ぐべしとて、剃刀をとり出し、剃り落さんと做けるを、かの侍大いにおどろき、急におし止め、「剃りおとしたる髭何にかせん。是は一筋づつ抜きとるなり」といひて、彼の列來りし人々、包袱の裡より、ひとつの翁の彫面をとりいだし、鑷もて亦四郎が髭を一すぢ抜きてはかの木面にうゑ、亦一根ぬきてはめんに植るにぞ有りけ

置す。則ち紅顔白髪にて肩ぬぎて扇をもち、木履はきたる姿、あたかも生るが如くいろどりたり。先年吹上寺の老和尚、夢助傳といへる漢文をつくれり。夫には猶くはしかるべし。予が聞きしは喇嘛僧のものがたり、いさゝか齟齬もありぬべし。

齟齬―くひちがひてあたらざる事

髭の亦四郎

安永天明のころ、江戸青山久保町に、髭の亦四郎と云ふもの在りけり。夫婦とも白髪にて、一對の雪のかしらなり。別て、亦四郎ば猶清く、白糸をもて頭を編めるがごとく、髭の長さ一尺一二寸あり。妻にはいさゝか黒毛もまじりたれども、亦四郎は、鬢髭とも黒き毛とては一根も有る事なし。「蜀の雲長再來して、髭をくらべんといふとも、是には怎麽まさるべき」と、衆人はなはだ賞しけり。元來達者老爺にて、生涯病といふ事をしらず。家は鹽、味噌、薪のたぐひ、木履、草履、菰、むしろ、紙、筆、らふそく、元ゆひ、あぶら、其の外何によらず商ひける。然ば家號を萬屋と云ひけれども、誰かは夫とよぶものなく、唯髭亦とのみ呼びなしける。一時、四十餘りの士下隷二人ひきつれ入り來たり、亦四郎に對面し、「それがしは市谷邊、何がし侯藩中の者なるが、不計貴老の髭のう

蜀の雲長―劉備の臣關羽

曲亭翁―瀧澤馬琴

禪定門―佛道を修する人の義、男子の戒名の下に附く

を見返り醫者と綽名す。もつとも醫療は妙を得たりと或人云ひけり。住所もしらず、唯よく人の看し處なりと、曲亭翁の書いておこされたる儘爰にしるす。

瀧夢輔

南紀若山吹上（吹上のはまといへる名所なり）と云へる處に、天年山吹上寺といへる禪寺あり。寶暦、明和の頃、這の寺に夢助といへる老人ありし。はじめは武家にて、瀧茂左衞門といへる人の弟同名茂助と云ひし者なり。中年より當寺龍瑞和尙の弟子になりて、學問す。然して無二の交となり、竟に這の寺に來りて住す。生質女色を嫌ひ、たゞ佛學をこのむの外他事なし。老にいたるまで、這の寺に在りて、よく和尙につかへ、世の中を夢とさとりて夢助とあらたむ。常に市街をありくに、夏冬ともに片肌ぬぎて、手に扇をもち、晴雨にかゝはらず、木履をはきてありきしとなり。顏のいろ抹朱のごとく、よく閻王の面に似たり。毛髮みな雪の如く、銀を植ゑたるに等し。初めて路上にあふ人は是をかへり看ざる物あらず。天明元丑とし十月十日、六十五歲にて死す。則ち吹上寺に葬す。一箇の石碑あり、眞性了空禪定門としるしたり。また同じ境内に夢助が木像を彫みて、地藏堂のかたはらに安

朝に生れて夕に死し、夕に死して亦朝に生る、那ぞいくつといふ齢をしらんや」といへり。其の容貌を見れば、何れ百歳は越えつらんと思ふ程なりしと、浪華中の島、加新といへる老人の物がたりなり。岡の義齋まつりも、近き頃は絶えてなし。如何なる者の所爲にや、義齋の社も壞ちてすて、今は其の跡もなしとぞ。殘り多き事どもなり。

見返り醫者

天明のころ、江戸横山町邊、または本町、あるは日本橋へんにて、をり〳〵人の止りて看つる可笑き醫師ありし。其のころ齡のほど六旬ばかり、法體にして髭のびたり。懷裡はなはだ大きくなし、奇く曲たる杖をつき、僕をも列れず、唯一人病家を候視ふにやありけん、日毎かの邊を往來しけるが、一町ほど歩行みては杖をつき立て、兩手を杖の頭にのせ、後をきつと見返りて、撥とにらみ、また一町ほど行きては杖を路上につきたて、兩手を杖にのせて、後を看かへり、はたとにらむ。亦一町ほど行きて初の如く、身後を見かへり白眼みける。何町行きても斯のごとく、寂き橫町などに入りて、人の看ざる時は、然あらじと思ふに、誰あらずとも、右の如くひとり見返り白眼みつゝ行きける。世人是

番匠―大工

りけるが、いみじき薬など多かりけるにぞ、若干の黄金を得たり。近隣また黄金を持ち行きて、義齋に與へければ、「我棄てし家の金、なんぞ我ものならんや」と云ひて、更に把らず。近隣の人大いに困じ、是かれと商議し、同村のうちに、太貧き農夫ありて、田地を賣らんと爲るといへども、買人なく、難儀におよぶ者あり。然ば這の田地を買ひ取るべしとて、この金にて買請けけるが、半作わけといふ極めにて、彼の田地を人に作らせける。次の年の秋豐作にて、かの半作の米金にかへて、また刀禰山の義齋がかたへ持ち行きけるが、義齋一向にこれを受けず。詮方なく持かへり、さま〴〵と商量し、酒さかな多く買ひもとめ、村裡の老若男女みな打ちつどひて、酒をのみ歌をうたひ、三日ばかり舞ひさわぎて、やう〳〵金をつかひ果しぬ。次の年、また半作の金のこりぬ。村の人人また打ちつどひ、商議して云ふやう、「義齋は、寔に神の如き老人なり。今這の作徳の黄金にて、一箇の社を造立し、義齋を神にまつるべし」とて、夫より番匠にあつらへて、村の一邊にひとつの小社を建立し、義齋明神と祭りけり。亦つぎの年の作徳にて、義齋祭と云ふ叓をはじめけるが、其の後絶えずまつりけり。斯て義齋は、刀禰山にも在らずして、去方しらずなりにけり。這の義齋、極老人にて、其の齢をとふ人あれば、「我

教へ給へ。いかにとも尊命にしたがひ奉上ん」と云ひければ、義齋曰く「さらば我が家にいさゝかの負債あり、米家藥店等なり。是等の負債をのこらず儞が方より拂ふべし」とありけるにぞ、六兵衞もんも詮方なく、米家藥店七八軒はせ廻り、負債のこらず濟しける。彼是五六十金なり。六兵衞もん再般義齋が家にいたり、斯と語りければ、義齋憘んで曰く、「儞命助りたるのみならず、亦二十年餘りの壽をましたり。其の謂は、かの米家藥店の負債は、我數十家の貧人にほどこしたる米藥の餘借なり。儞いま是を償ふ。この餘德なんぢが身に報ゆべきなり」と云ひけるにぞ、六兵衞もん是を聞いて、大いに懽び皈りけり。一日また前の主君より士二人來り、再般めし返へさせ給ふべきよしを演べければ、義齋是を憂事におもひ、使士を一室に待せおき、那里ともなく逃げ去りけり。使士夕暮まで待ちけれども、皈らざりければ、空しく棄舍へ皈りけり。義齋が近隣のひとぐ大いに驚き、這かしこ尋ねめぐり、漸く刀禰山村といへる處の、或家にかくれ居たるを、看著いだしける。然ども、再般岡の家にかへらず。「然れば家財雜具などいかゞ做んや」と問へば、義齋こたへて「我家を棄てて逃出でたれば、我家にあらず。奈何とも做せよ」といふ。詮方なくて、近隣より集りて、屋および家財雜具等、のこりなく人に賣

本復―全快

六ゑもん大病に犯され、さま〴〵醫療を盡すといへども、効驗なく、四五輩の名醫みな斷りて藥をあたへず。やがて義齋が方へ、央み來りけるにぞ、義齋神速に往きて、是を窺ひ、則ち謂て曰く、「這の病實にむづかし。四五輩の名醫ことわりたれば、十死極りて一生なし。然ながら、我若この病を治したらば、儞何とかするや」六ゑもん苦しき息の下よりも、「倘本復する事あらば、厚く大恩を報じたてまつらん」義齋やがて兩服の藥を與へて皈りぬ。六ゑもん這の藥を服したるに、臭氣はなはだしくて、堪へがたし。然ども忍びて、是を服しけるに、次の日大いに黑色の兩便下り、立地こゝろすが〳〵しく成りぬ。然して後猶數十ふくの藥を用ひ、二十日ばかりにして全快しけり。六ゑもん只管憘び、一日金一圓を下僕にもたせて、酬謝として、義齋が方へおくりけり。義齋是を看て大いに叱て曰く、「六ゑもんが一命圓金ひとつにて買るゝや、偖も安き命なり。然樣の易き命あらば我們も多く買ひおきたし。疾皈りて這の如く告げよ」とて酬謝はその儘に返しけり。六ゑもん是を聞きて大いに困じ、「是もつとも理なり。奈何してよかりなん」と、一向に商議とゝのはず。詮方なくては六ゑもん自親ゆきて、義齋に見え、「こたび小僕が命助りさふらふは全く先生の賜ものなり。奈何して此の報いを致すべくや 萬望は是を

茶毘舍—火葬場
焔王—閻魔王

氣と披露し出仕せず、四五日を經て、病死のよし下僕を以つて申し達しさせければ、頓て看住の典吏まゐるべしとの事なり。義齋おどろき、大いに困じ、急にひとつの棺をととのへ、其の裡に入つて、うづくまりゐたりける。程なく看住の典吏來りけれども、最早棺に收めて正しおきたりければ、深くも査勘ずかへりけり。斯ても葬式をとり行はでは惡るべしと、俄に墓所へ人をはせて、形許葬禮をなさんとするに、叵耐送りの人多く來りて、混雜しけり。斯て棺を茶毘舍にいれて、蓋をひらきければ、裡より義齋這ひいでて、「我いまだ命數つきず、焔王のゆるしを受けて、當下よみがへりたり」と云ひて、人人を突きのけ、火房を出でて、其のまゝ去方を知らず。其の後、麻田より二三里許ある岡といへる處に、這の義齋を歸依の者ありて、亦爰に家を造りて住はせける。前の主君是を知り給へども、御咎めもなし。岡の町のかたはら新免領として他領の地に家をつくりて住す爰に住む事、また多年なり。貧人の病を治し、米薪をおくりて、困窮の人を助くる事、前の時にも猶かはらず。然れども、嚮には領主より賜る俸祿あり、こたびは一個の活業なるに、人に施すを以つて常と爲しけるにぞ、竟には我が家貧しくなりて、諸處に負債ぞ多かりける。這の近きほとりに、奥新田といへる處あり。爰に六右衞門といへる農夫あり、家大いに富めり。一時この

けるが、家にかへる路のほとりに、一人の老乞兒、病にくるしみて叫き居たり。義齋これを看て哀におもひ、懐裡より藥をとり出し、乞兒にあたへ、「今日寒氣はなはだ強し。儞が破衣にては堪へがたかるべし。是を著よ」とて、上に著たりし衣服ひとへ脱ぎて乞兒に著せ、「翌また見まふべし。大事にかけよ」と云ひすてて、家にかへりぬ。次の朝巳のときばかりに、義齋御殿を候視んとて、這のところを通りけるに、二三人の下侍かの乞兒をとらへて、太く打擲し居たり。「いかなる譯ぞ」と問ふに、下侍いはく、「這の乞兒、御府衣をぬすみ著したるゆゑに、打殺し棄つるなり」と喚きける。義齋おどろき、「是は昨日我與へしところの御府衣なり。きのふ寒さ餘りに強く、下衣をぬぐが懶さに、思はず上衣をあたへしは、十分愚老があやまちなり。管ず他が偸みしにはあらず。且さらば我衣と交易べし」とて、義齋路上にて、あか裸になり、我衣服をぬぎて乞兒に著せ、今まで乞兒が著てありし御府衣を、その儘我躬にまとひ、帶むすび羽織をうち著、其のまま正殿へ出でにけり。下侍ども是を看て、唯忙然として居たりしとぞ。元來義齋かゝる行狀の老人なれば、上に仕ふる事を懶くおもひ、時にふれては、おん辭去を願ひけれども、領主をしみて免し給はず。義齋は、何とぞして這の處をのがれ去るべしと思ひ、一時病

一處不住—一箇所に住所を定めず

御府衣—賞賜の爲に用意しある衣服

百家琦行傳 三之卷

義齋明神

明和安永の頃、攝津の國豐島郡麻田といへる處に、(今氏を忘れたり)義齋といへる老醫ありけり。元加賀の國の産にして、久しく京師に在りて、醫術を學び、一處不住にして、ひたすら遍歷したりしが、竟に老年におよびて、何がし侯より俸祿を賜り、麻田にうつりて住しけり。義齋もつぱら仁心ふかく、遠きとなく近きとなく、貧困の者の家に病人あれば、忽ち行きて動靜をうかゞひ、良藥をほどこして是を救ひ、治するにおよんで、さらに酬謝をうけず。病後極貧のものには、我家より米薪などおくりて、是を助く。病みて家産をうしなふ者には、本錢を與へて活業をおこさしむ。麻田近鄕二三里が間の貧者は、義齋が恩を蒙らざるは希なりけり。一日領主いさゝか風氣におはしまして、義齋を宣し給ひけるが、義齋が衣服の餘りに垢著きたるを看給ひ、「渠に衣服をとらせよ」と曰ひけるにぞ、近從の侍、やがて御府衣ひとかさねもて出でて、義齋に著せたり。義齋懽びて退き

百家琦行傳三之巻　目錄

ふぞ」と問ひしに、侍衆答へて「われ〳〵が御主人、此のたび御男子出生まし〳〵たるが、若殿の御手のひらに、行人七兵衛と青痕のごとくの文字あり。是をおとすには、其のものの墓所の土をもて洗ふときは、立地に消ゆると聞く。這の故に、きのふけふ八方に配手して、找尋たり。倖僥にいま實處を聞きぬよろこび、這の上に有るべからず」とて、御館はまうされず、皈れしとぞ。這のものがたり、最心得がたき事なれども、或やん事なき御方の秘藏の書中にて見およびたる儘、是にしるす。

菩提所――先祖代々の寺
尋れらるゝ――末のるは
衍

づか十日に過ぎず。常に垢汚たる衣服をまとひ、美食を好まず。舟をのりて錢を得ば、人の家に預けおき、滿ちて餘分となるときは、忽ちまた羽黑山へ參詣す。七兵衞常に病ある人を看るときは、是に祈禱をほどこしけるが、忽ち平愈す。また小兒の五疳驚風などの咒しける。其の効驗きびしく有りて、遠近の人々かの船のうちへ尋ね來り、七兵衞に祈禱を央み、神符など貰ひぬる人おほし。然ば行人七兵衞とは異名しけり。這の老爺つねに人に語けるは、「湯殿山へ一たび參詣したる者は、鎗一條の主に生るといひ傳へたり。賤老湯どの山、羽黑山へ參詣せし事、壯年より今年まで九十度におよびぬ。極めて來世は一國の城主にも生るべく思なり」と云ひけるにぞ、是を聞く人々大いに笑ひけるとなり。八十二歲にて終に船中に死す。近邊及び同業の人々集り、是をとり收めて、他が菩提所、淺草寺町、金藏院といへるに葬りけり。然して後三十日許ありて、那里よりか三四人の侍來り、「這のほとりに行人七兵衞といふ者ありや」と尋ねらるゝ。舟舍のひと〴〵答へて、「夫は此のところに住みし者にて候へども、嚮つころ死去りさふらふ」と云ひければ、「然らばそれが寺はいづこぞ」と問はれけるにぞ、淺草金藏院を敎へける。侍しゆ大いに愷び、いそぎ淺草へ趣かれけり。當時舟舍のあるじ、かの侍に、「何幹にて、かくたづね給

にして、圓光あり、鏡の如し。其の中に佛あり。然も其の人、手を以つて頭巾を裹むときは、光中の佛もまた頭巾をつゝむ。是を以て、人の影の映れるを知る」と。この故事を讀みて、富士三尊も同じ物ならんと思ひて、記せしものと覺ゆ。人の影の映れるならば、何ぞ三尊に限らんや。十人拜せば十尊現れ、五人拜せば五尊の佛を看るべき理なり。是は、人の影のうつるにあらず、月の當に地下を離れんとする時、地球の影の、映るなるべし。月は日の餘光を受けて明をなす故に、地影うつる事あるべし。地球は圓なりといへども、平圓にはあらず。凸凹として圓なりと知るべし。然して、日には三尊看えざりき。

○行人七兵衛

延寶の頃、江戸日本橋四日市に、七兵衛といふ老爺ありけり。爰かしこの船舍に雇はれ雜舟のる事を業としけり。這の者一個の異物にて、其の躬家なく、つねに舟の裡に住し、朝夕の食事大かたは諸方の舟舍にてもらひ、或は船中にて飯ごしらへする事も有りけり。出羽の國湯殿山羽黑山を信じて、毎年三四度づつ參詣す。もつとも利足にして、往來わ

六根清淨―眼、耳、鼻、舌、身、意の外界に對する執著全くなくなること

看るく立地空間にのぼる事いとく早し。空中に至りても、坡下にて看るよりは、月の影大きく見え、空も常よりは近く見え、月の廻り五色に看え、晴天蒼々として、風冷やかに、雞犬聲なく、水音なく、眼に遮る者とては、月と星と巖角のみ。此の時、六根清淨にして、色欲の心を離れ、實に天上に生じたる若く覺ゆるなり。然ば凡俗の心にては、這處をしも、富士の極樂とは思ふめりと、些は思ひ中りしなり。亦天曉になりて、日輪の昇るを拜す。是亦いとく大きく見え、唯紅を以ていろどりたる如く、美しくて、怕明からず、其のめぐり、五色に看えて、何となく尊く思えたりき。然れども、三尊の事は議するに足ず、佛の容にも有らざれば、秋齋子のいへる人の影のうつるにもあらず。桂氏の著はせる書の中に、「富士山にのぼりて、日の出を拜するに、日の中に三尊の如きもの看えけるにぞ、人々有難や、尊や、と伏しをがむ。一人立て點頭ば、三尊もうなづく、手を擧げて招けば、三尊もまねく。是我が影の映るなり」と記せり。是大いなる誣言なり。小生手を擧げて招きたれども、三尊まねかず、點頭たれども三尊うなづかず。奈何なれば秋齋翁斯る事を記しつるぞと思ふに、「理學類編に曰く、「人峨眉山に到る、五更の初めに看れば白氣を布く、旣

来迎三尊―命終に臨み、彌陀、觀音、勢至がその前に來現して淨土に迎へ取るといふ事

は、十萬億土の末にありて、凡人のゆきて拜む事能はず。我們が信ずる富士山上の極樂は、一年に一度づつ拜まるゝをもて、只管富士へ參登つかまつりぬ。但躬のおこなひあしき悪人の登山するときは、忽ち山あれ震動して、時によりては、人を摑みて投げおとし、去方の知れざるも亦多し。是則ち、富士の地獄なり。されば、地獄も極樂も這の山に有りて、外になし。是皆目前見るところにして、誣ふべからず。此のゆゑに、吾們年年登山いたすなり」と答へけるとぞ。

輯者曰く、「不二同行といへる者ありて、何かえしらぬ唱言などして、聞くにはなはだ片腹いたきものなり。渠們つねに富士來迎三尊の事を辨ず。小生嚮の年、富士へ登山して、八がふ目の室にいりて宿りしに、初更すぎとも思きころ、剛力（不二へ登山するとき麓より荷をになひ案内してのぼる雇夫を剛力といふなり）が云ふやう、「當下御來迎なり。拜み給へ」と云ふによりて、室の裡よりはひ出でて、巖角に跪下りて居るに、忽ち暗々たる地下より、其の廻り二間四方も有りつらんと思ゆる月輪の現れ昇るを看る。もし三尊の容もやと、眼をとどめて是を看るに、月の當に些しく見えかゝらんとする時、何にかあらん、黑きもの三箇ほど立雙びて、見ゆるなり。是をしも彼人々が三尊如來とは云ふならめと、

み云ひけり。時代辰巳屋と大やうおなじ。

富士行者藤四郎

駒込高田の町に藤四郎と云ひし者ありて、殊に富士山を信心し、七十五度登山したりしとぞ。また青山若松町といへる處に、伊勢屋彌市と云ひしもの、是また富士信仰にて、寶暦より寛政の始まで、八十三度登山したりと。富士の麓下淺間の社に、彌市が建立の鐵佛あり。文化のはじめ、九十三にて終る。四谷龍昇寺といへるに葬す。高田の藤四郎は、彌市に增りて、躬の行も人とは大いに異なりしとぞ。或人「いかなれば、斯富士山にのみ、數度のぼり給ふぞ」と問ひければ、藤四郎答へて曰く、「世人佛法を信じて、極樂に往かん事を願ふもの多し。然れども、誰か一人極樂へゆきて、看て來る者なし。死しての向の事何ぞたのみならんや。富士は三國にたゞ一箇の山にして、登れば最天にちかく、是則ち、天上に生を得たる心地するなり。また富士の八がふ目にありて、夜月の來迎を拜する時は、月中に三尊の如來現れ給ひ、五色の雲たなびき、其の尊き事、譬へんにものあらず。寔に極樂といふは、爰より外にはあらじと思ひ侍ふ。釋尊の說き給ひし極らく

として暮しける。娘一人あり、これに聟をえらぶに、容皃は醜しとも苦しからず、舞をどりの上手を好むなりとて、尋ねたりしとぞ。文政四年十月二十八日、八十九歳にて死去す。近邊の若者ども集り、葬禮の轎を、神輿のごとくこしらへ、三面に鏡をかけ、樒の葉を榊のごとくつくらひ、唐人笛ふき、太鼓をならし、大勢をどりまひて、彼の轎をかづき、小石川三百坂、慈照院といへる寺は、家より太近ければ、外道より廻りて、祭祀のはやしにて、寺へおくりけるとなり。外人もし斯樣の事あらば、公廳より大いに御咎も有るべく、寺にもまた、是を受くべからず。然るを、故障なく葬式とゝのひしは、寔に愛たき事なりき。今なほ慈照院境内に、八旬有餘の老人、娘すがたにて、黒きふり袖を著て、舞のかたちを石に彫りたる墓じるし殘れり。最をかしき老爺なりし。

車海老の老爺

本銀町三町目、魚屋の親父、これまた祭禮好にて、いづこの祭禮にても、這のおやぢの出でざる事なし。大拍子といへる太鼓を敲ちてありく。其のさま、黒き木綿に、車海老を赤く染めたる衣服を著る。いつにても換る事なし。是によりて、車海老の老爺との

家夫婦も臥房にいり、その躬も二階にのぼりて臥し、少時ありて再び起きいでて、ひた舞をどりて樂しみけり。半夜のころ、二階にて何やらん足音頻りに聞えけるにぞ、主人大いにおどろき、頓て二階へのぼり看れば、彼の丁稚ひたもの踊りて居たりけり。主人大いに叱れば、漸々止むる。夏の頃ながき日に、餘の人は晝寐をするに、這の丁稚（幼名を忘たり）のみは晝寐もせず、帑庫の裡、或は納屋などにいりて、汗を流して踊りけり。とかくする間、その親死しければ、竟に我が家に皈りけり。然してより後は、ます〳〵踊り、壯年に至りては、舞の手も上達し、かしこ爰の神社の祭祀にやとはれて、出でて踊りけるが、殊に評判よきにつきて、また祭禮好の癖をまし、諸方のまつりに出でけるに、山王神田はいふもさらなり、赤城明神、氷川、熊野、深川八幡、牛の御前、いづこにもあれ祭祀とだに有るときは、往きてをどらぬ處もなし。其の踊るすがたは、娘形のかづらを著て、黒木綿のふり袖に、裾もやうを染めさせ、小き日傘を手にもち、薩摩芋など喰ひながら踊りけり。六十過ぎてよりは、馬に乗り、やはり娘の裝立にて、皺顔におしろいをぬり、最もをかしくをどりけるにぞ、偖は辰巳屋の老爺よと、人みな競ひて是を見る。寶暦年中より文政のはじめまで、六十年あまり、一日も病なく、諸社の祭祀をたのしみ

づこの人かは知らねども、二十餘年このかた、いづれの角觝場にても、足下の顏を看ざる事、一日もなし。躬のまはりの質素なるに合しては、鬪錢なども快よく拂るゝ。我今まで、儞のごとき角力好の人を見ず。抑いづこに住まるゝ人ぞ」と問ひければ、良助こたへて「賤夫は、三田萬字侯の御やしきに住みぬる下隷、良助とまうす者なり」と云ひければ、頭取渠が身の上を聞きて、いよ〳〵おどろき且感じ、個々とかたらひ合せ、一寔に奇しき人なれば、這の后は、かならず鬪錢なしに、看物に來るべし」と。是よりして、那里の角觝場にても、此の良助が鬪錢をばとらざりしとぞ。御藩中に、由井何がしといふ人、殊に良助を贔屓にせられ、是彼と執りまかなひ、竟に侍分にとり立てられしとぞ。荒磯といへる角觝夫、予が友人の許にて物がたりし儘爰にしるす。

辰巳屋の老爺

江戸小石川傳通院前表町角に辰巳屋總兵衛といふ者有りけり。是また一個の琦人にて、いときなき頃より、踊をこのみけるが、同町疊や與兵もんといへる者の方へ、丁稚給事にゆき、晝の程は主家の要につかはれて、何事をも做ず、夜にいりて、初更すぐる頃、主

使など央まるゝ事あれば、早速にはしり行くにぞ、衆人ひたすら這の良助を愛しけり。子舎のかた隅に小き架をかまへおき、其の上に、伊勢兩皇太神宮、また國君の尊名をしるしおぼえて、旦暮に是を拜し、燈明をてらし、鏡餅など備へけるにぞ、外々の下隷等も、此事なく是にそまりて、拜するも有りしとぞ。此の良助つねに角觝をこのむ癖あり。春秋の大角觝はさらなり、諸處の花角觝、また諸社の祭禮ずまふにても、角力とだに聞くときは、往きて看ざる處なし。平生に部屋の事ども、一人にて働きおきし換には、角觝だに有るときは、十日の角觝、十日ながら闕く事なく、看物に行きけるを、下隷なかまも、角觝の間は、良助がなすべき事を、殘なくなかまにて勤めおく事なり。都て二十餘年があひだ、那里の角觝にても、殘らず眼的したりける。最記憶よく、いく年觀いづこの角力、何の月の幾日は、誰々かやうの勝ありし、また何の日のすまひには、斯々の事ありしなど、仔細おぼえ居て、人に語る。藩中がたにも、角力癖の人々は、をり〳〵這の良助をよびて、昔の角觝の話をせさせて聞くに、當眼頭に見るごとく、おもしろく談話にぞ、いよ〳〵大に愛られけり。一時本所回向院の秋角觝に、良助、初日より闕く事なく看物にゆきけるに、一日木戸口にて、角力の頭取何がし、良助を呼びとゞめ、「足下はい

天照大神宮

横綱の護勝—白麻にてなへる縄に四手を垂れたるもの、角觝大關の抜群なるものに授けて腰に纏はしむ

目。安永酉年、本朝角觝の總行司、吉田追風のお家より、土俵入横綱の護勝をゆるさる。天明元辛丑年二月大阪難波新地の角觝、五人がかり、初日は並松、巻の戸、岩が谷、柏木、初瀬川、この五人に、這方は、谷風一人なり。毎日、斯の如く、十日に五十人の相手にて、一番も負なし。寔に、奇代の看物なりしとぞ。寛政七乙卯年正月九日、四十六歳にて死去す。法名釋性谷響了風仙府、江戸高輪東漸寺の碑銘に委しければ、爰に略す。

御師匠良助

東武三田某侯御やしき内、下隷子舎に、良助といふ者ありけり。匹夫にまれなる博識にて、手跡もまた能書けり。下隷なかまにて何ぞ知れざる緈あるときは、這の良助にとふに、一事として答へずといふ事なし。這のゆゑ綽號して、御師匠と呼びけり。此のもの殊に異物にて、朝は他より向へ起き、夜は人より遅く寐ね、部屋の裡の事何くれと、當身一人にて働き、そこら掃除し、水うち淸らかになし、竈下の飯製なども、一人にて焚きしつらへ、諸方の使なども、皆一人にて領取りてかけまはり、人の做すべき事を、のこらず勤むる。然して、人より些少も酬謝をうくるにあらず。藩中がたより、市中へ

われ—わけ
か

に口なし人を以つて云しむると、這の事誰いふとなくとり沙汰して、世間にかくれなかりけるにぞ、いつしか止事なき御許にも聞え、やがて宣れて御糺の上、宣かゝへ給ふべきよし有りければ、與三ゑもん驚き、「賤老むつかしき事を知り侍はず。願くは御免し下さるべし」といふ。「否々別に六借事なし。儞が心のまゝに何なりとも勤むべし」とありて竟に、小石川邊の御官第へ御抱になりにけり。與三ゑもん元來氏素性もしれぬ者なりければ、住居したる町の名を氏とし、三組町與三ゑもんとて、今猶その子孫殘りけるとぞ。

谷風梶之助

谷風は生國奥刕宮城野霞目村の農家の子なり。寛保三庚午年八月八日に産る。幼名與四郎と呼びけり。幼稚の時より角觝をこのみ、十九歳にて、初めて秀の山と號り、後伊達が關森ゑもんと呼びけり。八年の間、三都中にて組合二百二十番、這の中にて、十一番負あり。外に頭取預り、或は、われ勝負なし等、廿七番あり。勝角觝百八十三番とぞ聞えたる。安永五年二十七歳、谷風梶之助と改名す。背の高さ六尺、身の重さ、四十三貫

ず。詮方なくて家に皈り、夫より斯る病となり、命令をも計りがたく候ふ。然るに、いま這の金を拾ひて返し給はる事、寔にこれ神の導合せ給ふなるべし。且夫に見せて悦ばせ侍はん」と、與三ゑもんを倡引ひて夫の病床にいたり、枕頭に顔さしよせ、這の事をかたり、彼金のつゝみを看せければ、神主是を聞きて、わづかに眼をひらき、妻に介けられて、やう／＼に起返へり、困苦なかに與三ゑもんを三拜し、彼の包袱を手にとりておしいただき、「ハア有難し」と云ひたる儘、つひに空しくなりにけり。妻も下僕も大いに忙慌、かつなげき、さま／＼藥を用ひけれども効なし。近隣の人荘官們集りきたり、其一日をこえて、竟に葬禮を執行けり。與三衛門は歸りもやらず、四五日這の家に逗留し、彼是はしり働きしは、由縁の人のごとくなり。一日荘官何がし與三ゑもんに向ひて、云ふやう「寔に足下はこの家の恩人にて、妻子もなしと聞およびぬ。萬望は今より這の家にとまゞり、神主とならせ給んや」と云ひければ、與三ゑもん驚きて、「我かやうの六借き役はでき侍はず」と、當座より直に江戸へ逃げ返りける。湯島三組町には、與三ゑもん這四五日家に歸ずといへども、かゝる事平生の事なりければ、近隣の人何と怪しむ者もなし。與三ゑもん歸りても、這の縡をかたらざりければ、誰知もののもなかりしに、寔に天

行き、かの神主を訪ね、這の金返し與へんにはと、夫より終夜陸地をはしり、夜半行徳のわたしを渡り、是彼の家をうちおこして、かの八幡宮（何の八幡とか云ひしも忘れたり小生幼年のとき聞たる事にて殊の外遺忘多し）の社をとひ聞き、神主の家に尋ねいたり、門うち敲きければ、裡より一人の下僕門をひらき、て「誰」と問ふ。與三爲もん神主に見えたきよしをいへば、下僕こたへて、「我主人ひさしく大病に犯され、命旦夕に迫れり。逢ひ給ふとも言語さらに分解つべからず」といふ。與三爲もん「然ば内室に見え侍はん」といふ。是より下僕與三爲もんを倡引て、裡にいりかくと告ぐる。神主が妻いでて與三爲もんに對面す。與三爲もん、かの包袱を把いだして、ありし事ども仔細かたり、神主が妻に返し與へければ、妻は憘びおしいただき、涙を流して稟すやう、「這の金ゆゑに夫が當今の大病なり。元この八幡の社は、氏子もなく貧地にて、一二三十年來大破に及び、再建すべき方便もなかりしを、當の夫來りてより以來、近郷または江戸中を跑せあるき、辛じていさゝかの講人をとり立て、五六年があひだ千辛萬苦して、漸々百金に滿ちさふらふ。這の五十日あまり嚮の日、江戸の講元の家にて、この金を請けとり、皈りに過ちて不計川の中にとり落しぬ。夜の船なれば知れがたく、次の日より、許多の人夫をやとひ、三日が間たづね侍へども、竟に知れ

「綷馴ぬ身といひ、釣舟にて、二十里の海上を恙なく流れ來りしは、いと〳〵危き事なりし」と戰慄してぞ怕れにける。與三ゑもん舟の裡より釣棹をとりいだし、一邊の岩の頭に尻うちかけて、亦釣をして樂みけり。當日は這にてくらし、次の日も猶釣たれて遊びくらし。左右して。三日を過し、今は嚢裡むなしくなり、初めておどろき、漸々江戸へ渡海の船を看つけて、くれ〴〵と央み、便舟し、かの小舟は後にもやひ、辛うじて江戸に歸りけり。亦一時深川邊に行き、釣して遊び暮し、夕暮に及び、只有材木の間をのぞき見れば、何にかあらん赤きもの見えたり。時節汐すくなければ、與三ゑもん何心なく手を指しいれて、扯りいだし看れば、一箇の包袱なり。ひさしく水底に埋れたりと見えて、十分汚れたり。其のつゝみを披き見るに、中に一箇の財嚢あり。財嚢の裡に、こがね百兩あり、外に簿秩一さつあり。久しく水中に沈みありし故、太甚しくなりて、文字一向に分たずといへども、僅にその裏に行徳何の八幡宮神主某神主の名今忘たりと記したるを看る。簿秩の中には、江戸近郷さま〴〵の人々の姓名を記したるは、當に是講金など扯りあつめたる物なるべし。與三ゑもん思ふやう、這の金まさしく、行德の八幡宮の神主が落したるに疑ひなし。斯高金を失ひなば、極て難義なるべし。如じ今より彼處にはしり

三組町與三右衞門

湯島三組町といへる處に、與三ゑもんと云ふ者ありし。常に釣する事を好み、一日職を（木屋を作りしとも亦は附木をけづりたりともいふ）勤めて、いさゝかの錢を得れば、夫にて、飯をたき、食具につめ、腰に結びて出で、そのあらん限りは、日毎釣して遊びけり。一日職を做ば、三日を釣し、三日職を勤むれば、十日を釣して遊びけり。性魯鈍に似て無欲なり。一日舟にて釣せんとおもひ、深川の知音の舟舍にて、つり舟一艘かり、自艪をとりて漕ぎいだし、沖にて釣したのしみけるが、夕暮にいたりて、立地一陣の暴風おこり、雨は篠をつくが如く、波は大山の崩るゝ若く、與三ゑもんが釣ふねも、今や海底に沈みなんと、一向に生けるこゝちもなく、唯念佛して、船端にとりつき居たり。多時ありて風雨しづまりけれども、空は雲おほひ、暗夜なれば東西分たず、いづこへ舟をよすべき的なく、唯ふねの淦を汲みいだし、流に任せて居たりける。天曉ちかくなりて空晴れ、とかくするうち、一箇の湊に著きたり。いそぎ登りて、「那里ぞ」と問へば、上總の國木更津といへる處なり。這の土地は、江戸より上總へ渡海する舟著の地なり。人々與三ゑもんを看ておどろき、

裏住六十一歳のとき、新吉原大文字屋の樓上にて薙髪す。文樓七十人餘りの遊女に、一剌刀づつそらせて、落髪す。裏住が事につきては、百般の話あれども、大かたにして略す。

にもかきて給はれ」とて、個々扇をもとめて、多くかよせて持て去きしとぞ。

董堂敬義

敬義字は伯直、別號小笠、本町二丁目中井清助といへる者の子なり。俳名を乙平とよび、狂名を秋人といひし。然ども、狂歌の俚きを嫌ひてよまず。書は、最能筆にて、安永天明のあひだには、專ら世に聞えたる書家なり。老年におよびては、ますく名高く、門人も太多く、常に諸家へも宣れて、只管尊敬せられけり。然ども、主家（金吹町はりまや新ゑ門）へ通ひ勤むる事、壯年のときより些少も容子をかへず。常に書牒の出日には、いかなる風雨の日たりとも怠慢ず、河內木綿の袖みじかく、丈短き衣服を著し、藁履のみはきて通ひしとなり。高名といへども主家をたふとむ事、斯くの若し。人はかく心得たき事にぞ有りける。

奉上たきものなりとて、菅江もく網裏住等いひ合せて、二十人あまり歌とり集め、おの／＼短冊に認め、縁をもとめて京都へおくりけるが、其の後なにの御沙汰もなし。同じく八年辰八月十五日、本町の玉屋九兵衞といへる商家の店頭に、裏住遊び居たりしを或る人扇二三片もち來り、「是に歌かきて給はれ」といふ。裏住何ごゝろなく、扇面に歌をしたゝめける處へ、旅僧二三人這の店へもの買ひに立ちより、今裏住が書きたる扇を看て、いと怪みたる容子にて、「此の歌は、貴どのの詠れたるにや」と問ふ。うら住答へて、「おのれが詠みしなり」といふ。旅僧們大いにおどろき、「小僧輩は陸奥のものなるが、五年前より、京都にのぼり、大井川の北、靈龜山聖禪寺と號すところに佛學いたし候ひしが、當般歸國致すにつきて、洛中看物のついで、今出川、萬年山天禪寺塔頭普光院なる黄門定家卿の御廟處に參詣いたし侍ひしに、正面に高位の御詠三十六員の額面あり。その中に、

　鶯も蛙もおなじ歌なかま經よむもあり唯なくもあり

詠人不知としるしたり。狂歌なれどもおもしろく、何人の御詠なるやと、只管かんじ候ひき。足下當下這のあふぎに書れたるを看て、初てその詠ぬしを知りぬ。萬望は、我們

人の傘を云云―狂言末廣等にてうたふ小歌の文句

黄門―中納言

連俳―連歌俳諧

き、忽ち奥へ飛んで入り、杢網にこのよしを告ぐる。杢網も不審におもひ、障子の寸間よりさしのぞき見れば、轎のうちに裏住が顔ちらりと見えけるにぞ、偖は渠また那に事をかして來りけん。まづ這方へ御とほりあれかしと、婢女に云せければ、裏住立ゐぼしをかぶり、座敷に通り、大紋の袖かき合せ、長ばかまの裾ひきずり、直と立ち、狂言の言にて、「這のわたりに住む大名でござる。杢網老へ、太郎冠者を知己にせんとおもひ故意同伴いたいてござる。ヤア太郎冠者あるか」と呼はりければ「ホウ引」といらへて、秋人太郎くわじやの姿にて、奥へとほりける。是より始終狂言にて、秋人を杢網に扯合せける。杢網もさる者なれば、同じ辭にて、知己になりぬ。「人の傘をさすなら、我もさそふよ」と立ち廻り、小時まひありきける。家裡のものは勿論なり、近隣の人々までも、跪來りて、是を見物し、大笑とぞなりにける。夫よりは酒宴となり、終日わらひ樂みしとぞ。裏住は、平生かやうの行狀にて、生涯おもしろく暮しけり。寛政元酉年の春、黄門定家卿、五百五十年忌御追福、京都にて執行れけるにつき、東武にても詩歌連俳に遊ぶ輩は、手向の詠を奉上るべしとて、然る堂上方より江戸諸方御殿がたなどへ、それ〴〵緣をもとめて、仰せ下されし事ありけり。這の事を聞きて、何とぞ狂歌師も歌を

つけ、疊の縁まで殘らす更沙にてはりつけ、更沙の間といへる、御客次を修造し給ひけり。這の更孫一個の畸人にてありけり。俳諧をこのみて、勢賀とよび、本町二丁目紙屋にて、俳名乙平といへるものと、無二の交りにて有りけるにぞ、後は、同じく本町へうつり住みぬ。當下江戸狂歌流行して、更孫も杢網といへる人の弟子になりて、狂歌をよみ名を裏住とよびけり。亦乙平をも勸めて、狂歌をよませ、名を秋人と號けたり。又野呂間人形といふもの流行、兩人とも是を能くつかひ、鷺何がしの門人となりて、能の狂言最よろしがりしとぞ。一時秋人乙平が事裏住にいふやう、「小生未だ杢網子に知己にならず。萬望はひき逢せ給へ」といふ。裏住聞いて、「いとやすき事なり。然し、唯ひき合さんもをかしからず。怎生おもしろき對面やう有るべし」と、思案して、頓て兩人とも狂言の裝立にて、裏住は末廣大名、秋人は太郎冠者の姿に打扮、二人とも町轎にうち乘りて、時に師走の十六日、世間鬧しき最中、本町より西の窪紙屋町、杢網の隱宅まで行き、門口にて高聲に、「ものまう」と呼はりければ、通次のはした女出來り、「何方よりのおん入りぞ」と問ひければ、裏住のりものの裡にありて、「是は這一邊に住む大名でござる。杢網老に御意得たくまゐり侍ふ」と、高聲に云ひけるにぞ、通次の女大いにおどろ

をしたひ、古相劦侯の迹をおひて、彼のごとくしたゝめしを、豈はからんや、觀音の像薬師と化けてあらんとは、一向に心つかざりき。然りといへども、おのれ今まで一度したゝめたるものを、再たび書きかへたる事なし。さらば佛像の方を鑄正すべし」とて、夫より持僧にかたらひ、若干の黃金を投うち、鑄師に命じて、薬師の像へおほくの手を鑄かけさせける程に、忽ち、薬師如來、千手觀音と生れかはらせ給ひけり。是を聞く人々、そしるものもあり、亦は親和が英氣を感ずる人もありしとぞ。この一條くさ〴〵異同あるよしなり予はいときなきとき聞たるまゝこゝろにしるす後人よくたゞしたまへ

狂歌師裏住

裏住は、原斯樂加波侯の藩中にて、久須美孫兵衛と云ひし者なり。由縁ありて浪人し、坂本町二丁目に住して、白子屋孫右衛門と改名し、唐更沙を製して、活業としけり。當下まで、本邦に唐さらさを製する人なく、十分奇しかりければ、諸方より競ひあつらひ來りて、活業大いに繁昌しけり。更沙屋孫ゑもんを略して、人々更孫とよび做しけり。古主へも宣れて、御立ち入りし、さま〴〵の更沙を製させられて、一室天井紙戸壁のはり

瑠璃殿―藥師を瑠璃光如來といふ

頭をかたぶけて、「三十三間堂と書かん事何とか拙く覺えさふらふ。外にしたゝめ方あるべし」と云ひけるにぞ、「左も右もよきに央み入るなり」と答へける。親和やがて這の額に圓通としたゝめける。是は原三十三間堂淺草に有りしときの額は、土屋何がし侯の御筆なり。當下筆道の達者といひ、和漢の學才秀し御方なれば、願ひておん筆を乞ひしなり。這のときの額すなはち圓通と書れたり。親和も是にならひて、圓通と書きけるなり。斯て、三十三間堂落成して、たび〳〵通矢などもありて、看物の人々群集しけるに、當時能筆の聞えある親和が額面、しるも知ぬも仰ぎ看て、賞贊せざるはなかりけり。一日律僧二人來り、這の額を看て、大いにわらひ、「さても文盲の書きざまかな。是を守る別當も沙汰のかぎりの戲氣なり」とて十分嘲哢して去りにけり。是を傳へ聞く人々、奈何なる譯といふ事をしらず。或る老人親和に會ひて語りて曰く、「這のほど律僧二人、貴師の書れし額を看て、はなはだそしりたりと聞きおよびぬ。是は元の三十三間堂、淺草にありしときは、安置の佛像くわん音菩薩なれば、圓通にて協へり。當般の三十三間堂は藥師如來を安置したれば、圓通にては大いにたがへり。疾く瑠璃殿とか何とか書き正し給へ」と云ひけるにぞ、親和聞きて答へていふ。「是大いに理なり。予はたゞ古き

百家琦行傳 二之巻

三井親和

親和は別號龍湖、俗稱孫兵衞とよび、東武深川（町名今忘たり）に居住して、安永天明の頃、もつぱら世に鳴りたる能筆なり。殊に篆書をよくし、當時絹ちりめんなどに親和が書風の篆書をそめぬき、是を親和ぞめと號して大いに流行したりける。斯のごとく、女童までよく知るところの書家なれども、書よりも猶まさりたるは親和が弓術なり。三十三間堂通し矢など、毎々人の眼を驚かしける。最英雄にして、さらに物にかゝづらはぬ氣象あり。當下深川三十三間堂大いに破壞して、久しく廢れけるを、能勢何がしどの是を再建せられけるが、市中三老家よりも、能勢どのの命によりて、這の堂の扁額を寄進しけり。さて「額の文字誰に書すべし」と評議しけるに、「三井親和は當時の能筆といひ、殊に弓術の譽ある者なれば、三十三間堂には大いに緣あり。然らば此の人をたのみて書すべし」とて、頓て親和に這の事を物がたり、「三十三間堂とかきて給るべし」と央みければ、親和

百家畸行傳二之卷　目錄

風といひては金にて拵へたる屏風の事なり。其の金屏風は小老一片をもてり。當下足下に看せ候はん」と、やがて小僮們に命じて、帑藏の裡よりひとつの篋を把出させ、自親立つて這の篋をひらき、一片の屏風をとりいだし、彼の支配人に看せたりける。高さ僅に三尺ばかり、厚さ一寸程ある、眞金の六枚屏風なりけり。五三兵衛が支配人これを看て、一言の詞もなかりしとぞ。彦兵衛また曰く、「彼の金箔屏風おいり要ならば、百雙なりとも御用だち候ふべし」とて、夫より奴僕輩に分付て、帑藏よりとり出させ、二十雙あまり、五三兵衛が方へ運せけるとぞ。

たび倖僥の事ありて、大客を得る夫をねたみて、我に幹を闕さんとは爲るなるべし。好好、いまは渠をば央むべからず。許多の黄白をもたせて、八方を探させ、當日中に金屏風五六雙買ひとりて來るべし」と敦圍あらく怒りけるを、這家の支配人主人をいさめて云ひけるは、「さまでに、憤懣たまふべからず。是は正しく、使のものの稟やう不良事とおぼえ侍ふ。這のうへは、小僕まゐりて、借來りさふらはん」と云ひけるにぞ、主人も是にしたがひける。斯て支配人いそぎ大島屋へいたり、「當般、わが主人止事なき大客を得候ふにつき、願くは金屏風五六雙、恩借に預りたく侍ふ」と演べければ、彦兵衛答へて、「我家屏風は二百雙にも餘りさふらへども、金屏風は一雙ももたず。但し小き金屏風かたしこれあり。五六雙も御要ならば、外にておん借り給はるべし」といふ。當下かの支配人何心なく奥のかたを覗き看るに、正堂に、金屏風二三雙立てまはして有りけるにぞ、支配人大いにいかり、「金屏風一雙もなしと曰ひながら、當今奥正堂に見えたるは、金屏風にはあらずや。いかに吝惜し給へばとて、さまでに虛頭は曰ふべからず。惜みて借ずは、かさぬまでの事なり」と座を立たんと做しけるを、彦兵衛、急に是をとゞめて云ふやう「今奥にある處の屏風は金屏風にあらず、彼は金箔はり附の屏風なり。金屏

にもるゝ事なし。夏の日虫干のとき、人來りて、御屏風拜見いたし度きと央みぬれば、彦兵衞、自親立て客をいざなひ、客次の裡を唱引ありき、一雙々々に講釋をして見する事、開帳場のいひたての如く、屏風だに讃むれば、殊の外よろこぶ事かぎりなし。同國窪屋郡生坂村といへる處に、五三兵衞といへる者あり。家數五十三棟程もてる豪家なり。一時五三兵衞、止事なき大客を得る事ありて、家のくまぐ、番匠をやとひて造次などし、既に其の前日になりて、客次のこらず金にて飾り詰るべきを、なまじひに常の絽屏風を交へんは、最くちをし。さらば大島屋彦兵衞かたへ央みつかはし、金屏風五六雙借來り、ざしき殘らず金にて飾著すべしと、やがて一人の小僮にいひつけ、倉敷の大島屋へつかはし、金屏風五六雙かし給るやうにと、叮寧にいひやりけるが、大島屋彦兵衞這事を聞き、答へて云ふやう、「太最やすき幹にはあれども、小老家に金屏風一雙も所持いたさず。萬望は外にておん借りいだし給るべし」と、斷りて返しける。五三兵衞是を聞きて、大いに怒り、「豫て、倉敷の彦兵衞は屏風癖なりと、諸國までも隱なく、屏風庫數十戸をもてる者が、金屏風の五雙や八雙なきといふ事やはあらん。察するに我家こ

帯吉兵衛

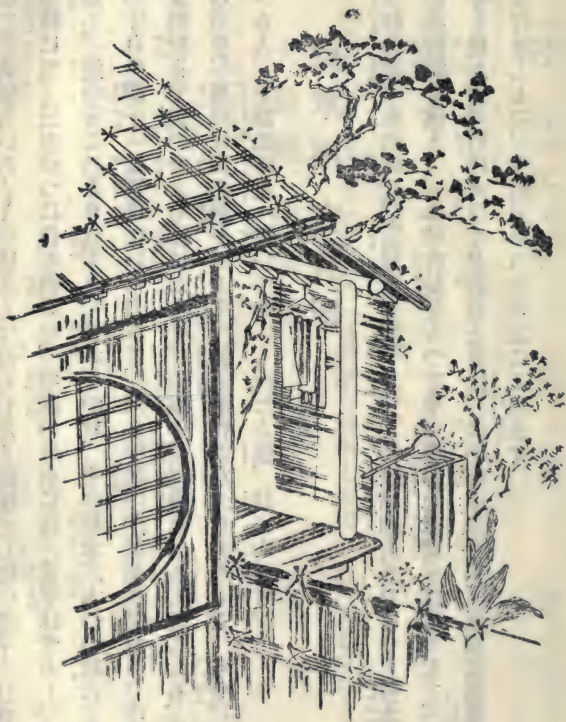
大阪願教寺前三右衛門町といへる處に、保長役をつとめ在りし、餝屋吉兵衛といふもの、帶をおほく貯蓄もちて、一日のあひだに、七度八たびほどづつ結びかへて歩行けり。衣服は、一向に數なし。たゞ帶のみおほく所持して、百餘すぢに及びしとぞ。然れば、世人帶吉とのみ呼びなしけるにぞ。後には帶屋吉兵衛と心得たる人もありしとなり。

大島屋彦兵衛

備中の國窪屋郡倉敷といへる處に、大島屋彦兵衛といへる豪家あり。安永明和のころの彦兵衛、殊のほか屛風をこのみて、若干貯蓄もてり。先祖より傳りもちし屛風、最多し。其の上這の彦兵衛、追々屛風を買入れけるにぞ、數十戸の祕藏の裡、殘らず屛風をいれおきけり。京浪華などへ來りし時も、外の家伙は一箇も求めず、たゞ數々の屛風のみ買ひとりて皈りけるにぞ、竟には屛風二百餘雙におよびける。然からに、和漢いにしへよりの、名畫墨跡はいふもさらなり、奈何なる尊き御方の書畫たりとも、這の家の屛風

にくみ建て、店頭もいろ〳〵の唐木もておもしろく組建てし縞の格子、ひさしの垂木は紫竹と寒竹にて、三木づつに色を替らせ、中庭の泉水には、當下はやりし、島といへる金魚を放ち、這のところより樓上まで梯木をかけ、その梯木二木づつ縞にくみたり。左右唐樹づくりの欄干、擬寶珠にいたるまで、殘らず縞のかたちに造れり。中庭の北おもて、隣家の壁まで這の方より縞にぬらせ、店頭の長暖簾はいふもさらなり、疊の緣までみな縞なりき。然れば島の勘十郎とて、當頃名だかき人なりしとぞ。平安、角鹿比豆流とかいへる人、東都馬琴翁へ書いておくられたる儘、茲にしるす。

煙草屋吉兵衛

泉𠮷堺九軒の町、東横町に、河内屋吉兵衛といへる、煙草商人ありけり。性赤きものを好み、衣服帶繻絆手拭まで、みな紅染をもつてす。老者の鹵莽き㒵なりとて、妻子是をとどむれども聽かず。外に火災など有るときは、火の赫きを看て、五里三里遠きところまで、走り行きしとぞ。文政元年六十八歳にて死去す。

戻なりとて、當宵訥子を茶房の樓上にまねき、酒をすゝめ、黄花抔おほく遞與せけり。また一年伏見の桃山の桃看んとて、春の半に旅立ちけり。芳野の花見に行く人はおほくあれども、伏見の桃見んとて、百餘里の遠きに旅だつ人は、亦有るべからずとて、人々大いに笑ひしとぞ。

島の勘十郎

元祿の頃、京都室町通三條の南に、櫻木勘十郎と云ひし者在りけり。古器、古書畫の鑒定をよくしたり。這の人つねに縞のものを好み、衣服より帶足袋にいたるまで、色々の縞を著し、扇のもやう、副刀の鍔さや、柄糸、印籠、雪踏の緒までも、みな縞ならずといふ叓なし。旦暮の食事にも、鱠はさらなり、汁は千蘿蔔、かうのものも新漬と古漬と、行義よくきざみ雙べ、煮物は大根、牛房、胡蘿蔔など、ほそく切りてならべ、縞のごとく器にもり、魚の類も、鰆しま鯛すぢ鰹、すべて筋あるものを用ひ、椀折敷のたぐひは、皆縞にぬらせ、婢女、奴僕に至るまで、殘らず縞の衣服を著せたり。然れども枉げて異を好むにあらず、天性かくありしとぞ。家居も世に珍らしく、樓上の格子さまぐ〵の縞

三傑桃園—劉備その臣、關羽、張飛と桃園に義を結ぶ

成山は、丹後の國の産なり。三十歳のとき、江戸に來り、麻布二本榎に住し、五十歳より、東海道神奈川生麥といへる處に隱居す。這の人、常に桃をこのむ。よりて幼名を桃太郎と呼びけり。衣服はみな桃色をもつてす。其の妻これを止むれども聽かず。上下も色の衣服にて往來す。人また、只管これを笑ふ。家の四面、紅白の桃の樹數種を殖おきたれば、春花のころは、前栽のながめ最よし。亦夏秋の間はもゝの實を喰ふこと、一日に百をもつて計ふ。其の核を藥店にひさぐ。藥店那須屋何がし、年々桃仁をかふ事一石におよぶと云へり。別號桃花庵、秦々居、蕡堂、仙源などみな桃の古事をもつて號けたり。器も桃なりにつくりて用ふるもの多し。飯櫃火桶など、桃のかたちなり。壁はも色にぬらせ、三千年の桃の畫をもて腰ばりし、床室には王母の軸をかけ、掩障には三傑桃園に義をむすぶの圖をかゝしむ。また桃品と號けて、一部の書を撰めり。そは桃の種類くさぐ〱をあげて、古人の桃の詩歌發句ことぐ〱くこれにのせ、和漢桃の古事を、殘りなく集めたり。また骨董肆にて、桃形の甲を買ひもとめ、火災など有りし時は、是を冠りて、看廻ありきしとぞ。一日友人に誘引はれて、戯場にいたり、芝居狂言といふ事をはじめて見る。狂言忠臣ぐらなり。澤村宗十郎、桃井若狹介の役なりけるを、是わが贔

造次顚沛ー忽にし易き時も忘れ易き際も

て居たりしとぞ。其の道に志をつとめ、造次顚沛こゝにおいてする事の眞節なると、胸中の磊落を稱しつべし。後九十二歳にて家に歿す。一家の風流したふべし。榛谷氏の話なり。

菖蒲革馬肝

馬肝は、麻布白銀に住し、俳諧を業とす。常に菖蒲革の模樣をこのみ、衣服は上下とも皆菖蒲革色にそめ、三角のもやうをちらし、家の壁など緣革のもやうにはり物し、器財もおほくは萠黄いろになし、三角に制したる器をもてり。三度の食事すら、握り飯を三角に制させ、常に是を食しけり。最滑稽なり。一時社中の人々、何ぞ宗匠の悦ぶものを贈るべしと、互にいひ合せ、一人は、菖蒲革の夾帒をおくる、一人は、三角に火鉢を燒せておくりけり。今一人は、薑擦をおくりけるが、馬肝これを殊のほか懽喜びしとぞ。

外山成山

産神—産土神の略
睥睨し—横目ににらみ
ところせきまで—一ぱいに

俳諧を好み、三井親和の門人にて書をよくし、俳諧をもて業とし、（俗様は馬場流をよくかけり）産神神田明神の大幟をかきて、其筆跡今猶のこれり。年老て家産をはいし、神田菴と號す。自から一箇の見識ありて、世間の人を睥睨し、世を玩び、人はたゞ兒童心になりて世をくらし、生涯理窟を離れたきものなりとて、兒戲の手遊ものをこのみ、ふりつゞみ、犬ばりこ、土人形、むぎ藁笛、風車のたぐひ、都て何によらず持あそびの具をおほく買ひ集めて、一室のところせきまで雙べ置き、是をもて遊びてたのしみ暮しける。くる人も是をしりて、萬般の玩具をかひて、土産にとて、齎し來る。小知またこれを得て、只管に悦びけり。かゝりければ、家はいとゞ貧しくて、をりをり物に困じけり。一日社中一公子の許に行きて、一歩金ひとつを貰ひかへる、路上その半は玩具をくさぐさもとめ皈りて、後米薪など些く求めけるとぞ。文化三丙寅どし、高繩より淺草まで、三里あまり燒亡の災おこれり。這のとき、小知が菴もともに延燎にかゝりしが、竟にその去方をしらず。社中の人々大いにおどろき、老人の亥なれば、若過失やありけんと、十分こゝろを勞め、八方に手を分ちて、找尋ねめぐりけるに、次の日、護持院原の松のしげりたる下に、鄕黨の災にあひしもの、大勢集り居たる中に、小知袱を芝の上にしき、其の上に坐して、百韻の巻の點し

こうじて―困りて
戒名―死後師僧より附けらるゝ法名

たりも來るがうるさゝに、斯はいたし置くなり」と語りけるとぞ。唐齋つねに、澤菴漬の大根をこのみて、一向食ひけるにぞ、年々おほく買入れて、漬けおきけるが、這の桶の押石を、をり〳〵人に盗まるゝ事あり。唐齋是にこうじて、また這の石に殘らず戒名を彫りつけておきけるが、其ののち更に盗るゝ事なし。此の人常に雀を愛し、朝飯を食ひをはりて後、また一椀の飯をもらせ、庭上にこれを蒔きはた〳〵と手を拍ちければ、たちまち、數百の雀むらがり來り、彼の飯をはむ事なり、少時ありて亦手をはた〳〵と鳴しければ、彼の雀いづこともなく飛びさりて、一羽も居らずなりにける。晝も猶斯のごとく、都て、日に三度づつ、食をあたへけるとなり。予唐齋が事くはしからず。麻布仙臺坂桃樹院といへる寺に、久しく在りけるよし、一時這の寺にて問ひたれども持僧數代かはりて、委しくしれず。然ども、書は些く殘れりとぞ。東海道程谷宿、永田の寶林寺中東輝菴といへる處に、四五年もありて、爰にて沒したるよしなり。

神田菴小知

小知は原、米賈人にして、東武神田に住し、俗稱伊勢屋八兵衛とよびて、性豪放にして

かすべし。酒代は何ほどにても把すべきなり」と、懐裡より錢をとりいだして、蹇にあたへ、强て車より扯きおろし、自親その車にのりて、若き乞兒に繩をとりて曳出ださせ、竟に隅田川にいたりける。是を看る往來の人々、笑はぬものは無りけり。萩原は夕ぐれまで花看ありき、黄昏のころ、馬道にかへりければ、蹇は、ある寺の門前に、菰ひきかぶりて臥し居たり。萩原車をあしなへに返し、若き乞兒にもおほくの錢をあたへ、天晚て家にかへりしとぞ。予が兄這の人をよく知れり。

唐齋

江戸麻布雜式といへる處に、氏を忘れたり唐齋といへる儒者ありし。書を能くし、もつとも博覽の人なり。この老儒はなはだ畸人にて、正月年始の禮客、門に來り、いくたびも同じ答禮をのぶる事を、懶くおもひ、何とぞ禮者の來らざるやうに爲すべしとおもひ、門の戸をさし、簾をさげ、それに忌中といへる紙札をはりおきけり。東武は死人あるときは門をさし軒にすだれをかけちひさき紙に忌中と書てはりおく事なりいまだ江戸に出給はざる遠境の人のためにしるしおく近隣の人々是を看て大いに驚き、「誰人が亡せ給ひけん、太こゝろ得ず」と云ひて頓て唐齋が家に來り、訪ひければ、唐齋友人と酒のみ居て、「禮者のいく

萩原榮輔

榮輔は兼山門人にて、古學の老儒なり。（住所等今忘れたり）性磊落にして奇才あり。一年春ののどかなる日、那里こなた漫遊し、未の時ばかりに、淺草馬道のほとりを通りけるに、一個の蹇車にのりて、亦一人の若き乞兒、この車の繩を肩にかけて曳き居たり。萩原是を看て、蹇に問ひて曰く、「今儞が車を曳きたる者は、儞がためには奈何なるものぞ」蹇答へて、「これは賤老が一子にさふらふ」といふ。萩原聞きて「然ば今儞がのりたる車と、その一子とを、少時のあひだ我にかし與へよ」と云ひけるにぞ、蹇大いにおどろき、「這の車をかりて、何にかし給ふや」といふ。萩原が曰く「われ當日諸方ありきて足大につかれたり。然れども、亦今より隅田川の花見に行んとおもふにつれ、儞が車をかりて、乘りてゆかまく思ふなり」と云ひければ蹇是を聞いて大いに惘れ、「おのれが乘り汚したる車いかでか大人たちの乘り給ふ料には成るべきや。別に轎房に分付けられ、大轎にめして、行かせ給ふべし」といふ。萩原聞きて「いな／＼大轎にては、花看にくし。亦ありかんと思へども足つかれたり。馬にのりても不弁利なり。左右なんぢが乘りたる車を我に

ふやう「德島は蚊がをらぬで宜きところなり。わが長部谷は、今もなほ蚊帳をつりて寐る叓なり」といはれけるにぞ、十兵衞聞きて「長部谷は山の坂下にて、蚊のおほき處なり。然れども時いま冬の半なるに、蚊帳をつり給ふといふは、奇しき叓なり」とて、不審み居たりけり。十兵衞當日は撫養に要用ありけるにぞ、祥藥和尙と同伴して、黑崎の菴中へ行きて看るに。一室の裡に蚊帳をつりたる處あり。その裡をのぞき看れば、蚊二三疋まひ居たり。十兵衞蚊帳を外しとりてふるひければ、蚊はいづこへか飛去りけり。是より後は蚊帳をつらずして臥しけれども、蚊は一疋も來る叓なし。是は、祥藥夏より蚊帳つりしまゝにて、一日も外し把りたる叓なし。秋のころ蚊帳のうちに入りたる蚊、出づるところなく、和尙のあたまを食として、冬まで在命居たるなりけり。蚊帳外してより後は、祥藥蚊に攻めらるゝ事なし。和尙も只管わらはれけり。這和尙實に一畸人にて、くさぐさの物語あれども略す。同國南方日和佐にのこれる、峻山の碑銘を看ても、祥藥の文にたけたるを知るべし。文政六壬未冬十一月十九日卒す。正興菴境內に墓あり。碑のおもてに、半雲窩菩提華金剛墓と彫著たり。

といへば、祥藥答へていふ、「我金銀はもとよりなし。唯いふく米麥のみなり。他們それを盗みたりとも、海川へすつるにあらず。さらば天下の貧民をすくふに同じ。衣服は寒をしのぎ、米穀は、餓をのぞく爲に盗むならめ。敢てをしむに足ず」とて、なほ此のちも戸ざしせず、開放ちおきて出でありく。然れども夜にいたりて、遍路乞見など、菴中に入りてふし、或は火など焚く事もありけるにぞ、若過失も計りがたしと、近きほとりの家々より、時々に見廻りて、和尚菴に在ざるときは、堅くとざして、錠をおろして置きにける。夜更て祥藥かへり來り、菴に錠のおりたるを看て、是を開るをものうくおもひ、近きほとりの農家なる、薪小屋のうちに入りてふし、天明けてこの家にて、朝齋をもらひて食し、其の儘、また外へ出去りける。何にまれ、一向に萬般にかゝづらはず。唯書をよむと、そこら漫行のほか、他事なし。讀みさしたる書は、袱につゝみて、自親せおひありく事なり。徳島免許町に、岡屋十兵衛といへる酒造家あり、祥藥をりをり行かるゝ家なり。一時十一月のはじめ、夕暮に這の家に行きけるが、十兵衛よろこび、奥の室へ請じいれ、齋を安排してもてなし、「今宵は我家にとまり給へ」と云ひければ、和尚も大いに懽びて、岡屋に一宿したりける。次の朝にいたり、祥藥子十兵衛にい

祥藥五十歳のとき、正興菴に持住す。されども我儘にて、比丘にならず。僅に十年ばかりにして、忽ち其の弟子に讓りて、同處、黑崎長部谷といへる處に隱居し、菴を幻夢菴となづく。祥藥子元來博識にて在りければ、近きわたりは勿論なり、御城下とく島までも、弟子おほくあり。然ば菴の修理、その外衣服米なども、皆弟子中よりまかなふ事なり。長部谷より徳島までは行程四里あり。かゝる遠きところを、朝の間に走りて、とく島の弟子の家に到り、「昨宵狸のわざにや、飯櫃をあけて、殘らず喰盡したり。今朝飯たくが懶さに、こゝまで呼ばれにまゐりたり。茶飯をふるまひ給へ」といふ。弟子大いにをかしく、撫養にも弟子おほくあり、亦本寺正興菴へゆきても、然るべき亊なるに、朝齋一椀よばれんとて、遠く爰まで來られしは、我をして無二の弟子と思ひ給ふが故なるべしと、殊によろこび待管けり。かゝる行狀の和尙なれば、平生大かたは菴中にあらず。閼だにせず開け放ちたるまゝにて、出でありくゆゑ、時々遍路の乞食などに、衣服米穀を偸まるゝ事計へがたし。其の亊毎に弟子中より是をつくのふ事なれば、時々祥藥子に諫めていふ、「這のち他に出で給ふときは、かならず堅く閼していで給ふべし。然なくては、斯の如く衣服米穀等を盜まるゝ事おほく侍へば、くれ〴〵も心を用ひ給へ」

次にこれほど、納處にいくらとて、茶室浴室せついんにいたる迄それ〴〵黄金を配當して双べおき、少時これを窺めをり、頓て大いに驚きたる光景にて、「さては火事なり。いと近し。逃よ〳〵」と云ひながら、双し圓金を繪圖の紙におしつゝみ、懐裡におしいれて、書齋のうちに走りいり、衾かづきて臥にけり。妻子們これを看て、大いにおどろき亦は感じ、其後ふつに家の修覆をすゝめず。這の叓もと滑稽なりといへども、世間の驕奢ものゝ爲には、よきいましめにぞ有りける。予が兄這の人を能知りたり。（世人この事を天愚とあやまつ）

祥蘂和尙

祥蘂子は、阿劦板野郡木津野といへる處の莊官、岩淺官次といへる者の子なり。十六歳にて出家し、同處、撫養四軒家まち正興菴の祥海子昔海比丘の弟子となり、ひたすら學文を好み、成長するにしたがひ、學才もつとも高く、詩を賦し文をつゞる事衆人に勝れり。幼稚き時より、物にかゝづらはぬ癖あり。祥海子死後、師のあとを繼ぎて、正興菴に持住すべきを、祥蘂わがまゝにて是をつがず。依りてせんすべなく、其の次弟これを繼ぎて照如比丘と號す。後また此の照如比丘卒して、外に繼ぐべき人なく、止叓なくて、

莊官―名主
比丘―僧

芝山某

芝山は武家にて、牛込加賀屋敷に住す。武備に嚴にして、古人の風あり。元來小祿なりといへども、武具馬具のたぐひ、乏しからず。家居衣服などはいと〳〵質素にして、唯武事にのみ、心がけ厚し。常に騎射をよくし、しば〳〵褒賞をかうぶりぬ。家のまへ一圓の原にして、草おひ茂れり。常に飼ふところの馬を門前に放ち、草を湌しめて、もて、飼蒭にあつ。亦常に野菜鹽あぶらのたぐひを買んとする時は、慢りに下僕を使はず、自親馬にのりて、市街にいたり、それ〴〵の品を買ひもとめ、鞍の右ひだりに結びつけて皈る。看る人、これを笑へども、いとはず。その朴素なる㝡賞すべし。門の一邊に一箇の大榎あり。門のはしら、かたしは這の榎にもたせ造れり。榎成木するにしたがひて、門の冠木片邊あがりて、曲み傾きけり。年ふるまゝにいよ〳〵曲み、目に立ちけり。然ども是を何ともおもはず。妻子輩は、その鹵莽を愁ひて、「家居を修補し給へ」とて、諫勸めければ芝山うなづき、頓て大いなる紙をとりいだし家の圖を仔細したゝめ、貯蓄へたるところの圓金を數十ひら把りいだし、かの圖會の上におき、玄關何兩、居室に何程容

左倚羅どころあり、心散らずして、書を看るには、大いによしとなり。亦往來するときは、晴雨にかゝはらず雨羽織を著す。みづから戯れていふ、「これ歩行羽織といふものなり」と、亦路頭に人の脱ぎすてたる古草履草鞋などの、破れたるを自親ひろひ把りて家にかへり、是を幾重にもとぢ合せ、また他に出づるとき、是を足にまとひてありく。最異人なり。「途にすたれし艸鞋も、拾ひて用ふれば、斯のごとく要にたつ。我は、世に廢れるものを擧げ用ふる亊を好むなり」といひて、彼のとぢ著けたる古草鞋をはきて、往來す。看る人これを笑へどもいとはず。狂人の如く思ふ人もありしかど、會ひて談話すれば、其の論たかく、博識ならぶ方もなし。壯年より、四方の神社佛閣にまうづるときは、必ず、堂塔に題名してかへる亊をなす。其の筆硯のわづらはしきをいとひ、後には印刻して、天愚孔平と紙にすりて、是をはりて歩行しなり。「奈何なれば、天愚とは唱へ給ふぞ」と問へば、「我天性愚に生れたれば、天愚とは呼ぶなり」と答へたり。這の紙札いまもなほ、古き堂社には、まゝ殘れり。是れを看眞似して、世の凡俗千社まゐりの札はりと云ふ事流行、もろ〳〵の神社佛閣を汚しありく者多し。歎かはしき亊なりかし。

其の由縁を問へばこたへていふ、「四氣とは色氣欲氣食氣勝氣なり。人この四氣だに去らば、生涯無事なるべし」とをしふ。其の躬のおこなひ、最いふところの若し。一年市正が甥來りて、市正に謂て曰く、「儞つねに、四氣をさる㕝を以て人に敎ふ。なんぢも今四氣を去りて、この家督をわれに讓るべし」といふ。市正、あらそはずして甥に家督をゆづり、纔の盤纏を懷裡にして、江戶に出でて、赤坂東横町に住して、神職を業とし、淸貧をたのしむ。人渠がすがたの麁體なるを看かねて、「すこしく黃金を得る事を企てよ」とすゝむれば亦かの四氣を去る事をいひ出でて、「天道豈人を殺さんや。肩あるものは著、口ある者は食す。一衣一口にして足りなん。那ぞ他を願はんや」と。竟に生涯貧をたのしみ、生壽八十四歲にして終りぬ。東武榛谷氏、這笹岡をよく知れし。

天愚孔平

天愚は某侯の藩裡にて、赤阪御門の御第舍に住し、俗稱萩野喜內、名は信敏、字は孔平別號天愚また鳩谷ともいへり。博識にして、文章に秀で世を玩弄し、節儉にして家ことに富り。しかも敝衣破れはかまを著し、家に在るときは、大轎のうちに座して書見す。右

大般若經｜六百卷、唐の玄弉譯、諸法皆空の理を廣說す

轉讀｜各卷の題目と品目とのみを讀みその間にたゞ經卷の紙をくりて讀誦に擬すること

蓮生｜熊谷直實の法號、曾て念佛十遍を典して錢を借る

泥裡のはちす｜法華經涌出品「不レ染二世間法一、如二蓮

いはく、「我いま大般若經を轉讀す」と。老師また問ふ、「其の功德怎麽」傳兵衛こたへて、「毎日この大般若を轉讀するがゆゑに、父母妻子奴僕まで飢寒をしらず。其のほか、おほくの貧民をすくふ。是ほどの功德また有るべからず」老師また問ふ、「儞が家業は質屋とか。我念佛を質にとらんや」傳兵衛答へて、「むかしは蓮生ごとき荒法師の念佛すら、質に把りたる人もあり。況て、老師は道德たかき大和尙、念佛あらば、何程にても質にとるべし」といふ。老師大いに笑はせ給ひ、「儞は寔に泥裡のはちす、俗家におかんは最をしき事なり」と曰ひて、夫より奥へとほり互に禮をはりて、是より無二の法友となり、昧旦のまじらひ深かりける。傳兵衛五十九歲にて病死す。葬するに至りて、野送の人、十餘町におよびしとぞ。

笹岡市正

市正は生國越後村松の豪家なり。氏は笹岡名は靜、字は希默。幼年より京師に出でて、稻葉迂齋の門人となり、泊齋と號す。多く書を讀み後神道に歸依して、神職となる。性魯鈍に似て無欲なり。生平に人に說くに、「すべて世人四氣をさらば無事ならん」といふ。人

粟田流—青蓮院流

歌の中山—京都東山にあり

智明、經學をこのみ粟田流の書をよくし、また道學をまなびて慈悲心ふかく、もつぱら貧民を憐み、我家は儉をもちひ、能く他の人に物を施す。文化年中攝河兩國洪水の時も若干の金銀を投げうちて窮民を救ひし事おびたゞし。亦年々極寒のころ、夜ごと洛裡洛外を徘徊し、極貧の者を看著て、米錢を施すこと多年、かつて姓名をかくして他に語る事なし。然れども隱れたるより顯るゝはなしと、いつしか公廳に達して、忽ち召れて、褒詞褒賞をたまはりけり。亦三條より鴨川車道より大津まで、三里があひだ、往來旅客のために夜燈をたて、車道敷石をおもひ起して、當躬あまたの黄白を投げうち、有德の人々にすゝめて、善根を施さしめ、二年にして竟に其の功を遂ぐる。當下も亦公廳より褒賞をたまはりぬ。都て家より二三町四方の小家は、這の大黑屋の恩にあづからざる者は稀なりしとぞ。他家といへども傾廢におよばんとするを看ては、是を歎きて、みづから求めて其の家にゆき、何呉と執りまかなひ、再興をなさしむる、其の才智また賞しつべし。公廳より褒賞をたまはりし事、五六度におよべるとぞ。歌の中山淸閑寺の智眞老師、此傳兵衛が賢なる事を聞き給ひ、始めて來られしとき、呼門もなく直ととほり、「大黑屋傳兵衛儞何をか做すぞ」と問ひ給ふ。傳兵衛當時帳合をして居たりしが、其のまゝ答へて

百家琦行傳

八島五岳輯

一之卷

澤井智明

洛東――京都賀茂川の東

洛東大和おほ路第三橋の南に、大黒屋傳兵衛といふ者あり。數代慈悲家にして、家殊に繁昌す。別家數十家あり。先祖は近江の高島より出でて、代々入夫なりといへども、他鄕よりむかへず、いつも皆高島より養子す。妻手代丁兒にいたるまで、同村の者ならではかゝへず、娶らず。往古這のところは繩手堤にて民屋一軒もあらざりしを、大黒屋傳兵衛はじめて家を經營みてより以來、おひ〳〵人家建ちまさりけるにぞ、公廳より大黒町と名を賜りしとぞ。三條より南二町が間は、大黒屋といへる暖簾いと多かるをもて、大黒屋町とも呼做しけり。天明寛政のころは、九代におよぶ傳兵衛なり。氏は澤井、名は

百家琦行傳一之卷目錄

表　松風窟白幽子之墓
橫　白川山居隱士
脊　寶永六己丑初秋二十五日

かゝれば、其の人の實有は論なし。竹苞主人が、此の翁につきて重疊功あるもをかし。しかるに猶いぶかしきは、白隱和尙の訪はれしは、庚寅正月なること前編に擧ぐるがごとし。墓碣は前年己丑也。若生存の日に建てしかともいふべけれど、二十五日とあるは、其の歿日なるべきことわりなり。畢竟隱士の名をかりて、丈山の師也、壽二百歲にも過ぎたらむなど、仙のごとく取なして、其の示說を神にせらるといはむか。あるひは老後とし月の空記得のまゝに錄したまふといはむは難なし。猶世によく識る人もあらむ。

閑田子錄之

續近世畸人傳終

平日好讀書不求甚
解窺聖賢之道不慕
榮利安貧不蔽風日
一褐一瓢屢空不憂
今日而俟天命而已

後又白幽子自筆の作文を、或人の藏せるを、借り出でて見せられしかば、其のまゝにうつして左に掲ぐ。(印刷の都合上右に掲ぐる事となりたり)其の高趣また見るべし。又其の墓を同じ人探り得たり。眞如堂の北芝の墓といへるにて、方石に刻す。

一徑莓苔餘苑跡。半肩薪棘對仙碁。
市寰日月本非別。洞裏景光稍似遲。
除却山中松柏翠。秋風搖落更無私。

謹志箴　白幽子

夫長於雲壑青松下
無有游觀廣覽之知
顧有至愚孤陋之累
晏然哀吾生之須臾。

題して、「昔はだるま、今は道八」と書きて、即自像に用ひられしに似たり。其の氣象しるべし。

卷尾　白幽子

此の人、前編の予が評に、其の人實にありや、白隱禪師其の說を述べむがために、假に此の人をまうけられしも知るべからずと疑ひしが、後に相州金澤の僧若霖（若霖字は桃蹊、四方に來往して、錫を留むるところを知らず。詩をもて白石と方外の遊びをなすとなむ）の詩集「宜遊草」を書肆竹苞樓示さる。其の中に、訪白幽子詩二首あり。

秋興招吾泝白水。　嵐光踏破訪幽踪。
山村籬外一技菊。　石徑耳邊十里松。
潤戸不厭遊客扣。　岩扃只有懶雲封。
遠來爲問山居好。　冷露未晞鳴艸蛩。

又

羨看幾時隱淸時。　獨倚石屛借晩曦。

會釋―輕く敬禮する事
尾張侯―尾張國主德川侯、德川三家の一

金加羅―奴隷の義不尊勝士の美少年
不動
世伊多加―左に三鈷を握り右に金剛杖を持てる者

どしく、萬たらはねども煩とせず。債を乞ふもの來る時は、「此のごろの療治、貧家のみなれば物をとらず。頓て大人の病を愈して後つくなはむ。夫までは待つべし」と、何の會釋もなく大聲していひはなせば、風狂人とのみいひ傳ふ。さるに、ある時尾張侯の辟に應じ、御疾を愈し、金銀數多賜はりければ、やがて門に札をたてて、

此度名護屋侯の御病氣醫療し奉り、早速平愈し給ふゆゑ、金銀多く頂戴申候。古借の面々、書出しを以て取に參るべし。北山壽安。

と記しける。(以上花顚が錄せる趣なり) 閑田子云く、壽安の墓大坂天王寺寺町くちなは坂太平禪寺にあり。去年案内の人ありて、はじめて知れり。碑碣にあらずして、等身の不動の石像、左右に金加羅、世伊多加の脇士をも具す。地には石を疊み、石の燈籠等巍巍たり。其の不動の背に錄して云く、

等身ノ石像。爾ガ生前是レ誰ゾ。吾死後是レ爾。截斷シテ死ト和ト生。爾ト吾ト空ノミ也耳。北山友松子竝ニ題ス。

此の像の背の火炎風に吹かれたるごとくなれば、世に風吹の不動といひはやして、壽安の墓なる事はしらず、詣づる人多きよし也。むかし織田道八顏輝が筆の達磨禪師の像に

ず。たまく舊知のよしみあるが、米穀など贈れるは、感じてうけ納めぬ。つひに近思錄を見ながら死せると也。かゝれば、受くるとうけざるの義におきて間然すべきことなく、前の評論は此人にはあたらず。君子哉如斯人。

間然―批評する事
君子哉云々―論語の語

第四冊　北村祐庵

前傳に著はせしごとく、物の味を知る異能によりて、頗過奢に似たり。然れども、其の人もと家富みて、しかも無欲なるが上に、子孫もなく、後を謀るの意なきによるか。老いて居宅田園に至るまで、村中に讓り置きて、生涯費用は心のまゝにとりつかひしが、身後餘財猶多かりしかば、今に及びて、此の人の忌辰年囘等の追福は、村中より執り行ふと也。所爲ますく奇なり。

忌辰―死せる年日

第五冊　北山友松子

前編の餘は、此の人心剛にして、然も方正なれば、富貴の家の藥謝におきては、黃金多からざれば納れず。貧窮の者には、藥のみならず、米錢をも施しぬ。かゝれば、家ま

綺羅叢裡脱迷沈。絃管何如鐘磬音。
細雨殘花山院寂。想應無夢亂禪心。

木村生は彼の院にもよしみありてしる所、撞鐘も此の尼の造立にて、銘に智雲の名有り。生涯清修懈らずとぞ。先きに聞きしは、妻を迎ふるがために障ならむと出されしといふ。是は妻の貞良に感じて發心すといふ。是ことなる所にして、其の餘清調が老母との應對、病に臨みて醫藥を辭し、はた大橋に其の志を告げしなどは、違はざるべし。

第三冊　長崎餓人

前編空におぼえて誤る所、この比長崎夜話艸に正す。吉左衛門氏は小篠也。號は酉水軒にして、人は淵明と稱す。先には氏を洩し、又號を猩々翁と誤る。其のうへ朋友の贈り物を辭して受けずと記せるも非也。大かたの人のよしみもなきが施すはかたく受けずしていふ、「われに因の由緒もなく、其の人の爲に謀りし功もなくてうくるは乞丐也。急難に臨みて施を受くるならひもなきにあらねど、我今老いたり。其の人に報いすべき齢もなし。ながくありて人の助施をうけむことは恥づ」といひて、飢ゑたる色をもあらはさ

勝を探る｜名所を尋ぬ

附録

前編漏脱并異聞五條

第二冊　遊女某尼

書林木村生、富春叟、儒士の詩集に出でたる趣をしめさるゝ所、先に聞きしに異なることあれば録す。妓たりし時の名は、鷗洲、性聰恵色藝第一に推し、俊逸たる士にあらざれば、相親むことを得ず。錢清調といへるが、（錢やといへる家號なるべし）贖ひて妾とし、惑ふこと甚しく、つひに其の妻を出すに及ぶ。こゝにおいて、親族僉清調を責め、鷗洲を一室の中にとりこめしに、妻これをきゝてかへりて、鷗洲を憐み、ひそかに人をしてとひ慰め、贈り物など絶ゆることなし。鷗洲其の貞良妬むことなき志に恥づ。情郎にこひて遁れて北山寂光院に入りて尼となり、名を智雲といふとなむ。是は春叟北山の勝を探るついで、寂光院に至り、智雲にまみえしといへる詩の小引に記さるゝ旨也。其の詩にいはく。

く、色どりかけるたぐひは多かれど、ふり行くまゝに、繪のかたちきえ、文字の墨付うせて、おぼつかなきかたあれば、末のよにもつたへまほしくて、數九枚にさだめ、板一つに四人づつ彫り入れ、歌仙堂をなして長押の上に、おの〳〵これをかけつられたりと。然れども、其の額は所在を失し、唯堂のみ殘りしなり）其の志空しきのみか、大雅も亦生前謙遜篤實の人なりしに、かく己がために舊跡をうしなひ、稱を改むるをこゝろよしとせむや。門人の私いたむべし。（此の堂六疊、樓もまた六疊にて、六六三十六の表にやといへり）又曰はく、元政上人は、竹三竿をなきあとのしるしとし給ふ。此の翁は松一本也。おのれも人がましけれど、うらやましく、去年死なむとせし比、友がきに契りて、さくら一もとを印になし、からは賣茶翁に倣ひて折骨にし給はれと遺言しつれど、おぼえずながらへて、此の稿を編むものなり。

花顚子が遺意かくのごとくなれば、命果の後、親しき人々志を遂げしむること、はじめに記すがごとし。おのれもまた、此の稿を刪補して、いさゝか掛劍の意に擬ふるものは、彼の三めぐりにあたれる寛政八辰のとしの秋也。

老樵閑田子蒿蹊

掛劔―吳の季札の故事史記吳世家に出づ

こゝにての歌共、さきの東山にてのうたども、あまた、所につけよみ給ふを、しるさまほしけれど、事しげければ、擧白集にゆだねて省きぬ。終り給ふは、慶安二年十月にて辭世の詞あり。

王公といへども淺ましき人間の煩ひをばまぬかれず。すべて身のうまれ出でざらむにはしかじ。まして賤しく貧しからむは、いふにもたらず。されば、死はめでたきもの也。ふたゝび彼の故郷へ立かへりて、始もなく終もなき樂しびを得る。此のたのしみを深く悟らざるともがら、かへりていたみ歎く、おろかならずや。

露の身の消えても消えぬ置所草葉の外に又もありけり

あと枕も知らずやみふせりて、口に出づるをふと書きつくる。人わらふべきことなりかし。

遺言のまゝに、一木の松のもとに葬る。東山高臺寺にも墓あり。豐臣氏の故也。

○思孝云はく、此の翁の靈山の歌仙堂を（住阿彌の内に是のみありしとぞ）雙林寺門外に移して大雅堂を建つるは、池大雅が歿後其の門人等計れり。惜しむべきの甚しき也。翁彼の歌仙を彫り付け給ふも、末の世に傳へまほしくてなどあるを、（蒿蹊云、東山家の記のうちに曰は

と見ゆるも哀也。やよいざ櫻といふもの、今もかしこにて唱ふるが、これも記にみゆ。

山ふかくすめる心は花ぞ知るやよいざ櫻物がたりせむ

壁に耳つくとやらむいへるやうに、里の子どもいかで聞きとりけむ、やよいざ櫻とうたひのゝしりて、やがて名とするもいとをかしと有り。延陀丸のもとより（貞德翁の事なり）とて、

とにかくに月は浮世にすまじとや山より出でて山に入るらむ

かへし

こゝもまた炭こそ燒かね大原やあこがれ出でしふるさとの山

又

われもいつのあらましかなふ山里にしめえてぞ見る窻の月影

など、うつり住み給ふ比なるべし。こゝは都遠ければ、とひよる人もまれにや、門人公軌のもとへとて、

小鹽山柴折りくべてわぶとだにこたへむものを問ふ人はなし

なか〳〵にとはれしほどの山里は人もまたれて淋しかりつる

綱目の筆法—宋の司馬公編せる通鑑綱目の書き方

をふのうらなし—をふの浦は越中

趙子昂が黨—子昂は宋の宗室にして元に降りて其身を全うせり

洪範—書經にあり

ぜむと公命ありしかども、再仕の志を斷ちて隱操を全くし給ふといへり。此の說につきていはゞ、東山家の記のうちに、陶淵明をさして晉徵士と書き給へば、綱目の筆法を取りて、自己の志にたぐへられしにやあらむ。されども、稻葉家におくられしことばには、あやしの身の上をさへ、かけまくも畏き玉の臺にきこえあげてむとならし。事はおふのうらなし、なりもならずも、誰ありて、底ひなき此の情を、口に嘗め腹に味はゝざらめかも。とて、うたには、

契り置きし露のかごとをかけてのみいなばの山のまつと賴まん

とあり。此の外にも、あやしと覺ゆることども見ゆ。かくては趙子昂が黨といはまほしきを、姑此の翁のために嘲を解かば、箕子は殷紂の庶兄にして周のために洪範を述ぶ。はた大雅文王の詩に、商之孫子其麗不レ億。上帝既命侯二于周服一といふもの歟。論定は識者に委ぬ。

小鹽山は勝持寺、俗にはなの寺といふがかたはら也。其の住侶の僧忠海のよしみによるとなむ。此の庵のさまも西山家記に見ゆ。さきの東にくらべては、さゝやかにありけむかし。今も其の舊地土塀をかこみて殘れり。後瀨山と題せられし記に、

後瀨山後住む宿も椎が本など落ちぶれて數ならぬ身ぞ

舉白集—十卷、長嘯子の歌文集

九條相國—相國は太政大臣の唐名

○思孝云はく、東山隱遁は三十歳の時にして、慶長五年といふ。あるひは四年ともいへり。舉白集を考ふるに、祖母をいたむ詞に、慶長三年仲秋十三日と記して、少將勝俊とあり。同じ六年の記には長嘯子と書かれたれば、隱遁は慶長四年五年の間にはたがはず。其の所のさまは、彼の東の山家の紀及び朝ぼらけの記、石枕の記などに記されて、共に舉白集中に編り。舉白堂を本居の名とし、半日獨笑寄亭等を構へ、又待必樓には月をまち、松洞臺、鳥羽觀に眺望を極め、歌仙堂をまうけては、六々の歌仙の圖像をかけつらねなど、風流をつくして、幽栖とこそいへ、ひろく山谷林園をしめられたるは、長嘯橋をわたり行くほど百尺あまり、と書き給ふにもしられて、さすがに國主の名殘なるべし。尊貴には九條相國道房公をはじめ參らせ、月卿雲客、および其の世聞名の人々、風流のちなみに訪ひ給ふが多し。しかるに、いかなるゆゑにか、こゝをすてて、西山小鹽にかくれ給ふ。其の東山を出で給ふに、(是寛永十七年のころとかや)

生ける日の宿の烟ぞ先づ絶ゆるつひの薪の身は殘れども

此の歌によりて思へば、財ともしく、此の山莊もさゝへ難くなり給ひしにや。

○蒿蹊按ずるに、政所殿かくれ給ひし後、やう〳〵衰もておはせしにや。或說に十五萬石に封

ろこぶにはあらず、凡あまたの見物者、錢をやらずして散ずるがいたましくて、われは毎日一百錢を與へて不足を補ふなり」といへり。

途中　首夏にあひて

血をわけた虱いぢらし衣更

是等をもてその人をしるべしと、彼の國産の人かたりき。

木下長嘯子

長嘯子は、木下肥後守家定（從二位法印）の嫡男、少將若狹守勝俊、一旦豐臣を賜ふ。政所殿の甥也。伏見の城にあられしかども、思ふ所ありて京に至り、政所殿の守護し給ふ。

政所殿—秀吉夫人淺野氏

○或説に、伏見の城を守らむの約ありて、大坂よりうつりたまひしかども、鳥井氏のために疑はれて退き給ふともいふ。又異姓に荷擔するの義ならざるを思ひて去りたまふともいふ。無レ勇を誚るは大に非なりとぞ。

然るに、世のさまかはりて所領にも離れ、洛東靈山に閑居し、長嘯子また天哉翁といふ。

蓮華王院云云―京都の三十三間堂

なく宿をもとめたれば、又彼所へ行きてやゝ見をりて、終に「此の石を買はむ」といふ。「旅人の重きものをいかに。いづこの人ぞ」といへば、「われは越前のもの也。此の石もて行くべき人をもかたらひてよ」とて、石は商人のいふまゝに買ひて、かのやとひたる者をもておくらするに、賃錢の貴きをもいとはず。故郷へは一封書をもやらず、それ〲の所といひたるまでなりし。それより京へのぼり、所々を見物せる間、蓮華王院の矢數する所にて、和佐大八がいれたるといふ限の木（俗貫の木といふ）を見て、其の志の狹きをにくみ、杖をもてうちて惡口す。さて人、「大佛は大ならずや」といへば、「豐太閤の建て給ふものなれば、これほどのことはあやしむにたらず」といふ。「東西本願寺はいかに」といへば、「時に行はるゝ宗旨なれば、繁昌はさもこそ」といふ。唯黄檗の作りやうのめづらしくて清淨の地なると、石山の石の奇なるをのみくりかへしめでたりとなむ。大坂へ行きては、妻と僕のみ、日毎にこゝかしこ見めぐらせ、おのれはひとりいづこへか出で行くを、宿のあるじあやしみて、ひそかに人をつけて見せしむるに、其の長町の宿ちかき道頓堀の某の所に、乞食の縄をもていろ〱の業するを、杖をたてて見居れり。いくかもたゞ同じ所にて同じことを見る。「これはいかなることぞ」と問へば、「此の業をよ

わらうづ—草鞋

三井養安

三井養安は、越前府中の醫士にて、爲人無欲正直にて、逸興ある人なり。病家より藥謝を贈り、酒肴などを取添ふる時、其の添たるものはかならず返す。藥謝も多き時は其の業のほどをはかりてかへす。しかもまた遊女輩黴毒の療治など乞ふ時は、「汝らは實なきもの也。藥禮はちがひなくせむや」と言をかたむ。凡物をつくろひ莊ることなきこと此のたぐひ也。ある時、表に人來りて案内するに、こたふる聲地の下よりと覺えてこども聞ゆるを、あやしとおもふ間、井の内より養安出でたり。きせるくはへながら、足にはわらうづをはけり。案内せるものおどろきて「いかに」といへば、「あまりあつきに堪へず、井の内に入りて涼みたり」とこたふ。「わらうづはいかに」といへば、「階をさしている故に、すべるをおそれてこれを著く」といへりしもをかし。六十ばかりの時、其の妻と僕一人をつれて、伊勢より尾張京大坂大和をめぐる。名護屋にて商家の見世に、石に小き木艸植ゑたるをめでて、杖をたててやゝ見をるを、妻僕などは、ゆくさきをいそぎて、「いざ〳〵」と催せども去らず。つひに「此の町にやどりとらむ」といふに、せむ方

津田一清

一清は訓じてねずみと稱ふ。津田氏、字は復素、通名市兵衛といひしが、剃髪の後は、諱の字音をもて稱す。京師京極の產、極めて無我の道人也。赤貧にして拘はらず。大佛耳塚の邊に住みし時、家の内に筭生ひしより、友人擧つて竹亭とよぶ。池大雅に從ひて書をまなび、蠅頭書（極細字をいへり）に名をしらる。扇面中數百の詩歌を詠ず。又よりく自から歌を詠ずるが、ほこりていふ、「古人の體なり」と。中比江戸に遊び、書をもて諸侯に賞せらる。後皇都にかへり、祇園林又第五橋の東に住むとき、朋友及び近隣を訪ふこと一日に數十度、往來隙なく、起坐定まらず。こゝをもてねずみと惡稱するにやと人のおもへるもをかし。年毎の春秋に、友を招きて燕宴す。そのたびごとに、酒器酒瓶皿鉢やうの器、陶ものにして新に調ず。宴終れば、列座の人々に與へつくして、一つもたくはふることなし。歿後家の内におりしものを賣りしあたひ、はつかに南鐐一片ばかりになりぬるも、めづらししとぞ。是は五條に住めりし時、隣家なりし出原宣伸實をもて記せり。

筭—竹の子

南鐐—銀一兩の八分の一、即二朱銀の稱

近松門左衛門―淨瑠璃作者巢林子

大祿の人―多く知行取る人

は幾日なりとも看給へ。われに損なし」といへどもきかず、「人の花は見て面白からず。わが花にしてこそ興はあれ」とて、此の後花信至れば、年々酒を携へて、花下に醉ふ。後迄玄知が梅と名付けたり。又國侯上途のついで、陪從の臣間暇あれば、名所舊跡を探り、神社佛閣に詣づるを、玄知はかつて出で遊ばず。一日同寮に告げて、少間を乞ひ、金壹方を包み、近松門左衛門が宅に至り、名刺を通じ對面をこふ。門左衛門出迎へたれば、彼一封を贈り、熟其の面貌を見て、「早歸らむ」といへば、主、「こはいかに。何ぞ問ひ給ふことの有りて來り給ふにはあらずや」といぶかれば、玄知「さて問ふべき事はなけれど、足下は淨瑠璃の作に妙にして、兒女といへども名をしらざるはなし。依りてわれ、其の面はいかならむと思ひて、頻に見むことをほりせしに、今正しくまみゆることを得たれば、他に用もなし」とて去る。又ある時、連歌の會に大祿の人を招きしが、其の人厠に往かむとす。玄知「案内申さむ」と、やがて鍬を持ち出でて「こゝへおはしませ」といざなひて、庭中に地を掘り窪めて、「おのれつねに用ふるは穢らはしくて、大人を誘ふべからず。是は新しくて潔し」といへり。

出雲國侯—出雲松江領主、松平家
茶道—茶坊主、茶の湯の役を掌る役
矮屋—小さき家

死んでゆく所はをかし佛護寺の犬の小便する垣のもと

龍源山佛護寺といへるに葬ればなり。

岸玄知

岸玄知は、出雲國侯の茶道にて、和歌を好めりとぞ。或日郊外に出でて徘徊し、農夫の圃邊に梅の花さかりに開くを見て、甚賞し、やがて「此の梅樹を買はむ」といふ。圃主肯ぜざるを強ひて望み、高價をもて約せるが、もとより産業を治むる意なければ、赤貧なるに、家具を傾けて代銀をとゝのへ、あけの日懐にして農夫に與へ、又酒を携へて花下に賞詠し、晷をうつす。其ののち、月日を經ても、移し栽ゑざれば、農夫來りて「いかに」と問ふに、玄知「いな、汝が見るごとく、吾矮屋大木を容るの地なし。其の樹はいつまでも汝が所に置くべし」といふ。「さあらば、實熟せば持ちて來たらむ」といふを笑ひて、「吾は花をこそ賞すれ、實に望なし。汝これをとれ。唯花のため木を傷ふことなかれとおもふのみ」と。農父おどろきて、「もと此の樹を高價に賣るは、實の多きがゆゑ也。吾が地に置きて實をもとめ給はずば、價銀を受くべきにあらず。かへしまうさむ。花

卯月佛生日
―四月八日
釋尊降誕の
日

て慈愛深き質なれば、人に物を與ふるを惜まず。奴僕をも呵り責むる事をせねば、彼の者どもは、よきことにして、明けくれ酒を汲み遊興しけるにより、家業保ちがたく、本家にかへり、父の家を相續して、一旦久右衞門と改名せし折から、安藝廣島なる芥川孫右衞門より、其の家柄を望みて舍弟某を養子に乞ひけるに、「汝は家を繼ぐべし。われゆかむ」とて、其の儘返答に及び、つひに廣島へ至り、其の家を受け繼ぎ、久五兵衞と名乘り、家父の勤めける坊間の長役をも繼ぎつとめける。其の歲三十歲也。後、家父死して、例の貨を惜まず、或る時は人に謀られなどもしけれど、物とも思はず。かゝる氣象なれば、上々の御覺えは大方ならず、あるは莫大の恩賜をも蒙りしとぞ。やゝ老いて備中實家の姪を養子にし、家を讓り、明和の初、二月望佛滅日に髮を剃り、さて遠く旅立つよしをいひて、實は禁足していでず。同じき卯月佛生會の日、別莊に退き、貞柳より讓りたる又生庵といへるを閑居の號とし、彌狂歌をもて樂みとし、門人も又千餘員に及ぶ。又良藥妙方を調じて施し、謝を求めざれば、他邦にも聞えて乞ふ者多く、あるは藥方を傳へて弘むるも有りしとぞ。安永八丁亥歲正月二十一日病みて歿す。行年八十一。狂歌の撰集多し。辭世は、

奇とするに、父ひとり不興氣にて、「汝其の艱苦の間、此の金は如何してもちたるや」と詰る。こたへて、「或る時は土中に埋み、又は床の下、人の心づかぬ所に藏し置きて、かくのごとし」といふ。父怒りて、「汝いよ〳〵勘當の許されまじき者也」といふを、親類みな〳〵あやしみて、「かく迄苦心の間に此の金を失はざるは、奇特におぼゆ。何故かくは仰せらるゝぞ」といふに、父いふ、「金は町家におきては城廓鎗刀のごとし。其の大切なる金を取り放ちて置けるは、大將の城をあけて、遊行せるに同じ。身を保つべきものは左にあらず」と、大にのゝしりければ、

閑田子いふ、此の說いぶかし。此の人金放ち置くは、人に盜まれ、あるひはうたがはるまじきため、又其の金をつかひ捨てぬは、全きながら父にかへさむがためにて、身は艱苦を經ながら愼しむは、其の性質の淸きによろべし。されども、此の父の意をもていはば、商人は金を殖すをつとめとすべきに、いたづらにかくしおきて、身を立つることを知らずとは叱すべきにや。おそらくは傳聞の誤ならむ。

一類もいはむ言なし。唯一筋に侘びて、從來の心得などかたくいましめけるによりて、免しぬ。其の後元銀をあたへ、別屋をまうけ、造酒の業をなさしむるに、元來無欲にし

雲介―譯路に徘徊して駕籠を舁き又は賤役に從ふ住所不定の者

牙人―周旋人

宿も定めぬ雲助といふものにもなり、あるは代神樂の長持をも持ち、其の外さまぐ\〜變化してありきける間、大坂にてある家の炊夫を勤むるとき、主の子息皷を打ちけるに、拍子合ざりしかば、おもはず手拍子して、「其の間は何の文字にあたりて」などつぶやきければ、其のいふまゝにうちたれば、果して安かりけり。是によりて、其の人がらゆかしく、委しくやうすを問ひけれども、かつていはず。こゝも暇を乞ひ捨てて出で、又異所に同じく炊夫にて居けるに、ある夕つかた、其の牙人を案内にて、見ざまよき男入り來りてあはむといふまゝに、釜の下を燒き居て、長火箸持ちながら出でて對面しければ、父丸山氏の手代也。此の人のさまかはりたれば、おどろきて「こはいかなる御ことぞ。過ぎしより方々を尋ねめぐりし子細は、父上より勘當をゆるし、召し歸されむとのこと也。直に歸國の御供せむ」と誘ひけるに、其の家牙人も其の人がらをしりて、詞もなかりける。さて本國へ歸りて、親類のもとへ落ち著き、ほどなく本家へかへりし日、一門集まりたる中にて、父久右衞門出でて、「汝年月の艱難に性根も定まりつらむと、親族の侘により勘當をゆるしつる也。まづたづぬべきは、家を出でし時あたへし二百金は如何せしぞ」といへるに、其の儘懷より取出して、封の儘戻しければ、傍の人々は皆

―蹴鞠を家職とする家　庖丁―料理法　立華―いけ花　由縁齋―大阪の狂歌師鯛屋貞柳、奈良の墨を禁裏へ上るとて、「月ならで雲の上まですみ登る是はいかなるゆえんなるらむ」と詠みて上りしより油烟齋の號あり　別業―別莊

知る。三絃は、野崎検校の門に遊び、尺八は明暗寺の徒にとふ。其の餘、茶、香、圍碁、双六、亂舞、連俳、狂歌、卜筮の術等、わたらずといふことなし。唯立華と戀のみちばかりは未師匠なしと、其の末にかけるもをかし。中にも狂歌をことゝし、浪華の由縁齋が流を傳へて、世に用ひらる。其の始遊藝に長じ、家産に疎く見えしかば、父しば〱諫むれども用ひざれば、せむかたなく勘當す。其の時親族のはからひによりて、父より金貳百兩をあたへぬ。かくて、播磨明石の邊にさまよひ、あるひは傭人となり、又團子菓子など作り賣りて、月日を送りけるに、其の人がらいやしからねば、いくほどなく、其の所に親しみ出で來て、ある別業の番人となりける。或夕つかた主客とも蹴鞠せしとき、鞠、垣の外に落ちしに、貞佐は其のほとりを掃除して居ければ、あるじ「それ〱」といふ。こゝろえて垣の外にてまりを蹴て高足し、垣の中心に蹴入れたる、其の有りさま甚うつくしければ、皆眼をおどろかし、姓名をとひけれども、あかさず。又ある時、人々碁を圍みけるに、傍よりけしからぬ助言しければ、碁を嗜むことも人に知られぬ。其の後狂歌など折々綴り、遂に彼の別業の留主居となり、茶の指南をもして、先生と呼びたふとまれけれど、それも倦みけるにや、上がたへ登り、大津わたりにて、旅人の荷をかたげ、

づけて崇むるさまなるを、ちかき花柳街の者どもは信じて、詣でしなども聞きぬ。さしたる悪心といふにもあらず。兎にも角にも、世を翫弄して遊びしとおぼし。おのれ先きに書林の需によりて、其の著はせる「すゞみ艸」を校合し、序をも書きてあたへぬ。今また此の傳を除かず、潤色して花顚が意に應ずるものは、其の才の企及ぶべからざるを賞するものから、予も亦此の人を翫弄するなり。見る人罪することなかれ。

すゞみ草—三卷

芥川貞佐

貞佐は、備中笠岡丸山久右衞門といふ人の子にして、幼名河吉とよぶ。爲人卓犖不覊にして奇才あり。幼より諸藝に心をよせ、甚穎敏なれども、必其の奥祕を極めむともせず。されどもかりにも吾が師とたのみたる人をば尊崇し、一小冊に其の教の旨趣を委く筆記して他日の遺忘に備へ、これを乞食嚢と題す。それが中の要を擧ぐるに、弱冠にして東涯先生に親炙し、親義別序信の端をきく。飛鳥井家にまうでて蹴鞠を學び、また紫下濃を免さるにおよぶ。四條家に隨ひては鯉鶴の庖丁までを傳へ、禮家によりては食饗の式粧を

卓犖不覊—見識高く氣儘

親炙し—直接に其の教を受け

親義云々—五倫五常の教

飛鳥井家

胸臆に云々
ーつくり出
したる也

ごとく、寶の山の俳諧を捨てて、片歌一道の祖といはれむ事をねがひたる志捨てがたし。何はともあれ、此の一條におきては、人のせざる所也。これをいはむとて、他のことにも及びしなれば、見ぐるしきふし〳〵も眼の役なりと見過し給へとこたへし」とぞ。閑田子もむかし田舍にて、四五日がほど日々にまみえしかど、京にかへりては、訪ひもせず。其の人がらいぶかしく思ひしが、生涯の行狀をよく知る人に聞きし所、本傳に擧ぐるがごとし。其の所行は、とるべき所なけれど、全體膽勇有り、才拔群にして、世人を見ることは、みな嬰兒のごとくなれば、物にものとせられず。さるから爲す所いふところ虛實さだまらず。自から人の恩義に背くことあれば、又人の吾が恩に背くも心にとゞめず。亡命して僧になるかとおもへば、還俗して俳諧師になり、それも倦みては又古學を唱へ、畫を業とす。生涯醉ひたるか醒たるか知るべからざる人也。古本伊勢物語といふものを印刻せしを、「予これはいづこよりとうで給ふものにて。眞名伊勢とも異なるは、さだめて傳來あるべし」と云ひしかば、唯微笑してありしは、其の胸臆に取りたる也。京師知恩院門前に住めりし時、黑き狐の皮を得て、是をもて生けるがごとく作り、其の庭に莊り、黑狐神と名

上野熊谷―武藏熊谷の誤安永三年年五十二

進すべしとの御命有りて、金三百兩を賜ふに、其の金もて、かねて愛せし吉原の遊女を買ひとりて、留守に殘して旅立せしが、此の女、岱が門人に通ぜるよしを聞きて、やがてうちくれて心をとゞめず。さて六とせを經て長崎より歸りて後、彼の君畫のことをとひ給ひ、「何にても書きて參らすべきよし」命ありし時、墨ぐろにえもしれぬものを書きて奉る。「こは何ぞ」とあやしみ給へば、「山芋也」とまうす。嘲弄不敬の旨にて其のまゝに出入をとゞめらる。これはもとよりはかりし所にて、恩を蒙りしものから、生涯羈せらるるをいとひしなりとぞ。其の後俳諧をも止めて、京へのぼり、もはら片歌をいざなふ。はてに妻を伴ひ東のかたにあそびしが、上野熊谷の驛の門人のもとにて、病して身まかれり。

此の伴ひたる妻は、彼の眞淵につきて學ばしめたるものなり。これは長崎より歸りて後、深川の妓の才あるものを買ひ取りたるなりとぞ。然らば、古學に改めし年記知るべし。

右華顚子が書き置けるうへに、予が知れる趣をもて潤色す。華顚附言していふ、「此の傳を記す時、傍人凌岱が爲人を誚りて、此の傳を除くべしといへり。もとより吾もしかおもへれども、およそ人として、富を好まざるものはなきに、自からいへる

花山院右府―右大臣花山院常雅

冠舃―題の詞の假字を毎句の首に詠み込むを冠といひ尾に詠み込むを舃といふ

七歩の作―詩文を作る者の敏捷なるを云ふ語魏の曹植七歩間に詩を作りし事

鼓舞―達者に書く事

として見せむ」とて、風狀があさがほの句したりといふ其の題にて、古風中古今體の和歌三首をよみ出し、又其の一首を冠にして、三十一首、又舃にして三十一首、はては舃と冠にして三十一首、須臾に九十六首を成し、「此のうへは、はいかいをもせむ」といへりしかば、風狀も詞なくてかへりしとかや。閑田子もまたまさに知ることあり。ゐなかにて出であひし時、戯に付合の景物を人に好ませて、言下に俳諧の歌仙一卷を終へたり。さし合何句去りなどいふ法少しもあやまたず。花の座に隣りて、或者梅と好みたれば、

加賀の御紋を拜領の禮

と付けたりし類、達者といひ、氣轉といひ、其の才は七歩の作にも讓るべからず。唯よみ歌においては、元來熟せぬものなれば、風狀をおどろかしたるも、しるものはうなづくべからずとおぼし。國風の文章は、もとも古雅にして、筆の鼓舞比類なし。先に俳諧せし時も、其の家風の文章ども、人を絶倒せしめたれば、古言にかへてもかくのごとし。俳諧の書、物語ぶりの書、片うたの書、畫帖など、著述數多印行す。畫のことは、はじめ何の流を學びしや知らず。江戸に在りし日、或高貴、長崎に至りて、熊斐に學び、昇

乙由、芭蕉門人、伊勢山田の祠官、麥林舍

還俗し―僧を止めて俗にかへり

淡々―松木淡々

片歌―和歌の一體、五字七字七字の三句にて成る

旋頭歌―和歌の一體、五字七字七字の三句なるを二首合せたるがごとく、本末共に各五七七の六句に讀める歌

の伎をもて富をなすもの、浪華の淡々と、此の人に並ぶ者なしと聞ゆ。然るに、其の間に賀茂眞淵興りて、もはら萬葉の古風を弘むるにより、其の妻を門人とし、おのれはうち〳〵に其の說をとりて學ぶ。終に俳諧を止め、片歌といふことをとなふ。これは古事記に出でたる日本武尊の御作歌、

　にひばりつくばを過ぎていくよかねつる

とあそばしたるに基す。これをせどう歌の片歌といひ、五七五の常のさまなるをも、片うたといへり。此の風を起して後いへらく、「俳諧は無用のあだ言なりと知りたるより止めぬ。片歌の用ひられぬは、もとよりの覺悟なれば、畫といふ業をたてて、口を糊す。「人は用ひずとも、片歌の興起は我也。これがために、俳諧といふ寶の山を出でて、片うたといふ淵に身を投げたり」と。つひに伊勢の能保野、彼の日本武尊薨じ給へるあとに石碑を建て、また花山院右府公に請ひて、片歌道守といふ四字を書きて賜はりしを、梁上に揭げて、萬ともしく心のまゝならぬ時は、これをあふぎて憂を遣るといへり。此のころ京師に正木風狀といへる俳人、岱が俳諧を謗るをにくみて、たいめしてさまざま難じけるを、岱わらひて、「俳諧を執するは、他をしらぬ故也。今試みにしにくきこ

ば門生の人に祐見といへるが其の家を嗣げり。

建凌岱

凌岱は、建部氏なれども、建の一字をもちふ。はじめ俳諧を業とせる時、淺艸門前に住み、雷神のかた〲に風神の袋負へる形ををかしとて、自から涼袋と名乘りしが、俳諧を止めてのち文字を凌岱とあらたむ。國風の歌文章には綾足と稱へ、畫には寒葉齋と號す。東奥の士にして、若き時身のほどの高き人に思はれ、其のことあらはれむとして、亡命し、平安東福寺に入りて出家し、やうやく登りて喝首座といへり。性物にさとく、才藝人の跡を踏まず。或時、人のもとにて、はいかいするを聞きて、「おのれもしてこゝろ見む」とて、一句を吐きけるを初にて、三月ばかりも過ぎては、其の導きし人の句を批判し、作りかへなどせしを、其の人閉口するほどになれり。後加賀にあそび、俳諧に名ある希因といへる人に學びしが、希因は心ある人にて、僧のあまりに此の伎に耽ることを戒めければ、腹立ちて交も疎くなりぬ。伊勢に行きて、乙由が流を學び、終に還俗して江戸に住み、俳諧をもて鳴る。風義は伊勢にて、しかも新奇自在のもの也。されば、此

淺草門前—江戸淺草金龍山淺草寺の雷神門前

東奥の士—陸奥弘前藩士

希因—加賀金澤の人、中川乙由の門

乙由—中川

陋室―狹き室

隱就衡門晝倚關。柴桑幽趣畫圖間。黄花裏露香將散。
碧柳無風條可攀。印綬一朝甘棄擲。琴書百歳老清閑。
世人但說陶公醉。氣象由來萬仞山。

右依予需題陶靖節之畫圖。

附、此の門人のうちに、京師粟田に望月立三といふ醫有り。もと職を業とせしが、志を發して學問し、醫になりたり。爲人無我にして、醫療の暇には風雅を翫び、ことには狂歌狂句など、すべて戲言をよろこぶ。學を好むのあまり、今岡、山城といふ謠曲の文義を講ずるに名をえたる男、學術もありけれど、放蕩無賴の酒徒の許をもとひて物をとふ。時々金錢をもとむれども、それをも厭はず。坐する所もなき陋室にゆききするなど、其の氣象知るべし。生涯妻を携へず、かりにも青樓妓館にのぼらず、凡女色に觸れたることなし。或友人妻を娶ることを勸めて、「子もし病みたる時、介抱の人は妻にしく者なし」といふ。立三笑ひて、「吾病むときはよし。もし彼が病みたるときは、吾が勞をいかゞ」とこたへしに、又いふべきやうなかりしとぞ。惜むらくは、四十三歳にて身まかりしが、一奇人といふにたれり。子なけれ

追手―城の表門
搦手―城の裏門

「今参る道の湖上にて、詩一首つかうまつりたれば、申しあげむとて、ゆくりなくまかり出で侍ふ」とはいひけれど、實には詩もなければ、俄に一句々々綴りて申し出しけるまに、侯も怒とけて、こゝろよく物がたらひ給ひけるとぞ。これらは、意勇壯に、詩も達者なる德也。疾病なる時、同國蒲生郡羽子田といふ所(守山より今の道六里ばかりやあらむ)に久祥庵といへる醫をまねきて診せしむ。此の醫藏書家にて頗文字もある人なれば、病者いふ。「予年來、老莊を嗜むがために、心志を勞することなし。又數年淫事を斷つ。腎氣は定まりて健なるべし」と。醫頷きて「誠にしかり。追手搦手の守りはよけれど、いかゞはせむ、城中兵粮盡きたり。城中は脾に充べし。救ひがたし」といへりし。平生杯中の物のみならず、魚肉菓餅の類までしきりに喫する人にてありしかば、理に覺ゆ。六十にたらずして、此のたび終られし。著述多けれども、皆稿を脱せず。をしむべし。其の詩集も家に有りとぞ。今おのれがために、よせられし作を掲ぐ。

右予訪時席上作

田園風月夜。藜杖忽相迎。燈照親朋面。樹傳喜鵲聲。
酒聊酬厚意。談重結芳盟。此坐賓與主。何曾惹俗情。

粟田宮—青蓮院

膳所侯—近江滋賀郡膳所領主本多侯

なく、起つもはした、居るもはしたにて、おもひ煩ひける間、雨ます〳〵に盆をうつすがごとくなるに、門外より主人の聲して「今歸りたり、嘸つれ〴〵におはさむ」といふに、おどろきてみれば、簑笠を著、手に網を携へて入り來たり。「一獻を勸めむに、さかななければ、ちかき川の魚をとり來れり」といへり。又在京の日は三條橋東にありて、粟田宮へも講を奉りしに、ある時、門人望月立三なる人の許にて、古島伯子なる老醫に對面す。伯子卒に、一百錢を出して酒を買ひ、有りあふ枯魚やうのものにて、獻酬におよぶ。然るに、其の明のあした、とく禮服をつけて出でらるゝを、宮へ參らるゝにやとおぼえしに、程なく歸りて、「伯子のもとへ謝禮に行きたり」といふ。「こはこと〴〵しきことかな」といぶかれば、「いな彼の人は吾が門生にあらず、舊交にもあらず、故なくして吾が好む酒を勸めらる。厚く謝せずばあるべからず」といふ。其の所行、大むね此のたぐひ也。又をり〳〵膳所侯へも參らるゝに、一時近侍あわて騷ぐ所へ行きかゝりぬ。「今しか〴〵のことにて、手討し給はむの趣なり。先生しらぬふりにて、罷出でて紛らはし給はば、事平ぎなむ」といふ。ぜひなくふとおまへに出でたれば、侯もさすがにさまあしとやおぼしけむ、白刃をかくし、鞘にをさめ給ふ。それも知らぬもののさまにて

はむとするに、行方しれず。あるもの、「此の人は心得よければ、江戸の方へ行きしならむ」と、東海道をさして追はせしに、はたして草津の驛にて追ひ付き、さまぐ\にこしらへて伴ひかへり、本領を返し給ふのみか、加增を賜ひて、褒め給ふとなむ。此ののちは、其の武藝のほどもしりて、もてはやしける。今もその家つゞがなく傳はるとぞ。

宇野醴泉

醴泉宇野氏、名元章、字は成憲、通名長左衞門、近江守山驛の人、若きより學を好みて博聞强記也。はじめは詩を作らず、一旦手を下すに及びては凡ならず。且書は趙子昂を學びて、一畫、一點といへども、其の法によらずといふことなし。故に宮筠圃について、人是を稱す。然れども、爲人活達不拘にして、家產衰ふるをもて、あるひは鄕黨のために、謗を得ることあり。豪飮にして、談笑の聲四隣をおどろかす。しばく\京師に往來して、交遊多く、奇話も多き人也。今一二を擧ぐ。江村北海(通名傳右衞門)東行のついで、其の門を訪はれしに、日暮に薄り、雨も頻にふり出しぬ。まづさし入りて纔に寒溫の言終り、頓て投宿のことをも乞はむとおもひしに、主人忽見えず。客いかにともせむかた

宮津某

丹後宮津青山侯(今美濃郡上に封をうつさる)の臣某、(故ありて姓を擧げず)常に豪俠放逸にして、家に在りては斗米の蓄なく、他に行くには歩みに代ふるの輿馬なし。妻妾なければ子もなく、只ひとり明かし暮し、衣服調度の類も、代なして酒に好き、起きては呑み、臥しては呑み、醉ひて泥のごとく、人を見ることは、塵芥のごとく、物をものともせぬしれもの也。つひに其の不行跡に罪せられ、所領家財をめされ、追放にあふ。其の時役人立會ひて、家財をしるすに、廣き家にあるものとては、疊四帖、筵三四枚、蒲團一ツ、小鍋と釜の破れたる、徳利に茶碗三ツ四ツばかり。下駄一足あるも片々にして揃はず。唯あやしきは、戸棚ひとつ嚴しく錠をおろしたれど、雨漏ると見えて、上に古き合羽を覆ひ、其の合羽も破れたれば、又竹皮の笠をおほへり。「是はいかに」と錠を押切りて開きみれば、藍皮縅の具足一領、誰が作とはしらず、貳尺五寸の刀一腰、新に砥を出づるが如きものあり。其の傍に金三十片、服紗に包めり。見るもの膽を消して詞なく、急ぎかへりてまうしければ、侯もおどろき給ひ、四方に人をはせて、招き返し給

ならぬ香氣あり。いぶかしく其のかたをさして行くに、島原の廓柏屋といふものの家なり。彼の紅塵の香にたがひなければ、入りて尋ぬるにしるものなし。しひてもとめて、人毎にいはしむるに、一人の女の童、「此の比某の女郎の櫛笄を作りたまふ木屑のありしを、よきにほひする木なれば、火桶にくべしが、其の名殘にや」といへば、やがて明の日、殿下にまうし上げけるに、盜みしは、其の廓に遊ぶ士なること分明にて、罪に行はれしとなむ。閑田子おもふ、よを捨て人のよしなき能によりて、罪人の訴人となるは、うたてしきことなれども、其の能は希代のこと也。此の僧、畫もよくて風韻あり。和歌をも好みし人也。花顚數首を出されたれども、常調なれば略きて、今二首を掲ぐ。

子規頻

ほとゝぎす待ちし恨も忘れねどこの曉ぞをちかへり鳴く

釋教

法のため歎かざらめや別れ行く道のちまたの人のまよひを

壽八十有餘にて歿し、鳥邊山に收む。

連理云々―以下皆香の名

喪空屈指。己辰運會幾傷情。茫然三十年來事。攀樹徘徊泣龔塋。

僧惠南

惠南名忍鎧、號空華子。平安の人也。聞香に長じ、一時に鳴る。連理燒合五味七國をきしるのみならず、凡物の臭氣をきくこと常ならず。或雪の朝、雪もてさま〴〵の物の象を作りて童の持ち來りしを見て、「此の兎は某の家のあたりの雪か」と問ふ。童ども「しかり」とこたふ。「其の作りたる人は某か」ととふ。又「しかり」といふ。傍の人おどろき、「香のみならず、雪までも鑑定し給ふや」ととへば、微笑して、「此の雪魚臭きにほひあれば、其の家をさし、又其の載せたる板も、臭氣あれば、其の人をしりぬ。其の人は魚賈なれば」といへり。又何某の宮の御殿に紅塵といへる名香あまたたくはへ給ふが、或時やゝうせたれば、殿下の御沙汰となり、武邊に仰せて捜しもとめ給ふに、惠南其のころ名譽あれば、殿下へめして、「聞きしらずや」と問はせ給へども、もとよりしらぬことなれば、其の旨申しあげけれどもここちよからず。いかにもして其の在所をしりたく思ひしが、東寺の御影供にまうでむと壬生より過ぐる道、一陣の風吹き來りけるに、え

臧否―是非

君爲人沖默謙虛。口不言財利、不臧否人物。有溫厚長者之風。少善書。學李北海、雲麾岳麓二帖。其最所注意。晩年名聞于海內。門人以千數。平生自奉甚儉。不貯長物。性嗜豆腐。葷血絕口。信觀音菅神。手寫金剛孝經、朝夕誦以祭之。天稟虛弱善病。寬政壬子秋、冒暑得疾。遂不起。卒日猶寫數字、書辭世詩、閣筆而逝。末句曰、「孝經一卷在。受用傳兒孫」。余締交三十年。終始如一。余不能書。每一詩成、倩君寫之。他有請者、雖奴僕、欣然書與之。略無沮色。以余視之、近世平安第一等人物也。昔者王履吉、溫醇恬曠。與物無競。人擬之黃叔度。君其庶幾乎。惜夫年命不永。享年才五十五歲。門人建碑于墓側。朝貴撰文勒之。二子忠誠相成。忠誠嗣業。不墜家聲云。

女嫁男婚累已輕。惟將筆硏慰平生。跳龍翔鳳霄間氣。片紙殘縑海內名。厨具黎祁屏四篋。帖藏岳麓當連城。寫經緬慕魯山逸。絕葷潛比輞水淸。拙句輝光煩子手。佳篇黥劓索余正。巨卿不負東西約。（往年余在江戶時。君約東下相訪。至期果來。以余爲居停。留寓一月餘。）立度長尋風月盟。每恨望秋蒲柳脆。尤哀惜日崦嵫盈。天公憒憒終難倚。神理綿綿詎可明。郢壟輟斤歎暮景。鄭蕉原夢對孤檠。好兒賴有藍氷在。隆碣仍傳華袞榮。耆舊凋

らく、「艸書は其の始古轍によるといへども、漸く成熟に至れば、其の神を融し、筆を暢べて至極に及び、天地自然に委ぬ。その自然を得むとおもはゞ、先づ心を正しうすべし。心身明らかならずしては、無我の意地に至ることあたはず」といへり。當時書家七十有餘の中、握冠たりと評せり。又韓使焉齋も翁の書を見て、韓山一片の石と賛す。武南窻其の筆意を傳へて、これもまた洒落の一歌人なりしが、去る年の夏、歸泉せり。

○閑田子按ずるに、韓山寺碑は、北魏人溫子昇作レ之。庾信云。「韓山一片石。唯可ニ共語一而已。其餘驢鳴犬吠」此の語をとりて評せしなるべし。

觀鷲永田氏、名忠原、字は俊平、一號東皐、又黎祁道人といふは、豆腐を嗜むこと甚しければ也。（黎祁は豆腐の異稱なり）又一奇僻は、糠漬の菜（俗に香物といふ）を惡むこと蠱毒のごとし。吾が儕席を同じうする時も、これを喰ふことを憚る、其の香を忌むが故なり。或尊貴へ參りし時、御戯に試みむとおぼして、此の物を幾重もつゝみて、御手づから下し賜はせしを、とりもあへず顏眞靑になり、覺えずなげすてて走れり。其の公も、「あまりにてよしなき事せし」と、悔いさせ給ひしと也。六如上人交殊に深ければ、十二韻の哭詩幷に引あり。其の爲レ人を盡せれば、左に揭ぐ。

畫を見しに、鯉の全身を飛泉にすかして見せたるが、墨色をもてわかつ趣など奇なるものゝ也。水中の占魚は得意にしてあまた書けり。一旦江戸にありて、或る高貴の命により、墨畫の鷹を畫けるが、諸人に勝れたるより、大きに名を得、法橋より法眼に敍す。古澗和尙に從ひたる故にや。淨家の佛學ありて、阿彌陀經の曼荼羅を畫きて印施す。又近江或寺の内陣に、大經の意を山水にして畫がけるなどは、甚賞すべきもの也。九十計までながらへ、尙畫力おとろへず。眉間に疣ありて、後には毛を生じたれば、畫名に眉間毫翁とも書けり。爲人風流にて、山川の美景に對して餘念なかりしを、おのれが少年の日、湖水の入江に舟をともにしてしれり。

大經—佛說無量壽經の異稱

○右二傳は、閑田子が補ふ所にて、花顚あらましかば、畫品につきて評する所も有るべけれど、もとしらざる藝なれば、唯うちみる所と他の品するをあはせて錄し、當否は識者に委ぬ。

大橋東堤　永田觀鵞

東堤、大橋氏、名富之、字は子敎、平安の人。性和氣慈順にして淸操あり。眞行草ともに能くす。就中草書は一筆一行に寫すること張顚が風也といへり。門人にしめしていへ

張顚—後漢の張芝、草書の大家

高田敬輔

御室の御所
—山城愛宕
郡嵯峨仁和
寺

敬輔高田氏、近江日野賣藥屋の子なれども、產業に疎く、わかきより御室御所に奉仕してありし間、たゞ畫を好みて、其の比淨福寺古澗和尙、畫に長じられしかば、從ひて學ぶ。

○古澗和尙の畫、飄逸一家をなせり。大畫には、泉涌寺本堂に掛る涅槃像あり。もと大佛殿へ納めむために書かれしを、譯ありて當寺へ寄附せらる。又嵯峨淸涼寺釋迦堂後門に毘首羯磨佛像を作る所の畫などあり。常に大黑天を好みて書かれしを、人も賞す。山水なども希にあり。山水中の人物はやゝ大なるも眼鼻わかれず、しかも離れてみれば體貌所作さだか也。よに人物艸畫といへる印本、飄逸至極のものなれども、筆者を記さゞるが、此和尙の筆也と敬輔話せられしとぞ。

しかも和尙、「おのれは其の家にあらず。且彩色にくはし。狩野家によりて、極彩色の法をつたふべし」とて、紹介して狩野某に學ばしむ。されば、しばらく其の家風を畫くといへども、つひに自から一家をなせり。人物の形狀、又墨黑なる趣などは、頗る古澗和尙に似て又墨の濃淡をもて密畫をなすは、其の工夫に出でたりとぞ。登龍門の鯉の

ぐみけれど、なかばに辭するもいかゞにて、日比に及びし」といへりとかや。婁もひそかにいふ、「かばかりの畫は日に十枚は書くべけれど、むづかしくせざれば、頻にもとむるがうたてくて、こらしめたるなり」とぞ。

望玉蟾

望玉蟾、もとは望月藤兵衛といひて、印籠の蒔繪を業とせしが、池大雅と共に、漢畫をはじめむといひて、此の老は唐伯虎を學び、又諸家の長ずる所をとりて、つひに一家をなす。はた漢學もありければ、圖を心にまかせたり。殊に人物を畫くに長ず。爲人飄逸にして、しかも溫和なる人也。ある時、畫をこふ人、「貴老の畫は妙なれども、名字唯三字にて、他人の官位あるひは號など長く書けるにくらべてはけしきなし。何ぞ其の名のうへに書き給ふやうもや」といひしを、點頭してありしが、畫とゝのひたるうへにて見れば、日本鍛冶宗匠三品伊賀守來金道上町　望玉　蟾と書きたるに、のぞみし客も絕倒せしとぞ。此の門人に、僧鼇山及び水月など畫名ありき。

れて走り去り、あたりに人なくなりたるに、斐獨自若として、其のさまをうつせり。其の迯げさりたる人かたらく、「虎頭を擡る時、其の眼のうへより丸き光りもの出でて、人を追ひかくるやうにおぼえて堪へざりしに、斐が大膽不敵いふべからず」と、舌をふるひしとなむ。又或人配幅を斐にたのみけるが、三とせを經て筆を染めざれば、まちかねて、「もし畫き給らば、息女の長じ給ふを一人、こなたより萬とゝのへて、さるべき所へ嫁せしめまうさむ」といふ。斐は家貧しく、彼の人は富みたれば、畫をのぞむことせつなるあまりにかくいひたる也。さるに、斐大きにいかりて、「おのれもとより畫工にあらず、職は譯官なり。畫を書きて女を嫁せしめたりといはれて、面目あらむや」と、たゞちに其の絹をかへしたりとぞ。又權門より席畫を望みてまねかれし時、あらかじめ聞き知りたる人、我も〳〵と紙を携へ、酒肴をとゝのへて待ち居たるに、午後斐來りて先酒のみ、筆硯を出して、朽墨など取まかなひながらねむり、やがて打倒れて高鼾す。見る人あきれて皆歸りたる後に、眼をさまして、手水などして、又酒をのみ、時をうつして、其の日はかへりぬ。其の明の日また行きてきのふのごとくす。かくて五日が間、たゞ同じさまにて、はつかに鷄の畫をなせり。招きたるぬしは、「よしなきことに客あつかひしてあ

に火をともし、天下第一の歡樂なりといへり。其の磊落豪放、およそ此の類ひとぞ。北窻翁とせしは、いつよりのことにか。はじめは攝津の國にあり、後江戸にすめり。文雅も有りし人と思しく、自贊の發句ある畫もみゆ。歿する年七十一、麻布常教寺に葬れり。

〇蒿蹊云はく、島にて出生せる子、後に江戸へ來たるが、畫はよくしたりしかど、人がら野鄙にして、禮法なく、實に島人にてありし。世に是を島一蝶といふ。早世して殘る畫甚稀なりと、よく知る人語りぬ。弟子一峰、英の氏を嗣ぎて師の畫風をなせども、筆力はやゝ劣るにやとおぼし。おのれは、少年の時、江戸にて一見せりき。

れ三宅島に謫せられ後赦され歸る

熊斐

熊代彥之進（初は神代と云ふ、後改む）名は斐、字は淇瞻、號は繡江、世間俗名をいはず、熊斐をもて知らる。肥前長崎の小譯官にて、僞人膽氣ありて俠者也。淸人沈南蘋に畫を學び、世に名高し。一時台命を蒙り虎を畫くに、折しも蠻人虎を持ち來りしかば、紙筆を携へ、虎の檻ちかく居たりしに、虎踞りて頭を擧げず。はたらくけしきを見ばやと思ふによしなければ、自から竹にて虎をたゝくに、やがて頭を擡ぐ。見る人皆大きに懼

英一蝶

本姓は多賀、狩野安信に從ひて畫を學び、狩野信香と名乘りしが、後師の氏を返して、多賀長湖とあらため、後又英一蝶といふ。

○花顚は長湖の名を出さず。しかれども閑田子むかし江戸にて此の傳を見しには、長湖といへり。又或る説には、島に流されて年をへし後、ある朝艸花に蝶のとまりしを見居ける時、赦免の船來りしかば、これより英一蝶と改めしともいへり。

遠島云々―元祿中佛師村田民部と戲に當世百人一首一卷を著す。執政者を誹るものとせら

畫風一家の趣をなす。頗勇猛の手也。性膽勇あれども、母に仕へて至孝なり。一旦故ありて、遠島に流されし間も、畫を母に贈りて、衣食の料に充つ。後赦にあひて歸りて其の畫ますく行はる。或時兩大國の主、石燈臺を爭ひもとめ給ふきこえありしかば、やがて走せ行きて、數多の金を出しておのがものとし、狹き庭の內にうつしける。折しも初茄子を賣る者あり。價の貴きをいはず、需めて生漬といふものにして喰ひ、彼の燈臺

じ町に住める名譽の細工人也）祇園の山につくりて、鯉山と名づくべき」よし仰せければ、其のごとくいとなみ、今も其所に殘りて、年々六月十四日のかざり山とす。

○此のごろ祇園會には年々の催しありて其の品定まらず。閑田子云、能の狂言鬮罪人といふものに、祇園の當屋にて其年の催しを相かたらふむれを作れり。其の時代の樣をしろべし）

板倉伊賀守
—板倉勝重

附、板倉伊賀守殿、京都を守護し給へるころ、三條橋頭にて、金三兩を拾へる人あり。落したる人いかにうれふらむと、さま〴〵もとむれども、出來たる人なし。せむかたなく、官に訴へければ、此のよしを書き付け辻々に張らせ給ひしかば、落したる人出來たりて、「我がおとせしも、彼の者拾へるも、皆天なり。吾がとるべきにあらず」と辭す。拾へる人は、訴出づるほどのことなれば、もとよりうけず、たがひに讓りければ、「今の代にもかゝるめづらしき訴をきくことのうれしさ。堯舜の民ともいひつべし」と大に感じたまひて、「吾も其の中に交らむ」とて、又あらたに金三片を出し、六片となし、兩人へ二片づつあたへ、殘る二片を自から納め給ひ、「此の後汝等むつましくせよ。何事によらず、おもふことあらば、聞ゆべし」と、ねもごろに仰せ給ふとなむ。上に仁あれば、下義を好むといへるも此の事ぞかし。

上に仁云々
—大學に未だ上、仁を好みて、下、義を好まざるあらず云々

すくせ―宿世、因緣。

がて携へ出でしに、大津の石場にいたり、船にのらむとして、あやまちて海へおとしける。いかにともせむすべなければ、心ざす所へ行きて、四五日經て家に歸り、其の由をかたりしかば、妻もいとゞ本意なくおもひけれど、「かゝることもすくせの故ならむ。身におはぬ金なり」と、思ひはるけて過しけるが、しばしありて、大津の魚商人、大なる鯉を荷ひきたりて、「もとめ給へ」と勸めしを、望なきよしいひしかば、既にかへらむとせしに、彼のうらの孀聞きつけて、例のごとく「これ買はむ」と直なして、たゞちに庖丁しければ、腸のうちに、紙につゝみて金十片あり。かねて家主のおとしたることを聞きければ、とくもて往きて、しか〴〵のよしを述べてわたしけるに、あるじ、「我はさきに海におとしたれば、これはわがものにあらず。そこの買ひ給へる魚のはらにありし金なれば、そこのもの也」とて戾しけれども、首をふりて、其のまゝ置きてかへりしが、家主やまず、またもていきて與ふ。孀婦もかたくうけず、たがひに言ひつのりて、高聲に爭ひしに、あたりの人々よりつどひて、とかくあつかへども聞き入れざるに、せむかたなく、官へ訴へ出でければ、官にもたがひに淸廉なることをいたく感じ給ひ、「汝等がおもむきを後世につたへむこそよからめ。其の十片の金にて、左甚五郎に鯉をほらせ、（此ころ同

治に居て云云―治れる世にも亂るる事を忘れざる事、易の繫辭傳の詞

て遁るべし。大かた燒けず。「時にあたりて、此働をせし人ありし」と、昔相識る老人語られし。手近きことも變にあたりては心つかぬもの也。治に居て亂をわすれずといふごとく、つねに心がけあるべきものなり。

室町孀　幷本頭　附脫金拾金二人

洛室町三條の南なる商家のうら家を借りて住む孀あり。さしたる產業をなすともなくて、日每に酒を飮み、また魚を買ひては、人をもてなしなどして暮しけり。あるとき、彼の商家の妻、夫にむかひていへらく、「かう常の業あるがうへに、家をも持ちながら、ただいとまなきに、いつ心を休めてたのしむといふこともあらざゝめるに、此のうらの孀をみれば、何をよすがともなきに、明暮酒をのみて心のどかに見ゆるなむいとうらやまし。されど、今更好まぬ酒を呑みてもたのしかるべきにもあらず。さは今より日ごとに、酒さかなの價をはかりて、除け置きなむや」といへるを、夫もげにとて、そのおもふにまかせしに、一年に餘りて十片の金つもりけり。さるに夫ことありて近江へ行きける時、彼十片の金を出し、「これもてわたにても買ひ來りたまはゞ、德付きなむ」といへれば、や

興ぜしが、此の大火に東山に遁れてあるとき、行きて訪ひしが、「此たびは此の擔厨にて、十七人快く凌ぎたり」と話せり。是は不意に用をなせるものなれども、變は計るべからぬものなれば、乏しからぬ人は、かうやうの備へも有りたきものなり。

○火にあひては、倉より外にたのむものなし。然るに、倉に火の入るは、大やう下の石垣焼けて、此の氣内の柱につたふ故なり。石垣はひきくし、ぬりごめにするがよしと見ゆ。又倉を閉づる時、釣瓶、車繩などを口に入れて閉づべし。若開きて火ある時、速に水を汲むべきため也。凡そ火だに靜まらば、頓に戸を開くべし。久しき時は、火氣こもりて内より焼け出す也。

○閑田子云、此大火に二三日四五日をへて倉焼出し所多し。是京師の人火事に疎ければなり。江戸にては居宅焼けはつれば、その儘倉にかゝり、先戸をすこし開き、水をうちこみ、漸々にひらくよし也。江戸は火早き所ゆゑ、人々馴れて倉をやく事稀也。足駄一足持ちて遁るべし。足駄なれば少しの火をも踏むべく、釘のたぐひにあしを損ずる事なし。

○閑田子、またついでにいふ、急火に倉の窗の目ぬりする土なくば、塀を崩して其の土をもてぬるべし。又倉なき人は、雜具の携ふべからざるものは、地に置きて、其上へ塀を覆ひ置き

まれなることなり。これは雨月庵の記といふものに錄し、又諸家の記錄も多ければ、こゝにはもらしぬ。

○閑田子も亦かぐつちのあらびといふ筆記せしを、何ものかかすめとりて、他の話をもまじへて、俗文にうつし、花紅葉都噺とかいへるものを印行せり。其のころ諸家和漢の文章、此の災をしるせるもの多し。

されども、平日心得置くべき火災の備へを記して、人のためにす。

柳骨折―柳行李

○柳骨折の比よきにれんじやくをかけて、笈のごとく仕立るものを用意し置くべし。大家には數あるべし、小家にても一つはあるべし。急火といふ時、物をいれて背に負ふべき爲めなり。或人蚊帳を袋にして衾夜著の類を入れて持ちしが、門につかへて苦しむうち火近くなりしかば、捨ててにげたり。又車長持といふもの便なるに似たれども、寶永大火の時に、辻辻にせきあひ、老人女子などそれに隔てられ、あやまちする者、死にたる者も、多かりしとぞ。

凡大きなる器は、かへりて益なく障り多し。

○予がしたしき人、銅にて作りし三つ套の鍋、木椀、磁器、酒器箸などを片荷とし、味噌、鹽、醬油、米、酒などを又片荷にしたるものを作り、擔廚と名づけて、春秋山野遊行に携へ

かり、其の後心を改め、此の御家へ參りても十七年に及び、今は不肖ながら侍になり、御おぼえも大かたならず候に付けても、唯明暮二た親の御事のみ心に掛り、神佛に祈りしが、四年のさき主の御用にて京へのぼり侍し時、下京の住み給ひしあたりを尋ねしかども、御ゆくへしらず。殘多きながら、日數限ありて罷下りしが、はからずもふたゝびめぐり逢ひ奉ることの嬉しさよ」とて、涙せきあへず。明の日は侯にもかくとしらせ奉りしかば、親子ともめしつかふべきよし仰ありて、「父は厨の長に」など仰せ有りしを、京にも約せしことあれば、かへりのぼり度き由を申して、とかくせしほどに、疝を病みて、醫療殘る所なく、もとよりあたゝかに著、口にかなふ食を喰ひなど、孝養せられて、つひにこゝにて終れり。彼の子が立身故に家名もたしかに殘れり。(此の家名も憚りてこゝに漏しぬ)爲人正直淳朴にて、彼の箱を返し奉り、其報をも辭し申せしにより、はからぬ邸に參り、捨てたる子にめぐりあひ、殘る所なく介抱せられて、身まかれり。もし京にて病みたらば、災後の家もさだかならぬ時にて、親族もなく、いかばかりの侘しさならむに、正直の德、忽あらはれたりといふべし。

○花顚因にいふ、此の天明壬申歲の大火、正月晦日朔日兩日洛外あまねく燒亡せるは、ためし

紙にて、其の品々を書き出し給へるが、金銀をのべたる葛屋の香爐、銀の茶碗、一角の獅々の形したる墨臺、大小刀の七所拵の金物二た通、古鏡三つ、壇道齋が持ちたる硯など、これかれの品物凡五十餘品也。「誠にたがふ所なし」とて返し奉れば、御褒美の品、御衣など迄かづけ給はりしかど、固く辭してうけ奉らず。「所はいづこの者ぞ」と尋ね給へば、しかぐ\のよし申し、「此の御箱さへ返し奉れば、明日にも江戸へ罷立ち候はむ」よしを申す。さらば、「某の侯のもとへ著けよ」とて、御消息をたまふ。其の御文をもちて下り、其の邸に尋ねよりけるに、かの由をもこまぐ\と仰ありしかば、やがて休息所を賜ひぬ。其の日青侍一人つくぐ\と要介が顏を見るもの有りしが、夜に及びて、ひそかに其の休息所に來り、「若し以前は下京におはして治良兵衛殿とは申さゞりしか」といふ。要介「いかにもしかり。いかにしておのれがむかしの名所をしらせ給ふや」と問ふ。「其の事にて侍ふ。おのれは幼名七之助にて、十三の時浪花へやり給ふ後も、かしこの若者と心を合せ、さまぐ\あしきことをのみせしかば、かの所にも住み侘びたる比、堺の邊に東雪といへる僧、此の地に下りたまふ供にやとはれて下りけるが、道すがらのやどり宿にて、さまぐ\の物語に、身の上をも明し侍りしかば、心を盡して、御教訓にあづ

一角—ウニコウルはウニコルンの訛言、哺乳動物の牙

御消息—手紙

青侍—年少士き

小折紙—横に二つに折りたる紙、公文又は目錄などに用ゐる。

よしいひて、走り去る。其の男何か懐より小さきもの落せしを見し故、行きてみれば金也。拾ひ上げて、夫をもあづかりける。其の日もあけの日もそこにくらして、火もやうやう靜まりぬれば、戸障子の主より人をおこせて、運びぬるが、其の箱も金もとりにきたらず、誰ともしらねば、さだめて煙にかこまれて死やしけむと、せむかたなく覺えて、先金の包をときて所書もやとみれど、それはなし。されどすこし心當の名見えしかば、もしやと尋ね行きしに、其所の金にてありしかば、扨はこの箱も其の家の物にてあらむといへど、夫はしらぬ由にて、「彼の金の謝禮に、金五兩參らせむ」と出しけれど、かつてうけず。「其の代りには此の箱のぬし知るゝまでは宿かし給へ」とて、そこに有りながら、人の往來多き所にかたげてありきしに、三日といふに、黑谷門前にてある侍見とがめて、「其の箱はいづくよりいづくへ持ち行くぞ」といふ。さてこそうれしく、「われ河原にて此の箱をたのまれて預りしが、其の人誰ともしらず、返し所なきにわびて、かく持ちありき、尋ね給ふ人をまちし也。内のものをさし給へ。あはばかへし申さむ」といふ。「中のものはえ知らず。まづわが殿へ來り給へ」とて、伴ひしが、やごとなき御方也。(此の殿の稱號又男のありし寺、かの金かへせし家の名など、憚かりて記さず)さて奥より小折

つれかへりぬ。其のあくる年、妻もうせければ、つらく\〲おもへらく、「まづしくてなまじひに小家をもつ故に、時有りて人の物をも借る事あり。人の物をかりては、一日も心安からず」と、家具殘らず賣り拂ひて、わづかの借財をそれぐ\〲にかへし、名をも要介と改めて、上京のある寺へやとひ人となりて行きしが、かく正直なるものなれば、寺のまかなひとしけり。やうく\〲年老い六十になりしかば、「いつまで、人につかへて有るべき。家をもち、手脚をのばして、こゝろよく臥したるこそよからめ」と、勸むる人あるにより、其の事をはかる間、ふと思ひよりて、「此の年までいまだ江戸を見ず。一目見て歸り、其の後とにもかくにも賴み參らせむ」といひて、少しの路費などたくはへもちて、旅立ち、草津の驛まで行きて宿り、朝とく出でて、目川といふ里にて、京に大なる火有りと噂とりぐ\〲なれば、引かへし京に歸りてみれば、一面の紅火世界也。(是天明八年申正月晦日の大火也)おのがありし寺も、早跡なく燒けうせたれば、いかにともせむすべなく、丸太町の河原に暫くみてありしに、もとより相識人の疊戸障子などこゝに運ぶにあひて、其の雜具をまもる事をたのまれて居たるに、頓て若き男走り來て、えもいはずきらびやかなる箱の大なるに、眞紅の綱かけて結びたるを携へ、「しばしたのみ參らす」

きだに、猶かう思はるゝものを、まいて並々の女などいみじくとも、もののかずかは。唯「あれどもなきがごとくす」てふ教を思ふべくこそ。因におもひ出でし事は、おのれまだ壯なりし比、中京に或る家のひとりむすめ、文よみ歌よむことを好みけるが、親聟どりして、家を繼がせける時、其の聟は無下にむくつけくて、すぎはひの事より外はしらぬ人なりしかば、此の女も年比の嗜をすててわすれたる如くにもてなしけるを、いかにととふ人有りしかば、ひそかにこたへて、「他より來る夫なれば、よろづにつけてあなづらはしくもてなされむとや疑ふべき。まいて文雅の事などは心高く思はれむもうるさくて」と言ひしとなむ。此の用意たふとむべし。

あれども云云—論語泰伯篇の語、度量の大なるを賞す
中京—京都の中京
むくつけくて—無骨にて

雇人要助

下京に治良兵衞といへる者、爲人正直にして、假初にもいつはりをいはず。子一人持ちたりしが、十二三歲の比隣の錢を聊か取りて來ることありければ、勘當せむことを催せども、十五未滿のものは、廳にも取上げ給はぬならひなれば、せむかたなく思ひ煩ふ間に、大坂の人來りたりしに、かくと語りければ、「さらば我にえさせよ」といひて、引き

下京—京都下京

寶鏡寺の尼宮—中御門帝の皇女理秀尼王

上東門院—一條院の中宮、藤原彰子、藤原道長の女

さいなみ—いぢめ

氏を名乗り、照元字は由也とて、能書の聞え有りしかば、寶鏡寺の尼宮などへも御手本召され、今の世にもその書けるもの、もてはやしぬ。

○思孝云はく、大かたの女は、いさゝかの伎ありても是にほこるを、かくめでたき手をもちながら、年比むつびし中にも知られざるばかりつゝしめるは、難しといふべし。此の一事をもて、其の餘の正しき事もしられぬ。父志津摩が誡め教へしほども、おもはれぬ。予が畫の道を人に教ふるにも、此の心もちひをふかくいましむれば、大かたはそれにてもやみぬ。まいて女の藝は、かゝる不幸の時のためとおもふべし。然らざれば、不貞の端となるべし。もろこしの趙文が嬉好子が印を逆しまに押したるも、げにさる事に侍り。

○蒿蹊云はく、昔紫式部は、いとけなきより其の才秀でて、父もをのこならざるをうらみける程なりしかども、文よむ事を召しまつはすものにもつゝみて、一といふ文字をだにしらぬもののさまにて過し、上東門院に史記を教へ参らするなども、いたく忍びける趣、其の日記に見えたり。同じよに清少納言が、ざえがり口がしこくて、をとこをものともせず、大進生昌といへる博士をさいなみけるなどは、今おもふにもにくげにて、後に落ちぶれけるなどきくにも、親しむ人もなかりけるにやとさへはかられぬ。男も此の女房などに及ぶべき才は昔今稀なるべ

祭りては云―孝經に出づ

佐々木志津摩―日本書道志津摩流の祖

さだすぎ―年齢の盛りをすぎ

草葉のかげ云々―死しての後に

おろ〳〵―未熟ながら

人浦子承の話なり。夫神を祭りて在すがごとくするは、聖經に教ふるところ、五十にして父母を慕ふは、大舜の至れりとする所、僻境の卑夫も、中心の誠に出づるもの、おのづから至道に愜へるは、感ぜざるべけむや。

佐々木志津摩女

名高き書家佐々木志津摩が女は、高倉家粟津信濃之介といへる人に嫁して、二十餘年睦しくて過しけるが、夫病みてみづから限りとおぼえし時いへらく、「我がなからむ後は、世わたらひのたづきもなかるべし。さりとて、尼などにさまかへてあさましく落ちぶれ給はむは口をしかるべし。やう〳〵さだ過き給ふ齢にはあれども、さるべきえにしもなかるべきかは。いづかたへもふたゝびとつぎて、やすらに過し給はむことこそ、草葉のかげにても、心安く侍らむ」とかなしうかたらへば、つまは涙せきあへずながら、こたへて、「な憂へたまひそ。今迄はかくとも聞え侍らねど、おのれ、幼より父の物書くことを教へ給ひしを、おろ〳〵學び置きたれば、身ひとつ過し侍らむことは、ともかうもして、苦しきには及ばじ」といへば、よにうれしげにて終りぬ。其の後貞操を守り。父が

兵衞を乞食とみてあたふるなり」と、いひをしへけるとなむ。

○蒿蹊云はく、前編に出せる長崎の吉左衞門に似たる趣也。然も其の吉左衞門は頗る文字もあれば、猶節操を勵む所もあるべし。此の八兵衞は元來日雇なれば、何の學ぶ所もあらじを、飢を忍び、病に堪へて淸きは、其の天性に出でたるべし。義の當否は前に論ずれども、凡そ壟斷に利を網する人のみ多き世に、かく陳仲子が黨といふべきは、たふとまざらむや、恥ぢざるべけむや。

壟斷―益利の獨占

陳仲子―廉士の評ありし人、(孟子滕文・公章下)

津和野淸六

石見國津和野城下に、高砂や淸六といふ者有り、老母に仕へて至孝なり。富めるにはあらねども、またいたく貧しといふにもあらぬに、物詣など必母を負ひて往く。竹輿にゆらるゝをおそれて、人目をも憚からず。其他おして知べし。しかも生前の孝はなほ類ひあり、母歿して後、年ごとの魂祭に、墓に行きて是を迎へ、三日が間是を饗せるさま、唯生ける人に仕ふるがごとく、日數限り有りて送るに及びては、哭泣して堪へざるがごとし。近隣の兒輩などは、「ことしも亦淸六が涕泣を見む」とて集まるに及ぶと、其の鄕

津和野―石見鹿石郡津和野、龜井家の領地、

魂祭―七月十五日の盂蘭盆會

せまりて身まかりぬとぞ。

日雇八兵衛

加賀の杉原といふ所に、八兵衛といへる日雇あり、妻にもおくれて、子二人もてり。貧窮なれども、性得律義なるもの故、人も憐みしが、或時病に臥して日比經しかば、あたりの富豪の家より、米錢をおくれど、かつてうけず。醫師などとぶらひて「藥を與へむ」といへど、是も辭して百日の餘におよべど、治せざれば、飢渇に堪へず。さて、二人の子をよびて、「幼少なりとも、我がいふことをよくきけ。無事なる時だにまどしき身の、まして今病にかゝりて、人の金錢を貸りてはかへすべき日なし。かへすあてなきものを貸りては、身命をつなぐも、人をあざむくに似て快からず。是よりは汝等乞食してくらすべし。われも、命あらば活くべし。命つきば、此の儘に死せむ」と、こまぐ〜といひ含めしかば、姉は十二、弟は九歳なりしも、聞きわけて、椀など持ちて乞丐となりける。人々見とがめて、「など其のさまには成りたるぞ」と問ひければ、父がいひしやうを告げしに、聞く人大に憐みて、又米錢をやれども、とかく請けざれば、「いな、けふよりは八

むる事なかれ」と遺言せるにおきては、一生の護を一語につくして、人をして墮涙に堪へざらしむ。

近江長女

長女は近江蒲生郡、古市子村、福永某が後妻也。先腹の子二人あり。長女が産めるは十餘人あり。さるに先腹の子をいつくしむ事、わが産めるに十倍す。見る人感せざるはなし。しかもなほわが子あまたあれば、先腹の子の疎にならむ事をおそれて、男子は七八歳におよべば、父を勸めて出家せしむ。女子はこと〴〵く京へのぼせ、人の婢女となす。かゝれば、先腹の子どもも、其の慈愛にひかれて至孝なり。兄は家を嗣ぎ、妹は彼の實子の京に出でし義理をおもひ、「吾も京へ出でむ」といふを免さず、しひて隣村へ嫁せしむ。されば、ふかく其の恩を感じ、繼母の生涯起居をとふ事怠る時なし。長女後髪をおろしけるが、彼の出家の子ども、某々の寺の住職となりしもの、折々に呼び迎ふれども、「實子の愛にひかれて、先腹の子のかたに居らずといはれむはうるさし」とて、あへて省みず。其の賢なる名、遠近に聞えて、人たとみけるが、安永六戊戌のとし、老

たとみ—尊み

去るものは云々—文選の古詩「去る者は日に疎く、來る者は日に親し

いくたびかの歌—古歌なれど、讀人知られず

其の徳に伏しけり。さて年もかはり、一周のいとなみも過ぎしかば、先の人々、去るものは日々に疎しといふ諺をや思ひけむ、又つどひて、「今はかく家事も整ひぬるものから、まだ齡のわかければ、行末覺束なし。唯まげて吾々が言にしたがひ給へ」といひけれど、鶴女なほさきのごとく誓ひて、いなみければ、せむすべなく止みぬ。かくしつゝ天明のとし比、鶴女不起の病にかゝり、死に臨むころ、人々枕べによりて、「おもふことあらば殘なくのたまひ置きね」といふに、「さらに言ひ置くべきことなし。唯老人に先だつこと今生のうらみなれど、是も命なればせむかたなし。此のうへおもふことには、死して後棺に收むるまでは、僧たりとも男子の手にふれしめたまふな。入棺の後は、世の作法もあれば、例にまかせられよ」といひ終りて死す。享年二十七歳とぞ。

○薔薇云はく、凡世間の事、時に臨みて人の耳目をおどろかすは、いさみありて、かたきも亦よくすべし。常をまもるはやすきに似て、しかも中心の誠に出づるにあらずば、始終全うすべからず。

　いくたびかおもひ定めてかはるらむたのみがたきは心なりけり

と古人も歎かれき。鶴女の節操は、婦女の鑑にして、「其の死體といへども、丈夫の手に觸れし

兩夫に見えず—王蠋の言「忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫を更へず」

ろにしたがふ心のする所なれば、孝もまた全し。忠孝のこゝろ誠に深きより、行なへるさまなべて女のなすべきわざとも思はれず、四十六の義士にもなどかおとるべき。誰か其の操をほめざらむ、誰か其の行ひに恥ぢざらむ。

　幸といへど、身にはさちなき人の名の千年の後も朽ちせぬぞさち
　と戯ぶる。

浪花鶴女

鶴女は、浪花戰場鐵屋吉左衞門が妻なり。十四にして嫁し、良人によく仕へ、舅に孝なり。十六歲の春、一男子を產みしが、其の年不幸にして良人吉左衞門病死す。其の忌もみちぬれば、親族集ひて、「今男子ありといへども、まだ當歲なり。婿を選みて、鶴女に配せむ」とて、しか〳〵かたらひければ、鶴女淚を流し、「吾若しといへども兩夫にまみえざるの敎をきけり。はた良人の忘れがたみに男子さへあれば、我が心の及ぶほどはあるじに代りて、舅に仕へ、此の子をも養育せばや」と語るに、人々感じあへり。かくて、舅に仕ふること、良人生存の日よりも厚く、召しつかふものにも、情深ければ、皆

さすらへしめむ―流浪させん

かぞいろ―父母

の傍にかたばかりの庵を結びて、義士のあとをもねもごろにとぶらひけるが、猶故侯の家の絶えぬるを深く歎きて、官に訴ふる事數多たびなりければ、後には「ふたゝび訴へ出でなむには遠島にさすらへしめむ」とまで聞え給ふに、猶しひて訴ふるまゝ、すでに罪に落ちむとせしを、ある御方の惠みをもて、許されを蒙りし。ひたぶるに訴へしこと是まで二十五度に及べりとぞ。終に事遂げざることを知りて、せめての志に、彼の墓のもとに常燈を掲げしかば、故侯の所緣ある諸侯より、油の料のみならず、米花菓の類ひまであたへ給へれば、ともしきこともなきに、折々は盜人のために奪るゝといへども、終にさるけしきみせず。布施多ければ貧しきものを賑して、おのれは絹のたぐひを身にまとはず、生涯其の常燈を守り居れり。ある人「何にても物書きてたまへ」と紙をとうでたれば、「吾幼より一日も安きことなくて、手ならふ業もしらざりつるに、過ぎしとし米字の齡なればとて、人の求めによりて、米叶の二字をならへり。それを書きてまるらせむ」とて、あやしき筆のとりざまして、かきつけあたへしと也。其年九十なり。明けのとし病んでめでたく終りをとれりとぞ。

○蒿蹊曰はく、我が黨の人、繁雅、評して曰はく、幸女忠信の志操たとふべきかたなきはかぞい

れといふよし、形のかはれろも有ろにや。近世の小玉銀など用ふろ如くながら、是は心にまかせて切り用ふろとなむ。割印などはかつて見えず、今よりいへば、質朴なろものなり。

浅野侯―播磨赤穂領主、浅野内匠頭長矩

堀部金丸女

赤穂の先主浅野侯の家臣、堀部彌兵衛金丸が女を幸といふ。安兵衛武庸を養ひてこれに娶せむとせし間、國亡び、復讐の擧に及び、父金丸夫武庸共に自刃を賜へる事狀は、世の知る所也。時に幸女母に伴ひ、彼の擧の志願に諸國の寺社に詣でて、明くる年の冬、伊勢松坂にして、事遂げたりといふことを聞き、よろこびながら、京にのぼりて後、父子ともに死を賜へるよしをも聞きはてぬ。さて幸女、伯父の僧、江戸某の寺にありしを尋ね行きて、尼にならむと願ひけれども、其の僧もたゞ人にはあらず、先づともかくもせむとて、此夜は死者を沐浴せさする所に入れて臥さしめ試みるに、(江戸にては旅客多ければ、大やう死者を寺へ送りて寺にて沐浴し棺に納ること故、いづれにも其の場所をまうく)露ばかりおそるゝけはひなく、心よくいねければ、其の器にあたれりとて、戒を授け妙海と名づけて、法のわざを敎へぬ。其の後泉岳寺は、故侯及び父夫の墓所なれば、其

竹ながし—古代竹筒に金銀を鑄込み、必要に應じて切りて貨幣とせし者

箏をよくし和歌を好き、長刀又ことに上手にておはせしかば、此の時もかく懷劍わざにて荒くれものを切りたて給ふ。其の詠歌のうち、

曉の月も入るさの山かげになどいねがての小男鹿の聲

といへるを聞きし。かばかりの人の思はざる難に身まかり給ふこそかなしけれ。さて小萬は同じ道にと思ひしかども、妹君のために力なく思ひとまりて、あたりちかき寺をたのみて、御衣など布施にして、御からをかくし、追善をたのみ、さて「こゝはいづこ」と問ふに、淸水寺のよしを答ふるに、御臺所の爲、いとゞ殘多くかなしさやるかたなけれど、父君のありかを尋ね得て妹君を渡しまゐらせける。かゝる騷動にも、背に負へる疵一所のみにて、猶健なりしとなむ。忠にして智あり、しかも勇猛なるは、世にめづらしき女といふべし。

○思孝云はく、予がしれる老婆、其番袋と銀の竹ながし三筋と手箱一つを傳へ持ちたりしが、天明の火に燒け失せたり。今は此の調度につきて常に語りしまゝを書きつく。又銀の竹流しといふ細き針がねの樣して八寸ばかり有り、鋏にて切りて用ふるもの也。蒿蹊云はく、おのが類族の家に、傳へもちたるは、針がねよりは稍平めにして、たけも定まらず、通稱はさながら

て、北の方は心ぐるしう、いとゞ道をいそぎ給ふが、山崎のほとりにて、いとむくつけき男あとさきになりて、「いづくにおはす人ぞ」といふ。「清水まうでするものなり」とのみいひて過ぎ給ふに、此の男思ふ所ありげに走り過ぎしが、五條の東までおはしたる時、此の男大勢のわろものを引具して來り、四方より圍みければ、おどろきながら北の方聲をいらゝげて、「山だちら道を遮るは何の爲ぞ」とのゝしり給へば、一人がいふ、「先づ其の若子たゞ人とは見えねば、おくるべき所へ送りて賞を得む。次に女房のみめうつくしくおはすれば、我が思ひ人とせむ。其の次には番袋のうちによきもの有らむをとらむと也」と、いひもあへず、袋をとりにかゝるを、北の方小萬共に用意の懷劍をぬき出して、切つてまはる。賊はたゞ手取にせむとあしらひしが、つよく切り立てられて、逃げむとしては、又集り、終に若君を奪ひて逃げむとす。北の方人の手には渡さじと、賊が首とつらねて、若君をも一刀に切り給ひ、今は是迄と思し、「最期の供奉せよ」と、たゞちに四人まで切り倒し給へば、小萬も六人迄切りける。其の他手疵を負ふもの數しらず、ちりぢりに逃げけるが、北の方も數箇所の手疵に堪へたまはず、淸水の馬とゞめに休らひ、「せめて父君に妹をみせよ」とのゝ給ひて息たえ給ふ。此の北の方は、よに雙なき美人にて、しかも

逐電して―逃げて
番袋―殿居物を入るゝ袋

度直諫して、旨に逆ひければ、逐電してあとをくらまし給ふ。其の北の方と八歳の兄君三歳の妹君、捕はれになりて、城内のかごかなる所にこめられて、おはしけり。明暮唯夫君の事をのみ歎きて過し給ひしを、婢女に小萬といへるが、かひぐ〳〵しき女にて、侯は都の清水寺におはすよしを聞き出でて、北の方に告げければ、いかにもしてそこに行かばやと思ひけれど、人めしげきに思ひ煩らひ給ふ。小萬また城中よりの間道をかうがへ、水門より出でて、淀川を渡らば、やすかりなむと、みづからものみし終りて後北の方にまうし、自から先番袋に手廻りの調度衣裳などを入れ、頭に戴きながら、夜に紛れて彼の水門より忍び出で、淀川をおよぎのぼりて、とある松蔭に袋をかくし、又およぎてかへるさに、心をつけて、小船の主もなきを見出し、おのれは水にひたりながら、ふねを押してゆく。折しも棹さへ流れきたれば、拾ひとりて、蘆原の便よき所に舟をかくし、北の方のおまへに參り、兄君を自からの背に負ひ、いもと君を北のかたの背に負はせまゐらせ、からうじて、彼の舟にとりのせまうし、棹さしてかの番袋を取出し、ほのぐらき月かげに、たどる〳〵、只あたりの女房の物まうでのけはひに取りなしけれど、夜あけゆけば、行きかふ人々見とがめて、「たゞ人とは見えず」などいふを、きこしめ

請取可レ被レ下と奉存候得共、此度の尊書にも、其事相見え不申候に付、御尋申上候。此外申上度事山々に御座候へ共、年ましに書狀相認候事難義に御座候故、省略仕候。但御懷敷奉レ存候。情意御遠察被レ成可レ被レ下候。再拜稽首、謹此不備。

三　月　三　日　　雨森東五郎

誠　淸

三秀院老大和尙

猊　座　下（私云、翠巖長老なり）

かくて易簀は、八十八歲の正月六日とぞ。先に擧げし僧衆の宗旨につき、堂社の建立に付、生涯の力を用ひられしも、此老の學術に精を入れられしも、畢竟同じく我が分を盡して、天地の恩に背かずといふべし。おのれらがごとき、暖に著、飽くまで食ひて、犬馬の齡を積りしものは恥づるに餘りあり。人も亦此の風を聞きて、興起あれとぞおもふ。

小　萬　女

攝津國某城主は、もと豐臣秀賴公に仕へて、北の方もろとも大坂の城中に居給ひしが、度

消遣—退屈まぎらし

祇園與一—紀伊藩の儒者、號南海

そののち一萬首も亦二三年にて終りしにや、年歷のつもりかくのごとし。前の文と年數愜はざる故に是は方久の事かと疑あれど、全く自己の事成るべし。

小兒の圓機活法を見候、同前なる和歌に御座候故、よむとは申がたく、こしらへ候と申候。如ㇾ此仕候へども、歌は不ㇾ申ㇾ及、歌に似たるものも出來不ㇾ仕、但老後の消遣と存候までにて御座候。(こゝまでのつゞきにて、自己の事にて、方久をいふにあらざるを知るべし)當和尚樣へは、御緣御座候歟、一月に一度ほどは、碁も御參會仕候。(當和尚とは對馬當番の和尚なり)是もひたと負申候。何をいたし候ても、老人は役に立不ㇾ申候。必々和尚樣にも、御年よられまじく候。

一祇園與一方へ被ㇾ借候橘窻茶話は、彼方より如ㇾ期御返し申上候哉。彼方へ書狀遣し候へども、今に返書無ㇾ之候。老人の事故、若も病氣哉と氣遣申候に付、何とぞ康健不康健の事、彼方屋鋪へ乍二慮外一御尋被ㇾ下候へと、是等の趣、去年申上候へ共、終に其の返事承知不ㇾ仕。若は中途にて、浮沈仕候哉、何とぞ與一事、御聞被ㇾ下度、後便を相待罷在候。

一かなづかひ、御大事の御書物御借被ㇾ下、寫仕廻候に付、去年指上申候。是は定て御

誠　淸

寶藏主樣（私云、後松翁長老にて澤巖長老の弟子なり）

又一通（是は同年の事にはあらず、猶後にくはしく論ず）

歲首法札被二下置一、忝拜誦仕候。先以新歲萬福御淸勝の由、欣慰此事に奉レ存候。歲暮の御詠被レ下之、方久方へも早速遣レ之同前に拜吟仕候。古川繁右衞門、只今は束髮致し方久と申候。歌に今稽古仕候へども、元より不才の上、老後の所作に御座候故、少も埒明不レ申候。

歌に今と云よりは自己の事と聞ゆ。謙遜甚しく、傍輩ながら方久のこととは見えず。猶後に論ず。

元來八十一歲の時、古今千遍歌萬首と申所願を立候而、千遍讀は二年かより相濟一萬首は去年こしらへ仕舞申候。

前文八十四の七月に千遍の數滿申候と有りて、こゝに八十一歲の時願をたて、千遍讀は二年掛り相濟、一萬首は去年こしらへ仕舞申候とあるをみれば、あらかじめはかられしは八十四の七月までの積りにてありしに、おもひのほかに早く業成りて、二年にて千遍讀は滿ち、

一首の講釋をさへ承りたる事も無御座、かなけりらん一つも埒は明不㆑申候。其の上、歌ことばとては、猶々存不㆑申候に付、兎角古今をひたと讀候はば、歌詞にても覺え候はんやと存候に付、古今千遍讀と申願を心に立申候て、最早百五十遍は昨日迄によみおほせ申候。今迄の積りに致し候へば、八十四の七月に千遍の數滿申候積りに御座候。其間に老耄いたし候か、又は閻羅王より勾死鬼など遣し被㆑申候へば、可㆑仕様も無㆑之候得共、先は願を滿候心に御座候。右千遍讀濟候て、さて歌をよみかゝり申候心に御座候。是は壽命の事はわきにのけおきての分別に御座候へば、さりとはをかしき事に御座候。しかし私最早世間に望みある者にもなく候へば、かくいたし、死を待候も一奇事と存立候事に御座候。此段書付掛㆓御目㆒候は、老人さへかく存候事に御座候故、皆様にも御年少に被㆑成㆓御座㆒候へば、猶々むだに御くらしなされますな㆒と申上度如㆑此御座候。桂淵師、大愚師、岱宗師同志の御面々へ、御參會の節、此旨御傳被㆑成可㆑被㆑下、奉㆑賴候。申度事も御座候へども、老筆難㆑堪、早々及㆓貴答㆒候。餘期㆓後音㆒候。恐々謹言。

二月十五日　　雨森東五郎

となむ。然らば經書はまして然らむ。讀書千遍義自通る意にや）

舊歲御狀相達御返書末レ仕候內、新歲の法輸、又々相達忝拜見仕候。彌御堅固、御重歲被成候由、欣慰此御事奉存候。此元不二相替一私義無爲に罷在候。兩度共に、御佳作御爲レ見被レ下、扨々御上京以後別而御精被レ出候御事に御座候哉、各別に御上達被レ成候樣に奉レ存、珍重不レ過レ之候。詩者、做多く看多く商量多しと申候。兎角多く御作被レ成上手御成り可レ被レ成候。商量の字、先づは人と相談する事を申候へども、人と相談致すばかりにては無レ之、以レ心問レ心、我心にて思案する事をも商量と申候。俗話にも、人の申事を承り思案いたし御返事可レ申と申候時は、待二我商量一囘話一と申候。和韻いたし進申候樣に被二仰下一候。此元御逗留中は、一時の御挨拶と存、めつたに詩も作申候へども、上方まではづかしく御座候て、登せがたく御座候。夫故、和韻をば仕レ不レ申候。御宥恕可レ破レ下候。此に一つをかしき咄御座候故、書付掛二御目一候。御笑可レ被レ下候。去年より、繁右衛門（方久對馬の國老古川氏、後にも見ゆ）など、皆々寄合、歌の會をいたし、間には私其座へ參候事も候へば、私にも是非歌をよみ候へと申候へども、詩迄は平仄なりと習覺居候へども、歌は終に百人

対馬の文學―對馬宗對馬守の儒者橘窓茶話―二卷
たはれ草―三卷
老いては云云―後漢の馬援の語、「丈夫の志たる、窮しては益々堅かるべく老いては當に益々壯なるべし」
朝に云々―論語の語

雨森芳洲

芳洲、雨森氏、名は誠淸、字は伯陽、通稱東五郎、木下順庵の門に遊びて、新井白石、室鳩巢、祇園南海の諸老と共に、名を天下に成せり。京師の人にして、對島の文學となり、漸々に昇進す。音をよくして、唐音、韓音ともに通ず。韓人此の翁と話して、「公三國の音のうちには、殊に日本よし」といへるもをかしきが、これにて、異邦の音、此の國人に彷彿たるを知るべし。篤實の碩儒なれば、此の遺言政治の助となること多しとなむ。近年、上木せる橘窻茶話、たはれぐさの如きは、一時消閑の隨筆といへども、其の氣慨は博聞を見るべき一端也。嵩蹊ことに感心せる一件は、嵯峨天龍寺翠巖長老、同松翁長老に贈られし俗牘、二師の自坊三秀院にあり。極老の後、國歌に志して、精を盡されし旨也。おのれが好む道なるが故に、嘆美せるにはあらず、老いてはます〳〵壯なるべしといへる古人の心ばへに似て、「朝に道を聞いて夕に死すとも可也」といへる聖語にも愜へるもの也。此の一條により、まして其の本色の漢學におきて、若きよりの格勤押して知るべし。書牘左に揭ぐ。（吾が友春日龜蘭州の話に、此の先生莊子をも千遍讀せられし

化宗の僧侶の稱、德川時代には武士罪を犯し者刑罰を遁れむ爲に此の群に入りたり
あともひ―率ゐ
蔀をあぐる比―早朝に

らなきさまに語らひぬ。一日、浪華のかたに執行せばやと約し置き。其の夜助三郎にかくとつぐ。時寛文辛亥歲九月六日夜也。豐長とみに兩人の從者(坂根八左衞門、中田平次郎右衞門)をあともひ、夜ごめに、大坂に行き、官廳に達し、こゝに待ちかしこにもとめ、此の日は大坂にとゞまり、明日通衢にかよひ尋ね、其の夜は芥川の驛に宿す。翌九日旅店の蔀をあぐる比、薦僧二人通れり。則一人は八之丞、一人は傳藏なり。傳藏人を見て目ぐはし過ぎぬ。さて三人とも追ひ行くに、傳藏は岐路より右の方へ行き、八之丞は村衢にいる。やがて豐長その由をいひて切りかゝれば、八之丞も懷劍をぬきながら、木綿畑の溝を飛び越えむとして、つまづきたふれぬるを討ちぬ。時に豐長年十四歲也。此の擧の後諸侯よりつのり求め給ふこと多時也。しかれども、豐長いふ、「子として親の讐を復するは、則其の職也。今是を口實として祿をうくるは恥づべきの極みなり」とて一も應ぜず。其の後、細川肥後侯は、母氏のちなみあればとて仕ふ。今に其の子孫連綿たりとぞ。

○蒿蹊云はく、俗間に、野叢談話といふものあり。それが中に、華塵談とて此の復讐のよしを書けり。されど文飾多く、かつ事實も大同小異也。今寺記によりて、其の要のみをしるす。

衣錦志―立身の望
樗木―愚者
薦僧―虚無僧、元は普

樗木從來不足量。山僧何幸圭僧綱。大塊假我椽柱力。他日儻堪爲棟梁。

附松下加三郎豐長は(後故ありて母家の姓を冒し中瀬助九郎といふ)は南谷の兄也。父忠綱、江戸の寓居にして、早川八之丞が毒手にあひし時年十二歳也。其の夜、八之丞手書を渡し置けり。其書にいはく、

我は加藤式部少輔内早川八之丞一敏といふものなり。先年藪久太郎悴八助儀に付、大崎長三郎と出合ひ、白晝に討ち留め、國を立ち退きし所、親早川四郎兵衛切腹被仰付、其節緣類ども、切腹被差延我々に御預可被下候はば當人八之丞引返し可申由、致訴訟候へども、松下源太左衛門出頭し、其上、右長三郎緣類たるを以て、内々讒言申候に付、四郎兵衛切腹被仰付、源太左衛門右讒者故、如是次第なり。

其の後豐長、京師にかへり、宮原傳藏といふ人にしたがひ、劍術を習ふに、此の人もと親の怨家を討たむとせし間、其の怨家病死して本意を遂ざることをうらむ。さる故に、吾が身にくらべて、此の少年を憐み、日にをしへ、夜につたへ、かつ同じ心に、八之丞が行へを求むるに、八之丞は今薦僧となるよしを聞き出し、傳藏も亦其の黨に入り、う

四大君―五代將軍綱吉より第八代吉宗に至る

三家―德川將軍家の一門尾張、紀伊、水戸

三衣―僧の著用する三種の衣服、大衣、七條五條の袈裟

晉の趙盾―晉の靈公の正卿、公盾を殺さむとて刺客を送りしに晨に盾が盛服假寐せしに感じ刺客却て自殺せし故事あり

ぎ給ふ所の神社を拜し終り、端坐して寂す。春秋七十四。元文元丙辰歳十月十三日午時也。師生涯三帝の恩勅を蒙り、龍顏を拜すること數箇度、東都に行く事は前後三十九度、四大君の寵遇を忝うし、加之、月卿雲客、又三家以下國主諸侯旗下の士の歸依、擧げ記すべからず。然るに、謹愼の甚しきは、京兆尹來過の時は、前日必告げ給ふにより、師丑の時より起きて、日課の事業を勤め、寅の刻に至れば三衣を著て端坐す。每時此の如くなれば、徒衆「なぞさはし給ふ」と問ふに、「上を敬するは、かくすべき事なり」と答へられしとなむ。晉の趙盾が所行に准ふべし。世に師の書名を知りて、其の功を審にするもの尠ければ、彼の寺の記をもて要を採りて錄す。手澤の書刻につくものは、楷書千字文五册、克己銘一册、八景法帖一册、大通寺開山宗師行業記一册、幻華消息一册、(如上印行)又詩稿許多あれども、其の志を見るべきものを擧ぐ。

客中早春試毫

江城爲客始逢春。且喜聖朝寓此身。山衲素無衣錦志。
只期神運與年新。

上堂日寄二三子

朗詠集―和漢朗詠集二卷、藤原公任撰

歡喜天―又聖天、祈願する者を悉く滿足せしむと云ふ緣に油を灌いてまつる

が、歲を經て志願のごとくに成りぬ。凡生涯の奔馳、滿山の爲にして、毫末も身の爲にはからず。丁卯歲の春又東都に趣き、謁見の時、奏者寺號をいはずして、たゞ南谷と稱するほどの寵遇に至る。又寺管の第にして、官紙を出し、大中字眞艸行、はた朗詠集などを書かしめらる。其の他儒筆を需むる人踵をつぐ。此の歲の夏職を辭し、次坐に托し、東林院にかくれ、たゞ終焉の計をなし、歡喜天の浴油供を修すること一七日、蓋從來の功業此の尊の加護によることをおもふと也。結願の日より、病に罹り、人に面接を辭す。たまたま法眼百々俊悅來て病をとふ。師いへらく、「我が病藥すべからず。然も過訪を忝くす。請ふ診脉せられよ」と。法眼卽ち診して、「吁命也。實に藥治のおよぶ所にあらず」といへり。一日夢中源廟に至るに、かねて聞きし兜率宮の莊嚴のごとく也。かつ神、夷々子と呼び給ふと見て醒めぬ。直に筆をとつて、

陰來則陰。　晴來則晴。　君家歸去。　天朗月淸。

夷々子辭世と記し終りて、弟子にいへらく、「我今筆をとるに、扛杵のごとし。しかれども、もし社事によりて大君われを召さば、元氣忽ち復し、千里も遠しとせずしてゆかむ。吁時なる哉。吾が功も亦足れり」とて、是より言語を交へず、源廟をはじめ、常に仰

寶永丁亥―寶永四年

龍顏を拜す―明正天皇に拜謁す

眉目―名譽

院秩―寺領

子母の贏餘―金を貸して得たる利子

太子降誕―享保五年正月一日生、御諱昭仁

豪慧和尙

猊座下

寶永丁亥四月六日、又命下り、廩米百石を賜ひ、祭祀の用となさしめ給ふ。又中古以來長老の職廢せしかば、古記を抄出し呈するに、戊子歲正月十三日勅旨を蒙り、義周をもて其の職に任ぜしめ、龍顏を拜す。是滿山不易の眉目也。又東林院を再造し、(義洞の創地也) 山門の院秩をもます。かくて、歲ふるまゝに、廟社やゝ頹廢に及ぶ故に、修繕の志を起し、又江戶におもむく。享保庚戌歲五月十九日、寺社司小出信濃侯より黃金を賜ひ、且命ずらく、「此の金二分とし、一分は今度修葺の料とし、一分は子母の贏餘をもて後々繕修の用に充つべし」と。是に於て廟社全く善美を盡せり。壬子の年、又江戶にゆき、深恩を謝し、且新畫(弟子照本所圖なり)の神影を加納遠江侯に呈す。侯齋沐して揭二壁上一拜之時、忽東隣に火起りて、殆侯の第に及ばむとせしが、俄に西風吹きて火を轉じ、一點も觸ることなかりしとかや。庚亥歲正月　太子降誕(櫻町帝におはす)博士御胞衣を納るゝの地を卜するに、此の地吉にあたれりとて、源廟の樹下に納め奉る。是より長く勅願の基趾となり、五月十日初て、紫衣を賜ふ。師後來不朽の例たらむことを願はれし

今迄は、義家一人被ㇾ致ニ信仰ㇾ候とて、無益の八幡を源家之衆用來候。多田の滿仲者、源家と申計にて、御正統にても無ㇾ之をさへ、多田院など御取立被ㇾ成候。今度は、各別之儀、如ニ我等愚老も、數十年來の積鬱一時に伸び、披ㇾ雲望ㇾ天不ㇾ堪ニ雀躍ㇾ歡抃之至に候。爲ニ今度御禮、滿山代僧遍照心院内多聞南谷法印下向之處、兼々愚老此義致ニ苦勞ㇾ候段、御聞及候とて、早速足下迄御申聞候由、事多之處思召出過分に存候。終不ㇾ致ニ書中ㇾ候故、以ニ謝狀ㇾ不ニ申入ㇾ候段、足下幾重にも宜御申聞可ㇾ給候。頓首。

七月六日　光圀

法眼立庵　伯

此の後は親しく御面會も有りけるが、直の御文書も、大通寺にあり。

道體益ㇾ御淸勝否、馳ニ遐想ㇾ而已。先比、蒙ニ御許ㇾ借候文書、新寫相濟卽本書返還、別而忝存候。且被ニ仰聞ㇾ候書容易事、雖ㇾ然、當分最中書立候。出來次第、從ㇾ跡差遣可ㇾ申候。尙期ニ他日ㇾ。恐々頓首。

八月十五日　光圀

遍照心院

幻華堂となづけ、堂の記及び退院の辨を著はす。扨六年の後、元祿丙子のとし、滿山の衆徒師の宿志により、興復のため再住を請ふこと頻なれば、又多聞院に移り、惣代の任をもて、江戶に往き、時の權門松平美濃侯によりて、廟の來由を記し、これを聞す。又明年丁丑九月復古の宿志、古記等を寫して呈するに、美濃侯曰く、「凡京師の寺政は、京師にて達すべし。是恒例なり」と。こゝにおいて頓に上洛し、京兆尹松平紀伊侯に事狀を達す。此の時自誓の文を源廟に捧ぐ。其の終り、若時運未ㇾ熟は自から病を受け速に沒し、再來して願心を遂げむと云に至る。神感の故にや、明年己卯十月、有司來り、廟社より門廡に至るまで一般に結構す。此の月五日の夜夢中に「斟ㇾ涼洗一枕夢。蹈ㇾ地窺半窻明」といふ一聯句を得たり。自ら趣味あることを覺ゆとなむ。庚辰四月六孫王に正一位權現の勅許有り、關東よりも、神寶數十品を奉納まします。十二月十二日新廟遷座の儀式に勅使あり。辛巳八月二十八日大樹君、六孫王權現の五大字を御みづからの筆して賜ふ。また水戶黃門光圀卿も、手狀を賜ふ。

六孫王御墳墓年久廢頽之處、今度新被ㇾ加ㇾ御修覆ㇾ之由、珍重之事に存候。誠に源氏の氏神、御孫々迄、御繁榮の御事、過ㇾ之御事御座有間鋪與皆人一同奉ㇾ存候事に候。唯

京兆尹—京都町奉行

六孫王—源經基、淸和天皇の皇子貞純親王の第六子

大樹君—五代將軍德川綱吉

墳墓—原本墳土
上足—優れたる弟子
風騷—詩文、
山門—近江比叡山の異稱

と經基王の殿舍によりて、六宮或は八條御所などいふ。今の御旅所といふも、滿仲の產屋の舊跡也。其の後八條本覺禪尼二位如實禪尼ともに、右大臣實朝公追福のため、佛閣となし、木幡上人眞空禪師を請じ給ふ。これによりて、尼寺と俗稱す。また安嘉門院四條局阿佛尼公の墳墓もあり）義洞長老にしたがひ、十一歲にして剃度し、終に上足の弟子となる。多年思ひを精しくし、心をひそめて、地藏院覺雄一派の淵源を極めつくす。此の間、詩章は熊谷直閑に學び、はた智積院泊如僧正、又峨山、月潭禪師等にも問ひ、專ら風騷にふけられしに、義洞長老、其の學ぶ所、釋門の要にあらざるを呵し給ひしかば、是より詩騷を止めて、永觀堂快立和尚に從ひ、楞嚴の義疏を聽く間、病にかゝれり然れども、猶つとめてやまず。諸經論を諸師に聞く事枚擧すべからず。年三十法華の義疏書寫の望を起し、山門の靈空律師について講錄を需め、坂本の寓居にして全く書寫す。通計八十卷也。時に、山王の祭日にあひ、遠近の人衢に堵をなす。しかれども、師一室を出でず、謄寫泰然たり。其の勉强精苦おもふべし。此の年はじめて多聞院にて梵網經古蹟を講ぜられしより、諸書の講に及び、聽衆百をもて算ふ。かくて源廟（經基王の廟なり）の興復をもて志とし給へども、故ありて院を辭し、山門の外に一草庵を結び

冥福—死者の追善

僧南谷　附 松下豐長

釋照什、字は南谷、幻華と號す、俗姓佐々木にして、松下を稱す。爲レ人溫潤恭默、しかも沉勇也。寛文三癸卯年、石見國吉永の里に生まる。穉名、勝之允といふ。纔に乳を離るゝより、筆硏を愛し、好みて字畫をなすに、頗る奇趣あり。父源太左衞門忠綱、會津侯に仕へしが、(前會津の主加藤式部少輔成明朝臣)後致仕して京師に在り。長男豐長が爲に官途を求めむとて、豐長はた從者を引きつれ、江戸に行く。いくほどなく、赤坂田町の旅舍にして、不測の害にあふ。是寛文九己酉の年三月二十一日の夜也。(事故は豐長が附錄にしるす)時に、師年七歲。其の後、豐長攝津國芥川の驛にして、復讐せし時は、師九歲也。豐長京師を出づる時、師もともに往かむと請ふこと頻なりしかども、其の幼をもて、豐長みそかに行きて、復讎の後に人もて其の由を告ぐるに、師聞きて、此の行にもれ、ともに天を戴かざるの仇をうたざることを深くうらみ、且かなしびていへらく、「吾幼しといへども、男兒として士夫の道ながく廢す。此のうへは、薙髮して、釋門に入り、父の冥福を祈らむの外なし」とて、もとよりの因あれば、遍照心院(此の地も

伽藍—衆多僧の遊歩修行の所、即ち寺
大檀那—大施主
薩摩の大守—島津侯
濟家洞門—臨濟宗と曹洞宗と

れども、伽藍の興立には及ばず。(蒿蹊曰はく、元祿九年、貝原先生の記にも、野中に立ち給ふと書かれたり)こゝに、此の上人、大願心を興して、貞享帝の勅を奉じ、寶永五年六月二十六日成就す。大檀那薩摩の太守にて、曼荼羅壇、什器、舍利塔等をも供せらる。これ又希有の大興立なり。三師の志願通計四十五年にして、各成就を遂げられしもたふとき事にこそ。因にいふ。月舟和尚は、世に知る所の高僧也。いまだ幼き時、母に携へられて其の師のもとに行き出家の約をなす。其の後、母義の機を織られける前に、物思はしき顏して立ち給ふを、母「何ごとありてかゝるぞ」ととひ給へば、「吾口惜き事して、僧にならむと約したり。同じくは武士にならむ物を」といはれしに、母義涕泣して、持ちたる梭にて打ち、「汝たまく佛に誓ひ、いくばくもなく心變じたるや」と責めらるゝに、「心變じたるにはあらず。思ふに出家は一人の成佛也。吾もし武士となりて時をえ、天下の政をとらば、天下の人をみな成佛させむものを」と答へ給ひしと也。其の機如ㇾ此。されば、終に高僧ともなり給へりき。一旦、隱元禪師歸化の時、天下の禪林眼を新にし、濟家洞門をいはず、彼の徒となる人多かりしに、月舟和尚、獨臂を揭げて吾が宗を扶持し給ひ、其のいさをし後世におよべりとかや。されば、其の下に出づる智識、唯卍山和尚のみならず、これかれ聞ゆる人々有りとぞ。

東叡山―東京上野寛永寺の山號
公辨法親王―輪王寺門跡の第三世
後西院天皇の十六子
閩中―支那福建の地方
鎌倉右幕下―將軍源頼朝

など、しばらくも願心を忘れ給ふことなし。終に東叡山公辨法親王の擧によりて、曹洞家の諸大寺に台命ありて、願心成就し、流弊を禁ぜられ、古に復る。法親王殊に其の風を慕ひ給ふによりて也。是元祿十七年八月七日のことにて、はじめて大願を誓はれしより、四十年にして全く成る。此の後自から復古道人ととなへられ、淸人董愛山も復古禪林の額を贈れり。正德五年乙未、世壽八旬にして、源光庵に遷化し給ふ。閩中鄭任鑰が贈る碑文、略して石に鐫りて彼の寺に建つ。

○花顚云はく、鐵眼和尙の願は、初より十八年を經て、天和元年辛酉、大藏經彫刻成り、黃檗山の藏となる。其の事は前編和尙の傳に具す。公慶上人は河内の人にして、南都東大寺龍松院に住す。此の東大寺大佛殿は、天平勝寶四年聖武天皇の勅願にて建立ましくけるを、四百三十二年を經て、高倉院治承四年十二月二十八日、平重衡の兵火によりて失ふ。後養和元年、醍醐寺の後仍坊重源上人大勸進主として、後白河院鎌倉右幕下に勅し給ひ、建久六年再び就り、同じき三月十二日主上行幸右幕下も參詣あり。其の後三百七十三年を經て、永祿十年十月十日、松永彈正久秀が兵火に又燒失す。此の時御首も地に落ちたるを、大和福住の處士山田道安といふ畫の妙手、多く財寶を出して、佛頂を鑄、籠に入れて引き上げ繼ぎ奉りた

一切經彫刻—一切經は鐵眼の力に依りて遂に刻成し黃檗山に藏せり

飛錫—僧侶の旅行

に見ゆ。しかれば、各位大願を發し給はむや否や」と。鐵眼和尙曰く、「誠に然り。吾も亦願心あり、一切經を彫刻して、檗山に納め、永く世に廣めむと思ふ」と。公慶上人曰く、「我は南都大佛殿を造立せむことをおもふ」と。師曰く、「我もとより大願有り。宗門の傳法の要總べて一師の印證による也。然るに、近世宗風頽れて、法弟を以て嗣とすること、祖意にあらず。誓ひて古に復せむとおもへり」と。二師是を聞き、拍掌し、「吾等が願心は大なれども、水至れば渠となるごとく、猶易し。師の願は倒に嶮峻をのぼるが如く、難しとも難し」と、禮拜して去る。師從來此の復古を心とし、宗祖道元禪師の像前に向ひ、心願を述べて袈裟を漬し給ふ。かくて五十六歲、加賀大乘寺より退いて、山城宇治田原の禪定寺にうつり、林中座禪のついで、靈芝の形自然に觀音の像を現ずるを得て、別に思ひあたり給ふことあれば、深く信じて、いよ〳〵復古の心を激せらる。其の後攝津國住吉の興禪寺にうつり給へども、又月舟和尙の命により、禪定寺にかへり住み、五十九歲の春猶彼願もならざれば、洛北鷹峰に源光庵を縛して隱居し、唯天の時に委ね給ふ。されども、元祿十三年關左に飛錫の時、途中の口號にも、

咸自㆓捫腓㆒至ㇾ股晦。將ㇾ勞㆓頰舌㆒動㆓心灰㆒。只期山澤互通ㇾ氣。同是以ㇾ虛受㆓物來㆒。

續近世畸人傳 卷之四

僧卍山　附 僧光慶 僧月舟

卍山和尚は備後の人也。幼くして、家產をいとひ、戲にも佛に仕へ、禮拜をなす。性敏悟亮達、習はずして經文を誦し、學ばすして、詩文を作る。父母其の心にまかせて、月舟和尚に投じて、出家せしむ。十三歲の時、亡父の墓をまつりて、家をいづる時、母氏手を抱りて曰はく、「汝が大寺に主せむことを願はず。宗旨を勵むと聞かば、うれしからまし。かまへて忘るゝこと勿れ」と示さるゝを、生涯の龜鑑とし給ふとぞ。十九歲の時武藏の雲堂寺にあり。ある時月舟和尚、外に出で給ひて、獨坐止靜の間、其の寺歸依の檀越に三左衛門といふもの、三とせ以前に死にしが、忽然として來り、師を拜して法問す。師も心を盡してしめし聞え給ひしかば、よろこび謝して去る。少年より其の德かくのごとし。其の後東大寺の公慶上人、檗宗の鐵眼和尚など、親しく交り給ひしが、寬文四年の秋、三師同じく會して物語の時、師云く、「大願を發さゞるは菩薩の魔事也と、大般若

龜鑑—手本
檀越—檀那に同じ

一の氣火香
抹香臭き句

○閑田子云はく、千代女歌川女ともに、發句のさま女流をあらはしてつよからず。殊に歌川はまた、口氣遊女と聞ゆ。凡詩歌共に其の本意のまゝなるが天然を失はぬ所といふべし。しかるに近代よみうたの敎に、をのこといへども上手の女の歌を門戶として學ぶべしといふ事あり。口氣こはゞしきはやゝもすれば俗に落つれば、かく敎ふるも一應はさもと思しけれど、實にはたけ高くつよき歌を手本にしてよみならはゞ、始終凡に落ちずして、しかも丈夫の氣象を枉げざるべし。伊勢小町ある事をしりて貫之躬恒を忘るゝや。又明人の詩話に、僧にして香火の氣なく、女にして脂粉の氣なきものをたとぶは何事ぞ。香火の氣なきは破戒なり、脂粉の氣なきは夫を凌ぐべし。もとれるにあらずや。おのれつれに思へる事なれば因に論及す。

ことはすこしも心にかくべからず。別に人をもて國人にいはせぬ」とて、せちにとゞめ給へば、又多くの月日を過して後、ふたゝびこふに、せむかたなくてゆるし給ふ。こなたかなたよりも餞し給ふとて、こがね衣服何くれの調度など給はりける中に、名ある琴も有りしとなむ。されば馬五匹におほせて、國につかはさしめ給ふ。さて國に歸りし後、吾妻にて賜はりし物ども、こと〴〵く亭のあるじにとらして、「おのれかくてみとせをへなば、一つの庵を結びて、生涯をはごくみたまへ」といひて、又もとのあそびになりぬ。是をきゝつどひくる人、踵をつぎしとかや。かくしつゝ約せし年月もみちぬれば、出村の町離に、草庵をむすび世をやすく過せしが、安永六年丁酉七月病にかゝりて歿せり。

目ざましに琴調べけり春の雨

さそふ水あらば〳〵と螢かな

爪紅のしづくに咲くや秋海棠

おく時もしれぬ寒さや海の音

あそびなりし時文のはしに

たゝいても心のしれぬ西瓜哉

破子—今の折詰辨當

わいだめ—差別

がら、常の心ばへにめでてゆるしぬ。さて誰かれを送らせむといふに、「否、とくより心がまへせし」とて、菅の笠、竹の杖、其の外旅の調度などを見するに、家こぞりて感じつつ、日をえらびて出で立たしむ。是をきゝつぎて、人々破子などもたらしつゝ、あるは三里あるは五里と送りぬ。夫よりは道すがらしるべをたづね、そこばくの日數をかさねて、江戸につき、先心あての第にたづね行き、しか〳〵といふ。人々あやしみながら、かくといひつぐに、主人きゝて、「さることも有りなむ。旅のつかれをやすめて後、たいめせばや」とて、ゆあみなどせさせて、「まづいかなれば、かゝるさまにては來りし」と問はるゝに、俳諧執行のよしをかたり、道の記などをとう出て見するに、かつおどろき、かつよろこびて、內君に托して、うらなくとゞめ給ふ。かくて、日をふるまゝに同列の人々をはじめ、某の國の守、これの北の方など聞きつぎ給うて、めさるゝに、或はほくし、あるは茶を點じ、又琴香花などもさまよく手ずさびければ、日夜のわいだめなく、まつはし給ひしとぞ。ある時、主人の前に出でて、「こたび君のみかげにて、かね〴〵殘りなくみ廻り、としごろのほいもとげ、かつおもひもかけぬ御あたりの御惠を蒙りぬ。國にて約せし日數も、今はみちなむとすれば、いとま賜ひなむ」といふに、あるじ「其の

永平寺―越前吉田郡、曹洞宗、
一念三千―吾人の一念中には、三千の法界を具ふと云ふ義
ほく―發句
第―邸宅

など、人口に膾炙して賞す。永平寺の長老、道のついでにや、とひたまひて、「一念三千の意を句に作るべし」ともとめたまへるに、

千なりも蔓一筋の心から

これも世に語りつたふ。老い極りて死せりとぞ。句集有りて世にひろまりぬ。
○歌川は、もと越前國三國の花街（出村と云ふ）荒町屋某が許の遊女泊瀨川と云ふ。容色ありて、心ばへうるはしく、香茶花手跡ともに志すといへども、もとも性俳諧を好めり。後薙髮して歌川といふ。（其のほくに吟と書きしは、花街を離れし後、しばし豐田や吟といひて、其の黨を集めし時のこと也。又瀧谷女といひしは、薙髮後瀧谷寺のほとりに居し、かつ其の寺僧に受戒などせし時なるべしとぞ）未ださかりなりし時、東都某の士夫、三國に來りて、殊にむつびけり。其の時長谷川いふ、「妾吾妻を一見せむと願ふこと久し。もし時を得て遊びなば、君が第にとゞめ給はむや」といふに、こゝろよくうけひきぬ。其の後東國の人とだに聞けば、必此の事を約し置けり。一日、亭のあるじにむかひ、つばらに此のことを語りて、「こゝかしこ、今はゆかりも出來ぬれば、百日のいとま賜ひなむ。もとより其の間の身のつくのひも用意せり」といふに、あるじもつきなきことな

聟どりせし時―金澤の表具師福田彌八に嫁す時に年十八

吳俊明―五十嵐俊明、越後の儒者にしてまた畫家

曉天に至る時、元起きて、「終夜さらざりしや。夜は明けたりや」とおどろく。時に千代女、

　ほとゝぎす郭公とて明にけり

といへるを、大に賞し、「是也是なり。汝他日此の意地をわするゝことなくば、名天下にふるはむ」と、師弟の約をなせり。果して女流に珍らしき此の道の高名に至れり。これはまだ少女の時なりけらし。後聟どりせし時、

　しぶかろかしらねど柿の初契り

まことに俳諧にてをかし。二十五歳にて夫にわかれし時、

　起きて見つ寢てみつ蚊屋の廣さ哉

生涯身を全うし、一人の男子に夫の家を嗣がしめてのちは、尼になりて別居し、素園といふ。畫も越後の吳俊明に學びて、頗風韻あり。或る人「畫を上に賛を下に書きてたまへ」とのぞみしに、あさがほのたれたるをながくかきて、

　朝がほや地にさくことをあぶながり

句のさま、すべて女流の趣ありて、つよからず。

　あさがほにつるべとられてもらひ水

これは、薙髪せる時の歌にやとおぼし。其の男子、長は家を嗣ぎ、三子は出家せる中一人は同じく盤桂禪師の弟子となり、後龍門寺を嗣げり。末子忠介は夭死し、其の妻も若くしてさまをかへ、義香と號し、不徹庵に居て、姑に給仕す。これも俳諧をよくし歌をもよみ、貞操ありし人とぞ。

松任の人―表具師福増屋六兵衛の女

加賀千代女　越前歌川女

千代女は加賀の松任の人にて、幼きより風流の志ありて、俳諧を嗜む。しかれども、其の師を得ず。是かれ行脚の人に問ふに、美濃の廬元坊を稱することみな同じ。こゝにして殊更に行きて學ばむとおもへるに、折しも行脚して來りしかば、其の旅宿に就て相見を乞ひ、志をのぶ、元、「草臥たり」とて、寢てありし所へゆきて、敎を求むるに、「さらば一句せよ」といふ。初夏の比なれば時鳥を題とす。やがて句を吐きたるに、元其のたゞものならざる氣韻を見て、其の句をうけがはず、「是はたれもすべき所也」といふ。「さらば」とて、又一句を吐く。背ざること初のごとし。元は既に眠につけども、女はなほ去らず、沈吟す。其の眼のさめたるをうかゞひては、又一句をとふ。かくて數句に及び、つひに

栢原捨女

丹波國栢原田氏、女捨子、其の家に聟どりして、男子五人ありて後夫死し、たゞちに盤桂禪師を師として尼となり、貞閑と號す。幼より風雅に志あり。六歳の時、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

といへりしより後、季吟法印にまなびて、俳諧に名あり。

栗の穗や身は數ならぬをみなへし

花をやるさくらや夢のうきよもの

など、人これを稱す。或る諸侯道のついで、かの家をとひたまひて、

栢原にをしや捨て置く露の玉

といふ句をたまひし事もありとぞ。尼となりては、省悟せる所師の旨に愜ひ、終に播磨網干龍門寺(盤桂禪師の寺なり)の傍に、不徹庵を創して今猶傳はれり。其の自畫贊、田氏に殘れるは、

秋風の吹きくるからに絲柳こゝろぼそくもちる夕かな

とうでて、其の家あるじにあたふ。主笑ひて、「是ばかりの事に何の價をかうけ侍らむ」とかへしたれば、「さては人がわれを欺きしなり」とて、叉首にかけて出でられぬ。よしのふしぎに覺えて、密に人をつけて其の歸る所を見せ、其の名をもきかしむるに、鷹峯の檀上にて、學匠のきこえある、日經上人といへるにて、彼の銀は人のいふまゝに、信心の旦那に借りて、携へられしなりき。よしの、ふかく信仰して、殊更に文を贈り、小袖金子などを施して、「今よりは歸依の者に成り侍らむ。何にてもともしからむものは、心置かず仰せ給へ」とて、是より後は、しば〳〵音信しが、灰屋にていくほどなく身まかりし後、ある人、此の僧の事を告げしかば、卽鷹峯檀上にはうむりて、今もよしの塚とてありとなむ。

○因に云ふ、灰や三郎兵衞も、風流の男にて、うたをもよみたり。後には薙髮して、淨慶といへり。佐野氏にて、子孫今もあり。其のうたの中に、

むさしのの草はみながら置く露の月をわけゆく秋の旅人

置く露にとありしを、うへなきあたりの改め下されしと或人かたりぬ

へんぐゑ—變化の字音、妖怪

揚屋—遊女を招きて遊ぶ家

雨具をとり來らしむる間、とある家の軒にたゝずみたれば、内よりいとうつくしくけだかき女出できたりて、「僕をまたせ給はむほどは、是へいらせ給へ。わびしき住家ながら、御茶一つ參らせむ」と奥へ請じて、折ふし釜の湯のにえたれば、うす茶をもてなしぬ。あるじもあらず、召しつかふ人も見えざるに、いやしからぬ住居もてなしの心あるにおどろきしが、其の日本阿彌光悦にまみえて、「いとあやしきこと、よもへんぐゑにてはあらじ」など聞えたれば、「それこそわぬしのむすこの住所、その女はかのよしの也。よもにくからじ。今は勘當ゆるし給へ」と勸めたれば、父も心とけて、其の詞にしたがひたりとぞ。よしの、島原にありし日、ある客舍へ(これを揚屋と通稱す)一人の僧來りて、「よしのとやらむいふ女、一と目見たし」といふ。あるじ頭をふりて、「よしのは名妓也、かろ〴〵しく見給ふべきにあらず。殊にさる御身にては似げなし」と、あら〳〵しくいへども、僧きかず、「たゞ見るべし」とうごかねば、もてあまして、せむかたなくかくと告げたれば、何とかおもひけむ、ついきたりて、「いざおくへおはしませ」といざなふを、僧は立ちながらつく〴〵と見て、「よく見せたり。今は用なし。はやかへるべし。たゞし是をみるには、一百錢の銀入るべしと人いへり。さらば是を」とて首にかけたる財布より

てうじて—調へて
すさう—殊勝

にしかく〳〵と語りて、しばしのいとまを乞ひ、ある家をかたらひて酒さかななどてうじてもてなしぬ。其の日の客は京にてきこえたる富豪灰屋三郎兵衛といひたるものにて、若けれども、物の情をわきまへしものなれば、「此の上はたゞその男の心ゆくばかりもてなせよ」とねもごろにいひやりぬ。さてよしのが身をけだかくもてなすにも似ず、見るかげもなきものの志を憐むがたぐひなくすさうなることと、日比よりおもひまさりて、其の座にて家あるじにかたらひ、かれが身のしろ千金をあたへて、わがものとするにきはめぬ。かくて明の日、桂川に身を投げし者ありしが、一通の遺書あり。「とし比のおもひをはるけて、今は世におもふことなければ、かく身を捨つるなり」と書けり、何事とも知られざりしが、此の鍛冶男なりけるとかや。稀有のことといふべし。かくて三郎兵衛は、よし野を別屋にかくしすゑて愛しけるを、父聞きつけて、「いとあるまじきこと。わきて又なく名高きものを、しかするは世のきこえも憚あり」と怒りて勘當しけり。されども、思ひかはして、まどしきよをへても、うれへとせず。此の時に及びて、彼の山中の色紙は賣りたりとぞ。（千切や與三右衛門といふ者買ひしが、今はある諸侯の家藏となるとなむ）或る日灰やの父某、ものへ行きたる時、俄に雨ふり出でたれば、僕をかへして

小倉色紙―藤原定家の山城の小倉の山莊にて、百人一首の和歌を各一枚づつに書きたる百枚の色紙

東寺―京都下京にある眞言宗總本寺

御影供―弘法大師の御影に物を供へて祭る儀式

給ひて、いかにもこれがよろこぶべきものをあたへばやと案じたまひて、小倉色紙のうちに、俊成卿のうた「世の中よ、道こそなけれ」といふ歌の四の句、山の中にもと誤りかき給ふが、かへりて山中の色紙といひ傳へて名物となりたるをとうでて贈り給ふ。はたして是は二なくよろこびけると也。よに富める人の色好むは、唯一たびのあふこともがな、面目になど心をつくせども、引手あまたにていとまなく、はたおのが心にかなはぬ人には、曾て見えず。こゝにいとまどしき獨ずみの鍛冶あり。東寺の御影供の折に見そめてより、起臥おもかげ身にそひ、露もわすれず。是より其の業をなすあたひ、日々の食料を除きては、一錢も他のことに用ひず、月日を重ねてつみたる銀そこばくに成りたるを、ふところにし、島原の出口に往て、「いかゞせむ」とたゝずみてありける時、是が仕ふ女のわらは（これを禿と通稱す）二人出來たるを、誰とはしらねど、うちまねきて、此の名妓にたいめすべきやうをとひはかりしかば、大きにわらひて、やがて走り歸り、「よにをかしきことこそあれ。いとも淺ましくやつれたる男が、吾大夫の君（時の上首を通稱す）にまみえたしと申すは」とて、手をたゝき笑ふを聞きとがめて、人をやりて、其のよしをつばらに問はしめ、とし月あまたおもひをこがせしやうを聞きて、其の日のまらうど

任俠―男だて

廣東島―支那廣東より出づる絹布

に喰ふがよし」といへり。其の意あながちに主人を激するにもあらず、魚もけものも同じ意にて、狐ときゝて喰ふべきものと思へりと、江邑北海話して笑はれしとぞ。すべて少しも物をつくろはずいつはらず。ある貴家の御療治したる時、やゝ待たせられしかば、「吾はいそぐ用有り。かへるべし」といふ。對する侍、「何ぞ急なる病家ありや」といへば、「否けふは西河へ漁に行かむと思へば、心あわたゞし」といひけることもあり。此の外奇話多き人にて、わかき時は任俠をこととせし說などもあれど、煩らはしければもらしつ。生來京師を離れぬ人なれども、はつかも京地の風趣なく、僻遠の人のごとしとなむ。七十有五にて去年乙卯歿す。

傾城吉野　幷灰屋某　鍛冶某　僧日經

都島原の廓に、よしのといへる名妓あり。容色風姿類なきのみならず、手かき歌よみ茶香などをはじめ、凡遊藝に長じぬ。もとより心たかく、なみ〳〵の衣類器財などは、省だにせず。それが著たる廣東島のうはおそひを、よしの廣東と名付けて、今も賞茶者流の袋物にして、もてなすにてもしるべし。されば、ある諸侯いかなるついでにか、まみえ

稲荷―五穀の神として倉稲魂神を祀れる者

の人、兒島尙善といへるが、半年につゞめて、日々に怠らず學ばむことをこひしに、三度に及びて聽かざれば、力なく國に歸らむとするに臨みて、其の母を養ふがために在京久しうしがたき由を聞きて始めて、入門を許し、束脩の輕きをいはず、是に倍して物を與へ、別れむとては家の祕書をも自書してあたふるに及ぶ。此の間尙善同門の人に砒石をえたり。外科に有用の物なれば、悅びて携へ來り師に示せしに、其の後故なく破門のさたに及びしかば、おどろきて、卽往きてことの由をとふに、曰く、「わぬしは孝子也と思ひて甚愛せるに、砒石を携へたる手をも濯がず、茶を汲みて喫す。もし毒にあたりて命を殞さば、母に仕ふるにいづれの身をもてせむや。さる不孝の者は吾が門に居らしむべからず」といへり。されども、意の及ばざりし罪をわびて、からうじて許されたり。さて其の下る道の海陸船中馬上の心遣ひをもつぶさに說きて、親もたる身はせちに愼むべきことを誡しむ。又をかしきことは、ある富豪の家の療治に行きたる時、主人禮服をつけ淸まはりて膳をあつかふさま也。「何事ぞ」と問へば、「けふは後園の小祠を祭る也」といふ。「其の神はなぞ」と又とへば、「稲荷と稱して、實は神狐也。神膳淸ければ、必喫し給ふ」など其の奇特をかたるに、由仙何げもなく、「其の狐はあまり老狐にならざる間

外療―外科醫

あさくらや云々―天智天皇の「朝倉や木のまるどのにわがをれば名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ」の御製による

しむ。是も奇の一端といふべし。天明八年申歳六十八にして歿す。又其の家人齋女は翁若き時荒淫なりしも、妬まず背かず、是非を爭はず、生涯よく仕ふ。知る人は皆感じて賢婦と稱す。先だちて頓死せられし時は、さしもの老爺も泣いて、其の勞を謝せられしとぞ。

○由仙楢林氏は、外療の名家なれども、性質朴寡欲にして、其の伎を賣らむとせざれば、甚貧しく、居るに奴婢なく、出づるに僕從なく、麁服を著し、藥籠もみづから携ふ。中年妻を喪ひて一男一女をはぐくみ、矮屋に住めり。潔癖にて、唯物をむさ／＼しくおぼえけらし、常に門戸を閉ぢて來る人ごとに名乘せざれば開かず。あさくらや木の丸どのの心地す。人に物をあたふるは門人のためといへども、かならず眼よりうへにさし上ぐ。是も潔きがためとぞ。此の人の稱すべきは、平日座上に父の席をまうけて、膳を備ふること日に三度、飯も羹も生ける人のごとく盛りかへてすゝむ。味のよきあしきにつきて、其の子どもと相謀るを、始めて至る人などものごしに聞きては、老父まさしく在ますとおもへり。思ふに、是は儒佛の禮法にもよらず、唯其の中心の誠にいづるなるべし。さて吾が親に仕ふることかくのごとくなれば、人も亦親のためといへば、甚これを憐む。其の一つをいはゞ、凡そ諸生にあらざれば、家方を傳ふることを許さゞるに　播磨

螺蠃と螟蛉と—螺蠃は土蜂、螟蛉青虫は、土蜂の青虫を取りて己の子とすと云ふ諺より人を人と思はぬに用ひたり

禰衡—後漢書列傳七十に出づ

三つ瀬川—三途川

八瀬—山城

杜父魚—鰍とて淡水産の魚にも同名あり

哉」など恥かしむ。されば狂人なりとおもへるもあり。凡其の言行虚實是非一定せざれば、謹愼をつとむる人は、爪彈をして、仇讐のごとく思ふも有り。されども自若として世人を見る事螺蠃と螟蛉のごとし。故に漢季の禰衡に比する人もありき。常に心にまかせたる頌を作り道歌をよむ。今記得せるは、

布袋和尚兒を負ひて川を渡る圖に題して、

背なに負ふ兒のさす瀬こそ三ッ瀬川渡りはつべき淺せなりけれ

又頌無題

超私又超公。公中了公道。勿怪放子姪。唯任其惡好。

凡此の類也。晩年八瀬の山川より蛙を取り來り盆水に愛養す。其の聲冷亮として凡ならず。これ世に井手の蛙と稱する種類也。もし鳴かざる時は、自から笛を吹きて誘ふに必應ず。其の說にいはく、「河鹿といふも是にて杜父魚の事といへるは甚非也。腮開きたるものの聲を出す理はなし」など、河鹿の說を著す。此の奇翫にて或は蝦蟇先生なども人よべり。又閑暇の時に、木石骨角をいはず、手に任せて彫刻し、さまぐ〵の物の象をなす。曾て學ぶにあらねども、自ら緻密に、雅趣は凡工の及ぶ所にあらず、人を絶倒せ

價にて二年は米薪乏しからざりしとぞ。かく貧しけれど、或る時梅道人の畫をみて、頻に渇望し、人に金を借りて、やうやうに買得す。しかるに、東涯これを見て、大きに歎美せらるゝ故、明けの日、たゞちに先生に投ず。人其の意を問ひしに、「吾欲するも、人のほりするも同じことなれば、卽參らせぬ」といふ。をかしきことは、冬の朝、隣の家婦獨居を憐み、火を持ち來り、巨燵に投ぜむとせしが、中より狗子多く出でたり。婦人膽を消し、「こは何事をし給ふぞ」といふに、主人「それはよんべ風雨烈しく寒さ堪へがたかりしに、狗子あまた鳴く聲悲しければ、憐みて内へ入れ、幸巨燵に火もなければ、これに宿せり。渠さむからず、吾も暖かなりし」といへり。

藤堂樂庵　楢林由仙

樂庵藤堂氏、もと伊賀の名姓の子弟なれども、少年故ありて國を去り、洛東に棲遲す。爲人才有りて强梁也。禪を主として、同好相逢ふ時は、假初にも棒喝を行ひ、はたあるひは初相見の人にむかひても、吾が機嫌によりて、「汝は是何ものぞ」など突然と問ふに、其の人もとより禪意を會せざれば、驚愕きて、一言を出すこと能ざる時、「憐む可き癡人なる

棲遲—閑居
强梁—手にあまる程わる强し

袋棚―壁の外へ張り出して作れる座敷の棚

鞍馬山―山城愛宕郡、天台宗

高雄山―山城葛野郡神護寺、眞言宗

堀川學生―伊藤家の門人

そこにも有るべし、こゝにも有り」と、袋棚、疊の下、鴨居の上などより取り出さるれば、旦那ども大きに驚き、「かねて思ひしにたがひて尊き人なり」など讃美しける。其の後、此の院もとかくうるさく覺えて、鞍馬山の東に形ばかりの庵をかまへて住れしが、又高雄山の麓にうつりて、程なく正念に終られける。其の年いまだ四十にも足らざりしとなむ。

廣瀨才二

名は鱗、廣瀨氏、字才二にして、卽通稱とす。（是堀川學生の通例なり）東涯先生に學ぶといへども、老莊を好みて一家をなす。又書に名あり。爲人介立にして、淸操あり。家極めて貧しけれどもうれへず。獨居して、あるは、糧盡き油なきに至ることもあり。或る人來り、興に乘じて物語したるに、午時に及べれば、「午飯を喫し給へ」とすゝむるに、笑うて掌を撫で、「けふは米なきゆゑに食はず」とこたふ。客驚きて、「さらば米を參らせむ。其の代りには、公の交したしき宮筠圃（通稱常之進、傳は旣に前編に出せり）の竹の畫を貰ひて賜はれ」とて、其のまゝ米多く贈りければ、其の後筠圃のもとにて其のよしを語りしに、「それこそ安きこと」とて、あり合ひたる墨竹四張をおくられしが、其の

たるなれ。唯しひてつとめよかし」とて、かく、
心して引けばこそなれ露ふかき秋の山田にかくる鳴子も
和尙頗るうたをも好み給へば、在京の日、和歌者流の徒にも、まみえし人ありし。おのれ、其の生存の日、嚴島へ詣しかども、かつて知らず。其の光明院といふ寺をだに聞かざりしは、いと殘多し。他鄕に至りては、德の聞えある人、藝に長じたる人、百工の妙手などはなしやと問ひ聞きて、必相見を請ふよし、橘氏の西東遊記にかゝられたるは理りに覺ゆ。

僧　玄　砂

智恩院―京都市下京區華頂山、淨土宗總本山
庫裏―寺院の雜事を調ふる處

玄砂法師は、洛東智恩院光玄院に住持す。いまだ若けれども、世を厭ふ心ふかく、人間の交りものうくて、其の院の傍に人の響かぬ所を選み、かり屋をしつらひ、机一脚を居ゑて、讀經學文など怠らず。旦家の訪ひまうづるにも、奴僕の出であふのみなれば、皆親しみなし。あまさへ、雨ふれば、座敷も庫裏も漬りければ、「常に他行して院をも心にかけぬ僧也」など誚りながら、「修理をくはへむ」とはかるに、さすが院主に談ぜざればかなはず、かくといへば、「とかく旦那打ちよりてよきにはからひたまはれ。日比の施物

橘南谿―宮川春暉、西東遊記の作者

くなる舍利數百顆を得たり。凡和尙の事蹟こゝに盡すべからず。今いさゝか其の略を擧ぐるのみ。

○蒿蹊云はく、學者和尙の傳は、花顚もとより出したる上に、橘南谿の西遊記に嚴島にて聞きし話を擧げられたるを合せ、おのれまた和尙に隨侍せる僧衆に聞く所を附し、是をもて守興和尙に托し、其の熟知の旨を加へて一篇を成されむ事をもとめたる所如レ此。(守興師も亦隨從の人なり)又小松谷義柳和尙の弟子義諦師に聞く所の話左に揭ぐ。

念四坊といふ遁世者、頗る風流の法師にて、行脚に出づる時、笈の内の本尊にとて、短册に六字の名號を、義柳上人の染筆を乞ひてもち居たる、又其の脇に學信和尙の染筆を乞ひければ、うた一首、上下の句を左右にわかちて書き給ふ。

授くるもうくるもともになむあみだ佛の誓ひへだてなければ

となむ。又同じ時、念四坊「念佛を申さむとすれども、まうす心の發らぬをいかゞせまし」と問ひけるに、答へて、しめし給ふ法語、

「念佛をまうす心のおこりたらば、われも念佛まうさめ。さる心のおこらぬゆゑに、まうさぬとはあやまり也。世間出世の善事、何事もしひてつとむるにてこそ、やむことを得ぬ場にもい

いらふ―容喙する

無量壽經―佛說無量壽經、淨土三部經の一

佛舍利―骨身の義これは釋迦全身の舍利、下のは火葬後殘れる骨

家を避けざること皆此の類なりき。最も後に、一士人罪を得て獄に下りしを、其の罪情憐むべきことありて、それがために和尙しば〳〵助命を乞はれしが、先侯の歸敬に順じて、今の侯も歸敬は淺からざりしかども、「是は政道に預ること也。僧徒のいらふべきにあらず」とて、つひに許しなかりければ、和尙再び大林寺に歸らず、城門を出で、たゞちに安藝光明院にかへり退きぬ。人是をそしり笑へども、ものの數とせず。先侯の時、一とせ大に旱して處々に請雨すれども、雨ふらず、民の患甚しかりければ、和尙に命じて、祈らしむるに、和尙一七日精誠を凝して無量壽經を讀誦せられしに、（經に天下和順の文あり）その驗いちじるく、松山領分を限りて甘雨大にそゝぎければ、人皆蘇息のよろこびをなせり。此の事又後にも有りて、同じく驗をえたりとぞ。德行のあまり奇特のことどもなほ多く聞えけりとなむ。七十有餘、老病不食してつひに滅を光明院に唱へる。臨終の前日、かたみにともおもはれけるや、病床に臥しながら、護法の二字を大書して、有志のもの三四輩に遺し給へり。其の筆力平生に異ならず。又遺偈も有りしとぞ。異香天華の瑞を見て、四遠の道俗三五里の間、みな驚きて來りまうで、敬異せずといふものなし。荼毘の灰こと〴〵く紫色鮮明にして、光明映徹せること、恰も佛舍利のごと

伊豫の松山の大守―伊達家
香華の院―菩提所
緇門―僧侶達
門籍を除き―僧の籍を削り
權門勢家―勢力家

かろぐ〱し」など、さりがたく聞えしに、和尚曰く「我聞く、淨土の莊嚴は寶殿逐身飛とかや。しかも、此の松徑竹關の寺、いかでかわが身を逐ふことをえむ」と、終に去りて、安藝の宮島の光明院にいたる。此の地は以八上人のむかしの跡かぐはしく、且山清く海朗にして、觀境心すみければ、こゝにとゞまりて終焉の心ありき。晩年、其の德益高く、其の名いよ〱きこえて、伊豫松山の大守和尚を請じて、其の香華の地、大林寺といふに住持せしめ、兼て國中の僧機をも正さむと思ひ給ひければ、崇敬最ふかゝりけり。和尚其の請に應ぜしより、其の士大夫のためには政敎資治を贊述し、「政に預かる人は、老莊の學をも常に明らむべし」など申され、又緇門法中の爲には、戒乘を兼談じ、勸懲を専らと申し、不軌のもの十二箇院まで擯斥せられしかば、自他の宗門、僧機大に觀を改めけり。「嚴主に悍虜なく、慈母に敗兒あり。寛にして容るゝ事を要すとも、敎は必嚴なるべし」と常に申されける。ある　和尚京に上りて、數月不在の間、弟子の尼非法のことありときこえければ、歸寺の後、忽門籍を除き、法衣を脱却せしめ、門前にして擯斥の法を行へり。「餘りに嚴刻に過ぎたり」とて、なだむるものありけれどもきかず。其の尼はしかも松山勢要の士の女なりしかども、和尚道義するどく、氣象正しくして、權門勢

釋迦佛入滅後、彌勒佛出世に至る間の六道能化の附屬を受けたりと云はるゝ菩薩

扶宗護法―我が宗旨を扶け佛法を護る事

唯識の述記―成唯識論十卷、唯識は萬法悉く第八識の所變と說く

末那外緣勿字―末那は意と譯す、思慮の義、唯識の第七識

く二世の悉地を祈りしが、世の富貴などいふ者は、人によりて害ともなれば、あながちに願ふべきにもあらず。さらば此のよのことは貧にしてよからむには貧ならしめ、賤にしてよからむには賤ならしめ、とにもかくにも、たゞよからむやうにせさせ給へと、祈り申せし」とぞ。和尙體氣ゆたかに肥えふとり、寬裕なる人なりけれども、扶宗護法などに臨んでは、最勇敢にして、すべて身命のあることを知らざるが如し。されば、世人には、「迂遠なる人也。我慢なる人也」など、常に譏りわらはれぬれども、聊もかへりみず。年廿餘りにして、增上寺に有りける比、華嚴の覺州江戶にて唯識述記の講筵を開かれしに、和尙も其の聽衆に有りけるが、或る時殊に行きて謁を乞ひて、覺州と末那外緣勿字などいふことを論義し、和尙屈せずしていふ、「われもし百日閉關せば、述記を講ぜむこと難からじ。座首の講は聞くに足らず」とて去れり。其の後覺州和尙堺にて重ねて述記を講ぜられし時、其のことをかたり出でて嘆ぜられけり。和尙中年の比洛東獅谷に住持せられむことを懇請せしに、廬山の遺風をも復び興さばやとおもはれければ、やがて請に應ぜられしかども、意に慊はぬことのみ多かりければ、さらぬことに托して、忽ち寺を退かれしを、ある人諫めて「夏にして住持し、秋にして退去せられむは餘りに

しく見たり。此の和尚の始末よく知らずといへども、此の願心の奇特をもて傳をたつ。

○手跡は、祐天大僧正に似て、しかも能筆と見ゆ。名號の左右に、天下和順、日月清明と四字づつわかちかき、正中の下に廓譽空蓮と記し、玉のかたちに似たる花押あり。

僧學信

閱藏の功—一切經を讀み了へたる功

地藏大士—地藏菩薩、

學信和尚は、伊豫の人なるが、其の生るゝはじめ、いとあやし。今治の淨土宗の寺に新亡の婦人を葬りしが、其の夜赤子の呱々のこゑ、頻に聞こえければ、住僧あやしみて、聲をしるべに尋ねしに、彼の新亡の墓なりしかば、いそぎほりうがたしめて棺をひらき見るに、男兒生れ出でて有りけり。住僧よろこび「こは我が授り得し子なり」とて、乳母を付けて養ひしに、よく生ひ立ちて此の和尚となりたり。博學多識にして、一時の名僧なり。よにあやしきまで强記にして、精勤また類なし。年わかくてし閱藏の功を畢りまた彌陀經十萬卷をもよみ終れり。書字作文などの雜伎能ははじめ翫ぶひまもなかりしかど、中年にいたりては、皆頗る雅賞を得たり。唯世務には愚にして孩童にもしかざることおほし。ある時、人にかたられしは、「われわかき時、常に地藏大士を信じて、深

濟度—衆生の苦患を濟ひ、生死煩惱の境を去りて、成佛せしむる事

懺悔—過去罪の惡を悟りて後悔する事

印施—印刷して人に施し與ふる

し、疑念をはらさせよ」と宣ふと覺えて、ゆめさめぬ。たふとさ身にしみて、感涙雨のごとく、合掌敬禮し奉るに、やがて掌中より藕の絲出づること繰出すがごとし。こゝに於いてみづから名號を書寫し給ふに、是を拜して稱名する人は、合掌の手中藕絲を生ずること賢愚をわかず、或は金色、あるは靑黃赤白、又短長の差別、あるは其の信の淺深によるか、たゞし大疑心ある惡埒のものは、かへりていとを生ずること多し。近江にて、一人うたがうて、其の名號を持せる僧に、巧思ありて、手洗ふ水の中に藥をまうけ、この絲を生ぜしむるも計るべからずとおもひ、澁をもて手をぬりかたむること三日にして後、彼の寺にいたりて、僧の指揮のごとく合掌稱名するに、手指たゞ蜘のいとをまとふがごとくなりたれば、あまりのことに大聲を出して號泣し、從來の惡念を懺悔し、是より念佛の信者となれりと、其の僧かたらる。此のごろ又或る律師も此の名號を持して、拜せしめらる。予も拜瞻して、この奇特を感じ知れり。空蓮大德大字は十幅小幅はかずをかぎらず、人のねがひに應じて書き給ふとかや。しかれども世に殘るもの稀なれば、或人は臨寫して念ず。律師もまた臨寫をやがて板に彫りて印施ありしに、ともに拜見口稱すれば、いとを生ず。あるは境を隔てても、これを念ずれば、絲生ずるを正

寅の刻—午前四時、卯の刻は同六時、未の半刻は午後三時頃

衆生—世上一切の人類

是は國君へ奉りしとぞ。一日天象を見て俄に親族を集へていふ、「吾明後日死ぬべし。ただし其の日の早天、公より吾を召して、天文の事を尋ね給ふべし。其の事終りて城外に出でて必身まかるべし。各其の所に來り給はれ」といふ。例の奇をいふにやと信ぜずながら、いとま乞の盃とて出したるを呑みて歸りぬ。はたして其の日の寅の刻、召有りて卯の刻に登城す。天學の仰ごとに答へて、未の半刻に及び、事終りて、竹輿に乘りて、城下十町許出で、其の約したる人々の來れるにあひ、即逝す。術の奇古人に恥ぢずといふべし。

僧空蓮

空蓮大德は近江信樂郷の人にて、他力念佛の信心深し。されば、世間の人、「念佛すれば必得二往生一」と云ふ本願の不可思議をわきまへず、疑ふ心を悲しみ、いかにもして現益を示し導かむと祈誓し、里遠き巖窟にいりこもり、飮食を斷ちて、一心に念佛念願し給ふこと、七日七夜なりしに、夢ともなく、うつゝともなくて、阿彌陀佛現じたまひ、「汝がねがひ佛意に愜へり。よりて此の藕の絲を授くる也。此のいとの奇特をもて、衆生を濟度

ふづくみ—怒る

奪朱の魔障—正しきを紛らす邪魔

土佐國侯—土佐土佐郡高知の領主松平(山内家)土佐守、駿臺雜話—室鳩巣の著

はれ、要とする念佛は至心にあらず」と歎き、又佛前にて「是をとゞめさせ給へ」と哀慰をこふ。されば、又與惣右衛門來りて例のごとく念佛すれども、砂子嘗てふらず。時に妙船いはく、「われ此の奇怪をよろこばず。反りて往生の障ならむことをなげくが故に、如來前にて念願したれば、我が家にてはいかほど念佛せらるゝとも、砂子はふるべからず」と示しければ、與惣右衛門大きにふづくみて、一言もなく出で去れり　是より後は妙船と不通になりしとなむ。凡世間佛によらざる人は、信實の奇特をも肯はず、又信者といふものは、邪正の差別もなく、黠智の者にも欺かるれば、まして狐狸の業通においてをや。さるに此の尼、信の堅固なるによりて、かへりて奪朱の魔障をうけず。信レ信も信、疑レ疑亦信といへる古語的當して、女には殊に奇特なり。稱せざるべけむや。

川谷貞六

土佐國侯に仕へし天學者、谷川貞六といへるは、其の道に通じて、しかも風顚漢也。はた神學を兼ねたれば駿臺雜話を難じてかけるものあり。其の奥に一首の歌を添ふ。

生れこしかひある國と知らねばや異浦にのみ拾ふあま人

看經—經文の默讀
勤行—佛法を修行する
五障—女人は一には梵天王、二には帝釋天、三には魔王、四には轉輪明王、五には佛身となるを得ずと云ふ事
攝取—收め取る事
稱名—念佛

ろきてこれを拜みたふとむより、近隣へも聞えて、夕暮の勤行をかうがへて、人々あまた來つどひ、讃嘆し、「日比信心口稱のしるしあらはれたり」といひはやすを、妙船かつてうけがはず、「吾が身は罪惡の凡夫五障の女人也。かく拙き穢身より、光明おこらむ事は有るまじ。もとより其の罪を滅すべきほどの行者にもあらず。おもふに魔事ならむ」と、佛前に於てこれを歎き、「若し大悲の本願に乘し、光明攝取の御利益に預り奉るとならば、命終をこそ期せめ、平生の光明は望む所にあらず。願はくは速にとゞめさせ給へ」と至心に念じけるが、ある夕暮、佛間の二階とおぼしく、何やらむ物の音頻にきびしかりければ、妙船あやしみ、子息へ告げて、速く二階を見せしむるに、古狐の大なるが二階の窻より飛び出でて、迯失せたり。此の由を告げしかば、妙船「さこそ」といひて、念願空しからざる報恩の稱名して、ますく信心堅固なりき。然るに此の尼の徒弟に與惣右衛門といふもの、若き時は放逸なりしが、蓮系といふ尼に歸依し、念佛をはげみ、是も白色の砂子をふらす故に、人々尊ぶことおほかたならず。妙船かたへ來りて、念佛唱行するにも、砂子をふらしければ、召し仕ふ男女近所の者もよりつどひ、爭ひて是を拾ふことをよろこぶ。妙船またうけがはずして、「男女たゞ此の砂子をひろふに意を奪

後世のつとめ―後の世のため佛道を修すること

しおのれが命にても苦しからずば、奉らむ」といふまゝ、其の女を召して問ひ給ふに、「さして何をうしと思ふにもあらねど、生きて益なき命なれば、死して世のためにならむと思ふなり」とまうす。ひとへに思ひ入りたる趣なれば、「志神妙也。死せば新地の產土神にあふがむ」と仰せありければ、齋戒沐浴して潔よく海に入りぬ。かゝれば、その地主の神に祠り、今も於幾多明神と稱ふるとぞ。

○花顚云はく、道入は憑レ佛て死生を一つにす。義觀は義のために隕レ命、皆奇とすべきを、わきて此のきた女、故なく國の爲に、大洋に沈む節操、智勇の士も及ばず。奇のまた奇なるものなり。

尼妙船

江戸にて俳諧に知られし法眼不角老人が妹を妙船といふ。京橋槇河岸、松村半兵衛といふものの母なり。此の婆氏志貞にしてよろづの道を辨へ、その上後世のつとめねもごろに、他力の念佛怠なくつとめけるが、いつの比よりか、夕暮の看經の時、妙船が頭上へ佛壇より數點の光明かゞやき、又はうしろより光さして佛間を照すに、家内おど

知浴—浴室を守る役

僧義觀

義觀法師は、肥前長崎福濟寺の知浴たりしが、元來非學にして、目一丁字を知らざれども、義を守ること確如たり。一時浴室より火出でたりしに、坐して動かず。人あわてて是を引出し救ひていふ、「火災は時也。人命隕すべからず。官聽もおそれあり」と諫むるに、法師頭を掉りて、「我は浴室を守るが任也。怠によりて失火せるは吾が罪なり」と、ただちに又火中に飛び入りて終る。

きた女

備前國岡山に津田某といへる經濟に長じたる士有り。新田を開かむとするに、かたくは山にそひ、かたくは海に添ふ地なれば、其の海の方に石をたゝみ、界とせば、十萬の米を得べけれども、其の初めに人柱とて、男女にかぎらず、一人を龍宮に貢せざれば、成就せず。されども罪科を犯せし者は用ひず、誤りて海中に落ちたる者、又用にあたらずといひ傳ふ。さればせむ方なく其の事やみけるに、きたといへる孀女聞き及びて、「ち

る小屋に晝寐して、高いびきして居たり。「道入々々〳〵」と起しければ、眼を覺し、常のごとくものいひ打ちわらひ、「げに實に入定の時いたれり」と走り行きて、穴に飛び入りたり。見聞の人驚かざるはなし。時明和四年閏九月二十四日なり。

○一說、此の入定の意をも、卽大慈院の律師一人知りて、これが爲にひそかにはかりたまひぬ。入定の時小さき鉦を携へて入りければ、其の鉦のこゑするや否を、折々行きてうかゞひ、鉦の聲やみたる時ひらきて見給ひしに、はたして安座のまゝにて、氣息絕えたれば、上をよくおほひて歸り、已後かつて人に語られず。年へて後此の律師命終の時、事狀を人にあかし給へりとぞ。又名を道入といひけるよし、花顚書けるは、入定の前歟。久しく俗にて髮はわらをもて束れて有りしと也。

今も樺生谷に其の跡あり。又彼の妻は神樂岡へは折々訪ひ來りしが、いつも法文などいひ聞かせて歸しけるに、比叡に入りし後は、登ることかなはず。此の入定の由を聞きて後、尼に成りけるとなむ。是も高槻の士の女なりしとぞ。

○本文は花顚記し置ける趣也。一說は、蒿蹊知己の律師の話也。此の律師の話正しかるべし。大慈院も仙人男もよく知り給ふ人也。

かづけ給へるに—賞として與へ給へるに。
鹽梅—料理の味加減
參り給へ—食ひ給へ
入定—禪定に入る事、轉じて死ぬる事
披露せむ—告げ知らせむ

け給へるに、口に煙管をくはへながら取りて戴き、やがて「かゝるものはうけ奉らず」とて、かへし參らす。いかやうに宣へどもうけざれば、卿も甚奇とし給ふ。又ある山僧(一說即大慈院也と)常に膳に臨みては、鹽梅のよしあし、むづかしくいふ人あり。其の折から行きかゝりて眼をいからして、「凡僧家のものは、食をはじめ、何によらずみな佛物也。とかくいはず、參り給へ」といひければ、彼の僧も其の理に伏し、物好みふつに止られしが、後に鈴聲山の律師となり、終をよくせられし。常に「此の男よく諫めくれたり」と悦び給ひしとかや。又一時日枝山のれんげつゝじ盛なるを、多く折りて一荷に擔ひ、上今出川新地といふより、二條四條の街にいたり、娼家の遊女に一枝づつ與へて行く。何の意といふことをしらず。淺ましき世をわたるものに、善緣を結ばしめむとにやあらむ。かくて年比へていかゞ思ひけむ、入定したきよしをいひけれど、心得がたきことなれば、とかくいひなだめて過しけれど、頻に催しければ、せむかたなく、「さらば病死と披露せむ」とて、穴を掘らせ日をえらびて、密に法事をなし、すでに時刻いたりぬるに、其のわたりに見えず。「さればこそ、よしなきことといひ出でて、せむ方なく身をかくしたるにやあらむ。されどもまづさがし見む」と、そこらもとめしかば、かたはらの柴つみた

横川―比叡山三塔の中
慈惠大師―天台の座主名は良源、世に云ふ元三大師
鞍馬―山城愛宕郡鞍馬寺の略
遷寂―僧の死を云ふ
象頭山―讃岐琴平神社

き人に松尾氏なるが、日枝の山に詣づるに伴ひて、俄に此の山信仰になり、月には十四五度もまゐる。其の比知福院の住僧病みて終られければ、松尾氏の紹介にて、比叡の椁生谷大慈院に仕ふ。晝は木こり飯を炊きなど爲べき業をし、夜は峯々谷々をめぐりて、諸堂を禮し、曙には院にかへること一日も怠らず。山法師皆其の名はいはず、仙人とよぶ。ある夜、横川の慈惠大師の廟に籠りし時、深更に空中より聲して呼びかけ、「凡そ行法は滿つるがよきや、缺くるがよきや」ととひしかば、こゝろを勵まして「缺くるがよき」と答へしに、さわ〳〵と鳴りて、あとは松風の聲のみ也。又鞍馬に籠りし時も、同じ樣なること有り。あるとしの春、俄に江戸をさして下り、速にかへり登りたれば、人々「何の用なりし」と問ひしに、「上野法滿院僧正は世に大德の人なれば、今極樂世界に僧正の宮殿をまうけたまふ。此の秋某月往生ましまさむなれば、此の事をしらせむとておもむきしなり」といふ。「例の仙人が何をかいふ」とうけがふ人もなかりしが、果して其の月日此の僧正遷寂し給ふ故、「何として知りけるぞ」と問へば、唯笑うていはず。又或時、武者小路實岳卿、讃岐象頭山に代參を立てむと仰せ給ふを、故ありて此の男承りてまゐり、日を經て歸りける時、卿御對面あり。此の比の勞を謝し給うて、絹こがねなどかづ

普門品―妙法蓮華經第二十八、所謂觀音經

らば隱居の祖母が一人あらるゝ所へおはせ」とあないまうしければ、さらばとて終夜普門品を讀誦し給ひしとぞ。實に意路不通の道者といふべし。なほ此の兩師の奇話法語などおほきよしなれども、よくしらず。

○蒿蹊云はく、前編に圓通和尙の事のみ聞くまゝに一條しるせるを、花顚こゝに法眼和尙を合せて出せるは遺漏しを補ふなり。みる人重複をもていふことなかれ。

叡山源七

攝津高槻―攝津島上郡高槻、領主永井侯

大峯―吉野の金峯山

源七はもと攝津國高槻の士たりしが、暴惡放埒により、身をたつるに所なく、浪花に徘徊して馬卒となり、よからぬ業におきてはいたらずといふ所なし。其の比娼婦に八重といふものあり、かしくと別名せり。それ兄を害して罪せらるゝ時、其の馬の口を此の源七とりけるが、何とか感悟しけむ、道心おこり、妻も有りけれど大坂にとゞめて、しのびて京にのぼり、神樂岡の知福院をたのみて居たりしが、或ひは四國の佛閣を廻らむとおもへば、其の日より暇乞ひて出でゆく。あるは大峯へ詣でむと思へば、卽詣でつ。さて其の山に斷食して籠り、百日も五十日もありしことたび〳〵におよぶ。其の後親し

布施―僧に施し與ふる物品
回向―讀經して死者の冥福を祈る事

唱へられよ」とて、やがて高聲に授け給へり。「はやそこたちに用はなし、立たれよ」とて、兩師もついでかへらむとし給ふを、あるじ止めて、「とゝのへ申すものさふらへば奉らむ」と、萬清らに器などあらため饗應し、布施までしきければ、念比に回向して歸り給ふ。さて其の樣を人に語り、「茶屋といふものはおもしろく丁寧なるもの也。若き僧達の行かむとするよしなるは理也」とあり。其の後はたゞの家にてもてなしにあひても、「茶や〳〵」と呼び給ふ。又一時兩師戲場の前を過ぎ給ふに、隨侍の僧見たく思ひて、欺きて、「此のうちにはさま〴〵たふときことあり。拜み給はむや」といふ。兩師しばしもの思ひがほにて、「けふは某がもとへ心せけば、重ねて參らむ。先是より結緣せむ」と、木戸口にむかひ、三禮し給ふ。其後は戲場の前を見物者の行きかふをみては、「けふも參詣多し」と仰す。又圓通和尚、京なる富豪の相識る家へ行き給ふに、何やらん騷しければ、「何ごとぞ」と問ひ給ふ。「けふは息某が婚禮にさふらへば、家の內も靜ならず。こよひは他へおはして、他日御入り候へ」といふ。師うなづきながら、「其の婚姻といふもの、いまだ見及びたることなし。すこし見せられよ」と望み給ふ。あるじもてあまし、「中々御僧の見給ふべきことにはあらず」といへど、「いなくるしからず」と動き給はねば、ぜひなく、「さ

三歸—佛法僧に歸依すること、卽ち俗家の戒

僧法眼　僧圓通

法眼和尙は、平安の人、黃檗獨堪禪師の法嗣にして、性淸廉溫柔、しかも學識あり。攝津國天王寺の側に一字を建てて、法福寺と號け、卽こゝに住す。同學紀伊國の圓通和尙と（紀州和歌山光明寺開基なり。前編に誤りて加賀の人とかきて後に改めしむ）並び行はれ、又意氣も相通ず。一時兩師京にあられしに、法眼圓通にとひ給ふ。「祇園街に茶屋とよぶ家どもあり。和尙は其の家へ入り給ふ事やおはす」と。圓通「否しらず」とこたへ給ふ。「さらばけふは共に行きて見侍らむ」とて、手を携へてかの所に至り、いかにも軒高く門大なる家を見て、「こゝよかるべし」とつと入りて、「吾は攝津の國の法眼」「おのれは紀伊の國の圓通也。あるじは何といふや」とことぐしきに、主驚きながら、かねて知識の名を聞き及びしかば、先さるべき一間に請じ、家名など述べしが、女どもの立ちまはるをみて、「あるじはむすめあまた持たれたりと見ゆ。皆是へ招かれよ」とあれば、あやしきながらよび集めたる時、兩師つくぐ見て「さてよき育ち也。親の身にしてはさぞうれしからむ。因緣にもなるべきなれば、いざ三歸を授けむ、皆合掌し、吾がいふ如く、

○蕉蹊因に云はく、世に元政壁書といふものあり。假名にざれ事のやうに書きて、老莊のかたつかたを心得しと思はるゝものなり。元政上人においては、沒交渉、假寐の夢にも上人なしらぬもののいひ觸したるなるべし。其の中に殊に、「髪結ふがむづかしさに、髪おろしたり」といふ事あり。又「惠心の作のあみだ一體もちたれども、後世をねがふ爲にもあらず、お宿申すばかり也」とあり。上人は、出家以來持律戒愼の人也。又日蓮宗也。趣一向にたがへる事は、眼識なき人といへどもしるべし。又「ふかくさのうづらの聲を聞きて、燒いてしてやりたしと思ふ意もなし」といへるはいかにぞ。鶉狩などいひて、殺生のために出づる人は各別にて、およその人、鳥けだものの形聲を見聞きて、食欲の意起るといふことは、まれなるべし。深艸のうづらといふより、やがて燒とりに意のつくは、あさましといふもあまりあり。是は若し生々の物識がほなる俳諧師などの、此の里に住みて書きたるにやあらむ。もし佐川田昌俊の作にやと花顚は疑ひしかども、是もあたらず。或は、霞谷山人こゝに住みて、風顚の趣頗る似たりともいふべけれど、戒定慧の說をみれば、大きに非也。畢竟しられぬ事ながら、霞谷の名に付きて、こゝに評して上人のために寃を淸む。

霞谷山人

霞谷山人は、何の所の人といふことを知らず。其の姓字をとへば、「姓は山、名は人、深草の霞谷に住む故に、霞谷山人といふなり」と答ふ。性多病にして、寒をうれへ夏日をよろこぶ。常に書をよむ時は、怡然として憂を忘る。しかも何の書といふことを選まず、凡めづらしき書にあふ時は、價を論ぜずして購ふ故に、家はきはめて貧しくて、書は大に富めり。常の言に、「法界は吾が心也。こゝろはわが法界也。法界と心と初より二つなし。戒は吾が宅也、定は吾が衣なり、慧は吾が食なり。これを法界に遊ぶといふ」と。

元政上人の讃に云

病有リレ二焉。心病也。身病也。蓋シ心病也者。雖二神醫一トモ而無レ術矣。若キ二山人一ノ者身病也已ノミ矣。法界之心何ノ病カ之有レラム。樂シイ矣哉。

○蒿蹊云、是は元政上人五柳先生の傳に擬し給へる也と、法嗣惠明師書入ある艸山集、瑞光寺にあり。然れば、自らの事を書き給ふ也、別に傳を立つべからず。予後に聞きて正すに及ばず、故に追記す。

数寄―風流
普通數寄に
作る

國華―國の
面目を起す
人

やゝもすれば、上手といはれむとて、さしもなき人も、己に諂ふものを勸めて、其の業をなさしめ、弟子門生などいひなすが有るにとりて、これも亦一つの操なるべし。なほ一句一言の間にも己をつゝしみ、他を諷ずる意見えて、殊勝なり。予は其の數寄の俳諧をばおきて、その人がらの君子なるをたふとむ。發句文章は、各集あれば、こゝには擧げず。又戲れにかゝれたる野夫談といふは、其の趣向、家に出入する農夫が江戸に下りて、太宰氏が四十六士論を書生の讀むをきゝて、其の意をとひ、ふしんに覺えし旨をかたりしに托して、彼の論の非を、條を追ひて例の滑稽にかけり。眞名にて是を難ぜしものは、五井氏の著をはじめ、諸家の難陳等あれども、かなにて興あるやうに書きしは此の野夫談のみにて、しかも確然たる議論、諸家の論にまさるとも劣るべからず覺ゆ。又小皮籠とて、今やうのざれたるさまに書きて、其の邦内のわかうどの風儀をいましめ、又婦女子のたしなみなど書かれしもの、おもしろく、其の人を知るべき一端にもあればおのれはうつしもてり。長壽にて、八旬の時に、國君より同列同齢の一兩人と共に賀の饗を賜へりとなむ。實に此の如き人は其の國華といふべし。

ひとよなが
れ云々―遊
女

みか、鼓舞自在比類なく覺ゆ。はた生前をよく知る人にあひて、其の行狀をきくに、文章にかよれたる趣と、言行一致なるに感ず。故に今此の傳をたてて、一二三を擧揚せり。わかきより病がちなるにより、五十計にて致仕せる時、隱居に携ふる所の諸器物、すべて褻と盛とふた通を用ひず、煩はしきをいとへるに、相識る人何をがなと風流の器に意を用ひて贈らるゝを、「辭するも來意にそむく故、これかれとつどひて本意にもあらずなりたり」とかたられしといふ。文章にもこのことあり。又六十の歲、賀を催さむといへるを、「妻子こそ悅びもすらめ、他人にあづかるべきことかは」ととゞめしと書かれしも、實事のよし。世人の、一面の識なき遠近に乞ひもとめて、己が賀は詩歌連俳何百何千におよぶなどほこるには、天壤のたがひにして、ことにたとく覺ゆ。又旅行の記のうちに、一夜ながれのうかれめのさまなどをねもごろに書きて、さていふ、「凡そ人情はよく察して盡すべし。自己はかたく愼むべし」となむ。これらは戀歌などよむうへにかけてもおもふべきこと也。また生涯俳諧の門人といふ者なし。「二歲の小兒が舌しどろにものいひたるが、おのづから五七五にかなひたるがをかしくて、是ひとり弟子とおもへる」と書かれしは、卽俳諧にして、弟子なきは、世祿の家にしてさるべき事ながら、

じめて知れり。今もつたへて其の孫藤右衛門家寶とすとなむ。

○蒿蹊云はく、此の傳細井家相識江戸の人に聞きて記す。義士事に先だちて密謀をもらすに、その信義のかたきをしろ。はた其のころ義士の知己なる旨をいつはりて身の榮とせし人も多かりし由なるを、生涯口に出さず、子弟といへどもしらざりしは、用意拔群の人なるを、他事に及ぼしても、おもふべし。義臣傳に、羽倉齋といへる神道者、大高氏にむつびて、吉良氏の館の案内を記し與へたりとかきたる、其の齋とは荷田春滿の事也。羽倉家には傳ふる說なしといへども、彼の書に記せるはよくしる人ありしならむ。凡文雅に名高き程の人は、義にくみするも厚きなるべし。もしたゞ名利のために文雅をうりて、信義乏しききはの人は、骨冷ずして名先づ滅す。たとひ殘る名あるも亦いやしむべし。

横井也有

也有、横井氏、俗名孫右衛門、尾張の士也。篤實謹厚にして文雅を好み、殊に俳諧に長じ、世に名有り。(芭蕉流を喜びて、しかも定れる師なしとぞ)閑田子一とせ彼の國に遊びて、其の著述鶉衣、うらの梅といふ俳諧體の文集をみるに、そのさまいやしからぬの

出居—表の客座敷

手覆—小手

細井廣澤

廣澤は細井氏、名は知愼、書名高うして、もとより文學あり。畫またかろく、書の因にかけるもの逸興あり。且算術に通じて、其の著述の書有り。經濟の才もありければ、諸侯の國に新田を開きしことも聞ゆ。凡多能の人也。こゝに奇なる一話を擧ぐ。赤穗の四十六士のうち、大高源吾にしたしみ深かりしが、豫め其の復讐の謀をも洩しけむ、打入る夜、ひそかに書を贈りて、「今曉事を果さむとす」と告げしかば、澤が家吉良氏の館に近きにより、やがて他へ適くまねして、門を出で、人しれず家の棟に登りて其のさまを窺ふ。さてやう〳〵ことしづまりぬとおぼしき比、歸りたるふりにて内へ入り、ただ獨起き居て、出居にありし間、門をたゝくものあり。心得て自から戸を明けたれば、はたして大高氏にて、おもひを遂げたるよしをかたり、脇ざしの小刀をぬきて、かたみにとて與ふ。武林唯七も亦相知る人なりしかば、具に別を告げて、是は血に染みたる手覆をとりてあたふ。されども廣澤生涯人にかたらず、自から此の事を記して、彼の形見と共に一つの函に納め封じて、ひめ置きしを、歿後子息九皐、何やらむとひらき見て、は

陸羽、盧仝
―共に宋の
有名なる茶
人

宇治の亞相
―源大納言
隆國

德島―阿波
德島、蜂須
賀侯の領地

○蒿蹊評して云はく。善輔茶を翫んで茶匠の窟に不レ落は陸羽盧仝勝れり。馬士轎夫をいとはず茶をあたへ物語せしむるは、宇治の亞相に似たり。しかも時の威權に屈せざるの一條は甚難うして甚危し。幸にして免れたるは天歟、そも〳〵無我の所ニ以無レ敵歟。

園木覺郎

園木覺郎は、阿波の人にて、致仕の後、武藝をもて業とす。妹女に聟どりして家を委ね、みづからは山陰の竹樹林に隱居して、風月をたのしみ詩歌を翫ぶ。はた客を好み、夜をもて日に繼ぐことを常とす。性質膽勇あり。或時德島の長臣權柄を取りて跋扈せる人、覺郎老人が隱居に千年の古松あるを聞き及び、使者に人夫を添へて此の松をうつし植ゑむことをもとむ。老人何心なきさまにて、「吾が艸庵暴風の憂あるを、度々此の松によりて防ぎ侍れば、參らすることかなふまじ」と答へたれば、せんかたなく使者かへりぬるが、纔に其の門を出づるころ、下部を呼びて松を根より切り倒しけるとぞ。其の氣慨善輔に似たるをもてこゝについづ。

田中兵部大輔―田中吉政

手取釜幷鉤、箱に入鎖迄入レ念到來悦思召候。尙山中橘內木下半介可レ申也。

十月十一日　太閤御朱印

田中兵部大輔

○花顚云はく、田中兵部大輔は、その比の諸侯也。越後に御命を傳へて鑄させたる人ならむ。是は其の時の御使番山中木下よりの淸書也。別に持ちたる人の意にて、此の善輔が釜の此の寺にあるによりて、寄附したるならむか。善輔にはあづからざるもの也。彼の太閤の御物は、或る大國の侯の御家に傳はるとぞ。又細川玄旨法印も、此の釜をうつせと阿野越後に仰せられしに、御所の思召にて、たゞ二つ鑄たる事に侍らへば、又同じ形に鑄候はむことは憚ありと辭しければ、理也とて、ざれ歌をよみて、さらば是を其の釜に鑄付けよ。これ同じものならぬ證據也と仰せしかば、やがて鑄てまゐらせけるとぞ。其のざれ歌は、

手とり釜うぬが口よりさしいでてこれは似せぢやと人にかたるな

此の釜今も細川家に傳ふるよし也。又云はく、もとの手取釜の歌は、或說には堺の一路庵がよみしとも、又道六といふ人のよみしともいへど、此の玄旨法印のうつしの戲歌にてみれば、善輔がよみしに疑なかるべし。

手取釜之圖
口經三寸二分　高サ五寸五分
胴廣サ七寸　但シ蓋ハ別也

茶毘所―火葬所

としく色を損じ、「此の釜を奉ればあとに代りなし。よしなき釜故に、とかく物いはるゝも亦おもひの外なり」と、やがて其の釜を石に投じて打碎き、

あらむづかしあみだが峰の影法師

とつぶやきたり。

○蒿蹊按ずるに、あみだが峰、古歌によめるは東南澁谷なれども、此の粟田山にも此の名をよびて、享保のころまでは茶毘所ありしに思へば、南のあみだがみねの下は鳥部野にて、もとの葬所なれば、のちに粟田にうつしたるにやあらむ。

利休もあきれていはむかたなく、豐太閤は短慮におはしませば、いかゞあらむとおもひ煩へど、すべきやうもなければ、ありのまゝに申しけるに、かへりてみけしきよく、「その善輔は眞の道人なり。かれがもてるものを召しゝは我がひがことぞ」とおほせて、そのころ伊勢阿野の津に越後といふ名譽の鑄物師あるに命じて、利休居士が見しまゝに、二つうつさせて、一つは善輔に、かの破りたるつくのひとて賜ひ、一つは御物となる。善輔歿して後、その釜、粟田口の良恩寺に收まれり。其の圖左のごとし。またその手取釜の添文とてあり。

續近世畸人傳　卷之三

粟田口善輔

善輔(一作善法、又善浦とも有り)は、粟田口に住む隱者也。其の居は土間に爐をひらき圓座を敷きて賓主の座をわかち、十能に炭をすくひて、そのまゝ爐に投ず。往來の馬士轎夫に茶をあたへ、物がたりせしめてたのしみ、晝夜のわかちなき人なり。糧つくれば、一瓢をならして人の施を乞ふ。皆其の人がらを知りて、金錢米布をめぐむに、其のもののある間は、家を出づる事なし。爐にかくる所手取釜といふものにて、是にて飯を炊き、又湯をわかして、茶を喫す。其の湯の沸く時は「彷彿松濤聲。昔日高遠幽邃趣」と吟じて獨笑す。

　手取釜おのれは口がさし出たぞ雜炊たくと人にかたるな

と戲れし事もあり。豐太閤そのことを傳へきゝ給ひて「其の手取釜を得て茶燕せよ」と利休に命ぜられければ、休すなはちゆきて、しかぐ\の御命の旨を傳ふるに、善輔聞くとひ

圓座—藁菅藺などにて渦のごとく圓く編みたる座蒲團

利休—千利休、千家茶道の祖

を移して古を語るによりて、人の名付けしにやあらむ。國の士大夫も是を愛して、詩歌を寄せ、親しく交る人もあり。七十の時、是等の人謀りて、壽碑を建つ。七十三にして壬子の年歿せりとぞ。

○又聞く。此の老捜し出せる伊勢の古圖、松坂本居氏の手に落ち、内宮の文庫に納められしが、此の圖によりて、太神宮儀式帳の内に鈴どめの杜といふ所のさだかならざりしが、分明になりぬ。これは往古の官道にて勅使參向の所に出でだり。是らも一つの功といふべしとなむ。彼の古谷艸紙には、さだめて此官道古今のたがひも記されたるべし。予も此のごろかりて見むとするものから、まづ聞くまゝをしるす。

記レ之以附二前記之後一。

寛政癸丑孟冬　　六如杜多慈周識

古谷久語

古谷久語は、伊勢國三重郡松本村の農夫にて、田わざをつとむる間に、好みて野史（軍記の俗書をさす）を讀み、一わたりにして記得し、終に忘れず。村中の集會にこれを語らむことを乞ふ者あれば、乞ふ所の事實を說く事、其の書に對するごとし。此の村四日市驛に逼りたれば、若き時は、常に人夫に役せられて、旅人の竹輿をも舁きたるに、或は奴僕と侮りて談話せる士人など、いろ〱の舊事に委しきを聞きては、大に畏伏せりとぞ。終に泝りて、本朝の歷史及び萬葉集なども悉く暗記して語る。凡そ千歲の古の事も、今みる如く話せる故に、或は年經し白狐の翁に托したるにやなども風說せり。著はす所、南朝略史又古谷艸紙あり。艸紙は伊勢國中を巡りて、上古の地理古寺の廢れたる、及土產の品をも考索して錄せり。されば國君の聞に達し、錢を賜ひて賞し給ふ。もと苗氏もさだかならねば、古谷の氏も君侯の賜へる所なりといふ。思ふに久語の名も、時

運東西。此其臥而遊之乎。願某所宗。厭穢而欣淨。是誠何心哉。師其忖度而命之」余曰「有是哉。其惟泊乎。夫泊也者。寄身一葦之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所止而後止焉。然目不得不視。耳不得不聽。彼寒山之鐘。江楓之火。亦無所待而有所待者也。經不言乎。見聞如幻翳。三界如旅泊。故見而翳之。是謂不見之見。聞而幻之。是謂不聞之聞。居界出界。方便之門其在玆與。君豈所待是舍諸。且夫華頂禪林黑谷者。皆君所宗宗匠之跡。非所以羹墻于旦暮乎。昔者吾正覺國師居相之三浦。名庵曰泊船。聞芭蕉翁寓武之深川。亦有泊船之堂。是猶有繫乎水與船者也。今法師之營。非水而山。不船而泊。泊之時義於是遠矣哉。」法師曰。「善哉。請記斯言。勿忘」

天明丁未十一月　　淡海竺常撰

泊菴本爲朋簪而設。旣而以謂。樹下塚間非敢所望。降此則一把之茅猶爲有餘。豈可有長物乎。遂乃捐之移於歸白道院。替爲佛室略無顧惜念。於是泊菴之爲泊。名實愈副焉。卽大典禪師所命亦爲得其實矣。唐詩有之。縱然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法師之視泊庵。殆亦如斯夫。比之平泉之石。賢愚相距何如也。因

相國寺―京都五山の第三、臨濟宗

付合―俳諧の體につけあはする連歌

臘月―舊曆十二月の異稱

て、彼の歸白院におくり、内佛場とす 此の伯庵の記は、相國寺蕉中長老著はし給ひ、破りて後に六如上人の添記有り。今左に揭ぐ。生涯の發句付合文章などは、印行の書どもにあまたなれば、玆に贅せず。久しく病して、遂に其の冬臘月廿五日の曉身まかられぬる、齡は六十有四なりき。

泊菴記

幻阿法師不慕榮利。不驚寵辱。所談者淸玄。所詠者俳諧。性好山水。探名區攬勝槪。足跡幾極四海之濱。而一寓諸諷詠焉。其居于岡崎也。並街巷背山野。所爲聘心目而寄遊暢。乃憑神足之通也。近更卜一宅。乃東距數百步。爲古法勝寺跡。因結團瓢。分白河水。帶其門。橫略約入之。咫尺間。頓隔凡境。南面華頂山紫翠聳出列松之際。東則南禪之樓。禪林之殿。正爾與軒楹相當。時則作鐘磬之響。如意瓜生諸峰邐迤而北至比叡。更開一窻受之。乃黒谷蓊鬱擁其前。使四明適以臨焉。至於雪月花樹爲之裝飾。則四時變朝暮換。不可勝狀。蕞爾一團瓢席。僅函丈而氣象百千盡在几席間。不亦奇乎。法師旣多四方交遊。戶外之履未免雜遝。則今之所營唯同調者而得以下揚云。乃謁余謂曰。「某老矣。不復從

丈六―身の丈・丈六尺の佛像、常に坐像

無慙愧―破廉恥

石山寺―近江滋賀郡石山村、西國巡禮十三番札所

常燈―神佛の前に常に點ずる燈火

癭瘤―こぶ無用の長物

るも、丈六なるがゆゑに、動かし得ず、灰燼となり、はつかに右の御片頰のみ寒灰の中より出でたりしを、いたく歎きて、佛工の妙手をえらみ、浪花の田中康朝に許多の金さまざまのものをさへ贈りて、(佛工をよろこばしむれば、佛像圓滿にとゝのふものとかや。むかしより例ありとなむ)此の殘りしに繼ぎて、御首を修せしめ、總身は五條の佛工隆慶に作らしめて、本寺に安置す。又此の寺の鐘は、本尊の緣記を鑄つけて名鐘のきこえあるが、幸に烟にもれしを、時の住持無慙愧の惡僧にて、是をさへ他へ賣り渡したるを、幻阿さま〴〵はかりて、金を捨てゝ取返されたり。「此の人なかりせば、本尊も鳴鐘も名のみならまし」と人々稱歎せり。是より先、石山寺に常燈を供せられしこともありき。はいかいの事におきては、粟津のばせを堂を再建して風流をつくす。又ばせをの繪詞傳を著はして、ここの什物とし、其の寫を印行して世に弘むるをはじめとし、所々に芭蕉塚を建てて其の舊跡をしらしむるなど、其の徒の稱せる業おほし。天明の中比にや、もと住める五升庵の後の空地に、白庵といふものをたてて、同志の人をのみつどへ、花月を翫ぶ料とす。然るに幾程なく洛中大火の後、こゝをかりて住める友人これかれ有りて、やう〳〵住み荒らしたれば、初めの興も夢と覺めて、癭瘤の思ひせしが、遂にこぼち

明妃―漢元帝の女官王昭君、畫工に賂せず醜女にゑがかれ匈奴に遣さる

單于―匈奴の王の稱

阿彌陀寺―京都寺町

子院―下寺

寄東適禪師

高僧丈室倚岩巉。千仞機鋒凌碧霄。講法臺前馴猛虎。參禪會上斬兒猫。寒溪明月皷氷汲。暮嶺白雲分雪樵。久抱煙霞負蓮社。思師永夜夢魂遙。

明妃曲

氈帳秋風憶漢都。君王命妾和單于。此身空解誤明鏡。恨在娥眉不畫圖。

右二生はさして奇といふべきこともなけれど、生涯意を得ずして歿するを憐むがうへに、前編の著をふかく稱して、世にしられぬ人のしらるゝをよろこびしかば、こたび花顚は春莊が傳を擧げ、おのれ又伯壽をあはせていさゝか友誼を終ふ。

僧幻阿

幻阿、蝶夢法師は、京師の人、寺町の上阿彌陀寺の子院歸白院に住す。若き時は頗る放蕩なりしかども、俳諧をこのむこと人に過ぎ、四方の國々に行脚して、此の道を執行す。後洛東岡崎に閑居を占め、俳諧をもて聞ゆるものから、こゝろざし佛乘に歸す。其の大功をいはゞ、天明申の年の火災に、阿彌陀寺燒失して、名におふ本尊弘法大師の作といへ

洮ゝ湖—近江の琵琶湖　皇都—天智天皇舊都　金龜皇國の城—彦根城　地開云々—此の湖の成れるとき富士山出づと

也」其眞率若レ此。交遊中能有ニ若人一乎。此事今尙往ニ來于胸中一也。

○九齡字は伯壽號ニ蓋山人一本姓は加藤、近江佐々木山の麓淸水邑の人、詩を好み、歌をも嗜む。若くして家産に疎きゆゑ、家弟に業を繼がしめ他邦に遊ぶ。後京師氏家柳園なる人、母家の緣あるによりて、其の女に配し、其の家を繼ぐ。柳園は醫人にて多能、有賀下流の歌をよみし人なり。伯壽は漢學を敎授し、すこぶる歌をも唱ふ。然も自ら作る所の詩歌、すべて書きもとゞめず散り失せたるを、歿後知己の人はつかに集むるもの有り。其の二三首左に擧ぐ。性飄逸風韻有り、且古詩を說話することを得て、人を絕倒せしむ。晩年には王陽明の學を信じたり。京師中にしてやゝ名をなすにおよび、久しく病みて歿す。をしむべし。

洮汜湖二首

萬頃煙波涵ニ大淸一。琵琶何歲作ニ湖名一。園存石鹿皇都跡。藩壯金龜侯國城。諸島爭レ奇盤上峙。千山浸レ秀鏡中平。滔滔八百餘川水。向レ此朝宗日夜聲。

西北名山數十峯。巍然紫翠畫中濃。風前唫鳳笙洲竹。礒上臥龍臺館松。天接ニ中流一涵ニ日月一。地開ニ東海一吐ニ芙蓉一。丈夫不レ識ニ名區壯一。宇宙何由拔ニ曠胷一。

懐にして、知己の諸名家に乞ひて記さしめ、「此の帖はおのが別荘なり」とたのしめり。發心集に、家の圖を書きてよろこびける男有りしに似たり。その作、彼の帖の首にかけるは、

半開全盛競春光。日日歸家衣袖香。酒館佳招僧院約。人情一月爲花忙。

又

偸閑午日惜芳菲。惆悵花前舊友非。醉後縱能紅照面。時時作雪鬢邊飛。

六如上人、多年此の人を憐ぶ故に、死を哭して、其の絶筆の詩韻を次いで曰く、

文仲戌申罹災。家產蕩盡。尋復得疾。其病中立秋詩曰。閏接林鐘暑更獰。上蒸下濕痁瘟幷。墦間餟具醫調護。棺後詩名天寵榮。老雀引雛窮巷寂。新篁灑月敗簾淸。五更行雨交金吹。秋自白川水北生。(作此詩後遂不復起。終爲絶筆。)

先廬委燼鬱攸獰。錯莫賃居貧病幷。一盎糗支百錢卜。數篇詩敵五侯榮。舟移夜壑命何促。墓傍青山骨亦淸。得句猶思來質我。每逢風景感逾生。

上人末句自註曰。生每得詩。或有推敲未穩者。輒來詢之余。余曰。「某字可」若稱其意則低頭合掌謝不置喜形于色。若不稱意。則頭也不低。掌也不合。傲然掉頭曰。「原字尚勝

春くれば雪間々々に若艸の生ひ先見ゆる野邊ののどけさ

尋花

日高くば此の川上を尋ね見むむすべば水の花の香ぞする

山家月

世をいとふこゝろの外に澄む月の影さへ洗ふ山の井の水

嘲菊意

隱家の花とも見えず此のごろのよにもてはやす菊の色々

不久詣道場

かず〳〵の心の關をこえて今法のみやこの近きをぞ知る

あまたの中には、よろしきがおほかるべけれども、こゝにとゞむ。

端文仲氏家伯壽

端隆、字は文仲、通名順助、春莊と號す。書林なりしかど、隱操ある人にて、詩を能くして名あり。天明の火にあひて、大に零落す。しかれども、春莊帖と名付くる書畫帖を

天明の火―光格天皇天明八年

仙洞―太上天皇の御所

みて、診ひて曰く、「猶見る所あり」と、しひて藥を進めしに、忽ち蘇息し給ふとなむ。此の類猶有りけむ、大に世に行はる。又もとより國歌をこのむ。時に、正靈元　上皇、仙洞に人麿の社を造らせ給はむとて、あまねく古像を求めさせ給ふに、因藏せる所の像、阿蘇より傳來せるを奉りしに、甚叡慮に愜ひしをもて、許多金及び本町の宅疎竹庵の租を免ぜられ、剰へ醫人なるをもて、忝く大己貴命の字の宸翰を賜ふ。終に法眼にさへ進む。且和歌を嗜むよし叡聞に達しければ、某の卿の傳奏にて、自詠二十首を奉るを、甚奇特に思し召して、東蘭亭の號を賜ふ。よりて其の書院の名とす。凡生涯の榮譽かくのごとしといへども、身は不犯にして、しかも齋食を持ち、くすりをあたふるにも、鳥獸の肉をもちひ、殺生にあづかることをせず。寶永饑饉の時には、勝平散といふ藥を製して、病者に施せしなど、善業人の口にあり。七旬有餘にて病なく、自から死日を知り、法服を著し、端座して逝す。醫術の書は、其の家に傳ふ。(一生不犯の人なれば、子なく養子をもて家名を相續す)和歌集は一旦印行すといへども、火のために亡びたるを、ゆかりの人の書集めたるが有りて、其の中におぼえたるを擧ぐ。

早春

京の巴人といふもの病すと聞きてのぼりしに、伏見にてはや落命したりときゝて、
　嘘にしていで逢ふまでの片時雨
生涯の秀句と人のいへるは、
　ほろ〳〵と雨そふ須磨の蚊遣哉
七十六七ばかりにて終れりとぞ。

高森正因

正因高森氏、號は寂嘯、本肥後國阿蘇大宮司三家の内、(阿蘇村上高森を三家と稱す)高森の孫にして、紀伊國に生れ、醫をもて業とす。又佛乘に歸し、いまだ若くして一切經を閲するの望み有りて。京師に登る道、淀河の舟中にして、泉涌寺中來迎院主に相見して、志願を述ぶ。院主感じて「さらば吾が院に寓居すべし」と、誘はれてこゝに留る事三年、終に閲藏の願を果して後、此の寺近く伏見街道本町に居をトめ、專ら醫術を施して、技妙に至る。其の一をいはゞ、大和高取侯の招に應じて至りし時、はや事きれ給ひぬと聞えしに、「然はありとも遙々參りしかひに、空しき御體にても一診しまうさむ」と望

一切經―佛經の總名經律論の三藏すべて七千餘卷
大和高取侯―大和高取領主植村家

有りと見て」―證道歌「鏡裏看レ月不レ難水中捉レ月争拾得」

ある堂上家へ召されし時、

　消し炭も柚味噌に付いて膳のうへ

何某の大納言殿賜ひし御句

　名はよもにひゞきの灘の一つ鷹

といへるにこたへ奉りて、

　ひとつ鷹狂ひさめたり雪の朝

大坂の知己の者遊女を請けむといふを諫めて、

　手に取るなやはり野に置け蓮華草

母の喪に墓へまうでて、

　さればとて石に蒲團も著せられず

駿河の白隱和尚賞美の句のよし、

　有りと見て無きは常なり水の月

達磨尊者背面の圖に題す、

　觀ずれば花も葉もなし山の芋

酒井侯—播磨飾東郡姫路の領主、酒井雅樂頭

播磨加古郡別府村の人、瀧野新之丞、剃髪して自得といふ。富春齋瓢水は、俳諧に稱ふる所なり。千石船七艘もてるほどの富豪なれども、遊蕩のために費しけらし。後は貧窶になりぬ。生得無我にして洒落なれば、笑話多し。酒井侯初めて姫路へ封を移したまへる比、瓢水が風流を聞し召して、領地を巡覽のついで、其の宅に駕をとゞめ給ふに、夜に及びて瓢水が行方しられず。不興にて歸城したまふ後、二三日を經てかへりしかば、「いかに」ととふに、「其の夜月ことに明らかなりし故、須磨の眺めゆかしくて、何心もなく至りし」といへり。又近村の小川の橋を渡るとて、踏みはづし落ちたるを、其のあたりの農夫、もとより見知りたれば、驚きて立ちより、引きあげむとせしに、川の中に居ながら、懐の餠を喰ひて有りしとなむ。京に在りし日、其の貧を憐みて、如流といへる畫匠（初橘屋源介といふ）數十張の畫をあたへて、「是に發句を題して人に配り給はゞ、許多の利を得給はむ」と敎へしかば、大によろこび、懐にして去りしが、他日あひて、「先の畫はいかゞし給ひし」ととふに、「されば持ちかへりし道いづこにか落せし」といひて、如流がために面なしと思へる氣色もなし。所行大むね此の類なり。俳諧は上手なりけらし。おのれが聞くところ風韻あるもの少し擧ぐ。

くに、此二歌を手習の始としたるる事古今集の序に見ゆ

し。花顚其の追福に此の傳を記すといひしが、これも亦ほどなく同じみちに趨けるも哀なりけり。

其蜩庵杜口

其蜩庵杜口は、生涯俳諧を好み、よき句ども多かりけらし。はじめ退隱する時、人の訪らひしに答へて、

くちなはの見かへりもせぬはかまかな

此の句あまねくいひもてはやして賞す。雅俗聞見の博き人にて、談話おもしろかりしかども、老後耳聾の故に、明暮古文書のめづらしきを寫し、又自ら見聞きし事共を筆にまかせて、つれづれを消す。能筆にて、根氣も強かりしかば、凡二百卷におよび、翁草と號す。相識の人おのが好みにあたる卷々を借り寫してもてはやせり。八十六にして、乙卯の春、なき名の數に入られし。

瀧野瓢水

三綱—君臣父子、夫婦の大義
五常—仁、義、禮、智、信
なにはづ淺香山云々—難波津に咲くや此の花冬こもり今を春べと咲くや此花、あさか山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を我が思はな

こゝにもまれ〳〵も降るなれば、富士を仙境といふも宜なりとおぼえし。それより案内を得て、嶺を極めけるとなむ。西遊には、霧島の嶽の天の逆鉾を見むと、三度まで登りしかど、硫黄の氣に堪ずしてえいたらずといへり。凡そ日向わたりは、正學の道をいふ人なく、實に邊鄙なれど、また人心の直なるものから、塘雨、三綱五常の趣をより〳〵に說きさとしければ、人々信じ、こゝにとゞまること八年、今やう〳〵文字の事をもいふ人あるは、またく此の老の功なりとぞ。又はじめ嬰兒の手習の手本をもとめしかば、いろはをかきて與ふるに、「是は何といふこと」とあやしぶ。塘雨もまたあやしくて、「ここは手本の始に何をかきて與ふるぞ」と問へば、「なにはづ淺香山のふた歌也」と答ふるに、古風の殘れることを感じぬとぞ。此の外奇話もあれど之を略す。

○以上花顚記す。閑田子又いふ、此の人京にかへりて後、かの兄身まかりしかば、止む事を得ず、萬屋にたち入り、とかく事を取まかなひし時、其の主に說きて、よしなき器財を買ふ事をとゞめ書をあまた買はしむ。又其女の需に應じて、つくしごとの組の文を註して自在抄といふものを著せり。予も請はれてこれを添削し、跋をもかきたり。おもしろき老人なりしが、をとゝしの春醍醐の花見にいきて、歸りての夜、頓死せり。一生風流をつくしたりといふべ

いへども、稿を脱せず。その中に奇なることは、富士にのぼらむとて、道を迷ひ、そこ
とも知らぬ曠野をさまよふこと數日、第四日には、氣根疲れはて、手足も縮み、一步も
進まれねば、「とても死ぬべけれど、こゝに死なむより、同じくは往來の道に出でてこそ」
と、富士權現に祈りけるが、其の日もそこに臥して、明くる朝に見れば、夜の間に露お
ほく降りて、木草の葉にかゝれり。折から咽渴きたれば、幸に手を伸べて、此の露を
一と雫嘗むるに、甘き事たとへなし。夫よりかた〴〵の露を呑み〳〵しければ、忽ち精
神爽になり、足もかろ〴〵と成りしかば、こは神の惠み也とたふとく、又曠野をそこ
はかとなく行くに、谷のあなたに小家一つ見出したり。うれしくて行かむとするに、谷
ふかくして道なし。思惟して、そこに竹のありける、其の枝に取付きて飛びければ、不
思議に恙なく向うの地にいたりぬ。さてかの一つ家に入りて、しか〴〵のよしを語り、
路を問ふ。あるじ驚き、「こゝは木樵山がつも通ふ所にあらぬものを、先今夜は休み給へ。
明日案内せむ」と、粥など燒きてあたへ、さま〴〵の物語りするついで、「けさはめづらし
く甘露降りたり、めしょや」といふに、さてはとはじめて知りぬ。「こゝには折々降るに
や」といへば、「たまさかにはあることなり」といふ。彼の崑崙山に甘露ありと聞くを、

俵物—米を入れたる俵

と聞きて、其のあたりに行きしが、家もまばらにて、人にとふべくもあらぬ所に、築地の崩れて、犬の通ふ穴明きし家有り。其の穴より覗き見れば、庭はえもしれぬ草木繁りて、人けもありやなしやとおもふばかりなるに、俵物など多く積みたれば、是さだめて梨一が家たるべしと、つと入りて案内を乞ひしに、はたしてそなりけり。ある時、越前の兵庫といふ所の代官になり、（閑田子云、出勤だにもせぬ人の代官になりしとはいぶかし。あるひは止む事をえぬ事ありて、しばらく君命に應じけるにやたづぬべし）秋收を聞くことありしが、其の正直無欲なることを、百姓大きに感じて、梨一明神と唱へて、其の眞影を崇め、秋ごとには祭れりとぞ。

百井塘雨

百井塘雨は、通名左右二、京師の人也。其の兄は室川の豪富萬屋といへるが家長をしてありけるによりて、おもへらく、商家とならば、此のごとく富むべし。然れもど、およぶべからねば、及ばぬことを求めむより、我が欲する名山勝槩をたのしむにしくはなしとて、金三十片を携へ、西は薩摩、日向、東は奥羽外が濱のはてまでを窮む。其の記事ありと

越前丸岡侯―越前國坂井郡丸岡領主、有馬家

不羈にして―物に束縛せられずして

奥の細道―松尾桃青が東北旅行の日記

一 祚 梨 一

一祚梨一は江戸の人也。性廉にして家乏しく、書のみ多し。凡そ世の人事を省き、外の聞見をいとはず、隱操ある人なり。越前丸岡侯聞し召して、使者をつかはされけれど、固辭してうけず。使者謀りていふ、「一つのあばらや有り、それを賜ふべし、又何程の祿を充て行はるべし、しかれどもかつて勤仕の勞をおほせず、たゞ今迄の姿にてあらしむべしとの御事也」と。こゝにして丸岡に下りぬ。もとより儒者に用ひ給ふ御心なれば、折々はもの問ひ給ふことあり。しかれども、一度も出仕といふことはなく、五年過ごしければ、今はとて、侯、梨一に儒書の講談を命じ給ふ。「おのれも幾とせか恩を蒙りしことなれば、辭するに忍びず、命に應ぜむとす。されど、脇ざしのみにて刀は今になし。いかゞせむ」といふ。「それこそ安きこと」とて、其の使者の士より佩刀を贈りけり。不羈にして洒落なることすべて此の類なり。かゝる意より俳諧を好みて人にもしらる。もとの水といふ著書あり。又ばせをの奧の細道を註したるもあり。俳諧にて交りし洛の蝶夢法師、伊賀の桐雨といへるとともに、梨一が所をとひしことありしに、丸岡のそこ〳〵

禰宜——神官

ゆく、可悦事ながら、もと神官の家に生れながら、髪を切りて僧形たらむこと本意ならず、口をしければ辭し奉らむや。いかゞ」と問ふ。翁曰く「汝禰宜の家に生るといへども、三男也。故に家事にあづからず。醫を業とするは父の命也。今諸侯に出仕して僧形となるも、先祖を恥しむるにあらず、出仕の譽莫大なり。當時皇家すら皇子を出家せしめ給ふ例あり。然れば道に背ける道理もなし。心一決して出でられよ」と。爰においてこゝろよく出仕せしとぞ。又ある時書生等集まりて、唐山と我が邦との是非と、文物の多少を論じ、すでに高聲にいひ募りければ、曰く、「我が邦はもとことばの國なり。文字にうときは理也。其の上文武に配すれば我邦は武國也。陰陽に配すれば我が邦は陽也。陽は形なきを尊ぶゆゑに、草木の花うるはしく咲けり。唐山は陰也。陰は形をとゞむる故に、艸木實をよく結ぶ。陰の德故に文物も亦多し。是文國のしるし也」と判ず。其の餘話多けれども省きぬ。思孝又其の詩歌を多く聞きしかど、皆遺失せり。其の中に歌一首記憶したるをしるす。

五月の晦日に身延山にまうづる人をおくる

雨にきるみのぶの山に長ゐすなけふ五月雨の空もはるるを

孔夫子云々—孔子楚にゆかんとせし途中陳蔡の二國兵を出して之をとどめし
淨衣—白き狩衣
中臣の祓—大祓の祝詞

を、知己の者酒肴を齎し來りて、恙なきを祝ひ宴を設く。酒闌なる時戲れて云、「翁の關東へめしにあひ給ふころも、さして恐るゝさまなく、又けふこと故なく本國にかへり給ひても喜べる色なし。如何」といひしかば、笑ひて、「我もと犯せる罪なし。しかれども、孔夫子すら陳蔡の厄あり。ましてわれらごときにおいてをや。もとより無實のことなれば、などか解けざらむとおもひしかば、とけてもまた今更に悅ぶべきにあらず」とい ふ。又此のあたり近き所に桶屋あり。其のあるじ神道を學び、淨衣を著烏帽子を引いれて、朝夕中臣の祓をよみ、幣とりてぬかづく。或時來りて神道の事を聞く。翁曰く、「神道は神職祝子すら守ることあたはず。まして家業桶屋なればなほさら也。元神道は天子の治め給ふ道をいふ。其の外に道有るにあらず。桶屋の神道は正直正銘をむねとして家業をつとめ、父母に孝を盡し、朝夕先祖の位牌を祭り、己己が宗旨により、神をも佛をもたどうやまふにしくはなし。汝がごとき身の淨衣を著し、祓をよむこと、かつはおそれ多し。けふより改むべし」とをしふ。桶屋も其のことわりに服し、從來の行をかへ、兩親につかへて孝をなし、神をぬかづくのみならず、念佛をもまうしけるとぞ。また一書生來りていふ、「おのれ今度諸侯の召に應じて醫官に命ぜられ、祿を賜はりて、東武に

長配姪士弘。餘夭。後嬪細江氏。一男曰敍典。冒吉村。内外孫十四人。歸孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。

起于田間。升中廳直。何以得之。稽古之力。

加々美櫻塢

加々美信濃守源光章、櫻塢と號す、甲斐國山梨郡山王權現の神職也。人となり溫柔恭敬にして、博學多聞、國學はさら也、儒、佛、道家、音律、有識、天學、曆、算等の書にも亘れり。和歌は風竹亭の翁に學び、文學は三宅尙齋に問ふ。初め家貧にして油なし。線香を燻らし、その光をたのみ書をよむ。學成りて後、隣國凡十箇國より門に遊ぶ者多し。神學指要をあらはし。世に行はる。餘は稿を脫せず。世壽七十四にして卒す。平生一言を交ふる者皆服せざるはなし。こゝに話一二條を擧げてその人をしらしむ。此の門に山縣某といへるものあり。もと甲斐の産にて學成りて後東都に徘徊し、儒を唱ふ。然るに、其の學術よからず、國禁に觸るゝを以てとらはれ、終に刑せらる。是に坐して此翁もおほやけの疑ひをうけ、廳へめし給ふことありしが、いくほどなくて本國にかへる

山縣某—山縣大貳

桑弧—男子
桑弧は桑弧
誤

十口俸—十
人ぶち

桑弧空負四方志。三角亭中夢亦奇。忽怪蟲聲開一面。深歡月影照多時。人間交際重謙損。天道循環警滿虧。意自不妨八風至。牀頭長掛退翁詩。

又

三角亭中獨煎茶。人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪沙。有水有山常可月。無冬無夏永觀花。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窗同碧紗。

壽碣銘

奥田士亨字嘉甫。號蘭汀。亭曰三角。南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大人季。爲伯龍溪嗣。服嫂堀口氏喪。十四遊學宇治。十九上京。師事東涯先生十一年。二十一命校名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。二十九擢津府。賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史。半年句豆竣功。癸未領百二十石。庚寅東下。留柳邸。九月。壬辰班掌鎖右。褒學術也。甲午轉中廳。賞蓄書萬卷與家丁卅員器械也。丙申告老。尙賜退俸十口。隔日入侍。或至夜分。所賜書畫。扇巾。衣裳至襦帶山積不止等身矣。今茲己亥。不幸會嫡士元喪。忝蒙兩公存問。仍有花賚賜。臣庶之家未之前聞也。時歲七十七。先嬪土井氏二男。次曰正準。冒岡部。三女

余嘗於後圃中開試馬場。長不及五十弓。廣僅可旋馬。傍植花卉。外鑿芙蕖溝。內築小堤。偶記兪退翁三角亭詩。曰。「春無四面花。夜缺一簷雨」同話錄。花爲韻。作余仁廓。余愛其句。深服其意。凡天下之花無四時。無五色。雖有躑躅紫燕稱四季。歲中三開耳。余家五色梅分淺深紅。足數。何索墨梅。何貪四面。竊思三角之爲物。則方之半矣。缺盈之戒無以加焉。因欲倣之構亭於西北隅。庶乎不妨旋馬焉。有志未果。客歲病眼折足不堪騎乘。遂放馬徹調馬埒。鋤爲菜圃。今玆春晚。有人告曰。「有厰材。價不滿一貫文。盍安堤上也」余心搖焉。召一二老僕謀之。僉曰「不用。請倍其價可辨矣。日亭午。此去神山幾里。春水方漲。編筏乘流二人而足」。余從之薄暮果致杉材十餘根於門下。明日召匠構之曰。「務存斧鋸痕。謹勿施雕斲。不日成之」又翌日葺茅。至三日落之。時三月十二日也。揭篷窻子扁。忽官書至。飯于亭。歸于府。他日心常在此亭。七月之望。歸鄉坐臥亭中。仰看青山。俯觀紅蕖。始償平生。因爲之記。云。

（此の後凡百の器玩三角のものを愛し、文庫すら三角に造られしに至る。一奇事なり）

之三角亭詩

推敲―字句の鍛煉

八旬―八十歳

蛇足―不用の者を更に附け加ふる事

細楷―小字の楷書

易簀―死去

ひて推敲を用ひず、人の需に應じて立どころに成す。文章におきては多年心をとゞめて専ら簡約を貴び、一篇苟もせず。詩文章ともに三角集に具す。識者鑑別すべし。終身抄書をつとめ、八旬に及んで猶倦まず。著述はつとめられざりしかども、猶數部ありしが、皆一時の戯作にして、經義に及ばず。門生あるひは經書の注述を乞へば、「先師の遺書盡せり。我が輩蛇足すべきにあらず」とこたふ。又書を能くして、乞ふ者あれば欣然數十幅を揮うて厭はず。最も細楷によし。年古稀に過ぎて、なほ蠅頭字を作るに眼鏡を用ひず。はた文事のいとま、武事をも好み、弓馬の道拙からず、終身心を用ひられしとぞ。(三角亭の記。試馬場のまうけあるにても知るべし)七十七にして壽碣を作り、自から其の銘を撰む。身後或は溢美の言あらむをおそるゝとなり。易簀年八十一。豐原枕山先塋の側、あらかじめ建る所の墓碣の下に葬ると云ふ。蒿蹊少年より其の名聲を聞き、又近比三角集を見て、ます〳〵醇儒にして、風流なるを知る。ゆゑに自撰の墓銘したはしく、伊勢に乞ひしかば、彼の門生野村氏是を寫し、かつ親しく見聞する所を錄してよせられしにあひ、此の傳をあらはし、三角亭記に墓銘をあはせて左に掲ぐ。

三角亭記

上足—高弟

享保乙卯—二十年

十郎といふ。其の先、越前豐原より出でて伊勢に來り、櫛田川の滸に家す。故に其の所を直に豐原と稱し累世土著の一名家也。翁幼より學を好み、同國宇治にあそび、表叔蘋洲（山崎家の門人）に寄食し、ものよみすること三四年、蘋洲告けていふ、「學者正に天下第一等の人について學ぶべし。今京師に伊藤東涯あり、世に得がたき人とはこれらの人をいふべし。汝往いて學ぶべし」と。こゝにおいて、十九にして西上し、堀川の塾にあること十餘年、諸門生おして上足とす。且つ講說に長じられしかば、師もこれを許し、屢代講を命ぜられぬ。二十二にして名物六帖を校して深く師の意に叶ふ。然りしより後編述必專ら任ぜらるゝとぞ。二十九にして藤堂家の學職に擧げられ、職にある事五十年、四君に歷仕し、優待他に殊に、退隱の後も寵遇甚しく、呼ぶに先生をもてし、名を呼び給はざるに至る。性剛介にして物に屈せず。然も家に在りて父母に順に、兄弟に睦まじく、他に接するに信厚也。凡三年の喪は、久しく廢絕し、學士といへども勉得ることかたきを、先生享保乙卯のとし父の喪にあひ、翌年又師東涯をうしなひ、心喪を合せ通じて四年、かたく喪をつとめられしなど、其の節操を見るべきもの也。經學に力を用ひられしは論なし、博聞强記もまた人の知る所にして、詩又一家の體をなすといへども、し

沉約が八病も出されしまゝにこゝに擧す。

平頭　上句第一二字與下句一二字同聲。

蜂腰　第二字不得與第五字同聲。

上尾　第五字與十字同聲。如青青河畔艸。鬱鬱園中柳是也。

鶴膝　第五字不得與第十五字同聲。

大韻　如聲鳴爲韻。上九字不得用驚傾平榮字。

小韻　除本韻一字外。九字不得兩字同韻。如遙條同韻也。

正紐　詩病有正紐傍紐。謂十字內兩字雙聲爲正紐。

傍紐　若不共一紐而有雙聲爲傍紐。如流六爲正紐。流柳爲傍紐。

泰宇　下村道瑞謹識

奥田三角

古稀—齡七十歲

伊勢の儒官、奥田三角、名は士亨、字は嘉甫、蘭汀と號す。又後古稀の齡に及んで、公より南山の號を賜ふ。三角は亭の名にして、退隱の後俗稱に用ふ。小字宗四郎、後淸

李于鱗—名は攀龍、明の歷城の人、詩文に名あり

王元美—名は世貞、鳳洲と號す、明の太倉の人、有名なる學者

菅江諸家—菅原、大江の二家

咫尺なれども—近けれども

字を塡むる也。總じて、詞の正しきをもて、其の心の正しきを可レ知なれば、節奏なきは君子の辭にあらず」など、詩書を初め經書に系を引き、雙聲疊韻を註し、詩も歷代を揭げて下李于鱗、王元美におよぶ。其の圖甚煩しければこゝには省く。「皇朝にても、昔は此の法正しく、菅江、諸家皆此の法によらる。三百年前薩摩の僧文之等も(四書に文之點といふものあり)詩文猶是を用ふ。近世唯近體の詩に平仄を用ふるのみにして、此の法を廢していはざれば、知る人なし」など委しくこれを筆し、常の言語にも說きて大息せらる。蒿蹊少壯の日、此の老の居に咫尺なれども、唯文華にのみ意馳せて、かゝる緻密の法は聞くにも惓み學ばざりしを、老來さらに遺書を見て、頗る後悔の想を生じぬ。この書其の藏板にして、世にあまねからず。此の老歿して又いふ人なければ、纔にこゝに其の論を擧げて、彼の思を世にしらしめむとおもへり。

詩家音律凡例小引

八病在二五字內一謂二之急一。在二十字內一謂二之緩一。緩急之度謂二之節奏一。節奏也者。其作レ詩之本歟。豈啻詩已。凡百散文儷文亦皆雙聲疊韻也耳。而今吾邑之士。絕無下講二求雙聲疊韻一者上。余甚惜焉。故著二玆編一幷二凡例一云。

仁正寺領主市橋家

雙聲―同一母字に歸する反切法、靈歷切歷の類

疊韻―同一韻字に出づる反切法、掌兩切、掌の類

八病―平頭、上尾、蜂腰、鶴膝、大韻、小韻、正紐、傍紐

口氣―言ひぶり

にて、自のたてたるむねを變ぜず。故に世の學生に交ることを好まず。他は小兒のごとくおもへり。其の主とする所、詩文の音律にて、一生古今の詩に、雙聲、疊韻を改め、系を引くを所作とし、遂に詩家音律といふ書を著す。是は梁の沈約が八病を主として、「古の詩文には皆此の法あり。沈約以前も聖賢の語には自然に音響節奏あり。沈約も亦これによれり。八病は詩に此の病を避くべしといふことにはあらず。八つのむづかしきことありといふ意にて、堯舜も其れ猶病焉の病の字のごとし。其の法は雙聲疊韻偏になる時は音響とゝのはず、奇偶相應じて、聲律に愜ふ。凡雙聲疊韻を急に用ひたるは調急に、緩く用ひたるは調緩し。緩急の拍子相交り、唇、舌、牙、齒、喉の五音、平、上、去、入の四聲織り成して、自から文采をなし、限なき響あり。もし唯同祖の字をつらね、唇舌等の音を專ら用ふれば、吃語となりて節奏なし。反切はもとより聖賢の言語、詩賦の雙聲疊韻等の節奏の爲めなれば、是によりて溯れば、數千年前の聖賢の語勢口氣、宛然としてみゆ。此の法によらざれば、門外にありて門内を推計るものにして、風調を論ずるに由なし。又樂府歌曲の類は、かの國にても作者の意にまかせて作れば、音律に背くによりて、倚聲塡字といひて、其の調に愜ふべき聲の限り空圏を作り、其の聲によりて文

八分―隸書の一體

三論―佛教八宗の一、中論、百論、十二門論を所依とする者

光琳―緒方光琳、有名の畫家

貪著―物に心を惹かさるる

宇都宮由的―遯庵、周防國吉川氏の儒者

仁正寺侯―近江蒲生郡

人淸廉隱操有り。篆隸八分の諸體を極む。初め鈴木正直(儀左衛門、臨池堂と號す)に學ぶといへども、自から一家を成し、一時に鳴る。字學委し。三論を持し、老荘を主とす。生涯妻を蓄へず子なし。心を方外に遊ばしめ、洛西泉谷の山中に庵を結びて、時々行きて獨樂す。又仁和寺御門前光琳が建てし家にも住めりき。(此の家頗る風流にて、蓮池に禪堂なども有り、光琳自畫の障子も有りしが、後やゝ荒れたり)遊山翫水の癖、尋常にすぎ、はた平生移居を好み、洛中も所々にすめり。久しく居れば、近隣の人にも馴れて貪著の思を生ずるをいとふとぞ。

下村道瑞

道瑞下村氏、號泰宇、周防の產とやらむ。少年より京師に遊びて、醫は北尾保安に學び、文學は宇都宮由的に問ふ。學なりて近江仁正寺侯に仕ふ。後致仕同國八幡に棲遲し、老を養ふ。常に枸杞を制して茶に代へ、「保養これにしくものなし」といへり。保養の故にや、心身健にて、九十五六まで生存せり。療治も一風あり、病人旦夕にせまるといへども、くすりなしとはいはず、「療治は療治也、死は死也」といへり。すべて、氣象強き人

不重則不威—論語の語
布衣—無位無官の者

生を招請すといへども、固辭していはく、「君子不レ重則不レ威。われは布衣の賤夫也。如何ぞ棟梁たらむ」と。門弟子等いふ、「然らば先生の節儉を學ぶまじや。棟梁の教授誰か染まざらむ。布衣を著て棟梁たらば、其の德いよ〳〵高かるべし。化育の益大ならむ」と、度々言を盡して勸むるに、辭することを得ず擧に應ず。しかも纔に三年にして、享保十五年七月十六日病に罷りて歿す、行年六十六。河内神光寺に葬る。生涯布衣より外は衣ず。書は遒勁正鋒にして妙也。故に今に至りても、人其の隻字を得て至寶とすれども、印信を用ふることなし、凡て質素を守る故也。詩文はもとより國歌俳諧をも嗜まれしが、皆意とせず。門に來るものには、只人道の理を責め、教學の趣を述べて、更に他言をまじへず。婦人は岡田氏にして、二男二女を產す。長文太郞、二女ともに先生に先だちて死す。末子才二郞、名は正誼、父の志を繼ぎ業を受けて讀書堂を守る。(今の今橋の學場なり)觀瀾の弟惣十郞維祺號佩葦も、東都に遊び、水戶侯に仕へて早世すとぞ。

桑原爲溪

名は守雌、桑原氏、爲溪は字にして通稱とす。號は空洞、浪華の人にて瓶花の家也。爲

らずして、千卷の書を編む人、古今例を聞かずと歎美有りしとぞ。（蒿蹊按、新安手簡に其の說委し）此の餘著す所、結髦居別集、炮灸全書等世に殘れり。

三宅石庵

石庵、三宅氏、名は正名、字は實父、萬年と號す、平安の人なり。寛文五年正月十九日に生まる。兄弟六人ありしが中に、弟觀瀾（名は緝明、字俉陽、俗稱九十郎）と、此の老殊に學を好む。爲人沈靜儉簡にして、英敏勇決。稍長じて家產敗亡し、宿債を返して殘る金十片有り。先生弟子に對していふ、「殘る所纔也といへども、又學を爲るに足る」と。兄弟案を並べて寢食を忘る。しかもいくほどなく十片の金盡きたりしかば、兄弟手を携へて東都に遊ぶ。又おもふ所有りて、弟觀瀾を殘して自は京に歸れり。さるに其の比讃岐に木邑某といふ人、其の名を慕ひて來り、勸めて國に伴ひしかば、かしこに客居する事四年、其の後復浪花に來りて住み、學風大に行はれ、その聲海內に噪しく、門弟子日に月に盛なりしかば、學生等浪花に學場を設けむことをはかり、關東へ訴へしに、先生の名もとより台聞に達しければ、即其の名をさして學場の地を賜ふ。爰に於て先

○蒿蹊云、銀の笄も猿のちがひしも、先生しられざるにはあらじ。欺きをうけて容るゝは長者の意ならむ。

○蒿蹊云、或時云々以下三熊生が書ける儘なるを、後に新安手簡をもて正せる所、台命にて詩經を進講し、圖をなし、木下へ助力を頼まれしも、皆白石先生也。是に付きて知りがたき事は、木下の媒にて若水へ尋ねられ、江戸になき物、或は唐物などをも、京より下され、考などもも添へられし事毎々なりしと手簡に見ゆ。三熊いかに見たがへて、かくしるしけむ。予が校正の足らざるも、亦罪さり所なくこそ。

因に云ふ、稲生若水、名は宣義字は彰信、江戸の人なり。若水を通名とせしかども頭は月代あり、しかも被風を著し、兩刀を帶びたれば、人皆あやしむ。或る時、台命ありて詩經を講ぜし時、草木鳥獸の筆におよぶほどは圖して獻ず。其の比木下順庵も力をあはせられけるとかや。すべて產物を見ること、別才ありて、他の及ぶ所にあらず。加賀の太守より、祿三百石を給ふ。庶物類纂といふ書千卷を撰み、原本副本ともに自筆にて書かる。原本はいま官府にあり、副本は加賀にあるよし。惜むらくはいまだ五旬に滿たずして逝す。白石先生も交り善かりしかば、およそ五旬な

國禁―國法上の禁制

き南天なれば、かんざしにけづりて娘どもにとらせよ」と命ず。同じ比、白銀の調度國禁となりし時、世間銀の細工物をあつめ、官に捧げしが、其の後又年を經て、しきりに白銀のかんざしをさしたる比、女達の頭を先生見て、「先年銀は國禁なりしに、などて是をさすぞ」と仰せければ、娘たちかへすことばなく、「是は銀にてはなし、箔おしてこしらへしものなり」と答へければ、「さはよき細工よな」とて濟みけるとぞ。又ある年の春、書生おほく具して、花見に行かれける途中、瓦もて船のかたちをつくり、やねのうへに猿のすわりたる花生に、小艸の花をいれたる賣りものあり。先生是をめでて、書生に買はせ、僕にもたせてゆく〳〵、一町餘りにしては、とりて見らるゝ事度々にて、「此の猿はよく造りたる」など餘念なかりけるが、僕がもちたる間、ゆく人の袖にかゝりて打わりければ、書生等心してあとへかへして、さらにもとめさせけるが、此のたびはもとのごとくなるものなくて、やねのしたに猿のゐるをもとめ來りける。先生又下部が手よりとりて見給ひ、「こはいかに、いままで猿はやねの上に居たるに、是はたがひたり」とあるを、書生等下部の叱られむことをいとひて、「いなちがひたることは侍らず」とつよくいひければ、「さにや」とて、又前のごとく愛し給ふとぞ。是等もてその人となりを知るべし。

もいふ。平安の人、其の先は尾張名古屋に出づ。淺井圖南子いふ、恕庵先生はもと本艸者にあらず、儒家たれども、詩經の名物を困しみ、稻生若水にしたがひて、本艸を三遍見給ひしが、大方諳記して、同じ比後藤常之進などいへる本艸者あれども、其の右に出でたり。故に人しきりに本艸をとひ、終に本業となりしかども、其の志にあらずとぞ。
博覽好古儉素淳樸の人なること人の知る所也。今其の眞率なる二三條を擧ぐ。大きなる倉を二つたて、一つには漢の書、一つには國書を藏められし程の事なれども、火桶は深草のすやきを紙にてはり用ひられし。又男善吾（名は典字は子勅、號復眞）幼年より絹のたぐひを著せず、袴も夏冬となく麻にて有りければ、門人たち「あまり見苦し」とてよろしき袴を送りければ、先生是を見て「われ仁齋先生の講席に出でし時、東涯いまだ幼くして先生の側にあられしが、白き木綿の布子白き木綿の袴也。是を思へば、善吾は染色衣たるは奢り也」とて、かのよき袴は著せ給はざりけるとぞ。又ある日奴僕を呼びて、蠟燭の屑をえり出して、「是は某これは誰に取らせよ」と分ち、すこしかたちあるを皆殘し置かれけるを、かたはらの人「今奴に蠟燭の屑を賜ひしは何事に候や」と問ふ。先生「鬢つけの爲也」と答へらる。又南天の木のふとき幹を取出し、人を呼びて、「是はよ

契りおく魂のありかをこゝと見よ骸はいづくの土となるとも

元文四年冬　希賢七十一歳書

後五年を經て、寛保四年甲子正月二十五日に歿す、享年七十六也。子息は四五人ありしを、大かた異姓を嗣がしむ。蒿蹊按ずるに、雜著中、養子の辯を辨ずるといふ假名書の書ありて、一己の見識をあらはさる。吾が子に他家を嗣がしむるもこれなるべし。（養子辯は、ある儒生著す所にして、他姓を嗣ぐ事をにくむ。それを又辨ぜられたるが、此の翁の見所なり）

○因に記す、此の翁高貴の御方々へもしたしく參られしよし。久しく關東にありてのぼりて後、南都一乘院宮へまゐられし時、賜はりし御歌

ふじの雪都の花のめうつしはさぞなはえなきならの古さと

御返し奉られしが、それはわすれたりと或人かたりぬ。

松岡恕庵　附　稻若水

垂加の神道—山崎闇齋の創めたる神道、

恕庵松岡氏、名は玄達、字は成章、怡顏齋と號す。垂加の神道を學びては、眞鈴潮翁と

三つ輪ぐむ—老人の齒の脫けて復小さき齒を生ずる事にて、假名は「みつはくむ」なるを三つ輪に言ひ掛けたり
建仁寺—京都下京にあり、臨濟宗、
先塋—祖先の墓

ほのぼのと朱の玉垣うちかすみ其のかみ山に春は來にけり
「此のほの〴〵の初五は、避くべきものを」と、或卿難じ給ひしかば、「されば避けなむと存じ侍へど、他に置くべき詞を得ず」と申されしかば、其卿いろ〳〵にかへて見たまへど、げにも詞なければ、「さはくるしからじ」とのたうびしとぞ。

○蒿蹊云、此の初五を避くるは近世の事歟、「ほの〴〵とあかしのうら」のうたを憚るとなり。されども其の後此の初五の歌いくらといふかぎりをしらず。

又ある時、
三つ輪ぐむ老が住家をこゝと知れ門にしるしの杉はなくとも
三輪の氏によりて、家の紋も三つの鳥井の形也。それを老の姿にとりなされたるも興あり。建仁寺中兩足院に先人の墓あれば、七十一の時、みづからの墓をも築き、自筆にて其の石のうらに書き付けられし。
先塋の後に、予が終の住所營みけるに、幸に杉の二本ありけるも、たゞならず覺えければ、
たらちねに返す此の身をおきつきのしるしとぞ見る杉の二本

其の學風、心術の大體を見るべし。著述の書は、易手記二冊、日用心法一冊、堯典和釋一冊、四言教解一冊、傳習錄解三冊、雜著四冊、救餓法一冊、以上皆寫本にて世にしる人尠きを、老儒福井氏かたぐ〵にもとめて藏せらる。此の外にありやしらず。又和歌を好まる。凡儒生の間に是ほどに歌よむ人はまれなるべし。雜著の中、四言教の歌あり。ことがきは略之。（四言教は陽明先生の說也）

無レ善無レ惡心之體

ひく舟も何かさはらむよしもなくあしもなにはの水の心に

有レ善有レ惡意之動

そことなく戰ぐ難波の浦風によしあしのはや亂れそむらむ

知レ善知レ惡是良知

よしあしのかけはまがはじ難波江や底澄みわたる水の鏡に

爲レ善去レ惡是格物

よしをとりあしを刈りなば節の間に迷ふ難波の夢も醒まし

以上は、なにはの菅氏によみておくり給ふ所とぞ。此の外うたども多し。中に初春のうた、

案排措置し｜種々工夫を弄し

意必固我｜論語子罕篇に無意無必無固無我の句あり聖人の心明白にして私累なきを云ふ

智を盡せりとおもひ、其のしれる所をまね行ひて、よく是を行ふと思ふ。これみづからは聖學なりと思ふらめど、則覇者のしわざなり。能くしり行ふといへども、天道にあらず。又義襲ひて是をとるのみ。夫既に此の心法なくして、知をきはめむとて、事々物々にて道理を尋ぬるは、闇夜にともし火なくして物を探るがごとし。しれる所似たりといへども、終に自得の學にあらずして、却て人我の隔出で來り、人欲の私勢ひを得、案排措置して、意必固我をなすゆゑに、物學ぶ諸生は、大やう常人よりおとり、是を敎ふる師は、諸生より又ひがめる方多し。如何となれば、三欲の大敵（三欲とは此の前條に云、人欲動いて本心を害する亦其の品多し。中にも大敵となれる巨魁三つ有り、色欲利欲名聞なり）を去らずして知る所多ければ、其の知る所己が欲を助けて、みづから高ぶり、人を輕しむ。行ふ所人にまされるものあれば、その行ふ所またおのが欲をたすけて、自ら高ぶり人をかろしむ。たとへば食は民命をすくひて一日も是なければ死すといへども、食に傷れし人、其の食毒をさり、傷れを補はずしてこれに食をすゝむれば、かへりて病を助けて民命まさに盡きむとするがごとし。（下略）

京兆尹—京都町奉行
酒井侯—上野厩橋領主

傳へられければ、望ましからぬ由を申しければ、一日大饗をたまひ、馬かけを見せ給ふ。生涯のあらましすべてかくのごとし。醫術の筆記若干ありしが、晩年おもふ所有りとて、皆燒きすてつ。その餘奇事多かれど失せり。

蒿蹊云、おのれ幼年の時、吾が家へもむかへて女弟が療にあづかりしが、是は露ばかり驗なくて身まかれり、予幼なくて其の行狀ははつかも聞き知る事なし。唯耳疎き老人とのみおぼゆ。亞科には其の比山科家と共に名ありし人なり。

三輪執齋

三輪希賢字は善藏、卽常の稱とす。號は執齋又躬耕廬ともいふ。洛北加茂に住み、又浪華江戸などにも子息の緣によりて居れり。はじめは朱學にて、後陽明良知の學を唱ふ。爲人柔和謙遜にして、道を任とす。其の德周く聞え、京兆の尹某の侯みづからおはして三度請ひ給ひ、訴を聞き給ふ陰にをらしめて、其の理の當否を問ひ給ふ。又酒井侯に報ぜし書、親切著明なる中、人主又學者の病にあたれる所、こゝに擧す。

今聖賢の心術を學ばずして、其のなせる事業をのみ見て、事々物々にて是を尋ね究め、

といふ能順の句を慕ひ、たづねられしことあり。行狀聯句集にみゆ。寶永三年丙戌十一月二十八日、七十九にして終れり。

村上等銓

村上等銓は、平安三條油小路に世々醫を以て業とす。十六歳にして專ら行はる。廿二歳にして、

東山院の皇子の御急症に功を奏し、俄に法眼を賜ふ。後法印に敍し、春臺院の三字の宸翰を賜ふ。又　御製を下さる。其の庭に松樹ありと聞し召し、松によする祝といふ題とぞ。思孝幼年にして其の御製を拜せしが忘れたり。其の松卽御製の松とよびて、能く繁茂せしが、家絶えたるころ、いかゞなりしや知らず。此の法印性大膽にして、しかも貪らず。或時廣島侯の不例を治し、其のかへさに面白き石どもあまた船につみて來りしが、いかゞ思ひけむ、備前の沖にして皆海に投げ捨てつ。又薩摩侯の醫療せし時も、驗ありて、褒美望みに任すべきよし御內意ありしに、法印暫く思惟して、御國の馬かけを所望しければ、「けしかる望也。金をも扶持をも望みてむとおほせしに」と、重ねて其の旨を

法眼—法印に次ぐ僧位
德川時代の醫は僧體にして隨つて僧官に任ぜられし也
廣島侯—淺野侯
薩摩侯—島津侯
馬かけ—競馬

此の一條、羅山林先生の碑文のうち一二をとりて譯せし也。猶かの碣誌に委し。往いて見るべし。

因に云ふ、息亞之、一の名は貞順、通稱與一郎、後號二素庵一。惺窩先生に從ひ、文學に長ぜり。常に深衣を著して、儒書を講ぜりとなむ。羅山氏と交りふかく、かつ羅山氏惺窩先生にまみえしも、此の人の紹介なりとぞ。

能　順

能順は洛北野の宮仕也。連歌に長じ、世に獨歩す。貞享帝召して、連歌の點せしめ給ひ、御感ふかく、ありあふ御硯を賜はる。その時に奉る句、

けさしるや筆のうみより春の水

その後加賀の太守の招に應じ、小松梅林院といふ所に住めり。その比ばせを桃青の行脚に、

秋風は薄吹きしくゆふべかな

北野―京都上京、北野神社
貞享帝―後西院天皇
加賀の太守―前田侯

大悲閣―山城葛野郡嵐山

り、河に循うて運送す。元來伏見の土地、大佛の基よりひききこと六丈なりとて、その道すがら高き所をうがちて、ひきき所に堤をつき、又河のめぐれる所は轆轤索をもて是を引きなどせしかば、不日にして木石こと／＼く達せり。見る人みなあやしまざるはなかりしとなむ。十六年又官に乞うて鴨川に船を通ず。今の高瀬川是也。十九年先にさらへし富士川塞りて、船のかよひなやめりしかば、了以を召し給ふに、了以たま／＼病に罹れりしかば、息玄之をして行かしむ。三月より役を初めて七月に成る。時に了以病急なりと聞きて、とみにかへり來るに、いまだ京にいらざるの前二日に歿せり。慶長十九年甲寅七月十二日也。享年六十一歳。このとしの夏、嵐山に大悲閣を建立す。死に臨む時遺言すらく、「我が肖像を作りて大悲閣の側に置き、巨綱をあみて座とし、犁を杖として石誌を建てよ」と。後その遺教に隨ひ、碑文を羅山林氏に乞うて建つ。その詞に曰はく、

排巨川兮舟楫通。浮鴨水兮梁如虹。刳復鑿富士河兮有成功。慕其賜玄圭兮笑彼化黄熊。嵐山之上兮名不朽而無窮。

寛永六年冬十一月日

胡人―支那北方の蠻人

江戶につかはし、是を乞はしむるに、「山丹二州の幸なれば、すみやかになすべし」と許し給ふ。於レ是十一丙午歲三月より大堰川を浚うす。先大石は轆轤索をもて之を牽く。水中にあるは、其の上に高く足代をかまへ、鐵槌の頭尖りて、長さめぐり各三尺、柄の長さ二丈あまりなるに、あまたの索を結び付け、數十人して其の槌を引あげて、直に落せば、巖石こと〴〵く碎けぬ。あるは、水より出でたるは、其の石の上にて大かゞりを燒きて之を碎く。あるは河廣くして水淺き所は、石を帖みて水を深くし、又瀑などあれば、上をうがちて平らかにしつ、からうじて、八月に至りて、またくなれり。かゝりし後、今に至るまで、丹波世喜村より、嵯峨に舟かよひて、五穀鹽鐵材石など有無を通じて、民大に利を得るとなむ。十二年の春又命を奉じて、駿河の國富士川を浚ふ。此の川もとも嶮しき流なれども、駿河の岩淵より、甲斐の國に船通ふことゝはなりぬ。よりて其の邊の人々、艄を見てあやしみかつ驚きていふ、「魚ならずしてよく水を行く」と。かの胡人の舟を知らざるに似たり。又十三年「信濃國天龍川をさらへて、諏訪より遠江の國掛塚迄舟すべし」と命じ給ふ。則奇工をつくせども、きはめて峻流なれば、ふね用ひがたしとぞ。此の年洛東大佛殿造立あり、大木巨石を運ぶに甚なやめりしかば、了以又乞うて伏見の里よ

本庄―今の東京本所

檢校職―盲人の高級の官

僧錄―盲人を統轄する官

艜船―底淺くして平たき船

とあれば、「目一つ下され候へ」と申すに、侍らふ人も皆大に笑ひけり。君は戯言ながら哀におぼして、本庄一つ目といふ所、一町四方賜はりて、五百石扶持し給ひ、「目一つなるは」と興ぜさせ給ふ。其の後又三百石御加恩あり、檢校職に任ぜらる。今も僧錄屋敷とてあり。辨財天を勸請し、又常に觀世音を信じ、慈善を專らとし、いやしき盲人を救ふ事多し。海内の盲者皆その恩を蒙る。京師に淸聚庵の地を賜はり、これを建つる。（高倉綾小路の南）瞽者一流の規矩こゝに中興せり。京にも江戸にも其の木像を安置し、永世其の德を仰ぐ。終れる年元祿七年甲戌六月二十六日也。子孫世々其の祿をうくとぞ。

角倉了以并自玄之

光好姓は源、氏は吉田、後に角倉と稱す。小字與七といひしが、後了以と改む。（家系羅山の作、碑文に委しければ之を略す）母は中息氏。天文二十三年甲寅に生る。天性工役にたくみ也。慶長九甲辰歲、事により美作國にゆき、和計川の艜船を見て、百川すべて舟を行るべしと思ひ、たゞちに嵯峨にかへり、大堰川を泝り、丹波國保津にいたるに、湍石多くして、はつかに筏のみかよへれど、猶舟すべきと知りて、翌乙巳歲其の子玄之を

同家中—同じ藩士

杉山檢校—杉山和一

大君—將軍の尊稱綱吉

り手をさしいれて、折ふし收納の時にて杉なりにつみたる俵の中より、二た俵引きぬきて兩手に引さげ、塀ごしに投出し、「それもちてとく行け」といひすてて、うらの戸引きたてて入りて寐ねたるを、家の內知る人なく、夜明けて倉も塀も切りぬきたる穴あるを、若黨下部など見付けて、あわたゞしくあるじにつげたれば、うなづきてわらひて有りしとなむ。その他の所行はしらねども、此の一事もて、其の人がらいとかぐはしく覺ゆ。こは其の劍術の門人、同家中の浪人竹村柳園子のものがたりなりき。

杉山檢校

杉山檢校は遠江濱松の人也。十歲にして瞽者となれり。其の性豪爽にして、凡ならず。眼は盲たりといへども、名を天下に成さむことを欲し、十七歲の時鎌倉に至り、江の島の岩屋に入りて、斷食し祈ること三七日、丹誠比類なし。されば、滿てる夜の夢に、鍼と管とを得ると思ひて覺めたるに、その物、實に掌中にあり。いとかたじけなく、諸侯よりの招に應じて、病を愈すことしば〳〵也。終に大君の召を蒙り、日々に御前に侍るに、或日「望む事ありや」との御命有りしに、「只一つさぶらふ」よしを申す。「何事ぞ申せ」

郡山―添下郡郡山

をたしむ人の心づかひ、殊に殊勝なり。

龍造寺平馬

大和郡山の舊主本多侯の臣龍造寺平馬は、勇氣邁人しかも慈仁あり。禪學をも好む。劍鎗の術に長じ、かつ巧思ありて常に帶ぶる所の大小刀なども、自から鍛冶し、用ふるに當るを期す。或時、夜更けてうらの方に物音するを、唯ひとり聞き付けて、枕もとにある劍を帶び、左の手に燭を捧げて戸口を引あくれば、やがて額に切付けむとするものあるを、はづして其の手をとらへ燭をもて面を見るに、もと召つかひし奴也。平馬徐々として曰く、「おのれはにくきやつかな。されどあないしらぬ所へはえ入らで、こゝへ來るならむ。はた奴が態にて我を切らむとするや。されど主に顔を見られて面目なく、せまりてのしわざならむ。いづこより入りて何ごとをかせし。もとの道へゆけ」と捉へながらあゆまするに、米倉の壁こぼちて有り、うらの土塀にはひ入りたる穴あり。「よし〳〵こたびはゆるす。もし他人の家へ行きたらば忽ち命を失ふべし。今より必心を改めよ。いで物取らせむ、もとの穴を出でてしばしまて」とつきはなちて、さて米倉のこぼちし所よ

矍鑠—老健
前生の宿因—前世の因縁

にかゝるがゆゑに、かくのごとく長壽せり」と。長兵衛是を聞きてより、井の水の廻りに枸杞を栽ゑ、その露を掬して、顔にそゝぐことおこたらず。枸杞の能こそあれ、面に洒ぐは、おろかにいはれなきに似たれど、此の人も八旬に過ぎて、猶矍鑠なりき。生涯手習ふ事をつとめとす。門人等「六十の手習といふに、八十はあまりによしなきこと也。只枕を高うして樂しみ給へ」といふに、「いなさにあらず、われ手あしければ習ふなり。是はもと前生の宿因なきより拙ければ、若今生に上達せずとも、後世の縁に成りなむ。よし〳〵それはともあれ、寸陰もむなしく暮すは天の恐れあり」と申されしは、たふとし。又此人若き比伊勢參宮せむとするに、あたりの人々、その謹厚をしれば、よきついでとて娘どもをわれも〳〵とあづけて、まうでさせむといふ。さま〴〵辭すれどもせちにたのみければ、せんかたなく伴ひたるに、京にいでたる日と、伊勢の宇治山田にては、人多き間にて、はぐらしやせむと、女達の腰に繩をつけて、おのれたしかに持ちて大路を行くさま、かの美濃の長良川にて鵜をつかふにひとしかりしと、京にて見し人かたりしが、大切に守りける心づかひ思ひやられぬ。常に他郷に行く時は、妻子に暇乞の酒汲み、遺言ことごとしく心殘らぬまでいひ置きて出づ。妻子もいつも涙にくれて門送りせしとなむ。武術

心に應ずれば買ひ、應ぜざれば買はず。久しくして商人も是を傳へ知りて、其の家にては價を二つにすることなし。其の家に使るゝ奴婢も、其の風に化して質朴にして詐はらねば、そこに使はれしものといへば、人爭ひて召し抱へたり。年八十に垂として、眼力衰へ的をみること明かならず。射る時は門人側にありて、「二寸上れり、三寸下れり」といへば、其の言葉に從ひて矢を放てば必中れり。尤後には其のごとくするも中らねば、弓矢を投げて、「吾老いたり。今は君の用にも立たず。生きて益なし」と、遂に食を斷ちしを、妻子門人交すゝむれども食はず。其の門人に三谷半大夫といふ國老あり。是を聞きて、往いて自から粥と箸とを取りて勸むれば、源八押いたゞき一口飲み、第二口に至りて吐きて云く、「吾が病、食を受けず」と。遂に食はずして歿す。

原田長兵衛

原田長兵衛は、初め但馬豐岡侯の士なりしが仕を致して後、劍術をもて家產とす。篤人正直にて人の戲言もみな實とす。ある時門人いふ、「我が村中に、百歲の老人あり。其の背戸の井の傍に、枸杞の木あり。其の井の水にて手水をつかふに、其木葉の雫面

但馬豐岡侯—但馬城崎郡豐岡の領主京極飛驒守
背戸—裏口

きて信ぜざれども。遂に共にかへり、官に達して妻とし、終身其の醜を厭はず、偕老の契を全す。さて老にいたるまで射術怠らざるをもて、俸祿を増さる。是より以前は酒器を貯へず、茶碗にて飲みしが、此の時に及びて妻諫めて、「今は諸士と祿同じければ、酒器なくてはかなふべからず」といふ。げにもとて、市店にいたり盃を買ひて、その大小心に愜ふを擇みて「瑕なきや」と問ふ。市人「なし」と答へたれば、頓て價を出し、盃を懷にしてかへりしを、妻熟視て、杯のうらの糸底に瑕あるを見出し、かくといへば、源八また懷にして彼所に往き、盃を返して、「何故に我を欺くぞ」といふ。市人過を謝し値を返さむといふ時、源八「我は欺を受くることを欲せず、故に盃を返す也。値を惜むにはあらず。汝は値を欲する故に我を欺く也。いまわれ欺をうけざれば望足る。汝も亦値を得れば望たれり。是兩ながら望足れば、何ぞ値を返すをうけむや」といひ捨ててかへる。又或時骨董舖に刀の鍔有りしを立寄りて價をとふ。婦人云く、「夫他適にて價さだかならず。二錢目とか三錢目とかいへり」とこたふ。源八懷より二錢目を出しあたへ、又一錢目を出していふ、「夫歸りて二錢目には賣まじといはゞ、又是をあたへよ」といへり。凡そ人に詐はなしとして、魚菜を買ふにも價を下せといふことなし。我が

莊官―村役人

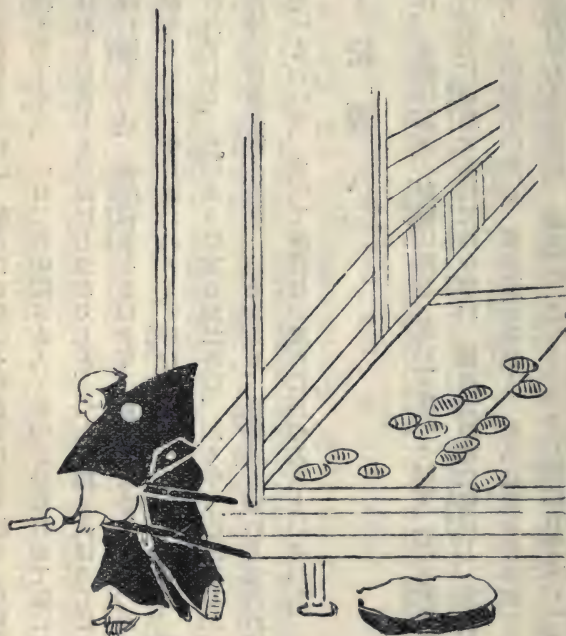
くのことかあらむ。たゞ我がもののごとく取り用ひ給へ」とて、價をうけず。是より後、源八茄子を喰はむと思ふ時は、往きて取り、價の錢をその莖に結び付けて去る。圃主所々に錢のかゝれるを見てあやしみ、此の人の所爲ならむと、取集めて返せども、固く辭してうけず。又富民の家内皆他に適くことある時は、源八堅固なる人なれば、留主を託せるに、くれにおよび戸障子を引はなち、家の中央に座し、傍に弓矢を置き、八方に眼を配りて終宵睡らず。又ある時、村中莊官の妻出産せし時、源八往きて「つね〴〵懇意なる故に夜伽に來れり」といふ。主悦びて、「此の比夜伽に皆疲れたれば、今宵は賴み參らせて皆安眠せさせむ」とて、倶に熟睡に及ぶ。源八たゞ獨り産婦の前に端坐し、通宵すこしも眼を離たず、産婦の顏を守れり。産婦夜明けて家人にいへらく、「よべは源八ぬしに見詰められて、よすがら顏の置き所なかりし。此の後このぬしの夜伽は止め給はれ」といへり。此の間近隣の小民の家に醜き女ありしが、顏に似ず心やさしきものにて、源八が赤貧にして獨居せるを憐み、しば〳〵衣を洗ひ、綻を補ふ。父母禁ずれどもひそかに心を盡して介抱せり。源八心に其の恩を感ずといへども終に猥雜の話を出さず。後君命により歸參する時、速に駕籠をもたせ、親往きて迎ふ。醜女も父母も大きにおどろ

貞宗―刀工の名

亂舞―能樂の間に一さしとて行ふ舞

を仕出したる事をしらせければ、敷きたる金はそのまゝにうち置き、貞宗の太刀を帶び、鹿毛なる馬に鞭うちて走り、一日二夜の間さまぐ\あつかひなだめて家に歸りしが、其の間は金の事はおもひ出しもせぬけしきなりしを、つたへ聞く人はさらにおどろきたりとなむ。又軍陣に臨んでは、必能役者をまねきて、亂舞をなさしむ。つねはかつて翫ばず。人その故をとへば、「平日はたれぐ\も好む故にかれらいとまなし。軍陣のことあれば、俄にあわたゞしく、そのまうけするがために、かうやうの遊びをかへりみず。おのれはつねに出陣の用意を備ふれば、いとまあり。亂舞者も亦いとまあれば、これをさせて見ること也」といへり。すべて所行他の案外に出づる人といふべし。

子松源八

子松源八時達は、出雲の家士、射藝の師也。老いて山心と號す。爲人方正淳朴比類なし。若年の時、兄の過失に連坐せられて祿を離れ、國内大原郡に蟄居し、家貧なれば、日雇して衣食を給す。その居宅の隣に、農夫茄子を種う。原八は菜を作る地なければ、これに就いて茄子を買はむとこふに、農夫「たゞひとりめさむ程は日々といへども、いくば

錯綜する—入れかふる

上杉家—出羽置賜郡米澤領主、上杉彈正大弼

仙臺侯—陸奧の領主伊達政宗

猩々皮—極めて紅色の羅紗、古く舶來せる物

中間—侍と小者との間に立つ者

の三事に長ずること光悅に劣らず。茶も翫べり。子十八人あり、季子は八十歳の時まうく。天和二年壬戌七月二十四日、八十七歳にして終れり。

○蒿蹊云、此の傳人のしらぬことどもあり、花顚よく聞き出せり。予一事も加ふるに及ばず、たゞ文章の前後を錯綜するのみ。

岡野左內

岡野左內は上杉家の臣、陸奧にありて、壹萬石を領し、越後守といふ。その武功ども近世の軍記に見ゆる中にも、はからず仙臺侯と一騎打して、猩々皮の陣羽織に二所まで劒の跡つけしを、和睦の後、侯、「誰ぞ」と尋ねて知り給ひ、其の勇を賞し、彼の陣羽織を賜りけるなどは、ことにいさましきものがたり也。此の人並びなき福者にてありし。或る時、馬屋の中間に黃金壹枚もちたるものあるを聞きて呼び出し、奇特なる旨褒美して、黃金十枚を與ふ。貧しくては武功も全くしがたきをおもふなるべし。凡いとまある時は、金をあまた並べ、その上に臥すをたのしみとす。是をきく人は「武士の道に有るべからぬふるまひ也」といはぬはなかりしが、或時此のたのしみをなしゐけるに、我與の士、口論

くうらみ、交りをたちしはいかなる故なりけむ。また陶器を好みて燒きぬるを、今も世につたへて珍重す。凡藝のみにあらず、經濟の才もありて、鷹峰の邊に金堀るべき山を考へ、五箇所を得て、人民多くその益を蒙る。もとよりこゝろばせ正しき人にてありし。その一事は七月十四日にある町家へ行きたるに、常に同じく家職をいとなみてありしかば、悅あやしみて、「けふは貴賤となく金錢の出納に閙しき日也。なぞかくつねにかはらぬぞ」といふに、あるじ「町家には利用を計るをむねとしさぶらふ。けふ與ふべきものを五日過ぎて與ふれば、何計の利を得ることにさぶらふゆゑに、けふは心いそぎも侍らず」といひしに、悅こたへもせず、家の内のものどもの面をひとり〳〵にらまへて、「よき畜生めら」といひすてて出で、それよりは再び來らざりしと也。寛永年間洛北鷹峰を悅に賜はりしより、こゝをひらきて、人家を設けたるに、若狹丹波の通路なる故に、往來しげくなり、此の邊に山賊などいふもの絕えたり。是より先は、かやうの惡黨かくれ住みて、人を犯す事多かりしとぞ。寛永十四年丁丑二月三日こゝに終る、壽八十歲。光悅寺そはのあとなり。

因に云ふ、光悅生子なし、光瑳は養子也。その子光甫は空中齋と號し、法眼に敍す。家

孫過庭―唐人、名は虔禮、字は過庭、草書に妙
虞世南―唐人、字は伯施、智永に習ひて妙を得
王右軍―晋の王羲之、右將軍たり善書古今に冠たり
瀧本流―松花堂の書風

申す。此の時この三筆天下に名あり。或は粟田宮尊純法親王を算へ奉りて、四筆ともいふ。藤公以下三人も、或は法親王の御弟子といふ說もあり、實否を知らず。また或る時、藤公にはかに光悅をめしければ、何事ぞとあわてて參るを、卽おまへにめして、悅が手、をきととらせ給ひ、「汝は〳〵」と言もあらゝかに仰せ給ふに、悅思ひよらざることなれば「御意にたがひし覺は侍らず」と、恐れ〳〵申しければ、公打笑はせ給ひ、「何としてかくはよく書くぞ」と戲れ給ふこともあり。又松華堂とともに、藤公へまゐり、夜のふくるまで、御物語申せし時、今古の書家を品評し給ひ、「孫過庭、虞世南等、ともに王右軍を學ぶといへども、その風なし。今の人は、その風を學んでその心をまなばず。その姿を眞似るを書奴といふ。書奴の名を得むよりは、おの〳〵我が好にまかせて、一家を成すべしや」と宣ふ。「二子僕等も常に思ひ侍らふ所也」とて、「あすともに書をなしておまへにして戰はしめむ」とて歸りぬ。約のごとく明くる日二子まゐり、公の御書とならべて、おのおの一風を書出せしをくらべける。今も近衞流、光悅流、瀧本流とて、世にもてはやさる。又茶を好みて、初宗旦と善し。後その子宗拙父に勘當せられし時、もとより光悅が書の弟子なれば、ひそかに野間玄澤（鷹峰の隱者）にあづけたるを、且聞き出でて深

蟄居―家内に籠り居る事

大徳寺―山城愛宕郡紫野、臨濟宗

三藐院殿―近衛信尹公の號、近衛流書風の祖

とぞ。かの三井寺に蟄居の時、貞徳翁とぶらひて、終日もの語りしつゝ、

　滋賀の浦や寄せ來て殘る小波も春にはやがて立ちぞ返らむ

といひて別れし。その翌る春免しを蒙りて歸洛し、後逝せらる。慶長五年也。大徳寺中正受院に墓あり。

本阿彌光悦

本阿彌光悦、太虚庵、又自徳齋、徳有齋とも號す。本佐々木の家族、多賀豐後守高定の孫、片岡治大夫宗春の三男にして、本阿彌光心が養子となる。本阿彌は、刀劍の鑒定磨礪淨拭等を家業とし、これを本阿彌の三事といふ。しかるに、光悦この三事に長じ、殊にそのかたしとする所の淨拭に委し。是につきて自からの戲歌、

　一ふりはらいのたぐひと思ひしがいま一ふりはめきゝものなり

人の刀を相せし時白雨しける故とぞ。尤書に妙也。或時近衛三藐院殿、光悦にたづね給ふ、「今天下に能書といふは誰とかするぞ」と。光悦、「先。さて次は君、次は八幡の坊也」(松花堂をさす)と。藤公「その先とは誰ぞ」と仰せ給ふに、「恐れながら私なり」と

の集にか、

武藏野の篠を束ねて降る雨に螢より外鳴く蟲もなし

とあり。「御句よろしからむ」と取なしければ、公「それ見よ」と仰せけるに、紹巴もことばなくて筆を染めけり。さて其の翌日藤孝の御もとに參りて「きのふのうたは、めづらしきことに侍り。何の集に誰人の所爲にや」と尋ねられければ、大笑ひし給ひ、「律義なる人哉。あのやうなるうたがいづくにあるべき。あれはわぬしが首を繼ぎたるなり。此の後何事を仰すとも、かまへてあらそはるゝな」といましめ給へり。されば、また或時に、公、

谷かけに鬼百谷さきて首ぐなり

といふ句を仰せ給ふ時、紹巴二三遍沈吟して、「いかにも神妙の御句也」とて、懷紙にしためければ、公紹巴が顏を御覽じ、「螢はなかざりしが、百合はぐなりとせしか」と仰せ給ふ時、紹巴「宜しき例も候ふ。慈鎭和尙

まくずが原に風さわぐなり

と仰せられし候ふ」と申しければ、斜ならず興じ給ひ、「紹巴は賢きものなり」と仰せける

律義―正直

慈鎭―天台の座主、又名慈圓、歌を善くす、「拾玉葉三、物思ふ心の秋の夕まぐれ眞葛が原に風渡るなり」

城北白河の智恩寺の念佛は、衆僧車座になりて、千八十個の大珠數をくりて百萬遍唱ふ

能の脇師―能の主人公を仕手其の相手を脇といふ其脇をつとむる能役者

玄旨法印―細川幽齋

遍の長老の擧狀を取りて東行し、大岩寺にて談義法師とならむとおもへるに、いくたびか袋を荷ひて出で立たむとしけるを、小川宗叔（能の脇師にて名あり）いたく惜しみてとゞめ、終にことをなせり。後富み榮えても、もと貧しかりしことを忘れず、寢衾を人にまかせず。又和歌の道は稱名院殿に學びしかば、其の御墓に詣づること生涯怠らざりしとなむ。其の人がら知るべし。又生得力強き人にて、秋の田といふ處にて、（思孝云ふ、秋田といふ所未考。こは秋の野の道場か。其の寺は其の比烏丸二條の南にありしとぞ）辻切のものに逢ひしが、それを抓み投げて、刀を奪ひ歸られしを、小田公聞き給ひて、御褒美にあひし事あり。また少しも媚ぶる心なし。或時太閤の御前に侍りしに、公、

おく山にもみぢを分けて鳴く螢

といふ句を成されて「懐紙に記せ」と仰せ有りしに、紹巴頭を掉りて、「御句にはおはしさむらへど、季もたがひ、螢のなくと申す事は有るまじき事也」とて、筆を執らず。公も色を變じ給ひ、「それにてもくるしからず」と仰せけれど、いかにも宜しからぬ由申しける。凡此の公の御詞をかへすものは、四海の内になかりけるに、かく爭ひ申すを、玄旨法印、いまだ藤孝といひし時にて座に有り、「いや螢も筋によりて鳴くものにや、いづれ

三井寺—園城寺近江滋賀郡大津町の西

戴恩記—三巻

百萬遍—山

れば、其の南隣陽光院の宮(後陽成院の御父、御卽位に及ばずして崩ず)の小池の御所をかりて城介殿うつらる。陽光院の宮は禁中へ遁れさせ給ふに、事急なれば、乗輿なく歩洗足にて出でさせ給ふ。折しも紹巴其の門を過ぎ、やがて自輿をくだり、是を奉りしかば、此の賞として法印位を賜はりしに、恩を謝し奉りて後、やがて法服を返し奉りていふ、「危を見て節をいたすのみ。豈酬をはからむや」と。こゝにおいて法橋に叙せらる。豊太閤の時に至りて、屢眷をかうむり、其の名ます〱高し。技能妙に至る者七人、紹巴其の一人也。宅を大炊御門堀川の東南に賜ふ。今も紹巴町といふ。(大炊御門は下立賣也。寶珠庵と名づけられしが、如意嶽をひかしに見る故なりと、花顚は記せり)後秀次の師たるが爲に疑を蒙り、三井寺に謫せられ(花顚云、三井寺中莊嚴寺也)みとせを過ぎしが、終に赦にあへり。紹巴の子、玄仍、玄仲みなよく業を嗣げりと、東涯先生の盍簪錄に見ゆ。東涯の祖母は玄仲の長女なれば、其の詳説を先人に聞けりとなむ。されば、先此の説を擧げ、南都のこと、又おのれよく正す所あり。次に花顚がしるし置ける所を掲ぐ。これは貞德翁の戴恩記によれるなり。紹巴貞德兩翁も亦師弟の間、親しく見聞する所の記なれば皆實事也。先きに見えたる連歌を學ばれし間、もし成らずは百萬

興福寺—大和添上郡
喝食—律宗禪宗等の給仕の兒
時宗—相模藤澤の清淨寺を本山とす、一遍上人創始
南都—奈良
平安—京都

續近世崎人傳　卷之二

里村紹巴

里村紹巴、本姓は松井氏、幼なくして興福寺中明應院の喝食たり。はやく志ありて、たとひいやしきことといふとも、必ず名を天下になさむといへり。時に周桂といへる時宗の僧ありて、たま〳〵南都に來れり。連歌をよくするがために、これを好むもの其の門にあつまる。紹巴もとより本土の連歌師大東正云に學びしかば、此の時ひそかに周桂にしたがひて平安にのがる。是よりくるしみつとめて、その技妙にいたり、王侯士庶皆師とし仰ぐからに、其の名天下にあまねし。時に里村昌叱あり、連歌において紹巴と名を齊しうす。松井の氏まぎらはしきゆゑあるをもて、かの里村を冒すとなむ。又臨江齋の號は、三條西稱名院殿の賜へる所、卽公の御染筆臨江齋の三字幷に天龍寺の策彥叟の添書等、南都に傳へ持てる人あり。さて後法橋になれるも、また故あり。明智光秀本能寺に押よせ、事遂げて後、城介信忠のおはす室町妙覺寺へいたる。妙覺寺の構　疎な

齊宣王―孟子巻一に出づ
鄭子産―孟子巻四に出づ
梁武の粉餅―梁の武帝佛法を信じ、生物を牲とするを忌み粉餅を作りて牛羊豕の三牲に代へし事、
臺城の變―梁の武帝が候景に臺城に圍まれて遂に殂せしを云ふ
籩豆―共に祭肉を盛る器

り。いかにしてかく勞する所へは賣りわたされけむと、悲しみに堪へず。其の牛の後に付きて、今飼はるゝぬしの許へ行き、三日が間の賃を與へて大津通ひを休ませたりと、其の親族の人かたりぬ。もろこしにて、廟中に牛を殺し羊をさくが如きは、聞くもいたましき所行なれど、古來其の邦の習はしにて、先王の禮ともなれり。されど其の中にも、齊宣王の牛もて鐘に釁を痛み、鄭の子産の生魚を放たれし如き、其の情の忍ざるをみつべし。世の儒生やゝもすれば、物を殺すをいたまず、彼の國の禮をもて口實とす。思はざるの甚しきなり。梁武の粉餅をもて三牲の象をなして、生物にかへ給ひたるを、亡國のよしにいへど、臺城の變、豈これによらむや。類をもていはゞ、明の國初、或人廟を祭るに、籩豆を用ひ給へといひしを、太祖、我が祖先生るゝ日此の器を知らずとて、用ひられざりしも、三代の禮によらざるは同じけれども、國の發る時にあひたれば、人是を誹らず。何ぞ梁主をのみとがめむや。

は笑ふべし。果してしからば、蠛蠓蚊虻のために人を生ずるやと詰りし人もあり。畢竟大小相食むに過ぎざれども、農を害する獸、狩らではあるべからず。海濱の民、生產なきは、漁釣せずはあらじ。皆やむことを得ざる所にして、これをいたましとて、白河院の殺生を天下に禁じ給ひし如きは、民をいかむ。只生產に預らざる人は、微物といふとも、是を殺し是を苦しむる事を斷ずるこそ、常の愼しみなるべけれ。殊に痛むべきは牛馬なり。人を助けて重きを負ひ、遠きをわたり、終日苦勞す。然るを老いさらぼひて用ふる所なしとて、餌取（今俗穢多といふは語の轉ぜるなり）の手にわたして、之を殺す事などは、いかなる意ぞや。みづから牛馬に劣れる意とは知らずや。又牛つかひ馬おふものの、無賴か多きをいかゞはせむ。おのれ往年逢坂の山路にて往きかぬる牛車をなさけなく打ちおびけるを見て、

小車のめぐり來む世は己また引かれてうしと思ひ知るらし

とよめるを、あはれなりといふ人もありしが、因果を信ぜぬ人は非笑すべけれど、そはともあれかくまれ、思へるまゝなり。因果はしばらくおきても、惻隱の意人にのみ動きて、物のためにつれなからむや。畜類も物をこそいはね、意は却りて人よりもさときあり。前に出せる山雀の話、又但馬の人たまたま京へのぼる道日の岡にて、車牛の立とゞまりて此人を仰ぎみるをふと見合せたれば、涙をながす。いとあやしくて、よくよく見れば、吾がもと飼ひし牛な

十念―淨土宗にて南無阿彌陀佛の名號を信者に授けて佛に結縁せしむる事
すさう―殊勝

られて、露の命をさゝへさふらへば、馬とはおもはず、おやかたとおもひていたはる也」とこたへ、「さて御僧にひとつのねがひあり。此のあなた淸水のある所にて、手あらひ候はむまゝ、十念をさづけ給はれ」と乞ひければ、「いとすさうのことなり」とうけがはるるに、はたして其の所に至りて、あざりを馬よりおろし、おのれ手水をつかひ、馬にも口すゝがせて、其の馬のおとがひの下にうづくまり、ともに十念をうくるさま也。かくて大によろこび、又馬にのせて、次の驛にいたる。其の賃錢とてわたし給へば、先其の錢のはつほとて、五文をとりて、餠を買ひて馬にくはせ、つひにおのが家のまへにいたりける時、馬のいなゝきをきゝて、馬郎の妻むかへに出でて、取あへず馬にものくはせぬ。男子も出でてあざりをもてなしける。其の妻子のふるまひも、孫兵衛にならひて心ありき。「此のあざりにかぎらず、僧なればいつもあたひを論ぜず、乘る人の心にまかせて、馬とおのれらとが結緣にし侍る」などかたりしとぞ。あざりふかく感じて話せらるまゝに記す。

○蒿蹊因に曰く、およそ鳥獸魚虫、形象稟性人に異なりといへども、同じく天地間の蠢動、佛語もていへば法界衆の生なり。しかるを、あるひは、人を養ふ爲の天物なりなどいへる語もある

國風─和歌
かぞいろ─父母

そこにあり。此の墓所は翁の家より西にて。うつしたる家よりは五丁ばかりもあらむに、いかに知りて來りしにかと、人々あやしみて、例のごとく手を動して試むれば、手につきて舞ひ鳴きぬ。いと悲しうて連れ歸らむとしたれば、やがて又空に飛び去りぬとぞ。此の一條は其の邑の儒生西山拙齋老人の話にて、即山雀歌の作有り。(詩長篇歌體也)蒿蹊にも國風を請はれしかば、

鳥にしも及びにけるかかぞいろに直くつかへし人の誠は
うつくしむ心を知りて山雀のやまずも主を慕ひけらしも

などよみておくりぬ。

馬郎孫兵衞

木曾山中(里の名を遺失す)馬夫孫兵衞なる者あり。花顚が知己何某の阿闍梨、江戸よりのかへさ、此の馬夫が馬に乘られたるに、道あしき所に至れば、孫兵衞馬の荷に肩をいれて、「親方あぶなし」といひてたすく。度々の事にて、いと珍らしきわざなれば、あざり「いかなればかくするぞ」と問ひ給ふに、「おのれら、おや子四人、此の馬にたすけ

割子—辨當
毛見—稻作の豐凶の檢査

へ置きたるへ伴ひ行き、割子やうの物開き、そのわたりの人をあつめて、酒をすゝめ、心を慰ましむ。善七郞は公務の外他行せず、介抱にのみ心を盡し、行狀正しく、すべて人の及ばざる事多しとなり。旱損水損ありといへども、毛見をも願はず。田地破損し、或は砂入せる時も、自から費を出して修理し、官邊のために煩しきことを願ひ出でず。金銀を人に貸與ふる時も、貧者には利足を輕くし、他の物を借れるよりも益あるやうに實義を以て計り、己が利をさらにいはず。窮せるものに合力をなすこと多く、此の陰によりて、貧家も富におもむける者多し。乞食など我が門に立ちより乞ふ時は、分に過ぎて施すと也。領主の聞に達し、寬延三年二月饌を賜り、二萬金を與へて賞美し給へりと、備前孝子傳に見えたり。(これは備中の國なれども、備前の支封池田信濃守殿の領地とぞ)此の人頗文字もあり。老後人の飼ひたる山雀の翅を殺ぎたるを憐み、乞ひ得て愛養し、翅長ずるに及び、籠を開きて去らしめむとするに去らず。程なく翁京へ上らむとて、家より一里ばかり出でたる竹輿のうちにて頓死しければ、家にかへしてとかく事を計る間、彼の山雀を其の家の東一丁ばかりある親族のもとへうつしたるに、翁の死をや知りけむ、籠を破りて飛び去りぬ。さて葬儀など終りて後、妻子翁の墓にまうでて見れば、彼の鳥

たり。いとめ天を拜みてよろこびて、即調じてすゝめけり。隣の人見しには、鳶魚をつかみ來ていとが家の棟にとまりしが、やがて魚を落して飛び去りたりとぞ。これ誠に孝の心、鬼神に通じけるならむ。つひに其の行狀を國侯聞し召し、米若干賜はり、家の租をも免し給ふとぞ。

○思孝云、はじめ茄子を羹にせしは晋の石崇が豆粥を熟したるに似たり。魚を得たるは王祥が故態に同じ。孝の切なるより、智も發し、感應にもあづかれり。此の孝女の事委しくは孝婦集といふものに見ゆ。こと繁ければ略して擧ぐ。

○蒿蹊云、前編に出せる大和の伊滿女、河内の清七など、鰻を得、鶉を得たる皆同例なり。さきに評せる如く、たゞ昔の物語とのみ思ふべきかは。誠の感通は和漢古今の別あるべからず。

高戸善七

備中國鴨方村に、高戸善七郎、後に孫兵衞といへるは、父に仕ふること極めて孝也。其の父曾右衞門四年にあまりて病に伏し居けるに、晝夜側を離れず。弟源次郎もまた孝順にて、兄と等しく懇に心を盡しける。少しく快き日は、近きあたりに休息所をかま

借り住みし、身を藏すばかりの葬儀だに出來かねたりし。天鑒あやまたず、善惡の報如レ斯、豈愼ざるべけむや。

いとめ

いとめは、若狹三方郡早瀬浦佐左衛門が妻なり。孝心深く、舅姑に仕ふ。姑は先に死し、舅年八旬に餘り、老耄して非理なることをいひのゝしれども、少しも逆ふ色なく給仕す。ある日いとめ外より歸りたるに、老人藁をちらして孫とあそぶ。「何事をし給ふ」と問へば、「子産むまねしてあそぶなり」といふ。「さらばわれも子を産まむ」とて、又藁を持ち來り、同じく戲るれば、老人興に入ること斜ならず。其の他のあつかひもおして知るべし。（蒿蹊云、老萊子が兒戲をなすにならはずしてあたれるもの也）一とせ深雪軒をうづむころ、「茄子の羹を食はむ」といふ。いと心よくうけがひ、近きほとりの寺に走りて、茄子の糠漬をもらひ、水にひたして鹽を去り、羹にしてすゝむ。又一年冬のころ、鮮き魚をもとむ。折ふし海あれ、漁なければ、いかにともせんかたなけれど、さらぬさまにもてなして門に出で、とやせむかくやせむと思ひ煩らふ折、忽足のもとに魚をどり

老萊子―楚國の孝子、廿四孝の一、年七十二、五彩の衣を着て兒戲兒啼をなし父母を喜ばしむ

れ」といふ。宗四郎かたくうけがはず、「おのれ此の家にあらば、いつまでも此の論絶えじ。されども跡をかくさば、父母の哺養なしがたからむ。いかにせまし」と思惟して、つひに隣村の豪農をたのみて奉公し、給米をことごとく父母に贈りて、家には歸らず。しかる間與左衛門老病にてむなしくなりしかども、家をつぐものなく、村長もてあつかひて、兄弟相讓る旨を官に訴へければ、國君感賞し給ひ、宗四郎には米若干を賜ひて家を繼がしめ、剩へ租税を免じ給ひ、弟磯八には別に月俸を賜ひ帶刀をゆるして、褒美し給ふとぞ。

○思孝曰、大古大鷦鷯帝菟道皇子と、御互に天位を讓り給ひ、三年が間、空位なりしこと、世の知る所なり。夫は上が上、是は下が下にして趣同じ。尊むべき操ならずや。

○蒿蹊按、大さゝきの帝の御讓は、おほけなけれど、猶新井白石の讀史餘論に疑へる論もあり。此の賤者の讓は議すべきよしなし。たふとむべきかな。

○蒿蹊云。上京にある豪富の者、父弟を愛して家を讓らむの趣なりしを、兄訟へて利運になりしが、又弟とも爭論に及びたり。兄弟ともに奢侈の外をしらぬ無賴にて、弟は早く身まかり、兄は年を追ひて貧乏になり、色々のよからぬ催事などして過し、其の死する時は陋屋に

思ひけるに、ある夕暮、二人連の女道者門に立ち、「我等は西國巡禮にてさぶらふが、行きくれて道も辨へがたし。御情に一夜明させ給へ」といふ。與左衛門憐み心よくもてなしけるに、一人の女、懐より男兒を出して、「便なきまうしごとにさぶらへども、旅はものうき習ひなるに、女の足のはかぐしからず、此の小兒にわびて、折々は捨てもやせむとおもへど、犬狼の懼あればそれもせず。あはれ此の子を養ひ給はらば、心よく巡禮仕り候はむ」といふ。與左衛門これを聞て、妻にはかりていふ。「我年比子といふものなし。此の子を養はゞ、まことの子を得たるも同じことにあらずや。いかに」と。妻も心うつくしき人にや「げにさることに侍る」とて、速にうけ引ければ、巡禮は涙を流し拜みよろこびて朝とくたち出でぬ。さて夫婦其の子を宗四郎と名づけ、天よりあたへ給ふ所なりとて、大切に養育せしが、此の後八年をへて實子をまうけ、名を磯八とつけたるが、兄弟むつまじく、やうく長じてともに稼穡をつとめ、父母に仕ふること孝順也。後磯八はある人に奉公してありしが、宗四郎きかず、「おのれはもと巡禮の子にして、所生も知られぬものなり。磯八は肉を分けられしものなれば、彼に譲り給へ」といふ。父此のよしを弟にかたれば、「いな、もとは知らず、吾生れぬ先よりの兄也。家を繼ぎたまふこそ順な

孝子云々―詩經大雅の語

堵の如くなり―人の多く立ち込み

山よりは蔬を出さず、わづかに野老をほり、葛をもとめて喰ふのみ。冬は魚もともしくて、芋にて命を支ふ。唯綿たばこの類を植ゑ、米に代なして老を慰む。後には山のかなたにたま〳〵沃土を見出して、麥米なども作りしとぞ。島人もかく庄右衛門が父に仕ふるを見て、父子孝慈の道をしりけるとかや。孝子ともしからず、天その類をたまふとは是をやいふらむ。或時彼の福女老父が外に出でたる間、庄右衛門にむかひて、「妻や子はおはしますや」ととふに、しか〴〵のよしを語りければ、「なさけなき人哉。此の四五年がほど假初にもいひ出し給はぬことよ」といふ。「その事也。もし父此のことを聞き給はばせんなきことに心ぐるしう思し召さむとかくしつる也」といへり。此の一つにても常の心もちひ知らる。さて流罪御免のこと再應願ひ出しければ、島の長もその孝心を感じ、官の御聞に及びて、赦にあへり。江戸にいたりし時、是を賞嘆して、金銀を贈る人もあり。通行の路上これをみる人も堵の如くなりしとぞ。

若狹與左衞門子兄弟

若狹大飯郡小堀村に與左衞門といへる農夫あり。わかき時より慈悲深く、心もたゞならず

官廳に達し―幕府に上申し

ば、庄右衛門聞きうけて、夫より又領主へ願を奉りけるに、孝養の意を感じ給ひ、官廳に達し給ひしかば、明くる春免許を蒙り、新島に渡りぬ。妻も其の親にあづけ、衣服調度を代なして路費に充つ。かくて領主の邸に出でし時、まづ其のたくはふる所を尋ね給ひしかば、有の儘にこたへまうすに、「かばかりにては心もとなし。糧蓄きばいかに」と重ねて問はせ給ふ。「それは物種をたくはへ侍れば、土さへある所ならば、二人が食物心やすく作り出してむ」とまうす。さて是を聞きつたへ給ふ諸侯、又富豪の家々より奇特の孝子なりとて、餞別を若干得たり。梶取水主も官より賜はり、伴船一艘に引かせ、新島に著きて見れば、纔に九尺四方許の柴の庵に、與十郎は實も盲人になりて、さしうつむきてあり。庄右衛門下り來りしよしをいへども、初めはまこととせず、委しく物がたるに及びて、且おどろき、且よろこび、「夢ならばさめずあれ」など惑ひしこそことわりなれ。庄右衛門も、悲み喜びこもぐ〜にてむせびける。そのあたりにふくといへる老婆、與十郎が盲になりしよりは、よろづ扶持し、朝ゆふ心をつけていたはりしかば、此の庄右衛門が下りしを聞き、共によろこぶこと大かたならず。かゝる海島にはめづらしき人がらなりき。さて介抱の餘暇には、持來りし物種を蒔むと見めぐりしに、野よりは菜を生ぜず、

西國順禮—西國三十三所を順禮する事

高野—高野山金剛峯寺、紀伊伊都郡河南、弘仁七年空海建立

の長とともに訴へ出づることありて、其の趣私あるに罪せられ、皆々伊豆の新島といへる所に流さる。其の子庄右衛門、七旬に餘る祖母を養ひて過すが、もとより家財田地等も沒入せられければ、但力作をもてからき世を凌ぎ渡る中にも、父の意を慰めむとて、ひらき文を贈る。(凡流人に文通するには、封を附けずして往復するを、ひらき文といふとぞ)さて年を經て祖母身まかりしかば、今は島の父の許へ行きて仕へむと志し、領主へ願ひけれども、たやすきことにもあらず。力なく過ごしけるあひだ、大赦の御事あり。此の事を聞くとひとしく、弟の清右衛門といふものをあづまに下して、願ひ奉りけれども、何の御いらへもなく、其の年もくれて、明くる年遠江の某といふもの、西國巡禮して尋ね來り、「おのれも新島の流人なりしが、去年大赦にあひて歸りぬ。彼の島にて與十郎殿には隔なく交りし。與十郎殿は隣村の三郎助なる人と酒を商はれしが、其の三郎助盜人にあひ横死せし後、與十郎殿も眼病にて盲と成り給へり」など語りしかば、庄右衛門いよ〳〵心ならず、高野に伯父の僧ありしもとへ行き、しのびて彼の島に渡らむやと、思ふよしを告げしかば、其の僧、「げに孝の心は淺からねども、後もし御赦しあらむ時の障となるべし。たゞ命をかけて願ひまうさば、よも御免しなき事はあらじ」と諫めけれ

莊屋―今の町村長にあたる

ふたゝびありけるとぞ。常に善事をなすことおほきが中に、細なることには、道ゆくごとに布の嚢を腰につけ、米穀のおちたるを、手のとゞくほどはひろひ置きて、雪中の餓鳥にほどこす。大なることには、處々の大橋、洪水の時に落つる事を恐れて、自から財をすてて石ばしとす。およそ至孝をはじめて、其の所行を國侯きこし召して、米をおほくたびて感賞し給ひ、なにごとにても望む事あらばまうしいでよとおほせくだされければ、其の時よみて奉りける。

ありがたやかゝる浮世に生れきて何不足なき御代に住む哉

閑田子按、作者のこゝろ、世はうきならひなれども、不足なき御めぐみの御代にすめば有りがたしといふなるべし。和歌者流の規矩をもて論ずべからず、たゞ心をとるべし。故に花顚子しるせるまゝをうつせり。

老後、覺翁また實道といふ。壽八十九歳にして、寛政元年十月十日に終る。

山口庄右衞門

大和の國十市郡八條村莊屋山口與十郎といへるもの、寶暦の比、凶作により同郡八ヶ村

大人―尊き客

にて登せける道、遠江灘にて風はげしく船覆らむとせしかば、荷ども海にうちいれけるうちに、此の佛像をも沈めける。舟人此のよしを告げてわびければ、佐吉かへりて大に悅び、「遠江灘は昔より人多く溺れし所なり。そこに佛像いらせたまふことは幸なるかな。ねがひてもなすべき作善也。其の費はいとふべきにあらず、急ぎて今一體鑄たてまつらむ」と、價を舟人に託しければ、また幾ほどなく成就したるは、今も竹が鼻にあり。その像たやすくなすべきにもあらず、大なる御佛なり。又石佛五百體たてむことを誓ひしが、終に七百體に及びしとぞ。およそ母につかふること、晝は起居にこゝろをつけ、よるはいね靜るさまを見ざれば、おのれ枕をとらず。常の所行かぞへつくすべからぬ中に、ある時母柑子をのぞみしかば、近村に求むれどもなし。只同村に此の木をもちたる人あれども、生得吝嗇こと甚しき人なれば、これに乞はむもいかゞとはおもひながら、せんかたなく、たゞ一つを乞ひけれども、果してあたへず。さるに、其の時おもひがけず一陣の烈風吹き來て、かの柑子を多くおとしければ、あるじも今は惜む心なく、拾ひてあたへける。佐吉が心天に通じけるならし。又おもふやう、「母身まかり給ひて後は、百味の珍膳もかひなし。生前にまるらすることそ」と、大人を招請するがごとく饗應せしこと

わぬしら―お前達

て此のかねを奪はむとす。佐吉いふ。「我むかしはまどしかりしが、今はかばかりのかね與ふるも傷むにたらず」と、投げ出しあたふ。「さらば其の衣類をも脱ぎてあたへよ」といふ。「これも易きことなり。いかさまわぬしらさだめてさむからむ、なほほしくば我が家に來れ、みなくに與へむ」と、まづ心よく著たるものを脱ぎて、「さて此代りには街道に出づる道をしへよ。我けふは道にまよひたり」といふに、一人の山だちつくぐくと佐吉を見て、「我教へむ。いづくへ歸る人ぞ」と問ふに、「竹が鼻の者なり」とこたふ。「さは佐吉ぬしにあらずや」「しかり」といへば、「こはあしき人のもの取りたり。我が黨のものにいひきかせて、明日かへすべし」といふ。「否ぬしたちにあたへたる上は、又取るべきやうなし」と、行く道を聞きてわかれぬ。其のあくる日、いひしごとく取りたるものなもみて來て還したり。佐吉いろくにいへども、さし置きて走りさりぬ。又ある時、諸國の神社佛閣を拜みめぐりしに、出羽の邊にて、疾おこり死せむとしければ、心中に拜みて、「今一度母にまみえしめ給へ」といのりしかば、速に愈えけり。本國へ歸りて老母にかくと物語してよろこびしかば、母「其のやまひ愈えしは佛の御加護なれば、佛像を鑄て謝したてまつれ」といふ。こゝに江戸の某といへる鑄工につくらせけるが、やがて成就して船

四書—大學、中庸、論語、孟子

信ず。大かた貧しきを憐み、なべて人に交るにまことあれば、誰となく佛佐吉とは呼びならしけり。いとけなき時、尾張名古屋紙屋某といふ家に僕たりしが、いとまある時は、砂にて手習ふことをし、又四書をならひよむ。朋輩のもの妬みて、「讀書にことをよせ、あしき所にあそぶ」など讒しければ、主もうたがひて、竹が鼻にかへしぬ。されども、なほ舊恩をわすれず、道のついであれば、必ず訪ねよりて安否をとふ。年經て後、其の家大きにおとろへければ、又よりくに物を贈りけるとかや。主のいとまを得て後は、綿の中買といふわざをなせしが、秤といふものをもたず、買ふ時は買ふ人にまかせ、うる時はうる人にまかす。後には佐吉が直なるを知りて、うる人は心しておもくやり、かふ人は心してかろくはかりければ、いくほどなくゆたかに暮しける。父にははやくわかれ、母ひとりを養ひしが、母餅をつきてうりたきよしをいふ。佐吉母の心にたがはず、もち賣ることをはじめしが、「必ちひさくし給へ」とすゝむ。母いぶかりて其のゆゑをとふに、こたへて、「ちかきあたりにもとより餅うる家あり。大にせば彼がさはりにならむ」といふ。其の意を得てちひさくすといへども、外と同じく買ふ人ありけり。ある冬、年せまりて、近國へかね集めにゆくことあり。かへるさ日くれて道に迷ひしに、山賊いで

甚。餘惟隆冬。保嗇是顓祈。此不宣特筆。寶山多竹。小者乞賜一竿。以備衣桁之用。勿吝是懇。

陽月晦　俗子陳元贇　花押

艸山元政師最愛下

○此の人學才あるのみならず、柔術に妙にして、今も本邦に行はるゝは此の下流多しとぞ。文武の君子にして北狄に從はむことを惡みて皇國に來る。其の爲人知るべし。（此の人所持の觀音の像及持物、北野東向の觀音寺にあり。しかれば京にて終られしなるべし）丈山老人もまた師と友とし善し。詩仙堂へ茶を乞はれし書簡をある人持てりし。

○深草眞宗院は淨土、深艸流儀の本寺也。師其の中興慈空上人とつれに伴ひて遊行せられし。隣寺といひ、同じく律を持ちて齋食なれば、かたみに煩らひなしとよろこび給ひしとなむ。自他宗の嫌忌なきを尊ぶべし。

北狄―清朝を指す、愛親覺羅氏は滿洲より入ればなり
遊行せられ―行脚せられ

佛佐吉

永田佐吉は、美濃の國羽栗郡竹が鼻の人にして、親につかふることたぐひなし。又佛を

釋尊―釋迦の尊稱

霜月―舊暦の十一月

陳元贇―字は義都、既白山人といふ能書且陶器を製す、又拳法を善くす

僧の行などの怪しき事を歎く。釋尊に當世の僧を見せたらば、此の人は何といふものぞと仰せてむ、孔子に當世の儒者を見せたらば、これ何ものぞと仰せてむなど語りけり。寛文二年霜月七日の日、了介又伶人三四人幷に小倉少將といふを伴ひて、艸山の稱心庵にて樂をなす。了介は琵琶を彈じ、少將は琴をひく、師は和歌をよむ。

天地の心にかなふ調には山の岩木も動くばかりぞ

後了介、吉野山に庵を結びて隱れたりける比、消息したりし、

此の春は吉野の山の山人となりてこそ知れ花の色香を

○蕎蹊因に云、陳元贇は明末の亂を避けて歸化す。朱舜水と同時とぞ。初尾張にありて元政師に相見の趣、其の身延紀行に見ゆ。後京師に住みて、常に師と交を結ばれしよし。其の贈答の詩文を集めたる書、元々唱和集也。おのれも元政師に贈られし尺牘を買ひ得たるを左に錄す。

久違慈範。毎切神馳。未省。邇日。法體若何。老邁自還居後。目涙。腰疼。足痺。駢集而來。苦楚萬狀。寸步如登九折。緣是不能趨候寶山。以聆淸誨。疎譴豈容筆舌。想高明當鑒愚之衰憊耳。前承借五雅九册謹遣奚奴奉璧。希檢收幸

梵語—古代の印度の言語
譬喩品—法華經卷三、

歸　鴈

迷ひ出でし人の心を故郷にいざさは誘へかへる雁金

春の歌の中に

咲きて散るものも思はじ山櫻色香の外に花を眺めば

妙の一字を書きて、歌よみてと人のいひしに

心にも及ばぬ物は何かあると心に問へば心なりけり

○凡調にあろざる歌、あまたなれども、こゝにとゞむ。

○又花顚、彼の法嗣惠明師の手書にて隨筆を見し中にありし一條、面白き事なればとて擧ぐ。

○熊澤次郎八は陽明の學にして、備前岡山侯に敎へし人なり。後俸祿をすてて、洛陽上御靈の邊にかくれて、名を蕃山了介と改む。甚樂を好めり。伶人を日々招きあつめて、樂を稽古しけり。ある時伶人某といふもの、了介をして艸山に來り謁せしむ。爾來節々艸山に來れり。又伶人を携へ來て樂を聞く。余も艸山に從ふ。又師に請うて折々法華經の訓讀を習ふ。梵語の心得がたき所などを聞く。譬喩品に至りてやみぬ。又源氏物語をも師に聞けり。これは全篇聞きけるが、師の前にしては強ち佛法を破することとなし。但當世の

誰もおもへば―薫が柴船を見て人間の無常を嘆じたる語源氏物語橋姫巻に出でたり

平等院―山城久世郡

折句―題の假字を毎句の首に置けるもの

深草の里に住みなれて後

住までやは霞も霧も折々のあはれこめたる深草の里

山家橋

朽ち果てねなほ折々は訪ふ人の心にかゝる谷の柴橋

宇治川の水上にのぼりて、人も通はず靜なる所に久しくながめて、柴船の往きかふを見るに、薫大將の「誰もおもへば」などいひしもおもかげにうかびて、

世の中は誰も思へば水の上に浮きて漂ふ宇治の柴船

同じく平等院にて

はかなくて今日も暮れけり明日知らぬ三室の山の入相の鐘

新發意の東へ行くをはなむけすとて、人の歌よみけるをみて、

武藏野の雪も氷も踏み分けて果なき法の道を究めよ

大方の世に濁るとも住みなれし我が山水の心忘るな

折句の歌に、ふゆのはな、

ふみ分けし雪の深山の法の道はるけき跡に猶迷ふ哉

ども、虛空もと明らかなるものにもあらず、又色どれるものにもあらず、我又此の虛空のごとくなる心の上において、種々の風情を色どるといへども、更に蹤跡なし、此の歌即是如來形體也、されば、一首よみ出でては一體の佛像を造る思ひをなし、一句を思ひよりては、祕密の眞言を唱ふるに同じ、我此の歌によりて法を得ることあり、もしこゝに至らずしてみだりに人此の道を學ばゞ、邪路に入るべし」といふ。

山深くさこそ心は通ふとも住までさはれは知らむものかは

これも、西行上人のその時のうた也。明惠傳記に見ゆ。

十八日。天大晴。嘗粥卽出高槻。肩輿中念誦已畢而看須磨一帖。書坊白水來。出叡山戒檀院戒牒一卷。世尊寺行忠筆。予閱一遍。又示爲家卿書。古今作者傳一帖。古今集歌人之履歷尤詳也。予乃覽了還之。

廿日。讀删定止觀及源氏物語。

廿一日。午後。省養壽院。見源氏物語十五六帳。下略

○蒿蹊云、上人の詩歌其の集あれば、こゝに贅すべからず。しかれども秀逸と聞ゆる歌、又その志を見るべきもの少し擧ぐ。

源氏―源氏物語

定惠―三覺中の二にて靜慮と眞理

もなるべきなり。心のためにするは、只是佛道の因也。日夜になす所善事といへども、さながら悪業ともなり、さらぬことも又功德善業ともなる也。心をつくべきこと也。凡何事も修行にならぬことはなし。物を二つにするは皆根本にもとづかぬゆゑなり。

十六日。訓點戒牒及光照寺化疏各一卷。

十七日午後、讀源氏須磨の卷十三張半。僧曰く、「戒律を持するは養生にもなるべきと存ず」予曰く、「何ぞたゞ戒のみならむ。八萬の法藏皆是良藥也。身心のために病をなほすより外のことなし。詩歌の道をよくすれば、卽是定惠の二法を修する也。二法具すること詩歌一致なり。己の藝にほこり、人の耳目をよろこばしめむとするは、詩歌の邪路也。西行上人、明惠上人に語りしは、我が歌をよむは遙に尋常に異也。花子規月雪すべて萬物の興に向つても、凡所有皆虛妄なること眼にさへぎり、耳に滿てり、よみ出す所の言句皆眞言にあらずや、花をよめども、實と思ふことなく、月を詠ずるも、實に月と思はず、只此の如くして隨縁隨興よみ置く所也、紅虹たなびけば虛空色どれるに似たり、白日かゞやけば、虛空明なるに似たり、然れ

遺骸を稱心庵の側にはうむり、竹兩三竿を植うるのみにして、塔をたてず。遺命によるとぞ。著す所草山集三十卷、草山和歌集一卷、釋氏廿四孝一卷、龍華歷代師承傳一卷、同抄一卷、本朝法華傳三卷、小止觀抄三卷、草山要路一卷、身延紀行一卷、稱心病課一卷、元々唱和集二卷、扶桑隱逸傳三卷、聖凡唱和一卷、如來祕藏錄一卷、食醫要編一卷、猶考訂のもの甚多しとぞ。（以上艸山集に眞名にて出でたるを花顚譯し、蒿蹊又正して記す）

〇又花顚ある人のもとにて、上人自筆にかたかんなして書き給ふ日記のはしを見る。その語平生を見るに足ればこゝに擧ぐ。

十三日、書二和歌懷紙一草紙をこしらへるとて紙を折る。一僧前にあり。其の僧「是へ給はり候へ。折り申し候はむ」といふ。予が曰く、「是も修行なり。心からひずまぬやうにすれば、ろくになるのみにあらず、心も正しくなるなり。手をもつてすることは是にかぎらず、何事もうるはしからぬものなり。戸のあけたても鳴らぬやうに心をつけ、はきもののぬぐもゆがまぬやうにするは、見聞のよからむためにあらず、心ををさめむため也。見聞のためにするは、甚しき時はまことの業に

ひずまぬ―ゆがまぬ
ろくになる―正しく揃ふ

法華經―七卷、後八卷秦鳩摩羅什譯

忉利―忉利天の略語

內外の二典―內は佛書外は儒書

深草―山城紀伊郡、

身延山―甲斐身延山久遠寺、日蓮宗總本山、

曼荼羅―佛證悟の境界、衆生本具の德を表示したるもの

て三大部を閱す。もし解せざることあれば、僧俗長幼をえらばず、是を問うて盡す。夢に天台大師と議論あまたたびにして、解すること多しとなむ。しかも愼みて人にかたらず。常に三學を修して滯らず離れず。又およそ耳目の觸るゝ所ながくわすれず。かゝれば、內外の二典にわたり、かねてよく日本紀に通ず。後深草に隱遁の地を占めて、瑞光寺と名づく。常に袈裟を脫せず、持律誦經怠る時なし。其風をきく者、草のふすがごとく、首をつぎてあふぐ。又來りて道をとふ者あれば、よくをしへてさとす。貴介公子と雖も招くには應ぜず。或は人絹衣を供すれば、棉にかへて徒衆に施す。後父母の舍を寺の傍に設けて、稱心庵と名づけ、孝養おこたる事なし。父行年八十七にして終る。母とし七十九に及びて、身延山に詣でむ事を告げられしかば、師たすけて共にまうづ。此の時身延紀行あり。後母もまた八十七歲にて終らる。其の二七日より師俄に病にふし、遂に起たざるを覺り給へば、諸徒弟に遺戒し、自から曼荼羅を書し、弟子惠明に附屬して、法嗣とす。明くる年遷化の前一日、父母の墓に大に法華の首題を書し給ふ。世壽は四十六、寛文八戊申年二月十八日化す。辭世の歌あり。

鷲の山常にすむてふ峰の月かりにあらはれかりにかくれて

寧馨兒—此のごとき兒の意、兒を褒むる語、晉宋間の俗語

得度せむ—出家授戒せむ

天台三大部—天台玄義十卷、天台文句十卷、止觀十卷、皆天台大師智顗の著

はく、「誰か知らむ今寧馨兒あり」と。八歲にして近江彥根にいたり武事をならふに、又よくす。十三歲城主井伊直孝君に仕ふ。故ありて母の氏をとなへて、石井俊平といふ。常に官のいとま書籍をよむに、精力人に過絕す。一時江戶にくだらむとするに、かねてより母氏のもたる觀音の小像を携へむと乞ふ。此の像は母氏石山にまうづる道にて拾ひしところにて、深くひめ置きたれば、年比得まほしきながら、いはで過せし也。しかるに乞ふに及びて驚きていはく、「よべの夢に尊像告げて、俊とゆかむ俊とゆかむと宣ひしにあへり」とて、すなはちあたふ。さて江戶にありて疾し、京にかへりて養ふこと一年、時に歲十九也。性山水を樂しみ、風景にあうては終日吟咏す。母氏と和泉和氣に遊んで、日蓮上人の像を拜し、三願を起していふ、「一つには出家得度せむ。二つには父母の命ながくて、孝養をつくさむ。三つには天台の三大部を閱せむ」と。時に泉涌寺の雲龍院周律師法華經を講ずるを聽き、忉利に生ずるの文に當りて、律師、法藏比丘の母をすくふ因緣を引くを聞き、涕泣してやまず。四座も亦これが爲に袖をうるほす。師、律師の德義をしたひ、出家の志をつぐ。律師いふ、「汝はなはだ少し。出家いまだ遲からず」と。さて後八とせを經て、二十六歲、妙顯寺日豐上人にしたがひて志を遂げ、果し

○蒿蹊云。墓碣に何でもないとノ〵とのみ記すとぞ。予先年此の寺に至りしかども、故障ありて此の墓および其の茶室を見殘せり。今は人の話をもて錄す。

○後に正せれば、是什麼と小石に誌し、其の後に大石に道春の碑銘を彫るとぞ。

僧元政

建仁寺―京都下京、臨濟宗

釋日政字は元政、妙子と號す。不可思議又泰空とも稱す。姓は菅原、平安の人なり。母石井氏、或夜の夢に、高僧入り來りて、「たのもしきかな」といふとおほえて後孕めることあり、元和九年己亥二月二十三日、京師一條のほとりに生る。母氏曾てなやむことなし。二歳の時、秋七月十六日夜、父携へて東山の送り火を見せしに、大の字を見て、家にかへりて、たゞちに其の字をしるす。またさまぐ〵の玩物をならべ置く。人その名をよぶ時、喚ぶにしたがひてとる事かつてたがはず。六歳にしてはじめて書を讀ましむるに、一たびさづかりしことはわするゝことなし。ある日、父にしたがひて、建仁寺大統院に遊び、院主九巖長老にまみゆ。長老いふ、「兒何の書をならふや」いふ「大學を學ぶ」と。卽長老二行を口授するに、たゞちに諳記して誦す。長老掌を打ちて嘆じてい

博山の香爐―漢に博山爐あり、其の形せる香爐か

集外歌仙―一巻、後水尾天皇の皇后東福門院源和子の撰

（閑田子云、鯉の字古假名はこひなれども、後世はこいとかけり）

御かへし

魚の名のそれにはあらで此比にちと二つもじ牛の角もじ

（來いとの給ふなり）

又所持の博山の香爐を羅山子に贈る時、子答へて「遠寄二一爐一示二相戀一。心如二螺甲沈水錬一」とよろこべり。此の類風流の交の書牘世に殘れるもの多し。擧ぐるにいとまあらず。

昌俊若きときよめるうたに、

よしの山花待つころの朝な〳〵こころにかかる峯の白雲

これを飛鳥井雅康卿の傳奏にて後陽成院の叡覽に入れければ、深くめでさせおはしましけるが、後寛文の皇后集外歌仙を撰ばせ給ふ中にいりて、忝く宸翰を染め給ふとなむ。連歌において殊に長じけることは、ある人昌琢に向ひて、「當時連歌に冠たる人は誰ぞ」と問ふ。昌琢「西におのれあり、東に昌俊あり」と（是は永井侯いまだ下野に在城の時也）答へられしにて知らる。寛永二十年癸未八月三日病みて終る、享年六十五なり。墓は酬恩庵境内にあり。

倉廩―穀物を納れおく倉
一休禪師―紫野大徳寺四十七世の住僧、名は宗純、
小堀宗甫翁―遠州流茶道の祖、小堀政一
松花堂―山城男山の僧昭乘、書畫の大家、
近衞藤公―近衞信尋公
鷗社―詩歌風流の會合

給ひ、下野より山城の淀に移らる。一時在府の日、封地不熟にして、諸士飢寒す。その比、喜六執事たれば、皆軍用の金をからむと乞ふに、喜六思惟して、「是は君にまうし、同僚にかたらひては成るべからず。吾一人の意にてはからはむ」と、倉をひらき、銀子千貫目を出し、返濟のことを示して分配す。後侯是を聞し召して大に怒り、私のはからひを責む。喜六申す、「軍用金もと何のためぞ。諸士乏しく、公の恩を思はざる時は、有りても益なし。今十年を經ば各返納して倉廩もとのごとくならむ。されども、此の擧臣一人の所爲なれば、もし義にあらずと思さば、死を賜はむも亦辭せざる所也」と。その理當れるをもて、侯も言なくやみ給ふ。同十五年疾に嬰りて致仕し、家は息俊甫に委ね、薪村酬恩庵一休禪師の遺跡の境内に默々庵をむすびて幽居す。禪に參じ、山水を翫び、意を方外に遊ばしむ。壺齋また不二山人ともいふ。茶技は小堀宗甫翁を友とし、連歌は昌琢法眼に從ひ、書は松花堂に學ぶ。漢學はもとより羅山子に聞けりし。和歌をも好みて、近衞藤公に參り、中院通勝卿、木下長嘯子にも鷗社をなす。ある時、淀川の鯉を近衞殿に奉りて、

ついであらばまうさせ給へ二つもじ牛の角もじ奉るなり

孫吳の書―兵書孫武、吳起の著

貞治四年義詮將軍、高掃部助師義をして信濃の賊を討しむる時、援兵となり、足利基氏鎌倉に居て東國の鎭たる時、手書を賜うて累世鎌倉に仕ふ。その後六七世を經て、喜六にいたる。喜六幼くして越前長尾家の將木戸玄齋が養子となる。いまだ弱冠ならざる比より、三郡の訟をきゝて判ずるに、議辯よく當れば、人賢者なりとあふぐ。玄齋和歌を好む故、したがひて學べり。後玄齋むなしくなりて、其の家絶えたる後、洛に赴き、慶長五年庚子大津の驛の戰に、ある人の手に屬し、先登し、鎗を壁下にあはせ、左の股を傷けられてなほ周旋す。永井右近大夫直勝朝臣、喜六が勇名を聞きて、招いてしばしば眷遇し給ふ。慶長十九年難波の役、侯の營に九鬼某の兵すゝむ時、「其の間いかばかりかある。又沼川の淺深いかならむ」と仰せければ、喜六進み出でて、「おのれ往きてものみつかうまつらむ」といふ。侯とゞめ給へどもきかず、芦原沼川をわたりて、九鬼の兵と言を交へ、其の淺深などくはしくはかりてかへり、「敵兵必ずいたることを得じ」とまうすに、果して明日引退く。水陸の算喜六がことばのごとくなるを、人皆奇とす。凡て弓矢の道にくはしく、孫吳の書を明らめ、經濟の事をもよく知れり。右近大夫の嗣信濃守尙政朝臣、ます〱喜六に禮を厚くしたまふ故に、諸士もまた重んず。寛永十年侯增封を得

齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧仝、李商隱、靈徹、邵雍、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、晉幾の十八人

雌黃—詩文を添削する事

覆醬集—三卷

竹如意—佛家にて用ひ一尺許の蕨の形せる具

疣せず—餘に述べず

高市皇子—天武天皇の皇子

行す。十六にして仕へ、三十にして退き、老母につかへて孝を盡し、四十にして隱遁の志を堅くせり。實に希代の隱士といふべし。棲遲のあと禪尼寺となりて存在す。風景凡て雅趣あり。外面に小有洞、中門梅關、嘯月等の額、皆翁の手書也。其の藏する所の翁の肖像、探幽圖して自贊を記せらるゝ幅、閣上より望む所十二景の卷、（此の閣三重に作れり）又木崑崙、竹如意の類、生涯愛翫の六物有りて請ふ人には是を示し、且近來其の圖を模刻し冊となして廣むれば、こゝには疣せず。其の中に七絃の琴は明陳眉公の舊物にして、ことにめづらしといひもてはやすを、靈元法皇聞し召し及ばれて、宮中に召して叡覽ましく／＼けるが、古きいと三筋のみ殘りければ、德大寺家の世臣物加波氏の妻女に勅して、糸四筋を補ひて下し賜ひけるとぞ。物波加氏は世々琴絃を作る來由ありて、勅許を蒙れる故となむ。今右に琴の圖樣を掲ぐ。

佐川田喜六

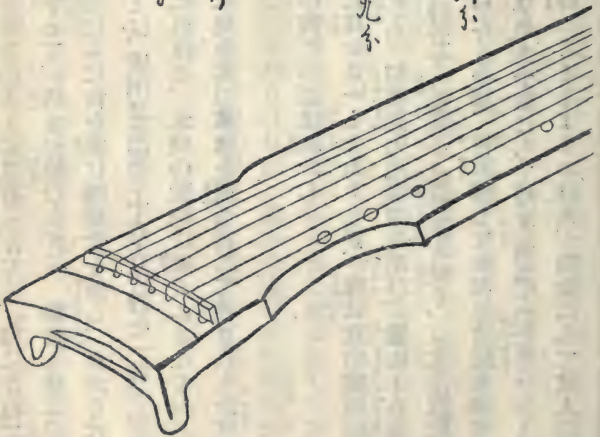
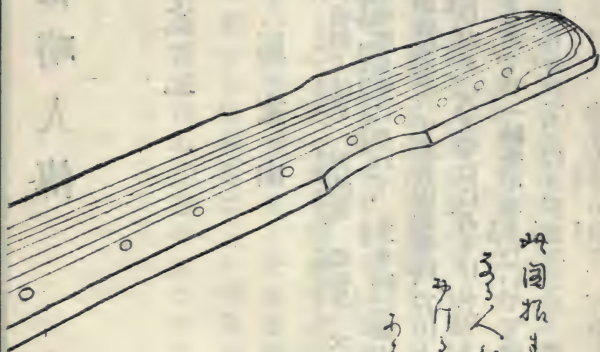
佐川田昌俊喜六と稱す。姓は高階、世系高市皇子六世峯緒より出づ。承和の比高階を省略して高と稱ふ。先人某下野足利の莊早河田村に食みし、遂に文字を佐川田にかへて氏とす。

依怙の御沙汰—一方にひいきする御處置
唐宋諸名家云々—左方は蘇武、謝靈運、杜審言、李白、王維、高適、儲光義、韋應物、韓愈、劉禹錫、李賀、杜牧、寒山、林甫、梅堯臣、歐陽修、黄庭堅、陳與義の十八人、右方は、陶潛、鮑昭、陳子昂、杜甫、孟浩然、岑參、王昌

く感じ思召しけれども、軍令に背きたる罪其のまゝに見許しがたく、殊にかねて寵臣のことなれば、依怙の御沙汰も穩ならずとて、惜ませ給ひながら、勘當し給ふ。さてぞ武門を離れて、日枝の山のふもと、一條寺むらに世を避け詩仙堂を創し、自から六々山人と號し、山水花月に情を慰む。詩仙堂とは、唐宋諸名家三十六人の詩を一首づつ自書し、像は探幽法印に畫せしめて梁上に揭げたれば也。本朝の歌仙に准らふるなるべし。こゝに隱れて後は京へ出づる事をせず。後水尾帝其の風流を聞し召して召されしかど、固く辭し奉りて、

　渡らじな世見の小川の淺くとも老の波たつ影は恥かし

と申し上げければ、憐み思し召し、「心に任せよ」と勅ありしが、殊に此の歌の「波たつ」を「波そふ」と雌黄を下し給ひしも忝し。初惺窩先生に道を學び、羅山子杏庵玄同の輩と交り、詩をよくす。平生咏ずる所の詩若干首集めて覆醬集と號く。又北山紀聞あり、是も翁の詩又詩話を記す。ことに隸書にたくみ也。世人稱して本邦中古以來隸書のはじめとす。寛文二十二年壬子夏五月廿三日享年九十歳にして歿す。翁爲人剛直にして勇あり。其の穎敏なるも亦人に過絕す。二歳の時のことをよくおぼえ、四歳にして成人の如く歩

頭より尾まで長三尺九寸五分
岳山此所幅五寸七分
肩の所幅六寸、鳳額幅五寸九分
岳山高サ四分八厘、幅二分。
絃眼總幅一寸二分
絃眼各唐真鍮のシトメ有
七徽の大サ三分六徽八徽二分
又徽九徽二分二厘
鳳足四箇黄楊木ニて作ル

續近世畸人傳

卷之一

石川丈山

濱松麾下―家康の旗下の士

浪華合戰―元和元年五月大阪夏陣

丈山名は重之、(後凹と改め、凹凸窩、頑仙子、大拙など、其の詩其の書に記せらるゝものあり)參河國碧海郡泉鄕に生れて、若き時は嘉右衛門と稱し、後左兵衛と改む。世々濱松麾下の士也。源義家第六子左兵衛尉義時、石川と稱せしより嗣ぎて氏とす。浪華合戰の時、御麾下に從ひ奉り、天王寺口にありけるが、人並々の軍せむも見所あらじと將帥の命をまたず、夜をこめて只一騎營中を忍びいでて敵城に攻めかゝり、櫻の門といふ所にて佐々十左衛門と渡り合ひて、佐々が首をとる。其の郞等其の場をさらず切りかゝりしをも、又鎗の下に伏せて、大手を走り過ぎ、打取りし首を實檢に備へしに、其の武勇は深

たのむぞよ、柝骨にして、櫻の木
此のこゝろは、其の體を荼毘し、骨を川に流し、なき跡のしるしには、さくらの木を植ゑよといへることとぞ。此の柝骨といへるは、さだめて佛家に說あることならむと、諸學匠にとへども知る人なし。此の人は聞き認めたることありしなるべし。さて知己の人、遺言のごとく、東山にて火葬せし骨を、ただちに携へて嵯峨に行き、戸南勢の前の流に沈めぬ。こゝはさくらのいとおもしろき所なれば、同じ河の中にもよかゝめりと戯れしによれり。又日野の外山に、平生用ひたる禿筆及び其の書畫の反故をうづみて、一樹の櫻を栽ゑ、一片の石碣を建て、六如僧都の銘を錄す。こは醍醐山素川法師の領せる地をあたへ、その肉弟山縣蕪亭生ともにはかりて、逝者の志を遂げしめ、妹女露香のねがひをはたせるなり。

三熊花顚傳

介堂三熊氏名は思孝、はじめ正親と通稱す。號は花顚子、城西鳴瀧の產、幼きより畫を好みて、肥前長崎の畫人月湖に從ひて漢法を學ぶ。後自からおもへらく、凡麟鳳および龍虎獅象のごとき、見もしらぬものをゑがくは、唯一旦の眼をよろこばしむるのみにて世に益なし、古き代の公事民間の有さまをうつして傳ふるや、あるひは今の世の人物調度眼にふるゝ物を圖して、後にしめすなどこそよからめと、是をつとむ。つひにまた思惟すらく、櫻は皇國の尤物にして異國にはなし、是をゑがくは國民の操ならむ、はた枕の草紙に、繪に書き劣りするものにさくらをのせたるは、むかしよりよくゑがく人なかりけるにこそ、いでこれをつとむべしと、研究して生花を摸したるが、知る人は、從來いまだかゝるものを見ずといへり。爲人世にすねたるやうにて貧をうれへず、生產をこととせず。書畫器財にいたるまで、古物を好み、自からの書も亦上代樣によりてよくす。生涯すべて奇に終る。其の奇のとぢめは、遺言していはく、

櫻花帖題

梅竹蘭菊。傳照逼眞。擅名當時。固不乏人。櫻花乃我邦之奇種。最所宜殫精究巧。而振古未聞其人。穠豔者過肥。疎鬆者太瘦。忍使國色死于拙工手。不亦寃乎。富麗中一段氣韻。爭豪髮於環施之間者。舍三熊生而將安求焉。余曾題其幅曰。櫻花已來凡馬空。具眼以爲信然。嗚呼千古年來。天機之妙。獨慳此花者。一旦而迸出。生之貧且病。豈或觸造物之怒與。少陵所云。但看古來盛名下。終日坎壈纏其身。吁亦異哉。雖然齊侯千駟身後灰滅。此雖小技名足千秋。我已保之今日。三熊生亦可以少慰矣。

寛政癸丑夏五

淡海六如散衲題

總べて一篇のうへ難なきは、彼の人草案のまゝにうつし、章段おほつかなく、言路たと〴〵しきは、唯意をとりて文を改むるなど、托せるまゝに愚意を用ふ。○删補大やう終れるころ、書林はたして畫のことに及ぶ。されども遺意かくのごとくなれば、其の輕くといへるはいかゞすべからむとかたらへるに、一書肆はかりて、彼の妹氏露香女の畫あらば、故人もよも恨み給はじやといへるを、ことわりに覺えて、傳中畫くべきものすこしをとりて、圖やうなど、彼の志に背くまじうものせられよと語らひぬ。又櫻は故人一生のちからを盡しけるものなれば、其の自畫をもてはしに揭げ、はた六如上人の櫻花帖の序を錄す。小傳を附するもまたこれが因みなり。

えき。

○花顚草稿には、惺窩闇齋等の諸先生、宗祇、貞德、芭蕉ごとき諸老、澤庵、盤桂禪師の類ひあれども、こは其の門流廣く、其の傳おほつかなからず。又たとへば、澤庵禪師を納むべくば、一絲禪師を洩すべからず、しかも先に皆成書あるものから、今は此の類を略く。またあるひは、大原古知谷の彈誓上人、澄禪和倘のごときは、畢竟化人といふべく、奇の又奇なる行狀なれども、既に傳記あまねく世に行はれたれば納めず。あるひは又名高き紹巴法橋のごときも、連歌にのみ聞えて奇行のしられぬは、花顚が出せるに潤色して擧ぐるも有り。此の外およそ加ふるも省くも心を用ふる所あり。もとより前編にいへるごとく、畸に一定なし。たとへば他の欺を受けざるを操とする武人の奇もをかしく、欺を容れて咎めざる文人の奇もをかしければ、唯其の奇のまゝに錄す。奇は奇にして、其の所行の善惡是非は、事狀の上に明らかなれば、評論を必とせず。

○あまりに人數の多きも煩はしく、又似たることの重れるも珍らしげなからむなど諫る人もあれば、既に印行せる書に出でたるは、撰みておほよそこれを除く。

題言

蒿蹊曰く、花顚子此の草稿を錄し、春待ちて後京に歸りても猶考ふるよしにてありしが、事しげきにまぎれて、月比たいめせである間に、使もてしきりにまねかれしかば、八月十三日訪らひしに、おのれ今はたのみなくおほゆ、此の草稿はあらかじめ足下に校讎をこはむとおもひしからに、ひとへに委ねまゐらす、いかにも心のまに〳〵正し給へ、唯畫のことは、おのれがむねとする所なれば、たとひ他人の手をかるとも、其の圖樣を見ずしてこれにくはへむことはほりせずと聞えられしに、おのれ、今は六十を過ぎて、一夜の間ものどかにたのみぬべき齡にはあらねど、もし幸にながらへば事を遂げなむ、さて畫のことは前編既にあり、こたびもなくてはさう〳〵しく、書肆もうけがふべからずやと語らひしかば、げにそれも理なり、さらばかろく書かしめ給へといへり。是はおもふに、此の人の畫、時代によりて人物の服裳器財の考あれば、他人其の意を得ざらむことをいたむなるべし。かくて明くる十四日より病革(すみやか)に言滯り、終に二十六日に身まかられしもいとあはれに、此のことをおのれにかたらはむとて、しばしながらへけるにやとまでおほ

往年件のうし前編を錄せられし時、我はとし老いたり、後を期すべからずと、拾遺を予に任ぜられしが、予此の六とせばかり、病みて已に死なむとすることとみたび、辛うじて命をつなぎ、但馬の溫泉に浴して病を養ふの間、つれ〴〵なるまゝに、是かれ聞きあつめしことどもを思ひ出でて筆にまかす。猶とし月をつみて正さば正すべけれど、若しとてたのまれぬ命にしあれば、唯大かたにしるして、うしの校讎を需むることにぞ。

寛政五年癸丑冬湯島訥齋の僑居にして記しぬ。

花顚居士　三熊思孝

卷之四

卷之三

續近世畸人傳　目次

寛政丁巳初夏

石見浦世纘撰

續近世畸人傳序

纘比年西遊。未卜一枝巢居。暫寓閑田廬。主人適侵余之倦睡曲肱。几上出續畸人傳者。見眎。余曰。纘也西遊幾歷十有餘國。探山川之奇絶。未見其奇。尋諸藩之畸人。未遇其畸。然履跡所及。往々靡不語翁之畸人傳者。今又修此續篇。何其盛也。主人笑曰。足下見奇。强不之奇。遇畸人不之畸。海内之廣。山川之奇。不可勝擧。方今文明之盛。託物遯世之人。豈其鮮少哉。如余固非好奇。以其不好。反知近古之多畸人。所謂傍觀者。明于當局之類是耶。足下索奇於千里之外。故見奇絶不爲奇。遇畸人不爲畸。所謂觀海者。不可語水之類是耶。可謂亦是一畸人也。請以此語冒此卷首。何如。纘諾之。且曰。余也空勞歩於海外。有眼不見奇絶。無識不遇畸人。不及翁之坐耕筆于閑田廬也遠矣。幸以斯語讀之。不亦可乎。

近世畸人傳 終

大疑團—大なる多年の疑問

徹底透得し—善く悟り

傅大士—齊の人、東陽郡鳥傷縣の雙林寺に居す

維摩—維摩羅詰の略語、淨名居士也、釋迦と同時大悟の居士

白幽子—白幽子は實在の人なる由續編に閑田子の正誤あり、參看

の勤むると怠るとにあるのみ。我昔多病公に十倍す。されども終に是をもて一月ならずして宿病大半銷除す。今此の山中にありて寒をおそれず、飢を知らざるも皆此の觀力なり」と。禪師示しを聽受して辭し去る。後三年を經て、從前の病患自然に治す。たゞ病去るのみにあらず、大疑團徹底透得し大觀喜を得るもの兩三回、省覺怡悅數次。もと二三の襪を著て、足心常に氷の如くなりしに、老の後襪せず、爐によらざるも病む事なきもの、彼の方術の餘勳乎と。禪師著す所の夜船閑話、及闡提記聞等に見えたり。

私云ふ。白幽子の始末此の外に聞く所なし。机上の書籍、儒釋道を兼ねたるは傅大士に似て、しかも維摩の默に遊ぶ。英雄人を欺くにて、若し其の意を著はさむ爲に、假に此の人をまうけ、白川の幽人をもて名とせるも亦知るべからねども、年月などさだかに記されたれば、こゝに錄す。示す所の法は實に人に益あるべし。故に要をとりて猶繁きを厭はず。禪師爲人の志を嗣ぐのみ。

に凝聚すれば、健康保つべく勇氣持すべしと云ふ
浩然の氣云云—道義に毫も疚しからざる剛健の德
觀—細心の分別
阿含—增一阿含、長阿含、中阿含、雜阿含等あり
四大—地、水、火、風

微笑して曰く、「禪觀又他にあらず。大凡觀は無觀をもて正觀とす、多觀は邪觀とす。向に公多觀をもて病を得たり。今救ふに無觀をもてすべし」と。終に佛說祖語をもて淸淨觀の眞正を示す。其の中に阿含の用酥の法、心の勞疲を救ふ事妙なりといふ一條、師其の目を請ひ問ふに及びて、乃ち曰く、「行者定中、四大調和せざるを覺えば心を起して此の想を作すべし。たとへば、色香淸淨の輭酥。如二鴨卵大一頂上にあり。(私云、酥は牛羊の乳を以て造り油に和す、諸瘡を治すといふ。凡膏藥のごとし)其の味微妙而遍く頭を潤し、やう〳〵下に及び、肩臂兩乳胸膈肺肝腸胃脊梁臀骨次第に注ぎ將去る。この時胷中の五積六聚疝癖。塊痛隨レ心降下し、水の下に就くがごとく、歷々として聲あり、遍身に流れ雙脚より足心に至りて卽ち止む。行者再び此の想を作すべし。彼の浸〳〵として潤下る所の餘流積み湛へて、世間の良醫の種々妙香の藥物をもて煎湯として浴盤の中に盛り、我が臍輪より以下を漬蘸がごとしと。此の觀を爲すとき、唯心の所現の故に、鼻に希有の香氣を聞き、身根妙好の輭觸を請け、身心調適す。此の時積聚消融腸胃調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を增す。怠らずんば何の病か治せざらむ、何れの仙か成らざらむ、何の德か積まさらむ、何の道か充たざらむ。其の効の遲速は、行ふ人

老子―周の老聃の作、虚無を説く
金剛經―金剛般若波羅密
扁蒼―扁鵲と蒼公、支那上古の名醫
地雷復―復は周易の卦の名、次の泰も卦の名
山地剝―剝も周易の卦の名
臍輪丹田―臍の下一寸許の處、體氣常に此處

如し。太布の衣を掛け、輭かなる草の席を敷き、机上に中庸、老子、金剛經を置くのみにして、飲食の器、夜の衾も見えず。凡風致清絶人間にあらず。魂怖れ、肌戰き、謹しみて病の由を告げ救ひを乞ふ。初知る所なきを以て辭すといへども、請ふ事休ざるに及びて遂に手を捉りて九候を察し、五内を窺ひて後、額を攅めて曰く「已哉。理を観る事度に過ぎ、終に此の重症を爲す。針灸藥の三物をもて救はむとせば、扁倉といふとも能く爲すべからず。公今内觀の爲に害せらる。つとめて内觀の功を積まずば、終に起つ事能はじ。是地によりて倒るゝものは、地によりて起つの謂なり」と。遂に醫經を引き道書を擧げ、示す事丁寧反復す。其の要、「五陰居レ上。一陽占レ下。是を地雷復といふ、冬至の候なり。眞人の息は踵を以てするの謂、三陽下に位し三陰上に居す。是を地天泰といふ、孟正の候なり。天得レ之。則萬物發生の氣を含み、百草春化の澤を受く。至人元氣を下に充たしむるの象、人是を得れば營衞充塞、氣力勇壯なり。反レ之則五陰居レ下一陽上に止る、是を山地剝といふ。九月の候にして、天人ともに枯槁搖落の象なり。かゝれば眞氣を臍輪丹田に藏し、歲月を重ねて守一無適なれば、長生久視の神仙なるべし。浩然の氣を養ふといふも亦是なり」と。こゝにして禪師「姑く禪觀を抛下し、努力て治を期せむ」といふ。子

脱洒せず—俗を脱せず
精彩を著け—悟をひらき

白幽子

白隱禪師初め既に一隻眼を具すといへども、全く脱洒せず、自からおもへらく、急に精彩を著け、一回捨命し去らむと、猛く工夫を凝す事一月、寢食を廢するに至る。終に心火逆上して、肺金焦れ、耳は溪水のあたりを行くがごとく、脚は氷雪を踏むがごとし。肝膽弱りて物に怖れ、夢にもうつゝにも、あらぬもの眼にうかみ、汗生じ、涙絶えず。驚きて醫療を盡すといへども、すべて驗なし。或人いはく、「洛東白川の山中に巖居せる人有り、白幽子と名づく。壽は二百歳にも過ぎたらむや知らず。是をのぞむに愚なるがごとし。山深く住みて人にまみゆる事を好まず。行く時は走りて必避く。里人專ら稱して仙人とす。もと石川丈山の師にして、精しく天文に達し、深く醫道に通ず。若し禮を盡して問ふ者あれば、希に言を出し示す所あり。退いて考れば大に利有り」と。こゝに於て、寶永七年庚寅正月、美濃の國より立ちてかしこに趣く。山深く入る事二里ばかり、樵夫に路を尋ね、雲を分け岩を傳ひ、辛くして至りつゝ見れば、洞口に蘆の簾を掛けたり。透間よりうかがへば、目を閉ぢ端座す。蒼髮は垂れて膝に至り、朱顏うるはしくして棗の

禪林―禪宗の寺

事もなく、來る客もなし。おのれ〳〵が心に任せて、誦經、看書、念佛、座禪、障る事なく靜に有りしが、或日和尙命じて、卽日舊里の甥を呼び來らしむ。其の間二里ばかりなれども、とみの事とありしかば、とく來りしに、和尙曰く、「他の事にあらず、老僧明日は逝すべし。永き訣を告げむため、且年比資料の爲に預り置ける金、此の數は某の寺へ祠堂に充つべし。それ〳〵は此の兩僧に與へよ。一金といふとも、俗家に留むべからず。法財なればなり」と。甥大におどろき、「今日微しの恙も見え給はず。如何に斯はのたまふか。されども、もしさもおはさば、妻子もまうでて御別を惜み奉らむ」といふ。和尙首をふりて、「人入りたちさう〴〵しからむは益なし。汝も亦とゞまるべからず、此の外また云ふべき事なし」とて、しひて歸らしむ。さて沐浴し、頭を剃りて曰く、「此のまに棺に納めよ、死體を兎角扱ふこと勿れ」と、其の日常のごとし。明日に至りても、朝粥、齋飯等を喫し終りて、午時ばかり、端坐口稱眠るが如く化す。齢七十二三ばかりとぞ。其の雪丘は近江八幡正宗寺といふ檗門の禪林に、一夏勤めける僧にて、美濃に隨侍の後、又來りて、其の寺の虎溪和尙へ物語りし趣なり。今を去る事凡四十年前となれば、寬延の比なるべし。

子昂―元の趙孟頫、書畫に名あり

八十華嚴―大方廣佛華嚴經八十卷、

印章を刻するに名あり、詩を好めり。書は子昂を學ぶ。洛東岡崎に住庵せられし時は、同宗の僧終南とともに、風流の一雙と稱す。予も親しかりしが、後に伊勢に歸り、中間村淨光庵といへるを創し、そこにて終られき）

美濃隱僧

美濃國某山中（地名失）に、四十六年幽居不出の僧あり、靈巖和尙といふ。淨土宗にて、京師知恩院丈室に侍りしが、此の山中は其の郷里に遠からぬ所なれば、歸りて後不出の願をたてて引籠れり。はじめは何とやらむ世間の戀しきやうに覺えて、或時は堪へかね、松の枝にのぼりて望み見るに、異なることもなし。されども猶心動きて、かゝることと折々なりしに、一とせばかり住み馴るゝほどに、其の念永く絶えぬと語られしとなむ。常に八十華嚴を見る。終りてはまたはじめ、間斷なく馴れぬる故にや、二日に一過し終る。日に四十卷なり。夜も座ながらにいぬるともなくて、微音に念佛の聲す。檗宗の僧雪丘といへるが、如何なるしるべか有りけむ、其の庵に到り、此の和尙の肉姪の僧共に隨侍せる事一年、其の間言を交ふる日少し。二時の食をとゝのへ進むる外に、又あつかふ

稟賦—生れつき

さし入るゝなり。冬三月は十二三日、他月は六七八日も變らず、六七の暑月は、四五日過ぎて上水を取捨て、新なる潮水、米皮糠硫黃も初の半ほど入るべし。諸病にさはりなし。

右印施の儘を寫す。翁歿後四十年に向とし、今は世に殘らねば、因に記して世を惠むの志を嗣ぐのみ。翁はおのれがゆかりなればなり。（私云、浴湯は遇不遇、その稟賦病症をはかるべし。凡實症にはよろしくして、虛症にはよろしからず）

○松本馱堂は同鄕の人、外科を業とす。通庵と友とし善し。參禪と豪放の氣象も相似たればなり。其の室中に通庵ごとき友人の像を圖して、常に相對する思ひをなすといへり。觀音を信じ、自稱して此觀音といひ、後には又此阿彌陀といふ。其の髭手三束に及ぶも。「一旦石山に祈りて此の如し」と語られしとなり。尤風水によし。水なき家は此の人を請じて卜を乞ふに、自から其の場を歩み試み、杖をたてゝ「こゝを堀るべし」といふ。指揮のまゝに穿てば、必淸泉を得ぬ。また老いても健なる人にて、熊野に至り、人參の出づる事を考へ、官にまうして堀らしむ。熊野直根は此の人に初まるとなむ。尙傳ふる話多き人なれども、今具には記得せず。從來人知れる悟心和尙は此の人の子なり。（悟心は

未刻―今の午後二時

びしに、同門の人死にたれば、その家に弔し、突然として牌前に至り、平語の哀なる所を心ゆくばかり語りて、直ちに去る。始終家人に一言を交へず、「死者を悲しめども、家人には一面の識なければ」といへり。寛延末年七月二十日八十歳にして家に終る。午時自ら脈を按じて曰く、「命終今一時なるべし」と。果して未刻に逝す。辭世に頌あり。

本來宗風。無端建通。眼光落地。自性眞空。

但馬城崎上野草津 溫泉變方

助氣溫體。破瘀血。通壅滯。開腠理。利關節。宣暢皮膚肌肉。經絡筋骨。癥疝。痱痙。痺痿。手痺。脚痺。攣急諸痛。消腫。治痔。微瘡。下疳。便毒。結毒。登漏。疥癬。諸惡瘡。撲損。閃肭。婦人腰冷。帶下。大凡痼疾。怪痾。洗浴多效。

潮水五斗（潮水なき國々にては、常の水は鹽一掬入れて用ふ。効同じ。）　米皮糠壹斗

鵜目硫黃（六百目、細末にして布の袋に入れ、糠を煎じたる湯の中へふり出す。）

右湖水四五斗の內を貳斗分け、米皮糠一斗を入れ、糠の赤くなるまで煎じ、其の湯を飯簀にて桶へ漉し、据風呂へ入る。一日に三度づつ浴す。風呂の湯熱き時は潮水

死靈―死人の怨念

山村通庵　松本駄堂

法橋通庵、名は重高、伊勢國松坂の人、北畠の庶流なれども、其の先同國山村に住せしよりこれを氏とす。爲人無我にして正直、禪に參じ、又茶、香、瓶花のごとき風流の技藝に通ず。醫は後藤左一に學びて、自から右一と名乘る。薙髮の後、通庵といへり。其の言に曰く、「師は灸治に心を盡せり。我は溫泉の効を試みむため、諸國に遊び、氣味功能を熟驗す、但馬城の崎、上野草津は、其の德ひとしく、天下に類なし。然るに路程遙にして、或は到り難きものあり。是が爲に變方を制す」と。卽印施の方あり、後に記す。老いても志氣衰へず、さわやかなる人なりしが、同鄕殿村氏なる人の家婦、死靈のために惱まされて、病む事數年の間（此の靈の事甚奇話なり。瓶原貞福寺洞泉律師彼の國に下向の時、加持力にて靈事狀を說きて去れるまでの事實、その弟子惠隆の記に委し。是はその時侍座せる人にて、予相識の僧也）醫至れば罵り狂ひて敢て近づけず。唯翁至る時其の閾を越ゆれば、病人室中ながら知りて、大に懼れ、診脈按腹をもうけたるなど、其の機鋒を見るに足り、又直にして不拘なる事は、京師に在りける日、平家を語る事を學

波臣―舗

時、窮樂是を聞きて至りとぶらひて賑はゝしむ。時に翁謝せる偈、偈語に見ゆ。

無茶無飯竹筒空。恰似波臣車轍窮。
多謝特來親賑濟。箪瓢充得養衰躬。

或時大なる酒樽をするゑて、其のわたりの男女の貧しきものをつどへて、酒飲ます。そこへ往きたる人見て、「何事ぞ」といへば、「屛風書きてやりつる報いに人得させたれば、飲する也」といふ。えも知れぬ歌ども謳ひて興に入る。はてに樽の下にしかれて紙にするゑたる金十方を見つけて、「よき肴こそありけれ」とて、配りてみなとらせ盡しぬ。萬の態唯かゝりしとぞ。其の知己なりし近江の佃房が持たるを見れば、窮樂好の者と題して、

一烟草、相撲、競馬、錢、酒は予が糧なれば計へず。

又嫌ひのものもありしが、その一つには、理窟、餘は今忘れたり。此の佃房年々草といふ年毎の歳旦集に、いつも此の道人の兩節あり。其の中にて記得たるは、

正月は只幾年もおもしろし

うかくと我が宿へ來る春いとし

其の淡しくをさなき氣象を見るに足れば記す。

窮業道人自画讃

圓通―觀世音菩薩の尊稱、圓通大士

くせもの―畸人の

莫逆も交―意氣投合したる友

雙丘―山城國愛宕郡

加賀圓通

師は黃檗獨湛禪師の法嗣なり。觀音菩薩を信ずる事人に過ぐ。かゝれば卽圓通を稱とせるにや。極めて無我の道人なり。ある錄の跋を乞はれて自書す。艸書の意にまかせたるものにて、讀めぬ所々多ければ、人携へ來て問ふに、やがて打返し〳〵見て、「吾も亦讀み得ず。吾が筆は、弟子の某が能く讀むなり。それに讀ますべし」と云ふ。ある時、京にして訪ふべき家も名も忘れて、其のあたりに行きて、「加賀の圓通が行くべき家はこゝにや、こゝにや」と尋ねあるかれしも、をかしかりしとぞ。

龜田窮樂

龜田曳尾は書をもて鳴り、窮樂の號をもて知らる。ものをものとも思はぬくせものなりし。賣茶翁とひとつ小路に住みし時、莫逆のまじはりを結びて、彼は茶を飮み、是は酒を飮む。時ありては酒飮まぬ賣茶翁、壺提げて酒買ひに行ける日もありけるとぞ。後賣茶翁雙の丘の東畔に轉居し、梅雨連月に及び、茶を買ふ客なし。錢筒傾盡して糧絕えし

道人大なる筆を持たざれば、軒にかけし簾の萱をとりて、打ひしぎて書けり。さて彼の國に渡したるに、彼方にもかばかりの手筆なしとてかへしければ、直に其の太守の額となりぬ。薩摩の國に到りし時、金五片賜はらむと乞ひつゝ、これをもて蜆積みたる舟五六艘を買ひて、ことごとく海に放ち、「吾は今日仁を行へり」と悦びしとぞ。(蜆を放つは風狂の一事と人はいふべけれど、此の翁佛乘を學びて思ふ所あるか。蜀の法聚寺の僧一夕門人にいへらく、「門外に數萬人、烏帽を著て貧道に向ひて命を救はむことを乞ふ。早く出でて見よ」と。門人急に門を開けて見るに、十餘人蝨を擔ひて市に行くを見る。盡く是を買ひて放つと、蜀記に見えたるよし。また微細なるものは命多し、殺すべからずと、龍舒居士も說けるよし、六如僧都の放生功德集に出し給へるにかなへり。私に思ふに、官なき者は廣く仁を行ふ事はかなふべからねば、大小をいはず、物の憂を救ふは、身に應じたる仁なるべし）此の人、生涯印章を持たず、書きたる者に印を施したるなしとなむ。廣澤はこれが門人なり。

貧道—僧の自稱

廣澤—細井廣澤德川時代の唐樣の書家の祖

著述、梅華無盡藏と號す。近年刻に付けり。藥方古によらず頗奇なり。藥名も一家の隱名を用ふ。

雪山

雪山は北村三立といひしかども、世に號をもて知らる。肥後の人にして、諸國に遊ぶ。文筆ありしかども、獨り書名高し。書法は漢僧雪機に學びたり。初赤貧にして、屋破れ雨漏るに、沐浴盤を高く釣り、其の下に座して書を學べり。あるとき肥前長崎の橋下に一夜寐て、あくるあした、あたりの酒家に入りて酒を飲む。あるじ其の價を乞ふに、「なし」といふ。其の家を問ふにも亦「なし」といへば、「さらば何する人ぞ」と問へば、「もの書く者なり」と答ふるに、主もすねたるものにて、「いで此の比の閙しきに、酒賣る日記書き付け給はれ。今の酒の代に充む」といひしかば、元よりさして志す所もなければ、日を重ねて止り、日毎に書きつ。さるに漢法の草書なれば、いかにも讀めざりしを、流石に能書なりとは知りけむ、其の人柄も無我なるを見て深く信じ、遂に長崎に住ましめけり。其の後隣國の太守、額字をもろこしへ書きにやり給ふとて其の草案を書かしめらるゝに、

神其通之—管子の語

永田—一本長田ヲサダと訓す

藥籠—藥を入るゝ箱

大樹君—德川將軍家、こゝは家光

神解の號は思之思之神其通之といふ古語に因て、蘭嶼の題する所にして即序あり。其の外國老の大夫を初め數醫の序あり、未だ印行せるを聞かず。有益の書と覺ゆるにいかなるにや。

甲斐德本

德本は永田氏、伊豆武藏の間を行きめぐり、藥籠を負ひて、甲斐の德本一服十六錢と呼びて賣りあるく。江戸に在りける時、大樹君御病あり、典藥の諸醫手を盡せども、効驗なかりけるに、誰か申しけむ、德本を召して療せしめ給ふに、不日にして平がせ給ふ。されば賞としていろ〳〵の物を下し賜はりけれども、敢て受けず、唯例の一貼十六文に限る藥料をのみ申し下したりければ、其の淸白を稱しあへり。されば、上にも知し召しけむ、何にまれ願ふ事あらば申すべき由頻に命ぜられしかば、「さらば我が友のうちに家なきを悲しぶ者あり。是に家を賜はらば、なほ吾に賜はるがごとくならむ」と申しゝ程に、即甲斐國山梨郡の地に金を添へて賜はりぬ。やがて其の者を呼びて取らせ、其の身はまた藥を賣りて行方知らずなりぬ。彼の地は德本屋敷とて今も殘れりとぞ。此の老の

自失せられ—氣ぬけせられ

傷寒論—漢の張仲景の著

たまへ」と乞ふに、「それは今茶を點じて參らせたるなり」と云ひしかば、さしもの季吟も自失せられしとかや。（此の二條は晋子其角が類柑子にも見えたり）

○此の後三代同じく涼及を名とす。次代は其の子三代四代は兄弟にて嗣げり。次代か三代かよく知らず、就中放蕩の人ありて、花街に遊ぶを事とし、日を經て歸らず、然も其の間と雖も傷寒論を手を放たず。毎紙爛れて讀むべからず。餘りの放蕩にて、一旦父子の親を斷たるれども、其志を知りて免されたり。病家に招かるゝに、著るべき衣服なく、裸體にて籃に乘り行きし事もありつるとぞ。第四代名は元函、是また放蕩にて初め赤貧也。或時は人を療していふ「此の謝儀を竊に我に與へ給へ。わが家にもて來て妻に知らせば、米鹽の價にせむ、惜むべし」と。此類の話多し。後蘭嵎吹擧により、紀藩に召れて侍醫となる。其の家數世の說を大成して、傷寒論神解を著はす。唯大陽三篇のみ。其說に曰く、「陽明篇以下所ㇾ說は、直中にして、所ㇾ謂中寒なり。傷寒傳經は、此三篇に止まる」と。（大陽篇の內、他篇の語交るもの、他篇の內に大陽篇の語攙入せるもの有りとて正せり）又曰く、「未ㇾ爲ㇾ次傳ㇾ者。標ㇾ之以ㇾ大陽病ㇾ已爲ㇾ次傳ㇾ者。標ㇾ之以ㇾ傷寒ㇾ」と。實に一家の說といふべし。其の

承氣湯—嘔吐又は祕結症の藥

侍兒—侍女こしもと

て奉るに、瀉下して後御惱速に快復まし〳〵ける。これ承氣湯を奉れば、もし衆醫にはからむには必肯かざる事を思ひけるとぞ。又或る時、急に召さるゝに、折ふし碁を圍みて參內遲々に及び、頻に御使を下さるれども、猶局を終へざりしかば參らず。是に罪せられて京師を逐はれ、大津に蟄す。然も程なく召し還されぬるとぞ。一時某國侯の病によりて其の國に至り、滯留數日に及ぶ間、請ひていはく、「あたりに召し仕ふもの女ならでは柔順ならず。願はくは、借し給はれ」と。卽日侯の侍兒容色あるもの兩人を與へらるるに、「よし」といひて、喫茶喫飯唯これを使令し、夜も左右に臥さしむ。然れども情を通ずるに及ばず。ほどなく侯の病愈えて京に歸る日、其の兩婢を請ひて伴ふ。やがて今度の謝におくらるゝ所の金をもて他に嫁せしむ。一日嵯峨角倉氏に治療に趣くの路次、大樹の櫻を見て購ふに、價甚貴かりければ、彼の家に請ひて其の金を借り、數多の人に荷はせて我が家に歸る。さて庭によこたはせたれども、植うべき地なければ、人々「如何にせまし」とわぶるに、「よし〳〵たゞさながらおけ。寐ながらみる櫻とせむ」と云ひけるもをかし。翁茶事を好む。一日百貫の茶碗を買ひしと聞きて、北村季吟見に行かれたりしが、まづ樣々の物語し、例の茶を喫して後、「祕し給ふものならめども、彼の物一日見せ

にありて書を講ずる役

蘭嵎―紀州藩の儒士、伊藤仁齋の第五子

御惱―至尊の御病氣

著はす所は、右二紀行の外に、其の家集を和歌往事集と名づく。詩歌は紀行の印本なるに譲りてこゝにはもらせり。其の氣象の秀をいはゞ、盤桂禪師と儒佛を論じて戯によめるといへるに、

常にゆく道なくばこそ世をうみの蜑の乘りたる舟も賴まめ

此の女の事に聞ける話もあれど、さだかならねば記さず。

有馬涼及 附 子孫三人

有馬氏、涼及の名、父子兄弟に及ぼして四世醫を業とす。伊藤氏と四世の交りあるよし、蘭嵎の傷寒論神解の序に書けるは、仁齋先生の考より東涯、蘭嵎兄弟を經たるなるべし。世々國手の稱ありて世々不拘なり。其の狂態傳ふる所の笑話多し。初代涼及臥雲と號す。又存庵といふ。

後水尾院特に徵して御醫とし、階法印を賜ふ。御療の故事は、衆醫評を經て後御藥を奉るを、一時帝御惱甚しき時、翁診し奉りて曰く、「我よく治し奉らむ。然れども衆議を經るとならば能はず」と、止む事を得ず翁が意に任するに、頓て調製し、手づから煎じ

（子なきをもて祿を辭せる一條は、丹波出雲の社司其の族にて語るところなりと）

其の父朴翁、初め伏見の宮に仕ふ。致仕の後、祖父の故址をもて、千年山の麓尾口村に隣りて抱琴園を修理し、老を安んず。山家の記といへる一篇、年山打聞に出づ。假名にて文章いとよし。陶靖節を慕ひ、歸隱の圖を自から壁上に畫き、其の集を左右にす。又佛理に參し、樂を好む。祖の時其の圖に八ッの景を名付けしが、荒れ行く所も見ゆるにつきて、是をも自からうつして子孫のために殘すとて、

千年山八のさかひを寫繪の是だに殘れ問ふ人のため

考かく凡人ならざりしかば、息兄弟の傑出せるもうべなり。

井上通女

通女は、讃岐國丸龜の士井上儀右衛門某の女、幼より書を讀み、詩歌ともに成人にまされる才女なり。十八の比ほひ、其の君の母君に侍して江戸に行く。此の時の道の記を東海紀行と號く。九年を經て歸る時の記を歸家日記といふ。後三田茂右衛門といへる士に嫁し、傳右衛門義勝を産む。是侯の侍讀の儒臣となり、才志論、養子訓等を著す。通女

陶靖節―晉の高士、陶淵明其の作歸去來辭名高し

侯―讃岐國那珂郡丸龜領主、京極家

侍讀―君側

安藤年山 附朴翁

年山安藤氏、諱爲章（初名爲明）通稱新介（初は右平）本國丹波千年山なるをもて、自ら年山を號とす。其の兄内匠爲實と共に儒を學び、父の由緣をもて共に伏見宮に仕ふ。後又同じく水戶に參りて、彰考館の寄人にて、日本史及禮儀類典の撰にあづかる。兄は七百石、弟は三百石を賜ふ。兄の人がらはよく知らず。爲章は國學をも好み、詠歌は中院内府道茂公御門人なり。源義公、僧契沖に萬葉の註を求め給ふに及びて、命を受け、しばしば浪華に至りて其の說を受く。されば、契沖の行實を著して、其の著書年山打聞に記せり。今此の冊子に取れる所なり。凡此の打聞のうちに著はす所をもて、其の學術も、人と爲の溫恭もはかり知らる。又紫女七論を出して、式部の賢操才秀を褒め、源氏物語の大意をも委しく論ず。惜むらくは梓に上らざれば、見る人少なし。其の歌集を千年山集といふ。尤此の人に於て擧げいふべきは、家祿を益し賜はらむの命有りしとき、産子なきをもて辭し、終に他姓を養はず、身歿して家も又絕えたりとなむ。人のなし難き所にして、吾が天を安んずるの節義稱すべし。兄の家は今猶彼の府にありて、子孫相續げりとぞ。

日本史―大日本史
禮儀類典―水戶德川光圀卿撰

湖南—近江國琵琶湖の南畔

一石一字—法華—一石に法華經の一字つゞを書く事

警策—注意を與へて

辭し、剃髮し禪を宗とす。其の時の口號、

多年負屋一蝸牛。化做蛞蝓得自由。火宅最惶涎沫盡。
偶尋法雨入林丘。

涼風にきゆるを雲のやどりかな

湖南の風景を愛しけるにや、粟津の龍が丘に庵を結びて佛幻庵と號く、今土人岡の堂といふものなり。もと詩文を好みしが、又芭蕉の翁に從ひて俳諧を能くす。されば此の庵も翁を開祖とす。其の滅後三年籠りて、一石一字の法華を書寫し、經塚に築けり。寐轉艸といふ書を著して、道俗をいましむるものは、名にも似ず、寐ながらはよみ難き、殊勝のものなり。此の師唯俳諧をもて名を知られけるに、かへりて其の清操はかくれたるべしと惜む人もありき。俳諧はその旨とする所にあらざればこそ、芭蕉も此の道にのみ遊ぶ人ならば、其の至る處知るべからずと評せられき。其の門人の發心せるを警策して、

蚊屋を出て又障子あり夏の月

など、其の意凡ならざるを見つべし。元祿十七年二月二十四日、其の庵に寂す。

丘の堂図

序文猶かゝる議論多く、本分には近古制せられし詞を題して例を引き、はた制の詞とてたる一冊、その外詞の注の證歌、主ある詞などいふも皆新古今の歌の事のみを書きて、他の事を用ひざるは、新古今集ばかり知りたる人の仕出したる事のやうに覺ゆなど云へり。歌書におきては、古より近世に及びて、甚博識と見ゆ。書きざまは通じやすからむ事を思ふ故にや、俗言にて、又くだくだしき所もあれど、其の見所は拔羣のものなれば志ある人は求めて見るべし。其外著書の名目、おはづかし。茂安がひとり言、僻言しらべ、庄九良物語、紫の一もと、若紫など、梨本集の奥にいでたるは、世に傳りてありや知らず。梨本集を著す時元祿十一年戊寅五月、齡七旬にあまりて、赤貧の由を記すはいかゞ有りけむ。「無學無智にして道理に通じ、歌學をもつとめざれば、歌をよむことなし」といへるは、卑下にして、自負なり。奥書には露寒軒とも見えたり。

僧丈艸

丈草、俗姓は内藤、世々尾張犬山の臣なり。繼母に仕へて孝あり。弟はその生める所なれば、家を讓りて父を慰めむと謀り、右の指を疵付けて「刀の柄握りがたし」とて仕を

六條家—藤原顯季の流
二條家—藤原爲氏の流
冷泉家—藤原爲相の流

五節句—人日（正月七日）上巳、端午、七夕、重陽の五箇の節日

詞に多く關をするゑて、人の趣きがたきやうに道を狹くする事は、以ての外の邪道、歌の零廢すべき端かと思へども、歌の道不案内なるに、能き師もなければ覺束なさに、此の冊を思ひ立て、不審を書き記すものなり。（中略）惣じての事、六條家の説をば二條家より言ひ破りて用ひず、二條家をば冷泉家より誹り、其の後には爲世卿の門弟、爲兼卿の門弟、爲相卿の門弟、其の家々を立むとて、他を誹り、我が意地のままに利口をたつるより、色々の僻言出で來たり、又は其の師匠の物語に假令ば、ほのぼのといふ五文字は人丸の名歌の五文字なり、然れば心得してよみ候へ、などといはれたるを、其の弟子覺書にして置き、又は物語したるを、其わけをば知らず、讀むべからざる五文字と制せられしといひ傳へて、今はよまぬことになり極れり。つゝとまりの事を法度なりといふは、たとへば其の家の仕置に、酒を呑むべからずと法度にだて、物見すべからずとあるに同じ。此の法度なければ、酒を過し、遊興にばかりかゝりて、作法のあしくなる故なり。然るに正月、又は五節句にも、祝言珍客にも、酒は家の法度なりとて出さず、正月の萬歲、伊勢の代神樂の太鼓打を見るなど制するごとくに、つゝどめをもいふは僻言と思へども是非なし。（下略）

本名たけそか—共に萬葉集歌にある古語、本名はもだしなしの意、たけそかたまたまにの意
格式—法則
正木のかづら—蔓草の一種、長くと云ふ語の序

古今集の比よりも萬葉集によみたる詞の中にても、「いづくの戀ぞつかみかゝれる」「こゝだく待てど君がきまさぬ」などやうの詞を用ひず。其の比さのみ人のつかはぬ、本名、たけそかの類、又こは〴〵しくて聞きぐるしき詞をよまざりし故、是より詞の善惡は出來たる事なり。本來の一物に善惡邪正はなけれども、陰陽と分れ、淸濁輕重天地となりては、善惡勝劣ある道理也。然れ共人の心まち〳〵なり、好む事を是といひ、好まぬことを非といふよりして、誠の善惡は脇になりて、私の好惡の沙汰になりしより、僻言多く出で來りて、それより末々には、先達の僻意を道の格式として、ます〳〵僻言を取立てしより、我意地儘に利口をたて、よろしからざる例を引き、あるまじき遠慮をいひて、廣き御惠み、賤の男賤の女までも、此の道におもむかむに何の障もなく、廣々と通り、正木のかづら永く傳り、近くは人の心を慰め、憂を忘れ、遠くは家をとゝのへ、國を治むる中だちと、思し召して、撰集をも仰せ付けられたる事なるに、何れの比よりか、歌の詞に制といふ事を書き出し、五てんの詞、主ある詞、よむまじき詞、遠慮すべき詞、俊成の好みよむべからずと宣ひし詞、定家の不庶幾と宣ひし詞、にくしといふ詞、いとしからずといふ詞、といひて、

む、名は恭光、通稱八兵衞、寶永三年歿、年七十八、

制詞｜用ふることをと禁ぜられたる詞

琴柱に云々｜物事に活用する事を知らざる喩

陳渉｜秦の二世元年亂を起す是より秦滅ぶ

いとも心得ぬ事のあれば、こゝにはもらしつ。かくれ家百首とて、其の相知れる人々よめる歌をあつめたるものあり。其のはじめに出せるは、

すむ庵を世の人のかくれ家といふをきゝて、

人しれぬ身に任すればおのづから求むともなき隱家にして

梨本といふは、もとより其の庵の前に山梨の木あれば、

のがれかね世にふり果てし老の身は隱れ住むべき山梨の本

もとめぬはしといへるよしは、源義豊といへる人のもとより、

隱家は山ももとめず世をわたるためにやかけし前のたな橋

とよみておこせたる返事に、

わが庵は山ももとめずたなはしの短く見つる世を渡るほど

といへるによれりとなむ。此の人梨本集といふものを著して、制詞の類を擧げて、琴柱に膠すべからざるを論ず。凡歌道に古學を稱ふるは、此の人近世の魁にして、秦の陳渉に比すべし。さればこゝに其の說を記す。梨本集は一旦江戸にして梓にのぼりしかども、その本、世に流布せる事稀に、知る人尠ければなり。其の序にいはく、

茂睡―初め戸田氏、後渡邊氏に改

めて謝して歸せり。其の後横堀邊にてやらむ、磁器を買はむとて、とあるみせへたちよりしに、内より一老婆出でて、戸田氏を見てさめ〴〵と泣く。驚きて「何事ぞ」といへば、婆云ふ、「公は知り給はぬ事なれば不思議におぼしめさむ。吾さきに愛せる孫ありて、病重かりしかば、公を迎へしに、拾人に限り給ふ病人闕なしとておはしまさざりしが、孫は終に身まかりぬ。時節にてもあるべけれども、もし公の手を經たらば生きもし侍らむにと思へば、公の御かほを見るにつけてうらめし」とて、涙せきあへず。こゝにして戸田氏甚感慨して曰く、「吾あやまてり〳〵。もとより數人に心を配り難しといへども、拾人と數を限れるは、吾あやまりなり。然れども吾老いぬ、今更此の限を越えば、老いて利を貪る心生ずといはれむも口惜し。吾は是にて果てむ」といひしが、後いくほどなく歿せしとなむ。是は物産の門生、したしく見聞く人の物語なり。

隱家茂睡

茂睡は江戸御家士にて、隱遁せる人なり。隱家とも、梨本とも、もとめぬ橋とも、名を負へるは、そのよめる歌によれり。されど、其の隱家のもとの歌は書きあやまてるにや、

東備―備前の國

不起の症―不治の病

戸田旭山

旭山戸田氏、自號无悶子、通名齋宮、東備の人、浪華に來て、醫を業とす。門に艸醫戸田齋宮と標せるもめづらし。或は唐服に似たる物を著て、劒を負ひて歩きし事もありしとなり。本艸に委しく、醫生のみならず、好事の士門人となれるもの多し。香川太仲、秀庵が藥選を難じて、非藥選を著し印行す。爾れどもまた秀庵の才を愛して、その子はこれが門生とせり。好みすれども其のあしきを知り、憎めども其のよきを知るといふべし。醫療もとよりよくすといへども、病客拾人に限りて、此の數闕ざれば、また他人を療する事なし。故に貧なり。或時攝津國高槻近邑の豪農、物產の門人にて常に出入する人、其の母の病の診察を乞ふ。請に應じて至りしが、不起の症なれば辭して歸らむとする時、近隣又親族の病人これかれの診察を乞ふ。四五人は診したるが、遠く迎へたる人なれば、此の折を幸に尙醫治を乞ふもの多し。こゝにして戸田氏怒を發し、主人に對し罵りていふ「子は不孝者なり。不起の母を題して、えも知れぬ人々の醫治をせしめむとするか」と元來癇症にてよく怒る人なれば、大きに顏色を損じたれば、やうやうになだ

東垣丹溪—共に元代の神醫
增廣口決集—友松子の著述
商量—議論
含糊に忍びず—曖昧に付するに忍びず

諸大老贈言して美せらるといへり。その著述を見るに、實に博學强記なるが上に、治療の才前後その類稀なれば、其の徒の記せる旨、私せるにはあらじ。凡當時は醫名ある人といへども、東垣丹溪の窩窟をいづる事能はざる間に、獨り長沙の長ずるを規範とし、下明末の諸家をも採りて、佐使とす。其の言に曰く、「如爲人治療則不可不全讀仲景之書也。」又文字の格法を明にせる所は增廣口決集に、中山三柳の文章文字を改正せしに見ゆ。加之多能にして卜筮風鑑地理星命の學のごときも、門人の才を量りて是を誨ふとかや。或は醫人と商量、則告之に親疎を不別、其の非を見ては人に讓らず、覿面に辨明し、其の誤りを聞きては、含糊に忍びず驀直に討論す。唯此の人に補なくして、方寸に愧づる事を恐ると也。故に世醫或は狂とし、或は直とし、且譽め且毀るとかや。門人の請によりて所著、删補衆方規矩、評議纂言方考、增廣口決集等、皆四十未滿の所爲なり。後又方考繩愆あり。凡著述、他の書によりて吾が意を述ぶるものにして、一家の成書なし。是卽一家の所立なるべし。尙此の人の生平につきて、聞き傳ふる話も多けれど、疑はしきをもてこゝに錄せず。

周正一眼懸

こゝのそはかしこの谷に住む里は必ず隣ありとしもなき

これは下の句に、おもひよらず論語の語を用ひられしが興あり。

はつか月を

老いらくの末はつかなる身にぞ思ふ今より月の宵々の影

ことに殊勝にぞ。百歳までもと見えしが、老健のたのみがたき、九十四にて歿す。

北山友松子

友松子は、北山氏、通名壽安といへり。長崎の人、唐人丸山の遊女に會して産める所なりといふ。醫をもて出身せし時、その系圖を問はるゝに、たゞ長崎遊女の子とのみ書き付けて出したる器量を、世に稱せしとぞ。其の徒の記せるを見れば、其の爲人名を名とせず、利を利とせず、能く善をよみし能く惡をにくむ。性佛乘を好み、癖活人を嗜む。是をもて鼎湖の神書を閩の浮居に授かり、長沙の心法を浙の異人に傳へ、日に惟ひ夜に思ふ事三年、心融け、疑釋け、求めに隨ひて治を施すに、効驗桴のごとく應ず。未だ三十ならずして洛に至り、諸國の諸侯の爲、賓をもて優待せらる。又黄檗の開祖、及卽非高泉の

そは—山のとなりあり—論語里仁篇に德不孤必有隣

佛乘—佛經

活人—醫療

鼎湖の神書—黄帝云々—書を僧に受く

長沙の心法—漢の長沙の大守張仲景の祕術

黄檗の開祖—隱元師禪

高泉—黄檗第五世の僧

膳所―近江滋賀郡膳所

夕定晨省―朝夕、父母の安否を問ふ事、禮記に出づ

老子經の云云―老子第三十九章の語

大悲閣へは孫ばかりやりて、大堰の川邊に休らひ、花計り見てありしといはれき。膳所の親族の許へも折々歩にて遊ぶ。道悪きにも、足駄にて京中の歩行は苦とせず、唯老のひとり歩みを子息のわぶる故に、友を誘ひて何處へも行れし。眼もよくて此の比まで細字の寫本をもせられし。殊に歌を好みて、若き時は高松宰相重季卿の御門人にてありしとぞ。歌集は生存の日、予にも托せられて、一校合に及びぬるが、よき歌ども多かりしを、おほえず。中にも珍らしきが心にとまりしは、

女親に夕定晨省の孝ある人、宮仕へにより、かりそめに江戸に下るを歎きけるに、大義を示して餞別せらる。

たらちねに仕ふる道も二つなきこゝろにいそげ東路の旅

胡子無髭といふ古則を題して

よしの山花は一木もなかりけり峰にも尾にもかゝる白雲

老子經の車をかぞへて車なしといふことを

數ふれば身は小車のわれもなし何にひかるゝ心なるらむ

山家を

こゝらの人—數多の人

失ひては云云—孔子の語、禮失ふ時は之を野に求むと云に據る

法皇御封—靈元法皇の御領地

沓賣の生れかへりしなどいふ事をそへたりとは知りぬ。かのこつては木のみのやうにて、柴の葉のうらになりいづる者とぞ。このくつて鳥のこつて鳥といふがまさしきすぢなる事は、誰か思ひより侍らむ。千木といふものも、こゝらの人さまぐ〜にもてあつかひきこえけむに、是もまさしき筋をば遂に知り侍らざりしに、かく片田舍の山里にてならひ知り侍りぬれば、失ひては田舍にもとむるといふはかうやうの事にこそ。雲が畑といふは京より三里ばかりも北へ入りて、愛宕の郡小野の鄉の山里、法皇の御封なり。谷川いと淸く流れたり。香魚を貢として供御に獻るとぞ。

子文轉纔二歳の時父に別れしかども、其の意を嗣ぎて醫を業として京師に名あり。學文の名はさしも聞えざりし。六十餘にして近年歿せり。天民の說に、儒は醫を兼ぬべし。然らざれば、貧にして學卑陋に落つといへりとぞ。（私按ずるに、仁齋文集には儒醫の說ありて、儒を名とし、利を醫にはかる事を誚れり。所見異なり）〇因に記す。右門人の馬杉老翁は老いて健なる人にて、九十に近き比、嵯峨へ花見に步み、嵐山の奥大悲閣の開帳に詣で、明の日また岡崎の歌の會に行き、その明の日又孫に誘れて、再び嵯峨に遊ばれしが、今日は老人の達者だても見苦しとおもひて、

郭公の異名

くつて鳥—くつでこふ—沓を買ふと錢を乞ふと云ふ意、郭公の鳴くは、前生に沓賣なりし時か、なりの價を居けるにのなりを促すと催る也

とふい說傳

といふにいたりぬ。松山といふより七八里ばかり、ふかく入りもてゆく所なり。僧空海の住みたりし岩屋山つゞきたり。石道踏みなやみていたく困じたれば、山里に到りて馬を借りて乘る。口につきたるをのこ、物いふさま打ちゆがみて、こと國の人のやうなり。折節郭公の啼きけるに、「これは何鳥と知れる」と問へば、「是はこつてどり」と答ふ。歌草紙に郭公をくつて鳥といふ事を書きたり。歌よむ人もなみ〳〵は知り侍らぬ事を、かしくもあるかなと、「などて、こつて鳥といふぞ」と問へば、「あれきゝめせ、こつてかけたるかと鳴き侍るなり」といふ。「さてはくつでをこふといふ昔物語知りつらむよ」と、て、馬子にとり合せてろうじて笑へば、心得ぬかほつきにて、「こつてにこそ侍れ。沓代と申さばこそよ」とつぶやく。「心得ず。こつてといふものあるにや」と問へば、「五月の比柴の若葉にこつてといふもののでき侍る。此の鳥めらは、必ずこつてのいできはべる時にこそは、かまびすしく啼きどよみ侍る」とぞいふ。さて「此の鳥をほとゝぎすともいふか」と問へば、かしらをふる。「さらばこと鳥にほとゝぎすといふ鳥やある」ととへば「つひにしうけ給はらず」といふ。ほとゝぎすといふ名を知らぬ國もありけるよと、ともなふ人皆笑ふ。さてぞ歌草紙には、こつてといふ事を、あやまりてくつでと云ひなして

八十の伴の男の云々―百官有司の常に出仕する皇居

ろうじて―嘲弄して

きことわりいちじるくぞ知りぬ。八十伴の男の朝な夕なにいでいりつかうまつる宮居のわらぶきは、たかくこちたくふきわたしたれば、この木をもそのほどに合せて、ふとくたくましき木を高くそびやかして、あめにさゝふるかと見ゆるばかりにぞすめる。さてぞ高天原に千木高知りてとはいふなる。むかし今の人の心得がたき事にいひあつかひなやみたる事を、けふぞ思ひとりぬるよと、ひとりゑまる。さて「此の木の名をいかにいふにや」ととへば、「かつう木」とぞ。「いかでかつう木といふにや」と重ねてとへば、「かつう木にて侍れば、かつう木とは申侍るなり」と、ことわりも聞えぬこたへをしつゝこゑすこしとがりて、むづかしきかほくさして、柴打ちかたげつゝ立ちて行く。くだ〳〵しく問ふを。ろうじていふにやとあしく思ひ違へたるなるべし。今すこしよくも敎へよかし。になふといひ、かづくといひ、かたぐるなどいふことばを、このわたりにては、かつうとぞいふ。この木の屋の棟にうちまたがれるすがたの、かの肩に物をかづくさまに似たれば、かつう木とはいふとはさてぞ知られぬ。からすをどりやうの物をかつを木といふ。此のち木をば、そぎとも、さてはかつう木ともいふべきなり。此の木をかつを木ともいふは、かつうぎといふをあやまりていふにや。一とせ伊豫の國にまかりて、熊山

ふせや―低く小さき家

からすをどり―烏躍、茅葺の屋根の上に横たへたる竹、葺茅など束ぬる者

しかぐ\いらへもきこえず、むづかしのとひごととはらだちたるなり。山里人のかたくななるくせなるべし。入り行くまゝに見れば、げにもいとさゝやかなるふせや、つちかべに窻ぬり残したるあばらやまでも、大かたは千木をぞ揚げたる。猶ことわりもあらむと深くとはまほしきに、翁にあひぬ。かせぎにあふごかけて、道のかたへにやすむ。爪木に折りそへたるを見て、「是はあけびとやいふ」などいひよりて、さてぞとふ。指さして、「かれはなにのためにする事にか」ととへば、打笑みて、「わらにてふき侍るは、軒端よりゆひふせもてのぼりて、終の束ねはおそひ竹をかためとし侍るなり。されど、風強く吹きしきる比は、大かたは此の破風ぐちより吹きはなちはべるに、おそひ竹ばかりのかためにては、風のちからにかちがたく侍るに、此の木のおさへたるにぞ、風には吹きあげられざるなり。かはらや板ふけるやなどには、おのづからかゝるくだぐ\しき事はなくてもはべる。わらやはかくてぞ」など、恥かしげにいひけちつ。此のおそひ竹といふを見れば、長き竹を屋根のむねに三本ばかりならべて、からすをどりの下にぞ通れる、棟をおさへふせたるなれば、おさへ竹といふべきを、辭のかよへるにて、おそひ竹といふにや。此の山人のいふにぞ、ち木といふ物のかやぶきなどには、かならずまうけつべ

むれ〳〵しからぬ家―立派ならぬ家

はふれ―零落し

見たび―見給ひ

たるかたゐなどをおし入れおきたるものの屋根のやうにはいかでかあらむな。千木は合掌の木の末をあましたるすがたならむといはむも、まさしき事ともいひ難くや侍らむ、猶べちにことわりこそ侍らめ。されど、かうやうの事は、ふかくこゝろにいれぬ筋なれば、しひてもたどらずしてやみぬ。正徳三年長月ばかりに、京の北なる岩屋山見にまかりける道に、雲がはたといふ山里を過ぎぬ。すこしおくまりたる家に、千木さし揚げおるをふと見つけぬ。あやしの事や、是は神の社にすなる物を、かくむね〳〵しからぬ家につくりたるは、心得ずも侍るかな、かうやうの世にうとき片山里などは、古きこともてつたへて、種姓などいひはげむ、もしは遠き昔にありけむ國の宮づこなどいひけむたぐひの子孫の、はふれにたれど、猶むかしおぼえて、かくことなる家作して住むなるにこそと、おしあてにおもひなす。知らまほしくて、田がへしするをのこに問へば、「これは何の事もなき里人の家居に侍る」といふ。「あのやうの木は神の社にこそするなるを、ことわりこそあらめ」と猶とへば、「さることは知りはべらず。昔より誰々も仕りなれたる事にて、あやしむべき事にも侍らず。是よりかく入り給はば見たびなむ。何れかあのやうの木なき家や侍らむ。心得ぬ仰せごとも侍るかな」とて、すき打かへして後は、

中臣の祓―延喜式にある太詞の俗稱

くべき屋根は、先ほねとする木をひだりみぎりより打ちちがへ、この木を便としてさてぞふく、田舍人は合掌の木といふ、此の木の打あはせたる、人の手ふたつをあはせ、佛ををがむに似たれば、かくは名づくるにや、いまはこの木のあまりを切すてて揃へ調へたり。あがりたる代にはそのまゝに殘して、かく屋のうへに出したるなり、是もあながちになだらかにとゝのふる事を事とせざる古の風なり、それをのこしてぞ今は檜皮ふけるにも、神の社には此の木をまうけたるなり、そのかみはおのづから無くてかなはざる事に侍るめるを、ひはだにてふきかへたる後は、やうなきものの樣なりとぞいふ。是らのことわりや、少しかなふべきやうなり。されど中臣の祓に、宮柱ふとしきたち、千木高知て、みづの御あらかに仕まつれるといへるは、皇居のいかにもゆたけやかに、きよらかに作りたてられて、いつくしきさまをかきつらねたる辭どもなり。宮柱ふとしきたてる宮居は、かやぶきにまれ、わらぶきにまれ、そのつくれるさまは、淸らにとゝのひたるをぞせにすべきに、この合掌のすゑきりそろへずて、屋根のへにつらぬきいだしたらむ、田舍の里ばなれなどの、山のはし、藪がくれに、木ぞ竹ぞなど取りしばりあはせて、古きむしろ、破れごもやうの物とり重ねおほひて、老いさらぼひ、病みつかれ

かはらひはだ—瓦葺、檜皮葺

みづの御あらか—至尊の御殿

寶基本記—神道五部書の一、大神宮御造營の事を記せる者

葺は同じなどよみ侍るは、ふかきことわりこそ侍らめと知らまほしくて、人にたづね侍れば、色々にぞいふなる。みなそのこゝろ得ぬことをのみぞいふ。その中にも、是は何のふかきことわりも侍らず、上りたる古の代には、人もすなほに、事もすくなく、かはらひはだなどやうのうるはしき宮づくりもまだなく、あめの下しろしめすすめみまのみづの御あらかも、みなわらちがやなどにておほひぬべし、いまもわらふきたる屋根のかみには、わらをふとくつかねて、なりは今の人のかしらのもとどりゆひふせたらむやうにて、神社のかつを木おきならべたるすがたしたるものあり、田舎の人は是をからすをどりといふめる、是なくては屋根ぬひたるつかねのなはぶしあらはれ出でて、雨露霜にくちはつれて、やねのことぶきみじかければ、かならず是をぞおく、むかしもわらふけるものには、かくてありつるを、檜皮にうつりても、猶このかたちをのこして、かつを木とはいひたるなりとぞ。これらぞさもありぬべきことなり。ち木といふものぞ、わきてしれがたき事にや。寶基本紀といふ古きふみに、ちぎは智義なりなどいふよりはじめて、内外の宮の内そぎ外そぎ、陰陽のかたちをのこしたるなど、何くれのふるきことわりをとき侍るも、さま〴〵に多かれど、さもありぬべきともきこえたらず。わらふ

秋齋間語—多田義俊の隨筆

度會の神主—風雅集、度會朝棟の歌、「かたそぎの千木は内外にかはれども誓は同じ伊勢の神垣」

千木鰹魚木—原本千木鰹魚に作り木の字なし

ならでは聞き傳へし者もなくなりたれば、殘りなくこゝに擧ぐ。又此の老翁藏されし天民の著述「かたそぎの記」あり。國文もまた凡にあらず。しかも寫本なれば、知る人稀に、失せなむを惜むが上に、既に此の記をぬすみ略して己が發明にして、秋齋間語にかけるなどを惡むが故に、事長けれども全文を左に掲ぐ。

かたそぎの記

七尺ばかりにけづりたる木ふたつを、あぐらの足のかたちに斜に打ちちがへて、神社のむねに、牛の角をいたゞきたらむやうにたてるものあり。ちぎとぞいふ。または、かたそぎともいふ。あるはかつを木ともいふ。度會の神主の、「かたそぎの千木はうちとにかはれども」とよめる、木のはしをかた〳〵にそぎたれば、かたそぎとはいふめる。打ちちがへたれば、ちがへ木といふをはぶきて、千木とはいふなり。かつを木は、丸き木を三尺四尺ばかりにきりて、あるは三つ五つばかり、かたそぎの間に横に打ちならべたる物をぞいふ。ほしたる鰹魚やうのかたちにかよひたれば、かつを木といふ。千木鰹魚木はおなじ物にあらず。延喜式に千木鰹魚木、とりはなしてしるしたれば、そのわかちいちじるきにや。さて此の二つの木枝葉のもののやうに見え侍るに、內外にかはれども

徹書記―名は正徹、東福寺に入のろ、歌を善くす、長祿五年寂す
松井幸隆―京都の歌人、中院通茂の門人、後に一家を成す

は違へり）又徹書記のよめる都擣衣の歌に、

　聞くによも麻にはあらじ都人うつやいかなる衣なるらむ

といへるを難じて、「擣衣の情にあらず。都といへる題をたしかにせむとて、麻にはあらじ、綾か錦かと心をつけむは、いとも卑しき心ばへなり」といへり。又松井幸隆が寄車戀の歌、

　牛ながら引も入れやとあけて待つ我が門過ぐる小車や誰

是は源氏物語はゝきゞの方違のところに、「牛ながら引きいれつべき門やある」といふ詞を取りてよくよめる、といひあへりしを難じて、「かくては何某の花奢をのこが、妾の家のさまなり。戀の歌は、いかにも人目を憚るこそ似あはしからめ」といへり。（按ずるに此のうた、近比上木せる幸隆の家集には見えず。幸隆にはあらざるか、若又集を撰ぶ人省きけるか）其の自詠ははつかに一首を聞けり。その故郷鳥羽にゆきて、

　霞みけりさすがに春と白鳥の鳥羽山松の雪げながらに

以上は前に出せし大橋の妹の尼の傳をも話せし馬杉亨安老人、始は仁齋に學び、後此の門人となりしが、昔語なり。天民の説は、此の翁ならでは知れる人もなく、予

六尺の孤云云―遺孤を託して國政を委れべき人にあらぬ事、論語泰伯篇の語

し、必や訟なからしめむか」など宣ひ、又魯の政を聞く事三月、魯國大に治まるごとき、その骨也」といはれしとぞ。仁齋歿後、其の徒東涯に從ふ者と、天民に屬する者と分れたり。或時門人集りて、「先生もし志を得給はゞ、吾は何にか使ひ給はむ」などとりぐいへる時に、一人「吾ごときものは物の用に立つべからず。唯倉廩を守るにおいては、一粒米をも掠むべからず」といふ。天民、「子がごとき人に、いかで倉庫を守らすべき」といへれば、その人色をかへて、「こは情なき仰や。盜むべきものとや思し召す」といへれば、先生笑ひて「否、自から盜む才ある人には托すべし。子は人に盜まるべき人なり」といへり。又東涯此の人を評して、「其の才は拔群也。されども六尺の孤を託すべからず」といへるを告ぐるもの有り。天民點頭して、「東涯よく我を知れり。自から奪はむは、はかるべからず。唯人の爲には欺かるべからず。東涯は是に反せり。危し」といへり。其の器量凡此のごとし。官に上書し、松前に續ける蝦夷の地を本邦に屬せしめむの志ありしかども、齡足らず、三十有九にして歿せれば、事に及ばず。また國學をも心得たる人なり。伊勢物語芥川の段を評して、「比喩の體、神代卷の文法をうつせるものなるべし」といへり。(此の說は左注によりていへり。加茂眞淵が左注は、後人の裏書なりといふ說に

並河天民 附 馬杉亨安

天民並河氏、諱は亮、字は簡亮、卽通名とす。誠所五一（名永崇、字永父、仁齋の門人、五畿內志の作者、後伊豆三島に住す）の弟、城南鳥羽橫大路の人。自から丹波と書けるは、その本國か。爲人膽斗才秀、比すべき類なし。伊藤仁齋に學ぶと雖も、後その學を疑ひて、自から一家を成せり。其の說は、天民遺言に見ゆ。此の中伊豫松山に下り、學を講じ、別に臨みて、其の國老の請に應じて、著せる松山晤語の一篇、「其の領地の治まらざるは一己の治まらざるなり。座禪僧の蒲團上に鼻端の白きを守るごときにはあらず」といへるなど、其の經濟の才を見るべし。又論語鄕黨篇に題し、

「畫得。金毛獅子。畫皮不畫骨。那箇這骨。道々。

と書き、其の說に、「此の篇孔夫子の禮貌を形容せりといへども、是皮毛なり。」「我を用る者あらば朞月のみにして可也。三年にして成る事あらむ」或は、「訟を聞く事我猶人の如

國老―伊豫松山侯の家老

と戯(たは)れたりしもをかし。

仁和寺―山城國葛野郡
さうらうの水―「候ふ」に滄浪の水を言ひ掛く
屈原漁父辭に滄浪之水清兮可以濯吾纓濯兮

表太

表太は貞享元祿の間の人、京師新町四條の北表具師太兵衛なり。人唯表太とのみいひならはせるとか。老いて後男子三人、皆家をことに構へたるがもとに、一夜づつめぐりてやどる。明くれば出でて野山に交りつゝ、春秋の花紅葉は更なり、月の夕も雪のあしたも一日も怠らず。されば人そこの花はいつ比ととひ、かしこの梢はいつ染めむなどとふには、其の比をさすに必たがはず。何時となく黑き頭巾かうぶり、身のたけにあまる杖のうちにしこみて、肴を入れ、瓢のさましたる白かねの器に酒をたゝへ、ながくと提げて、腰は二重にて步む。或春仁和寺のわたりにて、俄なるむらさめに、人皆まどひてかけ走る中に、この翁のみのどかなるおもゝちにて、「ふるは春雨か」と唄ひしを、今もわすれずと、四十年前語る人も侍りし。花のもとにて唯獨酒のみ、眼鏡をかけてゆきゝの人を見、又何かゑがけるものを常にたづさへて、木のえだにかけ、ともとす。その比、京師奇人の第一名なりしとかや。また書畫の鑑定には長じたりとなむ。

世は澄めりわれ獨こそ濁り酒醉はばねるにてさうらうの水

ぬくめ鳥―冬夜、鷹の小鳥を擒へて握み、其の脚を温めたる後、之を放ちやり其の鳥の飛び行きし方には、其の日は行かずとぞ、この鳥をぬくめ鳥といふ

又關の人の持てるには、詞書、世の中はしかじと思ふべし。金銀をたくはへて人を惠める事もあらず。己をもくるしましめむより、貧しうして心にかゝる事なく、氣を養ふにはしかじ。學文して身に行はざらむより、知らずして愚なるにはしかじ。

人は知らじ實に此の道のぬくめ鳥

これらにて其の情その生涯のありさまを知るべし。

淡海狂僧

いづこの人といふ事を知らず。乞丐のごとくにて近江愛知川のわたり、高宮のほとりを狂ひ歩く僧あり。或時、彦根某寺の和尚に行き逢ふ。狂僧問ひて曰く、「和尚法味は如何」答へて曰く「流るゝが如し」詰りて曰ふ、「塞かば如何」和尚答ふる事能はず。狂僧頓に和尚を推し倒し、杖を奪ひて背を舂きうたふ、「一夜ちん／＼ちがはば、いく夜さちがふも知れませぬ。和尚什麼」と、即走り去る。是その比の童謠を用ふるなり。彼の師家も恥ぢて寺に歸らずといふ。

和讃—經文の偈を和語にて作れるもの

もとにて數日滯留し、浴に入りたるが、いづこへか行かむと思ひ出でけむ、其の浴所に女の小袖のありけるを、あやまりて取かへ著つゝ、忽失せたり。さも知らで、其の家くまぐままでをたづねて、大きに騷ぎしが、四五里外の里に遊びてありしとなむ。又師の發句どもをつゞりあはせて、和讃に作りて、常に謳ひありく。これを風羅念佛といふ。（風羅はばせをの號なり）

まづたのむ〳〵推の木もあり夏木立音はあられか檜木笠南無あみだ〳〵

此の例にて數首あり。此の人の娘は尾張名古屋の豪家に嫁したるを、かく風狂しありく後は、音信もせず。或時名古屋の町にて行きあひたり。女は侍女下部など引つれてありしが、父を見つけて、「いかにいづこにかおはしましけむ、なつかしさよ」とて、人目も恥ぢず、乞丐ともいふべき姿なる袖に取つきて歎きしかば、おのれもうち涙ぐみて、

雨袖に唯何となく時雨哉

といひ捨てて走り過ぎぬとなむ。此の人の書けるもの、或人の持てるを見しに、手いとよくて、詞書は、有二千斤金一。不レ如二林下貧一と書きて、

ひだるさに馴れてよく寐る霜夜哉

る人ありと聞けば、價高く買ひ、損じたる所をつくろひて、移り住むかと見れば、やがて價賤く賣りはなつ。常に陰德を行ふ事此の類にて、二萬金殘なくなりぬ。またをかしき事は、河豚を好めども、世にありし時は怖れて喰はず。「今はあるもなきも同じ身なり」とて、あけくれ是を喰ふ。貧しくなりて好む物は、唯これればかり也。常に鼠色の綿衣、墨染の布衣を著たるまゝにて、病みて死なむとする時、纔に錢三百文米二合あるのみ。されども、此の人の恩によりて、富みたる人々、これかれ聞きつけて訪ひ來り、ねもごろに介抱して、終をやすくせり。二十餘年心のゆくまゝに過して、七十有餘なりしとなむ。

心のゆくまま―氣儘に

惟然坊

惟然坊は、美濃國關の人にして、もと富家なりしが後甚貧しくなれり。俳諧を好みて芭蕉の門人なり。風狂して所定めずありく。發句もまた狂せり。されば、同門の人彥根の許六、其の句を集めて天狗集と名づく。ある時ばせをと倶に旅寐したるに、木の引切りたる枕の、頭痛くやありけむ、自からの帶を解きて、これを卷きて寐ねたれば、翁見て、「惟然は頭の奢りに家を亡へりや」と笑はれしとなり。或時、故鄕の篠田氏なる人の

うろせく——うろさく
かごかなる所——靜なる所

のどけしな豐葦原の今朝のはる水のこころも風のすがたも

○百合子は、梶が茶店をつぐよし、自からいへりし。是も歌を好みしかども、梶に及ばざる事遠し。たゞ茶店の女にして歌よむといふが、めづらしさに、ゐなかまでも、その名聞えたり。これがむすめ町子は、大雅が妻となりぬ。既に大雅が傳に出せり。

室町宗甫

宗甫は、京師室町四條街に、何がしといへる豪商なりしが、男子二人倶に無賴なるがゆゑに勘當す。然りし後、世の中うるせくおぼえて、「他の子を嗣として家を讓るとも、此の二人のわろもの來りまつはらば、心よからじ」とて、其の家をはじめ、ある所の調度ども、皆賣りたてしに、貳萬金になりぬ。おのれは、かごかなる所に籠りて、世の交もせず、彼の金はまどしき人に施す料とす。されば、「かうく\なる人いと悲しきさまなるを、錢少しあたへ給へ」などいふ人あれば、「いな、我もまどし」と口にはいひて、ひそかに金五兩包みて其の家に投げ入る。あるじ此の人ならむと推して、謝に來れば、「否、われにはあらず」といふ。不意に人にあたふる金は必五片に定む。もしまた貧にして家を賣

る。京にありわびて故郷へ歸らむとせしが間なりしも哀れなり。此の人さして長ぜる事はなし、唯記憶の强き事はさらに類なかりき。涌蓮法師生存の日は、「吾が歌此の人に語り置けば、筆に記すよりもさだかに、時ありて問ひ聞くによし」といへりし。是につきて奇特なる事は、人の詩歌を聞きて、たま〳〵文字一つ、てには一つなど、思ひたがへしまゝに人に語る事ありて、聞き直しつれば、やがて其のかたりし人の許へ行きて、其のよしを告げし。かりそめの事なれど、かたきことなり。

祇園梶子

梶子は祇園林の茶店の女なり。もとより其のわたりの人にや知らず。其の家集梶の葉を見れば、幼きよりよく歌をよめり。十四になりける年の暮に、歲暮戀といふ事を、

こひ〳〵て今年もあだに暮れにけり涙の氷あすやとけなむ

又其の秀逸とて人の口にあるは、夜霰を、

雪ならば梢にとめてあすや見む夜の霰のおとにのみして

また立春の歌、己はよしとおもへり。

思ふ事げに違はずば世の中のあだなる道に迷ひ果てまし

おもひのつもりにや、翌る年の秋長月病みて終る。才ある女の中々に幸なきは、妾薄命の詩題あるがごとく、大和唐土にためし多かれど、正に知る人の上にかゝるがいと哀にてしるす。骸は鳥部山に葬る。其のよめる歌は、よしと思へるも多かりしを、例の數多はおほえず。

雁をよめる

鳴く雁の聲もはるかに隔たりてつばさ消え行く秋霧の空

衣によするこひ

おもふ其の人には著せじ月草のはな摺衣うつろふがうき

題しらず

水底に沈める月も入り果てば何を憂身のたぐひにはせむ

瀬によせておもひをのぶ

世の中は飛鳥の川と聞しかど身の憂瀬こそ變らざりけれ

歌の集は其の兄敬壽正直が許に藏せりしが、正直もまた此の比疫によりてとみに身まか

やつがり――
拙者

のかしづきに参りしが、名を呉とたまひ、江戸に仕ふ。才あるからに、たぐひなく時めかし給ひしに過ぎ、女伴の妬にあひて退く。さて江戸にある事一歳あまり、相知る人の勸むるにより、歌の道を教へけるが、學ぶ人百に及ぶ。さるにはからず火の災にあひて、こゝかしこ逃げまどひ、辛うじて身一つまたくして京へ歸らむとするに、母にあづけ置きたる娘先に死し、つぎて母も失せにしとき、歸りつきて、悲しみに堪へず、こしかたの身の幸なき事をもとりあつめてやらむかたなく、尼になりて惠靜と名づく。時に年二十八なり。その時親しき人々とゞめしかば口ずさびし歌、

淺からず諫むることに背かめや大かたに世をうしと思はば

やつがりも、おとゞひながら常に交りし人なるに、この折はあふみに侍りしかば、いひやりける。

かわく間も涙に袖の朽ち果てて衣かへぬときくはまことか

思ふにも違ひのみ行く世のうさや眞の道のしるべなりけむ

返し

墨染にころもの色はかへしかどかはらぬものは袖の上の露

野中の清水

―いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ

とぞ。されども、勤仕全かりし上、出家は先君の御菩提をとぶらはむ爲の志と聞えける故にや、其の家は祿も減ぜず、さながら相續したり。此の人は西行をまねぶにはあらで、おのづから趣似たりとやいふべき。歌もあしからざりしかど記得せずと、栂井氏云へり。

矢部正子

正子矢部氏、はじめの名は久子、美濃國芝原の鄕北方の人、年十六にして、同じ國結の里大平氏に結びて、一人の女をまうく。十九といふ歳、其の夫の忍び妻の故をもて忘られて、かの女をつれて母の親の許に歸れり。後再び嫁せず、家を移して母兄どもに京に住めり。歌よみ手かく事を蘆庵小澤氏に學び、其の外茶香の風流をはじめ、女禮長刀の態まで學ぶ事多かりき。此の間かりそめに故鄕にくだりたる時、もとの夫、後の妻もあり、子もいできたるに、野中の清水わすれがたくやありけむ、仲だちしてとかくいひなびけむとし、文をさへおくりしを、さながらかへすとて、一首のうたを添ふ。

秋にあひて枯れにしものを今さらに何おどろかす荻の上風

女の爲に、おのれ宮仕への志ありしかば、二十六といふ歳に、何がしの國の守の姫君

僧惠潭

僧惠潭は奥州白河の士、姓は坂上にして、並河を稱す。諱は義豪、通名は遁世の後深くつゝめるよしなれば、こゝにもらせり。其の人となり、溫順にして、文雅を好み、しかも弓馬の達者にて、從ひ學ぶ人もありき。然るに、若き時より遁世の志を懷く故に、妻をも具せず、甥を子として家を繼がしめ、姪女を娶りて是が妻とし、子一人ある比ほひ、自からは同家のしりへに隱居してありしが、時よしとや思ひけむ、髻を切り、ひそかに家を出で、刀脇指をも具せず、携ふる所は歌書二まき、金壹片の路費のみ。駿河の原に至り、白隱の徒に從ひて禪を學ぶ。年比の歌の師一室栂井氏に來りし日、昔にも似ずやつれたる姿なれば、鼠色したる木綿の小袖を施したるに、頓て同行の僧に與へたり。銀を施したる時もたくはへず、直に伴ふ僧とともに、「めづらしく京に登りたるかひに」とて、劇場を看たり。よろづの事に心をとゞめざる事此のごとし。吉野山の奥赤瀧といふ谷深き里にも、一歳ばかり住めりしが、熊野の奥山にして終れり。時六十八とかや。遁世の後は、故郷の親族にも在所を知らせず、終りけるよしも、彼の栂井氏よりほのめかしけるのみ

長秋詠藻―藤原俊成卿の歌集

一圓相云々―圓窻を作る事

持佛―常に己の室に安置して崇拜する佛

須達―梵語、施主の義

信仰の人梓にのぼせたり。その外ありやえしらず。

似雲は、其の比風流の道心者といへり。その跡を見るには、名を好める人にやと評せる人侍りき。按ずるに、西行上人弘川寺にて終り給ふことは、長秋詠藻にさだか也。そこに葬るとまではなけれども、尋ね行きてもとめなむには、其の行塚も知らるべきに、觀音薩埵を勞し奉りけるも、かたじけなし。其の靈夢のなぞ〱、尤もむづかしきことなり。凡此の人は夢をよろこぶにや、その自記のうちに、なほ見えたる事どもありき。又居を好む僻あるか。その弘川と嵯峨の庵、作りざま、またくひとしく、西に一圓相を穿ちて持佛に代ふ。廣さは纔に二疊がほどにたくみ有りて、庵室のごとし。これらの跡を見て評せるにや、狹き庵の好みに過ぎたるは、其の意の狹さ知らると、涌蓮法師もいひき。されど、其のまねぶ所の西行上人のうたに、

世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせむ

とあるを見れば、此の人も亦其の境界の名をとゞむるは、一種の風流とや思ひけむ。何れにまれ、善き須達を得て、生前歿後、其の好にかなひけるは、たれもうらやむべし。かう書きつくるも、毛を吹き疵をもとむるの誚を得ぬべくやあらむ。

耳底記―一巻、細川幽齋の説を、烏丸光廣卿の記せるもの

絶えて見ぬもしほの煙たちかへり昔にかすむしほ竈の浦

しほたれし昔の人の心まで今日汲みて知る須磨のうら波

我が再興せし鹽かまも、又けぶりの絶え侍りければとて、

身にぞしむ又こそすまに燒くしほの煙も絶えし跡の浦風

あらし山のふもと、大井の川邊には、弘川とまたく同じきさまの庵をつくる。

住みかへむ秋はもみぢのさがの山春はよしのの花の下庵

その吉野にて、庵を結ばむとせしに、さはる事ありしかば、

露の身をおく計なる草の庵むすばむとすれば山風ぞ吹く

されど、苔淸水の奥に、しばし住みける跡あり。

其の外高野の奥、龍門の瀧の邊など世離れし所々に住める趣、其の自記「おもひ出ぐさ」「年並草」などに見ゆ。八旬にあまりて、和泉國蹲尾なる豪富北村氏に身を寄せて、そこにて歿す。骸は遺言して、弘川に送り、西行と同じさまの墳を築く。著す所、右二記の外、似雲聞書と題して、儀同公の御說をたゞ事に書きつけたるものあり。雜話もまじれり。耳底記の體にならへるか。葛城百首といふものは、弘川にありてよめる所にして

清水

其の靈告によりて、河内國弘川寺をもとめ得たり。そこにて唯行塚といひならはして、其の由も定かならざりしを、石のしるしを建て、はた其の寺に有りける肖像をも捜し出で、堂を造立し、自からも山中に庵を結びて住めり。春雨亭といふ。其の時の歌に、

なみならぬ昔の人のあととめて弘川寺にすみぞめのそで

その庵のひろさ、疊一ひら二ひらに過ぎざれは、人々見て、今すこしひろめよといひければ、

我が庵は方もさだめず行雲の立居さはらぬ空とこそ思へ

此の山にあるほど、又いづこにまれ一人住める時は、搔餅といふもの二ひらを舌にのせて、一日の粮に充て、飯炊く煩を除きけるとぞ。こゝにあまた櫻を栽ゑさせて後、所の山人へまうすとて、石に彫る歌、

折り添へて徒に散らすな山柴にまじる櫻の下枝なりとも

須磨の浦に有りける時、久しく絶えたる鹽竈を興じて、しほやきそむるとて、是延享四年卯正月十五日、とその自記に見ゆ。

地下の一流｜民間の一派

印行十二｜和歌八重垣

濱のまさご和歌麓の塵等名高し

儀同三司｜准大臣の異稱、實陰は武者小路三條西の支族

年はまだつれなく殘る有明の月よりかすむ春は來にけり

同じ比、或宗匠のよみ給へるに、

年はまだのこる日數を朝がすみ立隔てゝや春の來つらむ

といへるは、いとよく似たるものゝ、廣澤の霞や立まさるらむと云る人も侍りしか。延寶九年辛酉三月十五日、卽天和元年なり。六十三歲にして終る。此の門人に、風觀窻長雅洛下に名有り。その次に、有賀以敬齋長伯、家傳を嗣ぎ、此の流れを汲む人多く、地下の一流と稱す。以敬齋は和歌よみかたの書をあまた著し、初學を導く。印行拾貳部に及べり。

僧似雲

僧似雲、始の名は如雲、安藝の國廣島の人なり。歌を好み、都にのぼりて、儀同三司實陰公に學ぶ。(後ゆゑありて參らずなりぬるとぞ)名山靈地こゝかしこに遊び、住所を定めざれば、世に今西行といへるを聞きて、自らも、

西行にすがたばかりは似たれども心は雪とすみぞめの袖

貞德翁—松永貞德、俳諧の大家
藍よりも云云—青は藍より出でゝ藍より青し師より勝る事の喩

廣澤長孝

長孝は望月氏、名兼友、京師の人にて、廣澤の閑居をさゝのや(小々の意なるべし)といふ。歌學は貞德翁に傳へしが、其のよみうたは藍よりも青しと見ゆ。

けふもまた垣根のうばら傳ひきて霜踏む鳥の跡は有りけり

とよめるより、其のやどりをまた、霜ふむ鳥の庵と人は呼びけり。ある時、人の許へ庭の栗を贈りて、

つらかりし寐覺のおとも忘られて明くれば拾ふ庭のさゝ栗

など幽居のさま思ひやらる。されど、其の代此の道に名高くおはする公卿も、花によせ月にかこちては、とぶらひきませる趣、家の集に見ゆ。其の中、八月十五夜に、やごとなき御方々と共に雨を恨みて、

よしや吹けあきの草木の嵐山月のかつらも雲にしをるる

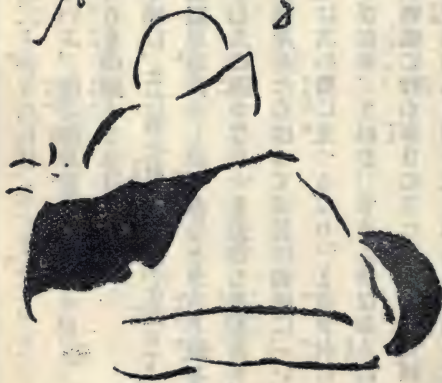
此の歌によりて、其の集を桂雲と後に名付けたり。諸卿深く感じ給へる故とぞ。其の卷頭の歌、年内立春、

とも三とも書けかし」といふに、やがて二三と書きたれば、是よき名なりとて、それにしたるなり。後都の岡崎に住みて、自在軒といふ、纔に膝を容るゝばかり也。

火宅とも知らで火宅にふらめくは直に自在の鑵子なりけり

是より軒の名によびける。茶は織田の風を學び、また香を好む。平家を語りて、琵琶はしかも上手なりしとぞ。常に驚くばかりの美服を著たりしが、あるとき古下駄を繩につなぎてもたるを、「いかに」と問へば、「かりし人に返すなり」と云ひし事もあり。物事に心をとゞめず、往來する所定なし。懷に金貳片をたくはへて、其の包紙に、「いづこにても倒れなむ所にて、體をかくし給はれ。是は其の費に充つるなり」と書き付けしは、伯倫が鋤を荷はせたるよりも、たやすきしわざなり。されど、すくよかなる人にて、齡九十に近づきて、足駄はきて、黒谷の茶店へ物喰に行く事日に三たび、「三十文錢一日を過すに足る」といはれしとなむ。始めは火けし壺といふものに米をたくはへぬるよし。それも、懶くなりけむかし。杜鵑と銘ある琵琶一面、平家二卷を、三河の士、山田氏にあたへて、今なほ其の家に藏せりとなむ。

岡崎―山城愛宕郡
火宅―現世煩惱の苦を火に、宅を三界に喩へたる語
自在―束縛なき意を自在鑵に言ひ掛く
織田の風―織田有樂齋の流
伯倫―晉劉伶常に一僕をして鋤を荷ひて從はしむ曰く我を倒れん處に葬れと

二三　翁自画讃

て、侯の近侍せる士に別を告げしかば、「理なり」とて、そのよしを申しけるに、侯笑ひ給ひて、「吾よくこれを知れり、然れども、守景は膽太くして、人の需に從ふものにあらず。其の畫もとより世に稀なるものなり。されば、此の男に祿を與へば畫を描くことをばせじと思ひて、かく貧しからしむ。今は三年に及べば、畫も國中におほく殘りなむ。さらば扶持すべし」とて、ともしからず賜ひしとぞ。

按ずるに、守景の爲人固より奇なり。侯の人を知りたまへる事明にして、又謀り給へる所尤も奇なり。樂天が鷹を養ふ篇に、飽しむれば放れ、飢しむれば馴れずといひて、人事をさとしけるも思ひ寄せられぬ。

樂天――唐の詩人、白居易

土肥二三

二三は俗稱土肥孫兵衞といふ。(茶人花押藪に土岐といへるは誤也)三州吉田府、牧野侯に仕へ、祿二百石を食む。一子を失ひて、忽隱心を生じ、仕へを辭して頭おろしたる時、とく聞きつけて文おこせたる人々あり。其のかへりごとを、人におほせて書かするに、「今までの名は似つかはしからず。法師の名は何とか」と問ふに、「否、まだ名はなし。二

源五郎鮒―鮒の變種近江琵琶湖の特産

探幽―狩野守信

加賀侯―加賀中納言

扶持―俸祿

逢ひたるに、「名にしおふ源五郎鮒食せ給へ」といふに、「さらばいくかに」と契りて歸る。其の日友人の至る時、其の門鮒數十をとり入るゝを見るに、食につきて出したる所、僅にして腹に滿たず。友人恠みて、「さしも數多取入れ給ふと見しに、是はいかに」といへば、主笑ひて、「望み給ふ所の源五郎鮒の眞なるものは、數十の內にて一二を得難し」といへりとなむ。又庭園の作意に長ず。其のつくれる所の庭、堅田大津などに殘れるを見て、その道知る人は及ばざるを嘆ずとかや。此の人の所爲、畢竟茶博士の奢侈なるものにして、子弟の爲に語るべからずといへども、味を知るの異能におきては、他に比すべきなし。奇といはざらむや。享保の中比まで有りし人にや、予相識の老人、茶事をもて交りたる人ありき。

久隅守景

守景は久隅氏、通名半兵衛、探幽法印の弟子にて畫を能くす。家貧なれども、其の志高く、容易人の需に應ずる事なし。加賀侯、守景を召して金澤に留め給ふ事三年に及びしかども、扶持賜はるけしきもなかりしかば、「かくては故鄕にあるも同じ。歸りなむ」と

荷朗易牙――荷朗は晉の人、易牙は齊の大夫

厨下――臺所

堅田祐庵

祐庵は北村氏、淡海堅田の浦の豪農にて、茶事に熟し、物の味を知る事は、いにしへの荷朗、易牙にも恥ぢず、傳ふる所の話多し。常に奴僕をして湖中の水を汲ましめて、茶の水に用ふるに、某の所と命す。其の指所にあらざるを汲み來れば、必又其の所を知る事神のごとく、終に欺く事を得ず。魚鳥の得る所を知るもまたかくのごとし。しかのみならず、ある人豆腐の串に貫きたるを(俗に田樂といふ)食はしむるに、「此の串の竹は遠く來れるものなり」といふ。主も知らず、厨下に問ひしに、「浪花より物を荷ひ來る竹をもて削りたり」といひしなどは、奇といふも餘あり。又或る家にて、碎菜の羹を出せしに、「此の菜は男のたゝきしなり」といひしかば、厨下に問ふに然り。「是はいかにして知り給ふや」と問ひしに、「男の扣きしはあらし。女の力能く是に適へり。必女にせさせ給へ」といひしとぞ。かゝれば、人に物を饗する事必ず愼めり。所がら湖中の鯉鮒の類を調ずるに、魚板數枚を用ふ。はじめ鱗をはなつより、肉を切るにいたるまで、次を追ひて板を轉ず。「かくせざれば、うつり香ありてなまぐさし」と云へり。一日京師にて茶事の友に

寶暦十三年御即位―後櫻町天皇御即位
小御所―將軍參内の時裝束を更へ休息する所
笏―束帶の時手に持つ小板
紫清兩殿―紫宸殿と清涼殿
大内裏―正式の宮城

中御門院の御時、勅によりて、同じく梅に鳥をつけて奉るとて、よみて添へたりし、

　時しあれば傳へしわざもあらはれてもてはやさるる梅の一枝

寶暦十三年御即位の日、白馬の瑞祥の勘文を奉る賞に、從四位下を授けらる。又某年、小御所にして白鳥庖丁の時、祿を賜はりしに、笏なかりしかば、懷のたゝう紙を是にかへて拜す。手に取るものなくて拜舞するは、其の儀にあらずといへりしを、知る人は感じき。又紫清兩殿の圖を古にかうがへて正しけるを、勅によりて奉りしも譽也。猶大内裏の圖も考へ置けるよし語られしが、有職の故事を集め、自から撰ばれし寶石類書百餘卷に及ぶを家に藏す。其の奥に書かれし歌、

　拾ひとり捨つるもをしといろ／＼の石を寶とおもふおろかさ

又一笑話有り、上京の鍛冶に狐つきて、「今は此の業をせじ。出身する」などいひて狂ひけるに、老人たいめして、「狐にてあらば庖丁をうちてあたへよ。是はおほやけの御物を調ずる料なり。是ばかりはうつべし」といはれしかば、雌雄二刀をうちしに、雌のかたよくきるれば、小狐と名づくとなむ。八十有餘にて去年終られぬ。

定省—父母の安否を問ふこと

御厨子所預—禁中にて朝夕の供御の物を調ふる厨所の頭

庖丁—食膳の調理

有職—朝廷の禮儀作法の故實

なり。翁晩年山水の興を思ひて、郊外に遁れむと思ひしかども、子弟定省の爲めに勞して、家業を怠らむやの懼にて、本居近きに住みながら、庭のさまを田野に摸して、僅に稻などを植ゑしめ、思ひを遣りけるとぞ。野服葛巾門人に助けられて、花紅葉に遊行せしさまなども、風流なき人にはあらざりき。著書假名書のものあまた印行せり。兒童に示す前訓など、今日の小學なるべし。

高橋圖南

高橋若狹守紀宗直老人、號は圖南、御厨子所の預にして、庖丁は其の家なれども、殊に勝れたりとかや。或時諸友六人會して、庖丁を望むに、鯉一つを何の品もなく六つに切られしに、能く見れば、六つの割一分もたがはざりしに、皆其の妙を感じぬ。尤有職の學に名あり。いつの比にや、紅梅の作枝に雉子をつけて奉りし時、靈元法皇賜はせる御製

　いかでかく作り出でけむ咲く花の時しもわかぬ梅の一枝

又

不生佛門―上條阿字本不生を見よ

王陽明―明の大儒、良知を致すを主とす陽明學派の祖

良智良能―學ばずして知るを良智とし、學ばずして能くするを良能とす

一丁字を知らず―文盲

黑谷―山城愛宕郡にあり

といへり。凡教示の旨、自を抑へて他を惠み、庶人の分を守りて、希望を斷つべし、儉をつとめて、吝なる事なかれとなり、又常に本心を觀よとすゝむ。或は物を扣きて「是何ぞ、手を拍て聲いづれにありや」と、時々研究せしめ、旨にかなへば許可す。其の著述を看るに、播磨盤桂禪師不生佛門と說かれしによるよしなり。故に或は禪儒の誚ありといへども、是また王陽明の所說、良智良能に基せるか。其の師石田氏、母の病めるに藥を進むる時、省する事ありしとかける趣なり。また此の流の人、文字をいはず、門生目一丁字を知らずして、常に俗講して、大に行はるゝもあり。是によりて、文學の人は甚だ卑しむれども、もとより學者を敎ふとはいはず、市井の人の人道をしらず、自性を識ざるを導くとなれば、世に有益の事とすべし。腹中萬卷の書を藏し、文章天下を驚すとも、只利名の媒とするにまさらざらむや。世間此の流を汲むものは又聖をもて仰ぐ。一とせ此の翁大和へ講に赴く旅途の間、竹籃を舁げ出でて、しひて乘らしめ、道を聞き傳ふる恩義の爲にすといふ人あるに至る。去年歿せる時も、遠近四方葬に趣く者、千をもて算ふ。其の居より黑谷に及びて、二十有餘町ばかり、道路の間往來是が爲に狹く、先だちて至り、後れて急ぎ、終日人立込みしも、今世僧俗の間聞く事稀なる所

東脩—入門の時師に贈る禮物

ら修身を説き、齊家論、都鄙問答等いへる者を著し、一家の學を唱ふ。此の人歿して後、高弟全門といふ老人（六角街の人近江屋仁兵衛隱居也）續きて講説すと雖も、其の徒尚多からず。堵庵もとより貧しからざれば、金錢品物によらず堅く束脩を受けず。故に貧賤吝惜の徒も喜びて學に赴く。社中の請に應じて、こゝかしこに俗講をつとむる事年ありて、終に其の學海内にひろがり、教の及ぶ驗もまたまゝ見ゆ。近年米價登揚の間、貧人に施を行ふ者、多く此の門下に出づる事は、世の知る所なり。尚又一二をいはば、或婢女郷里に祖母一人有り、貧にして親族の養を受く。知るもの勸めて、「其の身得る所の金をわかちて、養を助けよ」といふに、婢肯かず、「吾が身親族の手をからず、自から衣食するは、猶祖母の幸なり。其の上に何の奉養をかいはむ」と。然るにいつの比よりか、その仕ふる所の家婦に從ひて、堵庵の講を聞きしより、先の言を悔いて、しばしば祖母に物を贈り、孝の心を運びしとなり。又或女、鼠に衣食を嚙はれて、腹立ち悲しみしが、かねて彼の心法を聞きしはこゝぞと思ひて、一夜靜坐して省る事あり。自から怡悦て口ずさむ。

　今までは鼠が喰たとおもひしに私が喰たとおもやをかしい

彼の岸―佛語の到彼岸を思ひ寄せてよめるなり

題しらず

同じ枝をいかに時雨のふりわけて青葉が中に紅葉しぬらむ

八十四といふ春、かけまくもかしこき御方より、高き齢をいはひ給ひて、連歌の一句を、親しく御筆を染めて賜はりける。

百千とせ行末長き春日哉

此の時によめりしうた

かしこしなかたのの草の露をしももらさで月の影宿すとは

享年八十六にして、身まかりなむとせしとき、

あま小舟八十の湊を漕ぎ過ぎて彼の岸近くなるぞうれしき

おのれもかしこにありける日、長居せしまらうどの數なれば、こゝに追慕の筆を染む。

手島堵庵

堵庵は手島氏、富小路三條街の人、家名近江屋源右衛門、隱居して嘉左衛門と改む。爲人篤實謹愼、少より石田勘平に從ひ學ぶ。石田氏は心法を主として、市井の人の爲に專

王猛—晉の豪傑

漢君—武帝不死の藥を求めしこと

邊幅を修めざる—表面の見えを飾らざる

捫ルニ渠ヲ計盡キ復防グコト難シ。開イテ戸ヲ偶然見ル月ノ殘レルヲ。王猛手空シテ憎ミ爾ガ黠ヲ。幾回カ誤リテ把リテ腐綿ヲ丸ス。

病中作

花欲シテ辭セムト枝ヲ看ル色ノ移ルヲ。丹爐還少有リテ誰カ知ラム。漢君衰晩豈無カランヤ感。起スレ感ヲ秋風蘭菊ノ時。

此の作ありて後、いくほどなく卒す。壽七十有五。寛延元年戊辰歳、十月二十三日なり。老介洞先に妻ありて蚤く亡す。後妻其の眞率邊幅を修めざる事、主翁に過ぎたり。後薙髪して貞信といへりしかど、ある名はいはで妙雷と人よびしは、其の聲四隣にひゞき、心に思ふまゝのことを打出す人なれば也。或は徒然なる所へ人到れば、喜びて茶酒をもてなし、昔今の事をかきくづし語り出て、なきみ笑ひみ興に入る。客座久うして、對するに懶くなれば、「われ醉ひてねぶたし。今は早歸られよ。いざいざ」と催さるゝ類ひ、常にゆきゝする人は馴れて心にもかけざるのみか、戲に逆ひて長居するもありし。是も若きより文雅を好み、師にもよらで歌をよまれしが、中には俊發のものもありき。今其の二三を擧ぐ、

堀川伊藤氏
—伊藤仁齋の家

て得つ。和漢の文章もともに兩集に出でたれども、あまりに事繁ければもらしぬ。

○介洞は苗村氏、通名道益、世々醫を業として近江八幡に住す。若き時は堀川伊藤氏に學びて文學あり。日々の事務をも漢文に筆記す。性豪にして物にものとせられず、しかも無我なれば、人憎まず。其の一二をいはば、近村へ醫療に行く路の程、農人の早苗を運び植うるにあふ。世のならはしに、苗植うるときは、行人勞を慰して過ぐるを、此の老翁さもせねば、農夫等つぶやきて、「彼れ八幡の道益禮なし」と誚る。老人之を聞きながら行過ぎて、歸るさに又此處を經る時、田にある人を小手招きす。さすがに知る人なれば、田を出でて來るに、曰く「さきに我を誚れり。子よく思ふべし。子が苗うゝるも業也、吾が醫療に通ふも業也。我もし子を慰勞せば、子もまた吾をしかすべし。いかに」と。農人え答へず、頭を搔きて退く。又或家の請に應じて、病人を診て速に去らむとす。あるじ藥を乞ひしかば、曰く、「旣に門を出でて數百歩行きたる客の爲に甕をまうくるがごとし。及ぶべがらず」と、終に出で去る。これらにて常の趣知るべし。其の口號も氣象を見るべきものなれば、こゝに擧ぐ。

惡ㇾ蚤ヲ

即事―見たるまゝを直に作れる詩
幽齋―靜なる書齋
烏紗―黑きまどかけ

即事

幽齋讀書罷。靜嘯岸烏紗。遙見前村暮。歸牛度稻華。

題肖像　詩集本賞以此作終之。

有志無德。體柔氣剛。知厥不可。爰逃爰藏。短琴孤劍。荷衣蘿裳。十年心事。秋月滄浪。

江の螢を題してよまれける述懐の意も哀なり

おもふぞよ入江の水草朽ちてしもよはの螢のひかりある身を

ある禪院のはしらに書き付けられしうた

身ののちの名さへ朽ちずば埋木の花さく春はよし知らずとも

この心ばへいとかなしうおほゆれば、此の草案を書きつゞくる間に、かへしの意を口ずさび侍り。

朽ちぬ名を誰もしのべと書きつめし君がみさをの松の言の葉

右詩歌集共に、此のわたりに藏せる人なかりしかば、近江の舊友にもとめて、からうじ

知らぬ翁云云—躬恒集「ます鏡、底なる影に向ひゐて、見る時にこそ、知らぬ翁に、あふ心地すれ」丁未の春—享保十二年

花もまたさすがに知るや立なれし山櫻戸の去歳のあるじは物まうでの記の中に、あはれにおぼえし詞とうた。老曾の杜にぞ來たる。若かりしそのかみ、笈を負ひ師に従ひて京に物學びしける比、行きかへる毎に、此の森を過ぎし事幾度なりけらし。あはれ、身をたて道を行ひてと、心ばかりはこよなうおもひあがりてげるも、名をあげ父母をあらはすこともなくて、いつしかに知らぬ翁になりはてにけるよと、今更にいとかなし。

いたづらに老曾の森の下露をわが袖にとはおもひかけきや

松寺の草庵は、ひととせ出でいにしより、こと人の住みけるを、丁未の春より、又わが方へかへされてけり。秋にも成り行くまゝに、むかし植ゑ置きし萩のいとよく咲きけるを見て、

年月をふる枝の眞萩いまさらにもとのあるじを花も忘るな

幽栖の趣を見るがごときは、秋夜の彈琴

醉把隻琴聊自彈。古松風定夜方闌。朱絃一曲千秋涙。回首西山落月寒。

古街—松寺村

我自云々—自身の隠者なるをいふ

蕙帳云々—隠遁の決心

接輿—狂接輿、莊子に見えたる畸人

雪ふりつゞきていとゞしく、人め絶えたりける比、（松寺邑の庵にてなるべし。）

跡たえてとはれぬ雪のふる里はまがきの山も三吉野の奥

移居

都城西畔古街隈。三徑新依酒店開。非爲晨昏違定省。那堪琴鶴落塵埃。陶潛門外先移柳。林逋堂前未種梅。我自人間忘機久。江邊白鳥莫相猜。

去歳癸卯遷居城下。爾來應接日多。不堪其煩。乃將辭去。寄別諸子。

城外西風秋已深。荷衣轉覺塵埃侵。浮雲落日山川色。蕙帳杉扉猿鶴心。世路無端多按劍。生涯寧復問遺金。接輿元是疎狂客。好去行歌楚水陰。

此の時の歌

いでてしも世に光なき三日月ややがてかくろふ山の端の雲

守野といへる山里にしばし住みし時、人のよみて贈りしうたのかへし、

なら柴のなれゆくとても世にぞ似ぬ秋の小田守る野守山守

こゝをも住みすててし明の春、これかれ誘ひて、又遊びてなど、ことばがきありて、

京にありける比、名里持長亭にて、立秋の日、歌よみける中に、

かへらむと契りしあきを故郷のまつにもけふや風の告ぐらむ

松井幸隆亭にて、瀧の紅葉、

もみぢばの色にうつろふ瀧のいとは染めて悲しき類ともなし

都の東山なる何がしの院にしばし在りける比、月いとあかかりける夜、南面の板鋪にひとりふせりゐて、むかし今の事、そこはかとなく思ひつゞけて、すこしまどろみたる程に、過ぎし比なくなり給へる我が姉君の、ありしまゝの姿にて琴をかいならし、いと心よげに見えたるを、あなうれし、つゝがなくてぞおはしぬると、打まもりてゐたる程に、夢さめぬ。夜ひやゝかに、人しづまりて、山松の聲のみひゞきあひたる、いとあはれに物がなし。

はかなくもさめける夢か玉ごとのしらべは庭の松にのこして

このことを便に付けて、ふるさとの父君につげ侍りければ、今更に胸ふたがりてなど聞え給ひて、父左兵太之章、廓山と號す。

見し夢をきくにつけても玉の緒の短きことの音をのみぞなく

宋學―朱子の立てたる理氣の學

者ありといへども肯かず。貧を分とし、琴書を樂しみて隱を全くせり。天資溫恭、長中人に及ばず、狀貌婦女子のごとしと雖ども、事に臨みて勇敢なる、其一ッをいはゞ、平安より歸る日、湖中暴風にあひて船覆らむとす。衆人皆生ける心地なきに、琴所ひとり自若、舷を扣きて歌ふの類、其の平素に異なるを見て人怪しぶに至る。又自から云ふ「吾固より一善狀なし。唯貨色二のものに在りては、未人に對して云ひ難きものあらず」と。又過を聞きては欣然として改む。奴隷の言といへども取るべき事あれば必したがふなど、行狀に記せり。始め宋學を事とする事年あり。後東涯の門に遊び、又徂徠の書を讀みて、ます〳〵古義を喜ぶ。其の主とする所經濟の學にして、著す所、桓公問對、富强錄あり。出で仕へずと雖ども、國を憂ふるの志により、時を救ふの要務なりとぞ、又兵法に精しく、八陣本義其の外著書數部有りといへども、稿を脫せざるもの多しとなむ。又詩歌を好む。詩には琴所稿刪、歌には閑窻集をとゞむ。元文四年己未歲正月九日卒す、壽五十有四也。其の詩歌は口氣平溫にして雅正なるものといはむか。おのれがおろかなる手にて選み出すにはあらず、唯その事狀にあづかるものを採りて、こゝにまじへ揭ぐ。

國侯—井伊家
世臣—譜弟の家來
心疾—發狂

偈をとゞめて去りぬ。住僧歸りてその偈を看て甚賞し、これが和を作り、跡を追ひて京の方に趣きしに、道路の間逢はず、つひに京まで來りて、こゝかしこ尋ぬれども、彼の偈に池無名と書けるまゝにとひたれば、其の名を知る人なし。もとめ侘びて空しく歸らむとせしに、「せめて東山の寺社拜み給へ」と人の勸むるにつきて、まづ祇園の社に詣でたるに、繪馬殿に掲げし蘭亭圖に池無名と記したるを見つけて、やがて坊に入りてとひて、始めて其の所を知り、到りて對面に及びしが、「今は本意とげたり。京に用なし」とて、其の日旅立けりとかや。一偈の爲に數百里を追ひて、事遂げてまた他意なき洒落、いとも奇なり。大雅歿後に此の話を門人に聞きしかば、其の奥州の地名僧名ともに洩しぬ。惜むべし。

澤村琴所　苗村介洞　附妻女

彦根隱士維顯、字伯揚、澤村氏、號琴所、通名は宮内、國侯の世臣なれども、江戸に近侍せる日、心疾によりて退く。國制心疾を憂ふるものは復出で仕ふる事を得ず。故に意を官途に絶ち、城南松寺村に閑居す。其の居を松雨亭といふ。後再び起つ事を諷する

名のいつくしきに―玉襴の名の立派なるによりて
大原女―京都の近在大原の里より出づる物賣女
わらうづ―草鞋
與み―組歌
數年の後―天明四年歿

泉殿へ招かれて參り、歌を學ぶ。始めて參りし時、所がらといひ、名のいつくしきに、いかなる婦人ぞと、御内の女房達、今や〳〵と待ち居たるに、思ひの外糊こはき綿衣に、魚籠を引提げたる樣、大原女のわらうづはかぬごとくなれば、大きに驚きけり。是亦寵辱を心とせざる夫の行に配するなるべし。道人はかゝる高名の畸人なり。かれより招き給へるなり。富みたるにもあらねば、夫婦ながら假初の禮義を表しても有るべきを、世人にまさりて季節の謝物をとゝのへ參れり。歌はかの氣象に應ずるやうに添削すとのたまへりとぞ。又殿より、興じて、あかき蔽膝を婦に賜りしかば、春は母が名殘の茶店に出でたる事もありしとなり。夫は三絃の與みといふものをさびたる聲して彈きうたへば、妻はまた古びたるうたをつくし箏にかけて彈く。其の箏の與みもまたよくせりとなむ。世づかぬ家のうちのさまなりき。夫亡して數年の後身まかりぬ。

求大雅僧

大雅江戸より奥州に遊びし歸るさ、いづこにてか禪刹に入りて午飯を乞ふに、住僧は他に行きてあらざりしかども、こゝろよくもてなして飯茶を進めたり。されば大雅卒に一

眞葛原—山城愛宕郡
舟岡—山城愛宕郡
鶉衣—破れ衣
蓬髮—散しがみ
磯材—書畫
川字云々—感興至るなり
玉の一字—柳澤淇園の號玉柱

ども有るべし。今は予記得たるものを擧ぐるなり。其の死病の時、初めより藥を服せず、此の度は起たずと決しぬ。時安永丙申四月十三日、眞葛原の草堂に終る、歳五十有四。舟岡の南淨光寺、先人の墓側に葬る。墓誌は大典禪師著して石に刻む。此の爲レ人の全體は墓誌により、聞く所の話を添へて其の實を證す。

惠恩院六如大僧都圖像贊。竝二小引

丈人以二書畫一著二名海内一。余向以二室邇一屢相往來。略知二其人一。蓋葆レ眞耦レ俗。隱二于小伎一者也。頃有レ人。齎二其遺像一求レ題二一辭一。余私欽二高風一。不レ揣二蕪陋一。輙爲賦二長句一。字々實錄。不二敢文飾一。丈人有レ知。應レ撫二掌於無何有之郷一矣。

鶉衣蓬髮意怡然。言語近レ禪形肖レ仙。避レ世仍懷二濟レ世志一。
賣レ山不レ蓄二買レ山錢一。磯材滿レ屋纔容レ膝。川字成レ腔時弄レ絃。
至竟深心誰可レ會。空令下姓字藝中傳上。

妻町子は、祇園林百合子が女なり。大典禪師の墓誌に、夫の行に配すと書き給へるおもむき、さきに擧ぐる筆を持ち行きながら、夫に應じ、無言にして歸れるごとくなり。夫に學びて畫を善くす。柳里恭の號の玉の一字をもらひて、玉瀾と號す。夫とともに冷

ほりし─欲し

石刻の十三經─淸高宗乾隆五十八年大學にて刊刻せしむ

ひ、「こはあやまちし侍り、されどこれは祇園の御神に奉る志なれば、又人に見せ奉らむ事を、神のほりし給はぬなるべし」といひしかば、にくみて速に邸を出されたり。「げにさもこそ」とて笑ひつ。又ある豪富者、畫を托せしに、月日を經て果さず、使至る每に近日とのみいふ。一日童僕例のごとく來るに、尙畫かざれば、門を出づるより獨罵りて、「這の死畫師、人を勞する事幾度ぞ。自負歟、惰歟、人をあなどるか」といへるを聞きて、急に走りて引きとゞめ、「君がいふ所甚理なり、吾過てり過てり」とて、直に筆を染めて與へたり。又一書林の僕、主人の金を用ひて遊興し、放逐にあひ他國へ行かむとする時、道人の許へ來りて別を告ぐ。道人甚憐み、「我主人に侘びむ」と云ひて、持てる所の書畫調度を賣りて、その金をつくのひ、歸參せしめたり。中にも奇なるは、石刻の十三經を得むとて、年比心にかけしかば、たくはふる所の錢百貫に及べりしに、書賈なほ售らず。嘆息して其の錢を祇園の社に奉納す。時に御社修造の事あればなり。其の時のさま、わらむしろの大なる袋に巴を畫き、(神輿の紋なり)拾貫文づつ拾にして、門人とともに禮服を著し、青竹の棒もてさし荷へり。社司其の名を揭げむとせしを、固く辭す。されど誰となくてはあるべからずとて、玉瀾と記せりき。定めて此の類の話いかほ

近江高島侯
—佐久間安
次か

むつかりて
—ぢれて

て、瀬田の橋を渡る時、其の扇を出し、こと〴〵く湖水に投じて曰く、「是をもて龍王を祭る」と。後いくほどなく、書畫の名、海内に擅なり。好みて名山に遊び、高峻幽奥到らずと云ふ事なし。卽取りて筆端の趣をなす。しば〳〵富士に登るに、每に其の路を異にして、富士の圖一百を作る。其の變狀みな自から見る所、古今畫工未だ及ばざる所也。其の行事多く人の不意に出づる話をいはゞ、或時難波に出で立つに、筆携ふる事を忘る。妻玉瀾見つけてもちてはしる。建仁寺の前にて追ひつきて授くるに、道人おしいたゞき、「いづこの人ぞ、よく拾ひ給はりし」とて別れ去る。妻もまた言なくて歸れり。又近江高島侯の許にて障子を畫く。京に歸りて後其の報を賜ふに、吏云ふ、「禮服をつけて謝を申さるべし」と。道人諾して、やがて高島迄袴を著ながら行きたり。又江戶に下る時、某侯の邸に知る人有りて宿りす、六月十八日になりて、「けふは古鄉祇園の社の御輿洗の神事なり。いでそれを學ばむ」とて、とみに紙もて偶人を作り、火ともし、はやしものして邸の內をめぐらむとする時、其の侯の世子「見たまはむ、先もて參れ」との使有りけれど、囃物に紛らはし、聞かぬさまにてかしこゝに行きめぐりし時、「などもて參らぬ」とむつかりて、使たび〳〵に及びしに、今參らむといふ時、其の偶人を燒き失

養拙樣—寺井養拙の書風

望玉蟾—望月玉蟾

唐伯虎—明の人人名は寅字は白虎、詩文畫を能す

倪雲林—倪迂、元の人、雲林は其の號詩畫に工なり

師の人。爲人肅敬寵辱をもて心をおどろかさず。善く物と化して、苟も合し志を紆さず。外疎放にして、內實修、人と交りて謙遜し、しかもおもねらず。禮法に簡にして、往くべくして往かず、答ふべくして答へず。是を義にかへりみれば、いまだかつて失ふところあらず。惠みて望まず、廉にして劌らず、其の取予得失において恬如たり。平生行事多く人の不意に出づ。是に於て畸人の目あり。幼にして穎異、文を學び書を學び能くせずといふ事なし。獨り繪の事に長ず。山水を圖する、尤妙なりと墓誌にいへり。幼くして穎異の事は、三歲初めて書を爲す、五歲書を善す。一日黃檗に至り、堂頭千呆禪師に謁し、席上大楷書をなす。禪師深く奇とし、謁を賜ひ、寺中の大衆もまた詩を賦して是を賞す。初め養拙樣を法林寺中淸光院に學び、後古法帖をとりて晉唐に泝り、畫は紀の國に往きて祇南海に畫法をとひ、又大和の柳里恭に彩色の法を學ぶ。又土佐光芳に國畫の法を學ぶ。時に望玉蟾とともに相いへらく、「從來畫家いまだ漢法を學びず。倶に是をはじめむ」と。玉蟾は唐伯虎を學び、此の翁は梅道人を學ぶ。各竟に一家を成せり。後又倪雲林に倣へり。漢法の山水を畫きはじめたる比、扇面に圖して自から携へ、近江美濃尾張の國々に售らむとす。人多く怪しみて買ふ者なし。是に於て空く京へ歸らむと

紘―三味線
王之猷―晉の王羲之の子、
鄭莊―則漢の人
孔北海―後漢孔融、北海の相たり

大雅諫めて、其の由を說いて曰く、「もし諫に從ひ給はゞ止まらむ。聞き給はずば速に還らむ」と。あるじ首をふりて「諫にも從はじ、還しもせじ」と、ます〳〵門を堅くして守らしむ。大雅終に裏の垣を越えて歸りしとなり。或時は驛路に出でて、囘國あるひは順禮の道者をも引きて、禮を厚くして留むるに、鑓をたて供人あまた具したれば、刀のためしものの料にあざむかるゝならむと心得て、大に懼れて逃るもの多かりし。又博奕の罪によりて世の境を放たるゝ者を、吏に私して邸の內に引入れていふ、「生涯こゝに宿せば、猶禁獄も同じ」と、其の者をも賤しめず、詞を厚くして其の伎をなさしめ、その術の微に入るをよろこぶ。又ある時には從者あまた引連れ、馬上にて野路を過ぐるに、女乞丐の絃歌して錢を乞ふものにあひて、やがて其の絃をとりて自から彈きすさびて興に入り、金を與へて去る。絃またもとより妙手なりき。凡爲す所人の不意に出づるは、王子猷に似たりとやいはむ。客を好むは鄭莊、孔北海の風あり。

池大雅　附　妻玉瀾

大雅池氏、諱は無名(阿利奈と唱ふ)字は貸成、通名秋平、書畫には或は九霞山樵と書す。京

大和郡山同姓—柳澤家の一家
倶舍論—菩薩の作
朱舜水—水戸の賓儒、明の浙江餘姚の人、亂を避けて本邦に歸化す
祇南海—紀伊藩の儒者、文人畫を善くす
登極—天子の御卽位
大雅—池野大雅、有名の畫家
内を好む—婦人を好む

近世畸人傳　卷之四

柳澤淇園

淇園柳澤氏、諱里恭、字公美、一號玉桂、通名權大夫、大和郡山同姓の士也。文學武術を始めて人の師たるに足れる藝十六に及ぶとぞ。佛學さへ心得て、倶舍論を聞きし僧もありけるとかや。中にも畫に長ず。朱舜水傳來の彩色の法を紀の祇南海に學びて、殊に人物の設色、世これを賞す。水に漬し、力を用ひて揉み洗へども落ちずとなむ。爲人曠達不拘、客を好みて、才不才をいはず、寄食せしむるもの幾人といふ數を知らず。或はかりそめに來たる者をも、年を經て還さず。家祿多けれども、これが爲に乏しきに至る。初め某の年、侯使として登極の御賀のため都に上りしついで、大雅にまみえて相歡し、これより往來絕えず。或時、大雅大和に行きしに、路費盡きたれば、假初に立寄りて是を借るに、例のごとくとゞめ、門を閉ぢて還さず。家臣又いふこと有り、「幸にとゞまりて内を好まるゝの病を諫め給はれ。多慾の爲に身を亡し給はむを憂ふ」といふ。こゝに

たてまつる龜の尾山の早蕨は千世を數ふる手に似たる哉

入道殿甚賞し給ひ、秀歌に返しなしとなむ、のたまひおこせしとかや。さるに、安永三年午歳五月二十八日に、彼の君薨じ給ひ、此の法師も寂せり。同じ年月日なりけるも、あやしく哀なる契なりけり。

冷泉民部卿―冷泉爲村
發心遁世して―佛道に入る志を發し出家して
彼の卿入道し―冷泉爲村の剃髮し
山がつ―山に住める賤夫

ひし處半枚あまり、物語しながら書かれしを今なほ藏せり。はじめは冷泉民部卿の君の御もとへ立ちいりて、歌の事とひまゐらせしかど、是もよしなきすさびとて、後はまゐらざりき。予ある時、戲れて問ふ、「はじめ發心遁世して江戸をいで給へるにあはせて、やごとなき御あたりに立ちいりて歌を學び給ふはにげなし。其の道いかにぞ」法師笑ひて、「さばかりあわたゞしくいで走らずとも、のどかにせむやうも有るべきを、若き時の心ずすみ、ひとへに野狐の精靈也。さてしも歌を好むからに、かしこき御あたりに參りしも、またきつねなり」と答へられしが、理に覺えき。さて年を經て、彼の卿入道し給へる後に、嵯峨へ尋ねおはせしに、法師あらざりしかば、そこらの山がつにつけて、一筆を殘し給へり。

住むかたは都の西と聞きながら霞へだてて春もへにけり

御返し、後にもてまゐりしは、五首ばかりなりき。

春がすみへだてこし身の怠りも今更くやし君にとはれて

といへる外は、今忘れたり。又或時、わらびをこの御もとへまゐらせける時、添へたる歌、

たとみられむ―尊ばるべき
きすぐに―朴直に
智度論―龍樹菩薩の作

あすもまた朝とく起きてつとめばや窓にうれしき有明の月

捨てし世を猶も忍ぶの草ならばおふる軒ばを又やいとはむ

神祇の歌とて

捨てし身に何の願ひはなけれどもこころの道を神に祈らむ

此等は其の常の體也。或はけしきの歌にては、瀧を讀めるに、

うきて立つ雲をなかばのとたえにて千尋を落る山の瀧つせ

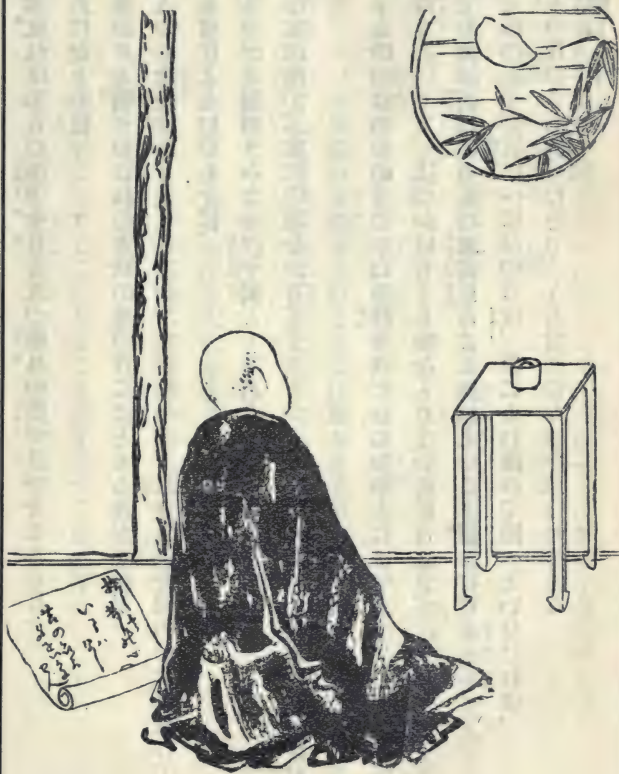
無　題

有明の月靜なる庭の面にをり〳〵落つる木の葉をぞ聞く

興遊未央といふことを、

暮れ行かば桂にくだせ月も見む花の大井をさしのぼす船

猶よき歌ども多かりしを、さのみはえ覺えず。才ある人なりしかども、人にたとみられむさまをせず、きすぐに、はた狂したるやうにてありき。或人は評して、「いらぬ人に才の有ることかな。これをたからのもてくたしとはいふべし」と笑ひぬ。記憶最もつよく、智度論を見られし時などは、長き文段をそらに唱へられしに、「其の中かきて給へ」と云

野邊見れば知らぬ烟の今日も立つ明日の薪や誰が身なるらむ

月にかりの贊

かりかりと鳴きわたれども秋の夜の月にはとまる我が心かな

人のしき衾のあとまくらをわかたむために、白ききぬを頭のかたに付けて、歌書き付けよといひしかば、

まくらかる床のうみなる汐干潟こゝをあしかる沼となすなよ

浮木法師が二尊院の坊をかりてすめるが、火をあやまちて燒けし時、かけりいきて、

かよる時つねの心のうごかぬを終りみだれぬためしにはせよ

ぬす人いりて、はつかにもてる物をとりていにけるとき、

捨てし身は破れごろもに麻衾足ること知れとのこし置きけむ

矢部の正子が宮仕へに出づる時、何にまれ讀みて給へといひければ、

行末の身のさちあらむをり〳〵も世の常なさを思ひわするな

題しらず

人の志を貴むが爲に、聞くまゝにこゝに擧ぐ。近年その里にて化せりとぞ。

僧涌蓮

高田派―淨土眞宗の一派

眞率―眞面目

僧涌蓮は伊勢の人、高田派の僧にて、江戸院家地に住職せるが、高僧傳を見て、頻に感發し、病に堪へざるよしの一封書をとゞめ、草衣にあらため、忍びてひとり京へ登り、生島なる人の假初なる物見の亭に潛みしが、後は嵯峨のこゝかしこに住めり。生涯一物もたくはへず。明け暮れ念佛するいとまには歌をよめりしに、歌書一巻をだにもたらねば、詞を莊ることもなく、思ひに任せたるが、かへりて眞率人の及ばぬ所ありき。今記得たるをはつかに擧ぐ。

ふるさとのはゝのもとへ行く人あるとき、

忘れても寢覺するとはかたるなよ子は老いぬると親の驚く

美人の髑髏を見る繪の贊

朝夕の鏡も今は手にとらじこれをまことのすがたみにして

もじをかしらにして數首讀みし歌の中に、

行走す―行きて食を乞ふ

ゆこ―行かん

とたづねしに、しばらく首を傾けて思惟し、「門前へ行きて參れ」とありし。世情に疎き事すべて此の類なり。寶暦六年丙子の歳四月十七日、今は限りに見えしかば、年比仕へたる下部の僧、師の畫像を持ち來て、枕邊により、「今迄師の御贊を乞はむと思ひしかども、呵り給はむを恐れていひ出ざりき。今は御限と見ゆれば、一言書きつけて賜はむや」と乞ふ。師「よしなき事をするもの哉」といひながら筆をとりて、

ゆかう〳〵と思へば何も手につかずゆこやれ西の花の臺へ

と書きて、西に向ひ合掌して逝せられしとぞ。

僧日初

攝津國池田に寓居せる禪僧日初は、もと何處の人と云ふ事を知らず。食あれば閉居し、食盡くれば行走す。甚貧しくして、袈裟破れ、衣薄けれども心とせず。禪餘國學を好み、反古の裏に筆を染めて、日本春秋といふ書を著す。水戸の日本史に類すといへども、其の所志、他を善に導かむのまうけにて、人々の傳に褒貶あり。されば春秋をもてなづくとなむ。其の書は、池田の人寫し持てりと、聞きぬるばかりにていまだ見ず。たゞ此の

我執―我をを立つる事

山法師―比叡山の僧

山王―近江日吉の神

大師―傳教大師

冥加―佛の助力

蚊ひとつに施しかぬるわが身哉

是は淨土に志を決したる身にも、流石に我執の離れがたきをみづからいましめたる意とぞ。俳諧には、都不覺と名をしるさる。また艸花にすきて、朝がほあるはなでしこ、さゆりのたぐひすら、同じ花ながら、樣かはりたる者數十百程に及べれば、此の境界にしては奇僻なりと人はいひけるとかや。また奇なる話は、或年の彌生に、山僧多く伴ひて、師の庵を訪ふに、櫻盛なるを皆めでければ、「此の花のうつろはぬうち再び來給へ」と約せらる。さりければ、他日又誘ひ合ひて行きたるに、ひねもす唯茶を出さるゝばかりにて、何のもてなしもなし。長き日も暮れかゝりければ、「今日は花見とて招き給ふからに、たゞにはあらじと思ひしに、たがひたる事なめり」といひしかば、師顏をしわめて、「さてもにがにがしき山法師かな。わが若かりし時までは、さはなかりしぞよ。かゝる花を見ながら、尙心の飽きたらで、飮食を求むるやうやはある。かく足る事を知らぬ心にては、山王や大師の冥加もよもあらじ」といましめられしかば、各花の興もさめて、すごすご歸りしとなむ。佃房がとひし時も似たる事にて、雅話數刻に及びしかば、「門前に賣る所の蕎麥を取り來て此處にてたうべむや。煩らはしとおぼさば彼處へいきてむや」

李白云々―唐の詩人李白の作れる把盃問月の詩をいふ

李白が句意によりながら、實情を發露せるも哀なり。

又「春は來ぬれど、こもりをる」てふ言書ありて、

子ども等よ松の字をかけ子の日せむ

なほよき句ども多かりし人也。予二十年前の舊友なれば、ついでにこゝに追慕す。

世並の俳諧行脚などいふ類ひの人にはあらざりき。

僧佛行坊

佛行坊僧都敬已は、もと日枝山無動寺善住院の一代なれども、院務を厭ひ、まだ中年なりし比、院を辭して、坂本に隱居し、律儀をたもち、ひたすら念佛の一行に歸す。しかはあれど、また風月の情やまず、俳諧をたしみ、佃扇と交深し。その句聞き傳へしが多かる中に、

俵物に松かさもあり冬籠

因果應報の心をとて、

おどしたる報いにくつるかゝし哉

見良などに問ひて能く得意す。されば、知る人は強て醫療を乞ふもあり。予も幼くして痰を憂ふること深かりしを、此の和尙の醫療によりて、今に及び、其の時のごとき苦を知らず、大に賜を受く。和尙「只一事桶工の輪を入るゝ味は知りがたし」と語り給ひぬ。延享三寅年五月住院に遷化す。時に遺偈を書きて、(偈は遺忘す)五月といふ所に至り、侍者「是にて止め給へ」といへるを、和尙「意に知れり」と答へて、直に十四日と書き終り、ついで寂す。歿後身體柔軟にして生ける人のごとし。是等正しく予の知る所也。是は前に一傳を立つべけれども、和尙の法德行狀はこゝにとどまるべからず、今は纔に予の幼くして知る所のみなれば、附錄に屬せり。

○原松門人に、原元佃房といふは、淡海八幡の人にて、多能なれども、生來赤貧なり。酒を好みて意氣慷慨す。其の比鄕人大菊の新花を競ひ、一莖あるひは數十金の物を翫ぶを諷じて、

柴の戸へ支ふる菊を貰ひけり

また月見に、

誰々は死ぬうつぶいて月見哉

意氣—奮激

生死事大遁れはないぞ諸人よ昨日のゆめが今日もさめねば

居士かへし、

夢に死し夢に生るゝ朝寝坊さめて苦をする釋迦よりはまし

吉備津のかたへおもむくとて、和尚に留別す。

行く水をつなぐはどこの蔦かづら

某の年、

氣がむけば杖にはねあり庵の春

と歳旦せし正月、頓に死せり。

獅象—俊傑機發閃電—頓智の早き事

右、兩傳の間に混じ出せる覺芝和尚、諱は廣本、京師の人にして、淡海馬淵庄巖藏山福壽禪寺の一代也。(巖藏山は予が曾祖父汲江軒是閑、族人と共に建立せる禪院也)其の比欒門の獅象と聞え、機發閃電のごとし。嘗て本山の幹事たりしを、病をもて辭して退く時、僧問ふ、「和尚は是金剛の性體。何の病かある」答へて曰く、「金剛に金剛の病あり」と。平生機用此の類也。其の外一囘耳目に觸るゝ事、何事によらずよくせずといふ事なし。小僧の袈裟衣まで自ら裁縫して著せらる。又醫藥の事をも

疾間なる時
―病氣の少し快き時

和尙といへるは、殊に相得て善し。和尙京師にして疾甚しかりし時も吾が宅にて介抱し其の妻女起臥を助く。和尙疾間なる時戲れて、

女程めでたきものは又もなし釋迦や達磨をひよい〳〵と產む

和尙疾重しといへども、疾と眞心と主客正しく別れて見ゆ。及ぶ所にあらずと深く感ず。又賣茶翁も知己にて、翁茶をうらば、吾は藥をうらむと、既に其の具をも調へしかども禁足の志決せしかば止りぬ。終る年六十一歲なりき。

○猩々庵、原松は、伊賀の人にして、後京師に住めり。其角門人にして俳諧を業としたれども、文學あり。專禪に參し、又酒を嗜む。背面の達磨尊者の贊に、

こちらむけ酒がいやなら寒の餠

又ある時、布袋和尙の圖に題して、

小袋に大千いれて花ごころ

といへるを、右の見良覺芝和尙へ語られしかば、和尙微笑して、「いまだし。我ならば、「底ぬけの俗に實あり芥子の花」とすべし」と、示されしを聞きて、速に往きて敎の忝きを謝し、後しば〳〵問訊す。ある時、生死の問に答へて、和尙、

昨日にはかはるとなしに身にぞしむ荻に音なふ秋の夕風

さしたる節はなけれど、自からあはれに覺ゆ。

太田見良　猩々庵　附 僧覺芝　艸房

太田見良字は資齋、伊豫の大洲加藤侯の士也。學を好み醫を學びて京師に遊ぶ。初め富商某が僕を療する日、衆醫竝び座す。適主人其の席を過ぐるに、衆醫皆伏す。主人敢て答禮をなさず。見良大に恥ぢて復その門に入らず。後故國の侯の翁主、官家に嫁し給ふに召されて侍醫となる。養生の法をもてしば〳〵諫むれども用ひられず。故に脚疾に托し、祿を辭して退く。此の後永く家居し梱を踏まざるは、此の言を實にすとなり。自ら往かずといへども、病客門に充ちて醫療を乞ふ。學生も亦數多從ふ。其の淸白の一事は、藥物において極品を選みて價をとふ事なく、その言にいはく、「もし時の價を知れば、おのづから鄙吝の意生じ、調劑の間其の價貴きものは減ずるに至る。わが淺ましきを思ふが故に愼しみてとはず」と。聖護院邑に住みて、常に室を淨除し、書畫瓶花盆栽などを翫び、樂しみて一生を盡せり。もとより禪を信じ、檗宗の諸老に交る。就中淡海の覺芝

翁主―支那にては皇族の女を云ふ語
官家―公卿

行を教ふるは奇特也。猶蜀の嚴君平が賣卜によりて人を導くがごとし。自から孤相に住し、遂に餓死せるは甚しけれども、人に寄りて喰ふは、餓の相にして、漢の鄧通が餓死の相ありて、終に長公主の衣食を假り、一錢も吾が有と名づくる事を得ず。寄二死人家一と班史に見えたるにひとしく、かくては生けるも死ぬるにひとし。されば、中行にはあらざれども、死生の間にわづらはざるは、奇人といふべし。

森金吾

森金吾某は、阿波國小鳴戸の里の人なり。弱冠より隱遁の志深かりしかども、京師の官家に仕官せること年あり。終に四十近き比、致仕し、故郷に歸り、只膝を容るばかりの庵を結び、糂粏瓶をもたくはへず、蕎麥の粉をもて朝夕の飢を凌ぐ。米を炊がむづかしければとて、たまく徳島の城下に至れば、知る知らぬ人ともにゐやまひもてなして、好める酒をすゝむ。老いても健なる人にて、七十にあまる年金峯山に詣でしかば、かゝる齡の人の登山昔より例なしとて、山坊の記錄にもとゞめしとなむ。生涯心ゆく所に遊び、身の貧を知らず。八十歳にして、安永九年子歲に終る。其の病中の吟、

蜀の嚴君平――前漢の人
漢の鄧通――前漢の人
班史――前漢書は後漢の班固の撰なれば云ふ
中行――中庸の行
弱冠――二十歲
官家――公卿家
堂上方――公卿
糂粏瓶――糠味噌瓶
金峯山――大和國吉野、山坊――金峯山の御師の坊

心術―心様

を見て曰く、「子明日は花見に遊ばむとするや」また一人にはいふ、「暮れなば青樓に登らむと思へるや」など、其の言一もたがはず。あるとき一人を制して出入をとゞむ。いかなる故とも知らざりしに、後に或家婦に淫せり。其の知れるもの翁に問ひて、「もし此の事にや。然れども、其の時はさる事なかりしにはいぶかし」といふ。翁云く、「血色既に動きたり。それも諫めてとゞむべきなれば、事に先だちてとゞむべし。諫の及ばざるを決する故に交を斷てり」と。又博奕に耽りしものも、かくのごとくなりしなど、其の門人話せり。凡そ人を相するに、必心術を説きて曰く、「相善也といへども、志不善なれば益なし。相の不善も亦能く志行をもて勝つべし」と。又曰く「相を看る人は世に多し、相を行ふ人は稀也。吾は孤相なり。孤なれば必貧なり。孤に居て貧を安んずべし」と。其の家を然るべき人に讓り　一子新次郎といへるも、他の嗣とす。妻は早く失ひたれば、獨身にて、食あれば喰ひ、盡くる時は食はず。後又知己門人等に別を告げて曰く、「我餓死の相あり、徒に生きて他の施を費すべからず」と。是より門戸を閉ぢ出入を禁じて食はず、數日の後逝せり。齢五十有七也。

按ずるに、近世相をいふ人多く、俗客亦多く是を喜ぶ。然るに此の人相によりて心

近思錄―十四卷、宋の朱子呂祖謙の合著

嗟來の食―禮なくして與へたる食物

狂狷―狂は志のみ高くして行及ばざる、狷は知識及ばずして守るを餘あるもの

相學―人の容貌を見て其の人の運命吉凶を判斷する學

音の人々食を贈れどもあへて受けず。「吾此の恩をかづきて報ゆべき餘命なし」といひて、遂に近思錄を看ながら餓死せりと、本地の儒士、西川氏の記に褒賞せり。

私按ずるに禮檀弓に、餓人嗟來の食を受けず。與ふるもの謝せりといへども、遂に喰はずして死せるを評して、曾子曰く、「微與。其の嗟や去るべし、其の謝や食ふべし」と、見えたるにつきて思へば、乞丐をもてみるは嗟來也。然るに是を謝せば食ふべしとさへいへるに、此の長崎人の知音、よも禮なくして贈るにはあらざるべく、もとより朋友に財を通するの道あるをや。餓死に及べるは狂狷の甚しきものか。但し次に龍袋を評せるをあはせみるべし。世の貪る人には、是等の人の毛髮の末をも吸はせばやと嘆ず。

相者龍袋

龍袋は赤塚氏なれども、幼より他家を繼いで中村を稱す。名は重治、通名孫兵衞といへれども、號をもて知らる。爲人世務に疎く、家の有無を心とせず、相學に長じ、門人も亦多し。相者は多く既往を知りて、將來に昧きに、此の人常に門人に會して、其の血色

—古今集「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ」—
うへ—織田信長
とり〴〵になりて—織田氏の沒落して
そゞろになりて—狂氣して

もたのみ入り候。所がらの御住居、夕顏の垣ねもまばらに、人めもつらくおぼしめしさむらはゞ、東山ゆうくわん房へ御たより候はゞ、よろしくはからひ申さるべく候。法師は取つきあら〳〵しく候へども、底意なくて、山の井を結びわけてもあしからずはからひたまひまゐらせ候。折から所々のさわがしさ、うへにも御けしきおだやかならず、つき〴〵の人も心ならず候ゆゑ、うれしき便までに、あらまししどけなう候。かしく。

此の文に、男もなくさみてわかれす、五とせほどへけるが、男身まかり、岐阜もとり〴〵になりて、世のさまかはりしかば、此の女氣そゞろになりて、うかれありきける。かのよみけるは、此のお通の文とぞ。狂女もさすがに哀なり。尤お通の心ばへ、文雅の其の代にも似ざるがめでたく覺えて、近世の例には、やゝふるびたれど、こゝに錄す。

長崎餓人

長崎の人某氏(今遺忘す)吉左衞門といへるは、貧にして學を好めり。生平酒を嗜む事人に過ぎたれば、猩々翁と稱す。ひととせ、此の地米穀乏しかりし時、數日食はず。知

すさめられがち—飽かれ勝ちもとの清水

とよみて打ふしがちなるを、お通はもとより情ある人なれば、色にいづる心の亂れをひそかにとひ聞きて、やがて喜藤を召寄せ、千代を得させければ、よろこび京へ伴ひ、五條のほとりに住みけり。さていかゞしたりけむ、家衰へ世に住み侘ぶるからに、かたみにうらむるふしぐ〵もいできて、おのが世々にならむとす。千代このよしを岐阜へ告げて歎きける文のはしに、

絶えはつる物とは見つつさゝがにのいともたのめる心細さよ

といへる惟喬の親王の御うたを書き添へてやりける。お通あはれに覺えて、かの男への文に、

久しくよすがなく、おとづれきかまほしき折から、千代かたよりあらましの事ども、文して聞え侍らふに、さゝがにの糸たえ果るものとは見つゝもふる事など、くれぐ〵歎きこしさむらふまゝに、このかへりごとに、

とにかくに折節ごとのたがひめを恨むる中ぞ契なりける

と申し遣はし候。さなきだに、女は心淺くて、何くれの事を、せばき胸に保ち侍へば、男にすさめられがちにて侍らむずれども、「もとの清水」忘れがたき御心を、我し

岡白駒—京都の儒者、明和四年歿

おもひもの—愛妾

りしは難き事といふべし。又其の文學の師、岡白駒、物をいひ出では他人の諫に從はず、甚偏屈なりしに、宗叔一言を出せば必ず折れたり。故に家人もてあましたる時は、必ず呼びたりと、同門の那波魯堂話せられき。著書論語の解寫本にてあり。古註尙書、禮記、京にて印行の本は此の翁の句讀なり。

文展狂女

天正の比、年四十にかたむける女物狂して、一巻の文を筥に入れ首にかけて、花の比は東山の木かげ、また月の夜は、五條の橋の上などについゐて、彼の文を出し高らかに讀み、又沈みて讀みなどして、聲をあげて泣き悲しみ、何やらむ獨言いひて後、取納めて去る。これは織田信長のおとゞのおもひもの、小野のお通に仕へし千代といへる女にて幼き比より侍らひしかば、女の態は更也、文の道も心をよせて、情あるものなりしに、ある時、都の商人喜藤左衛門といふものに忍びて逢ひ初め、心を通はす事みとせばかり、思ひあまれる秋の暮に、

うらやまし人めなき野の蟋蟀鳴くも心のままならぬ身は

印籠—藥を入れて腰に帶ぶる小さき匣
鹽見—鹽見小兵衛京都の人、研出し蒔繪の名工

好めり。豪富なりしが、後は甚貧し。されども憂とせず、酒を好みて狂態人の笑資となるもの多し。事に感じては、頻に涕泣し、激論に及びては席を打ち、高聲四隣を驚かす。ある朋友の所にて此の如くなりしかば、去りて後、主人獨言して、「あゝきちがひ哉」といひしを、侍婢聞きて、「されども、多言なるばかりにて、騒ぎ走り給はでよし」といひしは、眞の狂人と思ひし也。書を講ずる時も、吾が意に愜ふ說あれば、「朱子大明神徂徠大菩薩」などいふ。意にいらねば、「誰めが此の惡說」など罵る。ある時、人の遺れる蠟燭ありしに、講說夜に及びしかば、手にまかせて燒き盡し、狹き室晝のごとくなりし事もありし。予が家舊交あり。同じく三條高倉街に住みしかば、來りて酒飮まれしついで戯れて、「乃公のもたまへる印籠貰ひ給へ。吾と共に購ひつる鹽見が蒔繪のもの善し」と勸む。予まだ六七歲ばかりにて、頻に乞ひしかば、父叱りしほどに、泣出したり。宗叔「よし〳〵、乃公の與へ給はずば吾參らせむ」と約して、別の印籠を、あざむかず、その明の朝とく持ち來りて與へられし。是はまだ貧に至らぬ先にて、其の餘の態も唯此の如くなりしとぞ。此の人にして殊に稱すべきは、家母に孝ありて、其の生涯は貧を苦しませじとせられし。家母もとより富の中に育ちし人なれば、茶香、風流の事を翫びて終るに、一言制止せざ

うつゝなのいもせ物語や」と筆をとゞめて、

折る事も高根のはなやみたばかり

といへるもをかし。すべて、文章は上手にて、數篇書きあつめたるを、昔ある人より得たるが、ほどなく貸し失ひて惜しく覺ゆ。發句どもは、人口に膾炙するが多き中、等の繪贊を、禿筆して書けるを見しと人の語れるに、「その物を育てむとて、其の物を損ふ」と詞書して、

竹の子を竹にせむとて竹の垣

といへるなど、行狀にくらべて思へば、老莊者にして、俳諧に息する人にはあらざりけらし。さればこそ、その辭世も、

來山は生れた咎で死ぬるなりそれで恨みも何もかもなし

といへりとなむ。

加島宗叔

加島矩直、通名莊右衞門、薙髪して宗叔といへり。美濃岐阜の人にて、京に家す。學を

く者
造物者云々—女の子を生むをいふ

曠達云々—心廣く物事にかまはず
邏卒—市中見廻り番人

いづこの云云—原本の字缺けて判然せず

人著せる老子國字解、近き比刻に就けり。假名をもて書きしかど、一家の見識あり。他の俚諺抄の類にあらずと、ある人は評しき。

小西來山

來山は小西氏、十萬堂といふ。俳諧師にて、浪華の南今宮村に幽棲す、爲人曠達拘らず、ひとへに酒を好む。ある夜醉ひてあやしきさまにて道を行きけるを、邏卒見咎めて捉へ獄にこめけれども、自から名所をいはず。二三日を經て歸らざれば、門人等こゝかしこ尋ね求めて、官に訴へしにより、故なく出されたり。さて人々「いかに苦しかりけむ」ととぶらへば、「いな自炊の煩ひなくてのどかなりし」といへり。又或年の大つごもりに、門人よりあすの雜煮の具を調じて贈りたれば、「此の比は酒をのみ呑みて食に乏し。是よきものなり」とて、やがて煮て喰ひて、

　我が春は宵にしまうてのけにけり

と口號たり。妻もなかりし旨は、「女人形の記」といふ文章にて知らる。其の中「湯を呑まぬは心憂けれど、さかしげにもの喰はぬはよしといひ、「又舅は何處の土□ぞや。あら

伊勢の御師―新年の暦を持ち來る神官
宗廟―大神宮

金蘭齋―姓名不詳出羽秋田の人
老莊者―老子莊子の學者
まどしく―貧しく

代神樂―太神樂、市中を獅子舞品玉などの曲を演じて歩

わびながらとりて歸られしが、そのまゝ神棚に置きて、その年の暮に伊勢の御師の來れるに附せられしと、其の拾ひし書生の話せし。これは還すべき主なければ、宗廟へ納むる心なるべし。よき計ひにこそ。

金蘭齋

金蘭齋は、眞の老莊者にて、心も境界も是にあへり。尤家まどしく、いづれの書にても講を乞ふ人あれば、「吾其の書なし」といふ故に、購ひ求めて贈るに、開講の日に及び書生到れば、其の書は既に米に代へたりといふ。止む事を得ず、書生の本を與へて講ぜしむ。又門人常に衣服を調へ贈るに、程なく賣る故に、あるたび背に圓形を白く大にして、中に金蘭齋と書きたるを贈られしに、さながら著てありき、物とも思はず。又或時客至りしに、猶寐ねたり、おどろきて衾の内より出づるを見れば、袴を著ながら臥したり。又或時は講の半に代神樂といふもの、笛を吹き鼓を鳴らして街を過ぐる聲あり。書生にも謝せず、たゞちに走り出でて、小兒とともに彼の者の後につきて歩きける。あるは道路にて、女の帶の結を指さし微笑して、「造物者の無盡藏」といひしもをかしかりしとぞ。此の

貨殖せしめ
―財産を増殖せしめ

を指さして、此の事を知る人語りぬ。
又一人は湖中長命寺の濱にて、旅舍のあるじ、巡禮の一連が路費の金數十片を、一つにして持てる男、袋に入れながら遺亡せるを見つけ、觀音寺へ至る道を考へ、二三里ばかり追ひかけて返したれば、其の旅人は越前敦賀の人にて、此の恩に感じ、故鄕に歸りて後、交易の事を紹介して、湖中の人に貨殖せしめ、今孫の代に及びてもかはらず、敦賀へ往來し、その家乏しからずと、長命寺の僧語られき。貧人にしては殊に感ずるに堪へたり。
又三熊生語らく、其の祖父京師千本通にて、金百片を拾ひ、そのわたりの茶店にやどりしてたづね來る人を待つ。あくる夕つかたに至り、落せる人にあひて還しければ、此の金をわかちて與へむといふを受けず。しひてとかくいひしかば、其の茶店にやどりしほどの價を、彼の主より出させしとなり。
又くだ〳〵しけれど、ついでに思ひ出せし事を記さむ。伊藤東涯先生、二條街にて藥の袋の落ちたるを、つれし書生に拾はしむ。內を見れば方金數枚あり。先生眉をしわめて、「よしなきものを拾ひし事よ、しるせる名もなければ、還すべき由なし」と

暦五年殁、隨筆たはれ草、三卷
管幼安—惻隱の誠—人の難義に同情すること孟子の語
蒙求にも云云—蒙求卷下

に與せむ。固より物を拾ひて還すはさるべき理ながら、私心におほはれて是を行ふ人稀なればこそ、蒙求にも、黄向訪主と標し、黄向行於道拾得金嚢乃訪主還之と註す。それはなほ名もさだかなるほどの人にや。予が見聞くところ三人、皆貧賤の人にして、此の事をなす。一人は化子の老婆、三條室町街にて、絹被の帛に包みたるを拾ひて、其の前なる商家によりて、「尋ぬる人あるべければ還し給はれ」といふ。商家事繁き由をいひて肯がはざりしかば、「情なの人や、落せる人のうれへを思ひたまへ」と誡めしに、恥ぢて預り、また其の名をも問ひしかば、「宇谷の龜」といへり。さてしばしありて、物をたづぬる樣なる者を見つけて、とひ正して與へしに、大に悅びて、これが報いに、米ぜになどを持ち來り、「彼の婆子來る事あらば贈り給はれ」と托す。果して又來て、「いかに落したる人は知れたりや」と問ふ。しかぐ〜のよしを告げて、彼の報いの物を與へしかば、笑ひて、「是を受くる程ならば、彼のものを賣りて錢を得侍らまし」といひ捨てて、歸れりとぞ。

又一人は近江八幡の近邑北庄といふ所の老農、八幡の人の金三十片を拾ひてかへせり。これも露ばかりの報いを受けず。其の老人繻袢一ツ著て、孫を負ひてありし

へば、「これはおれがのぢや」と答へて童べ買ひて翫ぶ。されば此の人いで來れば、童べ集ひて喜ぶ事なりし。後はまた難波に往きて、賣る事京のごとくして、終にとある家の軒の下に端座して死す。傍に小さき卒都婆を建てて、

小車のめぐり〳〵て今こゝにたてたるそとばこれはおれがのぢや

と書きつけたり。いかなる人の世を翫びてかゝりけむと、その時を知る人語りぬ。

山科農夫　附　評中五名

山科の傍に田業をする父子ありしに、道行く人の金の入りたる袋を落し置きけるを、其の子高き丘にかけ上り、呼びて還さむとす。「何事ぞ」と問ふに、しか〴〵と答ふ。「落すも拾ふも世のならひなるに、よしなき事にたづさはりて、わが田わざをな捨てそ」といひけるとなむ。此の人は簣を荷ふ丈人の類なるべし。

右は雨森芳洲先生「たはれぐさ」にかける儘也。げにもこれは杖を植てて芸る人に似たり。又管幼安が、金を見る事瓦礫にひとしく、鋤を揮ひし俤を覺ゆ。奇といふべし。然れども、落す人の憂をはかりて呼びて還さむとするは、惻隱の誠なり。吾は之

卒都婆―上部塔形の細長き板、經文或は梵文を書し供養の爲に建つる者

山科―山城紀伊郡

簣荷丈人―論語微子篇に出づ「篠を荷ふ」

雨森芳洲―安藤對馬守に仕ふ、平安の人、寶

沓をうつ―草鞋を作る

月代―男子が額より頭の中央へかけて髪を剃りし事

然らざれば喰はず。萬正直此の類なれば、邑人甚愛しけるゆゑ、莊官ふるき家と田十畝を與へしに、苗代の時より刈り收むる迄は、其の田に庵を作りて是を守り、沓をうつ。稲をこくにこき箸といふものを用ふ。是は昔のならはしにて、今はみな稲こきといへる具をもて便利に從ふに、このをのこ衆に異なれば、いかにと問ふに、「われいなこきなし。人の物を貸りてつかへば損じてあしし」と答ふ。（因にいふ、昔はみなこきばしを用ひ、所作なき老寡婦など是をこくに雇はれて口を糊せしに、いなこきといへるもの出できて便利につけば、かく悲しきやもめのうれへとなりぬる故、いなこきをあだ名して、ごけだふしともいへるとぞ。世のこと捷徑によれば、皆つひえある事此のごとし）常にうち笑みてあれども、兒童などあしきわざすれば必叱す。月代を剃らず、生ひたるまゝの髪をわらにて束ねたり。終るとし七十に餘る。誠に稀代の者なりしと、その近邑の人語れり。

手車翁

享保の初、京に手車といふものを賣る翁あり。糸もてまはして「是は誰がのぢや」とい

れし。相似たる事なり。

位田儀兵衞

淡海神崎郡位田邑に(位田は伊牟天と訓ず。もとは里人の訛稱なるべし)儀兵衞といふものあり。産るゝ所は知らず。二十有餘にして此處に來り、賃雇を業とす。もし雇ふ人なき時は、他村に行きて食を乞ふ。雇ふ所一日の糧に過ぎず、餘を與ふれば辭して受けず。其の邑人「他に往く事を止めて邑中に喰ふべし」といへば、「否、邑中の人は我が行歩かなはぬ時頼むべければ、今は煩さず」と答ふ。身にはつゞれをまとひ、居所は方丈にも足らず。暇ある時は豆を取りて數ふ、何の爲といふ事を知らず。又常に口の内にてつぶやく事あり。是はた人の耳に聞きとり難し。(或人いふ、明朝に大豆を數珠とし念佛せし人あり。これもそのたぐひならむかとぞ)路の傍に建てし札の類、書きたるものをよむ事を好む。此邑中に吉凶の事あれば、かたぎぬを引かけ往きて慶弔す。且葬あれば必送る。しかも一言を出さず。人もし新しき衣服を與ふれば、舊きを脱ぎ捨て、嘗てくはふることをせず。又人の家に雇はれし時、夜に及びて務あれば、夜の食を喰ふ。た

解(以上皆寫本)百人一首うひまなび、淨土三部假名抄言釋、(二部は印行)此の外人の問に答へて著す所、竹取歌の解の類、小册に數部あり。此の門人の中、藤原宇萬伎、楫取魚彦もまた著述あり、世間に聞えし人なり。又倭文子といへるは、歌文章ともに奇才ありて、はやく歿す。碑文國字にて、眞淵著して甚惜めり。その家集梓に行はる。

桃山隱者　附　高倉街門守

いかなる人といふ事を知らず。伏見桃山に乞丐のごとく藁席をもて圍ひたるものして住む人あり。いかにして便りけむ、稻荷羽倉氏のもとにて書を借りて見る事常なり。遂に名をいはず。そこにて身まかりし後、いとさわやかなるさましたる士、供人など供したるが、羽倉氏に來りて、其の人の臣なるよしいひて、生涯の恩を謝しけるとぞ。いとあやしき事なり。今は八九十年前、三條高倉街の門を守りける化子も、夜時を擊間に、その小屋に書を高く積みておしまづきにかへ、書を見居りけるが、これは迎ふるもの不意に來りて、しひて伴ひ歸りしさま、いときら〳〵しかりしと、其の街の人、老の後に語ら

中さだ—中年頃

記のかなよみ—古事記の訓讀

鳴子ひく門田の稻のほどもなくたちてはかへるむら雀哉

移香を花にかすめてたどるかな一夜のいめの春の明ぼの

宇萬伎いふ、是等姿も詞もよろしきものから、心かしこきに過ぎて、いと後の世のさましたり。中さだには、詞もすがたも唯あがれる世のさまにのみよみうつされし多かりしを、やゝ老に至りて、かゝるさまに(前のうた共をさす)のみ詠みいでられしは、いと高しともたかし。世に聞きしる人はありやなしや。蒿蹊云ふ、此の老の後のは、己も聞きしる人の數に入るべし。又若きほどのは、後の世のさまなれば、歌ぬしの後の意にはかなはざらめど、其の才のたけたるを覺ゆ。かゝればこそ、一家の學をも唱へ出しけれ。中さだのは、姿詞人を驚かせど、誠には力もいらざるものなれば、我も〳〵とまねびよむ人多く、よくも心得ぬからに、腹を捧ふるに堪へざるものもまゝ聞ゆ。また國文は此の叟一體をはじむ。例の古言をとりまじへて、一言も字音をまじへず、記のかなよみ、又祝詞をよむがごとくして、しかも自在なるもの也。此の人著述多し、萬葉考、(壹貳卷、別記一卷刻につく)冠辭考、(印行す)祝詞解、又祝詞考、伊勢物語古意、五意(國意、語意の類五部有り)萬葉新採百首

鳰鳥の―かつしかの枕詞
傳通院―東京小石川淨土宗
增上寺―東京芝公園淨土宗本山
紫の雲―大僧正になる事
式―延喜式神名帳、佐野郡阿波波神社

其の住居を縣居と名づけける所にて、長月十三夜によめる。

秋の夜のほがらほがらと天の原照る月影に鴈鳴きわたる

あがたゐの茅生の露原かきわけて月見に來つる都人かも

鳰鳥の葛飾早稲のにひしぼり汲みつつあかせ清き月夜を

しはすのはじめつかた、こびなたの傳通院の室に詣でたるに、明けなむとしは增上寺へうつりて、大僧正ときこえむまうけ、うち〳〵にありと聞きて、

あさ日かげにほへる山に紫の雲ぞたつなる春近みかも

遠江のさやの中山の西に續きて、今は阿波が嶽とていと高き山あり。式にあはばの神社あるこれなり。こゝのかたを繪にかきたるに、その山の下に旅人ある所に書きつけ侍り。

あづまぢは衣手寒し白雲のあはばがたけの秋の初風

神無月ばかりあらしを

科野なる菅のあらのに飛ぶ鷲の翅もたわに吹く嵐哉

又若き程の歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書き添へし中、

宇萬伎—加藤美樹、幕府大御番、眞淵の門人

猶作れるもの也。此の歌は唯有のまゝなるが似る者なきなり」など論ずる所、深くその旨を得たりといふべし。されども、何につけても、大成を任とせる故に、疑を闕かず、强解もまたまゝ見ゆるにや。又唐國の事を仇のごといひて、孔子をさへ議する事あり。是は近世の儒士、みづから夷と稱し、此の國の非をかぞへて、彼處に生れぬを恨むるごときをいきどほれるなるべし。是もとよりその罪いふべからず。皇神の御惠にもれたる國の靈なり。されども亦眞淵も甚しといふべし。譬へば、病を藥せむに、是になき物は、彼處に求めむに、何の忌む事かあらむ。唯病のたひらぐを瀨とすべきのみ。こは心狹きの故か、家學を興すにもとるせるか。生涯國學を任として江戸に終る。歲八十有餘とぞ。よみ歌、門人宇萬伎が記し置ける中、すこし書きいだす。

春の日山を望むてふ題を、

見わたせばあめのかぐ山うねび山爭ひたてる春霞かも

すみれぐさを

故鄕の野邊見に來れば昔我妹とすみれの花咲きにけり

悠然云々―晉陶淵明の詩、採二菊東籬下一、悠然見二南山一に出づ

萬里度二河汾一といへる起承の句誠に羇旅の秋情いはむ方なきに、心緒逢二搖落一。秋聲不レ可レ聞の轉合の句、上の意を註せしに、氣格の落ちたるをおぼゆ。吾が邦の歌も後世のさま劣り行くは、唯此のごとし」といへれば、南郭も大に感服せしとなり。（私按ずるに、今の世の歌、巧みなれば苦しく、輕ければ卑弱なり。その卑弱なるは、やゝもすれば、めづらしな、たぐひなや、えならずよ、悲しさ、うれしさなどいひはてて含蓄の氣象なし。この論よくあたれり）又山邊赤人大人の歌、

田子のうらゆうちいでてみれば眞白にぞ不二の高根に雪はふりけるといふを注して、（百人一首に入れられしは、萬葉の古にあらず、改めたるなり）「田子の浦より磯傳に、薩埵の山陰をうち出でて見れば、不二の高根の雪眞白に、天外に秀でたるを、こはいかでと見て、感じたるさまなり。何ともいはで有のまゝに述べたるに、其の時その地其の情自づから備はること、古の妙なるものなり。赤人は短歌の神なる事、此の一首にても知らる」と解きて、細注に「悠然視二南山一」といふも相似たりといふ人侍れど、かれはその所にての事、是はふと山陰より立出でて見出したるなれば、其の義異也。又悠然としてとは、みづからの心を注せるに似たれば、

新古今集―二十卷、元久二年、後鳥羽院の院宣に依りて定等撰進
新墾云々―初めて歌學を開きたれど
あらすきかへし云々―大躰にわたりて手を入れたる

よみて同じく教授す。倶に近年物故せり。

○眞淵は姓加茂縣主岡部衛士と名のる。はじめは三枝といへり。遠州濱松の人。春滿に從ひ、家僕のごとくして京師に學ぶ事年あり。學成りて江府に下り、大に古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへども、歌はその風をよまれず。もとより詠歌は主とせず。在滿は「萬葉の比は文華いまだ開けず。故に、麻ふますらむ、其の草ふけの、のごとき、語を成さざる者あり。歌の盛は新古今集の時なり」といへり。(國歌八論に委し。要をとりて記す)眞淵に及びて、はじめて萬葉の風をよみうつし、文章もまた古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。從ひ學ぶもの多し。その說に「契沖は新墾しつれど未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎにしこそ惜しけれ。大人は(春滿を指す也)歌のみか、舊りぬる千々の書どもをあらすきかへせしいたづきのかひさはなれど、まだ刈りをさめ果さざるに病に臥しつ」などいひて、己是がなりはひを遂ぐるよし也。實に古を發揮して後生を誘ふ功、少なからず。其の證をいはば、或時、南郭服部氏を訪ひて物語らふついで、「唐詩の風韻おとろへて六朝に及ばぬは、汾上驚秋の詩にて知りぬ」といふ。南郭いかにと問ふに、「されば よ、北風吹白雲ヲ

論あり。はた先年荷田三峯子の托によりて此の翁の家集を校考し、序を書きしにもいへり)國學の學校を京師に開かむとて、官の許を受け、既に地を東山に卜するに及びしが、(今の東本願寺墓地の邊とぞ)病に罹りて年を經、成らずして終れり。惜むべし。著述大やう散失す、自から燒き失ひしともいへり。伊勢物語童子問、萬葉の解などは彼の家に傳はれり。神代卷は家祕にして、門生にあらざれば傳へずとなむ。

○在滿(滿字是も亦麻呂と稱ふ)通名東之進、春滿の姪也、同じく國學を唱ふ。大嘗會具釋、同便蒙等を著す。今代故實の行はるゝによりて、其の考索の明なるもあらはれぬるとぞ。又國歌八論あり、後世の弊をためて見る所なきにはあらねど、大過せり。皆梨棗に上すに憚有りて寫本也。又百人一首古説とて、此の人と眞淵と共に著せるもの有り、又世に公ならず。近比印行せる眞淵の「うひまなび」は、是にもとゐせるなり。關東にして國學により某の君に仕へしが、かの君おぼす所ありて、其の說に從はしめむとす。在滿聽かず。貴賤品異なりと雖も、各志す所あり、己が見る所を捨てて、人に從ふは諂諛なりと、終に祿を辭して去る。家居教授して終る。其の子御風通名東藏、家學を嗣ぎて江府にあり。女弟民子もまた古きを好み、歌をも

梨棗に上す—印行する
うひまなび—五卷
某の君—田安家德川將軍三卿の一
江府—昔の江戶の異稱
女弟—在滿の妹

於て家學を成せり。契沖と時を同じうして是は後輩か。彼の説は知るや知らずや。契沖は佛者なる上に、其の人綿密に過ぎて泥滯せるものもまゝ見ゆるを、此の翁は一層登りて説を立つ。凡そ元祿年間は諸道復古の運にあたりたる時にして、國學を唱ふるは契師と此の翁なり。よみ歌は主とする所にあらざれども、又凡ならず。今覺えしは、

けふみればきのふの淵はあさか潟汐のみちひぞ世の姿なる

などいとめでたしや。又中世以後淫靡風をなせるをいきどほりて、生涯戀歌を詠ぜず。その家集を見るに、當座によせ戀の題を探りては、其の物を雜になしてよめり。たとへば虎に寄する戀を雜によめるは、

仇むくう思ひ巴提使にたぐへては虎も拙き物とこそ見れ

日本紀欽明卷の故事によりて讀まれしも學者のしわざなり。(巴提使百濟國に使して、虎の爲に小兒をとられ、雪の中に虎のあとをとどめていたり、その虎を殺せる故事也。巴提使、「使」字印本に「便」と書き、訓もはすひとつけたるを、若沖和訓類林には、てすとよむべし、便も使の字ならむと、考へられしを、今此の歌に合せて學者の見る所同じきを感ず)戀歌をよまれざる方正尤賞すべし。(戀の題詠のことにおきては、予もまた私に著す

萬葉緯—二十卷、萬葉集の參考となるべき諸書を抄出したる者

和訓類林—七卷、和漢の古書に據りて和訓の正字を集めたる者

傳奏—禁裏にて武家の奏聞を傳達する職

梓に上せたり—印行したり

屈景山子—堀杏菴超、安藝侯の儒臣、詩文に長ず、

○同じく海北若沖、岑柏と號す、浪花の人。所レ著和訓類林あり、甚要なる書なり。

○同じく野田忠肅、攝津今津の人。富豪なれども、古雅を好み、はじめ長流に從ひ後契沖に學ぶ。其の居武庫山を望めば、自六兒樓と號す。後住吉にすめる時、萬葉類句數卷を著し、何某の卿の傳奏をもて、靈元法皇に奉り、歌をも添へたりとかや。又柏傳といへる書を著せしを、近年その氏流の人梓に上せりとぞ。此の外の人なほあるべけれど知らず。江友俊といへるも契師に學べるよし、圓珠庵後主源光に合して碑を建つ。文を五井蘭洲に請へる旨、卽碑文に見ゆ、

○京師に樋口主水といへるは、似閑門人なるよし。此の家に代匠記の善本、講說を書き入れし萬葉集など藏せる由。二十年前自火に燒亡す、惜むべし。印行の改觀抄は此の樋口氏、屈景山子にはかりて校合せる所なり。寫本に合せては其の功見ゆ。

荷田春滿　附　姪在滿、門人　加茂眞淵

春滿、(阿豆萬麿ととなふ) 姓は荷田宿禰にして、羽倉を氏とす。通名齋宮、洛南稻荷の祠官なれども家を嗣がず、弟を主とし、自らは國學の復古を任とす。神代卷萬葉集に

心の猿―心の迷へる事の喩

輕の市―大和の地名、古繁昌せる市場

おもひの門云々―出家の縁語

阿佛尼―藤原爲家の室安嘉門院四條、薙髪して阿佛と號す、十六夜日記の作者

述懐のこゝろを

我こそは蘆の下をれ一節のありとも誰かありと見るべき

山にてもなほ忘られぬ此の身ゆゑ心の猿は靜けくもなし

世の中の重荷は早く捨てながら輕の市路に賣る事もなし

二十九になりけるとし

我が身今みそぢもちかの鹽竈に烟ばかりのたつ事ぞなき

糧絶えけるとき

やくとみて思の門は出でしかど烟絶えては住む方もなし

など、長流のうたよりもやはらかにおぼゆ。又この師の國文高古にして趣味あり、亦學ぶべき體なり。

○門人今井似閑、見牛と號す、京師の人。隱居しては六波羅の東、阿佛屋敷といへるに住めり。(此の家今尙殘れり。大夏にて庭おもしろしとなむ。見牛作れる所か、未だよく知らず。地は阿佛尼公の舊居といへり)所著萬葉緯あり。又寫本數車を上加茂の神庫に納む。不朽をはかるとなり。(契師の著述みなありとぞ)

顯昭法橋の說―其の著袖中抄の說

漫吟集―二十卷

境界の歌―自家情態を觀るべき歌

尾をひく―官に仕へず民間に隱るゝ事、莊子の故事

ざるあり。予師の爲に深くいたむが故に、繁きを厭はず始末を擧ぐ。安藤氏の書ける行實の終に、師歌學卓絕といへども、是は其の餘事のみ、歌學をもて師を論ずるは、師を知るものにあらずといへるこそ、公論なるべけれ。蒿蹊又按ずるに、此の師の歌學、顯昭法橋の說を梯として、古書を見明らめしものと思し。凡近世の人、唯中川の流の說にあらざれば、道の言にあらずとす。是により て過を過にて傳ふるが道なりといふ說さへ起れり。此の師此の關を透過して、一事一語徵をいにしへに採る。其の中或は過不及なくしもあらざらめど、一度此の道ひらけてこそ、是に次いでいふ人もいで來けれ。然れば千歲の一人といはむも過言にあらじ。詠歌は家集漫吟近く刻につくよしなれば、たゞ其の境界の歌少し、安藤氏の出せるを擧ぐ。

山家のこゝろを

忘れても都のかたにながめせば風吹きとぢよ峰の白雲

山里に折燒くましば珍らしく花より外の香に匂ひつつ

山川の龜の心を心にて尾を引くことをならひてぞすむ

る所なし。其の論辯當時有識といへども當り難しとぞ。且記憶比類なき事は、圓珠庵にして萬葉を説くに、古今の事實援引せる所の歌詠等、始より思慮に亙らずして綿々口に絶えず、連珠の函を出づるがごとし。或は人ありて師の古歌の記得を問ふに、「三千首以上自から知らず」と答ふ。著所厚顏抄三卷、(古事記日本紀の詠歌童謠を註す)勢語臆斷四卷、百人一首改觀抄三卷、源注拾遺八卷、勝地吐懷篇二卷、(予校合且補を頭に記して書林に附す、近刻すべし)河社二卷、類字名所集七卷、名所補翼抄八卷、和字正濫五卷代匠記二十卷、總釋二卷、古今餘材抄十卷。以上爲章著す行實に出す所此のごとし。又正濫の難記に答ふる書八卷、義剛遺事にいふ、此の外予知る所、雜記、維々記、新勅撰の評、二十一代集、古今六帖の校合をはじめ、物語の類に、此の師の書入あるもの多し。又其の宗門の疏鈔若干卷、其の徒につたふるとぞ。

右傳、安藤年山爲章著す所の行實に、法系南山補陀洛院僧義剛錄遺事を錯綜折中して國字に譯して記す。圓珠庵の墓前に建る五井氏の碑文、其の法に優なる事は此の兩事狀に讓り、唯國學に功あるよしばかりを錄せるは、道同じからざる故か。世人も又此の長ずる所を稱へて、其の法德をとはざるのみならず、或は僧なる事をさへ知ら

林鋆の性—野人

清修自適す—自身の行を愼み、他を貪らず

阿字本不生—眞言宗の觀の名、諸法本來空の義

定印跏趺—印を結び座禪を組む事

讀みたまひ、掌を抵ちて「千古の發明」とし、書を賜ひて一たび來まみえむ事をしひ給ひしかども、林鋆の性公侯に謁するに慣はず、とて遂に就かず。母氏歿するに至りて院を退き、難波の東高津に居をトす。(高津といへども甚だ僻地にして、ゐさし町と號く。今も畠など多き所なり。予ことさらに往きて知れり)圓珠庵といふ。俗客を謝し、淸修自適す。義公時に物を賜り、起居をとはせ給ふ事絕えず。此の公薨じ給ひて、師もまた續いて寂す。義公にあらずば、師の高きをしらじ、師にあらずば義公の選にあたらじ、其の終も亦須つがごとき者、誠に千載の奇遇といふべし、と義剛は書けり。水府の儒士安藤爲章、命によりてしば〳〵往來し、說を受け事を問ふ。師元祿十四年正月微恙にかゝり、二十四日に至りて病革る故、其の徒に永訣を告げ、且疑ふ所を正さしむ。涌泉問ひて曰く、「師今阿字本不生域に住せりや否や」答へて曰く「然り。凡そ人平等にして差別あるべし」。泉曰く「平等差別異なる事なきか」曰く、「心平等といへども、事差別あり。差別の中心平等に當る。老僧が事これを記せ」と。(此の一條義剛遺事には病中の自記に擧ぐ。大意同じければ略す)二十五日定印跏趺を結びて逝す、時に歲六十二。庵後に葬る。師爲人寛厚愛人、恭謙能く下る。然も密敎の上に邪義を說く者あれば、是を闢きて避く

慳、不瞋、謗三寶の戒
持律—戒律を守る事
三藏—經、律、論
章疏—注釋書
安流灌頂—密敎にて頂に香水を灌ぐ儀式の一
儀軌—密敎の祕典
水戸西山義公—德川光圀
古今餘材抄—寫本三十卷あり

三藏を盡し、自他宗の章疏、及儒典詩文集におきても涉獵せずといふ事なし。從ひまなぶもの多し。又池田川の側に居て、偏く皇朝の實錄古記を讀み、專國歌を好みて、廣く其の書を探る。延寶五年河内鬼住山延命寺覺彥に就きて、安流灌頂を受け、儀軌二百餘卷を手づから書きて、生駒寶山寺に納む。同八年本師手定寂せるにより、遺命して妙法寺に住持せしむ。師もとより好む所にあらざれども、其の母氏老いて此の里にあるをもて、止む事を得ずして往き、別に一室を寺の傍に構へて孝養す。水戸西山義公、長流が果さざりし萬葉の註を此の阿闍梨におほせ給ふとて召しゝかども、これも亦固く辭して參らず。然れども、公の古義を好みたまふをよろこび、遂に萬葉代匠記廿卷惣釋二卷を作りて參らす。開卷第一首雄略帝大御歌に、籠の字の訓を知らず、「こ」とよみきたれるを加太麻と訓じ、神代紀の無目堅間を證とす。西山公その卓見を喜び、且其のおほす所に合ふ事を奇とし給ひ、白金千兩絹三十疋を賜ひて、是を勞ふ。師卽寺院の修造に充て、かつ貧乏の者を賑して、一も蓄へず。又古今餘材抄を著す。「明石の浦の朝霧」の歌、古註眺望とし、或は行を送るとせるものを非とし、こは家山日に遠く、前程限なき波の上、朝霧朦なる間にたゞよふ旅懷を述ぶ。故に紀氏も羇旅部に納ると說く。義公これを

實語敎―敎訓の語を集めたる者、傳へて弘法大師の作と云ふ

腥葷を斷つ―肉食を廢す

法器―名僧たるべき人物

名區―名所舊蹟

念誦―心中に眞言を唱ふる事

煉行―修行

菩薩戒―不殺、不盜、不淫、不諂、不酤酒、不說過罪、不自讃他毀、不

る。歳甫五歳、母間氏口づから百人一首を授くるに、不日によく記得す。父も實語敎を授くるに、又同じ。父母おどろきあやしみぬ。七歳疫を患へ、巫醫しるしあらず。師密かに天滿天神の號百遍を書く事三七日。一夜靈神を夢む、自から菅神の靈と稱して曰く、「汝が至誠を感じて、病を除き命を延ぶ。他日僧となりて自ら勖めよ」と、覺めて後病愈えぬ。さて夢中の事を說きて、出家せむ事を父母に乞へども聽かずありしかば、自から腥葷を斷ちて、常に佛號を稱ふ。父母其の志を奪ふ事を得ず、遂に是を許し、其の近き今里の妙法寺手定密師の弟子とす。時に年十一歳。手定はじめ般若心經を授く。讀む事四五遍にしてそらに唱へ、かつ書す。十三歳髮を薙ぎて高野山に登り、東寶院快賢に學ぶ。賢又法器として是を導き法を傳ふ。やう〳〵時の爲に稱せらる。寛文二年檀越の請により、津の國生玉曼荼羅院に住めり。既にして其の城市に鄰り、かまびすしきをいとひ、壁上に歌を題して遁れ去り、一笠一鉢意に任せて、大和の諸名區に遊ぶ。長谷に至りては飡を絕ち、念誦一七日、室生にしては煉行三七日に及ぶ。(義剛遺事には、幻身をいとひて、こゝに形骸をすてむともせしといへり)又高野山に登り、菩薩戒を圓通寺快圓に受け、持律益々淸苦す。泉州久井の里に往きて、山水の奇を愛し、住める事年あり

方外の友—道を異にせる友人

述作、累塵藻水集、續歌林良材、枕詞燭明集、萬葉名寄等也。

蒿蹊云はく、予聞ける中、よしと覺ゆるは、

下野や那須野に繁る篠をとりて東男は矢にぞはぐなる

つひに我が著ても還らぬ唐にしき立田や何の故郷の山

此の立田の歌を、右の桂川の歌に合せて思へば、はじめは出身の望ありしかども、其の才を知る人なければ、思ひ捨てて隱士に終りけるなるべし。その萬葉の註語は、代匠記にまゝ見ゆ。又季吟拾穗抄に或說とて出されしは、此の人の說とおぼし。其の流義の說にあらねば、不用とのみ書かれしに、かへつて道理にあたれるが多し。歌の體は契沖師と此の人同じ筋也。契沖十七歲の時の歌を見て才を感じ、方外の友となるよし、契師の徒義剛も書けり。

僧契沖　附門人　今井似閑、海北若沖、野田忠肅

僧契沖、諱は空心、俗姓は下川氏、其の先は近江蒲生郡馬淵村に住す。祖父左衞門元宜、加藤肥後侯に仕ふ。父善兵衞元全、尼崎青山侯に仕ふ。師寛永十七年庚辰、尼崎に生

あしづつ―蘆の中にある薄き皮、薄きの枕詞

述懐のこゝろを

桂川こゝろにかけしひと枝も折られぬ水に身は沈みつつ

ゆづかづら仰けばいとど高き木のきる事難き大和言の葉

よみとよむわが言の葉は葦原のうらみやせまし住吉の神

わかの浦を知らぬ板井の蛙だに聲は詞の數にやはあらぬ

和歌の浦にいたらぬ迄も紀の國や心なぐさの大和言の葉

末の集の歌どもの、昔の歌に多く劣りゆくと見ゆるを

難波津の流れに生ふる葦づつの末の世見えて薄き言の葉

契沖が山にかくれてよめる俳諧の歌に「世の中にうめる心は山柿のまづほに出でてくだけぬる哉」とよめるを聞きて、

世をうみのへたよりみてぞ好もしき其山柿にみのなれる人

その外多く歌もあれども略し畢んぬ。

爲章按ずるに、長流が歌大かた是等の風體なり。長流は儒學まさり、契沖は佛學に深し。在家出家のさまはかはりたれど、清操ともに昔の隱逸にも劣らぬ人品なりけらし。長流が

近世畸人傳　卷之三

隱士長流

此の傳もまた安藤爲章の年山打聞のまゝをうつせり

若き時は下河邊彦六具平と名乘りたり。和州宇田の産。父は小崎氏、如何なる故にか母の氏を稱へ侍りける。それより妻子無くして、中年より津の國難波の傍に隱居をトめ、靜に書を讀み、中にも歌學を好み、萬葉集、古今集、伊勢物語などは諳記したり。其の學問おのづから傳へ聞ゆるをもて、大坂の富人多く弟子となれり。生得世に諂はぬ人柄にて、心のおもむかぬ折は富家の招にも應ぜず、訪ひ來れる人にもものをもいはず、枕を高うしてあるひは眠り、或は書を讀みて、心に任せて過しける。西山公（水戸黄門光圀公）其の才を聞しめし召しけれども、終に從はざりしかば、紙筆を賜はりて、萬葉の註を請ひ給ふにも、心に趣きたる時は一二首づつ註して、又懈りがちに侍りしまゝ、果さずして、貞享三年丙寅六月三日に身まかり侍りぬ、春秋六十三歳、圓珠庵の契沖師と交深かりければ、遺稿を集めて晩華集と名付けたり。其の集中の歌、

生得—生れつき

晩華集—原本晩萃集に作る

かゝりしが、此の比はさとりて、我が命ある限は食有るべし、食盡くるは我が命の終はる時也、と思ひ定めつれば、甚やすし」といへるには、さしもの忠宣も膽を驚かしたりとなむ。如何なる人の跡をかくせるにやと、いとゆかしくこそ。其の國所も聞きしかど、花顚幼くて覺えずといへり。

人生れて云云—後漢の周澤が、妻を虐待せるより、時人この諺をなせり

御家流—香道の家元三條家の流儀

の妻かよ子は貞操ある人にて、忠宣旅にある間は、人の爲に裁縫の業をし、又導引などをもして世を渡り、夏は蚊帳をたれず、冬は火爐に寄らず、夫の旅の苦勞をとふ故となむ。人生れて忠宣が妻となる事なかれとぞいはまし。忠宣五十七といふ冬、かの兄とせる良輔が許にありていはく、「來むとしの二月初には必ず死ぬべし」と、花顚に命じて我が像を一筆書に畫かしむ。花顚此の時十歳にみたざれば、何の心もなく、云へるまゝに數枚畫きたれば、其の上に自筆を染めて、

何やらに忠宣といふ名をつけて月よ花よと騷ぎけるかな

是をかたみとて人々に與へたり。さるに果して、明くる春二月七日に終れるも不思議なりき。此の人歌連歌詩作にも疎からず、香は殊に勝れて、御家流と云へるものを傳へ、百炷に二三をあやまらず。人も賞したり。其の詩歌の口號は、花顚幼時なれば記得せず。また自から書きとゞむる意もなき人なれば殘らず、惜むべし。

○忠宣志摩より何處へか行きし五年の間の事とかや、某山中にて一奇人に逢へり。人跡絕えたる所に庵を結び、年も老いたるが、いろ〳〵の物語をし、さて云へることは、「此の前なる谷川の水出でて橋落つる時は、食物を求むべき通路絕えなむ、と唯是のみ心に

是を喰ひて過せり。友達折々うかゞふに、もの音もせねば、「もし飢ゑて死にたるも知らず」と、門の戸を破りて入りて見るに、かの魚を喰ひて居りしかば、大に笑ひぬ。また或夜、淸瀧河に行きて篳篥を吹きすさびしに、川音のさゆるにしたがひ、しらべ澄み渡りて面白かりければ、霜雪の夜を重ねて四十日にあまり、一夜も怠らず彼處に遊びし程に、明くる正月の比より寒濕に犯され、痿躄の症となりぬ。かゝりしかば、いさゝかなる勸進帳をとゝのへて、

痿躄—足の痿えて立たぬ病

みよしのの花や乞食をしてなりと

と書き付て恥づるけしきもなく、大路をゐざりながら、知己の家々へ廻りしかば、日ならずして許多の金を得つ、さて吉野へ駕籠に乘りて行き、かへるさには、大坂へ出で て、又其處の知る人の家々へ廻り、此のたびは三吉野を橋立とかへ、花を月にして勸進帳に書きつけたれば、誰も興じて又數金を與へたれば、橋立より城崎の湯に浴し、其の功能にて脚疾治したり。それよりは何處となく行脚して、十三年を經て大坂へ歸り、妻を求めて住みしが、又或年伊勢へ詣づる日を送りて、枚方までとて行きつゝ、直に伊勢へ伴ひ、又彼の友に別れて志摩へ渡り、其の後遊ぶ所を知らず。五とせ經て歸りし。此

花顚子―畫人、三熊花顚、閑田子と共に本書の著者

鮪―今云ふまぐろ、京阪地方の方言

中倉忠宣　附山中隱士

中倉忠宣は、伊勢朝熊の産にて、京に來て學問す。故ありて花顚子が外舅太田良輔が弟と稱す。(良輔も聞香の伎に名あり)二十五といふ年、「今年は死すべし」とて、持てる物皆友達に與へ盡せしが、はたして一月餘りして病に臥したりしに、人々いたはり醫療を盡して癒えぬ。是より忠宣物をものともせず、「吾既に死を極めしに生きたれば、今よりの命は世の外の物なり」と云ひて、春秋の花もみぢには、酒呑みて、夜晝をいはず。金を見れば人の物ともいはず遣ひ捨てつ、吾が物あれば人に與ふる事石瓦のごとくす。されども夏冬は門戸を閉ぢ書を讀みて、あへて人に交はらず。四條高倉の南に獨居せる時、友達度々呼び迎ふれども出でず。行けども戸を開かざれば、相計りて、「食ある故に此のごとし。今より糧を與へずしてこころみむ」といひて、一人も物を送らず。(此の時常の産なき故、朋友の助力を得つ。もとより多藝なれば、それを學ぶ人も食を贈る)されば、數日を經ていかにともせむすべなかりしに、折ふし、門を過ぐる雜貨賈ありしを呼びて、有り合ふ衣服を錢一貫文に賣り、さて此の錢のある限鮪といふ魚を買ひて、明け暮れたゞ

化度せられ
—教導して
智を開かし
め

よりその不思議を知る故に、人々驚き「いかにもして此の難を救ひ給はれ」と願ひしかば、やがて彼の鉈にて、千體の佛像を不日に作りて池に沈む。其の後何の故もなく、はた是よりはひとり行く人も捕らるゝ事止みけりとなむ。此の國より東に遊び、蝦夷の地に渡り、佛の道知らぬ所にて、法を説きて化度せられければ、その地の人は今に至りて、今釋迦と名づけて餘光をたふとむと聞ゆ。後美濃の池尻に歸りて、終をとれり。美濃飛驒の間にては、窟上人といひならへるは、窟に住める故かも。

彼の袈裟山の俊乘は、人の空言するを何にまれまことゝす。蓮華坂といへる所に、蓮華躑躅といふものあり、其の花の盛に人戯れていふ、「彼の花に背をあてゝあぶればいとあたたか也、試み給へ」と。俊乘ある日教へけるまゝにしたるに、春日のかげうつろひて、いかにもあたゝかなるを、日影とはおもはで、誠に花のゆゑと悦びしとなむ。又ある人あざむきて、「坂を登るには牛馬のごとく這ひて登れば苦しげなし」と云へるを、まことに似して、袈裟のふもとより八町が間、嶮なる坂を這ひ登りけるが、是は「人のいひしに似ずいとくるし」といへりとぞ。かくおろかに直き人なれば、圓空も悦び交はられしなるべし。

無我の人―私心なき人

僧圓空 附俊乘

僧圓空は、美濃國竹が鼻といふ所の人なり。稚きより出家し、某の寺にありしが、二十三にて遁れ出で、富士山に籠り、又加賀白山に籠る。ある夜、白山權現の示現ありて、美濃の國池尻彌勒寺再建の事を仰せ給ふよしにて至りしが、いくほどなく成就しければ、こゝにも止まらず、飛驒の袈裟山千光寺といへるに遊ぶ。其の袈裟にありける僧俊乘と云へるは、世に無我の人にて交善ければなり。圓空持てる物は、鉈一丁のみ、常にこれをもて佛像を刻むを所作とす。袈裟山にも立ちながらの枯木をもて作れる二王あり。今是を見るに佛作のごとしとかや。又豫め人の來るを知る。又人を見、家を見ては、或は「久しくたもつべし」或は「いくほどなく衰ふべし」といへるに、ひとつも違ふことなし。或時此の國高山の府金森侯の居城をさして、「此所に城氣なし」といへるに、一兩年の間に、侯出羽へ國替ありて、城は外郭ばかりとなりぬ。また大丹生といへる池は、池の主人をとるとて常に人一人は行かず、二人行けば故なしといへり。さるに或時圓空見て、「此の水この比にあせて、あやしき事あり。國中大に災に罹るべし」といひしかば、もと

て是を首にかけて、わが守なりといひて片時も離さず、四方の國々に遊行す。ふじの山に登りし時よめる、

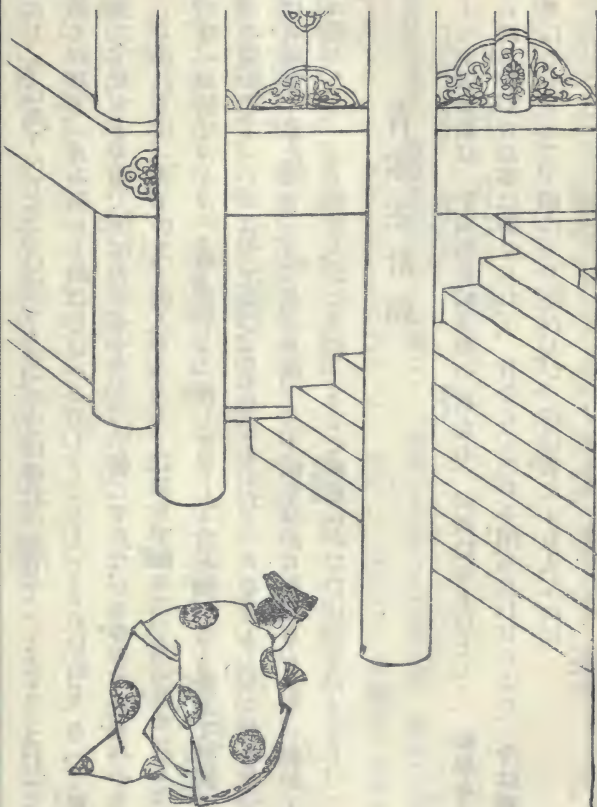
富士の根を登りて見れば敷栲の枕に結ぶ草だにもなし

この道のさかしかりければ、二腰を捨てて、その後は帶ぶる事なし。さておのが家には、二度歸らざりしとなむ。

敷栲の―枕にかゝる枕詞

僧別首座

白隱禪師の弟子に別首座といへる有り、「出家は寺を持つべきにあらず、寺を持てば、在家にひとし」とて、所定めず行脚に年を送る。多くは丹波但馬の間に遊びしとかや。人問訊する時は、其の人の世態をもて示す。或時に乞丐僧示しを請ふ。首座卽雨だれの石をさしていふ、「あの石を見よ。雨だりにて減りたり」と。又農人集りて說を請ひしには曰く、「田中に水あれば鷺來て泥鰌をもとむ。泥鰌は遁れむとす、鷺は踏まむとす」と。またある元日に、人の許にて雜煮を喰ふ時、主示しを請ふには、いはく、「昨日は大晦日、今日は元日なれば雜煮を喰ふ也」と。老婆親切といふべし。

問訊する―道を求めて問ふ
世態―其の人現在の生活情態

驗なし。今は死すべしと思ひけるとき、「今宵は御社へ籠りていとまうさむ」といへるを、醫師も親族も、「身を動かし給はむはいとあしきことと」とゞめけれど、あへて肯かず、「假令途にて死すとも詣でずばあらじ」といへば、疊にすゑながら舁きて社頭へやり、あまたまもり居れるに、夜半の比、病人も守人も、我知らず眠りて、火の消えたるをも知らず。其の時、「周防守々々々」と呼ぶ聲して、怪しき手して背を撫づると覺えて打驚き、まもるものを驚かして、「いかにや」と問へども知るものなし。火をともして、背を見せしむるに瘧は名殘なく愈えたり。さて是より後、二十餘年ながらへぬるとかや。倘かゝる不思議度々有りしと、よく知る人かたりぬ。さこそ神慮にかなひけめとたふとし。

青木主計頭

青木主計頭長廣は、肥前國長崎某社の祝なり。岡周防守とひとしく、神學をもて聞ゆ。ある時思ひがけぬ事に罪せられて、竹をもて門戸を閉ぢられけるより、今は神に仕ふべき身にあらずとて、都に上り隱れしが、時に名たゝる人なれば、櫻町院かたじけなく詔を下して召し給ひ、神代卷を講ぜしめ、宸翰をさへ賜りぬ。やが

神代卷—日本書紀の卷一、卷二
宸翰—天子の御親書

こゝに記す。蒲生氏も代々歌人にて氏郷主に及ぶ。鬪戰の間、風流の聞えありける家の姻族に、此の隱士ありけるも、ましてめづらし。

岡周防守

岡周防守某は、備前國酒折宮の神職にて、神學の名高くして奇人也。或時刀を買ひて帶びて出でたるに、思はぬ事を人いひかけて、腹あしくなりたり。又他方へ行きたるに、同じく腹あしくなる事有りしに、「さればこそ、此の刀はわれに應ぜぬものなれ」とて、常に來る魚商人に、路次にて逢ひたるにとらせつ。又ある時山中にて道に迷ひ、雨さへ降り出でて詮方なく、辛うじて辻堂を見つけてたどり入りし間に、雨はやみたれど、夜になりて、いよ〳〵行くべき方も知らねば、一人の僕と倶に、そこらの木葉をさぐり集めて、火をうち出し燒きつくれど、雨にしめりたる木の葉なれば燃えず。さる時に狼の聲などしば〳〵聞えて、恐しさ言はむ方なきに、いつしかしめりたる木の葉の中より、おのづから火燃え出でたれば、やがて其の光にて木の枝折りくべなどするに、其の火よすがらに絕えず、ふしぎなる事なりき。又或る時脊に癰發し、さま〴〵醫療を盡せども

諸大夫にて、麻生庄を領し、莊内鑄物師と云へる所に住みしが、其の女弟は蒲生知閑の兄、音羽右馬允秀順が妻なりし故に、知閑を助けて戰死す。かゝる故に知閑、永濟を扶持せしとぞ。此の人もと滋野井殿に親しく參り通ひければ、中山に閑居せる後、（是までの地名皆日野に近き所也）藏人に補せらるべきよしの勅を傳へ給ひしに、固く辭し申して、

勅旨畏くはあれど友とせし我が中山の松や恨みむ。

とよみて奉り、終に出でずして歿せり。もとより和漢の才人にて、北村季吟法印の著せる和漢朗詠集の抄に、歌は自注し、詩は永濟の注を用ふるよしかゝれしは、此の人なり。右勅に答へし歌も、淸原元輔の集に、

遙にぞ思ひやらるゝうとからぬ我が中山の松の梢を

といふを取れるなるべし。是は大和の中山なるを、近江に取用ひたるも學者の仕業と覺ゆなど、日野の人富田氏の話なり。此の人を近比西生と稱を改めしは、もし遠き葉ずゑの露のゆかりもあるにや。凡此の書近世を集むる間に、此の永濟主は時代やゝ古びたれども、かばかりの人を世に知らず。予も彼の朗詠集の注永濟とあるを、音にて讀みて、五山の詩僧にやあらむと思ひしに、此の說を聞きて明らめ、其の隱操のしたはしければ、

藏人―天子に近侍し政治に與かる職

五山―京都の五大禪寺　天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺

升斗繫―官職上の束縛

假張―外貌を飾る

生理―生活費

裘葛―裘は冬衣葛は夏衣

朝晡―朝夕の食物

德大寺家―七清華の一

無人共商量。　所好與世乖。　爲愚又爲狂。
遭遇千古少。　吾儕特何傷。　幸無升斗繫。
從意自徜徉。　請託絕權勢。　拜謁無朔望。
月花屬我去。　吟哦習爲常。　又無沈痾患。
老去猶堅强。　眼精耐誦讀。　足力涉潤罔。
車馬不須駕。　冠蓋何假張。　生理又略足。
不用求皇々。　寒暑給裘葛。　朝晡有糟糠。
回首一世裏。　比屋屢低昂。　吾不覺衰廢。
未嘗有殷昌。　悲貧兒女態。　豈入丈夫腸。
梅藥欺雪色。　柳條洩春光。　一歲此夜盡。
依舊迎新陽。

西生永濟

淡海蒲生郡中山の里の隱士永濟は、西生と稱す。父阿波守兼名と云へるは、德大寺家の

睿藻—御製
吾が黨の人—閑田子の友人
濟々—多し
丈人—比肩すべき人
榛荒—荒廢

へ給ひて、禁中の侍講たるべしとありしも、固く辭し奉りし。是また紀藩の義によるとぞ。よりて睿藻を下し給ひ、是正して奉りけるも、めづらしき例なるべし。

北村篤所

篤所、北村氏、諱可昌、字伊平、即通名とす。近江野洲郡北村の產なり。（季吟法印の氏族なり）仁齋先生の門人にして京師に住めり。嘗て、院中に召して學を問はせ給はむ爲、北面の氏を嗣がしめむの内勅ありしかども、異姓を嗣ぐことをほりせずと固く辭し奉りし。されども、其の人を慕はせ給ふ故に、儒服儒巾を制せさせて賜はり、しひて召ししかば、止む事を得ず、是を著て院中に書を講ず。疾の病くなりし時も、勘解由小路殿をもて人參と中山といふ御硯を下し給はりしに、隱士の面目と世に稱せり。自筆歳暮書懷の詩、吾が黨の人、彼の子孫より得たるを左に寫す。其の生平を見るに足る故なり。

少小涉經史。　性氣耽詞章。　宿儒時濟々。
共是丈人行。　生平所畏敬。　此日皆既亡。
後生何寂寞。　聖學將榛荒。　長安幾萬戸。

聞香—香通

森美作侯—森忠繼

鳩杖—頭に銀製の鳩を附けたる杖

近衞藤公—關白藤原尙嗣

り。父既在は和歌連歌を好み、殊に聞香の伎に名あり。宗具初めて學業に心ざし、かねて醫を學ぶ。始め加藤肥後公（淸正朝臣也）に仕へ、後森美作侯に仕ふ。されども身は京に住めり。壽百歳を保ちければ、
後水尾上皇　仙洞に召して、修養の法を　勅問ありしに、奏すらく、「平生唯一の些の字を持す。食を喫ふも些、食飲を節にするも亦些、養生も亦些。此の外に別の術なし」と。帝大に感じ思召して、鳩杖銀絹茶酒などをさへ下し賜ひしとかや。（此の一條は東涯の盍簪錄に出づ）其の年の九月彼庭の松のもとに松蕈數莖を生ず。奇異の事なりと人もてはやしぬ。寛文四年百歳に充つる元日に口號の詩歌あり。

　もゝとせも猶あきたらず行末を思ふ心ぞ物笑ひなる

といへるが、中にはまさりたらむとぞ。此の翁の話を書きし老人雜話といへるあり、面白き昔語なり。

○宗具の子宗珉、字は友石、全庵、又剛齋と號す。那波道圓に學ぶ。少年にて青山侯の文學となりしが、故有りて病に托し仕を致し、京師にありて教授す。其の後、紀藩より聘し給ひしかども仕へず。先主への義を思ふなり。後また慶安四年、近衞藤公、詔を傳

夢幻生涯夢幻居。了知幻化絶親疎。貪榮萬乘猶無足。退歩一瓢還有餘。無事頭心情自寂。無心事上境都如。吾儕苟得體斯意。廓落胸襟同太虚。

偶成　警少年禪流敎余茶事

太傅面前飜却去。千年舊案擧來新。腕頭無力全扶起。謾叫賣茶莫失眞。

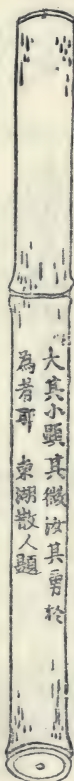
仙窠燒却語　仙窠是具鑑名所以賣煎茶也

我從來孤貧。無地無錐。汝佐輔吾曾有年。或伴春山秋水。或蔭松下竹陰。以故飯錢無缺。保得八十餘歲。今已老邁。無力于用汝。北斗藏身。將終天年。却後或辱世俗之手。於汝恐有遺恨。是以賞汝以火聚三昧。直下向火焰裏轉身去。轉身一句且如何。良久云。劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。便付丙丁。

丙丁に付す｜火にて焼捨つ

乙亥九月初四　八十一翁高遊外

江村專齋　附剛齋

專齋は江村氏、諱宗具、倚松庵と號せるはその庭に古松拾餘株ありける故なり。祖榮基は備前三ツ石の城主にして、落城の後京に登り、宗具に及ぶまで新在家といふ街に住め

三石の城主｜別所氏の族

瓢杓 竹柄 芙蓉書 長五寸

吹管 長八寸二分 蕉中題

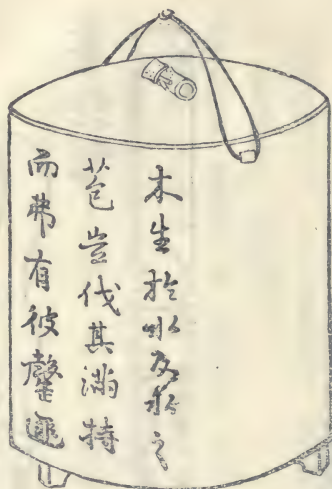
思孝曰公翁肖像見𦘕偽詐故不贅今所圖其常具者其燒亾之餘
与常撲造俱藏浪華 木世肅之家云

注子

茶山新銘

高五寸五分　徑六寸二分

瀽水

終南銘

高一寸五分半　徑四寸

黄銅爐
古製 加長造
高四寸 徑六寸四分
足徑四寸二分
急焼
曾山製

爐龕

高一尺八寸四分
方八寸三分

春蔭屋題

上棚七瓦
下棚四寸

蒹葭堂所藏賣茶翁茶具圖 八品

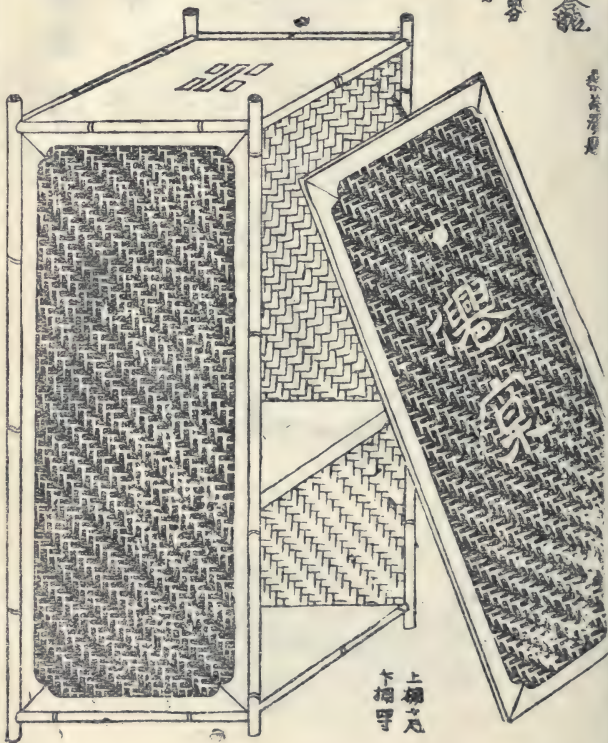
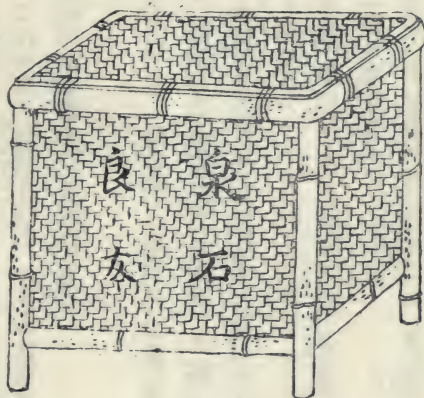
郗籃

百拙題

高一尺二寸五分

横一尺

顢頇—大面
懡㦬—慚

擔板—擔板漢は禪家に不通の者を詈る常套語
自警の偈—自から氣を付くる爲の贊語

又茶を賣る席に書き付けられし狂言、是は偈語には載せず、或人寫し置けるをこゝにしるす。

茶錢は黃金百鎰より半文錢迄はくれ次第、唯飲も勝手、唯よりは負け申さず。

達磨さへおあしで渡る難波江の流を汲める老の我が身ぞ

自贊三首

咄。這瞎漢。謾打風顚。早歲入釋。事師參禪。百城烟水。遠探要津。熱喝痛棒。嘗苦喫辛。歷盡雪霜。自救不了。顢頇面皮。懡㦬多少。老來安分。爲賣茶翁。乞錢博飯。樂在其中。煮通天澗。鬻渡月花。若人論味。驀口蹉過。因憶昔年王太傅。依然千古少知音。

髭鬚照雪。疎髮鬖鬖。瘦杖扶老。鶴氅蔽容。具籃荷去。獨步洛東。賣茶生計。足養衰躬。非儒非釋又非道。一箇風顚瞎禿翁。

箇賣茶漢。籃裡維何。無底椀子。窒縣茶瓶。爲糊一口。賣弄諸方。用力是大。得錢却微。箇擔板。咄。

自警偈

葛巾野服―隱遁者の服裝
すぎはひ―生活
蓮華王院―京都三十三間堂
行實―履歷
松風―茶釜のなる音
―盧仝眞妙旨―盧仝は宋人、陸羽と共に茶を以て著はる

人に語りていふ、「吾貧くして肉を用ひず、老いて妻を悅ばす。葛巾野服茶を賣るのすぎはひかなへり」と、復京に去りぬ。凡そ人茶を賣ることを奇として稱すといへども、翁の志茶にあらずして、茶を名とす。其の平居綿密の行ひは知る人まれ也。晚に岡崎に居て、携ふる所の茶具を取りて火に投じ、是より門を杜ぎ客を謝して、天年を養ふ。或人いふ、「一旦座右に、長啮しいや、と書き付けられしが、老翁りては全く客を辭せり」と。終に蓮華王院の南幻々庵にして化す、世壽八十九。寶曆十三年癸未七月十六日也。右大典禪師、翁の生前著す所の傳、偈語の後に見えたるを取りて譯して、遷化の世壽年記等を加ふ。又偈語の中、翁の行實にあづかる作四五を採りてこゝに擧ぐ。なほ翁をよろこぶ人は偈語全書を見るべし。

題二錢筒一

隨處開二茶店一。一鍾是一錢。生涯唯箇裏。飢飽任二天然一。

又

煎茶日々起二松風一。醒二覺人間仙路通一。要レ識二盧仝眞妙旨一。傾レ囊先入二箇錢筒一。（錢筒に題せる偈猶多し、みな此の趣なれば略す）

釋氏―僧侶
洛下―京都中
其の故國―肥前國蓮池

せず。常の言に曰く、「昔世奇首座龍門の分座を辭して、是猶金針の眼を刺すが如き歟、毫髮もしたがへば睛すなはち破る、しかじ、生々學地に居て、自ら煉らむには、といへり。予常に是をもて自ら警む。もし能く一拳頭、偏く物機に應ずるに足らば、いでて人の爲にして可也。其或は未だ然らずして、そこばくの學解をかざりて、顏を抗て宗匠と稱せむは恥づる所なり」と。後、肥前に歸りて師に仕ふること十四年、師歿して、法弟大潮をあげて其の寺の主とし、自は平安に遁る。さて曰く、「釋氏の世に處る、命の正邪は心なり、跡にあらず。夫袈裟の徳にほこりて人の信施をわづらはすは、われ自ら善くする者の志にあらず」と。こゝにして始めて茶を賣りて飢を助く。凡春は花によしあり、秋は紅葉にをかしき所を求めて自ら茶具を荷ひて至り、席を設けて客を待つ。洛下風流の徒喜びてそこに集ふ。さればいくほどなく、賣茶翁の名あまねく世に聞ゆ。さるに其の故國の法、疆を出づるものは必官のしるしを携へ、十年一たび歸りて更に命ぜらるゝことを受く。僧といへども同じ。翁七十に臨みて復國に還り、自ら僧を罷め、其の國人の仕へて京にあるものの下に名をよせて、十年の限りを免れむと乞ふ。國もとより翁の爲人を信ずる故に、これを許す。こゝにして自ら高を氏とし、遊外を號とし、笑うて

薙髮—髮を剃り
方丈—住持の居室
知識—學殖高き人

一木こそ長閑には見れ咲き續く山は花より心ちるもの

隱遁の後は、左右軒と號しける。正德三年より二十年ばかりあなた、東海道沼津にて身まかりぬ。七十歲にてありける。もとより、隱遁の志深く、妻子をも持たで侍りけるとぞ。

賣茶翁

賣茶翁者、肥前蓮池人也。姓柴山氏、諱元昭、月海と號す。早歲薙髮、龍津の化霖を師とす。化霖は黃檗獨湛禪師の弟子なるをもて、携へて黃檗に詣る。一日湛召して方丈に到らしめ、賜ふに偈をもてす。少年といへども其の才器異なるを知れば也。翁益々自勉む。二十二歲に及び、痾を患へて困しみ、自ら安ずる事能はず。こゝにおいて憤りを發し、病未だ全く愈えざるに旅だち、陸奧に至り、萬壽の月耕に附して歲を經、又あまねく諸方の知識の門に遊ぶ。或は湛堂律師によりて律をも習ひぬ。西に東にあとをとゞめず。身たくはふる所なく、ひとへに此の道をもて任とす。筑紫の雷山の峰に止りて、火食せず、一夏を過すがごとき、其の精苦を知るべし。省悟すといへども、尙自ら足れりと

丑刻―午前二時、卯刻は同六時

すびつ―四角形の火鉢

て、卯刻近く歸る。兄弟伴ひて一日も闕くことなし。その生前の孝養知るべし。市兵衞は一甫と號す。後同街の裏家に別居して、獨身にて住めりしが、夏冬となく頭を物に包み、すびつのうへにやぐらをおほひしを、机にかへて書を見る。伊藤東涯松岡玄達二先生、折々に訪はれて談話有りし外、世に知る人少なし。草廬龍翁まだ幼くて、文よむ事は、此の一甫の勸めによれりと、此の多能友愛の事をも語られぬ。後の樣もまたよく知る人に聞き。市中の隱君子にて、近世めづらしとぞ。

隱士石臥

（此の傳、安藤爲章年山打聞に書かれしまゝをうつす。）

石臥、若き程は長野采女と名乘りて、眞田伊豆守信幸朝臣に仕へたり。劒術の諸流を極め、手かく事大かた能書にて侍りし。神道家に立入りて道を尊み、禪教の學に深く、歌林にさへ遊びて、詠める歌多く侍りしが、皆忘れたり。たま〳〵記憶せしとて、東湖禪師の唱へられ侍りし、

三吉野は櫻の外に峯もなし花やつもりて山となりけむ

人の家にて庭のさくらを、

堀川の流―仁齋學派

三論―佛教の一派中論、百論、十二門論を所依とす

本艸―支那古代の植物學

雅樂―本邦の古樂

しをたちたる時のうたを、擬らへてよみこゝろむ。

　一すぢに思ひたちぬる法のため千筋の髪は惜けくもなし

おなじく、藥をのまで死なむとせる時のうたになぞらふ、

　ながらへてあらむものかは我ながら後の心の頼まれぬ世に

いと拙けれど、彼の志の儘を續けたるなれば、手向ともなり侍らむやとてなむ。

石野權兵衞　弟　市兵衞

石野權兵衞弟市兵衞、兄弟は、京師四條坊門西洞院の東に、桔梗家といへる商家也。兄弟共に學を好み、堀川の流を慕ふ。且兄は兼ねて佛學をも好み、殊に三論に通ず。弟は本艸に委しく、又畫を能くす。又雅樂を好む事兄弟ともにひとしく、道遠しといへども音樂ある所といへば必行く。友愛深くして、兄の妻ある後も久しく同居す。弟學文などにつきて出づる時、夜更けて歸るに、戸を敲く事なし、纔に咳するを、兄速に聞きつけて戸を開く事常なり。もし聞きつけざれば、門に立ちて朝に至る。母沒して俗忌五十日の間、その墓所鳥部山に曉毎に詣す。奠供と花水を携へ丑刻過ぐる比宿を出で

地獄餓鬼―地獄道、餓鬼道、佛教にて死後罪惡ある者の墮つる處

たうべじ―食はじ

ふ事きこえむ。たはれにてありし時の心盡し、いかにとかおぼす。はづかしく悲しき事云ひ立つれば、地獄餓鬼などいふさかひもよそならず。それを遁るゝだにあるを、かう本意のまゝにおとなひして明し暮すなむ、あが身はたゞ今唯佛の國に生れたる思ひにぞ。されど、もとよりはかなきものにいはるゝ女の心の上に、年もまだはたち比に侍るうへはなむ、後いかならむとも、あが心をえ知り侍らず。もしたゆむ心いできなむには、いかにあさましう口をしからまし。かう心地の清くあらむほどに身まからばやと思ひとりて侍ればなむ、病の平らぎぬべき藥はさらにたうべじと思ひしめ侍れ。おほよその人は聞きもわき給はじと、今まではかうも聞えずすぐせしを」など、いとねもごろにくどきつつ、其のこゝろの歌をもよみしに、さしもの女も、いさむべき言なくてやみつ。さていくほどなく終へたりしが、露亂るゝけはひなく、めでたかりしとぞ。

右の事狀は馬杉亨安とて九十有餘までながらへて歌好まれし老人、予が忘年の友なりしが語りて、其のころ何がしの朝臣假名ぶみに書き給ひ、又ある儒士眞名にも書きしが、今はいづこに紛れつらむ、その尼の名も忘れし、と惜しまれしを、思ひ出でて記す。物語文めかしく書けるも、かの假名ぶみの名殘を思ひてなり。又かのかぶ

とつ國は―「とつ國は水草淸し塵かゝる都のうちはすきぬまされり」玄賓僧都の歌

うけたばれ―承はれば

たとく―尊く

くすし―醫師

たはれ―遊女

らぬよしを見え參らせむ爲なり」などやうに、倘いとこまやかにて、歌もありければ、刀自よゝ〱と泣きて、「さる心あらむとも知らで、はしたなめつる事の恥しうくやし。今はたゞわれを頼もしきものに思せ。いかにも〱思ひ給はむまゝに計らひてむ」と懇に聞ゆ。さて住みどころは京の內にてさるべき所をといふに、「いな、とつ國は水草淸しとか聞ゆれど、しるべなき遠き境はさすがにえ堪へ侍らじ。大原の山こそ、昔より世を厭ふ人の住所としもうけたばれば、そこに身をおくばかりの草の庵しつらひて給へ」といへば、やがて言ふまゝにしたり。それより行をのみして、いとたとくてありへけるが、二とせばかりありて、こゝちなやみけり。さりければ、刀自聞きつけて、山里便なしとて、おして近き所に移しぬ。くすし迎へて、あつかはすに、尼いなみて受けず。やうやう日を經ければ、刀自いかにせむと頭をかきてわぶるに、あるものはからく、彼がたはれにてありし時のとも、大橋といふは、今は人妻にて、それの所にあり、ものの心しりて、歌などもよむ人也、彼を呼びていさめさせ給へ、と教ふるに、いとよき事とて、やがて迎へていはす。尼うち笑みて、「そよ。刀自君のあはれみかへりみ給ふ事は、山にも海にもたとしへなきまでに侍るを、唯わが姉の君ぞ、事の心をよく知り給ふべければ、思

川竹のうきふし―遊女の境界
馴はまさらで―新古今集
みかりする狩場の小野の楢柴のなれはまさらで戀ぞまされる
のどみて―延引て
かぶしをたち―髪を切り

我に物言はせじとてする業か、あなにく。なでふ尼にならむずる心はあらむ」と、罵るを、かたへの人しづめて、「先其のかけるもの見給へ」と云へば、やをらしづまりて取りて見るに、「もとのねざしを申すはいとつゝましけれど、父はあるやごとなき御方に仕へ侍りし者の、後にははふれて朝夕の煙もたえ〴〵なるうちに、重くわづらひて、藥のあつかひも詮方なきに、みづから身を賣りて、あそびになり侍りぬ。さて後、父も母もなくなりしかば、あはれ、賴もしき人もがな、此の川竹のうきふしを遁れて尼になり、父母の爲、みづからの爲も、涼しき道の行ひをのみし侍らむと、神にも佛にもねぎつゝ、月日をわたりしに、此の主人の君、年比馴れ參らするまゝに、この志をあはれと思して、我身をあまたの黃金にかへて、まづしばしとてなむ、御あたり近く住ませ給へりき。さてはやう本意とげぬべきを、さすがに人の心ははかなきものにて、馴はまさらでとか、御情の程のやるかたなく、今はと別れ參らせむことの悲しきに、けふはあすとのどみて、思はずに月さへ日さへ重り侍りぬ。かゝるよしをもゆめ知らせ給はで、御正妻迎へ給ふ障なすものと、いかに〳〵屈思しつらむと、御心苦しうこそ。今宵對面給はらむと聞えさせ給ふにつきて、思ひ定めてなむ、かうかぶしをたち侍りぬるは、うきたることにはあ

聖護院—山城愛宕郡岡崎の西

花頂山—山城愛宕郡粟田山の西、青蓮院の東

御室—山城葛野郡、仁和寺の一名

あそび—遊女

院殿の東北に松の三本ある丘、ちどりを聞くには五條の橋より下、夜深くなりては、花頂山の麓よし。水鷄は御室の前、告天子は朱雀野」とぞ。其のすざか野と五條の流の下は、己もよく知りて、其の言のたがはぬを覺ゆ。聖護院殿のめぐりもうちはれてすべて月にはよき所也。松のある所はさぞなむ。なほ試むべし。

遊女某尼

大橋が島原にありける日、妹と呼びける遊女を、中京の富める人取りて、とある所に隱しすゑたるを、其の男の母聞きつけて、「正妻迎ふる障なり」とて諫むるに、うけひかぬにはあらねど、たゆたひて程經にけり。「さらば今は彼の隱れ人にあひて、いはむ」とて呼びければ、とみに其の夜來たり。もとあそびなりければ、いかに花やぎたらむと思ふに、見めかたちこそよけれ。有樣はたゞなるよりもうちしめりて、著たるものなどもいとあやなし。さてすのこにふしめになりてついゐたれば、母刀自近くへ呼びけれど、猶はじめのまゝにてかしこみをる。刀自かう〳〵と云へば、答へはなくて、頭にかづきたるものをぬぎて、かぶしの切りたるに、一卷の文を添へて出す。刀自いと腹黑き人にて、「こは

さゝえ―竹製にて酒など容るゝ器
白隱和尚―高僧名は慧鶴、駿河原驛の人、明和五年寂
投節―俗曲の名
ふしはかせ―音譜

邊の雪を、

和田の原波もひとつに苦しろき雪を載せたるあまの釣舟

花もみぢの時、男はもちいひを腰につけて東山に遊べば、己はさゝえを首にかけて西山に赴く。かたみに才をたゝかはしけるが、後に夫婦連れて有馬の湯に浴し、妻はそこにて髮をおろしたり。さて禪にも參して、白隱和尚京師逗留の日は、常に詣でしに、折々冷泉寂靜入道殿に出逢ひ參らせしかば、和尚、「此の尼は、もと島原の名妓なり」と語られし程に、入道殿、「さらば昔の投節といへるものを覺えたらむ。唄ひて聞かせてむや」と望み給ひしに、「それはふしはかせいとむづかしくて、今は久しくなりて忘れたるが上に、老聲にては聲振りもまねび難し、其の比の小唄といふものも、今のふりにはあらず。きこしめさむや」とて、諷ひたりしも興ありしとなむ。おのれ未だ若き時、夫婦ともに知れり。夫はもと類ひなき遊蕩にて、美少年に淫し、家產をも破りしと聞けるに、後はあらくれし老法師にて、大聲にてよく物云ひ、萬のこと皆知れるおもゝちして自負せるを、にくむ人もあり、興ずる人もありき。京のうちにては人の知れる男なりしも、今は四十年の昔なり。此の妻人に語りしは、「都の四方にて景物のよき所々、月を見るには聖護

遊女大橋

都島原の遊女大橋、實の名は律（もと彼所に大橋といへる名妓あり。歌讀み手書きぬるが、その手殊によければ、大橋やうといひて今に傳はる由。此の妓もその名を嗣げるとなむ）よろづみやびを好めり。さばかりの女なれば、中々につひのよるべもなかりけらし。尼にならむと思へるを、老いたる母の爲いかにとためらふ程に、栗原一素といへるは、世のすねものにて獨あるを、よき戯がたきなるべしと人あはせけり。其の家いとまどしければ、手づから雜事ども取まかなふに、猶歌物がたりを見ながらぞ飯をも炊きける。老の後彼の島原わたりを過ぎて、

よそに見て思ふもつらし身の昔うき河竹の里の夕は

此の歌、下句などのつゞけがらは、まほならねど、心はいとあはれなり。またある人のもてる自畫賛の歌はをかし。

忘るなと契りし春は夢なれや寐覺とひくる初雁の聲

畫もよくすとにはあらざるべけれど、其のさま風流に見ゆ。またある所にて見しは、海

破鏡云々―夫婦離別の事、破鏡不㆓重照㆒落花難㆑上㆑枝に據る

破鏡は、膳所の士、菅沼外記が妻也。外記は芭蕉の門人にて、馬指堂曲翠といひて、俳諧をもて世に知らる。妻は和泉岸和田の士の女にして、和歌を好み、筑紫箏の妙手也。一年夫と倶に故郷に赴き、播磨路を行きめぐりし道の記を書けるなど、文章もいとよしと、見知る人語られき。予も見むと欲すれど、いまだ探り得ず。外記は、傍輩の曾我權大夫といへるもの、寵を恃みて、上下のためよからぬことども重り、人皆惡め共詮方なく歯を噛みしを、己が家に招き入れ、惡事を責めて殺害し、其の身も心靜に腹切りて失せしが、主君の非なる名を忌みて、私の爭論にもてなしたれば、侯怒りて、その子内記といへるが江戸に有りけるも、自盡を命ぜられて家亡びぬ。されば、今もかしこには語り傳へて、忠誠を悲しむとぞ。かゝれば妻は尼になりて、堺津に隱れ住み、もとより好める歌をよみ絲をならして、悶を遣りける。その箏の手、今もそこに殘りて、破鏡流といへりとなむ。破鏡再び照さずといふ心をもて、薙髪の名につきけるも、貞操の意に風流見ゆ。曲翠の名は聞えても、忠誠の實は隱れぬ。まして妻は俳諧によらざれば、その徒も知らぬ人多ければ、惜くて聞くまゝにしるす

好事―物ずき
三宅氏―三宅觀瀾
古學先生―伊藤仁齋
下流を云々―古學を學ばれしか

事の者の僞作と覺ゆ。三宅氏もしかいへり。此の老の歌右に擧ぐる所は其の眞蹟の寫しにて、かへりて世間の小說には見えぬもの也。猶數首あれどももらしつ。その平日の歌も見し中に、時雨を、

定めなき空とも見えず槇の屋に必過ぐる夕時雨哉

炭がまを、

山風に雪消の雲を吹きとぢて烟短き小野のすみ竈

老後述懷、

老いぬればよそになされて古を語るをだにも聞く人のなき

などよろしと見ゆ。常にこれほどに詠まれたればこそ、心づかひの間にも、意の達せる歌は出できけめと殊勝にこそ覺え侍れ。又古學先生の文集に、此の母氏年賀の壽詩あるを見れば、その下流をも汲まれしか。この先生、他の慶弔につきて、由緣なき人に詩をおくられしとは見えざれば、しか思へり。

尼破鏡　附曲翠

小身—卑賤の身分

連俳—連歌と俳諧

市井—町中

又その折、うたのともだちのもとへおくれるは、

　思ひ出でば音羽の山の秋毎の色を別れし袖ぞとも見よ

復讐の時、各姓名を金の短冊に書きて背につけたる、此の人も同じしるしの裏に書きつけし歌。

　忘れめやもゝに餘れる年をへて仕へし世々の君が情を

これは、先祖十大夫より世祿の恩を詠みし也。赤穂より妻への文にも、「吾ら存じの通に、當御家の始より、小身ながら今まで百年御恩にて、おの／＼を養ひ、身あたゝかに一生を暮し候」など見えし趣なり。また哀なるは、二月三日の文に、「幸右衛門事も、心安く思ひ給ふべし。我が此のうたにて、あきらめられかし。

　迷はじな子と共にゆく後の世は心の闇も春のよの月

死ぬべきなれば、古郷も忘れたらむかとも思ひめさるべき。この歌此の比思ひつゞけしまゝ申し入れ候。膳部にいろ／＼の春の野菜を出されたるを見て、

　武藏野の雪間も見えつ古郷の妹が垣ねの草も萌ゆらむ

凡四十六士の詩歌連俳とて、此の一擧をしるせるものに見えしは、大かた市井の間、好

に「貞立さまをよびむかへて、共に憂きを語り慰みて、久しからぬ御一期を見届け參らせられり〳〵候。賴置事是にて候」とある人なるべし。

○秀和のうたも數々見しが、復讐の折、あづまへ出でたつ時の歌、其の妻への返事に見えしあふ坂のとは、

　別れても又逢坂と賴まねばたぐへやせまし死手の山越

このうたの事なり。又志賀の浦にて、

　古郷にかくてや人の住みぬらむ獨り寒けきしがの浦松

都のそらやう〳〵遠ざかればとて、

　ふるさとの心あてなる大比叡の山もかくるゝ跡の白雲

日に〳〵時雨降りければ、

　別れ行く思の雲のたちそふやけふもしぐるゝ東路の空

所々にてよむうたの中にとて、

　より〳〵に都に歸る旅人の數にもれなむ身の行くへ哉

　忘れえぬ都の友の面かげに道行く人をたぐへてぞ見る

癸未六月十八日と刻す。鬼祿には法名のうへに
　妻や子のまつらむものをいそがまし何か此のよにおもひ置くべき
と辭世のうたを書き、自滅と記す。然れば刃をもて死せるにや。
○因に記す。秀和姉も、同義士大高源吾が母なり。是も義あり賢なりと知られて。源吾よりの文に、「我々共の(我々といふは弟九十郎も義盟の人なれば也)親妻子に、御たより御座候ても力および申さず候。萬一さやうのことになり申候はゞ、かねて仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、じんじやうに御覺悟なされ候へ。御はやまり候て御身を我と御あやまち成され候御事など、くれ〴〵有るまじき御事にて御座候まゝ、必必左樣に御心得なさるべく候。よの常の女のごとくに、彼是と御歎きの色も見えさせられ、愚におはしまし候はゞ、如何ばかりきのどくにて、心もひかれ候はむや。さすが、常々の御覺悟の程御座なされ候て、思召し切り、かへりてけなげなる御勸にもあづかり候事、さて〳〵今生の仕合、未來の喜び何事か是に過ぎ申し候はむや。あつぱれわれら兄弟は、士の冥加にかなひたる義と、淺からぬ本望にぞんじ奉り候。さきにての首尾のほどは、御心にかけさせられまじく候」など見えたるをもて知らる。秀和妻への文の中

邶風—詩經にあり

塔頭—下寺

昨日まで問へば答へし言の葉に聞きこそかふれ松の下風

はる風を題して

咲きそむる外山のさくら匂ひ來て人おどろかす春の朝風

磐瀬てふ名所の題にて

くれて行く秋といはせの山風に紅葉かつちる音の寂しさ

などよろしとおぼゆ。その兄藤兵衛は、同家に仕へながら、義に與せずはた後難を懼る故にや、秀和に通ぜず。その弟喜兵衛、他家に仕へて江戸にありしを、秀和とはれしかども、兄藤兵衛より不通のよしいひおくりしとて、是もたいめせぬよし、秀和妻室への文に書きて、「ぜひもなきお兄ごたちとぞんじ候。かやうの心にては、此方のなりゆきにて、そもじ殿もかまはぬにてあるべく、彌便もなく、一分の働にての渡世、太義千萬にて候」など見えたり。邶風柏舟の詩に、亦兄弟あれどもよるべからず、しばらく爰に往きて愬ふれば、彼が怒に逢ふといへるも、思ひ寄せられて哀なり。かゝりしかば、秀和、同息秀富(幸右衛門といふ)自盡を賜へる後、おもひかねてや、數日食を斷ちて身まかるといへり。墓は平安本國寺の塔頭了覺院にありて、梅心院妙薫日性信女、元祿十六

さるまじく候。又何事もなき世の中にて候はゞ猶以ていか樣にも渡世めさるべく候。心の働きおはしますと覺え候ゆゑ中々心安く存じ、今更思ひ殘す事なくて、快くうち立ち候まゝ、そこもとにもせめての本望と思ひ給ひ候へかし」又二月三日の文にも、「そもじも安穩にも有るまじき歟。さ侍らはゞ、かねて覺悟の事、取亂し給ふまじきと心安く覺え候」などのごとき、前後の詞に、その人がら知らる。もとより此の催の心遣ひ多き中にも、書きかはされし趣にて、その風雅見ゆ。中にも極月十二日の文に、「此方のうたとりわき相坂の歌哀のよし、よく聞き給ふと存じ候。そこもとの歌さて〳〵感じ入候。お淚せきあへず、人の見る目を思ひ、まことに淚をのむといふ心にて、幾度か吟じ候。おくのかたまさり申すべく候。是につきても必々歌御捨なくて、絕えずよみ申さるべく候」とあるなど哀にやさしくこそ。復讐のことおこりて後、此の婦人のよめるうたは、秀和の返事に感じ入ると見えしもその外も傳はらず。平生によめりしは、夫婦ともにうたの師とせし金勝慶安のゆかりの人もてる直筆の寫を見しに、數首あるが中、すこしここに書き出づ。

なき人の墓に詣でし言書ありて（私按、此の亡人は秀和の母義にやとおぼし）

押しすり、ありあふ紙引き擴げて、堤の上に編笠著たる士の、奴一人連れたるかたを書きて、「是はおぼえたるや。わかくて江戸に在りし日、汝を連れて吉原の花街へ通ひし道のさま也。是はかたみともなりなむや」と云へば、忽大に喜びて、「これ〳〵、是にまさる御かたみなし。その時はかくありし、兎ありし」など昔語して、泣々暇乞ひて歸りしが、そのかける者、奴が女の聟に傳へ、その主なりし城下の醫生のに家珍藏せり、と、その國人の話なり。義士の奴に朴實清廉の者ありけるは美談とすべし。

小野寺秀和妻　附　秀和姉　秀和詠歌

赤穗義士、小野寺十内秀和の妻丹子は、灰方氏の女也。義氣風雅倶にその夫の行に配して、殊に睦しかりける旨は、秀和より送れる數通の書に見えたり。初赤穗の難に馳せ下りたる時、彼處より、同姓十兵衛へ贈れる書に、「老母妻にも此の志は申し聞けず候。樣子にてさとりたる事も知らず候。(中略)女にて聞きてもさのみ騷ぐまじきおぼえ有之候間、仰せ聞けられ下さるべく候」と有り。又その明年復讐のため東行して後、極月十二日妻へ贈る文にも、「萬一如何樣の難義かゝり來しとても、見苦しきやうにはしなし申

大石氏僕

大石良雄、赤穗の城を退きて後、暫くその城下に在りてことを辨へ、京へ登らむとせる時、もと使ふ所の奴僕八介なる者、同じ城下に住めるが來訪ひていふ、「我も御供して京へ參り侍らむを、今は老いはてぬれば心にも任せず。これは御對面たまはる限ならむと、御名殘いはむ方なし。たゞし何にまれ御かたみの物を賜らば、身のあらむ限御傍に侍る心地ならむ」と。良雄うなづきて、「げにことわり也。何ぞとらせむ」と、あたりを見れども、調度どもはや半は京へ送り、殘れるも荷造りたれば物なし。硯の入りたる箱一つあるをあけたれば、金貳拾片ばかりありけるを、「せめて是を」とて與ふる時、八介大に息まきて、たゞちに投げ返し、「是が何のかたみぞ。身こそ賤しけれ、心はさばかり下らむや。此の度殿の不意になくならせ給へるは、吾等ごときすら限なく悲しく口をしきに、をめ〳〵と城を明けて、はひ出づる心に比べらるゝか。今はかたみもほしからず」とて、走り出でむとするを、さすがの良雄なれば、しひてとゞめて、「いとことわり也。我あやまてり〳〵。餘りに與ふるものなき故の事ぞ。今思ひよりたる事あり」とて、墨

廚下の小史―淺野内匠頭分涙牒に「米七石二人、酒奉行三村次郎左衞門」二人は二人扶持

はれて敵を射る。一人を斃して弓を韔にせむとするを（商陽が仁、人を傷くるに忍びざるなり）尙勸められて又二人を斃す。一人を斃す每に、其の目を揜うて、その御をとゞめて曰く、「朝には坐せず、燕にはあづからず、（朝に坐し、燕に預るは大夫殿上を許されしをいふ。商陽は士なれば、あづからずといふ）三人を殺す、亦反命するに足れり」と。孔子曰く、「殺レ人之中有レ禮」とみゆ。その官卑ければ、仕ふる所もまた是に應ずべければ、その大夫にあらざるをもて自言葉とす。しかれば、良雄、玄溪の東行を留るもの當れり。又義士の中三村包常（次郎左衞門といふ）は、纔に廚下の小吏として、その主の姓名をも知らざるべき程の者なれば、同志の諸士、或は財を貪るが爲ならむと疑ひしかども、始終志を變ぜず。その祿を食みてはその難に死すべしと思へるなるべし。是も商陽がいふ所、孔夫子の禮ありと宣へるをもて見れば、厚きに過ぐるともいふべけれど、此の擧、高祿の世臣といへども免かれて恥なきもの多き間に、此の如きは、有りがたしといふべし。予此の記を讀む每に包常が志を憐むがために、因にしるす。

京師に歸る。後日義擧の事起るに及びて、諸士と倶に參畫あづからずといふ事なし。其に東行せむとせるに及びて、良雄(大石氏)しひて止むるよしは、八月六日の手書に見ゆ。且三宅觀瀾の復讐錄にも出でたり。良雄の書の大意は、「醫の任異なり。任異なるをもて行を倶にせば、われより駈催の誚あらむ事を憚る。しかじ留りて後事を理せよ。其の身命をいとひて留るにはあらず」など、丁寧に言を盡す。觀瀾の記には、君臣の義異なる事なしといへども、仕ふる日淺く、且醫人は衆の爲めにしらるゝをもて、歩を動かさば必人あやしまむ、といふをもて止むともいへり。觀瀾もまた玄溪の知己なれば、定めてその說を聞き記す所なるべし。玄溪こゝに於てその言に從ひとゞまるといへども、息玄達をもて東行せしめ、諸士の病を護らしむ。復讐の事遂げて、その月廿六日江戸を發し京に還る。その厚きを見るべし。玄溪後又諸國の招辟ありといへども、幷に應ぜず。正德元年病みて京師に終る。凡此の擧、四十六士の事は人皆知れり、此の人の事におきては傳はらざるをもて、こゝにその義信のひとしきを著す。觀瀾と交殊に善きも、理義の間に暗からざる故なるべし。

予私に思ふ事あり。禮檀弓に工尹商陽(楚人也)陳棄疾と吳の師を追ふ時、棄疾にい

招辟―官の召

檀弓―禮記の篇名

東坡—宋人
蘇軾の號
鄂岳—地名
中原—都會

りとぞ。凡世の富有の者の所爲に異なり。

此の草稿を見て幻阿法師曰く、昔唐土にも子を間曳く類ひありて、有道の君子是を救へる事、群談採餘にて見しと、卽寫して贈らる。賈彪爲二新息長一。小民貧困多不レ養レ子。彪嚴爲二其制一。與レ殺レ人同レ罪。數年間。人養レ子者以レ千數。曰。此賈父所生也。皆名爲レ賈。又東坡曰。鄂岳間。田野小人例只二男一女。過レ此則殺レ之云云。是もまた制して救へるよしなり。文長ければ之を略す。官人是を救ふは尤仁政といふべし。されども、志あれば倘安く、庶人にして金を捨て救ふは甚難かるべし。中原の地にても間墮胎に及ぶは、倘間曳の類なれども、是は貧人の所爲にあらず、婬婦のみそかごとなれば、救ふべき道なし。歎くべし〳〵。

寺井玄溪

寺井玄溪は、其の父本多侯政利に仕ふ。其の國除して處士となれる後、玄溪京師に居て醫を業とす。元祿十三庚辰歲始めて淺野侯長矩に仕へ、醫をもて江戶に侍り。明年春。侯吉良氏に傷をもて、自盡を賜ひ、國除かむとする日、衆と倶に赤穗に至り、遂に退いて

領主―松平越中守

し。

内藤平左衛門

關東のならひ、貧民子數多ある者は、後に産せる子を殺す。是を間曳といひならひて、敢て惨む事を知らず。貧凍餓に及ばざる者すら、倣ひて此の事をなせり。官の教あれども尙しかり。然るに、陸奥白川の傍邑須加川と云へる所に、内藤平左衛門といへる豪農是れを歎きて、年毎に緣を求めて、間曳かむと思ふ者有りと聞けば、其の養ふべき財を與へて救へり。「もと米價賤しき所なれば、多分の費にはあらず」と自は云へりとなむ。此の人篤實類なくて學を好めり。されば、是のみならず、人を救ひあるひは道橋を造り、慈悲を行ふこと多ければ、領主も賞し給ひて、苗名帶刀をも免され、士に准らへらるゝといふ。身まからむとせる時まで、孝經を枕邊に離たず。此の救ひの業も世々守るべきよしを遺言せしかば、今其の孫の代に及びても、猶もとのごとく、しかも續きて篤實の人なりとかや。或僧この慈心を聞きて、吾が寺の門を建てむ施財を求むるに、その人笑ひて、「吾は人のうれへを忍びぬ故に救ふなり。寺の門なきは何かは苦しからむ」といへ

を立てず、法弟賓洲和尚に寺を附屬す。是又他の難き所なり。賓洲も佛學に長じて德業ありとぞ。

米屋與右衛門

攝津國今津の里、米屋與右衛門といへるは、儒學に長じて節儉をつとめ、富豪なれども僕に交りて、自ら造酒の事をなし、世渡に怠られざれば、益々富めり。富めるに隨ひては益益陰德を行ふ。或時親族の僕、主人の金百兩を遣ひ捨て行へなくなりしを、樣々尋ね求めて深く諫めて後、其の百金を與へ、再び主の家へ歸らしむ。又此の里の内に道甚狹き所あり。されば火災あらむ時に人の難あるべきを恐れて、其の所を買ひて廣くす。又板橋は水災の時危しとて、石橋に造り替へぬ。此の類擧ぐるに遑なし。尤常に貧人を惠むを所作とす。されば、此の人死せる時、遠近の男女集り、聲をあげて泣き悲しみける樣、釋迦佛の入滅も思ひ知られけると、見し人語りき。こゝにをかしき事は、其の悲みし人の中に、愚なる嫗ありて、「是ほどに學文したまへるさへよき人なるに、もしさもなくばいかばかりよき人にてあるべき」と云へりしとかや。一語天下の學者を砭針すといふべ

砭針—戒め正す

寺格―寺院の階級

甘心―滿足

黃檗山―明の隱元來朝して建てし禪寺、山城宇治にあり

一切經―佛教經典の總名、凡て七千餘卷

勸進せる―僧侶が佛道に關し俗人を勸めて寄附を求めし

僧鐵眼

僧鐵眼、諱光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻もありしが、其の宗徒不德无才の人も、寺格により上位に居ることを甘心せず、黃檗山に登り木庵禪師に從ふ。其の妻なる人尋ね登りしかども、對面せざるを慮りて、黃檗門前に旅宿して、師の出づるを窺ふに、或日果して出でたるを、强ひて誘ひければ、止む事を得ず伴ひて故國へ歸り、其の鄕まで入りしが、ぬけて上途し、又黃檗に至る。法を嗣ぎし後、攝津國難波村瑞龍寺を建立せり。世人今猶鐵眼をもて其の寺を稱す。一切經の藏板を思ひ立ちて勸進せしに、其の料金集れる比、天下大に餓ゑしかば、師憐みて件の金を殘らず施し、又前の如く勸進せるに、數年ならず又集りたるが、再び五穀不熟にて餓死多ければ、此の度も此の金を施行に盡せり。されども德の至りにや、第三回の勸進にて藏經の印刻成就して、其の經を頒つ所の代金を、本寺より已下一宗の寺々に配ること今に於て同じ。(同宗に錦袋園といふ藥をうるも同じ。勸學寮より一宗に金を頒つ)此の師佛學深く說法能辯にて、俗間を化度する事多けれども生涯建立門にかゝり、自の腕力十分ならずといひて、吾が法嗣

中行―行よく中庸を得るを中行といふ、中行に過ぎたりとは中行にはづれたりといふ義なるべし

として隱れ住みしに、終に禁も解けて本の姓名に復せり。或年妖怪ある家を知りながら居をトしに、其の妖止みたりとぞ。厚腸思ふべし。たゞし妖怪ある家と知りながら住みしは中行に過ぎたり、孔夫子の已甚をしたまはぬをこそ法則とはすべけれと、閑散餘錄に評せるは宜なり。

倘齋の内人、その德、倘齋にも勝れりとかや。倘齋禁錮せらるゝ時、母堂と子二人を婦人に托して、金貳拾片を與へ、母堂の奉養懇につとむべきよしを命ず。後三年を經て放たれし時、相見えて擧家安全を喜ぶ時、婦人彼の金を出して倘齋に返す。倘齋大に怒りて「こは何事ぞ、如此ならば母君は窮し給ひし事如何ばかりならむ。汝不孝の罪いふべからず」と罵るに、婦人徐に答へて、「母君の奉養は心の及ぶ限り盡し侍りぬ。唯吾が身は人の爲に雇となりてせざる所なく、其の價をもて仕へ奉りし也。此の金はかく禁を許されたまはむ時の用に返し申さむと蓄へぬ。とらはれとなり給ひては、さこそ苦しうおはしまさむに、妻子の身として安くあらむものかはと思ひて、吾等三人は、冬綿の衣を身につけず、夏蚊帳を室にたれず。かゝれば母御の御爲に乏しき事なかりし」と語りしかば、倘齋も大に感じて其の勞を謝したりしとぞ。

近世畸人傳 卷之二

三宅尚齋 竝妻女

尚齋三宅氏、名は重固、通名丹治といふ。山崎闇齋先生の門人にして、爲レ人剛毅、經學を任とす。はじめ阿部侯に仕へて世子の傅となる。世子忍びて花柳の街に遊ぶ事を憂へて、しば〳〵諫むれども用ひられず。その近侍二人も此の人の門生也。是また諫を入るれども用ひられぬのみならず、花街に誘はるゝ時々あれば、義にあらずとして終に亡命す。こゝに於て丹治もまた亡命せむ事を計りて、一室に禁錮せらる。されば始めに自殺せむと思へりしかど、よく思惟するに益なし、昔の聖賢も憂にあたりて著述ありし、吾もこれに倣はむと思ふに、紙筆を與へざれば、詮方なし。辛うじて、釘の折れたるを拾ひ得て、さて風寒に犯され、鼻涕出づるよしを云ひて、紙を多く乞ひ、彼の釘もて身を傷り、血を墨とし、葭の折れたるを嚙みて筆とし、易說を草す。三百枚に及べり。後に許されて京師に上りしかども、尚三都の住ひを禁ぜられしかば、吉田を氏とし、尚齋を名

ざれば、はなれ〳〵になり侍るを、唯今かう〳〵なりしに、おくれて書きし傍のつりあひ、常よりもよし。是他なし、母の蔭也。親といふものは有がたきもの也」と云へりとぞ。おもふに自此の如き孝心ありて、また此の如き孝子を得しは、自然の報ならずや。窮樂洒落の趣は後に傳をたつといへども、其の德行の事實においては、久兵衞の因にこゝに擧ぐるのみ。

凡近來民間に忠孝の行實多きは仁風の化によるべし。されば、見聞く人もまたこれを喜びて筆記し、上木に及ぶ故に、今繁く出さず。古きがもれたると、今生存の人とは、花顚子が拾遺の擧に委ぬ。

度に及び、翁眼覺めたる時、身じろきの音にまれ咳聲にまれ聞きつくれば、「久兵衞參りたり」と告げて内に入り、湯水より食事の取まかなひをして、吾が宅に退き、さてまたあきものに出でむとする時も、「今參る」と告ぐ。歸りてもあつき時寒き時をもいとはず、そのまゝに至り、安否をとひ、休めといはざれば去らず。此の住居同じ街なれども、あまりに度々往來する孝心に感じ、あたりの人々尙も近かれとはかりて、明きたる家の壁をこぼちて通はしめたりとなむ。或年窮樂下血を病みて、臥牀を汚す事時なきを、自ら取り捨て清む。妻恨み歎きていふ、「是はわがすべき業なるを、君まかなひ給ふは、心を隔て給ふや」と。久兵衞首をふりて、「いな、われは親なるゆゑにする也。汝もまた同じとはいへど、心のうちにけがらはしと思ふは必定なり。露ばかりもさおもはむには、父の爲めいたはしければ、せしめず」といふを、妻もさるものにて、いかで透間もあらばわが取あつかはむとせしかど、其のひまなかりしとなむ。是にてよろづの仕へのやうを知るべしと窮樂門人の話也。又語らく、窮樂も親ある時孝なりし。其の一つをいはば、ある時、筆を染めて字の篇を書きたる時、母呼びしかば、たゞちに至る。さて事はてて座に復し、傍を書きつ。其處へ門人來りしに告げて云ふ、「およそ偏の勢をもちて傍を書か

め、文を讀ましむるに、群をぬけて共によくす。さるに、ある時父、「汝は木綿を商ふべし」といふ。久兵衞驚きて、「吾不才には侍れど、學を好み、はた君の業を嗣がむと勵みはべるに、何の御心にかなはぬ事ありて、かくはのたまふや」と歎く。「否さにはあらず。始より汝には交易を業とせしめむと思へり。されど、得分多きものにかゝりては、かへりて怠もし禍も生ずとはかりて、利の微なる物をこれかれの人にとひ聞くに、油紙木綿に過ぎたる小利の物なし。それが中にも、油は時價の高下甚し、紙は品多くて煩はしといへば、木綿をと思ふ。いづこにてもこれをもとめてうれ」と教ふるに（窮樂が思惟甚奇特なり）やがて其の日、近き所の木綿商人に語らふ。商人此の男をまだ知らねば、云へることは、「いかにも窮樂翁の御息に違はずば、木綿は何計も與へまゐらせむ。但しさきに人傳をもて翁に賴み參らせし書もの有りて、久しく果し給はず。若し之を携へ給はば證とすべし」と。久兵衞卽父にしか〳〵といへば、「げにさる事あり」とて、直に書きて與ふるを持ちて至る。こゝにおいて商人其の約のごとく賣物を與へし程に、あすともいはず荷ひて賣り歩く。其の後又父あるむすめをとりて娶せ、宅を異にせしむ。宅ことなりといへども、夜纔に明くれば、やがて翁の許に行きて、戶外よりうかがふこと二度三

忠臣は云々
―後漢書韋
彪傳に出づ

ひたてて希有なりといふべき事はなけれど、暇なき身にて、かくあつかふなむ、及ぶべき事にはあらず。唯其の身はさも思はぬさまなりと云ひき。予が許に使ひし者は、此前死して年月もやゝ積りたれど、昔わすれず時々に來とぶらひしかば、この折もかくとみに告げたる也。忠臣は孝子の門にもとむといふも思ひ知られ侍り。されば、彼の告げたりし時、予も端布をあたへてよろこびをのべ、またかれが心得やすかるやうに、

うらやまし親につかへてまことある人ぞと世にも仰ぐ譽れは

とうちおもふまゝを書きつけてやりき。

龜田久兵衞

龜田久兵衞は、書家窮樂が養子にて、もと窮樂住みける近隣にありし寡婦の子也。十餘歳の時母と共に物詣し、人たちこみたる中にて、過りて傘をとりかへて歸り、これをかへすべきよしなきを憂ふ。母「何かは苦しむらむ。ましてこれはわがのよりも新らしければ利を得たり」と云ふに、「否其の新らしきが故に尙返さではあられず」と答ふるを、窮樂聞きつけてやがて取りて子とす。(窮樂能く人を知るといふべし)さて年來書を學ばし

王祥云々―晉人、性至孝、氷中に鯉を得て母に進む
孟宗云々―呉人、性至孝、雪中に筍を得て母に進む
領主―柳澤家
檀寺―旦那寺
おとどひ―兄と妹と

して、王祥が氷の裏の鯉、孟宗が雪の中の笋を、たゞ昔の物語とのみ、なほざりに聞き過す人を驚かすに足るものか。

近江新六

近江蒲生郡安土に新六といへる貧農あり、予がもとにありし僕が兄也。其の妹と共に九旬に及ぶ父に孝ある聞えありて領主より(大和郡山)賜にあづかれり。其の折とりあへず、予が八幡の家に來て告げしかば、對面して、「如何なる事をなせし」と問ひつるに、「いとふしぎに侍り。いまだ孝といふもののすべきやうをだに知り侍らず。唯年老いたる人なれば、心に逆はぬやうにと思ひ侍らふばかりなるに、かく賞し給はるは心得ずながら、何にもあれうれしさに、たのむ所の御寺と、此の御もとへは、とりあへず告げ參らするにて侍ふ」といひき。そのさま露も言を飾るにはあらず、おもふまゝをふつゝかにいひたるなりき。他日その里の人にとへば、此の親常に檀寺に詣づることを喜ぶに、さのみ遠からねど、九十の翁なれば、行歩かなはず。それを日毎に竹輿に乘せて、妹と共に舁きて、心のまゝに詣でしむ。湯を浴する時は、おとどひ抱き抱へて浴せしむ。何をいと

芭蕉庵―俳人、正風體の開祖
既望―十六日

農日下氏伊駒山人の話なりとなむ。

大和伊麻子

大和の國葛下郡竹内村に寡婦あり、伊麻といふ。年六十にあまりて猶老いたる父に仕へて孝篤し。寛文十一年辛亥六月、老父病甚しくして、日を經て飲食をおもはざれば、伊麻歎く事頻なるに、十二日すこし病のひまある時にいふ、「もし鱓魚あらば是を喰はむ」と。されども、此の里山中にして、覔むるによしなければ、如何すべきとまどへるに、夜いたう更け過ぎて、瓶の水に音あり。伊麻驚きあやしみ起きて見るに、好める所の鱓魚瓶中にをどりければ、喜びとりて膳にとゝのへ進めしに、是より父の病日々に快く、常に復りし旨、芭蕉庵桃靑、貞享五年四月に大和路を行脚のついでに聞きて、涙とゞめがたかりしと、やがて京に來りて、書家雲竹に語る。雲竹もまた感ずるの餘りに、みづから大和に往いてその婦にまみえむとせるを、門人友竹爲に代りて行き、其の姿を寫し來れりと、卽雲竹其の畫像の上に自筆にて記せり。同じ年八月既望とあり。芭蕉雲竹共に聞ゆる人にして、見聞の確なる證此のごとし。さきに記せる日下の樵者と同日の談に

もてなす。其の外委しき事をば知らねども、此の一事をもてはかるべし。されば、官にきこえて大に賞し給ひ、賜有りけり。享保年間の事にて、世にひろく稱へたれば、京にても是が姿を繪にかき、事狀をもあら〳〵記して、木揚利兵衞仁義禮智信と呼ばはりて賣りしがをかしかりしと、其の時を知る人語りぬ。

河內清七

河內の國日下の里に、樵を業とする貧者淸七といへるものあり。母は富人の家の乳母たりしかば、貧しき世を經ても、口腹の事に儉する事能はず。しかるに此の子孝ありて、朝には人よりも疾く山に入り、夕には人よりもおくれて歸り、其の間に他二人にあたるばかりの業をなす。其の一人が分は常のまかなひに充て、一人が分をもて母の好める食をとゝのへ、乏しげもなくもてなしけり。或日母鶉のあぶりものを望みたりしに、其の日は暮れたれば、明る朝とく起きて、市に行きて求めむと用意したる時、窻にあたる物の音せしかば、童どもが戲に土くれなどうちけるよ、とおぼえながらいでて見るに、鶉二羽落ちて有りければ、喜びてとくすゝめけり。孝のまこと至りけるなめりと、その里の豪

上聽云々―將軍に上申し

はいかに」と責め、はては牢にこめむとまで試み給ふを、八介「主の罪は如何にもあれ、吾は恩重き事親に勝れり。幾程もなき老の生涯を見果てゝ後は、命をも召され候へ。今吾なくば飢渇を誰かは救ひ侍らむ」と、詞を盡し泣き悲しみければ、府尹を初め諸吏皆聞くに忍びず、涙にむせびぬ。さて府尹「さきの言は汝を試みむための偽り也。懼る事なかれ」と、厚く是を慰め、終に　上聽に達し、明る年正月六日錢五拾貫文、賞として官より下し賜ひ、府尹も是が至誠を感じ給ふあまりに、其の子息を侍食せしめ餐を賜ふ。後に或人金をもて彼の賜物の錢三五文を乞ひ得て、錦の袋に盛り家の寶とし、永く子孫に傳へて忠誠を勵まさむとす。他の家々も亦是に傚ふ人多かりしとなむ。

木揚利兵衞

江戶に日雇を業とする利兵衞といへる者あり。此の業を俗に木揚といへば、卽稱とす。幼年の時仕へし主の家衰へ果てて、九旬ばかりの老婆賴むよすがもなくなりたるをはぐくむに、わが他に行きたる間、妻が仕ふる事の疎ならむを疑ひて、明くれば背に負ひて、わが行く所へ伴ひ、其の日の事業をなす傍に、物を敷きて据ゑ置き、わが喰ものをわけて

簀を易ふ—死す
駿府客舍—靜岡の旅舍
江戸芝の某—鹽谷宕陰
府尹—町奉行

考錄、經說、詩文集數卷、皆いまだ稿を脱せずして簀を易ふ。惜むべし。

駿府義奴

駿府客舍石垣甚兵衛といへるの者の僕八介、十一歳より此の家に來り仕へしが、十五になりける年、家衰へぬれば、奴婢皆暇を出せしに、八介は年まだ幼しといへども、「貧困を見捨て他へ行くべきにあらず。且二君に仕ふる志なし」とて、是より晝夜といはず、寒暑をさけず、或は山賤の業をなし、又賃雇の役に走り、唯錢を得るの多きを喜びて辛勞を厭はず、其の主の爲に心を盡せる事狀は、江戸芝の何某漢字に記し、又京にても是を假名に譯して、倶に印行せれば、今は唯題名を表するのみ。志あらむ人は彼の記を見るべし。伊勢參詣の供に雇はれて其の賃銀と路費をかねて金壹片を得、是を前日主に與へて、己は一錢も貯へず。晝は重荷を持ちながら物を喰はず、夜は窃に旅舍にかたらひて、價を出さず宿り人々の餘飯を喰ひて過せしなど、其の外唯主の歡を見るを樂しみて、身を省みざる有樣、又類有がたし。且敬を盡せるも亦人がらには似ずとぞ。寶曆五乙亥秋、府尹松前氏是を召し、佯り怒て、其の主甚兵衛が罪を算へて、「かゝる無賴の者に志を盡す事

辭氣―かき方

めていふ、「恐らくは人汝をもて畫工とせむ」と、筠圃是に感じて又畫かず。其の後故郷の甥の家に投宿せし時、甥氏紙筆を出して請ふこと頻にして曰く、「母堂にはよきにまうさむ。吾にして君の畫を藏せずばあるべからず」と、一夜責むれども終に筆をとらず、一たびとゞめし言を食まず。他人への義を省みて、甥氏に私せざるなるべし。書も亦次いでとゞむ。かゝれば世ます〱其の書畫を珍重す。京師に住める事數十年といへども、俗習に染まず、世情に疎き事は、一日東山に往いてかへさ雨にあひ、二條加茂川の東なる賤妓の居處を過ぐ。簷下を歩みてこれを避くるに、妓ども「入り給へ〱」と頻に呼ぶ。先生歸りて人に語らく、「仁といふものは實に人の固有也。吾雨にあへるを見て、彼の輩頻に呼ぶ。傘を貸さむとなるべし」といへりしかば、人笑ひて、仁といふものと異名す。謙遜の跡は、其の相識悟心和尚の詩集の序を書かれしにも、其の辭氣弟子の列につくもののごとくなれば、和尚辭すれども肯かず。是まさに予が知る所なり。凡近世の諸儒、誇大自負風をなすに表裏し、其の名の奇を好まず、字の常をつとむ。是即奇なりといふべし。されば郷黨に交はる事愚なるがごとく、友人と會しても必座を下りて懼るに似たり。終る時五十八。東山永觀堂の墓地に葬る。門人私に諡し行恭といふ。所著、備

向東蹂躪之民誅身々付東傳也行使

庭幽苦恨當年王子獄

回風一陣淅々蕭々戰其聲率蔵兵段

雲氏蒐窺此不見來客更獨獲也

君存常了事才一補題風林 霞亭

て、それが生涯愛して使はれしとなむ。高槻の儒臣たりしかども、京師に住みて終る。嵯峨二尊院先塋の側に葬れり。

宮筠圃

筠圃宮氏、諱は奇、字は子常、故に通名常之進といふ。尾張國海西郡鳥地村の人 生來溫厚謙遜にして、しかも聰慧強記、十歳既に詩を善くす。父是にいへらく、「勉めよや。吾が業を繼がずば我が子にあらじ」と。十三歳の時母氏背に灸す。筠圃頻りに涕泣す。母氏「熱に堪へずや」と問ふ。答へていふ、「然らず。吾聞身體髮膚敢て傷ひやぶらざるを孝の始とすと。然るに灸せざればかなはぬ病身なるを歎き侍るのみ」と。生につかへ、死を喪せる孝心、始終此のごとし。年十八父母ともに京師に來り、其の父東涯先生に學を受くるが故に、亦以て是に事ふ。東涯歿して蘭嵎に從ふ。學成りて其の名籍甚來。り學ぶもの多し。又書は趙子昂を學び、深く軌範を得、また畫を能くす。畫竹は殊に風韻一家をなせりければ、世人平安四竹の一とす。(四竹は淺井圖南、御園意濟、山科宗安、宮筠圃等なり)かゝれは其の書畫を請ふ者、月に日に絶えず。母氏此のごときを見て、諫

高槻―攝津高槻、永井家領地

宮氏―宮崎氏の略

身體云々―孝經の語

蘭嵎―仁齊の第五子、紀藩の儒

趙子昂―名は孟頫、子昂は字、歸安の人、經史、詩文、書畫に長ず

割木—細く割りたる薪

にはかられ給ふや」と。先生いふ、「吾これを知れりといへども、もしまことの失火ある時、例の僞りぞと心得てたゆみてはあしと思ひて、かくするなり」と。また或時住める家の板敷を引放ちて、何やらむ人を指揮す。ある書生入り來て「何事ぞ」といふに、「今誤りて鐵の火箸を落せり。故に是をもとむるなり」と。書生「それは何ばかりのものにもあらず。さながら捨て給ふがよし。騷がし」といへば、「否此のものを惜むにはあらず。此の家は人のものなれば、我にかはりて住む人あらむに、板敷を踏み落し、此の火筋にて傷けむ事を恐るゝ故に、かくするなり」と答ふ。後子を養ひて嗣とするに、既に長じたれども、小兒の思をなし、堀川の岸を過ぐる時は、後より手をあつるごとくして、是を護る。人見て怪しぶばかりなりしとなむ。又をかしき事は、年比召し使はれし一奴、甚愚直なるものあり。ある日鰒を切らしむるに、「是は庖丁をねさせて切るべし」と敎へたるまゝに、其の日は事に紛れて、明の日「いかに昨日の鰒は切りたるや」と問はる。「奴未だ寐させたるまゝにておこし侍はず」といふが、あやしさにみれば、割木を枕とし、布巾を打ちきせ置きたり。又鯛の頭の切たるを炙らしむるとて、頭は角に掛くべしとありしに、やがて繩にてつなぎ、屋の角に掛けたりし。先生「奴はかくのごとくなるがよし」と

> 龜山の領地—松平豐前守領

> 青樓—遊女屋

事を得、月比を經て創も痊えたり。其の所龜山の領地なれば、その妻の烈を賞し給ひて穀を賜ひぬと、東涯先生の筆記に見ゆ。

伊藤介亭

介亭伊藤氏、諱は長衡、字は正藏、卽通名とす。（是堀川の家風）仁齋先生の第三子也。性質篤實に過ぎて魯に似たり。殊に孝友ある人なり。母氏雷を懼る事人に過ぐ。故に生徒集まりて講談の半といへども、空曇れば、直に辭して、其の本家堀川に走る事夏日の常なり。其の他も推して知るべし。兄東涯に仕ふるもまた猶父のごとし。（父には幼くて別れしゆゑ、此の兄弟皆東涯先生のをしへを受く）弟たちは尙少年にして、時々青樓に遊ぶ。或は朝に及びて歸るに、介亭同居の日なれば、早晨に起きてあらるゝに苦しみ、或時門より入りて急に呼んで曰く、何處にか火事ありと。先生卽走りて屋上に登り、是を望む間に、部屋に入りて紛らはしたり。後は是をよき事にして、朝かへる毎にかくよばはるに、あやしぶけしきもなく、例のごとく屋上にのぼる。奧田士亨（東涯の門人にして三角と號す。通名惣次郞。伊勢の人）諫めていふ、「是は令弟達の欺かるゝなり。何ぞ常

馮婕伃—前漢書外戚傳上に出づ、元帝、虎圏に幸せし時、熊逸して殿に上らむとす、婕伃直に身を以て熊に當れる故事

加へて、常に復しぬ。此の後、頭に髮露ばかりも生ひず、其の邊にて、藥鑵七兵衛（頭のあかく兀げたるを俗にやくわんといふ）と異名せるが、山には懲りて畠物など賣りて歩きし。今を去る事凡四十年前、六十餘の翁なりし、と予の知る人語りぬ。其の勇其の智、漢元帝の爲に熊にむかひし馮婕伃に劣らずといふべし。また同じたぐひは、

○享保三年戊戌十一月二十八日晡時、丹波國舟井の縣に野猪傷を蒙りて怒り走り、八木村より南廣瀨村に入る。山本をめぐりて直に山室村に向ひ、鳥羽村を過ぐ。一人田かへしてありけるものを牙けて、倘荒れまさりぬ。樵者久兵衛なる者年六十四、薪を負ひて歸るさにあひて、俄に避け隱れむ所なく、其處にありつる樹を攀ぢ、地を離るゝこと僅に三尺ばかり、猪裳の端を啣へて引落しければ、詮方なく相敵すること久しうして、遂に崖下に墜つ。猪いよ／＼猛りて喰ひ嚙みて、あまた所やぶられしかば、頻に叫び呼ぶといへども答ふるものなし。是が妻某、年五十四、聞きつけてとみに走り來りて、袂をもて猪の首におほひ、頸に跨りて抱きとゞむ。猪動く事を得ざる間に、頻に命を救へと呼ぶ。こゝにして村民二人相繼ぎて來り、短刀をもて刺す。また一人來て、斧をもて、其の脚をうつ。既にしてあまた集まり、其の疲れたるに乘じて殪しぬ。樵者は終に活くる

を告げしが、後にて息絶えたり。やがて其の親の許へ舁入れたるに、主の妻も聞きてかけり來れるに、綱が母、幼兒をわたして、「血にはまみれ給へど、つゆばかりあやまちさせ奉らざりしを悦びはべる」といへり。此の母もたゞものにはあらざりけり。此の事を國の守聞し召して、二なく憐がり給ひ、大なる石碣をたて、忠烈綱女の墓と記し、銘は儒臣小野忠次郎に命じて書かせ給ひ、三日大佛事を行はれ、遠近の人々も詣で、詩歌の作、心々に手向ぬと聞えし。

樵者七兵衛妻　同　久兵衛妻

洛東蹴上に樵者七兵衛なる者、一日山に入りて歸る事遲かりしかば、其の妻迎に行きたるに、とある崖下に、菜を一荷にし、息杖にもたせながら、人は見えず。ふと見あぐれば、木の枝に、大なる蚺、首をたれて腹ふくらかに見えしかば、心きゝたる女にて、是は夫を呑みたるならむと、やがて彼の荷に添へたる鎌を取りてむかへば、蚺口を開きて是をも呑みたり。呑まれながら此の鎌にて、口より腹まで切り裂きしに、夫はたして腹中にありて、己と共に地へ落ちたれば、直に肩に引かけて我が家に歸り、數十日保養を

洛東蹴上―山城國愛宕郡

息杖―物擔く人の、天秤棒を支へ、息を休むる杖

いづる類なり。大水湧き流れ、村里ほろび人死す）水に溺れ死す。その時、屍を掘り出して見れば、十二なる養子を背に負ひ、八つになりける實の子の手を引きて有りけり。幼きかたをこそ背には負ふべきに、長じたるを負へるは、此の時に臨みて遁れむとかまふるにも、養子をおもくするの義をおもふなるべし。女といひ邊鄙の產なり、何のまなぶ所もあるまじきに、天性の美此のごときは世に有り難き例なるべし。さるに思はざるに災にかゝり、死をよくせざるは悲し。しかはあれど、此の災によりて其の德ます〳〵あらはるといふべきか。國人これが爲めに碑を建て事實を記せりとなむ。

若狹子

小濱の府下
｜酒井若狹守領

若狹の國小濱の府下に、病狼あれたる事ありしに、某士のうちに使はるゝ小女、十四五歲にて綱といへるが、主の幼兒を背に負ひて、そのわたりに遊びける時、彼の狼不意に走り來りてとびつきけるを、綱は急に己の裾をまくりて背の兒をおほひ、うつぶしになりたる時、狼は綱女が尻へ喰ひ付きぬ。さる間に、人々聞きつけて集まりしかば、狼は卽走り去りたり。さて彼の女を物に乘せたるまでは、尙詞たしかに、主の子の故なきよし

にてかひ〴〵しく切りければ、唯吽といふ聲ばかりにて死しけり。傍の衣裳うちかけて、さりげなくものし、綱治歸りたるに、始めてしか〴〵の趣始終を語りけるとぞ。女の密夫する事、かくれても顯はれても、たま〳〵聞えて其の身の恥のみならず、親はらからまでの名を穢す事なるに、此の膂子の潔きこゝろもちに、綱治手をいたはらさず、家のうちのさわぎもなきふるまひは、また例少くぞ侍る。以上の婦德を思ふに、唐土の書には、賢女、節女、烈女などこと〴〵しくしるしたるには、いやまさりてぞおぼえ侍る。正德三年の春より病つきて、同じく七月二十四日に身まかる。齡四十二。江戸駒込大乘寺といふに葬りて、妙珠院月澄日冷と諡せり。まことに惜むべく尊むべき貞烈の婦人ならずや。

甲斐栗子

栗子は、甲斐の國山梨郡の農夫某が妻なり。舅姑に孝ありてその名高し。然るに、舅姑も夫も亡せける後、山拔といふ事にあひ、（山ぬけといふは凡山國にある大螺にて、堺の

長山宵子

此の傳は、安藤爲章の年山打聞に出づるまゝ一語を增減せずうつせり。

宵子は水戸府城長山七平某が女にて、奉行職師岡與右衛門綱治が妻なり。夫婦のあはひ睦しく、奴婢を顧みて惠めり。すべて内を治むるの婦德うるはしきが中に、善助綱常は家婢の產む所なりしを、やがてみづからの子とし、其の婢を深くいたはりて、湊村の某に嫁せしめ、綱常を愛育すること、我が生む所の如くなれば、「母子の間いさゝかも隔つる事なく、綱常もまた孝行二心なく　もとより彼の家婢の生めるといふこと、十四五歲までしらずぞ侍りし。其の幼なかりし時病を憂へたりしに、宵子醫藥を嘗試みるあまり、人目をつつみて、夜に紛れ、神崎寺の觀音大士へ素足にて參詣し祈りける。感應のことわり空しからで、その病愈えけり。是世の中の養母繼母の誡めとなり侍りけむ。更に家婢を撰びて綱治にめさせ、其の婢をも又いとほしき者に敎へ導きて、織縫何くれまで、女職をならはせたり。古人曰く、「凡婦人のうまれつき妬を甚しとす。もし妬なくば、百拙捨つべし」とぞ。嗚呼宵子や、妬薄ければ世の中の妻女の敎となり侍らまし。又綱治久しく召し使ひたる若侍、おほけなく宵子に心をかけて、さま〴〵いひなびけむとせしが、或時綱治

一隻眼—物を見拔く見識

九相圖詩—人の死後九變して遂に骨となる迄の有樣を畫に合せて作れる詩

或人曰く、子亦婆子燒庵の則をしるや。婆氏一庵主を供養す。一日二八の好女子をして抱住していはしむ。師恁麼時如何。僧曰、寒巖枯木三冬無二暖氣一。女子婆に告ぐ。婆二十年來此俗庵主を供養すといひて、終に僧を放出して庵を焚く。今此和尚の事に似たり。是非如何。予曰く凡古則は別に一隻眼を開いて看るべし。此和尚の實德と相通ぜず。もし然らずといはゞ、誠に子に問はむ。庵主或は女子に淫せば、また婆氏何とかせむと。或人微笑して去る。

又或人語らく、王陽明いまだ弱冠の日、及第のため京師に赴く途中、投宿せられし家に、艶色比類なき寡婦あり。夜忍びて陽明の臥床に至りしに、猶寢ねやらず、旅裝中の書を取出し見居りければ、驚きたれども、止め難き思ひの程を述べ、死をもて挑む。陽明靜に九相圖詩の意を說きて、無常を示されければ、聞得て涙をながし、教誡により操を破らざりし恩をのべ、罪を謝して退きたりといふことありとなむ。何の書に見えたるや知らず。是は趣意全くひとし。嗚呼幾人か此に至りて一生を誤る。白刃をも踏むべし、此の境に動されざるは難からずや。

屎臭の骨—悪臭ある肉體
眞歸—眞の往生
作麼生—そも如何
淨宗—淨土宗
行脚—諸國巡行
常座不臥—常に座して臥さぬ事
念佛を授け—南無阿彌陀佛の六字の名號を信者に授けて佛緣を結ばしむる事

鷹峯にて遷化の時の遺偈、

七十餘年快哉。屎臭骨頭堪ニ作ニ何用ー。咦。眞歸處作麽生。鷹峯月白風淸。

僧無能

此の傳は、或僧漢文の著述、五僧記事といふものの中より取出でて其の文を假名に和していだす。

陸奥の無能和尚は、淨宗の大德にして、四十未滿の遷化なれども、其間自行化他の行業類なき事は、其の傳記既に世に行るれば、こゝに擧げず。中に一奇行、安きに似て、甚難き事を記す。まだ若くして行脚の折、或家に投宿有りしに、その家に好き女子あり。和尚の面貌、甚美に、(傳記には地藏菩薩の化身といへり。其の美知るべし)氣韻淸高なるを見て、戀慕の思ひ燒くがごとく、起居靜むるに堪へず。夜深更に及び、忍びて其の寢室に至りしに、和尚はもとより常座不臥を持すれば屛風を巡らしたる中央に端座して、微音に念佛せり。女子やがて背より抱くに、驚くけしきなく念誦氣平かなるさま、猶蜉蝣の樹を撼すがごとく、蚊子鐵牛を嚙むがごとし。半時ばかりをへて、女自放ちて出でたり。朝に及びて狂を發し、獨言して恥を述ぶ。和尚憐みて、爲に念佛を授けて後、やうやう愈ゆることを得たり。女子是より後終身嫁せず、念佛して逝せりとぞ。

角倉氏―角倉了意

遷化―僧の死すること

不干―世上の評判には全然無頓着なり

大津繪―走り書の粗畫、近江の大津にて賣る

を流す。是は師の法弟なり。とかく舊を語りて別れむとする時、「汝唯諸侯に醉ふ事なかれ」と示す。かゝりしかば、又去りて、京の片邊に小家を借り、僧形にかへり、行乞してあられしを、角倉氏其の德を見知る事や有りけむ、强て請じて供養せむといへども、應ぜずして曰く、「吾は人の供養を請くる事を欲せず」と。こゝにおいて、角倉氏思惟して欺きていふ、「吾が邸人多ければ、日々殘餘の飯空しく腐爛す、實に惜むべし。是を師に參らせむに、酢を釀して賣り給はゞ、老脚を勞して行乞し給はむにまさらむか」と。師これを眞とし、「それこそいとよきことなれ。捨つるものは拾ふべし。いで吾は酢賣の翁とならむ」と。これより洛北鷹峰にて、酢屋道全とも通念とも自稱して、年を經。遷化は天和三年九月也。其の乞丐の時の口號を弟子琛洲といふ僧の聞きたるは、

如是生涯如是寬。弊衣破椀也閑々。

飢餐渴飮只吾識。世上是非總不干。

大津にて沓賣の時、或人其の年老いたるを憐み給ひしにや、大津繪のあみだ佛の像をあたへしかば、其のこやに掛け置き、消炭して上に書す。

せまけれど宿を貸すぞやあみだ殿後生賴むとおぼしめすなよ

國侯―細川侯
大旦那―第一の施主

は、直に捨て給ふも恨む所なし」といふ。さらばとて請けて、やがて病める乞丐に打著せ給ふを、他の乞丐人共見て大に驚き、これは凡人にあらずといひて、俄にあがめたふとみければ、そこをもたちさり給ふ。其の比弟子の兩僧も、尋ね求むる事三年にして、安井門前にて、乞丐の集りたる中にて見つけしかば、其のあとにつきて人なき所に至り、「師若し此の如くならば、われ〳〵も同じ姿となりて從はむ」と乞ふに、師肯かず。一人は師の指揮を得て、他方の知識の許へ行く。一人はしひて從ふ程に、「さらば吾がする所を見よ」とて伴ひ行く所に、乞丐の死せるあり。やがて弟子と共に是を埋めつ、さて其の死者の喰ひ餘せる食を、己まづ喫して、「汝もよく喰はむや」とあるに、止む事を得ずして喰ひたれども、臭穢に堪へず嘔吐す。師見て、「さればこそ此の境界には堪へざりけれ。これより別れむ」とて去りぬ。後其の遊ぶ所をしらず。ある時、肥後熊本の寺僧、國侯大旦那たるをもて、勢ひ猛に儀衞を盛にして關東に行く道、大津の驛に休らふ間、馬士沓買はむとて「老父」と呼ぶ。是は此の日比、とある家の軒に、假初にさしかけしてある翁が造る所の沓草鞋いとよければ、ぢいが沓とて、輿夫馬卒もてはやしける也。時に其の沓もて來る翁を見れば、桃水和尙なり。彼の僧驚き、輿をまろび出でて、手を取りて涙

損益の卦—周易にて、山澤を損卦とし、風雷を益卦とす

嚆矢—物の始の稱

歸依—信仰して我が生命を其に托する事

洛東—京都の東側

乞丐—乞食

の損益の卦により、表裏の軒號とせられしにや。かゝれば好古の號といへるは傳聞の誤りか。但し其の軒をわかちて好古に讓られて後、自の號とせるも知るべからず。其の鄕人に正すべくこそ。

貞享元祿の前後、儒學の名家多く、奇行奇話も又尠からねども、今は唯藤樹、益軒の二先生をあげて、德行の卷の嚆矢とす。次に桃水、無能の二和尙を擧ぐるもまた同例なり。彼を取り是を捨つるにはあらず。

僧桃水

此の傳は面山和尙著せる一書有りて既に印行す。今は要を取りて擧ぐ。

僧桃水、諱は雲關、筑後國の人にして、肥前國島原禪林寺に住持す。跡を匿して後、其の行方を知るものなし。歸依の尼、國を出でてかた〴〵を尋ね廻りて、洛東四條河原に至る時、師菰打かづきて、同じさまなる乞丐人の病めるを介抱してあられしに、涙を流して拜す。さて和尙の爲にとて自紡績し、年を經て織りたてたる臥具の背に負ひしを、取出して參らするに、和尙、「今の身にしては、用ふる所なし」といひてうけず。尼もさるものにて、「自用ゐ給ふ所なくば、御心に任せて、ともかくもし給へ。師に供養せる上

韜藏增顯。　謙遜愈輝。　遺訓存策。　後學永依。

此の銘三十餘字の間、よく先生を盡せりとおぼしきが故にこゝに擧ぐ。生涯著書百餘種に及ぶもめづらしといふべし。書名繁多なるが故にこゝには略す。

或人の話にいふ、先生歸國の海路にて、同船數輩、各姓名を問ひ聞くにも及ばず、何となき物がたりどもをして、日を重ねしに、其の中一人の若き男、人々に對して經書を講ず。先生例の恭々しく默して是を聽きて一言是非を論ぜず、船著岸して各はじめて其の郷里をあかし、再會を契りて別るゝに臨み、先生も、吾は貝原久兵衛と申すものなりと名乘らるゝを聞きて、彼の男大きに恥ぢおそれて、速に逃げ去りしとなむ。傳には見えぬ事なれども、其の人爲の一端を見るべし。

○因に記す。姪好古は益軒の兄樂軒の子、通名市之進と稱す。著す所和事始、漢事始、日本歲時記、諺草の類、其の體裁全く先生のごとし。先生に後れてながらへば、其の志を嗣ぐ人なるべきを、惜むに堪へたり、此の人の號損軒と稱ふるよし、人はいへるを、予此の比先生の染筆を得たるが、是先生の書林柳枝軒より出でて、疑はしき物にあらず。然るに損軒七十有五書とありて印中の文字、上は貝原篤信、下は子誠の印也。思ふに易

名に近づく云々―名聞を欲せず
恭默―丁寧にして言葉少なし
梨棗云々―印行する事
太史公―前漢の司馬遷史記の作者
名寄―名所の名を寄せ集めたる書
采地―所領の地
元祿庚辰―元祿十三年
正德甲午―正德四年

と等輩尠しといへども、性甚謙にして、只身の及ばざる事を恐れ、名に近づく事を喜ばず。常に言ふ吾人に長たる事なし、但恭默道を思ふのみと。固より人を愛し物を濟ふをもて要とせる故に、其の著はす所の書多く平假名に記して、通俗の爲め教ふる事丁寧反復す。家道、養生、初學の諸訓、大和俗訓、樂訓などは尙さもありなむ。鄙事記のごとき、日用の細務にまでも及ぶは、近世諸儒、唯自己の學力を示して梨棗を費すものと、其相去る事天淵なるべし。はた太史公が名山大川を探るに似て、足跡諸國にあまねく、其の國の名寄をはじめ、東海、岐岨、日光の紀行、有馬入湯の案內、大和巡、諸州巡の類を著はされしも、自の詩文章に及ばず、唯旅客の助とせらる。年積るに從ひ、侯家の禮遇彌〻厚く、頻に采地を加へらる。元祿庚辰歲七十一、老を告げて事を致すといへども、尙月俸を賜ひて、其の老を優にす。正德甲午八月廿七日家に卒す、時に歲八十五。子なき故に、其の兄存齋の次子重春をとりて家を嗣がしむ。先生の年譜は元祿九年まで姪好古撰む。好古今年卒せる故に、十年より終に及んで、姪可久次ぎて撰む。墓誌は門人竹田定直錄す。其の銘に曰く、

恭默思ㇾ道。　極ㇾ精造ㇾ微。　愛ㇾ物爲ㇾ務。　事ㇾ天不ㇾ欺。

明石侯―播磨明石領主松平家

經濟―經世濟民、政治

琴柱に云々

上書―君に上つる意見書

に乏しき―活用のオ

搢紳家―公卿

福岡侯―黑田家、筑前國福岡城主

程朱の學―宋の程顥、程顥及び朱熹の學、卽儒教理氣の說

といふ古歌のこゝろによれるとぞ。其の後京に歸り、故ありて播磨明石侯の許にあり。侯封を移さるゝに從ひ、下總古河に至り、其處にて終る、時に歲七十三。元祿四年八月十七日也。その學藤樹に出づるといへども、見所また一家をなして、ことに經濟に長ず。時、處、位の三つを知るをもて要とし、琴柱に膠する書生の說に異なり。其の著書、集義和書、同外書に見えたり。世に傳ふる所、此の人備前にして佛寺を破壞すといへり。予其の事實をよく聞き正せるに然らず。此の擧は翁致仕の後にして、然も侯に上書してこれを諫むとなむ。されども、其の著す書に、佛教を誚ること大過せれば、その漸をなすとはいふべし。京にしては搢紳家、關東にしては諸侯の間、名ある諸君に門人多かりしとなむ。

貝原益軒

益軒貝原氏、諱は篤信、字は子誠、通名久兵衞、祖父より以來筑前福岡侯の臣にして、先生は父寬齋の季子也。邦君三世に仕へて儒學教授となる。君命によりしばしば京師に往來し、專程朱の學を講ず。其の見は愼思錄自娯集に見ゆ。その學博く和漢に亙れるこ

備前侯―備前國主池田侯
熊澤氏―了介、蕃山と號す、先生の門人
時めかし―重く用ひ
筑波山―新古今集の歌

勵勉の力は絶奇也。況や了佐ならざる者は、其の勉の驗を知るべし」と。小醫南針、神方奇術等は、山田森村兩醫生の爲に著す處とぞ。其の書傳はるや否や未だ知らず。先生四十一歲にして、慶安元年戊子八月廿五日病みて卒す。其の舊居の講堂今尚殘れども、其の學を繼ぐ者なく、荒廢につくといふ。惜むべし。先生三子有り、備前侯に仕ふ。熊澤氏の故を以てなり。長は宣伯通名太右衞門、よく父の德を嗣ぎて、明敏豪傑しかも溫厚也。病によりて仕を致し、家に卒す、惜まざる者なしとぞ。仲は藤之丞、又致仕京師に病死す。洛東黑谷に葬る。季彌三郎、先生歿する年に生る。是はた侯時めかしたまひしかども、病をもて辭して江西にかへる。後又京師に寓居し、改名江西文內といふ。病みて死す。故鄕にかへし葬る。常省先生と諡す。

○藤樹先生の門人備前に召さるゝ者五六輩に及ぶ、熊澤翁は其の魁也。翁は平安の人、本氏は野尻、通名次郎八といひしかども、外祖父養子として熊澤助右衞門と名のらしむ。諱は伯繼、致仕の後了介と稱し、息遊と號す。氏も亦後に蕃山と稱せしは、備前にして、其の領地寺內といひし所を蕃山と號けて、暫くこゝに隱居す。

筑波山葉山しげ山しげけれど思ひいるにはさはらざりけり

に掲出す。およそ書を著はさむとして筆をたつるもの、大學啓蒙、孝經啓蒙、藤樹規、幷に學舍坐右の銘、原人、持敬圖說の類、尙二三ありといへども、或は初の著述後の意に愜はずして破り、又數年多病の故に、業を果さずして止む者あり。論語も鄕黨の篇より先進二三章に及びて業を終へずとぞ。今傳はるものすくなし。但し鄕黨の解は刻本なるを、予少年の時骨董舖にて見し事ありしが、書林も知る人少し。購はざりし事思へば悔し。又翁問答といふものを草せられしを、書賈盜みて印行せるを聞きつけて、後の意に愜はねば破らしむ。書賈のその費を歎くにより、是を償はむとて、女誡の爲に著されしものを鑑草と題して授けらる。又醫書の著述は其の業にあらざれども、理を推して明らむる所なるべし。醫筌は大野了佐といふ愚魯の人の爲に著す所也。此の人、士たるに堪へざれば、その父賤業を營ましめむとするを憂へ、醫とならむ事を先生に乞ふ。先生其の志をあはれみ、大成論を讀ましむるに、纔に二三句を敎ふる事二百遍計、食頃忽遺忘す。又來り讀む事百遍餘にして、始めて記得す。かくのごとく久しきを經て、後終に醫を以て數口を養ふに至る。敎へて倦まずの實を見つべし。先生人に語りて曰く、「吾了佐において殆ど根氣を盡せり。然れども、彼れつとめずば能はず。彼愚昧といへども、

翁問答・鑑草と共に木文庫の「藤樹文集」に收む

書賈—原本書價とあり

大成論—醫方大成論五巻、元彦明公撰

食頃—少しの間

破綻あるー不完全な
鄉原ー地方に評判よき小人
狂者云々ー論語子路篇に出づ
孝經ー孔子が曾子と孝道を論じたる書、古文今文の二種あり

ていはく、「此の解甚親切明當なるを覺ゆ、如何ぞ支離とする」先生云はく、「心事元是一也。故に事善にして心不善なるものいまだあらず、心善にして事善からぬ者もまた未ダ之有ラず」門人曰く、「狂者の如きは其の心高大なれども、其の事破綻ある事を免かれず。鄉原のごときは事は君子に似て、其の心汚る。是分明に心と事と二つなるにあらずや」先生曰く、「狂者未ダ入ラ二精微中庸一ニ故に斯のごとし。鄉原は世に媚び許容を求むるの穢れし腸より顯はるゝ事爲なれば、もとより善とすべからず。跡の似たるをもて善とするは、功利の意也。然るに、或は曰く、大なる哉、此の道、盜人も亦是を得ざれば功をなす事能はず。入る事を先とするは勇なり、出づる時後るゝは義也、分つ事均しきは仁也、此の三つを得ざれば大盜を成す事能はずなどいふ說は、笑ふべし。悲しむべきものなり」といへり。又近年專ら孝經を講明し、常に愛敬の二字を揭出し、心體を體認せしむ。曰く、「心の本體原本愛敬的、猶水の濕ひに從ひ、火の燥くに付るがごとし。只吾人種々の習心習氣に凝滯せられて、心體の明蔽はる。然れども、親を愛し、兄を敬するの心、且赤子を見て慈愛する心は未だ滅びず、時ありて發見す。此の心を認めて存養して失はざるときは、則聖人の心なり」以上は、先生家學を起して後の敎示なり。世にしる人稀なる故

格法に泥む—儒教に三十にて室ありと云へる事

五更—正子十二時

格套に云々—規則に拘泥する事

圭角を持す—角だつ

三綱領—大學の明德、新民止于至善

の志を高尙にす。初僕に與へし殘の銀百錢をもて酒を買ひ、また農家へ賣りてその間のもて母氏を養ふ。後又刀を賣りて銀十枚を得て、是をもて米を買ひ、農家に借す。息を取る事世人より甚減ずる故にや、其の債を責めずして皆是をかへす。三十初て娶る。格法に泥む故とぞ。其の女容貌甚醜ければ、母氏憂へて出さむと欲すれども、先生固く辭す。此の婦容貌醜しといへども、性質甚聰明にして、心を用ゐること正し。常に諸門人會して、夜半或は五更に及べども、終に先生に先達ちて寢ねず。居常小事といへども、命を受けざれば行はず。先生從來朱學を尊信し、門人に示すに小學の法をもてす。故に門人格套に落在し、拘攣日々に長じ、氣象漸く迫りて圭角を持す。先生三十有餘、陽明全書を見しより、その非を覺りて門人に示して曰く、「格套を受用するの志は、名利を求むるの志と、日を同じうして語るべからずといへども、眞性活潑の體を失ふ事は均し。只吾人拘攣の心を放去し、自の本心を信じて、其の跡に泥むことなかれ」と、門人大に觸發興起す。又語りて曰く、「予嘗て山田氏に贈るに、三綱領の解をもてす。其の至善の解に曰く、事善にして心善ならざる者は至善にあらず、心善にして事善ならざる者もまた至善にあらずと。此の時予未だ支離の病を免れず。故に誤りて此の如く解す」と。門人問ひ

遺受―物のやりとり事
四書大全―明の胡廣等奉勅撰
聖學―聖人の學
致仕し―官辭し
江陽―其郷里小川村

くして既に此のごとし。はた一物の遺受も甚謹みて、羞惡の心深く、一食を喫しても君父の恩を思惟す。十七歳の時、京より禪僧來て論語を講ず。その地の士風、武を專にし、文學の業を弱とし、敢て聽く者なし。唯先生獨り往いて聽受す。論語上篇を終へて僧京に歸りし後、又師とすべき人の無きを憂へて、四書大全を購ひ得て熟讀す。然れども他の誹謗を憚り、晝は終日諸士と應接し、毎夜深更に及び二十枚を見るを業とす。已後も師なくして、困學年を經、ひとへに聖學をもて己が任とす。然るに、其の母氏老いて故郷に獨りあるを悲しび、再回暇を乞うて歸省し、直に是を倡ひて伊豫に歸らむとせしに、はるけき波濤をしのぎ他國にうつる事を欲せず。故に致仕して歸らむと乞ひ、且つ二君に仕へ出身の意あるにあらざる事を天に誓ひけれども、其の才德を惜みて許されず。二十七歳の冬十月終に逃げさる。(このことをとりて本朝孝子傳に出す)その時、今年の祿米悉く倉に積み置き、嚮に友人に假貸し米穀あるをば、器物を賣りて是を償ふ。江陽に至るとき、銀纔三百錢有りしを、祖父の時より使ふ者、よる所なからむを憐みて貳百錢を與ふ。そのもの賜ふ事の過半なるを痛み、敢て請くる志なく、只從ひて艱難を共にせむといへども、先生强ひて與へて歸せり。此の後かの誓のごとく終身出仕へず。其

近世畸人傳

卷之一

中江藤樹　附　蕃山氏

藤樹中江氏、諱は原、字は惟命、通名與右衛門、江西高島郡小川邑の人なり。藤樹下に産れ、後藤樹下に學を講ずるをもて、門人此號を稱す。又夢中人ありて光嘿軒の號を授くると見て、光の字を、謙遜し省きて嘿軒と稱す。僻地に生るといへども、兒として野鄙のならひに染まず。九歳の時、祖父吉長嗣とせむと請ひて、その在所伯耆に伴ふ。祖父手筆に拙きを悔いて、勉めて此の子に學ばしむるに、其の書、人驚くばかりなりき。十歳の時、伯耆の大守加藤侯伊豫大洲に轉封せらるゝ故に彼所に移りぬ。十三歳の時、祖父賊をうつ事あるに、少も恐るゝ氣色なく、祖父の命をうけて賊を捕へむとす。志氣幼

江西—琵琶湖の西。

轉封—國替

卷之五

卷之四

卷之三

目錄

卷之一

卷之二

し、鄉名里名を冠らせるも、いひならはせるまゝにて、差別に意なし。固より是は姓氏知られざる程の人なり。
○草本は、傳を追うて畫を附すといへども、其の事實は奇にして、畫に興なきものは是を除く。また傳のうへには、さのみ用なきも、畫樣をとゞめて人に知らしめむと思へることは圖す。是三熊氏の志なり。ぬしが跋に洩せるをもてこゝにいふ。

天明八戊申歲水無月　　閑田子蒿蹊自述

擧げて別つ。固よりかく思ふがまゝに評せるは、或はあたらず、或は刻薄なること
も交るべければ、憚なきにしもあらねど、思ふ事言はでえあらぬは、心狹きの疾な
り。願くは見ゆるされなむ。

○假名遣は、大かたの歌よみの思へるにはたがひて、いにしへが正しければ、契沖
阿闍梨、和字正濫を著して、つばらに例を擧げらる。今おのれがそらにおぼえしひ
とつをいはゞ、梅は今のかな「むめ」なれば「あなうめに常なるべくも見えぬ哉」とい
ふ古今集の歌を見て、これは物の名なれば、まげてかく用ひられしといふは、絶え
て昔を知らぬ人也。萬葉集の文字假名に、みな「烏梅」「宇米」など書るに、順和名抄にも
「宇女」と訓を付けたり。凡古き假名は古事記、日本紀より、延喜式を經、和名抄まで、久
しき世を重ねみなひとし。(此の間新撰字鏡、靈異記のごとき古書皆たがはず)され
ば、おのれは常に古き假名にしたがへば、今も亦これを用ふ。今にのみなれたる人
恠しむべければ、わきていふ。

○諸儒は號をもて題す。號を知らざる人は字をもてす。僧家はすべて字をもて通
稱とすれば是に從ふ。其の他氏名連ねあぐるも、通用に從ふなり。あるは國を冠り

なせるあり、あるは、生けるを亡きになしてこふもあり。是に懲りて此の事をば大やうは語らず、只おのれ年比よく聞きしめたる古人、又相知る人の、哀ともをかしとも心にとゞめしを、こたびの私に追慕せるのみ。またもとより三熊ぬしの聞正せる人も多し。倘出すべき人の、其の傳を知らざると、今ある人の世を見はてむのちにはと思へるなどは、三熊ぬし此の後年を積みて拾遺の志あれば委ぬ。おのれは今六十にとなり桑楡かげせまれば、再びの撰は期せざるところなり。

○當時生存の人は此の撰にもらす。なべて人の一生は棺をおほうて後定むべければ也。又貴人は奇のいふべきあるも憚りて洩す。また仕官の人の尠きは、奇は大やう窮厄の間に聞えて、得意の人に稀なればなり。

○其の傳つばらかなると、略けるとあり。唯聞くまゝにす。はた文體も一樣ならず、雅俗其の事に從ふといへども、大やう心得やすきを旨として、詞華を莊(かざ)らず。唯筆拙きからに、達せざること多からむはいかゞはせむ。

○傳の後、傳の中にも、愚按をもて議論し、是非せるものあるは、大やう私云、按とのみ記す。されども、若(もし)前に他人の評あるは、是に混ぜざらむが爲め、蒿蹊云と愚名を

ふべし。さればおのれが沈湎し眼には、常の道を盡せるが奇と見ゆれば、又おのがごとき人にも見せばやと、聊か人の爲の志をもてあぐるなり。たとひ題名に負くの誚を負ふも又辭せざる所なり。又詰りて曰はく、しかはあれど、此の中、產を破りて風狂し、家を忘れて放蕩せるもあり、德行の奇にたぐひがたしといはまし。曰はく、風狂放蕩かくのごとしといへども、その中、趣味あり、取るべき所あるを擧ぐるなり、玉石混淆に似たれど、彼も一奇なり、此も一奇なり、しひて繩墨を引きて咎むべからず、唯風流に漂ひ、不拘に蕩けて、不孝不慈なると、功利に基し、世智に走りて、不忠不信なるは、奇話の一笑に附すべきあるも、こゝに收めざるのみ。

○高僧宿儒、及び詩歌書畫の名家に、一奇のいふべきなきはあらじ。しかも盡くこれをつどへば、高僧傳儒林傳のごとく、各一家をもて號べくして、此の書の本意にはあらず。はた一道に勝れぬる人は、吾が擧ぐるを待たずして、不朽に聞ゆべければ必ずとせず。又廣く求めなば、なほ隱れたる人をも得ぬべけれど、或は此の撰みの事をほのめかせば、さらばかゝる人を收め給はれとことゞゝしく語りなすを、其の筋につきてことかたよりよく聞き正せば、小笹を執りて千尋の竹ともいひ

近世畸人傳

題　言

○此の記は、はじめ花顚三熊ぬしの勸によりて草す。其のことはぬしの跋に書ければ再びいはず。畸人をもて目すといへども、其のはじめ隱士を集むるの志に出づれば、世に知られぬ人、又名は聞えても、其の傳つばらかならぬを探りもとめて錄せるが多し。

○吾が黨の人、此の草案を見て曰はく、莊子に所謂る畸人も、自畸人の一家也。此の記は始に藤樹益軒二先生をあげ、次々にも德行の人多し、こは畸人をもて目（なづく）べからず、人のなすべき常の道ならずや、いかにと。予曰はく然り、しかれどもおのれが錄せるところの意、子が思へる所に、少しく異也。唯廣く心得られよ、此の中たとへば、賣茶翁、大雅堂の類は、子がいはゆる一家の畸人也、仁義を任とせる諸老、忠孝の數子のごときは、世の人にたくらべて行ふ處を奇とせるなり、是をたとへば、長夜の飮をなして、時日甲子を忘れたる儕の間に、獨おぼえたる人あらむには、奇とい

寛政二年歳集庚戌春三月六如散衲慈周敍於峨阜無著菴

幅巾塵尾。鏗々儒々。談性理而拆天人之際者。曲录拄杖。講經論。據亘利者。世固不乏其人。而大抵與古之聖賢。其骨格終不相類者何也。唯名之與利。爲之祟也。嗚乎。此數者。皆人之所甚難能。而遺名利之難。又有甚焉。則名利之累人也。豈特焚車攫金之類而已哉。莊周有言曰。彼其所殉仁義也。則俗謂之君子。其所殉貨財也。則俗謂之小人。有味乎其言之也。今觀傳中之人。其於古之人也。未知如何。然已有典刑存焉。故其流風餘韻。猶足以使夫貪婪躁進之士。一披其卷。赧然自省。幡然易慘矣。謂之範世矯俗之書。亦不爲過也。若夫梔其貌。蠟其言。外遺名利。而内以爲名利之鉤者。乃此書之罪人也。寶鑑既懸。而妖魅無遁形焉。序而勸其傳。不亦宜乎。

昔

器用。亦皆原其代所尚。而一筆不苟下。蒿蹊氏以國語爲文。宏贍簡遠。妙盡情態。頗似臨川王形容晉人。夫其人既以畸稱之。固弗求聞達於當時。豈復屑屑乎自圖不朽者耶。大約年代浸遠。聲迹湮晦者十七八。二子其奚自而得之也。蓋就其宦地鄕閭跡之。或訪之耳孫遺友。或得片言隻事于敗冊蠹簡。百方蒐羅。鑽燧屢改。而纔就緒。且其事必覈實。其言必有根。至於好事者。自後附益增長者。概乎無取焉。視之彼顯人名流之宗系言行。粲然可臚列者。則勞逸爲何如也。一日。蒿蹊氏以首簡授余謁序。余曰。此範世矯俗之書也。請急傳之。或難曰。若人之畸也。是惟性分所至。固非學而可企矣。詎可以爲範乎。曰不然。以余觀之。凡此諸人。率性而動。各求其志。其迹雖或失中行乎。至乎其不屑於當世之名利。則一揆耳。故雷霹之琴。火成之鏃。自然成趣。非待繩削而然也。夫經藝文采。足以黼黻治具者。一技一能。通乎精微之蘊

近世畸人傳序

鶉居鷇食以頤志。牆東竈北。不與藪澤二其趣。而不以高逸自處。推拍輓斷。與物宛轉。肆情坦率。不自撿括。而非所謂任誕也。冥外以護內、雖不爲同異、亦有所不爲。而非所謂狷介也。或才藝絕人。而不求售於世。土木形骸。樸野如愚。或經術吏才。取仕於封君、而行藏不拘以規矩。夫謂之獨行乎。曰非也。稱之卓行乎。曰非也。其人固非四科之屬。其行不可以一端指名。不得已而强題之曰畸人。畸者何。曰、畸者奇也。其閒有儒而奇者。有禪而奇者。有武弁而醫流而詩歌書畫雜伎家而奇者、要皆爲一奇所掩。人不復知本分爲何人。故概以畸人曰之云。熊生世純。好奇之士也。從近世上遡勝國、得所謂畸人者數十員。欲狀而傳之。自歉于聞見不廣。詢諸伴蒿蹊氏、蒿蹊氏曰。余之素志也。余既裒次。至若干人、請合而一之、熊生善畫。乃冥搜貌神。其於服飾

先哲像傳終

重校定之。研精訓詁。炳如丹青。已有刊行者。其未脫稿者。將嗣梓焉。他所自編著有詩書。小序。絶句解考證。補儲編。絶句解遺考證。行于世。晩搜於蘐園。得物子著述書目所不載遺稿數十冊。大喜曰。「加我數年以卒業。猶可以繼夫子志」可謂物家之忠臣焉。而先生逝矣。惜哉。雖然既已爲儒宗。遺厚於後進。使有所矜式者。豈獨忠於物家而已。銘曰。

非周何成。　不勤誰倚。
先生言行。　懦夫立志。

訓詁―註解
丹青―彩色畫
懦夫―心のおぢけたる者、孟子「聞伯夷風者、頑夫廉、懦夫有立志」による

同縣利倉壽仙氏。十七歲、千里君命至東都事物子。時平竹溪先生在塾。乃意獨識。忠於物家者必先生也。相與日厚。因留三年而物子歿。尙與社友講習凡六年而歸。於是築一室。號暘谷。讀書其中。其歸也。携倉美中養之五年。蓋以爲切磋之友也。享保中官命物叔達。校七經孟子考文。先生與而有力。賜金。先生在鄕。經十餘年。曾西遊探名山古寺。多求遺書。而再遊東都。居麴坊。亡何遷三島街。學益精勤。從游甚多。後仕雲藩爲儒官。恩遇殊渥。數上言爲政之要。每見嘉納。及與諸大夫論經濟。亦依其說而行。大有補助。寶曆中。侯奉命繕修比叡山諸堂。侯所獻銅燈使先生作銘。有賞。又使著酒色論。以爲監戒。初配金綱氏。生一男一女。而卒。男名時敏。女幼歿。再配中山氏。無子。亦先卒。以時敏多病不能繼業。養姪德修字子業爲嗣。先生爲人忠臣嚴整。視人善若惟已。既爲一世儒宗。是以自諸侯大夫士以至庶人受業者日益多。然而不執師禮請之。雖諸侯而不復答。小泉侯禮待尤厚。且用先生策。至早歲得水不乏。若夫燕飮則曰。「學者各苦任重道遠。息於是。游於是。唯何戚々。溫顏接物申々如」因是人畏而愛焉。先生嘗以爲物。子著作洽博。已布海內。而漸歷年所觀者或昧典故。則有不會其義。於是悉取其書。

桔槹―はねつるべ

絕句解　同拾遺　南留別志　王注老子

○濬水墓碑銘は服元立の撰文なり。

濬水先生諱惠。字子迪。南總人也。其鄉有濬水。因號焉。安永五年丙申六月十六日。罹疾。八月九日逝矣。享年六十七。葬東都城西四谷戒行寺域。於是門人岡伯固。本文卿。造余且致孤子業辭。相與謂。「將石彼畢如者。請爲誌焉」余辭不文。二子曰。「顧當今與我師爲通家者與有幾。子有三世交誼。其可爲辭哉」余因按其譜。南總岩熊縣。宇佐美八左衞門者爲先生五世祖。其先宇佐美定行之族也。相傳天正中。自北越徙南總。以勇聞矣。定行者稱駿河守。祐茂十二世孫祐孝。生道盛孝忠。孝忠生定行。仕北越謙信。數有功。爲謙信誘信州上田城主長尾政景。隙舟沈之湖中。而共死者也。詳存古記。其族者名稱不錄。不可得而知焉。自岩熊宇佐美氏世々稱八左衞門。至考千里君稱七左衞門。娶吉野氏。生先生。君一號習翁。性英敏好學。始敎總人以桔槹摻水。又見南總之東海多颶。漕粟船時々覆沒。謂海口闢港容船濬水。則有所泊。可以無患。是非私利。聞之官而事不成。居民到于今惜之。履歷詳先生所著君行狀。先生以寶永七年庚寅正月二十三日生。十一歲受句讀

爭是非。物換星移人代改。徽君吾輩與誰歸。

と見えたり。

詩中に云へる蘐園の徂徠は享保十三年に死す。信陽の春臺は延享四年死す。南郭の元喬は寶暦五年死す。高生の蘭亭は寶暦七年死す。餘子の熊耳は安永五年死す。此の年濡水も死せり。

○濡水歿せる安永五年には、有名の人多く謝世す。餘熊耳を初め、鹿門大雅堂、藤益道、鵜士寧、田村元雄、物道濟、鈴木煥卿、蘆東山等なり。されば澁井太室が知己五人を悼む五哀の詩あり、宇濡水を哭する詩あり。

有松爰在高山雲。企不可及唯同聞。開蹊終身子是勤。呼子不應且何去。
心腸苑結迂哉紛。

○濡水著書目に

絶句解考證　辨道考　辨名考　古文矩文變考
補儲編　蘐園錄　訓點千字文

○校點の書は

餘子の熊耳—大内熊耳姓は餘

苑結—積み結ぼれて解けず

物故—死す

矍鑠—老健

人間—世間

社會

梁壞—こゝは徂徠の死、禮記檀弓「泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎」に本づく

牛門—江戸牛込

〇灊水雲州侯に仕へて、一時に名高く、從遊する者も多く、中岡豊州等の門人も出來たり。此の節力士嵯峨ヶ嶽同じく雲州侯にありて、角牴場に名高し。されば嵯峨ヶ嶽と御同藩故かめつたに名は高けれど、元の出が一農夫、などの誹謗もありしなり。また此の比は蘐園の徒みな〴〵物故して、灊水のみ生殘りて、よく物氏の遺訓を守れば、人の尊尙も又多し。彦根の野公臺、曾て物門の徒の追々下世せるを傷みて、灊水に贈る詩あり、因に記す。

感述贈宇灊水

仰慕蘐園夫子尊。生來不逮遊其門。室家之美雖難見。私淑於人飽受恩。信陽已歿周南逖。二子風流不可覿。曾見南郭服先生。夫子道存于目擊。又就高生問作詩。後從餘子論屬辭。高生服生相繼逝。今年餘子忽然萎。龜山松子我畏友。切磋問難交已久。往歲倏爲地下郎。天假之才不假壽。斯文寥々長已矣。耆德唯餘宇灊水。此翁七十矍鑠哉。躬任斯文力未弭。家藏萬卷積如山。考索群書手自删。斷簡殘編日就緒。蘐園遺草出人間。梁壞以來五十年。典刑獨有此翁傳。酒間且說牛門事。享保風流在目前。君不見世儒紛々知道希。各持門戶

宇佐美灊水

灊水宇佐美氏、名は惠、字は子迪、俗稱惠助と云ふ。上總夷灊郡の人、よりて灊水と號す。其の先祖は越後の勇士にして、謙信に從ひ、數度軍功をあらはす。中葉南總に移り、世々豪富をもて聞ゆとぞ。灊水は寶永七年に生れ、十七歳の時、江戸に來りて、徂徠に師事し、その塾に居る事僅に三年、師徂徠歿す。夫より社友と共に切磋して、その學を修めたり。江戸に在る事六年にて、古鄕に歸り、その後再江戸に出でて、遂に儒をもて出雲侯に仕ふ。かく灊水、徂徠の敎諭を受くる淺しといへども、師恩を報いんをもて任とし、その遺書を校刻して世に廣むる志厚く、遂に徂徠の四家雋、古文矩、文變考絕句解、南留別志等の書みな其の手に成りて、刻行す。徂徠高足の弟子も、其の功には遙に及ばずとぞ。其の厚義尤賞嘆すべし。灊水一男ありといへども、多病にて家學を繼ぐ能はず。ゆゑをもて嘗て片山兼山を養うて子とせんとす。然るに兼山も徂徠の說を喜ばす、こゝをもて終に不諧に及び、後姪德修を養うて嗣とす。安永五年六月十六日卒す、年六十四。四谷戒行寺に葬る。

不諧―不調

宇佐美灊水肖像

一日長。亦其義氣所許乃爾。皆謂如眞兄弟。至素服受弔。遂不敢辭。作銘曰。

天假其文。不假齒。千載慄々神不死。神不死兮安其理

先生之墓觀此里。

狂簡—志大にして事に疎略なり
搤擊—奮激

所爲。所未嘗聞如探諸懷。是時物先生方誘進英才。乃大寄之。顧謂喬等曰。未嘗見進取如斯人。古狂簡哉。吾無所裁。乃日夜益憤勵。所著必機軸於己。遂稱大著作云。爲人磊落。好俶儻瑰瑋之事。故其結撰每欲驚人。又滑稽多端。傲弄一世。以故或見謂狂好奇。然性喜善疾惡。視人善不啻自己。若將加諸膝不置。飲酒忼慨時或激烈至泣下。一有惡聲及其所善。搤擊欲反之。甚於己私。後乃稍々折節。然其義氣著於心本。時發於感慨。有似而非者。蠹害君子乃曰。「彼何人。斯爾居徒幾何」嘻笑耳。然亦微示其絕。作文恒稱。獨不見斗量乎。人非不容而出之二參。我卽一斗亦用。一石亦用。不知其他。卒後探其家。素貧不藏一書。所抄數卷已。人始服其才量。後爲守山侯儒臣。年四十五卒。享保十七年七月廿三日也。葬東都城北蓮光寺。配神田氏。生三男二女。長元幹。字國禮。女甫十一。餘皆未亂歿。先生貧甚。而其所善者至擊鮮極驩。未嘗以窶爲辭。每至令有急不得去。其愛人亦出天性。及卒知與不知皆爲流涕。旣客死無親。則姻家諸友爭義營葬。遂立石。守山世子好學。師重先生。先是刪其稿。行于世。於是世子卽謚文莊先生。命喬作碑。喬已爲友。二十餘年。先生率不可人。而推喬居

にも、子和者東奥一奇士也といひ、また滑稽不レ窮。人々不レ能レ屈レ之などいへり。春臺の送る序にも、子和狂生也。又助以レ酒など見えたり。

○金華の著書、金華文集、是は守山侯の集錄して上木せりとぞ。金華訓點の劉向新序あり。猶此の外も有るべし。金華嘗得意の文章一篇を持ちて、室鳩巢に謁し、强て改正を乞ふ、鳩巢よりて其の中二十字を除き、五字を加へたり。金華喜ばず、南郭に質す。又決定の評なし。二通に寫し徂徠に示す。徂徠何樣十五字餘れりとて嘆賞す。これより南郭、金華、室氏を稱美せしと。

○金華早に深川を發する詩に。

月落人烟曙色分。長橋一半限星文一。連レ天忽下深川水。直向二總州一爲二白雲一。

徂徠自、此の詩ならびに南郭の墨水を下る詩、蘭亭の叉江に泛ぶ詩と三首を寫し、壁に貼して、鏘然たる玉振の聲得易からざるものなりと稱せしとぞ。

○金華の碑文は服元喬の撰なり。

先生姓平。諱玄中。字子和。奥人也。因號二金華一。早孤。既冠族人謀令レ學二醫東都一。數年非レ所二其志一。更爲レ儒。初從二徂徠物先生一。問二修辭物先生一。亦視二一隅一已。未レ幾。出二其、

刀圭—醫業
任俠—をとこだて
傲弄する—馬鹿にする

平野金華

金華平野氏、名は玄仲、字は子和、俗稱は源右衛門といふ。金華と號せしは、もと東奥の人ゆゑ、金華山を表徳せるなり。元祿元年に生れ、幼にして孤となり、才鋒人に勝れ、初め東都に來り、醫を學びしが、素より其の志にあらず。後徂徠に見ゆるに及びて、忽ち刀圭を擲ちて、儒生となり、修辭復古をとなふ。其の人となり豪飮を好み、劉伯倫のごとく、家產是が爲に乏しけれども、聊意とせず、頗る任俠の義氣ありしとぞ。儒生といへども、架上には唯僅に左傳、禮記、莊子、通鑑等の抄錄數冊ありしのみにて、文章を撰べるに及んでは先此の書冊を數篇閱して、後一時に筆を下して、人を驚すの語を吐出せりとぞ。後に守山侯の記室となり、享保十七年七月二十三日卒す、年四十五。駒籠蓮光寺に葬る。私諡して文莊先生といふ。

○金華は尤奇を好む人にて、其の家に一妾一僕ありて、妾の名を月小夜といひ、僕の名を染之助といひしよし。又猫を好みて十八疋ありしとぞ。又妻の衣服を著して君に見え佳節の賀を述べしことありしとぞ。實に世を傲弄する一奇人なり。されば南郭の送る序

玄中印　子和　子和

平野金華肖像

矜式—敬ひて法らしむ

求治不驗。以寶曆二年八月十二日終。年六十六。擧國莫不悼惜焉。葬國城北古萩里保福寺。初配松村氏。生泰恒。元恒卒。再娶長嶺氏。生允升卒。又娶小野氏。生子夭。小野氏卒。最後娶綿貫氏。生政恒。忠恒。長泰恒字伯恒嗣。餘皆出繼他族。既而伯恒具其狀。遠寄余。託以銘墓事。長門固富學士大夫。余不可敢奪其權。且耄夫廢業不能文。奚足爲重。然既命矣。顧久辱兄弟之誼。親好匪他。今不可辭。乃承其狀。略叙始末。敢係以銘辭。其辭曰。

致君以道。　師儒之得。　興學化民。　維誰之力。
不有君子。　焉大其國。　德之不朽。　永言矜式。

倉尙齋—小倉尙齋
愷悌—やはらぎたのしむ
間燕—間暇安息の際
啓沃—心に思ふ所を開說して主君の心に注ぎ入るゝこと

藝武技諸當敎習者悉備其中。事皆稽古據式。雜以今制。乃既巍然中國而成。名曰明倫館。先生先已爲侯奬順其事。與議其制。於是崇化厲賢之道大行矣。元文二年館祭酒倉尙齋卒。先生代督館事。乃不復東。既爲祭酒。益立學規。訓厲有方。育英之效日月益進。講誦習學絃歌之音不斷。若山子濯。田望之。津士雅。倉彥平。縣子蕚。田子恭。仲子路。曾子泉。林義卿。瀧彌八。縣曾彥。秦貞文。彬々輩出。咸潤色先生之業。以學顯於世。其餘士大夫不必專學職。而傑然成才。知名者不可勝計。長門好學之俗。雖其天性。蓋先生敎化之力。亦多云。先生爲人愷悌易事。其敎喩也。道而不牽。開而弗達。循々誘掖使其自己。以故生徒樂群親師。遂致濟濟之盛。先生博聞之餘歷練時事。其執經陪侯講筵。或侍間燕。啓沃諷諭。陰盡匡濟之益。或與大夫有司出謀發慮。忠告裨益。臨斷大義。則據獨見之明。侃々不可奪焉。人盡敬服。以喬所視。其數東也。同社之交固弘矣。先生溫厚不以所長加人。毫無忌克。遊驩之際。恢宏賞會。言談怡々如也。皆無不推尙其爲長者。先生嘗奉侯命。選公室譜牒諸臣系譜。他所著行于世者有文集。爲學初問。作文初問。若干卷。延享二年。得病。經歲不已。凡在褥八年。自國相憂之者百方

雨伯陽—雨森芳洲

朝勤—江戸に參勤する

頖宮—諸侯の學宮

流。稍長通四子五經大義。良齋君課子弟學頗嚴。常戒讀書樓上。無故不得下。先生强力專精。日夜在樓。手不釋卷。於是四部群籍。百家雜說。涉覽之功殆遍。年十九。東遊。師事物夫子。夫子以修古爲本。經義文章皆由是出。時方始唱。和者蓋寡。獨有藤東壁從焉。先生至則大說其學。與東壁相視切劘。夫子亦自稱得其人。爾後物家之學日興。從者益盛。遂至海內靡然鄉風。吾黨至今以二子羽翼。傳爲稱首。居東三年。業成而歸。正德三年。韓使來聘。朝命其所經群國。例當饗賓使。舟至長門封疆赤馬關館焉。侯乃遣諸文學待接。先生與焉。先生年尙少。而與韓諸書記應酬敏捷。文才儁逸。韓人大賞異之。對州雨伯陽亦擯賓。坐次交歡先生。目以海西無雙。韓三使睹先生所作。至因伯陽格外請見先生。詳見問槎畸賞及先生集中。於是聲名籍々。著聞海內。是後侍侯。及東侍世子讀。侯朝勤則從東。就國則從西。侯不欲先生離其側。享保十三年良齋君卒。先生居喪極哀。是歲亦當從東。時喪期既闋。然至哀之情不能已。乞假願竟志一年。不許。强起從焉。歷仕泰桓公觀光公。間年西東蓋多歲矣。寵待益隆。先是先侯命創建頖宮。使國人子弟游處。設師導。稟諸生。釋菜養老之禮以時。大聚群書。且六

稱首—中間に傑出せるもの

長涯—長愷の誤

齓—齒のぬけかはる年頃、七八歲

り、東涯は室にあり、これその別なり、南郭、春臺二子は匹なり、しかれども南郭は戸にあり、春臺は門にあり、蘭嵎、周南は匹なり、然れどもみな廊廡の下にあり。金華、士新二子は匹なり、しかれども皆門墻を望んで其の中に入ること能はず、宇氏最劣等なり。其の才の適當大抵如此と筆疇に見ゆ。優劣はしらず、何れも稱首たる事見るべし。

○周南の詩、金華が參州にゆくを送るに、

休唱陽關三疊詞。陽關三疊不勝悲。送君多馬河邊柳。折自南枝至北枝。

○周南著書目に

周南文集　同詩集　爲學初問　養子說

講學日記　作文初問

○周南の事歷は服南郭の撰ぶ碑文、瀧長涯の撰ぶ行狀等に悉し。碑文に、

周南先生諱孝孺。字次公。一字少助。山縣氏。生于周南海北邑。因號周南。考良齋君諱長白。嘗以邑人事長門公族海北君。初長門先侯靑雲公爲海北君嗣子。良齋君以師儒侍焉。及公繼封長門侯。從升公朝。移入萩府。時以碩儒在公左右如初。有三男。長文興君早卒。先生以次子繼考業。天性穎悟。年甫齓。受句讀。輙誦如

なりし—なりきの誤本書この類の語法多し
歿すをもて—歿するをもての誤、また存す
箕裘の業—父祖の業
祭酒—學政を司る長

山縣周南

周南山縣氏、名は孝孺、字は次公、俗稱は少助と云ふ。周防の南鄙に生る、よりて周南と號す。父を良齋と云ふ。萩府の文學にて、濂洛の學をもて士大夫に唱ふ。周南は貞享四年に生れ、母は松村氏にて、第二子なりし。兄歿すをもて嗣となる。幼より穎敏常兒に異なり。殊に父良齋、周南を教諭して箕裘の業を續がしめんを欲し、毎日書を樓上に登せ、讀誦せしむ。その間は梯子を去りて下る事を許さず。年十九のとき携へて江戶に來り、徂徠に師事せしむ。居ること三年、業成りて國に歸る。其の頃徂徠の學業いまだ大いに振はず、たゞ東野、周南の二子のみ、互に羽翼となりて、是を補く。故をもて後徂徠大家を成すに至りても、二子をあつかふこと群弟子に異れりと。周南國に歸り、韓使李東郭、洪鏡湖等の學士來聘することあり、筆語唱酬して大いに國光を觀すとぞ。又國學明倫館の學規等を議し、祭酒となる。後病に臥す事前後八年。寶曆二年八月十二日卒す、年六十六。府城の北古萩里保福寺に葬る。

○原田東岳嘗て諸子を評して云ふ。「徂徠、東涯二先生は匹なり、然れども徂徠は堂にあ

孝孺

長門國明倫館祭酒章

源孝孺印

山縣周南肖像

無シ子。初メ遊フ物夫子ノ之門ニ者殆ント盡ス乎海内ノ之俊ヲ矣。而シテ莫シ不ル推サ先生ノ具體ヲ焉。語ハ具ス諸君ノ碑傳集序ノ中ニ。以テ不佞以ニ正生ル、ヲ同郷ニ。辱ク命ニ志銘ヲ。銘ニ曰ク。

盗レ勿レ發クコト兮。先生ノ之藏ハ無シ金。牛羊勿レ踐ムコト兮。先生雖レ無シト後乎。悲シメ夫ノ友人ノ之心ヲ。

商丘ニ。罹リテ災ニ寓シ西臺ノ邸ニ。以テ卒ス。享保己亥四月十三日也。葬ル淺茅原ニ。春秋三十有七。

贅―入聟となる

○東野は文藝の暇に音律を學び、よく笛を吹きたりとぞ。又此の肖像を見るに、容顏清らかに、鬚もなく、殆美少年に類せり。尤鬚なきことは徂徠の猗蘭侯に呈する書中に、且之子無㆑鬚豈容㆑俾㆓字有㆒㆑鬚乎の語あり、證とすべし。

○東野遺稿三卷あり。是は徂徠其の名の終に朽ちんを恐れ、二三子に命じて、四方に散佚せるを集錄せる者なり。歿後二十年にして始めて成れりとなん。

○東野は子なし、死後同盟の人々合貲して、墓石を營みしなり。墓石に其のよしを記す。誠に才學衆に超え、徂徠も稱して假㆑之以㆑年豈不佞之所㆓能及㆒哉と云はれし程にて、生涯貧窶にてありしは、蘐園徒中の不遇なる人物惜むべし。

○東野の墓碑文は服南郭撰す。又誌銘は秋澹園撰す。澹園文に、

先生姓藤。諱煥圖。字東壁。其先瀧田氏。爲㆓奈須著族㆒。父玄佐君。贅而冒㆓大沼氏㆒。以㆑醫仕㆓黒羽侯㆒。先生以㆓天和癸亥正月廿八日㆒。生㆓東野州㆒。故學者稱㆑之云㆑爾。幼孤。養㆓於安藤氏㆒。遂籍㆓東都㆒。冒㆓其姓㆒。後見㆓物夫子㆒。更業㆑儒。猶不㆑忍㆑復㆑初。曰猶㆓之藤氏㆒也。寶永中。仕㆓甲侯㆒。進㆓講經　憲廟于邸之宴㆒。正德元年。病免家居。猶且甲之廩致㆑粟。如㆓仕時㆒。辭則又値㆓西臺侯喜㆑士也。廩乃繼自㆓西臺㆒。初家㆓叡麓著園㆒。後移㆓

弇州―明の王弇州
追慕―追慕か

安藤東野

東野安藤氏、名は煥圖、字は東壁、俗稱仁右衞門と云ふ、東野と號す。本姓は瀧田氏、その先は下野那須の一族なり。父を玄佐といひ、醫をもて黑羽侯に仕ふ。東野は天和三年下野に生る。服南郭と同年に生る。幼にして父母に別れ、孤身となり、安藤氏に養はる。よりて其の姓を冒す。また安を省きて藤東野と號す。初め春臺と同じく、中野撝謙に學び、寶永中柳澤侯に仕へ、書記となる。物徂徠に師事して、詩文ともに弇州を追慕して、蘐園中の能文なりと釋大典も褒稱す。初め徂徠復古の學、古文辭を唱ふるに當りて、世の學者猶舊聞に牽かれ、これを信ぜず。然るに東野幷に山縣周南の二人早く徂徠の說に歸服し、是を贊翼せりとぞ。故をもて、徂徠も始終此の二子を遇する事他に異れり。東野詩文はさらなり。書を工みにし、また音律を善せり。年二十九の時致仕して駒籠白山に隱居す。是より自ら商丘丈人と稱せり。致仕の後も、柳澤侯よりなほ粟を送り優待せり。又猗蘭侯も是を殊に憐みたり。享保四年卒す、三十七。淺草淺茅が原福壽院に葬る。

東壁　　翼軫之衞

安藤東野肖像（あんどうとうやせうざう）

鳳二於飛毛羽翼一。翔二千仞一德亦至。吁夫子秀而粹。迥二于古一出二其類一。若二嶽立一盛二斯事一。仰彌高功之次。鳳兮章可二以比一。斯絢者參二天地一。

擁篲—掃除して人を迎ふること
摳趨—衣をかゝげ堂におもむくこと
韶音—德音に同じ
縫掖—儒生
蹇人—あしなへの人
左契—典據
文宗—文章の大家

孤圖之」余慘然對之曰。「孝子雄以吾從縣官肺腑之末。爲制所拘。不得負笈門下。幸時蒙眷顧之惠。擁篲摳趨。韶音在耳。何日忘之。今聞吾子言追憶高風。夫子誠其然乎。夫子於經術述而不論。曰吾受業徠翁。今日所授則昔日所受也。遵奉唯謹。或問之以當世之事。則哂曰。縫掖之徒不知事務。沾々對人以空談自喜。何異蹇人謀道。吾不敢。是所謂善易者不論易者歟。蓋其奧所蘊終世雖從遊者不能測之。宜妻子家人昧其平日之狀也。夫子德業不可得而稱。余不佞豈敢置一辭乎。且夫子待他人言以顯于後者哉。物門之學風靡天下。夫子與有大造固無論矣。以余視之。我邦自有斯文。立言之業能執其左契。經緯横出煥乎洋々。具體而大莫盛於夫子。顧隆世氣運所釀。天實成之。以華大東。百世軌于斯文乎。率土之濱問南郭服夫子何爲者。雖五尺之童答以天下文宗。口碑莫尚焉。而吾子所屬亦有不可以已者。姑記與吾子言者。係之以銘可乎」。雄唯々。夫子姓服部氏。諱元喬。字子遷。南郭其號也。娶井出氏。生三男五女。今唯三女存焉。其所著作皆行于世。雄字仲英弱冠師事夫子。夫子晚配其季女。承後能傳家學。文采頗有夫子之風。亦歡于余云。銘曰

十八史略　唐詩品彙七律　同絶句　唐詩選
唐詩事略　明詩選

○南郭墓石には南郭先生墓の五字を鐫るのみなり。源賴順といふ卿の撰す墓誌を此に記す。

於戲是歲何歲。寶曆己卯夏六月二十一日。故處士南郭服夫子卒。壽七十七。門人卜某月日。葬于萬松山中少林院。哀哉。其嗣名雄者赴余。且屬之誌銘。曰。「先人蒙公子虛左之遇久矣。今也就木焉。而先人常命孤曰。吾圖人後事多矣。每臨筆硯有伯喈之慚。一分腐生至微至賤。無咎無譽固分爲世棄物。吾歿之日。爾愼勿貽伊慚於人。幸有集之遺。千百歲而知者知我。於我足矣。雖然豈使彼畢如者不知爲何人。於孤意安而從之乎。欲狀之事。先人爲人。凡百行事未嘗一言對妻子家人語之。自少而然。往歲雄擧一女。先人曰先我之生若干日。家人始知生日九月念四。他豈得知而狀乎。唯其尾州津島七黨之一。曾祖父某徙越中高島。父諱元矩者又移京師。山本氏爲母。生于天和癸亥之歲。生而十四。來于東都。後三年事柳澤侯。後十八年。致爲臣而退。爲雄也母者云之。孤不肖不知所裁。伏乞公子遇吾先人有終。爲

虚左之遇｜優待
就木｜死す
伯喈｜伯喈は後漢の蔡邕の字、蔡邕文名一時に高し強ひられて董卓に仕へ之を匡救せんとして行はれず途に卓の黨と目せられて誅せらる

むかしおぼえて｜古風に
こころづくし｜親切
ふりはへ｜わざわざ
をこがまし｜馬鹿げたり
硯ならでも｜唐庚古硯銘「硯之壽以レ世數」

づから思へば、老にける身の、今はた硯の墨の黒髪にたちかへるべきすぢもあらずかし。硯ならでも、世をもてかぞふるものこそあれ、はかなきいのち毛の筆のすさみは、ながきもよしなしとて、かきさしてやみつ。

寶暦八年　七十六翁　花押

○南郭門下の諸生あつまりて、狂詩を作るといふ。「何の題ぞ」と問へば、夜發を詠ずといふに、南郭微笑して、「二十四文明月夜」と朗吟して過ぎられしとぞ。また常に語りて云ふ、「日本の畫は古法眼雪舟を最上とすべし、異國より來るとて人の賞する八種畫譜は、いはゆる町繪にして、見るに足らず、畫論は津逮祕書中にあるにておすべし」と。南郭畫風は雪舟より出づる、周雪と號せり。今小林院に二三幅ありと。

○南郭著書目

大東世話　南郭文集　同絶句　遺契
文筌小言　燈下書　儀禮圖抄

また校刻せる書は

左傳白文　郭注莊子　張注列子　新刻蒙求

別業—別莊

ひがきのおうな—檜垣の老女平安時代の人若き時は京都の妓女にて盛名あり老いて肥後に下り熊本の附近白川に往す其歌「年ふればわが黒髪も白川のみつはぐむまで老いにけるかな」

齋、淺見も上戸、徂徠は下戸、南郭春臺上戸なりと、松君脩云はれたりと。

○南郭ある日、猗蘭侯の別業うきすやしきにて、數十年歌よまざるにふと詠じたりとて、

靜なる池の心を水鳥のうきすの波の立つとしもなし。

また檜垣寺古瓦の記、假名文めづらしと南畝莠言に載する、其の記に、

ひがきのおうなのうた、その事をあはせて、後撰集大和物語にあらはれたれば、人みなしる處なり。今はその跡寺となりてなんあるといひ傳ふめり。肥後の曇龍上人ふる里よりふたゝび東に向はんとて、ふるきを忍ぶかたくななる翁が心くせを思ひはかりて、かの寺の瓦を以て傳へあたへ給へり。朝夕なづさひみんに、硯になしてんとて、そのみちのたくみにことづけてこゝろむるに、いとかたしとて、いなびたれば、とゞめにけり。さはれひくとはなしに琴を手まさぐりて、過せしためしもあらざらめやは。さるはことがらのいみじうむかしおぼえて、もてあそぶばかりも、こゝろひとつにをかしきわざなりや。おのれめでたしと見るのみかは、上人のはる〴〵、ふりはへたづさへたまへりし、こゝろづくしの海ふかき情もすてがたきまゝに、ならはぬ女もじして、かきつくれば、にげなくこそをこがましけれ。かつはかの白川のみ

服部南郭

謝安―字は安石陳國陽夏の人、晉書に傳あり

南郭服部氏、名は元喬、字は子遷、俗稱は小右衞門と云ふ、南郭と號す、又不忍池の邊に住みてより、芙蕖館とも號す。其の先祖は尾州津島七黨の一なりといふ。曾祖に至り越中に移り、父を元矩といひ、北村季吟の門人にて、和歌を善す。南郭も此の道を究む。天和三年京師に生れ、年十四にして江戸に來り、十六にして柳澤侯に仕へ、給事と和歌をもて出づるとなり。三十四の時致仕す。是より儒をもて生理をなす。徂徠に學びて、古文辭を修し殊に詩に長ず。門人の束脩、およそ年分に金百五十兩餘に及ぶとぞ。其の盛んなるたぐひなし。徂徠歿して後は、經義は太宰春臺を推し、詩文は南郭を稱す。自も又肯て講説を事とせず、また經濟を言はず、獨詩文にのがれ、雅致をもて生涯とす。嘗て唐詩選を校刻して、作家の模範をひらき、折に觸れては、繪の事を樂みとし、寶曆九年卒す、年七十七。品川、東海寺中、少林院に葬る。

○南郭は謝安に似たる人にて、喜怒色にあらはさず。人に構はず、我がもの好を立てられし人なりと高子式の評なり。又近來の學者皆酒量あり、仁齋のみ下戶、東涯も上戶、閣

服部南郭肖像

學之道。師嚴然後道尊。先生之敬致成人。學立道存。

焉。用之則行。如有用我者何以哉。故未嘗忘經世之用。故沼田侯好學愛賢。禮遇先生。先生亦深相得焉。侯在政府。嘗從容。語侯曰。「方今遭不諱之朝。然時制所閼無路居下上疏陳事。純雖微賤。幸因侯而若得言一二得失。或又觸聞以賤人妄犯上。被嚴刑。萬一以身有補於濟衆。亦志所願已。不識可否」侯曰。「試乃可也」遂上封事。不報。然世已異其特立。而益敬仰其非記聞浮華之學。先生幼受孝經。論語於大翁。及學成。益尊尚焉。漢孔氏傳古文孝經久亡彼方。而獨存吾邦。因校訂諸博士家所傳。作音注。而刊之。復因沼田侯獻諸 朝。政府諸公聞之爭求於侯。侯爲並貽焉。又本師說。更加所見作論語古訓及外傳。又作家語增注。以爲此三者庶見孔子遺則。故用意特勤焉。先生强記且於事精詳。其考究書籍。一字不苟過。必歸正然後止。佗所著書凡數十。亦皆學者傳尚焉。書題併平日規行門人稻垣長章爲誌。松崎維時狀行。詳于二文。延享丁卯五月晦逝。年六十八。葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆。初娶末松氏。無子。再娶前川氏。亦無子。子養阿武家之子名定保。元喬以同盟相識。三十餘年。乃顧夙昔物夫子與二三子已先逝矣。天復不慭遺先生。哀哉。因作銘曰。

考—亡父
骸骨を乞ふ—辭職を乞ふ
滕東壁—安藤東野
縣次公—山縣周南

朱氏詩傳膏肓　獨語　產語　和漢帝王年表
辨道書　斥非　春臺文集（一名紫芝園稿）　新撰六體集
孝經正文校　古文孝經校　春秋曆　經濟錄

○春臺の事歷は松崎觀海の撰、行狀あり。服部南郭の墓記こゝに記す。

太宰先生諱純。字德夫。號春臺。物夫子嘗爲其考栢樹翁作墓碑。載在集。考以上具焉。先生生于信陽飯田。幼隨考東。稍長仕出石侯。數年疾乞骸骨。三不許。乃自去藩。藩以輙去錮之。西遊京畿十年。是時物夫子唱復古學于東都。滕東壁。縣次公相助修業。而次公西歸。東壁乃顧。夫子之門從游日多。然俊傑可與適夫子道者猶未至。東壁幼嘗已同先生。受書撝謙野先生者。服其敏學。因思先生。數書招之。會錮亦解。先生遂東至。則見物夫子說其學。以爲得所歸。乃事夫子。與東壁二三子講習古學。博文約禮敦尙經典。物夫子歿益詳究先王之道孔氏之書。鬱爲大師。弟子諸侯大夫至草野士日益進。先生既勵己行以直方自居。從遊之徒莫不奉名教唯謹。爾畏如大府。前後所見諸侯甚多。未嘗枉己而求見焉。進退必以禮。安貧樂道。終不復仕。然其志則曰。儒者之學折中孔子。孔子所祖述先王歷聖政治之道具存

いろ〳〵せらるゝゆゑ、倦つかるゝことなし。夜はかならず四ツ時に寐られたりと。其の言行きはめて方正にして、小學の嘉言善行に入るべき人物なりしと、松崎君脩云はれたりとなん。

○春臺常に玄關に鎗を掛置き、常の奉公人の武士の如し。死近きに至りても、浪人の葬禮に鎗を持せたる例あらば持せたきよしにて聞合せたるに、浪人葬禮にも皆鎗を持するよしにて、春臺葬の時に鎗を持たせしとぞ。また病氣大切に及びし時、原芸澤脈を診して、「もはや後事を計り給へ」と云ければ、春臺も「尤なる事、餘人にはさは宣はじ」とて大に喜び、夫より遺言多く有りしとぞ。會葬の人三四百人にて、毎日の見廻も四五十人づつ有りしとぞ。尤盛んならずや。

○春臺著書目に、

論語古訓	同外傳	家語增註	詩書古傳
易道撥亂	周易反正	易占要略	六經略說
律呂通考	聖學問答	和讀要領	和楷正訛
文論詩論	近體詩韻	論語正文	親族正名

太宰春臺

春臺太宰氏、名は純、字は徳夫、俗稱彌右衞門と云ふ。春臺と號し、また紫芝園とも號す。信州飯田の人にて、平手政秀の後なり。父の時より太宰氏となる。延寶八年に生れ、幼き時父に隨ひ、江戸に移る。初め中野撝謙に學び、性理の學を修む。後、徂徠復古の學を唱ふに及びて、就て業を受け、遂に其の說を主張す。晩年やゝ一家の見識をもて、徂徠の右に出る事あり。始終經學をもて任とし、禮法をもて敎ふ。古文孝經孔傳久しく異邦に絕えて、我が邦にのみ遺る。春臺校して上木す。後に鮑廷博翻刻して、知不足齋叢書第一集に收む。實に藝園の一大功にして、孔氏の忠臣なり。初め或二侯に仕へ、意を得ずして致仕す。後諸侯に喜寵せらるといへども、肯て游宦せず、處士をもて門戸を開く。延享四年五月晦日卒す、年六十八。江戸谷中天眼寺に葬むる。

○春臺は物を極むる事すきなり。人と會釋にも、初めて逢ひし時より、是は此の位の會釋にすべき人といふ格を定め置かれしとぞ。また書を讀むには朝早く起きて、先假名書などを見、又は人の見せ置きたる詩文をよみ、又校正の書をなし、また會業の下見などし、

處士—仕へずして家にある士

會業—輪講

純

太宰純印

氷壺秋月

太宰春臺肖像

隙而生。故名雙松。及長。自稱徂徠。取魯頌徂徠之松之義也。國學者太宰純。服元喬皆其弟子。咸稱爲徂徠先生云。

右梅溪先生所撰。物茂卿小傳一編。是據日本原善公道所著先哲叢談爲之損益成文。非先生臆說也。因附刻于辨道。辨名之前。所謂誦其詩。讀其書不知其人可乎。後之覽者幸諒之。秀水鄭照識。

簷隙――のきの間

侏離鴃舌―不分明なる蠻人の語、詞藻雅馴ならぬを
戎機―戰法
鋒―鋒は蜂の誤か
猗蘭侯―本多忠統
摸搨―うつす

徽。迨侯益受封。茂卿亦益其秩。至宦五百石。非其好也。茂卿初服程朱理學。嘗著蘐園隨筆自娛。既而翻然改。遂痛駁性理。又傚李于鱗。脩古文辭。幷將唐宋以來諸儒之說。一切排斥之。不免爲侏離鴃舌。然其豪邁卓識。激昂慷慨。宏文鉅著。已足籠蓋一世。而尤好兵家言。著孫子解及韜鈐錄。渉獵殆盡。遂視七書爲空談。而謂戚繼光有實用。又創造一家象棊。以寓戎機。名廣象棊矣。子凡百八十。而局則仍用碁局。其陣列軍伍攻擊守禦無不備焉。一日門下諸生會講韓非子。議論鋒生。茂卿在坐。獨箝口不言。諸生不悅曰。「先生何無折衷耶」茂卿屏氣曰。「此書余嘗有成說。將待明日示之」而是夜始下筆。疊々數千言。滿座爲之傾倒。生平無他嗜好。而重養生法。以爲人生飲食居處以至出入。動止。應接。賓朋之事。苟可以傷生者吾弗爲也。頗自負。嘗謂人曰。「吾死後所有遺文逸事必當傳遠。然海內無眞知我者。知我者其唯聖人乎。以享保戊申正月十九日卒於家。年六十三。門下諸生爲之發喪。葬于芝三田長松寺之壽命山。猗蘭侯爲撰墓志。葛烏石書之。刻甫畢。遠近爭傳。往來摸搨者日以千數。其爲當時所重如此。所著有論語徵二十卷。辨道一卷。辨名四卷。初茂卿生時其母夢有人以兩松插簷

憲廟—五代将軍綱吉諡號常憲院
徳廟—八代将軍吉宗諡號有徳院
蜑戸—あまの住處
鮏丁—鮏は鮭の誤なるべし鮭丁は塩やき
舌耕—講説をもつて生計をなす

家之古訓於是乎存焉。前謁憲廟。講筵説經。後見徳廟。談笑驚聽。此服則上之所賜也。其人則一時之英靈也。其名茂卿。號曰徂徠。天下學士誰人不知。若欲晰先生之家學。則須再採西漢以上之書。而熟讀之爾。

于時寛政十一年庚申冬十二月十二日　後學鵬齋龜田興敬題

○徂來の辨道辨名二書異邦にて翻刻す、且小傳あり。予が先人の先哲叢談によりて文をなすよし、道光十六年梅溪錢泳といふ者の撰、其の傳に、

日本國徂徠先生小傳　金匱　錢泳　撰

徂徠先生物茂卿。名雙松。有所避。以字行。國之江戸人。其先爲荻生氏。物部守屋後也。父方庵以醫術官於大府。延寳中。坐事貶上總。時茂卿年十四。亦隨父行。而喜讀書。穎敏不群。有遠志。上總三面皆海。雜處于田父。野老。蜑戸。鮏丁中。既乏書籍。又無師友。偶繙舊篋。得其大父仲山府君手鈔大學諺解一冊。熟讀深思之。從此該貫群籍。博識洽聞。毎讀一書。輙爲標註。見者莫不異之。越十年。値父以恩澤赦。還東都。卜居于芝街。父母亦旋沒。一貧如洗。舌耕自給。遇柳澤氏以功封侯。知茂卿名。召爲掌書記。始解褐。侯愛敬之。然其祿尚

鈐錄	同外書	政談	太平策
經濟總論	憲廟實錄	四家雋	古文矩
文變	文罫	韻槩	唐後詩
絕句解	絕句解拾遺	栢梁餘林	皇朝正聲
徂徠外書	徂徠集	詩語自在抄	詩題苑
文考	管子考	晏子考	蘐園錄稿
同遺編	同隨筆	弁髦編	樂語瑣言
翰墨事略	論語辨書	甲州府志	

此の外點付し書目

晉書	宋書	南齊書	梁書
陳書	六諭衍義	射學正宗	射學正宗指迷集

○龜田鵬齋徂徠の賛に

先生智襟豁達。氣象卓犖。毅然以先王之道。爲己任。爰唱復古之學。掊擊程朱之理學。排五百年之新義。擬議李王之脩辭。徵二千載之古言。東方文辭於是乎美矣。漢

○また高師直、鹽冶の妻に貽る歌の意を譯せしに、

我思二美人一貽二之書一。美人不レ見棄二庭除一。吾拾二吾書一歸二十襲一。心謂美人手所レ觸。

もし韻あらば翻詩といはんも可ならんと、詩徹にいへり。

○徂徠著書目

辨道　辨名　大學解　論語解
中庸解　讀荀子　讀韓非子　讀呂氏春秋
孫子國字解　吳子國字解　素書國字解　明律國字解
譯則　明律考　紀効新書抄　射書類聚解
井地解　西洋火攻神器說國字解　素問評
孟子删　譯文筌蹄　譯筌後編　孟浪之篇
草堂客話　南留別志　經子史要覽　答問書
度量考　葬禮考　滿文考　樂律考
樂制篇　論語徵　幽蘭譜抄　琴學大意抄
廣象棊譜　歌題集　明十三省考定圖　琉球聘使記

宇子—宇佐美灊水

○徂徠嘗て庫一の書物を拂ふものありしを、金六拾兩程家財を賣拂ひ買はれしとなり。古文矩宇子の序にもいへり。誠に豪傑の所爲なり。また書を看るに少しも止む時なし。薄暮燈を點ずる時は戶の外に出でて是を見る、家人燈を點じ終れば、直樣燈の下に就きて讀みたりとぞ。

○徂徠常に云ふ、「人に得手不得手あり、予は楷書に短なり」とて、草書のみ書きたりとぞ。草書韻會を几上に置きて學びしよし。また算用は八さんを覺えられたるのみなるに、度量考を作らる時は、紙の端に筆にて數とりを書付けて、殊の外骨ををられ、其の後中根丈右衛門に見せて正し、猶また春臺は極めて算の上手にて、改めて字をも直せりとぞ。古人の苦學常儒の及ぶ處にあらぬを見るべし。

○春臺始めて徂徠に對面のとき、其の才を窺はん爲、扇面へ釋迦老子幷立つて、孔子半伏の貌を圖して、徂徠に贊を請ひければ、筆を取りて、「釋迦釋空老子談虛孔子伏笑」と書けり。春臺、徠翁の才窺ふべからざるを喜び、遂に弟子となりしとぞ。

○徂徠の一生一首の和歌とて、

我が門の五もと柳枝たれて長き日あかぬうぐひすのなく

原本混じて徂徠を—徂來に作る
憲廟—常憲公綱吉
大城—江戸城
風靡—草木の風靡する如く從ふ
象胥—譯官

荻生徂徠

徂徠荻生氏、本姓は物部なり、名は雙松、字は茂卿といふ。通稱惣右衛門、徂徠と號す又蘐園、赤城翁とも號す。名は避る事あり、字をもて行はる。父を方庵といひ、憲廟の侍醫なりし。徂徠寛文六年に生れ、五歳にして能く字を識り、十四歳の時、父方庵事に坐して、南總に竄せらる。徂徠從ひて移る。然れども僻地にありて、苦學し、十五歳の頃より文を屬し、二十五歳の時、赦に値ひて、江戸に歸るを得たり。遂に大儒となり、甲斐侯に聘せられ、祿五百石を賜はり、編修總裁となり、後　大城にも屢々めされしなり。我が邦慶元以來の儒風こゝに於て一變し、復古の學を唱へて、一時を風靡す。文章は李王の修辭を宗とす。英才多く其の門に輻湊して、其の學風を補翼す。太宰春臺、服部南郭をはじめ、其の他東野周南、金華濡水數ふるに暇なし。徂徠才學共に富みて、尤經濟に長じ、また雅樂、象胥、軍旅、法律、すべて百家のこと精覈せざるなし。然れども好奇の癖ありて、後世誹議するものまた多し。實に東方の一偉人、享保十三年正月十九日卒す、年六十三。箕田長松寺に葬る。法謚を清淨院根與知專居士といふ。

荻生徂徠肖像（をぎふそらいせうざう）

居士卒。享年九十三。葬妙心寺聖澤院。君夙有四方之志。服闋。讓家道意。遊歷諸州。學醫鍼及劍。皆通其術。遊事松平大和守源直矩公于越于播。後歸京師家居。始娶某氏。尋出之。擧一子。爲僧。稱東溟。繼室箸尾氏生一子。希賢是也。妾生一女。名乙女。箸尾氏先卒。釋號花岳妙榮。葬建仁寺兩足院。天和二年辛酉九月十九日。君以病卒。享年六十。釋號要叟。亦葬兩足院。君之將終也。二子尚幼。乃託諸大村道慈。道慈卽道與嗣子。待二子齊己子。恩義兼至。爲嫁乙於左衞門尉戶田久寬。而生參子。早世。希賢娶小野氏。以无子去。繼室久住氏生六男二女。曰孝。俗稱新二郎。曰友。俗稱文之丞。曰睦。俗稱爲之丞。曰盛基。俗稱伊織。曰勝全。會道慈孫道節歿无後。其母及主管等請勝全。繼其家。遂冒姓大村。俗稱彥太郎。曰廣全。俗稱彥左衞門。長女適細井安之。次女適渡邊正英。俱無恙。元文四年己未十一月。三輪希賢建。

五井純禎誌。

貫二書○答二河崎氏一書○答二原田平八疑問一○答二鈴木貞齋先生一書○事成編○詩二十六首○邪正
說幷知士說○呈二佐藤先生一幷策答○雜文述二十五條　合一册

曾禰之記幷和歌○獻策記○古稀之賀和歌幷序○祭二土地一文○會津孝子傳序○送二藤使君一辭幷
和歌○享保壬子春述文○芥川小野寺歌集之跋○藤樹先生全書序○拔本塞源論抄序○大學講義
序○書二篆字論語後一○藺相如贊○諱說○字二渡部子之男一文○明倫堂成祭二王文成公一文○祈レ水
文○大久保忠喬朝臣碑文○醉露英覺嘗雄碑文○孝女子於以廉碑文○猪兵翁碑文○貞婦栗女碑
文○祖戸田還五郎碑文○西江一水居士碑文○拙庵今井君之碑文　合一册

執齋先生和歌詠艸○先生喪記記事追善詩歌　合一册

○五井蘭洲撰する執齋父澤村自三の碣文もて此に擧ぐ。

要叟居士澤村自三君墓記

君諱親重。童名乙若。俗稱次郎三郎。號二自三一。姓三輪。假以二澤村相川一爲レ氏。家世住二濃州關原一。祖考道悅居士。有二參子一。長曰二藤大夫一。坐二越前一伯公事一歿。次爲レ僧。稱二林藏主一。關原之役生二擒小西行長一。獻二轅門一。因賞賜二黃金及茶器一。次則次郎左衛門。稱二道祐居士一。妻江州長濱。大村道與妹。生二四子一。伯曰二刑部大郎一。稱二道時一。後爲レ僧。稱二无難一。仲曰二刑部次郎一。又稱二奧之助一。叔曰二仁左衛門一。蚤歿。季則君也。大村孺人先卒。道祐居士遂携レ君。遷二居京師一。再娶二宮崎氏一。生二男道意。女某一。俱有二癈疾一。特鍾二愛焉一。道祐

轅門—陣門

曳レ杖尋レ花到二赤城一。鳥啼日暖晩湖淸。白櫻似レ有二還鄕約一。亦是皇州叡嶽名。

讀二大學一

孔言曾意三王道。程拔朱輯萬世規。聖教不レ求二民彝外一。明新善盡自窮レ知。

明新善—三綱領明二明德一、新レ民、止二於至善一

○執齋著書目因に記す。

周易進講手記　全六冊　孝經小解　四卷　合一冊

大學俗解 上下　合一冊　四教講義　合一冊

神道臆說 十三條　合一冊　日用心法幷跋顧諟論　合一冊

堯典和釋○拔レ本塞レ源論抄外傳○時務問答服制問答幷總論○學校說○生レ財有二大道一說　合一冊

十二孝子好人錄　合一冊　正享問答○救餓大意○社倉大意　合一冊

格物辨義○程子春秋序解○井田經界說　合一冊

拔本塞源論抄○訓蒙大意解○教約和解　合一冊

論語中庸禘嘗考上加茂步射之次第幷競馬之事○含翠堂記○先致堂記○祠堂考○平野學問所之事○淡齋記○祭誠齋記○積善堂記○居喪諦○臍噬○祭薦卷○士心論○治教論○四言コトカキ○養子辯之辯○會約序　合一冊

答二佐藤先生一書幷答論教條○答二或人一晩年定論之論佐藤先生跋批○王觳書○答二酒井彈正忠

古本大學—陽明學派の用ゐる大學

雄琴—川田雄琴

茂叔—周濂溪、宋の大儒

とよみ給ひて、希賢に見せ給ひしも、四日、五日のほどなり。

たづねけん千代の古道あとかへてひとりや苔の下に行くらん

外五首略す。これは享保四年の事なり。また同十二年春の歌に、

去秋明倫堂を開きけるによりて、古本大學の復の心を春のはじめによめる。

古にかへすをしへの道ひろみまもる仁のはるは來にけり

うづもれし道の深雪のやゝとけて昔にかへる春も見えけり

明倫堂は執齋の講堂、江戸下谷に住む時に捌む。歿後門人雄琴なるもの、君公に請うて大洲に移すとぞ。執齋四言教の歌畸人傳にあり。

○執齋七絶詩一二を摘みて、此に記す。

漫興

黃鳥聲々檐外暮。杏花陰裏獨倚ㇾ欄。光風霽月滿二天地一。洒落自知茂叔看。

三月游二道灌山一

道灌相宅一丘岳。徒有二空名一身受ㇾ殘。不ㇾ識當時築成處。却令二游士爲一游歡。

東叡見ㇾ花思ㇾ京。

た年來舊識の輩日來家門出入のもの、及び家僕に至るまで悉く永訣し畢り、二十四日晝未の刻に、筆紙を請ひて、寛保四年子正月二十五日、三輪希賢死と自書し、翌二十五日朝寅の刻易〻簀しよし、喪記紀事に見ゆ。さすが名儒のこゝろえさも有りたきことならんかし。

○執齋、先師佐藤直方の死する時、其の靈前へ手向る和歌八首あり。いま一二をこゝにしるす。

今年八月望、佐藤先生俄に病し給ふと聞くより、やがてまゐりけれど、はやこと切れ給ひぬ。永きわかれにも及ばざりしかなしさよ。終夜むなしき御からのかたはらに侍りて、すぎこしかたをおもひつゞけ侍る。今宵は十五夜なりけれど、雨いたく降りて、名高き月も見えず。

名に高き最中の月のかくれしや世にたぐひなき恨なるらん

希賢十九になり侍る年、始めてまみえけるよりことし三十三年になりぬ。

けふまでと契りやかけしつかへしも三十ぢ三とせの秋の夕露

此のごろ先生「ともなはん人しなければたどり行く千代のふる道あとをたづねて」

最中の月――
中秋の月

三輪執齋

壽藏—生存中に立つる墳

執齋姓は三輪、名は希賢、字は善藏、執齋と號し、また躬耕廬と號す。平安の人なり。寛文九年に生る。その先祖は大和三輪明神の社家なり。父を澤村自三といひ、醫をもて平安に住す。母は箸尾氏、執齋六歳の時、母を亡ひ、十四歳にて父を失ひ、市人大村氏に養はれ、人となりて後、眞野氏を嗣ぐ、後又本姓三輪となる。はじめ佐藤直方に從ひ、性理の學儒たり。後王陽明の學に歸す。初め酒井侯に仕へ、後致仕して、講說をもて業とす。京、大坂、江戸に居住して、生徒を教育す。また和歌を能せり。其の集にある歌凡六百餘首あり。儒にして和歌の道を悟る比すべきなしとぞ。さればこそ元文四年七十一歳の時、壽藏を立てゝ、和歌二首をもて自書す。これより五年を隔てゝ、寛保四年改元ありて、延享元年と成る。その年正月二十五日、京師にて卒す、年七十六。すなはち壽藏の地、建仁寺の中兩足院に葬る。

○執齋病に寢るは寛保三年の冬十二月半比より翌正月にいたり、いよゝ革なりしに、正月二十三日髭を剃りて祠堂を拜して、永訣を告げ、二十三日、二十四日兩日には、親族ま

三輪執齋肖像

剴切—よく當てはまる
旨竅—肯綮
頡頏—力相上下す
鴻漸—大に進む
羽儀—出仕の狀
巖廊—威儀あり
豹隱—豹變退隱
一老—一賢人
憖遺—强ひて留むること
佳城—墓地

多有所建白。皆施行。是月。叙從五位下。拜筑後守。十一月。倍賜采地。與前所食并爲千石。公以職在顧問。每出入風議必論事。剴切動中旨竅。將順匡救所裨益不少。正德中。國家不幸。仍遇大喪。而公漸老無意當世。廼杜門謝客日夜以典籍爲樂。卒以此終焉。公以明曆三年丁酉二月十一日生。享保十年乙巳五月十九日疾卒。享年六十九。娶日下氏朝倉長治女。生二男。長明卿今克家。次宣卿先卒。二女長適市岡正軌。次適石谷淸賓。公少時自負。膽氣不覊。旣而折節讀書。通經史百家之編。中歲始遊於順庵木先生之門。以該博見稱。最善唐詩。其詩豐腴馴雅。直與開元諸名家相頡頏。由是四方爭傳以逮海外之國。而公之詩名擅天下。其所著書藏於家。後世必有傳之者。銘曰。

公昔鴻漸。羽儀巖廊。晩節豹隱。蔚乎其章。
國有一老。天不憖遺。朝野共慨。若亡蓍龜。
佳城新卜。山阿環周。旣安且固。何啻千秋。

朝散大夫――從五位下の唐名

怙恃――父母

朝散大夫筑後守新井源公。諱君美。字在中。初名璵。白石其號也。其先上野人。爲新田族。新田大炊助義重曾孫。新田二郎某。削髮爲僧。因其所居稱荒居禪師覺義。其子孫遂以荒居號其家。後又易新井。蓋我邦方言與荒井同訓也。覺義之後世仕南朝。南朝既亡。荒居族流寓上下兩野之間。元龜之初有圖書允某。據有上野勢多郡女淵城。公其後也。祖勘解由某方遭世屯。亡土地。卒往常陸。從多賀谷修理大夫平宣家。多賀家敗去。隱河內郡。其宅門前有古橋。里人號爲古橋殿。父與次右衞門正濟。母藤原氏坂井某女。正濟幼喪怙恃。年十三來江府。爲武州人。及壯。爲土屋家臣。甚爲民部君所任用。民部君卒後。有故而去。公生而岐嶷穎悟夙成。三歳時。能書大字。民部君愛其幼慧。召置膝下。比及十歳。常在民部君側。代書殆若老成云。延寶三年。從家君辭去。天和二年。公仕於堀田筑前侯。會朝鮮來聘。廼詣客館。與其學士等唱和。韓人序其陶情集。是歳丁家君憂居。無何辭仕。去隱居府下。元祿六年冬十二月。起就甲府之辟。始至以儒職召侍講筵。優待日渥。後數年　特旨進公資格。列爲寄合衆。寶永六年夏四月。　文廟始繼大統。秋七月。賜采地歳租五百石。七年冬十一月。以事使京師。八年春二月。還報稱旨。冬十月。朝鮮來聘先期。命公掌其事。

木瓜考　人名考　岩松家系　決獄考
文字考　軍器考　同文通考　古史通
東雅　五事略　讀史餘論
復號紀事　奉命教諭　癸巳三月儀　鬼神論
藩翰譜　同系圖　黃白問答
南島志　北島志　停雲集　新安手簡
鷄肋稿　折燒柴記　畫工便覽
珊瑚網鈔　百家編　集古圖說　西洋紀聞
西洋圖說　采覽異言　倭地形類　議訴父女罪
樂考　地名河川兩字通考　觀樂江關筆談　起請文考證
朝鮮聘禮事　朝鮮信書式　將軍宣下儀　孫武兵法擇
講義進呈案　天爵堂漫鈔　此の外退私錄、紳書、家禮儀節考等あり、略す。白石著書凡三百餘種に及ぶとぞ。近聞偶筆に云へり。

○白石の墓碣文は室守禮撰べり。然れども鳩巢文集にのみ載せて、墓碑に彫る處にあらず。

○白石七歳の時芝居見に行きて、始より終まで一々記憶して歸られたりとなん。此の兒あしくなるか善くなるかなみ〳〵ならず、と父のいはれたりとぞ。又白石の號は深き意あるにあらず、たゞ古人姜白石、黃白石、沈白石などを見て名付しものと自云はれたり。また常に書を見るに三几を設けて、一は已に讀みたる書を置き、一はいまだ讀まざる書を置き、一は今讀む書を置かれたりとぞ。

○白石自肖像に題す詩に。

蒼顏如鐵鬢如銀。紫石稜々電射人。五尺小身渾是膽。明時何用畫麒麟。

壯年朋友に與するに死をもてせんとする事折焼柴にあり。又非常の用とて五十金の賜をもて甲冑を求めしなど見れば、詩意空言にあらざるを知るべし。

○白石著書目に、

白石餘稿　白石詩草　問田步　田制考
白石遺文　經濟典例　日本紀論　俳優考
貨幣考　車輿考　冠服考　樂舞考
職官考　聖像考　新井家系　玉考

新井白石

白石新井氏名は璵、後に君美と改む。字は在中、通稱勘解由と云ふ。號を白石と稱ふ、又錦屏山人とも云ふ。本姓荒居なり。其の先は新田氏より出る。父を正濟といふ。常陸の人、後江戸に來り、土屋侯に仕ふ。其の後致仕して淺草に住む。白石明曆三年二月十一日に生れ、康熙帝と同日支干なりとぞ。三歳の時より大字を書し、十歳の頃は侯の左右にありて、よく書札往復の事を勤めしとなん。父と共に浪遊し、後木下順庵に從學して高足弟子となる。

文廟潛邸の時仕へ奉る。書記となり、繼統の後、追々登庸せられて、恩遇他に異り、遂に爵五品を賜はり、祿千石を食む、筑後守と稱す。其の才經濟に長じ、著述の書は盡く國家の典刑、有用の具となる。詩文も藝苑の魁首、一時流傳して異邦に至る。白石常に云ふ、「生前封侯を得ずんば、死後閻羅となるべし」と。其の豪邁つひに素志にかなへり。享保十年五月十九日卒す、年六十九。淺草報恩寺中、高德寺に葬る。法謚を慈清院釋淨覺といふ。

支干—えと
高足弟子—すぐれたる弟子
文廟—文照公、德川家宣
閻羅—閻魔王

白石

原君美印

新井白石肖像

緒方氏女。生先生兄弟。先生於兄弟爲季。先生事邦君三世。爲儒學教授。禮遇彌厚。累加賜采地。元祿庚辰年七十一。告老致事。猶賜月俸。優其老焉。先生稟性純厚。幼而志聖人之道。學極博洽。所操至要。以忠信不欺爲主本。愛人濟物爲要務。昔曾在京師。講程朱之書。聞者靡然來焉。近世興性理之學者先生爲始。然其性甚謙。只恐躬之不逮。而不喜近名。常言。吾無長人者。但恭默思道而已。然一時老師宿儒。悉推服焉。名門右族各敬屈焉。聲名洋溢辱聞清朝。恭達台廷。嗚呼盛哉。晩年家居清閑自娛。手不釋卷。所著之書至百餘種。其志在於務作有益以報皇大罔極之洪恩。以正德甲午八月二十七日。病卒於家。享年八十有五。葬荒津金龍寺內。先生娶河崎氏女。有賢行。而無子。取仲兄存齋之次子重春爲嗣。今仕在本州爲監司。有一男二女。皆幼矣。重春託銘於小子。乃銘曰。

恭默思道。極精造微。愛物爲務。事天不欺。

韜藏增顯。謙遜愈輝。遺訓存策。後學久依。

采地―領地

洋溢―滿ちあふるゝこと

韜藏―才德をくらましかくす

三禮口訣　菜譜　文武訓
筑前名寄　有馬名所記　嚴島之圖
松島之圖　天橋立之圖　神祇訓
日用良法　和學一歩　扶桑記勝
吉野山之圖　女大學　花譜
心畫軌範　大和本草　歴代詩選
養生訓　大疑錄　日本歳時記
頤生輯要　自警篇　三記聞
筑前續風土記　天滿宮實記

訓點を附したる書は。小學、孝經大義、四書五經、朱子文範、古文前集、同後集等ありと。

○益軒年譜は姪好古、可久二人の手に成る。墓誌は門人竹田定直撰文なり、此に掲ぐ。

先生姓貝原。諱篤信。字子誠。以寛永庚午十一月十四日。生于筑前州福岡城内。其先備中州人。大父某來豐州。仕黒田先公。從來筑州。世爲家臣。先考寛齋。諱利貞。娶

詹々—多言する貌
瑣々—細小
卑賤

べし、慕ふべし。

○愛日樓集に益軒の像賛あり

自損者能益人。忘譽者能遠毀。小言之詹々。人不厭其俚。細物之瑣々。人不謂其鄙。仰藹然之遺影。和而介。溫而理。於戲不愧乎有道之士矣。

○貝原の著書目因に記す。

小學備考	近思錄備考	自娛集
愼思錄	家道訓	大和俗訓
初學訓	農業全書附錄	樂訓
和漢名數	續名數	童子訓
鄙事記	和爾雅	初學知要
岐蘇路記	初學詩法	諸州廻
京廻	吾妻路記	日光名所記
本朝詩仙鈔	大和廻	日本釋名
和字解	點例	五常訓

螟子―螟蛉子、養子のこと

踰等―僭越

西山公―徳川光圀

朱舜水―明末の學者、遁れて水戸に仕ふ

折にふれては和歌を樂しめりとなん。

こしかたは一夜ばかりの心地して八十あまりの夢を見しかな

また益軒の螟子好古の辭世因に記す。

出る日の入るが如くにおもほえて浮世に殘ることの葉もなし

好古は益軒の姪なり、養うて子とせるに、先立つて死す。學識ありて益軒の年譜も元祿九年まで好古撰む。此の年卒す。十年よりは後の事は可久の文なり。是も益軒兄存齋の子なり。

○益軒嘗て湊川を過ぎ楠公の昔を追想し、公の梗概を片石に記し、遺跡をながく存せしめんと、兵庫の富商に議して、すでに楠公の碑文を撰みて與へければ、富商喜びて、やや石工にも謀ることゝなりけるに、俄に使して其の稿をとりにこしけるに、文章の改刪もやと附屬して返ししかば、やがてまた使して言傳せるは「我等思ふに、楠公の勳功日月をも比すべきに、予が如き淺學の筆もて記したらんは踰等の事なれば、此の事やみぬ。貴殿へ麁忽の約を申たり、許し給へ」とありしゆゑ、富商も本意なしとて悔みけるとぞ。其の後、西山公、朱舜水の文をもて楠公の碑は建ちぬ。益軒の篤實謙遜これにても尊む

貝原益軒

益軒姓は貝原、名は篤信、字は子誠、俗稱を久兵衞といひ、號は益軒また損軒ともいふ。易語の損益にとる。初め柔軒ともいひしとぞ。筑前の人、その國侯に仕ふ。父を寛齋といひて、藩醫なり。益軒は寛永七年、福岡の官舍に生る。六歳の時、母緒方氏に別る。九歳の時、兄存齋に就て、書を讀み、幼より群兒の遊を好まず。たゞ讀書を嗜み、中年に及び京師に講學す。十九歳、武州河崎宿にて祝髮し、柔齋と號し、醫とならんとての事なり。後寛文八年三十九歳の時、束髮して久兵衞といふ。初め陸王二氏の說を喜びしが、後朱學に歸す。心術後世に裨益あらんを欲し、いさゝか名利に馳せず。故をもて著書數百部、假名書多し。其の見識、尤人の及ばざる處なりとぞ。妻江崎氏も婦德ありて、和歌を能し、書を工にし、益軒と共に諸州を經歷して、內助ありとぞ。然れども遂に子を設けず、六十二歳にして益軒にさきだちて死す。益軒實子なき故をもて兄の子を養うて嗣とす。正德四年八月二十七日卒す、年八十五。荒津金龍寺に葬る。

○益軒謝世の詩歌あり、こゝに歌のみ記す。益軒平生詩は好まず。無用の閑言語と云ふ

貝原益軒肖像

局戲―圍碁すごろくなど
木主―位牌
保甲―組頭

紙書雜字數十。而敎之。既識得。則隨問而應。含乳指之。八歲學書計。鄉有道流讀儒書者。乃就授讀四書。漸長。尙儉素。以學字讀書爲務。後遂成性。不好繁華。不羨逸樂。至於局戲雜伎無一所嗜。崇信儒術。而不溺異教。生長市肆。而不識物價。凡治生營利之事澹然無入其心者。二十七歲厭市肆之囂。欲居淸閑之地。於是買宅於衣店街二條第一閭西畔。而經營之。一隅設祠堂。假設三世之木主。薦之。鄉人將以保甲屬先生。先生不欲之。又買宅於小川街二條第三閭西畔。新建祠堂。修繕居室。而徙焉。後又遷居本閭東畔。天和三年先生年五十五。營隱宅于伏見鄉。京町。南八閭。既成。徙之改交名。爲仲二郎。仲氏也。二郎第也。乃拒絕外人通交。惟京師舊知來訪。則延入。論學耳。自茲不剃鬚髮。以表不出世不交禮。專以著述爲事。諸生漸衆。既而暫寓京師。遂遷居東九條宇賀辻村。時年七十。生事益衰。而其操益固。諸生來者益衆。一日嬰厲瘧疾。入京治療于男之淑之宅。更數醫皆不驗。遂逝于其室。享年七十有四矣。元祿十有五年七月二十六日丙午初昏也。本月己酉。葬于洛之艮隅一乘寺村圓光寺後山。

耆耋—としよりたる者
考槃—曲を奏して樂む
交名—俗稱
穎悟—さとし
社會—町民の集會

愼終疏節　追遠疏節　姫鏡　近思錄鈔說
近思錄示蒙句解　孝經示蒙句解　家禮訓蒙疏　四書示蒙句解
小學示蒙句解　詩經示蒙句解　頭書訓蒙圖彙　大極圖說筆記

○惕齋自像の詩に

利名雙字胡爲者。億萬民生俱策驅。耆耋弃材慵世計。考槃林曲永言娯。

○增謙益夫の撰める行狀は數千言下略して、此に記す。

先生姓仲邨氏。諱之欽。字敬甫。小字阿七。以子女通。次在第七也。既長曰七次。交名七左衞門。號惕齋。其先河州。石川郡。仲邨邑人也。因以爲氏。曾祖交名甚左衞門。祝髮曰道金。始遷居泉州堺津。於是爲泉界人。祖諱正次交名新右衞門。祝髮曰常喜。妣岡本氏。會慶長大坂之兵。避居京師。此後遂爲平安人。考諱定次。交名甚左衞門。法諱常怡。妣鹽屋氏。以寛永六年己巳歲二月九日乙未。生先生于室町通街二條第一閭。先生幼而穎悟。未能言。乳婢抱之。往其社會。先生乃能識其衣服及僕從刻舍林木人群來往之類。後婢與人語。及赴社之事。先生曰。「我亦記得之」婢不信曰「此時君方一歲何能識之」先生證以事。聞者奇之。四五歲令尊見其能言而識字。乃帖

上木—出板

安んじ相賀するに、惕齋ひとりかへつて愁ふる色甚し。其の故をとふに、「其の火もとの人々今まで風上なりとて、心を安んじゆだんの所、にはかに風かはりし事なれば、喜び忽引かはりて周章措所を失はるべしとおもひやりてうれふるなり」と答へられしに、寄り聚れる人々感じて、いそぎ火もとにはせゆき、防ぎ助けしとなり。君子はかくありたし。

○惕齋著書四十五部ありて、上木の者十六部、多くは惕齋歿後に至り、後の人是を鐫む。自ら著書を刻行して名を求る者恥づべしと、先人は云はれたり。因に云ふ自身の詩文集を自身に板行して世に行ひしは、漢土にては五代の和凝より始まり、時の人是を非れりとぞ。

○惕齋著書目

入學紀綱　大學筆記　中庸筆記　論語筆記
孟子筆記　詩經筆記　書經筆記　周易筆記
春秋筆記　禮記筆記　讀易要領　四書鈔說
孝經集解　通書筆記　西銘筆記　三器通考

中村惕齋

閉戸先生―三國時代孫敬、閉戸讀書せる故事（張方賢の楚國先賢傳）

薀奥―奥義

惕齋中村氏名は之欽、字は敬甫、通稱仲二郎と云ふ、惕齋と號す。もと京師吳服屋の子なり。寛永六年二月九日に生れ、七八歳初めて句讀を鄕師に受け、長ずるに隨ひ看書を好み、遂に市中の喧囂を厭ひ、閉戸先生の故事に擬し、世の交を絶つ。商家に生長して、財利を顧みず。嘗家の手代某引負の事ありて、親戚の人々其の罪を官に訟へんと議る。惕齋獨許さず、從容として諭して云ふ、「吾が財をもて人を死地に陷る、甚不慈なり」と。また意とせず。これより家產雲落に及ぶといへども、志いよ〳〵高く、性理の學を修め、禮義を踐行して、篤行先生と稱せらる。かつ學ぶ處其の薀奥を究めざるなしと。こゝをもて天文、地理、尺度量衡より音律の技に至るまで、よく通曉して多能の美譽を取る。伊藤仁齋と名を齊うして、兄たりがたく弟たり難しと人評せりとぞ。元祿十五年七月二十六日卒す、享年七十四。洛外、一乘寺村、圓光寺に葬る。

○惕齋ある時、程近き家に火を失しけるに、をりふし惕齋の家風下なりしかば、親戚、門人驚きてはせ聚りしに、忽風ふきかはり、風上になり、今は類燒のうれへなしとを衆皆心

仲村惕齋肖像

補袞—宰相
囘上臺—上囘臺閣の誤か
昏頑—理に暗く愚なること
堅珉—堅きこと玉に次げる一種の美石

講學於家。剖析經義。蠶絲牛毛。然未嘗强以語人。而就問者日衆。遠近尊之。無他嗜好。祁寒暑雨未嘗手釋卷。每有所得。則輙筆之。故其書滿家。既稍登梓。文集三十卷。周易通解等未刊布。生於寛文庚戌四月二十八日。死於元文紀元七月十七日己酉。享年六十有七。娶加藤氏。子男二人。曰世俊曰世倫。俱夭。曰善詔今纔八歳。女一人其弟。門生經紀喪事。遂葬于先塋之次。私謚曰紹述先生云。其存日令季弟長堅需余序其集。頃長堅再拜謹泣以告曰。集序亡兄在日既蒙見允。誌其墓願亦藉補袞之手。地下若有知拜辱有餘。囘上臺之光下耀草莽巖穴。仰公之德。永世罔極。且曰吾家兄弟八人。先人死日坐食在家。人或勸其出贅爲人之後者。亡兄一不省。與俱啖苦攻淡。日勵學行。以要似續。昏頑之質稍有所成。皆出就仕。女嫁有室。生我者父母。而長我育我者皆亡兄也。今獲鴻文。而使其言與行之不朽。我報亡兄亦稍足矣。吾祖公會知其父之業文。余亦景慕先生。則豈可孤其請耶。遂系之銘曰

淳謹之質。汪々叵量。耿潔甘節。休聲遠揚。克纘先志。篤崇聖賢。文辭純正。典籍精研。居家孝友。厥德惟馨。遺名千祀。堅珉勒銘。

古今教法　唐官品圖　輶軒小錄　三韓紀略
紹述先生文詩集　讀易圖例

此の寫本、家藏する者いと多しとぞ。

○東涯の墓碑文は內大臣藤原常雅公撰す。篆額は權中納言藤原俊將卿、筆者は右中將藤原英朝卿なり。人みなこれを榮とす。太宰春臺も賞歎して、匹夫而受二是尊寵一何其榮也と云ふ。

嗚乎東涯先生已矣。先生名長胤。字元藏。號二慥々齋一。東涯亦其所二自號一。竟以レ號行。海內皆知レ有二伊藤東涯者一。而今已矣。嘵乎。蓋自二孟子歿一。遺經僅存。而聞而知レ之者世無二其人一。西方之傑遂投二間隙一。擧レ世傾動。靡然從レ之。碩儒巨師雖二痛排一レ之。然浸二淫其說一。以解二說聖經一。我古學先生勃二興於本邦一。得二不傳之學於遺經一。以倡二天下一。而升レ堂覩レ奧。稱二高弟一者又不レ鮮矣。先生其家子而緒方氏之出也。生二長膝下一。趨庭之訓異二聞居一レ多。故校二訂遺書一。公二諸世一。至二以同二人之視聽一。蓋不レ有三繼志與二述事一。則曷能障二川迴一レ瀾耶。資稟甚異。三四歲能知レ字。長而博學強記。最善屬レ文。爲二世所一レ稱。孶矻種學。淳滀涵浸。莫二能測一。沈靜寡默。恭儉謹愼。口不レ言二人過一。不レ事二表襮一。不レ設二防畛一。終身不レ仕。

家子―嗣子
資稟―生得の材幹
孶矻―勉強
種學―學問の增殖をはかる
淳滀―たまること
涵浸―ひたすこと
表襮―表面をかざる事

「王孫賈の母賈に謂つて曰く、汝朝に出で、晩に來れば、吾則ち門に倚りて望む。暮に出でて還らざれば、吾則ち閭に倚りて望む」と

また萱野三平の傳文あり、この戯場にて、扮名早野勘平なるものなり。ともに紹述集に見ゆ。

○東涯著書目に、

唐官鈔	學問關鍵	用字格	童子問標釋
古學指要	訓幼字義	勢遊志	古今學變
經學文衡	制度通	辨疑錄	經史博論
名物六帖	讀易私說	異學辨	語孟字義標注
通書管見	鄒魯大旨	釋親考	大學定本釋義
天命或問	助字考	復性辨	中庸發揮標注
刊謬正俗	盍簪錄	同餘錄	古學先生行狀
三奇一覽	經史論苑	秉燭談	周易經翼通解
周易義例卦變考	四書集注標釋	帝王譜略	和漢紀元錄
大極管見	本朝官制圖	後漢官制	明官制圖
歷代官制沿革圖	沿革圖考	東涯漫筆	間居筆錄

晨夕依門思
―戰國策に

出づる者さらになかりし。東海談に云ふ。ある國君當世の名人を問ふ。答へて、「儒者には伊藤源藏、號東涯 荻生惣右衛門、號徂徠 歷算は中根丈右衛門、名璋字伯珪 久留島喜内、筆道は細井次郎太夫、廣澤。官職裝束は壺井安右衛門、名義知號鶴翁 神道は加茂の梨木氏、名祐之 俳諧は松木次郎右衛門、下りて戲臺狂言は市川團十郎號才牛 とあり。其の頃一時有名の尤も轟きたるさま見るべし。

○東涯途中にて、藥袋を書生に拾はせ見れば、數の金あり。こよなき物を拾ひしとて、其の年の暮、伊勢の御師に屬して、大神宮に納めしよし、畸人傳に見ゆ。用意のほどいと尊し。またある夜途中往來せしとき、誤りて人家の用心水の桶にいばりして、翌日それと悟りて、人を遣し洗ひ淨めて、再三わびするとぞ。闇を欺かざるともいふべきか。

○東涯書籍を檢閲するに誡むべき詩あり。

童幼奴僕蟲鼠邊。燈下煙中梅雨天。醉後睡前拉忙裏。切戒書生謹繙編。

また仁齋と同じく、小野寺の母を賀する詩に、

小野寺氏 秀和字十内 母某氏九十壽 淺野内匠侯京邸官

羨君官政不遑時。慈母九旬絲髮垂。況復一堂不違養。更無晨夕依門思。

伊藤東涯

東涯伊藤氏、名は長胤、字は源藏、また通稱に用ゐる。慥々齋と號す。仁齋の長子なり。よく家學を修して、遺書を校刻して、孝志を表す。其の居堀川の東涯にあり、よつて自號とす。東涯は寛文十年四月二十八日生れ、母は緒方氏、餘弟四人は皆、繼母瀬崎氏の生むところにて、よく愛弟を守り、かつ兄弟ともに家學を主張す。世人歎賞して、伊藤の五藏といふ。殊に東涯および季子才藏學力優る。よつてまた伊藤の首尾藏と云ひしとぞ。東涯の人となり恭儉謹愼、まことに篤行の君子儒なり。人他を非謗する事を語れば、惡しきことなりと答へ、人の他を美譽することを語れば、それは善き事なりと答へたるのみにて、何の言葉も出さず。すべて訥々然として、言ふ事の能はざるごとくありしとぞ。父の業を守り、終身官途に就かず、家居して、天下の英才を教育し、他の嗜好なく、手暫も書を釋つる事なかりしとぞ。門下の授徒豪傑多く出づる。元文元年七月十七日卒す、享年六十七。小倉山に葬る。私諡して紹述先生といふ。

○東涯の學識比敵の者なし。江戸には徂徠あり、東西藝園の主盟たり。此の二人の右に

比敵—雙ぶ

伊藤長胤拝書

長胤之印　元蔵

伊藤東涯肖像

厓幅—裝飾
妣孺人—亡母
服朞—服すること一年
考府君—亡父
洙泗—孔孟の學

濊。每一篇出。四方爭傳。對州醫生齎歸流傳朝鮮。慶州府尹見而歎曰「旨新文佳。不意日本有斯人」其性也寬厚和緩。不見憤怒。剪徹厓幅。於物無牴。無貴賤少長。愛而周之。雖粗鄙暴悍者。一再相見。則未有不薰然而心醉焉。家又屢空。而處之恬然未嘗覺其不足也。先丁妣孺人憂服朞。尋服考府君喪三年。著論孟古義十七卷。中庸發揮。大學定本共一卷。論孟字義二卷。童子問三卷。文集三卷。詩集一卷。娶緒方氏。後娶瀨崎氏。五男三女皆能研家學。嫡長胤最明穎。善文。寛永丁卯七月二十日生。寶永乙酉三月十二日卒。年七十九。葬于小倉山先塋之次。私謚曰古學先生。嗚呼悲哉。銘曰。

先生高尚。　不近利名。　洙泗正統。　本邦主盟。
無一時用。　有千載榮。　學耶德耶。　日月雙明。

老萊―楚の人、孝にして、七十二歳の時父母猶存す、常に斑爛の衣を服し、嬰兒の戯をして親を喜ばせりといふ

明鏡止水―心の虛明なるに喩ふ

冲漠無朕―萬象森然に續き、無中に有、靜中に動ありとの意となる

母氏年高九十彊。無憂無病又無傷。老萊孝思誰能識。膝下猶呼爲小郎。

また大石良雄も仁齋の門に學ぶ。

○仁齋著書目に

論語古義　孟子古義　中庸發揮　大學定本
童子問　語孟字義　古學先生集　大極論
大學非孔氏之遺書辨　春秋經傳通解　周易乾坤古義
讀近思錄鈔　仁齋日札　送水野侯國字序　和歌集
文式　性善論　心學原論

○仁齋の事歷は、東涯撰する古學先生行狀記、其の外諸事に委し。北村可昌撰べる墓碑銘に、

先生諱維楨。字源佐。號仁齋。姓伊藤。洛陽人。自幼不凡。既長好宋儒理性之學。後疑宋儒學非聖人正統。大學書非孔氏遺書。及明鏡止水。冲漠無朕等說皆出於老佛。直以論孟教授。最善講說。發揮聖意。勸誘學者。詳悉審明親切著實。如尋常語。聽者驚動多所奮厲。從遊者繼于門。其文也思致確實。議論深長。不用綺字。不見艱

義井—共用の井

さゝがに—蜘蛛

七夕—この夕、烏鵲翼を延べて橋とし、織女天河を渡りて牽牛と交會すとの傳說

さかしらに—賢だてして

佛の地を過れば、必其の本尊を拜し、また近隣の人義井を浚ふ事あれば、同じく出でてこれを助けなどせし。すべて其の人となり物やはらかに、愛相よく、謙退深く有りしとぞ。

○仁齋の歌に、

　　前庭を眺めて

風わたる竹の枯葉をそのまゝにこずゑに止むるさゝがにの絲

　　七夕

さかしらに誰がいひ初めて七夕の今宵なき名の空にみつらん

月をながめて

代々を經てながめし人のかずにまた我をもゆるせ秋の夜の月

　　戒愼恐懼の意を

思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道をしるなれ

○仁齋の性質は酒を好まず。故に新年の詩句に、平生不ㇾ善ㇾ酒。一盞卽醺然と作れり。また義士小野寺十內と交り厚く、其の母九十の壽を賀する詩あり。其の詩に、

性理學―宋儒の性命理氣の學

節分―立春の前夜、邦俗追儺豆打を行ふ

伊藤仁齋

仁齋伊藤氏名は維貞、字は源祐、初の名は源吉と云ふ。仁齋と號し、また古義堂と稱す。外に棠隱、櫻隱の號あり。京師の人、その先は泉州の住なり、家もと商賈なり。仁齋は寛永四年七月廿日に生れ、幼時句讀を習ふ時、すでに儒をもて一世に鳴らんと志す。親戚醫を勸むる者あれども隨はず、自ら刻苦して性理學を修む。年三十七八の頃より、宋儒の說を疑ひ、是より程朱を排斥して、古學を倡へ、門戶を開き、堀川に住して、堀川學と稱するに至り、生徒刺を投じて、來學する者數をしらず。肥後侯その名行を欽慕して、祿千石をもて聘すといへども、老母の侍養人なきをもて、辭して仕へず。生涯處士をもて終る。利祿に移されざる斯の如し。故をもて年五十八の頃まで家道甚薄かりしとぞ。然れども遂に一代の儒宗となり、國として門人あらざるはなく、たゞ飛驒、佐渡、壹岐この三國の人來學せざるのみとぞ。其の盛んなる比類なし。寶永二年三月十二日卒す、享年七十九。小倉山に葬る、私に諡して古學先生といふ。

○仁齋は世儒の異樣を好むに似ず。節分の夜は禮服を著して、勵聲にて豆をまき、また

伊藤仁齋肖像

武三郞仕フ本多下野守ニ。季某字ハ左四郞仕フ明石侯ニ。六女俊適ク播州ノ人ニ。七女某也。

紫女物語―源氏物語

賓敬―大切にして敬ふ

爲先生之後。自是先生更名。稱了介。居京師。學雅樂習國典。一日微服吹笛有安倍飛驒者。聽之曰。「非常人。其心情之正。卽發音聲」云。先生嘗發揮紫女物語得其微旨。後傳中院通茂卿。洛之公卿。大夫願事先生者。一條右大臣教輔公。久我右大臣廣道公。油小路大納言隆貞卿。中御門大納言資照卿。伏原三位宣幸卿。中院宰相通躬卿。野宮中納言定緣卿。野宮中將定基卿。淸水谷大納言實業卿。押小路三位公起卿。久世中納言定淸卿諸君云。寬文丁未。先生歲四十九。京令尹某信誣逐先生。先生遯居城州鹿背山。己酉。先生歲五十一。播州明石侯松平日向守受縣官之命。待先生於其封內。於是居明石太山寺之側。名其軒曰息游。門人遂稱之。延寶己未。從侯移和州矢田。同州郡山侯本多下野守賓敬先生。不減於矢田侯。貞享四年丁卯。又從侯移總州古河。冬十月。上表演政事忤旨。乃禁錮。元祿四年辛未秋八月十七日。歿古河。壽得七十有三。（正室矢部氏者元祿元年八月廿一日先歿。）共買其地邑大隄鮭延寺之土。以儒禮葬之。謚曰蕃山先生。先生之在備前。以食邑蕃山故。爲謚字也。先生生四男七女。其所出矢部氏也。一女厚。二女載各適播州人。伯某字右七郎氏蕃山。仕備前侯。仲某字左七郎氏野尻。仕明石侯。三女留適江州人。四女唉適備前人。五女房適江州人。叔某

考—亡父

庠序—學校

猷廟—大猷院徳川家光

主膳等之所薦。十五年戊寅先生歳二十。辭退其官。寓江州桐原。十八年辛巳秋八月。適江西書院。請受教於藤樹先生。藤樹先生固辭不許。故空歸矣。冬十一月再往江西。寓邑人淵田氏之家。而經日。於是藤樹先生感其志。而始謁之。得其所志。隨居江州。數年其考野尻君。其弟仲愛君。流憩君。女弟三人。俱居此。正保乙酉。備前侯依京極主膳。再求以祿之。于時先生歳二十七。備前國政大革。承應甲午。備之前中二州大飢窘迫及九萬人。國老不知計爲。乃委事於先生。先生出命。施政民大賑。尋修隄池。菑瘠磽。上下得所安。遂設庠序之教。其擧皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。慶安己丑。先生歳三十一。從侯於東武。侯伯。大夫。士。大欣慕其道。不可勝數。猷廟聞而寵之。侯伯之稱門弟子者。紀伊大納言賴宣卿。大小路伊豆守信綱。板倉周防守重宗。久世大和守廣之。板倉内膳正重矩。松平日向守信之。堀田筑後守正俊。板倉内膳正重道。松平備前守某。淺野因幡守長治、中川山城守久清。松平備後守恒元。織田内匠頭信房。久世三四郎廣也。板倉市正重元。荒尾平八某。水野周防守忠增。本多下野守忠泰。松平若狹守直明等云。明曆三年丁酉。先生歳三十九。致病辭備前。居京洛。前是先生狩轉山中。手足傷。故辭武事云。備前侯令其季子池田輝祿

勝國―亡國
豐臣氏の滅亡をいふ
神祖―家康

乗馬の姿なれど、今衣服を改めて此に加ふ。

○蕃山著書目左に記す。

集義和書　集義外書　大學小解　中庸小解
論語小解　二十四孝評　夜會記　三輪物語
宇佐問答　三社託解　神道大義　繫辭解
五倫書　大學或問　孝經小解　孝經外傳或問
女子訓　易解　源氏外傳　紫女物語
葬祭辨論

○蕃山の履歴は、門人巨勢直幹の實記、草加定環の行狀、菱川大觀の傳記あり。今定環撰の行狀こゝに擧ぐ。

先生姓熊澤。諱伯繼。字次郎八。後更助右衛門。其先紀人。中世關左人。祖考熊澤某。字喜三郎。與其父居尾州。勝國之時事神祖。後仕水戸侯。考某字藤兵衛。（本姓野尻）娶喜三郎女。生先生於平安。維元和己未也。此時祖考未事神祖。居平安五條。遂育其家。爲喜三郎嗣云。（注略）寛永十一年甲戌。先生歳十有六仕備前侯。是板倉内膳正京極

○蕃山京師遊學の時、加賀の飛脚の話に、危急の難儀ありしも、馬卒の篤實により再生の恩を受けたるは藤樹先生の德化の然らしむるよしを聞きて、夫こそ適從すべき良師なりとて、江州小川に尋ねて隨從を請ひしに、人に教ふべき程の學文なしとて許されず。蕃山ひたすら願ひて二日の間藤樹の門にたゝずてみ歸らず。此の時藤樹の母のとり持にて、漸く內へ入りてつひに師弟の約をなせしよし、東遊記に見ゆ。學を成就せんには立志の堅固ならざれば得難し。蕃山の超凡此の一事にて萬事はしらると思はるのみ。

○蕃山小倉少將と元政の稱心庵にて樂を奏して樂しめり。蕃山嘗て云ふ、笙は舌にて調子定り、絃も笙を聞きて調べ、篳篥も笙を聞きて舌をしらぶるなり、笛ばかり調ぶる事はなく、笙篳篥を聞きて、それに應じて吹くものなり、ことに絃に笛一管は吹にくし、調子さとからでは、絃にあはずして和せざるもの也、笛よければ面白きものなりといはれしよし。その音樂に巧なるを見るべし。また木がらしといへる笛を某へかへしおくる時の歌あり。

　音も高く吹つたへたる木がらしの昔にかへるしらべたがふな

○此の肖像は蕃山みづから己の小照を畫きたるよし、今河洲の民家に藏す。原圖は被中

寛文七未の年さはることをありて、吉野の山深くすみ侍る比、

此の春は吉野の山のやま人となりてこそ見れ花の色香を

おなじ申の年閑居にて、

つたへ來て春は神代にかはらぬを人のこゝろぞむかしにもにぬ

おなじ江にねぶるかもめの心をもしらで千鳥のたちゐなくらん

蕃山罪を被りしは貞享四年の冬なり。其の翌春歸鴈を見て、

老の身の見んことかたき故里に春待得てや歸る雁がね

たとひ蘇武にならへる鴈がねに玉章をつたふる事ありとも、人の知らざるがために、おほやけの命をそむくべからず。

ゆく鴈に關はなくともおほやけのいましめあれば文もつたへじ

また蕃山備前にて、今様を作り、童子に敎へ歌はせしとて今に殘る。此の歌越天樂に合りとぞ。

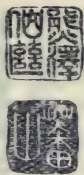
人はとがむともとがめじ。人はいかるともいからじ、いかりとよくとをすてゝこそ、つねなこゝろは樂しめ。

蘇武—李白の詩、蘇武在匈奴十年持漢節、白鴈上林飛、空傳一書札云々
越天樂—雅樂の曲名
つねな—つねにの誤か

熊澤蕃山

移封—國替

蕃山姓は熊澤、名は伯繼、字は了介、また了海とも書す。通稱次郎八、後に助右衛門と改む、蕃山と號す、また息遊軒ともいふ。本姓は野尻氏なり。父を野尻一利といひ、加藤左馬助に仕へ、後致仕して、京師五條にて蕃山を生めり。熊澤は外祖父守久なる者養うて子とす。よつて其の姓を冒す。蕃山元和五年に生る。幼より深智衆に超え、十六歳にて岡山烈公に仕へ、後京師に遊學して、德を成し、材を達し、また備藩に仕へて、祿三千石を賜り、刑政に與り、國中の舊典を改革して、流弊を一新し、海内の耳目を驚し、德澤下に及ぶ。故あつて備藩を去り、京師に居り、又播州等に隱れ、息遊軒と號し、和歌など吟し、樂みとせしが、後又明石侯に仕へ、移封に從ひ、下總古河に徙り、上表建言せし事にて、罪を幕府より被り、其の地に幽蟄せられ、後元祿四年八月十七日卒す。年七十三。古河大堤邑鮭延寺中に葬る。其の傍に妻矢部氏の墓もあり。

○蕃山學は藤樹に出づるといへども、後やゝ異同あり、實に經世有用の學識なりとぞ。又多藝に渉り、樂を好み畫をよくし、和歌に通ず。其の詠歌一二首をこゝに記す。

熊澤蕃山肖像

集。垂加文集。著二スル四十餘種一ヲ。

措大―書生
狂率―氣違じみ輕々しきこと
杏嗟―歎賞
臺閣―大臣
畛域―經界
咆哮―大聲叱呼
膠泥―拘泥
支離―條理まとまらず

度越尋常。闇下而召之其得不虞之幸福也。豈不感奮思答恩乎」侯大喜乃延致。啇歸告闇齋。闇齋毅然曰。「侯欲問道。則先來見」啇鄂然以爲。措大不通時勢。若薦若人。必陵上無上。累自及。不若不薦也。他日侯復問曰。「疇昔所告山崎先生如何」啇曰。「小人非惰也。前日既傳命於渠。渠曰侯先來見余。是非頑愚不可曉即狂率邀名也。請別選通儒」侯咨嗟良久曰。「方今。自稱師儒者多無意行道。東奔西走。欲其技易售。寡人聞之。禮聞來學。不聞往敎。山崎先生能守之。此乃眞儒也」即日命駕。訪其居。會津肥後侯。加藤美作侯、亦厚禮師事闇齋。而會津侯敬信最深。終始如一。闇齋亦感奮思答恩。知莫不言焉。會津侯卒後。又歸京師。上自臺閣。公卿。諸侯而。下至布衣閭閻之士。入其門者無慮數千人矣。闇齋治程朱學。孤峻褊隘。峭設畛域。不喜博覽。不好詩文。以爲玩物喪志。每有片言犯程朱者。輒咆哮勃怒不肯就同異而究指趣。是以其弊往々膠泥而不融。至淪于支離墜於固陋。若晩年大倡神道。君子甚譏之。高足弟子佐藤直方。淺見絅齋。其餘反之者亦甚多矣。天和二年。年六十五沒。門人私謚垂加。著有朱易衍義。孟子要略。文會筆錄、大學啓蒙集。中和集說。孟浩錄。孝經刋誤附考。冲莫無朕記。中臣祓風水鈔。神代風葉

切劘—研究

假色—許容の顏色

寒窶—赤貧

夜夢拜神時。老翁携梅花一枝來納左袖。遂生男。卽闇齋也。闇齋幼狡悍無賴、淨因患之。因度爲僧。籍於妙心寺。號絕藏主。天資豪邁卓犖一意修禪。無懈怠。然性行猶不悛。嘗與倫輩論議。闇齋詞理塞。卽其夜竊就彼寢火紙帳。衆議欲逐之當是時。土佐公子某居妙心寺。公子聰明有藻鑑。歎曰。「此兒神姿非常。後當有爲。」乃遣之學于土佐吸江寺。是時土佐有谷時中。野中兼山。與俱切劘儒學。一見闇齋亦深器之。而惜其陷異端。勸讀經籍。闇齋乃讀四書及朱子文集。語類等書。大悅之。盡棄其學而學焉。著闢異一卷。貼著寺門而去。遂復髮爲儒。時年二十五。土佐侯乃責其不陳乞輒還初服。闇齋恐遂出奔京師。下帷延徒講習道學。從者日衆。履盈戶外。闇齋師道至嚴。如君臣然。雖貴卿巨子不置之眼底。雖小過不少假色。善罵焉。其講書音吐如鐘。面容如怒。弟子震慄莫敢仰視焉。佐藤直方嘗云「師事闇齋。每入戶。心惴々焉如下獄然。及退出戶則洋々焉似脫虎口。」其見憚類此也。後闇齋如江都。時寒窶如洗。特鄰書商賃居。以借閲其書。當是時。井上河內侯好學下士。書商亦數謁見。一日侯謂商曰。「寡人將學。爾之所知有足爲人師者請爲介」商曰。「近有一儒生山崎嘉者。自京師來。住小人東家。視其所以。

神代卷風葉集　感興詩注　喪禮儀略
本朝事蹟異稱考　白鹿洞書院揭示集注　自從抄

○此の外訓點の書目

四書　孝經　小學
近思錄　周易本義　大極圖說
周子書　論孟精義　學規
社倉法　拘幽操　朱子奏劄
朱子訓子帖　朱子訓蒙詩　山北紀行
神代卷　古語拾遺　洪範全書
城南雜錄　五友詩

○闇齋の事歷は山崎家譜（闇齋自記）また大高坂季明の撰傳、水足安直の撰行實、何れも長文ゆゑ略す。角田簡の略傳に、

山崎闇齋名嘉。字敬義。京師人。其先播磨宍粟郡山崎邑人。因以氏焉。父淸兵衞。臣木下家。後致仕。號淨因。來家京師。以醫爲業。母佐久間氏有娠。祈比叡山神。一

垂加文集　同　續集　同　拾遺
文會筆錄　闢異　四書序考
大學啓發集　孟子要略　朱易衍義
仁說　小學蒙養集　孝經外傳
孝經詳略　中和集說　逐錄
逐鹿評　大家商量集　讀書要
夜寐箴　刑經　武銘
帳書抄略　程書抄略　明備錄
朱書抄略　冲莫無朕說　本朝改元考
經名考　大和小學　孝經刊誤附考
雲谷記　溫泉遊艸　敬齋箴
不自棄文　江府紀行　遠遊紀行
再遊紀行　會津風土記　責沈文
朱子輯要　中臣祓風水草　日本書紀注

伴天連―基督教の宣教師

○闇齋初め佛に入り、後儒となり、最後に神道を修す。されば伊藤仁齋嘗て云ふ、「闇齋僧を厭ひ、儒に歸し、晩年神道を主張す。もし此の人長壽ならば、つひには伴天連とならん」と評せしとぞ。此の論は春臺も云へり。いかなる深味あるかは知らねども、大儒に似合ず特操なきやうに思はる。

○闇齋門人に接しては少しのあやまちも許す事なし。講談の折から鵜飼金平はさみもてあそびつゝ爪を切る。闇齋是を見て、聲を勵し、「師席にて爪を切る、何の禮ぞ」と、金平はさらなり、有あふ人々色をうしなへりとぞ。

○闇齋五六歳の時群童と遊ぶ。あるひと菓子を出し、「兒輩吾ために藝盡しせよ」と云ひければ、何れも或はうたひ、または舞ひなどして其の菓子を請ひ得たり。闇齋獨り大いに泣きけるのみ。よりて其の人諭して云ふ、「兒とゞまれ、汝にも與ふべし」とて菓子を出しければ、首を掉りて云ふやう、「吾はこれが爲ならず、人みなその能する藝あり、吾獨りなし、こゝをもて泣く」とありしかば、其の人歎異して、「これ凡童にあらず」と云ひしとぞ。

○闇齋著書目錄に

看經—經文を默讀すること

浮屠—佛

山崎闇齋

闇齋山崎氏、名は嘉、字は敬義、闇齋と號す。後垂加と號す。俗稱嘉右衛門といふ。其の先は播州宍粟郡山崎に住む、よりて氏とす。父を山崎淨因といひ、醫をもて京師に住す。母佐久間氏嘗て比叡山の神に祈りて闇齋を産む。元和四年に生れ、幼にして狡悍無頼なりしかば、父うとんじて、妙心寺に遣りて、僧とす。絶藏主と號す。或日、佛堂に在りて、看經し、俄に起つて、大に笑ふ。師駭きて其のよしを問ふ。答へて云ふ、釋迦の虚談を笑ふといへり。長ずるに及び、四方に遊び、土州吸江寺に寓す。時に谷時中儒經を講ず。遂に兼山、三省の兩先達に就て儒を學び、忽珠子を擲つて闢異と云ふ一書を著す。土州の大守其の浮屠を詆る甚しきを見て、これを惛む。此に於て、闇齋洛に歸る。後加藤侯、井上侯、また會津侯に游事す。晩年また神道に歸し、これを弘む。これより垂加の號あり。垂加の文字は神道より出づるとぞ。學ぶ處其の奥義を極めざるなし。遂に此の道中興の祖となる。天和二年卒す、享年六十五。其の門人私に諡して垂加靈社長命と稱す。葬墓は黒谷にありて、山崎嘉右衛門敬義墓と題す。

闇齋

先塋―祖先の墓
甓々―恭敬の貌
仰止―仰ぎ見ること
色愉―顏色を愉快にして仕ふ

樂甚。夜半乃還。厥明邑宰免鄕民。小吏問曰。「何以急免鄕民。」對曰「以昨先生來也」吏曰「先生前夜賞風月已。未嘗及彼。」曰。「先生无至官舍。而夜間來閑談。余謂。必此事而終席不及之鄙心感慨知必爲此故也。彼本小罪。它日出之。則無報先生。故爾」人尊崇如此云。著孝經啓蒙。翁問答。又有書簡一卷。慶安元年秋八月卒。年四十一。鄕人如喪父母。葬于先塋之側。題曰。藤樹先生之墓。造祠廟。邨老主之。四時祭祀。一諸侯駐駕門外。令村老闢門。不肯曰。「凡謁廟者違廟門數百步。下輿甓々入拜堂下。無貴賤一矣。今接肩輿石砌。曰闢戶甚倨。非交神道。不奉命」侯謝過請入。曰。「晚矣。願再卜日」急去不顧。鄕人仰止如此云。

○藤井懶齋撰傳銘曰、

淡海吹起。陸王儒風。豈翅善身。誨人有忠。
爲母顧祿。旋鄕色愉。于嗟篤孝。性乎學乎。

書翰　詠草　春風　大乙神經
日用要方　小醫南針　神方奇術　醫筌
捷徑醫筌　藤樹先生遺稿　藤樹先生行狀　藤樹先生學術旨趣大略
知止歌小解　心學文集　江西文集

○藤樹の事歷は年譜其の外藤井臧撰傳に詳なり。今松崎堯臣撰す記事を記す。

中江原字惟命。號西江。又號藤樹。江州高島郡小川人也。自少讀書頗有所發明。世以德行稱焉。其學宗王伯安。凡海內之王學原倡之。事母至孝。弱冠初仕大洲侯。侯信道德特登庸。於是欲迎母以就養。母曰「吾聞婦人不越疆願守之」原乃上書侯。請歸田里終奉養。不許。喟然歎曰「嗟忠孝不能兩全。吾雖不肖豈一日曠定省乎」即爲書。白不忍之情。忽行歸小川。事母能盡其力。无所不至矣。其心謂莫百爾德行不本於孝。日先讀孝經而後涉他書。大洲士庶不遠千里來學。他自遠方來游者不可勝計。鄉人親之如親。尊之如神。一鄉皆誦論語孝經。勉事孝悌。小川市橋君采邑有一民連坐繫獄者。親裁來原許。悲傷請達冤邑宰。宥焉。原曰「若狀不死。然予爲汝明旨」夜抵邑宰。邑宰倒履迎之。設宴飲酒

王伯安—王陽明
定省—昏に父母の衽席を定め、晨にその安否を省ること
采邑—領地
連坐—まきぞへ

雲霄器—大なる才能
惆悵—うらみいたむ
除地—除きて年貢を取らぬ地
深衣—支那の儒者の服

降ると見ば積らぬ先に拂へたゞ風吹く松に雪折はなし

また門人熊澤蕃山の歳晩備前に還るを送れる詩に、

舊年無幾日。何意上旗亭。送汝雲霄器。羞吾犬馬齡。梅花鬢邊白。楊柳眼中青。惆悵滄江上。西風敎客醒。

蕃山後に師説に背く事多し。よりて藤樹の門人淸水氏これを辯じて、集義和書顯非を著し、熊澤が言行學術著述にひがこと多きをことごとくのべて刻行す。

○近江小川書院は十七間四方領主分部侯よりの除地にて、月六回程づつ講書あり。領主の儒臣これを勤むるよし山田氏筆記に見ゆ。また講堂に藤樹の深衣の像あるよし東遊記に載す。今こゝに出す肖像は京師某の珍藏にて、其の先人は藤樹に親炙せし者の圖せしよし、却て講堂の像に優れりとぞ。

○藤樹著書目

學庸解　翁問答　鑑草　孝經啓蒙
論語郷黨翼　大學啓蒙　大學考　論語解
藤樹規　持敬圖說　原人　文錄

弱冠—二十歳頃
致仕し—仕を辭し

中江藤樹

藤樹中江氏、名は原、字は惟命、通稱は與右衛門といふ、江州高島郡小川村の人なり。藤樹と號し、また頤軒、嘿軒ともいふ。慶長十三年に生れ、幼より書を好み、十一歳大學を讀みて、發明する事あり。それより勤學怠ることなく、遂に我が國に初て陽明王氏の學を倡へ、篤學修行をもて、其の名海内に著る。弱冠にして豫洲侯に仕へたりしが、後に母の故をもて致仕して、家に歸り、講學して孝養を盡す。世俗その德行を崇んで近江聖人と稱す。熊澤蕃山も此の門に出づ。其の外英才の人多く諸國より聚り、別に居を構へて、學びたる處、今に某々の所は誰某の居のあとなど言ひて、名所故跡の樣に言なせりとぞ。藤樹歿後、門人三年の際、心喪を勤めんとせしかども、領主の許なく、各悲歎して、吾々の誠のたらぬより、許されざりしとて、泣々其の地を去りしとぞ。弟子の心醉はさらなり、馬卒の廉直に化せし話東遊記にも載す。鄉里の風俗は、道路にて遺物を拾はざるに至りしとぞ。慶安元年秋八月、病んで卒す、其の地に葬る。享年四十一。

○藤樹の歌

詩云緡蠻黄鳥止于丘隅

中江藤樹肖像（なかえとうじゆせうぞう）

貴介達官—貴人高官

不佞—卑自の稱

本邦所未嘗見者也。其平生吟稿曰覆醬集行于世。今茲春夏之交。臥床而不起。臨終謂其左右曰。結纓易簀之志未嘗忘焉。端正如此。嗚呼悲哉。西山之日已迫。寛文壬子夏五月二十三日。日將晡。而端坐而逝。享年九十歲。貴介達官識與不識無不哀惜焉。斂了葬其處其地。村民會葬者百有餘人。其平生之惠之所及不言可以知焉。門生等來告而請誌及銘不佞。不佞忘年之交數十年所。何敢辭。涕泣筆之。且係之以銘。銘曰、

有器識。居林轡。安義節。泥蟬冠。

懿哉德。天地寛。

濫觴—原始
粉黛—婦人
芻豢—牛羊豕の類
私淑—竊に慕ひ摸ふ
浣花—杜甫
儋石—少しの儲蓄

捨異學。而醇如。誠卓乎非文武雙才邪。母老家貧遊宦西州。其臨將行謂羅浮子並同子曰。「此行也。豈素志宿心哉。母終天年。則身將退。不敢食言矣。」公事老母至孝。居有年。老母歿。居喪盡哀。服闋而後捨官歸洛。遍尋名山而遂肥遯臺嶺之麓一乘之邑凹凸窩中。築詩仙堂於其中。撰漢晉唐宋作者三十六人。而畫之揭之。蓋擬諸我邦之歌仙。是廼詩仙之濫觴也。羅浮子爲之記。園中境有十。景有十二。羅浮子洎向陽讀耕賦之詩。而後公詠和歌。而再不渡鴨河。再不入京師。頗彷律指門前之桑。況又一生不近粉黛。亦無有妻孥。人以比諸元魯山。三逕塵除。半夜燈閑。淡泊寡欲。一裘一葛。未敢取于人。其行己也。剛而直。廉而潔。其嗜學也。如食芻豢。四十年來杜門養痾。未嘗接俗士。未嘗問俗事。所交遊者僅六七人。余亦在其列。洽聞博記。搜討無遺。特巧詩律。而筆端高妙。私淑唐體。而得浣花之髓。奚翅當世之宗工鉅匠而已。我邦自有二皇子咏以降。言詩者數十百家之中。不見出公之右者矣。寛永丁丑。韓客來朝。與學士權侙筆語。侙一讀其詩爲日本之李杜。有是哉外國之人之賞之也。厚好之也深。圖書堆案。家無儋石。胸宇廓然無所碍。安貧樂道。俯仰無愧。誠飄々淳靜好古之隱君子也。素能隸書。羅浮子曰「如隸書也者。

藝祖—祖父

騷—夢詩文の風流

○野間三竹撰す、墓誌銘に、

東溪翁隷法　　　祝壽長篇

公姓源。氏石川。諱重之。始號嘉右衞門。後改左親衞。一諱凹。字丈山。六々山人其別稱而世三州人也。淸和帝七世孫。源義家第六子。左兵衞尉義時。號石川。是廼石川之所自出者也。義時十五世孫大炊助信貞仕源長親君。君者　東照大神君之高祖、而信貞者公之五世之祖也。信貞生信治。信治仕　神君之藝祖　淸康君。攻尾州熊谷城。而有軍功矣。子正信仕　神君之皇考　贈亞相廣忠君。與今川義元攻三州安城。而拔焉。正信先登。君賞之賜長吉之佩刀。而後奉仕　東照大神君。戰死長久手。其子信定屬石川長門守。攻駿州田中城。被銜左股奪其槍矣。信定有三男二女。長乃公也。公幼而岐嶷。四歳而健步行道里餘。穎敏過人。能知二歳之時事。十六歳而奉仕神君。常陪侍左右。恩遇異常。元和乙卯夏五月。秀頼反。神君至難波。自帥師征之。公至戰伐之日。而獨犯軍令。竊出營中。而先登矣。岡山之戰交。槍被創。又至城門。與敵人佐々某者及從者力戰。遂獲二人首。班師之後。屛居洛汭。與羅浮子。杏庵。立同等爲騷雅之交。而后親炙北肉藤先生。得聞聖賢道學之風。始學禪敎。後

蹤以超於埃壒之外。其宦西州居洛東、皆爲此。而凡欲爲人之所不爲以自効吾不效夫徒斬榮達以爲子孫計。而況人之知不知惡足問焉哉」言畢而夢則覺矣。噫嘻君之靈格於夢寐。以誘吾之衷者乎。雖然夢焉耳。烏得憑焉以爲證乎。但以其事極奇、覺而記之。且詩以言其略。詩曰。

時維文政歲庚辰。秋夜讀書剔寒燈。忽然夢遊洛水表。有堂敞然倚峻嶒。中有九十皓眉叟。撫琴長嘯超凡塵。顧我一笑相延晤。自言六々舊山人。試擧疑案相叩問。翁敍衷曲廼云々。旃蒙單閼征小腆。蕞爾孤城豈足爭。犯律獻馘負微罪。欲爲國家作游偵。眞忠自甘人不諒。無心利達與聲名。一朝有變吾先識。無則淸高終此身。心事生前曾不道。今吾肝膽爲君傾。須臾風來吹短鬢。夢斷茫然夜五更。嗟乎夢乎非夢乎。眞乎非眞乎嗟乎。世道遞變化。古今幾廢興。竟是寄在栩々頃。醒後人間猶未醒。

○丈山著書目錄

詩仙（しせん）　朝鮮筆語集（てうせんひつごしふ）　本朝詩仙注（ほんてうしせんちう）

詩法正義（しはふせいぎ）　覆醬集（ふしやうしふ）　覆醬全集（ふしやうぜんしふ）

峻嶒—高く大どかなる山の貌

旃蒙單閼—乙卯

小腆—小さき國躰

栩々頃—少時の會心をいふ、莊子に、夢爲蝴蝶、栩々然蝴蝶也

斬馘—敵の首をきる
募緣—喜捨を求む
自竄—自身隱匿す
嬰城—城を守る
驅扇—煽動

逸民爲誰。六々山人。

○愛日樓集に丈山を夢むる詩並に敍あり。尤も確論と云ふべし。

參人石川丈山晩屏居洛東。琴書自託。蓋若與世相忘者。余嘗疑。君初從浪速之役。私出斬馘犯律見黜。是時年既三十有三。宜不效血氣者之爲。又與其生平不相類。是必有故也。余久畜之未釋。今玆文政庚辰之春。其故居詩仙堂主尼別宗將修堂宇。來江戸募緣。以明年値君百五十年忌辰也。季秋二十三日尼偶過余廬。是夜余夢見一偉人。厖眉白鬚骨相不凡。自云六々山人。余乃以前疑質之。翁笑而不答。第曰。「自効耳」余難之曰。「迹疑乎貪小功。其爲自効也奚若」翁憮然。既而曰。「今則吾語汝。昔者泰伯以民無稱爲至德。吾雖所不敢企。而志則有在焉。彼其叛逆孤城衆志不一。其不勞智力。而下之誰不知。而必恃此匹夫小勇乎。吾但欲負微罪以去之耳。蓋參河勳舊何限。率知求封侯極富貴。而無復一人爲國自竄。以幾察兇賊者。汝不知乎。嬰城之衆不獨豐公之遺臣。而兇奸不逞之徒爲多。雖在統一之後。而保無餘孽殘黨驅扇唱亂者乎。吾之所爲自竄竊欲陰察之以効涓埃。而其有無亦不可度也。不幸或有變。則吾將先赴告爲之防禦。幸而無事。則高尚其

肥遁—終をよくして退隱すると
瀨見の小川—鴨川
紈素—白きねりぎぬ
行藏—進退
縕褐—寬き衣服
八秩—年八十
逸民—遁世隱居の民

○丈山肥遁して後は、和歌を詠じて、京師に入らじと誓ふ。夫より洛陽に來らざる二十餘年なりとぞ。其の歌に、

渡らじな瀨見の小川の淺くとも老の波そふ影ぞ恥かし

また詩集を覆醤集と云ふ。開卷に富士山の詩あり、人口に膾炙すれば、こゝに記す。詩中白扇の文字に難あるよしは、予が曾祖父の過庭紀談に辯あり。其の詩に、

仙客來遊雲外巓。神龍栖老洞中淵。雪如紈素烟如柄。白扇倒懸東海天。

實に富山の形容見るごとし。また集中に秀吉關白扇銘。應前田卜牛之求。後陽成院御製書扇。賜秀吉公。爲伐韓餞と。按ずるに達意の文これよりよきはなしと南畝云へりげにもと思はる。

○丈山、侄某に與ふる掟書と云ふ七箇條の中に、武士の道日夜に忘れ候はで何時も人の跡になり候はぬ樣にと心掛可申事、また萬事につき欲すくなく、清廉を心に持可申事とあり。これ丈山生涯の行藏此の二ッにかなへり。空言にあらず。

○此の肖像は丈山の壽像、畫者は狩野探幽なり。上に丈山自題あり、其の語に、

如意隱几。縕褐烏巾。默々胥貌。昭々精神。交游造物。涵養道眞。八秩頑老。三陽逸民。

石川丈山

岐嶷―幼者の卓異なること
大樹―將軍
御小姓役―殿中近侍の侍

丈山石川氏名は凹、字は丈山、初名は重之、俗稱三彌といひ、後に嘉右衛門といふ。號は數稱あり。六々山人、四明山人、凹凸窩、大拙、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足ともいふ。三州の人也。其の先は源義家公より出る。父を信定といふ。丈山天正十一年に生れ、幼より岐嶷、よく二歳の時の事を覺え居たりしとぞ。また四歳にして行程一里餘を歩行せり。世々大樹に奉仕して、丈山も祿五百石を食して、駿府にて御小姓役を勤め、元和の役に御使番を勤む。此の時功名ありといへども、軍令に違ふ事ありて、暇を賜り、叡山の麓一乘寺村に棲遲して、本邦歌仙三十六人に擬し、漢土の詩人三十六人を撰み、各其の像を板面に圖し、其の作る處の詩を其の上に書して、壁にかゝげ、詩仙堂と號す。六々山人の號はこれに緣れり。これより都て文筆をもて樂みとし、藤惺窩、林羅山、堀杏庵、埜士苞、また僧元政等と風流の游事を專とす。尤詩に長じ、隷書に工なり。韓使賞して日本の李杜と稱す。寛文十二年五月二十三日卒す。其の地に葬る。享年九十。

石川丈山肖像

通鑑—本朝
通鑑

博文強記。學世稱之。其性嚴毅。不枉屈人。對文穆先生有悌。愛春信兄弟如子。所著有八人一筆。平聲廣韻略。和漢補袞錄。聞見抄。本朝編年錄。中朝帝王譜。處守稿。讀耕集之書。水戶義公眷遇甚厚云。有二女二男。女及季子皆殤。男曰春東。幼名叉助。文穆春齋先生名之曰勝澄。一名憲。字章卿。號晉軒。或號洗林。承應三年甲午四月七日。生于乃祖之宅。未幾喪母。以祖母順淑孺人之慈育爲長。萬治四年辛丑。喪父。文穆先生慈愛教育益厚。同年十二月十日。登營。賜父祿繼業。寬文四年甲辰秋。奉謁。同九年己酉。預通鑑編修之事。同十年庚戌。畢事賜官服。同十二年壬子冬。娶清水氏。延寶四年丙辰十一月九日卒。年二十三。平生虛弱多病。所著有梧右錄。拾葉餘錄之書。

中朝帝王譜　本朝編年録　靜廬客談　聞見録
和漢補衮録　甚齋漫筆　守處稿　讀耕齋文集

○讀耕齋の略傳系に、

讀耕齋先生文敏公羅山先生之第四子也。寛永元年甲子十二月二十八日夜半強。生於京四條新町。乃祖名之曰右兵衞。母荒川氏。四歳始歩。且知正之字。文敏先生抱先生對門人曰。「是膝上王文度也」文敏先生在東武。以荒川氏之慈育爲長。後稱右近。同十一年。移東武。雖幼不求仕官。十四歳潛志於學。其名漸著。同十六年己卯。文敏先生授名曰守勝字子文。授號曰函三。名亭曰欽哉亭。自號考槃邁又號剛訥子。或稱靜廬又甚齋。後專用讀耕齋之號。是乃文敏先生壯年之時。刻印押書之號也。正保二年文敏先生授一名曰靖、字彦復。同三年丙戌。膺召。雖不素志。官命無如之何矣。十二月九日。登營。奉拜　猷廟。賜宅地年俸二百俵。祝髪號春德。慶安三年庚寅。娶水戸侯傅伊藤玄蕃頭友玄女吉子。諡恭哀。承應二年癸巳。蒙命登日光山。明暦二年丙申十二月。敍法眼。同三年。加賜食祿。通前五百石。萬治二年己亥。繼室以石川氏。同四年辛丑。罹病。三月十二日卒。年三十八。諡貞毅先生。

王文度―晉の人、弱冠にして重名あり、郗超と共に桓溫の長史となる、時人語つて曰く、盛德彬々郗嘉賓、江東獨步王文度と

法眼―僧位法印に次ぐ

揮洒―揮毫
時髦―同時代の俊れたる人々
賡和―返詩を送り
郵筩―書信
蘇老泉―名洵宋代の學者、子に軾、轍の兄弟あり

○春齋先生二子あり。長子を春信と云ふ。勉亭とも、梅洞とも號す。次は鳳岡先生なり。皆讀耕齋の猶子なり。梅洞才學ありて、父祖に類すといへども、年二十三にして卒す。著述の書多し。然るに才學天性によるといへども、讀耕齋の敎諭によるものなり。さればこそ朱舜水撰める勉亭林春信碑文に云へるあり。

就季父讀耕子學。季父視之猶子。勤勤督課。如秋題百品藝餘千題。或押難和之韻。或限刻燭而成。無不揮洒立就。時髦賡和。郵筩往來。於是聲名藉甚

とあり。勉亭もまた其の恩に感じて、讀耕齋の死後は其の孤子を撫養して、敎諭の恩を報ゆる趣も同文中に見ゆ。

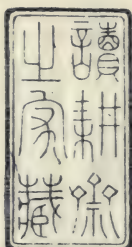
○讀耕齋の才學父兄に減ぜず。故をもて世人羅山を蘇老泉に比し、春齋を蘇軾、春德を蘇轍に擬して、老林、中林、叔林と稱せしとぞ。因に云ふ、羅山の同母弟永喜東舟と號し、德行學術また高し。故をもて明道伊川兄弟に擬せしよし、先人の叢談に委し。國初文運の機に向ふといへども、かく藝學一家に起り天下の儒宗となる、また一奇ならずや。

○讀耕齋著書目に

考槃餘錄　平聲廣韻略　本朝遯史　八人一筆

林讀耕齋

讀耕齋林氏、初め名は守勝、字は子文、通稱右近といふ。後に名は靖、字は彥復、また祝髮して春德と稱す。函三子、考槃邁、讀耕齋、欽哉亭、靜廬はみな其の別號なり。羅山先生の四男にて、春齋先生の弟なり。母は荒川氏、寛永元年十一月二十一日、京都に生る。後江戶に來り、才德父兄に減ぜず。春齋と共に　幕府に奉仕す。羅山著書中、春齋、春德の兄弟多く與りて功ある者枚擧に暇あらず。寛永二十年、朝鮮信使と筆語唱和する父兄と同じく、名を異邦に轟かす。正保三年十二月、別に召されて、俸祿を賜うて、兩林家となる。此の時二十三歲なり。羅山先生もこれを愛する春齋に齊し。初め伊藤氏を娶り、一男二女を生めり。後石川氏を娶る。一男を生む、また夭す。讀耕齋三十三の時母荒川氏に別れ、翌明曆三年正月、父羅山先生長逝す。羅山行狀は春德先生の撰文、年譜は春齋先生の撰文になる。又羅山文集百五十卷は兄弟二先生の捜索して上木する處とぞ。春德先生の子、名は憲、後に春東と稱す。春德先生寛文元年、病んで卒す。享年三十八、私諡して貞毅先生と云ふ。

讀耕齋之家藏

林讀耕齋肖像

祝髮—剃髮

齡漸高。令朝朔望。明曆三年。年七十五而卒。私諡文敏。羅山強記宏覽。自少注心於著作。到老不衰。所撰著編輯凡一百三十種。又有羅山文集一百五十卷。刊行于世。羅山有四子。長叔勝。次長吉。皆早夭。次春齋嗣。次靖。字彥復。祝髮稱春德。博學多著作。亦仕大府。寬文元年以病歿。年三十八。以下有春齋鳳岡二傳。今不錄于此。

洛閩之學—程明道、周濂溪の自唱せる性理の學

咨諏—事を問ひ謀る

嘗言。「漢唐以來之文字皆有所原。等而上之、大要歸乎六經。唯六經文字無所原。道固在此」又言。「後世能得六經之旨者唯有程朱之學。今日異端外說又壅塞之。是不可不力闢焉」遂鋭意以興洛閩之學自任。開門聚徒。說四書新註。從聽者雜遝矣。是歲甫踰弱冠。有弟。曰信澄。亦就受業。是時學湮日久。民間無挾册者。故遠近駭異傳以爲奇事。舟橋三位秀方訴羅山曰。「今匹夫而居師道之尊。叨倡朱學。其僭甚矣」遂論列請罪之。廷議爲然。以告東照大君。　大君曰。「固哉舟橋氏。匹夫而倡道。實可嘉尚焉。且也學問以道通理明爲主。何必固守古註」於是羅山之學大行。當是之時。有惺窩先生。隱于洛北。既倡理學。羅山景慕爲弟子。惺窩亦以爲得人。傾倒不遺。推爲高足。　東照大君雅聞羅山名。時邀咨諏。慶長十一年、使永井右近大夫直勝聘之。擢爲博士。以備顧問。深嘉其博物焉。　後薙髮稱道春。叙民部卿法印。羅山際　國家創業之時。大被寵任。創朝儀定律令。

　幕府所須文書無不經其手者。歷仕四朝。卽位。改元。行幸。入朝之禮及宗廟祭祀之典。外國蠻夷之事莫不預議焉。正保中病在家。執政承旨寄書。或就論事。令官醫看病。是時有事日光山。召見便殿。特聽乘輿入城。有旨。以其

五經大全
古文眞寶
神道祕傳折中俗解

羅山集詩文ともに各七十五卷づつに定められしは、先生の年齢に準じて春齋先生の用意なりし。

○羅山下總の古河に至りし時、舊城主土井大炊頭利勝公を憶ふ詩あり。偶おもひ出すまゝ此にしるす。

三代執權名久垂。威風唯要厥謀貽。一時占得黃粱夢。蓋世大炊纔一炊。

○羅山の事歴は春齋撰める年譜、また先君子著す叢談、宇都宮氏撰ぶ羅山小傳、稻葉氏の墨水一滴、其の外の諸書に詳なり。長文なればこゝに舉げず。近年刻行の近世叢語の文を掲ぐ。角田簡撰著。

林羅山名忠。一名信勝。字子信。其先加賀人。後徙紀伊。及父信時來住平安。羅山生而神彩秀徹。年十四。讀書乎東山僧房。時屬喪亂。書籍甚乏。乃百方索借。諷誦每達曙。緇流碩學輩試問疑義。則娓々剖析。厭飫其心。皆稱爲神童。及長英邁絕倫。有曠世之才。益馳騁百家。凡有字成冊者。無所不闚。究其浩瀚而反諸六經。

謀貽—遺されたる謀
黃粱の夢—盧生、邯鄲の途上、黃粱一炊の間その榮達を夢みたりとの故事
緇流—僧侶

百將傳抄　春鑑抄
寸鐵錄　詩仙
儒仙　武仙
蒙求官職考　駿府政事錄
七書講義私考　二禮諺解
謠抄　羅山文集
羅山詩集　羅山集附錄

此の外訓點を附けし書目は

四書集注　五經
周易本義　書經集註
公羊傳　穀梁傳
國語　戰國策
周禮　儀禮
孝經　老子口義

職原抄神祇大政官注
惺窩集
宇多天皇紀略
明德軍志
鐘銘纂
日本事蹟考
武門姓氏考
源氏物語諸抄年月考
禪林家集年月考
四書集注抄
道統小傳
怪談全書
丙辰紀行
韓使贈答聯句

惺窩問答
倭鑑乘韋
源平綱要
軍陣行列
庖丁書錄
倭雅
二十一代和歌集年月考
近代雜記
寛永私記
老子經首書
本朝書籍考
有馬溫湯記
癸未紀行
武將傳

梅村載筆　日本考
朝鮮考　朝鮮來貢記
異國往來　東照神君年譜略
駿府日記　慶長以來法度
二條城行幸私記　武家十九條法度記
禁中故事　裝束記
神社考　神社考詳節
神書私考　中臣祓抄
神道傳授抄　神道祕訣
伊勢內外宮勘文　寺社證文
筑波山緣記　河越天神緣記
日本祖師傳　本朝一人一首
倭漢詩歌合　詩文機緣
野槌　職原鼇頭

白氏文集首卷注
孫呉摘語
司馬法抄
六韜抄
軍書題說
百戰奇法抄
鐸恤錄並摘語
折獄抄
百川學海抄
多識編
古文眞寶抄
後素說
陽明攢眉
漫筆

文選序表考
呉子抄
尉繚子抄
太宗問答抄
劒術諺解
棠陰比事抄
公言抄
袖裡唐絕
本艸序例注
南人言稿
蒙求鼇頭
聯珠詩格抄
明人集略抄
羅山涉獵抄

貞觀政要抄
歷代三十六名臣圖贊
論語解
三德抄
理氣辨
渾天儀考
周易手記
經典題說
古文孝經抄
格物端緒
歷代一覽
童觀鈔
攻堅從容錄
經籍和字考

漢魏六朝唐宋百人一首
大學解
中庸解
孟子養氣知言解
六義考
春秋劈頭論
性理字義諺解
經典問答
通鑑綱目首卷手抄
歷代系圖
巵言抄
格言隨筆
任筆百問
長恨琵琶抄

御入洛記
荒政恤民錄
聖蹟圖諺解
東照宮二十五回御忌記
增上寺法會記
武州王子社緣起
皇代系圖大綱
京都將軍家譜
豐臣秀吉譜
本朝編年錄
御元服記
仙鬼狐談
老子抄
聖賢王談

倭漢法制
無極大極說
東廟新廟記
東照宮三十三回忌
大樹寺法會記
神代系圖
鎌倉將軍家譜
織田信長譜
中朝帝王譜
寬永諸家系圖傳
日本大唐往來
怪談
大學抄
愚惡王談

物門—物徂徠の學徒

し。予が曾祖父、雙桂先生も嘗て此の事を論じて云く、譯文筌蹄の題署などに武陵と書たり、左樣の事甚非なり、定めて東都は武藏の內にて、武藏の武の字一字同じきによりて牽合し、借り用ゐて、題署せしならん、左あらば武陵の外にも武昌、武淸、武平、武進、武宣、武城、武綠、武定、武邑、武鄕、武涉、武安、武功、武隆、武寧、武當、武岡、武康の類みな唐土の地名なれば、手前物好次第に借り用ゐてよろしからんや、面々の物ずき次第に借り用ゐば、江戶に定まれる名はあるべからず、左あらば亂名にあらずや、すべて物門の徒のなせる事多くか樣のことなりと過庭紀談にあり。

○羅山著す書籍の、目錄因に記す。

東鑑綱要　群書治要補
大學要略抄　大學大旨
四書五經要語抄　論語摘語
三略諺解　貞女倭字記
寬永庚午御卽位記　陣法抄
儒門思問錄　姬君婚禮記

○羅山年二十二の時すでに讀得し書目、儒經、佛書、神典の部數四百四十餘部に及ぶ。書目錄は文穆公（號ニ春齋ー羅山の三男）撰める年譜に詳なり。其の苦學の樣想見るべし。幼より老に至る、一日として看書を廢する事なし。歿年明暦の大火遁れ出るにも、なほ輿中にありて梁書に朱點を施しつゝ別野に至られしとぞ。

黄門―中納言の唐名

○水戸黄門義公の御字を德亮といふ。これ羅山の定むる所なり。德亮說の文あり、文集に見ゆ。また上野賜莊の十二景を定む。因に記す。

神廟風杉　金城初日　靈池皓月　下谷耕田
南鄰菅祠　東海征帆　武野煙艸　淺草花雲
筑波茂陰　隅田長流　房陵遠山　士峯晴雪

柳營―幕府

○惺窩、羅山の二先生、東藩をさして、柳營とし、將軍を稱して大樹といふ。名實相かなへり。誠に文字を識りし儒といふべし、余二十歳の時東にあり、世人唐詩選を讀むを知りてより、詞語宏麗をもて貴び、動もすれば丹鳳、城靑、瑣闥等の語を用ゐて東藩のこととす、人の無知かくのごとき者ありと（原漢文也）橘窻茶話に見ゆ。いかにも稱呼は名實にかゝはりて後世の信をとるなれば、文華なくとも正しくありたきなり。近世は此の弊薄

林文敏公

文敏公姓は林、名は忠、一に信勝といふ。字は子信、通稱又三郎、幼名菊松麿といふ。後、薙髮して、道春と稱す。文敏は謚號なり。羅山と號し、また羅浮、浮山、羅洞、四維山長、胡蝶洞、夕顔巷、或は雲母溪、尊經堂、梅村、花顔巷、麝眠とも號せしとぞ。其の先は加賀の人、後に紀伊の國に移り、父信時にいたり、平安に住めり。文敏公は天正十一年八月京洛の四條新町に生る。幼より秀偉、且又讀書を好みたり。八歳の時、甲斐徳本の太平記を讀むを聞きて、卽記憶諳誦する數十枚に及ぶと云ふ。後、長じて惺窩に從事して、性命學を修し、遂に神祖の恩遇に膴仕して、天下萬世儒宗の基を開き、國初創業の議事に、あづかり聞かざるなく、四朝に歷仕して、學殖德行世の人みな尊尙する處なり。今上野山王臺の社地は文敏公の賜莊にて、昌平坂の聖廟ももと此の地にありしなり。後に元祿年に林家三世正獻公鳳岡の時、今の地に移す。上野に今林稻荷あり。文敏公明曆三年正月廿三日卒す。享年七十五なり。其の葬式は朱子家禮をもて大塚の別野に葬る。私謚して文敏先生といふ。

性命學―程朱の性理學
神祖―徳川家康
四朝―徳川氏の四代
別野―別墅か

林文敏公肖像

也。先生容意其間乎。幼好學。出入於釋老。閱歷于諸家。而後棄異學而醇如也。本朝中興之明儒也。其所著有達德錄綱領。寸鐵錄。逐鹿抄及經書和字訓解。平生詩文和歌號惺窩文集。行于世矣。

浮屠—僧侶
溟渤—大海
源君—德川家康
易簀—死す

文章達德錄綱領

列子點

此の外なほあるべし、知る人に問ふべし。

○惺窩の事實は林羅山撰の行狀記あり。また某氏撰の系譜あり。其の他先人の著す先哲叢談等の書に詳なり。今長章は載るに暇あらず。宇都宮由的の略傳をもて左に記す。前に出す假名もて記す生卒略傳は童子の看に供ふるのみ。重復を咎むるなかれ。

先生姓藤原。諱肅。字斂夫。播州細川邑之人。定家十二世之孫也。父曰爲純。所謂冷泉家也。幼穎悟不常。一旦祝髮爲浮屠。名曰蕣。弱歲來洛之相國寺。居妙壽院。後歸播。赤松氏善遇之。雖讀佛書。志在儒。一旦奮發欲入大明國。直到筑陽。泛溟渤。逢風濤漂鬼海島。其盛志不遂而歸。朝鮮員外郎姜沆、來客赤松氏家。見先生大喜曰。「朝鮮三百年以來。有如此人吾未聞之也」赤松氏遣童男婢奴奉仕焉。先生不拒。本朝儒者博士自古唯讀漢唐註疏。性理之學識者鮮。先生自据程朱訓點經傳。其功最大也。元和五年五十九而卒矣。先是再謁源君。讀貞觀政要。漢書。十七史等書。源君知其才德。然不待時發。遂易簀焉。其用與不用命

徵辟—任官
遡洄—歸向

門風高峻。群英萃焉。進退無恥。孰如厥賢。

また一齋先生、惺窩の像贊あり。愛日樓集に出す。

謝華胄而遐蹤。望白雲而獨臥。其衷也介然而和沖。其貌也栗然而溫藉。身辭徵辟彭澤之儔。門出俊英河汾之亞。剏乃開先于性天之學。與世而俱新。貽後乎典型之言。歷年而逾化。於戲源深而流遠。俾人遡洄而上下。雖然誰能眞遡洄哉。誰能眞上下乎哉。

○惺窩著述書目因に記す。學識のごときは成書に就て見るべき便ならんを欲するなり。煩はしけれども、各家の著書傳下に載するはこれが爲なり。

四書大全頭書
勅板惺窩文集　男爲景編集　　惺窩文集　羅山子編集
惺窩續集　玄同子編集
文章達德錄
假名性理
千代もと艸

為相―十六夜日記の著者阿佛尼の子

嘉遯―隱遁の義に協へるをいふ

東邦―日本

冷泉―為相の家

蟬蛻―蟬のからより脱けいづにが如く超脱し

女子

為相（ためすけ） 正二位權中納言 號二藤谷一

為秀（ためひで） 正三位 權中納言

為尹（ためたゞ） 實家兄為邦男 正二位權大納言

持為（もちため） 初名二持和一從三位 權大納言

政為（まさため） 正二位 權大納言

為孝（ためたか） 正二位侍從 中納言

為豊（ためとよ） 初名二為名一 從三位侍從

為純（ためずみ） 初名二為房一又為能 參議從三位

為勝（ためかつ） 初名二俊孝一、 正五位下左少將

為將（ためまさ） 從四位下 左少將

為景（ためかげ） 正四位左中將實肅第一子為二為將子一 承應元年三月十五日卒

肅 是乃惺窩也

○秋山玉山（あきやまぎよくざん）惺窩の肖像の贊（さん）あり。玉山集卷八（ぎよくさんしふくわんはち）に出（い）づ、こゝに擧（あ）ぐ。

先生姓藤原。定家十二世之裔。名肅。字斂夫。後隱二妹背山一。因稱二北肉山人一。林信勝。那波道圓。堀正意。石川凹。皆出二於其門一。有二文集一。行二于世一。北肉嘉遯。東邦儒先。質抱二大器一。派分二冷泉一。蟬二蛻異教一。喬木是遷。韓使奇相。前修比肩。

秀信―清洲の會議によりて信長の嗣となれる三法師
亞相―大納言の異稱
大佛―方廣寺の大佛、後、徳川氏との爭因、豐臣氏滅亡の本となれるもの

○惺窩嘗て豐太閤を評して、「秀吉は大膽なる人なれども、大心なりとはまをすべからず。朝鮮より明に攻入らんとは誠に大膽なれども、秀信を信長あとめと仰せられず、自立して日本を掌握せられしは大心にあらず」とまをされけるが、後にこの事を四辻亞相公理卿に語る人あり。亞相云く「吾も其の論尤なりと思ふなり。大佛建立は彼の猿ごころの離れぬなり」といはれしとぞ。
○惺窩の系圖因に此に掲ぐ。

御堂關白道長公第五子
長家　正二位權大納言康平七年十月九日薨年六十
忠家　正二位大納言寛治五年十一月朔日薨年五十九號小野宮
俊忠　初名親家從三位權中納言保安四年七月二日薨年五十三
俊成　初名顯廣正二位皇大后宮大夫保元二年奉敕撰千載集安元二年九月廿八日出家法名釋阿元久元年十一月晦日薨年九十一
定家　正二位權中納言民部卿元久三年奉勅撰新古今集貞永元年奉勅撰新勅撰集法名明靜仁治二年八月二十日薨年八十三或云八十
爲家　正二位權大納言寶治二年奉敕撰續後撰集正嘉三年奉敕撰續古今集建治元年五月朔日或云四月廿九日薨年七十九法名融覺

壁の中の歌 ―古文孝經の故事、孔安國の序、「魯恭王使ニ人壞ニ夫子講堂一、於ニ壁中石函一得ニ古文孝經二十講章一、云々」

學力兼備の名賢なればなり。また和歌を善せり。次に一二を記す。後、元和五年九月十二日卒す。享年五十九歳、洛の相國寺中に葬る。

○林羅山嘗て若かりし時、初て見えしに、惺窩和歌を詠じて與へられし、此の歌みな人の知る處なれど、こゝに記す。都て儒者の詩文は常の事なれば、多くは略レ之。たゞ和歌の如きは、調の高下はしらざれども、各家の傳下に見るまゝに記す。

なれよふじ雲の上までいや高き名のまことをもしかれとぞ思ふ

また元和五年惺窩卒年の春、夕顏巷と羅山別號を稱せし時、奇なる文字なりとて、假名序幷に歌を送らる。其の歌に、

たねしあれば心はおなじやまとにもからのうたにもゆふがほの花

なにかいやしいやしきちまた夕顏の花さへみさへ名さへなつかし

また赤松左兵衛佐廣通を悼む三十首の中に、

壁の中石のはこにもかくすべき世はなき道に文の名もうし

また石田三成母の喪に居るを弔ふ詩に、

一別靈蹤何處尋。壯夫亦是涙難レ禁。慈顏猶見ニ屋梁月一。涕慕秋深孝子心。

藤肅之章

北肉山人

藤原惺窩肖像

洛―京都
朱陸―朱子と陸象山
權豪―權勢家
金吾―右衛門督

先哲像傳

藤原惺窩

惺窩姓は藤原、名は肅、字は斂夫、惺窩は其の居所の號、また北肉山人と號するは、後鞍馬の邊、市原野に棲みし時、その近きわたりに妹背山と云ふ山あれば、よつて字を分ちて號とす。其の外柴立子、廣胖窩の號あり。初め僧たりし時、名は蕣といひ、妙壽院と號す。中納言定家卿より十二世の孫なり。父を爲純といひ、世々播州細川村に食邑す。父兄共に戰死す。惺窩は永祿八年に其の地に生れ、幼より神童の稱あり。一旦髪を剃りて僧となり、洛の相國寺に入り、博く佛書を讀み、後其の非を悟り、遂に儒となり、專ら朱陸の說を奉ず。吾邦宋學の行はるゝ、此の師に始まれり。名下空しからず、林羅山、松永昌三、那波活所、堀杏庵、菅得庵、その他諸賢みな此の門より出づ。また當時の權豪關白秀次を始め、金吾秀秋、直江兼續、石田三成等の軍將もみな、惺窩を師尊する事は德行

先哲像傳初輯目錄

文

林名儒師傳
故老之履

凡例

一予古人を尙友するの餘り、上は王侯大夫より、下は山老野叟に至るまで、いさゝか名あるもの有れば、其の像を輯めて展觀して追慕の情を慰す。今その儒林の中より僅に拾摘して初編とす。餘は嗣刻に充つる。

一此の書像を主として傳は賓なり。たゞ生卒ならびに一二條を擧げて止む。それも必しも遺文逸事を記すといふにはあらず、先子の叢談、或は畸人傳、その外諸書より抄記す。また碑誌正傳を附くるは文士作家の軌範を見るを要す。

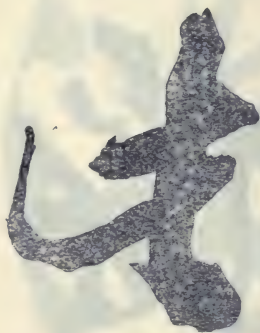
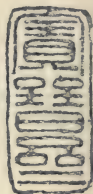
一小傳平假名もて記すは童蒙に示して、古人の言行を見て自勵の志を勸むを欲す。各家の著書目を記すは其の書に就きて學ぶの便りとす。文華を餝るは實を過るに嫌あり。幸に予が不文を咎むるなかれ。

一上標に半語隻字の眞蹟を摹寫するも、心畫の存する處、一斑をもて全豹を知るを欲す。印章花押は餘韻に備ふるのみ。

一次序は必しも年代をもて置に非ず、頗る類從附載して、搜索に便なるを主とす。

此に載る米芾の書は竹聯に鐫りたり。何人の好事にて製りしや。嘗て骨董店より購得て文房の坐右にかゝぐる事久し。憶ふに遺像在﹅此の一語暗に予が擧を促して、襄陽子新に筆を潤すに似たり。はた千歳の奇遇とも謂ふべし。よりて自ら摸寫して首に辯す。抑肖像遺像の世に益ある少からず。はやく唐土にて殷の高宗は肖像をもて、賢相を得ること尙書に歷然たり。後漢の光武は物色して、嚴光を尋ることと漢志に載す。肖像をもて、先聖を祭るは唐の開元八年に始ると學山錄にいへり。孔叢子の孔子無鬚、程子の一髮、不肖の論は姑く置く、何れ孝子順孫追遠の便り無きにあらじと云﹅爾。

米芾書
米芾
元章

遺像

足矣。今景仰之餘。取之於彷彿。雖不中不遠耳矣。客領而去。是爲序。

弘化甲辰之夏竹酔日

江都德齋原義　正道甫題

先哲像傳序

古人嘆民情之衰薄曰。生相憐死相捐。嗟夫世道之益下。至於死相倍。不翅相捐也。其可不浩歎也。予先子念齋。嘗著史氏備考。上自縉紳衣纓之家。下迨閭巷小技之士。苟有名於世者。行狀墓誌。家乘譜牒。無不具備焉。蓋欲使其名永不湮滅焉。可謂生相憐死亦不相捐。予披覽之。深欽其言行之儼存於今矣。因又惜其丰彩之難得而仰也。於是百方奔走。索其遺像。或乞之其家。或訪之其友。幸而得之。則十襲珍藏。有年於茲。幾將千數。思欲以繼先子之志。且使其人々不死於宇宙間也。或詒予曰。凡物經數傳。則白爲黃。黃爲碧。碧爲黑。終至失其眞。況一髮不似。乃非其人乎。子之有此擧。不如點鬼簿之爲眞率也。予答曰。書不云乎。乃審厥像。俾以形旁求于天下。說築傅巖之野。惟肖。當此時。不論一髮之肖否。而遂以得其人。然則取其形似之大槩。而

右細目は主要人名を採り發音に從ひ五十音に排列せるものなり

先哲像傳
近世畸人傳
百家琦行傳
内容細目 終

先哲像傳
近世畸人傳
百家琦行傳

内容細目

目録

百家琦行傳五卷（天保六年刊）は江戸の戲作者八島五岳の編述する所、此篇傳する所は眞に奇人の奇行と稱すべきもの多く、以て後人をして發憤せしむべからずと雖も、酒間茶後の談柄を供するに於ては、蓋し好個の資料たるを失はざるべし。

以上、三書三樣の面目、之を一册の中に倂看せば、其間亦自ら一種の趣味を感ずるものあるべし。

本篇を成すに方りては、文學士渡邊徹氏の手を煩はして、三書いづれも原本に據りて校訂を加へ、間、頭註を施し、以て聊か讀者に便ぜんことを期せり。其他飜刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

大正二年十二月　　校訂者　武　笠　三

緒言

先哲像傳四卷（弘化元年序）江戸の儒者得齋原義胤の編する所、德川時代の儒者數十家を擇みて、其肖像と筆跡とを影寫し、其の立つる所の傳、勉めて金石の文字若くは前人の筆述に據りて叨りに私意を加へざらん事を期せり。編者が前賢を景仰するの篤き、以て想見するに堪へたりといふべく、後人の徵を取らんとする者の爲にも、亦其用意の頗る欽すべきものあるを見るべし。之を著者の父念齋善氏の名著先哲叢談に比するに、洵に好箇の姉妹篇にして、或る意味に於ては本篇の確に一歩を進めたるものあるを見る。

近世畸人傳正續十卷（寬政十年刊）近古に於て蘆菴、澄月、大愚と共に京都和歌の四天王と稱せられたる閑田子伴蒿蹊が、其の友三熊花顚子の蒐集せる材料を刪補して作る所、其の旨とする所は、名君、賢相、碩儒、文豪等の、聲名生前身後に嘖々たるに反し、性行の奇、操守の高、傳ふるに足るべくして而も傳へられざるを悼みて、之が事蹟の堙滅を防がんとするにあり。正篇の挿圖は花顚之を畫き、續篇の挿圖は花顚の妹露香之を畫けり。

先哲像傳

近世畸人傳

百家琦行傳

全